

東宮遺跡 (2)

ハツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

二〇一二年

国土交通省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



東宮遺跡 (2)

- 遺物編 -

ハツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

2012

国土交通省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

東宮遺跡 (2)

- 遺物編 -

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

2012

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



東宮遺跡周辺 南西→ 右手には吾妻川が流れる



1区1号屋敷跡 南→

口絵2



1区 1号建物 上が北



1号建物 団扇 (1建 No.250) 出土状況 近接



1号建物 3号床 団扇 (1建 No.251) 出土状況 北→



1号建物 4号床 下下駄 (1建 No.294) 出土状況 南西→



1号建物 1号床 下草履 (1建 No.312) 出土状況 近接



1号建物1号唐臼内遺物出土状況 南→



1号建物 鉄鍋 (1建 No.408) 出土状況 北→



1号建物2号床下 薬缶 (1建 No.402) 出土状況 東→



1号建物 重箱 (1建 No.229) 出土状況 北西→



1号建物5号床下 行灯 (1建 No.225) 出土状況 南東→



1号建物遺物 (1建 No.265) 出土状況 南→



1号建物北側 遺物出土状況 南西→



1号建物北側 桶 (1屋敷 No.50) 出土状況 北西→

口絵4



1区 4号建物 上が北



1区 4号建物床下 上が北



4号建物 压榨機（4建 No.86）出土状況 南東→



4号建物 陶磁器出土状況 近接



1区 5号建物 上が北



5号建物 樽（5建 No.176）内遺物出土状況 西→



5号建物 箱（5建 No.154）内遺物出土状況 近接

口絵6



5号建物3号床竹籠(5建No.146)出土状況 北東→



5号建物1号床下櫛(5建No.142)出土状況 近接



6号建物 鎌(6建No.6)出土状況 南→



7号建物 刀(7建No.55)出土状況 東→



7号建物 漆椀(7建No.32)出土状況 近接



9号建物 刷毛(9建No.24)出土状況 近接



10号建物 遺物(10建No.60)出土状況 近接



10号建物 灯火具(10建No.64)出土状況 東→



1号建物竈北側缶罎・甗出土状況 近接



1号建物出土缶罎 右は同功罎（どうこうけん）と思われる



中に梅干しが残る半罎（1屋敷 No.16）出土状況 近接



半罎と蓋（1屋敷 No.15・16）蓋の下から梅干しが出土



線香が残る香炉（1建 No.200）



差し歯下駄（1建 286・287）対と思われる



家形木製品（2建 No.45）



煙管（13建 No.78）火皿には刻み煙草が残る

口絵 8



スケール 1-3:10mm,4,9,10,13,19-24:1mm,5-8,11,12,14,15-18:5mm

図版 1 東宮遺跡から出土した大型植物遺体

1. スギ球果 (52区 C-6)、2. クロマツ球果 (2号建物、42区 B-23)、3. オニグルミ核 (4号溝、4号建物北)、4. マタタビ属種子 (10号建物)、5. モモ核 (4号溝、4号建物北)、6. アンズ核 (9号建物竈脇掘内)、7. ウメ核 (1号建物 272下)、8. スモモ核 (52区 E-2)、9. ケイチゴ属核 (10号建物)、10. タラノキ核 (10号建物南)、11. カキノキ属 A 種子 (2号建物 1号桶)、12. カキノキ属 B 種子 (2号建物 4号桶)、13. ソバ果実 (1号建物 2号唐臼)、14. ダイズ属果序 (2号建物 9号桶下)、15・16. ウリ属メロン仲間種子 (2号建物 1号桶)、17. カボチャ種子 (4号溝、52区 B-8)、18. ウリ属ヒョウタン種子 (52区 C-6)、19. エゴマ果実 (2号建物 1号桶)、20. ゴボウ果実 (4号建物床下)、21. ホッソモ種子 (10号建物)、22. メヒシバ属果実 (10号建物)、23. イネ籾果 (4号建物床下)、24. キビ有ふ果 (2号建物 1号桶)

序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められてきました。八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で18年目を迎えます。

東宮遺跡は、八ッ場ダム建設工事に伴い平成19年度から発掘調査が開始されました。発掘調査では、天明三年(1783年)の浅間山大噴火に伴う泥流で被災した村が、これまでに例のないほどの極めて良好な遺存状況で出土しました。地中で230年近くも年月が経過したとは思えないほど良好に床板まで残る建物跡は、被災した当時の惨状を生々しく伝えるだけではなく、出土した多くの陶磁器、漆器、木製品、金属製品の遺物とともに、18世紀後半頃の生活様相を豊かに伝えてくれる発見でした。今回は、東宮遺跡で出土した多様な遺物を中心に報告し、また遺構も含めた東宮遺跡の調査成果についても纏めることができました。本書が、八ッ場地域における近世の様相を知る上でも、また近世村落史を考える上でも重要な資料になるものと考えています。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で未永く活用されることを願い序といたします。

平成24年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 栄 一

例 言

- 1 本書は、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「東宮遺跡」の発掘調査報告書である。本書は、ダム水没予定地域を調査原因として、平成19・20・21年度に実施された発掘調査に関して報告するものであり、同年度に発掘調査された遺構を報告するものである。遺構は、建物跡が主屋6軒、酒蔵1軒を含む15軒、畑27カ所、石垣19カ所、道6カ所、溝9条、溜池1カ所、集石2カ所、井戸1基、墓坑を含む土坑8基である。
- 2 遺跡の呼称及び所在地
東宮遺跡(ひがしみやいせき)は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字東宮地内に所在する。
地番は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字東宮373、374、402、甲403、404、405、甲406、乙406、407、410、411、412、415、416、418、419、422、423、甲424、乙424、425、427、439、乙446、408-1、408-3、417-1、417-2、426-1、426-2、444-1、444-2、444-10、444-11、444-13、444-18、444-19、444-20、444-22、444-23、444-9、446-1、446-3である。
- 3 調査面積 10,850㎡ (うち1,012㎡は平成24年度以降継続調査予定)
- 4 事業主体 国土交通省関東地方整備局
- 5 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 発掘調査及び整理作業の期間
 - (1)発掘調査期間
第一次調査 平成19年11月1日～12月26日
第二次調査 平成20年4月1日～12月26日
第三次調査 平成21年7月1日～12月26日(8月と11月は発掘調査中断)
 - (2)発掘調査担当
第一次調査(平成19年度) 中沢 悟(上席専門員) 篠原正洋(主任調査研究員)
第二次調査(平成20年度) 飯田陽一(上席専門員) 篠原正洋(主任調査研究員)
第三次調査(平成21年度) 飯田陽一(上席専門員) 須田正久(主任調査研究員)
 - (3)整理作業期間 平成21年1月1日～平成24年3月31日
 - (4)整理担当 篠原正洋(主任調査研究員) 黒澤照弘(主任調査研究員)
- 7 報告書作成関係者
編 集 黒澤照弘
本文執筆 下記の通りである。
 - 第4章第1節6 石井榮一(世田谷区教育委員会)「I・II区から検出された建物跡の建築史的検討」
 - 第4章第2節4 飯島義雄(元(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)「東宮遺跡出土の下駄」
 - 第4章第2節5 町田順一(元群馬県畜産技術センター)「東宮遺跡出土の繭と蛹について」
 - 第4章第2節6 大塚清史氏(岐阜市歴史博物館)からのご教授内容を編集者が執筆
「東宮遺跡出土の団扇について」
 - 第4章第2節8 中沢 悟「鉈について」
 - 第4章第2節10 須田賢司「木工芸家から見た東宮遺跡出土の木工品」
 - 第4章第3節4 篠原正洋(東吾妻町立東中学校)
「川原畑地区野口家に伝わる口承と野口喜左衛門の人物像について」
 - 第4章第4節1・2 佐々木由香・バンダリ スタルシャン(バレオ・ラボ)
「東宮遺跡から出土した大型植物遺体」
「東宮遺跡1号建物馬屋家畜糞中の大型植物遺体」
 - 第4章第4節3 小林克也・藤根 久・佐々木由香(バレオ・ラボ)
「東宮遺跡24号畑出土耕作物の素材同定」
 - 第4章第4節4 上中央子(東北大学植物園)
「東宮遺跡24号畑遺構における花粉分析」

- 第4章第4節5 米田恭子(パレオ・ラボ)「東宮遺跡出土草履および筵の素材」
 第4章第4節6 小林和貴・鈴木三男(東北大学植物園)「東宮遺跡出土織物の繊維素材」
 第4章第4節7 橋崎修一郎(生物考古学研究所)「東宮遺跡出土獣骨」
 第4章第4節8 藤根 久・佐々木由香(パレオ・ラボ)

「東宮遺跡出土圧搾機および燈明皿付着物の赤外分光分析」

藤巻幸男(縄文土器観察表の土器形式等)、篠原正洋(建築部材・石製品観察表の一部)、飯島義雄(下駄観察表)

黒澤照弘(前記以外)

石材同定 飯島静男(遺構石材) 渡辺弘幸(遺物石材)

樹種同定 能城修一(建築部材ほか) 関 邦一(建築部材以外)

遺構写真 発掘調査担当者

遺物写真 佐藤元彦(補佐・総括)

保存処理 関 邦一(補佐)

整理補助 黒岩扶美枝 井草肇子 新保純子 安力川京美 鈴木理佐 足立やよい 関 裕子

8 発掘調査及び整理事業での委託

遺構測量 株式会社 測研

出土建築部材等デジタル写真撮影・実測 株式会社 測研

種実・大型植物遺体同定、圧搾機付着物分析 株式会社 パレオ・ラボ

樹種同定 能城修一(森林総合研究所)

獣骨同定 橋崎修一郎

建物 石井榮一(世田谷区教育委員会)

蝨・菌 町田順一(元群馬県蝨糸技術センター)

肥前系陶磁器同定 大橋康二(九州陶磁文化館)

瀬戸・美濃系陶磁器同定 藤澤良祐(愛知学院大学)

文字 阿久津聡(群馬県立文書館)

線香 鳥毛逸平・鈴木武史(株式会社日本香堂)

布素材同定 鈴木三男

獣毛・線香分析 緑川 順・植竹信治(群馬県警察本部刑事部科学捜査研究所)

溶接箇所分析 群馬県群馬産業技術センター

補付着物分析 群馬県群馬産業技術センター

木製品・漆製品 須田賢司(木工芸家、東京芸術大学非常勤講師)

9 出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10 本遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導を頂いた。記して感謝申し上げます(敬称略)

国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所 群馬県教育委員会文化財保護課 長野原町教育委員会 東吾妻町教育委員会 秋山正典(群馬県立文書館) 石橋峯幸・石崎俊哉((財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター) 市田京子(日本はきもの博物館) 伊東敏行(東京都教育庁) 今津節生(九州国立博物館) 岩山欣司(新城市教育委員会) 内野 正((財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター) 大塚清史(岐阜市歴史博物館) 大八木謙司・及川良彦((財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター) 岡田昭二(群馬県立文書館) 小野正敏(国立歴史民俗博物館) 齊藤 進((財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター) 鳥田敏男(奈良文化財研究所) 下津間康夫(広島県立歴史博物館) 白石光男(長野原町教育委員会) 瀧沢典枝(群馬県立文書館) 田中麻里(群馬大学) 富田孝彦(長野原町教育委員会) 野口貞夫(区長) 野口茂男(地権者) 箱崎和久(奈良文化財研究所) 早川由紀夫(群馬大学) 半田昌之(たばこ塩の博物館) 平井 聖(元昭和女子大) 福田敏一((財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター) 丸山勝美(丸山下駄製作所) 村田敏一(元前橋工業高校) 脇屋貞一(郷土史家)

凡 例

- 1 本書で使用する測量図の座標はすべて2002年4月改正前の平面直角座標第IX系(日本測地系)を用いている。挿入図に使用した方位は、座標北を表している。
- 2 調査範囲全域には4m×4mのグリッド網を設定し、各グリッドの呼称は南東隅の交点を当てている。
- 3 遺構図の縮尺は1/40或いは1/80を基本とし、それ以外の縮尺を用いる場合は、各図下部にスケールを示している。
- 4 遺物図の縮尺は1/3を基本としている。だが出土遺物は多様であり、これ以外の縮尺を用いる場合も多い。各図下部にスケールを示すか、1/3以外は各遺物実測図に縮尺を記している。また、一部の拓本については、実測図と異なる縮尺を用いている。異なる縮尺を用いた拓本については、拓本上に縮尺を記している。
- 5 本書は遺物編であり、遺構・建築跡等については、『東宮遺跡(1) 遺構・建築部材編』で既に報告されている。そのため、既に報告した図版については割愛しているが、遺物出土状況を理解する上で必要な図版についてはその限りではない。
- 6 建物の図中にある「▲」は、想定される出入口部分を示している。
- 7 本文中及び図中の「馬屋」は、建物内の家畜を飼っていた場所を指す。ここで飼われた家畜の種類を明らかにする資料は確認できなかったが、「馬屋」と総称している。
- 8 本文中の「As-A軽石」は、天明三年(1783年)浅間山噴出軽石の略称である。また、「天明泥流」或いは「泥流」は天明三年新暦8月5日の浅間山噴火に伴う泥流堆積物の略称である。
- 9 本文中で使用している「木釘」は、竹箆類を含む木製の釘を総称している。
- 10 遺構図中の遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。床板が遺存する建物の遺物出土位置は、床上、床下、地山中に分け掲載している。
- 11 本文中では、実測図に多くの点描等の表現を使用している。この摘要については本文中に記している。
- 12 建築部材等の実測図木口の年輪の表現の一部については、木取りの判別を主眼に置き、実測線ではなく同心円のパターンを埋め込んで処理したものがある。
- 13 漆製品については、黒漆、透き漆、赤色漆におよそ大別し報告している。詳細は観察表に記載している。また、可能な限り実測図にも漆を表現しているが、その際には想定される範囲全面に表現している。
- 14 出土遺物が良好に遺存しており、加工痕跡、使用痕跡が明確であるため、欠損部についての表現は一部割愛している。ただし、漆継や溶接による補修痕跡についてはその限りではない。
- 15 写真図版中の遺物の縮尺は、おおむね遺物実測図と同縮尺としている。
- 16 遺物観察表の記載方法は下記の通りである。
 - (1) 遺物観察表は「土器・陶磁器」、「漆器・木製品・布・道具類」、「下駄・草履」、「金属製品・道具類」、「銭貨」、「石製品・骨角器・硝子製品」及び「縄文土器・石器」に分け記載している。
 - (2) 計測値の単位は、銭貨と石鏃等をmmとし、これ以外をcmとしている。
 - (3) 欠損した遺物の計測値には()を付けている。
 - (4) 銭貨、鉄滓、石製品、石器等の重量は全て残存値であり、単位はgである。
 - (5) 銭貨の直径及び内輪径は、縦の直径を①内輪径を③、横の直径を②内輪径を④としている。
 - (6) 銭貨の厚さは、文字部分で計測した最大値と最小値を記している。
 - (7) 陶磁器の色調は、胎土の色調を記している。
 - (8) 金属製品のうち、銅製品については合金による金属製品を含んでいる。
 - (9) 色調については、農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準色色帖』1997年度版を用いた。
- 17 本文及び観察表にある継手、加工等の呼称については、鳥海義之助著の『図解 木工の継手と仕口』1989年度版を用いた。

目次

序
例言
凡例
目次
図版目次
写真目次
表目次

第1章 調査の方法と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方針・方法・経過	4
1 調査の方針	2
2 調査の方法	3
3 調査の経過	
第3節 調査区の概要	5
1 調査区の設定	2
2 調査前の状況	3
3 基本土層	
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	12
1 川原畑村の概要・変遷	2
2 川原畑村と交通	3
3 川原畑村に残る口伝、伝承	
第3章 発見された遺物	
第1節 I区の調査成果	22
1 1号屋敷跡	2
2 2号屋敷跡	3
3 その他の遺構	
第2節 II区の調査成果	201
1 3号屋敷跡	2
2 その他の遺構	
第3節 III区の調査成果	225
1 天明泥流下の遺構	2
2 天明泥流被災以前の遺構	
第4節 IV区の調査成果	233
1 4号屋敷跡	2
2 5号屋敷跡	3
3 6号屋敷跡	
4 7号屋敷跡	5
5 その他の遺構	
第5節 原始・古代の出土遺物	315
第4章 調査の成果とまとめ	
第1節 東宮遺跡出土の遺構について	321
1 東宮遺跡を被覆する天明泥流と遺物出土状況	2
2 5号建物3号床付近遺物出土状況	
3 東宮遺跡各屋敷跡出土の種実	4
4 東宮遺跡建築部材樹種同定の成果	
5 東宮遺跡の調査成果から考察する村落変遷	
6 I・II・IV区から検出された建物跡の建築史的検討	
第2節 東宮遺跡出土の遺物について	387
1 東宮遺跡出土の陶磁器生産地	2
2 東宮遺跡出土の瀬戸・美濃陶磁器	
3 東宮遺跡出土遺物の補修痕跡	4
4 東宮遺跡出土の籾と蛹について	5
5 東宮遺跡出土の籾と蛹について	
6 東宮遺跡出土の団扇について	7
7 東宮遺跡出土の線香について	8
8 錠について	
9 東宮遺跡出土の特筆すべき遺物	10
10 木工芸家から見た東宮遺跡出土の木工品	
第3節 文献・伝承・その他の成果	425
1 文献から考察する川原畑村の様相	2
2 川原畑村の皆目録	
3 東宮遺跡出土遺物で確認された文字資料	4
4 川原畑地区野口家に伝わる口承と野口喜左衛門の人物像について	
第4節 自然科学分析成果	436
1 東宮遺跡から出土した大型植物遺体	2
2 東宮遺跡1号建物馬屋家畜糞中の大型植物遺体	
3 東宮遺跡24号畑出土耕作物の素材同定	4
4 東宮遺跡24号畑遺構における花粉分析	
5 東宮遺跡出土草履および籾の素材	6
6 東宮遺跡出土織物の纖維素材	
7 東宮遺跡出土獣骨	8
8 東宮遺跡出土圧搾機および燈明皿付着物の赤外分光分析	
9 東宮遺跡出土鉄鋼類補修痕跡について	10
10 東宮遺跡出土桶内付着物の分析について	

遺物観察表	498
-------	-----

抄録
写真図版

図版目次

第1図	東京道路調査区全体図	6	第638図	I区1号建物出土遺物442～450	84
第2図	東京道路基本土層	9	第640図	I区1号建物出土遺物450	85
第3図	道路断面図	11	第656図	I区1号建物出土遺物451	86
第4図	川原御村絵図(天保八年)	13	第666図	I区1号建物出土遺物452	87
第5図	道路断面及び埋込道路跡図	14・15・16	第676図	I区2号建物 遺物出土状況①	89
第6図	I区1号屋敷跡	23	第688図	I区2号建物 遺物出土状況②	90
第7図	I区1号建物 遺物出土状況①床上	25・26	第699図	I区2号建物出土遺物32～44	91
第8図	I区1号建物 遺物出土状況②床下	27・28	第700図	I区2号建物出土遺物45～47	92
第9図	I区1号建物 1号床遺物出土状況	29	第710図	I区2号建物出土遺物48～52	93
第10図	I区1号建物 2号床遺物出土状況	30	第720図	I区2号建物出土遺物53～62	94
第11図	I区1号建物 3号床遺物出土状況①床上	31	第730図	I区3号建物 遺物出土状況	96
第12図	I区1号建物 3号床遺物出土状況②床下	32	第740図	I区3号建物出土遺物1～3	96
第13図	I区1号建物 4号床遺物出土状況	33	第750図	I区4号建物 遺物出土状況①床上	98
第14図	I区1号建物 5号床遺物出土状況	34	第760図	I区4号建物 遺物出土状況②床下	99
第15図	I区1号建物 6号床遺物出土状況	35	第770図	I区4号建物出土遺物32～53	101
第16図	I区1号建物 室遺物出土状況	36	第780図	I区4号建物出土遺物54～58	102
第17図	I区1号建物 2号土白・唐白支柱・1号土坑・唐白柱	36	第790図	I区4号建物出土遺物59～69	103
第18図	I区1号建物 馬屋遺物出土状況	37	第800図	I区4号建物出土遺物70～72	104
第19図	I区1号建物 1号施設遺物出土状況	38	第810図	I区4号建物出土遺物73～76	105
第20図	I区1号建物 2号施設・馬屋南橋・1号土白 遺物出土状況	39	第820図	I区4号建物出土遺物77～83	106
第21図	I区1号建物出土遺物168～193	42	第830図	I区4号建物出土遺物84～85	107
第22図	I区1号建物出土遺物194～219	43	第840図	I区4号建物出土遺物86	108
第23図	I区1号建物出土遺物220～221	44	第850図	I区4号建物出土遺物86	109
第24図	I区1号建物出土遺物222～224	45	第860図	I区4号建物出土遺物87	110
第25図	I区1号建物出土遺物225	46	第870図	I区4号建物出土遺物88～91	111
第26図	I区1号建物出土遺物225～228	47	第880図	I区4号建物出土遺物92～95	112
第27図	I区1号建物出土遺物229～231	48	第890図	I区4号建物出土遺物96・97・100～102	113
第28図	I区1号建物出土遺物232～241	49	第900図	I区4号建物出土遺物103・104	114
第29図	I区1号建物出土遺物242・243	50	第910図	I区4号建物出土遺物105	115
第30図	I区1号建物出土遺物244～249	51	第920図	I区4号建物出土遺物108～117	116
第31図	I区1号建物出土遺物250～255	52	第930図	I区4号建物出土遺物114～119	117
第32図	I区1号建物出土遺物256～259	53	第940図	I区4号建物出土遺物120・121	118
第33図	I区1号建物出土遺物260～264	54	第950図	I区8号建物	120
第34図	I区1号建物出土遺物265～268	55	第960図	I区8号建物出土遺物1～5	121
第35図	I区1号建物出土遺物269～272	56	第970図	I区1号屋敷跡 遺物出土状況	123・124
第36図	I区1号建物出土遺物273～276	57	第980図	I区1号屋敷跡 遺物出土状況①1号側木付近	125
第37図	I区1号建物出土遺物277～280	58	第990図	I区1号屋敷跡 遺物出土状況②1号側木付近	126
第38図	I区1号建物出土遺物281～283	59	第1000図	I区1号石垣1～4、4号溝1～8出土遺物	127
第39図	I区1号建物出土遺物284・285	60	第1010図	I区4号溝9～14、1号橋1・2出土遺物	128
第40図	I区1号建物出土遺物286・287	61	第1020図	I区1号屋敷跡出土遺物1～22	129
第41図	I区1号建物出土遺物288・289	62	第1030図	I区1号屋敷跡出土遺物23～41	130
第42図	I区1号建物出土遺物290～293	63	第1040図	I区1号屋敷跡出土遺物42～44	131
第43図	I区1号建物出土遺物294～297	64	第1050図	I区1号屋敷跡出土遺物45～47	132
第44図	I区1号建物出土遺物298～301	65	第1060図	I区1号屋敷跡出土遺物48	133
第45図	I区1号建物出土遺物302～305	66	第1070図	I区1号屋敷跡出土遺物49	134
第46図	I区1号建物出土遺物306～313	67	第1080図	I区1号屋敷跡出土遺物50	135
第47図	I区1号建物出土遺物314～318	68	第1090図	I区1号屋敷跡出土遺物51～52	136
第48図	I区1号建物出土遺物319～322	69	第1100図	I区1号屋敷跡出土遺物53～55	137
第49図	I区1号建物出土遺物323～327	70	第1110図	I区1号屋敷跡出土遺物56～62	138
第50図	I区1号建物出土遺物328～333	71	第1120図	I区1号屋敷跡出土遺物62	139
第51図	I区1号建物出土遺物334～340	72	第1130図	I区1号屋敷跡下(8号溝・4号床下土坑) 遺物出土状況	141・142
第52図	I区1号建物出土遺物341～344	73	第1140図	I区8号溝1～9、4号床下土坑1～3出土遺物	143
第53図	I区1号建物出土遺物345～350	74	第1150図	I区1号屋敷跡下出土遺物1～29	144
第54図	I区1号建物出土遺物351～358	75	第1160図	I区1号屋敷跡下出土遺物30～38	145
第55図	I区1号建物出土遺物359～362	76	第1170図	I区4号石垣 遺物出土状況	146
第56図	I区1号建物出土遺物363～381	77	第1180図	I区4号石垣出土遺物1～6	147
第57図	I区1号建物出土遺物382～400	78	第1190図	I区2号屋敷跡	149
第58図	I区1号建物出土遺物401～404	79	第1200図	I区2号建物 遺物出土状況①床上	151・152
第59図	I区1号建物出土遺物405・406	80	第1210図	I区5号建物 遺物出土状況②床下	153・154
第600図	I区1号建物出土遺物407～410	81	第1220図	I区5号建物 側戸裏	155
第601図	I区1号建物出土遺物410～423	82	第1230図	I区5号建物出土遺物88～115	156
第62図	I区1号建物出土遺物424～441	83	第1240図	I区5号建物出土遺物116～128	157

第12508	I区5号建物出土遺物129～132	158
第12608	I区5号建物出土遺物133～139	159
第12708	I区5号建物出土遺物140～145	160
第12808	I区5号建物出土遺物146～148	161
第12908	I区5号建物出土遺物149～152	162
第13008	I区5号建物出土遺物153・154	163
第13108	I区5号建物出土遺物155	164
第13208	I区5号建物出土遺物155～159	165
第13308	I区5号建物出土遺物160・161	166
第13408	I区5号建物出土遺物162・163	167
第13508	I区5号建物出土遺物164～167	168
第13608	I区5号建物出土遺物168～171	169
第13708	I区5号建物出土遺物172～175	170
第13808	I区5号建物出土遺物176	171
第13908	I区5号建物出土遺物177～182	172
第14008	I区5号建物出土遺物183	173
第14108	I区5号建物出土遺物199～214	174
第14208	I区5号建物出土遺物215～219・221	175
第14308	I区5号建物出土遺物220	176
第14408	I区6号建物 遺物出土状況	178
第14508	I区6号建物出土遺物3～6	179
第14608	I区6号建物出土遺物7～8	180
第14708	I区6号建物9～12、1号竪坑1・2出土遺物	181
第14808	I区2号屋敷跡 遺物出土状況	183・184
第14908	I区5号堀1・2、11号堀1、12号堀1～6出土遺物	185
第15008	I区12号堀7・8、6号石垣1、3号溝出土遺物	186
第15108	I区2号屋敷跡出土遺物1～6	187
第15208	I区2号屋敷跡下 遺物出土状況	188
第15308	I区9号溝1、2号屋敷跡下1～8出土遺物	189
第15408	I区2・3・4号堀	191・192
第15508	I区2・3・4号堀出土遺物1～30	193
第15608	I区2・3・4号堀出土遺物31～35	194
第15708	I区2・7号溝、51区1号集石、1号被熱岩 遺物出土状況	195
第15808	I区2号溝、51区1号集石、1号被熱岩 遺物出土状況	196
第15908	I区2号溝1～4、51区1号集石、 1号被熱岩出土遺物	197
第16008	I区1号井戸、1号井戸出土遺物1～4	198
第16108	I区道橋外出土遺物1～28	199
第16208	I区道橋外出土遺物29～38	200
第16308	II区3号屋敷跡	202
第16408	II区3号屋敷跡(7号建物・9号石垣) 遺物出土状況	203・204
第16508	II区7号建物出土遺物1～20・22・23	206
第16608	II区7号建物出土遺物21・24～32	207
第16708	II区7号建物出土遺物33～34	208
第16808	II区7号建物出土遺物35～37	209
第16908	II区7号建物出土遺物38～41	210
第17008	II区7号建物出土遺物42・43	211
第17108	II区7号建物出土遺物44～54	212
第17208	II区7号建物出土遺物55～56	213
第17308	II区7号建物出土遺物57～62	214
第17408	II区7号建物出土遺物63～79	215
第17508	II区7号建物出土遺物80～82	216
第17608	II区9号石垣出土遺物1～14	218
第17708	II区3号屋敷跡出土遺物1～15	219
第17808	II区3号屋敷跡下(51区2号集石・1号土坑) 遺物出土状況	220
第17908	II区51区2号集石、2号集石出土遺物1～3	221
第18008	II区51区1号土坑、1号土坑出土遺物1	221
第18108	II区3号屋敷跡下出土遺物1・2	221
第18208	II区トレンチ位置図	223
第18308	II区8号堀1～3、1号トレンチ1・2、3号トレンチ1、 15号トレンチ1～5、II区道橋外1～9出土遺物	224
第18408	II区24号堀(サンプル採取地点)	226
第18508	III区22号堀1、23号堀1・2、24号堀1出土遺物	226
第18608	III区22・23・24号堀	227・228
第18708	III区トレンチ、50区1号土坑、60区2号土坑	230
第18808	III区59区1号土坑、1号土坑出土遺物1～3	231
第18908	III区60区2号土坑、2号土坑出土遺物1～7	231
第19008	III区22号トレンチ1、24号トレンチ1、25号トレンチ1～3、 26号トレンチ1、27号トレンチ1、28号トレンチ1 出土遺物	232
第19108	IV区4号屋敷跡(9号建物) 遺物出土状況	234
第19208	IV区9号建物 庫付近遺物出土状況	235
第19308	IV区9号建物出土遺物1～21	237
第19408	IV区9号建物出土遺物22～25	238
第19508	IV区9号建物出土遺物26・27	239
第19608	IV区9号建物出土遺物28・29	240
第19708	IV区9号建物出土遺物30	241
第19808	IV区9号建物出土遺物31～33	242
第19908	IV区9号建物出土遺物34～45	243
第20008	IV区9号建物出土遺物46～48	244
第20108	IV区9号建物出土遺物49・50	245
第20208	IV区9号建物出土遺物51～65	246
第20308	IV区4号屋敷跡下 遺物出土状況	248
第20408	IV区4号屋敷跡下出土遺物1～14	249
第20508	IV区5号屋敷跡	251
第20608	IV区10号建物 遺物出土状況①	252
第20708	IV区10号建物 遺物出土状況②	253
第20808	IV区10号建物 構場跡付近遺物出土状況	254
第20908	IV区10号建物出土遺物44～58	256
第21008	IV区10号建物出土遺物59～65	257
第21108	IV区10号建物出土遺物66～88	258
第21208	IV区10号建物出土遺物89～140	259
第21308	IV区10号建物出土遺物141～145	260
第21408	IV区10号建物出土遺物146～148	261
第21508	IV区10号建物出土遺物149～151	262
第21608	IV区10号建物出土遺物152～159	263
第21708	IV区10号建物出土遺物160～168	264
第21808	IV区10号建物出土遺物169～173	265
第21908	IV区10号建物出土遺物174～181	266
第22008	IV区10号建物出土遺物182～189	267
第22108	IV区5号屋敷跡 遺物出土状況	269・270
第22208	IV区5号屋敷跡 1号施設遺物出土状況	271
第22308	IV区5号屋敷跡 2号施設遺物出土状況	272
第22408	IV区5号屋敷跡 1号施設遺物出土状況	272
第22508	IV区5号屋敷跡 1号施設出土遺物1	273
第22608	IV区5号屋敷跡 1号施設2～4、 2号施設1・2出土遺物	274
第22708	IV区5号屋敷跡 1号跡1・2、 5号施設跡1～5出土遺物	275
第22808	IV区5号屋敷跡下 遺物出土状況	276
第22908	IV区5号屋敷跡下出土遺物1～6	277
第23008	IV区6号屋敷跡 遺物出土状況	279
第23108	IV区11号建物 遺物出土状況	280
第23208	IV区11号建物出土遺物1～15	281
第23308	IV区11号建物出土遺物16～21	282
第23408	IV区11号建物22～26、6号屋敷跡1出土遺物	283
第23508	IV区7号屋敷跡 遺物出土状況	286
第23608	IV区13号建物 遺物出土状況	287・288
第23708	IV区13号建物南西 遺物出土状況	289
第23808	IV区13号建物出土遺物1～30	291
第23908	IV区13号建物出土遺物31～46	292
第24008	IV区13号建物出土遺物47～63	293
第24108	IV区13号建物出土遺物64～74	294
第24208	IV区13号建物出土遺物75～76	295
第24308	IV区13号建物出土遺物77～93	296
第24408	IV区13号建物出土遺物93～103	297
第24508	IV区13号建物出土遺物104～111	298
第24608	IV区13号建物出土遺物112～121	299

第2478	IV区13号建物出土遺物122～126	300
第2488	IV区13号建物出土遺物127～132	301
第2498	IV区13号建物出土遺物133～148	302
第2508	IV区13号建物出土遺物149～156	303
第2518	IV区14号建物 遺物出土状況	304
第2528	IV区14号建物出土遺物1～19	305
第2538	IV区14号建物出土遺物20～31	306
第2548	IV区14号建物出土遺物32～33	307
第2558	IV区7号屋敷跡 遺物出土状況	309～310

第2568	IV区8号石南1・2、5号道1・2、7号屋敷跡1～3出土遺物	311
第2578	IV区16号堀	312
第2588	IV区16号堀出土遺物1～6	313
第2598	IV区遺構外出土遺物1、遺構外出土遺物1～8	314
第2608	I区出土遺物(隴文)1～34	317
第2618	I区出土遺物(隴文)35～67	318
第2628	I区68～73、II区1～3、III区1～12出土遺物(隴文)	319
第2638	III区13～27、IV区1・2出土遺物(隴文)	320

写真目次

P.L. 1	1	1・2号屋敷跡 垂直	7	1号建物1号施設周辺 鉄鍋(No.408)出土状況	北→		
	2	1号建物 垂直	8	1号建物1号施設周辺 重箱(No.229)出土状況	北→		
P.L. 2	1	1号建物遺物出土状況 東→	P.L.12	1	1号建物2号施設遺物出土状況① 南→		
	2	1・4号建物遺物出土状況 南東→		2	1号建物2号施設遺物出土状況② 南→		
P.L. 3	1	1号建物1号床付近遺物出土状況 東→		3	1号建物2号施設遺物出土状況 南→		
	2	1号建物1号床 南→		4	1号建物2号施設周辺遺物(No.249)出土状況	北東→	
	3	1号建物1号床下 南→		5	1号建物馬廄 南→		
	4	1号建物1号床下出土壺 南西→		6	1号建物馬廄南側遺物出土状況 南→		
	5	1号建物1号床下出土壺 近接		7	1号建物馬廄周辺遺物(No.336)出土状況 南→		
	6	1号建物1号床下 草蓆(No.312)出土状況	近接	P.L.13	1	1号建物馬廄東側 香炉(No.200)出土状況	近接
	7	1号建物2号床 南→		2	1号建物馬廄東側 棚(No.246)出土状況	近接	
	8	1号建物2号床下 薬皿(No.402)出土状況	東→	3	1号建物馬廄西側遺物出土状況 西→		
P.L. 4	1	1号建物3号床遺物出土状況 南→		4	1号建物馬廄西側遺物出土状況 北西→		
	2	1号建物3号床遺物出土状況 南西→		5	1号建物馬廄西側遺物出土状況 西→		
	3	1号建物3号床南側 団扇(No.250)出土状況	北→	6	1号建物馬廄西側遺物(No.264)出土状況	西→	
	4	1号建物3号床下 煙管(No.395)出土状況	西→	7	1号建物1号唐白遺物出土状況 南→		
	5	1号建物3号床下 箱(No.242)出土状況	南→	8	1号建物1号唐白遺物(No.212・230・241)出土状況	近接	
P.L. 5	1	1号建物3号床下遺物出土状況① 南→	P.L.14	1	1号建物1号唐白遺物出土状況 南→		
	2	1号建物3号床下遺物出土状況 東→		2	1号建物1号唐白遺物出土状況 近接		
	3	1号建物3号床下 箱(No.227)出土状況	東→	3	1号建物1号唐白遺物出土状況 南→		
	4	1号建物3号床下遺物(No.228・252・302)出土状況	東→	4	1号建物1号唐白製陶器出土状況 南→		
	5	1号建物3号床下遺物出土状況	近接	5	1号建物2号唐白・支柱・1号土坑	北→	
P.L. 6	1	1号建物3号床下遺物出土状況 南西→		6	1号建物2号唐白周辺遺物出土状況	東→	
	2	1号建物3号床下遺物(No.262)出土状況	南西→	7	1号建物2号唐白	北西→	
	3	1号建物3号床下遺物出土状況 南西→		8	1号建物唐白支柱遺物(No.232)出土状況	東→	
	4	1号建物3号床下 香炉(No.199)出土状況	南西→	P.L.15	1	1号建物室 南→	
	5	1号建物3号床下遺物出土状況② 南→		2	1号建物室 刀子(No.234)出土状況	南→	
P.L. 7	1	1号建物3号床下遺物出土状況 南西→		3	1号建物壺 南→		
	2	1号建物3号床下遺物(No.263)出土状況	南西→	4	1号建物壺周辺 桶(No.316)出土状況	西→	
	3	1号建物3号床下遺物出土状況③ 南→		5	1号建物壺北側遺物出土状況	北→	
	4	1号建物3号床下 藤(No.399)出土状況	北→	6	1号建物壺北側 木鉢(No.253)出土状況	南西→	
	5	1号建物3号床下遺物(No.257・318)出土状況	南西→	7	1号建物壺北側遺物(No.224・407)出土状況	東→	
P.L. 8	1	1号建物3号床下遺物出土状況 西→		8	1号建物壺北側遺物(No.265)出土状況	南→	
	2	1号建物3号床下 草蓆(No.308)出土状況	西→	P.L.16	1	1号建物壺北側蓋面出土状況	南→
	3	1号建物3号床下 下駄(No.275・276)出土状況	南→		2	1号建物壺北側蓋面出土状況	近接
	4	1号建物3号床下 下駄(No.271・274・279)出土状況	西→		3	2号建物遺物出土状況① 垂直	
	5	1号建物4号床 南→			4	2号建物遺物出土状況② 西→	
P.L. 9	1	1号建物4号床下遺物出土状況 西→			5	2号建物西側遺物出土状況 西→	
	2	1号建物4号床下 下駄(No.294)出土状況	南西→	P.L.17	1	2号建物西側遺物出土状況 東→	
	3	1号建物4号床下 漆椀(No.211・217)出土状況	南→		2	2号建物9号桶出土状況	西→
	4	1号建物4号床周辺遺物出土状況	北東→		3	2号建物遺物(No.45)出土状況	南東→
	5	1号建物5号床 東→			4	2号建物遺物(No.45)出土状況	南西→
P.L.10	1	1号建物5号床行灯(No.225)出土状況	南→		5	2号建物遺物出土状況	北東→
	2	1号建物5号床下 棚(No.247)出土状況	近接		6	2号建物遺物出土状況② 西→	
	3	1号建物1号施設遺物出土状況① 南西→			7	2号建物2号桶 散件(No.64)出土状況	北→
	4	1号建物1号施設遺物出土状況② 北東→			8	2号建物4号桶 威石(No.62)出土状況	西→
	5	1号建物1号施設遺物(No.258)出土状況	南→	P.L.18	1	3号建物	北→
P.L.11	1	1号建物1号施設遺物出土状況③ 北東→			2	4号建物遺物出土状況① 垂直	
	2	1号建物1号施設遺物出土状況④ 北東→		P.L.19	1	4号建物遺物出土状況② 北→	
	3	1号建物1号施設遺物出土状況⑤ 北→			2	4号建物北側遺物出土状況	北西→
	4	1号建物1号施設遺物出土状況 西→			3	4号建物 圧搾機(No.86)出土状況	北西→
	5	1号建物1号施設周辺 茶釜(No.410)出土状況	南西→		4	4号建物遺物出土状況	南→
	6	1号建物1号施設周辺遺物(No.220・406)出土状況	北→		5	4号建物遺物出土状況	近接
				P.L.20	1	4号建物床下遺物出土状況① 垂直	

	2	4号建物床下遺物出土状況①	東→	P.L.32	1	2~4号組、1号井戸、1号道	南西→
	3	4号建物床下遺物(No.103)出土状況	南東→		2	1号井戸	南東→
	4	4号建物床下遺物出土状況	西→		3	2号溝	南東→
	5	4号建物床下 塀柱(No.104)出土状況	南→		4	51区1号集石	南東→
P.L.21	1	4号建物床下遺物(No.67・87)出土状況	南西→		5	1号焼酎瓶	南西→
	2	4号建物床下遺物出土状況	西→	P.L.33	1	3号屋敷跡	垂直
	3	4号建物 掛土(No.105)出土状況	西→		2	7号建物遺物出土状況	南→
	4	4号建物床下遺物出土状況②	南西→	P.L.34	1	7号建物遺物出土状況	南東→
	5	8号建物	南東→		2	7号建物 鉄鍋(No.57)出土状況	南西→
P.L.22	1	4号溝、1号橋遺物出土状況	東→		3	7号建物 薬缶(No.56)出土状況	北→
	2	1号橋遺物出土状況	南→		4	7号建物 重箱(No.33)出土状況	南東→
	3	1号石垣	南東→		5	7号建物 すり鉢(No.21)出土状況	西→
	4	1号屋敷跡北側遺物出土状況①	北→		6	7号建物 木鉢(No.41)出土状況	南東→
P.L.23	1	1号屋敷跡北側 半塀(No.15・16)出土状況	近接		7	7号建物 桶(No.43)出土状況	東→
	2	1号屋敷跡北側遺物出土状況②	南東→		8	7号建物 土櫃(No.36)出土状況	南→
	3	1号屋敷跡北側 桶(No.51)出土状況	南→	P.L.35	1	7号建物 刀(No.5・55・80)出土状況	東→
	4	1号屋敷跡北側遺物出土状況	南西→		2	7号建物 重箱(No.34)出土状況	近接
	5	1号屋敷跡北側 竹籠(No.42)出土状況	西→		3	7号建物 漆桶(No.32)出土状況	近接
	6	1号屋敷跡北側 竹籠(No.42)出土状況	北西→		4	7号建物 漆桶出土状況	南東→
	7	1号屋敷跡北側 梯子・杵(No.52・53)出土状況	南→		5	7号建物 面巾(No.37)出土状況	東→
	8	1号屋敷跡北側 桶(No.50)出土状況	西→		6	7号建物遺物出土状況	南→
P.L.24	1	8号溝	西→		7	3号屋敷跡遺物出土状況	南西→
	2	8号溝	北東→		8	51区2号集石	西→
	3	8号溝平石除去後	北東→	P.L.36	1	51区1号土坑	北東→
	4	4号床下土坑	東→		2	8号煙	西→
P.L.25	5	1号建物1号塀裏下 普角器(No.37)出土状況	近接		3	22・24号煙	東→
	1	4号石垣	北→		4	23号煙	南西→
	2	4号石垣東側遺物(No.5)出土状況	南→		5	59区1号土坑人骨・瓦貫出土状況	南東→
	3	5号建物遺物出土状況	垂直		6	60区2号土坑人骨・瓦貫出土状況	南→
	4	5号建物1号床上遺物出土状況	南東→		7	Ⅲ区25号トレンチ	東→
P.L.26	5	5号建物2号床上遺物出土状況	北→		8	Ⅲ区26号トレンチ	南→
	1	5号建物3号床上遺物出土状況	北西→	P.L.37	1	9号建物遺物出土状況	北東→
	2	5号建物3号床上 竹籠(No.146)出土状況	北→		2	9号建物 蓋(No.44)出土状況	北→
	3	5号建物3号床遺物出土状況	北→		3	9号建物 木杓子(No.20)出土状況	近接
	4	5号建物3号床箱(No.155)出土状況	北→		4	9号建物 水漏(No.40)出土状況	北東→
	5	5号建物3号床上遺物出土状況	北西→		5	9号建物 塗付籠(No.4)出土状況	南西→
P.L.27	1	5号建物3号床箱・樽(No.154・177)出土状況	東→	P.L.38	1	9号建物遺物(No.27・46)出土状況	南西→
	2	5号建物3号床箱・樽(No.154・177)出土状況	南→		2	9号建物 桶(No.30・31)出土状況	南東→
	3	5号建物3号床箱(No.154)出土状況①	東→		3	9号建物 鉄鍋(No.50)出土状況	南東→
	4	5号建物3号床箱(No.154)出土状況②	東→		4	9号建物 桶(No.29)出土状況	東→
	5	5号建物4号床上遺物出土状況	北→		5	9号建物遺物出土状況	南東→
P.L.28	1	5号建物4号床 残貨出土状況	近接		6	9号建物遺物(No.25・26)出土状況	南東→
	2	5号建物北側遺物出土状況	南東→		7	9号建物 刷毛(No.24)出土状況	東→
	3	5号建物北側遺物出土状況	北→		8	9号建物遺物出土状況	東→
	4	5号建物 櫛内遺物(No.129・134・176)出土状況	北西→	P.L.39	1	4号屋敷跡下遺物出土状況	北東→
	5	5号建物床下遺物出土状況	南東→		2	4号屋敷跡下 礎石(No.13)出土状況	南→
P.L.29	1	5号建物1号床下 下駄(No.162・163)出土状況	南→		3	5号屋敷跡	東→
	2	5号建物1号床下遺物出土状況	東→		4	10号建物遺物出土状況	北東→
	3	5号建物3号床下遺物出土状況	北西→		5	10号建物遺物出土状況	南東→
	4	5号建物4号床下遺物出土状況	北東→	P.L.40	1	10号建物遺物出土状況	南西→
	5	5号建物馬廐、1・2号施設遺物出土状況	南西→		2	10号建物遺物出土状況	西→
	6	5号建物1・2号施設遺物出土状況	北西→		3	10号建物遺物出土状況	南東→
	7	5号建物1・2号施設遺物(No.119・147)出土状況	東→		4	10号建物 槍出土状況	東→
	8	5号建物1・2号施設 碇(No.148)出土状況	南東→		5	10号建物 槍(No.139)出土状況	東→
P.L.30	1	5号建物御如裏	南→	P.L.41	1	10号建物遺物(No.60)出土状況	近接
	2	5号建物御如裏下①木筒	南西→		2	10号建物 桶(No.143)出土状況	東→
	3	5号建物御如裏下②木杭	南→		3	10号建物遺物出土状況	南東→
	4	6号建物遺物出土状況	南→		4	10号建物遺物(No.154・174)出土状況	東→
	5	6号建物遺物出土状況	南西→		5	10号建物 灯火具(No.64)出土状況	東→
P.L.31	1	6号建物 鎌(No.7)出土状況	南西→	P.L.42	1	10号建物 樽 西→	
	2	1号溜池遺物出土状況	北西→		2	10号建物 樽縁跡周辺遺物出土状況	東→
	3	5号煙遺物出土状況	南→		3	10号建物 樽縁跡周辺 草履(No.68)出土状況	東→
	4	11号煙遺物出土状況	北東→		4	10号建物 西側 簀(No.147)出土状況	北東→
	5	12号煙遺物出土状況	南西→	P.L.43	1	10号建物西側遺物出土状況	南東→
	6	2号屋敷跡下遺物(No.6)出土状況			2	10号建物西側 桶(No.145)出土状況	南東→
	7	9号溝	東→		3	10号建物西側 桶(No.145)出土状況	近接

P.L.44	4	10号建物西側出入口付近遺物(No.150)出土状況	東→	P.L.74	I区1号建物出土遺物354～362	
	5	10号建物 扉(No.180)出土状況	南東→	P.L.75	I区1号建物出土遺物363～394	
	1	5号屋敷跡1号施設遺物出土状況	東→	P.L.76	I区1号建物出土遺物395～402	
	2	5号屋敷跡1号施設遺物出土状況	北東→	P.L.77	I区1号建物出土遺物403～405	
	3	5号屋敷跡1号施設遺物出土状況	東→	P.L.78	I区1号建物出土遺物406・407・409・410	
P.L.45	4	5号屋敷跡1号施設付近遺物出土状況	西→	P.L.79	I区1号建物出土遺物408・411～420	
	5	5号屋敷跡2号施設遺物出土状況	北→	P.L.80	I区1号建物出土遺物421～447	
	6	5号屋敷跡2号施設遺物出土状況	南→	P.L.81	I区1号建物出土遺物448～450	
	7	5号屋敷跡1号炉	北→	P.L.82	I区1号建物出土遺物451	
	8	5号屋敷跡下 煙管(No.6)出土状況	近接	P.L.83	I区1号建物452、2号建物32～44出土遺物	
	1	12号建物遺物出土状況	東→	P.L.84	I区2号建物出土遺物45～50	
	2	11号建物遺物出土状況	東→	P.L.85	I区2号建物出土遺物51～62	
	P.L.46	1	11号建物 煎茶碗(No.4)出土状況	北→	P.L.86	I区3号建物1～3、4号建物32～51
2		11号建物 片口(No.9)出土状況	北西→	P.L.87	I区4号建物出土遺物52～56	
3		11号建物 薬缶(No.15)出土状況	東→	P.L.88	I区4号建物出土遺物57～68	
4		6号屋敷跡 兼(No.1)出土状況	南東→	P.L.89	I区4号建物出土遺物69～75	
P.L.47	5	13号建物	東→	P.L.90	I区4号建物出土遺物76～83	
	1	13号建物遺物出土状況	北西→	P.L.91	I区4号建物出土遺物84～86	
	2	13号建物遺物出土状況	北西→	P.L.92	I区4号建物出土遺物86	
	3	13号建物遺物出土状況	北西→	P.L.93	I区4号建物出土遺物87～89	
	4	13号建物遺物(No.53)出土状況	南→	P.L.94	I区4号建物出土遺物90～95	
	5	13号建物遺物出土状況	南東→	P.L.95	I区4号建物出土遺物96～101	
	P.L.48	1	13号建物遺物出土状況	近接	P.L.96	I区4号建物出土遺物102～104
		2	13号建物遺物出土状況	近接	P.L.97	I区4号建物出土遺物105～107
		3	13号建物 鉦鼓(No.132)出土状況	近接	P.L.98	I区4号建物出土遺物108～118
4		13号建物遺物(No.108～111・117・118)出土状況	北西→	P.L.99	I区4号建物119～121、8号建物1～5、1号石垣1～4出土遺物	
5		13号建物遺物(No.77)出土状況	北→	P.L.100	I区4号溝出土遺物1～14	
6		13号建物 刀(No.96)出土状況	近接	P.L.101	I区1号塙1・2、1号屋敷跡1～20出土遺物	
P.L.49	7	13号建物 柿杵(No.75)出土状況	北西→	P.L.102	I区1号屋敷跡出土遺物21～32	
	8	13号建物遺物(No.131)出土状況	近接	P.L.103	I区1号屋敷跡出土遺物33～41	
	1	13号建物遺物出土状況	南→	P.L.104	I区1号屋敷跡出土遺物42～46	
	2	13号建物 染付皿(No.42～44)出土状況	近接	P.L.105	I区1号屋敷跡出土遺物47	
	3	13号建物 杓子(No.104)出土状況	北→	P.L.106	I区1号屋敷跡出土遺物48	
	4	13号建物 香炉・硯(No.64・155)出土状況	北西→	P.L.107	I区1号屋敷跡出土遺物49	
	5	13号建物 染付皿(No.47)出土状況	東→	P.L.108	I区1号屋敷跡出土遺物50	
	6	13号建物遺物(No.24・71)出土状況	北東→	P.L.109	I区1号屋敷跡出土遺物51・52	
	7	13号建物 鉄鍋(No.124)出土状況	近接	P.L.110	I区1号屋敷跡出土遺物53～61	
	8	13号建物 鉄鍋(No.120)出土状況	近接	P.L.111	I区1号屋敷跡出土遺物62	
P.L.50	1	14号建物、5号道	南東→	P.L.112	I区8号溝1～9、4号地下土坑1～3、1号屋敷跡下1～19出土遺物	
	2	15号建物	北西→			
	3	8号石垣	南東→			
	4	16号畑	南西→			
	5	16号畑 染付瓶(No.3)出土状況	近接	P.L.113	I区1号屋敷跡下20～38、4号石垣1～4・6出土遺物	
P.L.51	I区1号建物出土遺物168～196		P.L.114	I区4号石垣5、5号建物88～105出土遺物		
P.L.52	I区1号建物出土遺物197～219		P.L.115	I区5号建物出土遺物106～126		
P.L.53	I区1号建物出土遺物220～222		P.L.116	I区5号建物出土遺物127～133		
P.L.54	I区1号建物出土遺物223～226		P.L.117	I区5号建物出土遺物134～144		
P.L.55	I区1号建物出土遺物227～240		P.L.118	I区5号建物出土遺物145		
P.L.56	I区1号建物出土遺物241～247		P.L.119	I区5号建物出土遺物146～148		
P.L.57	I区1号建物出土遺物248～252		P.L.120	I区5号建物出土遺物149～153		
P.L.58	I区1号建物出土遺物253～259		P.L.121	I区5号建物出土遺物154		
P.L.59	I区1号建物出土遺物260・261・263・265		P.L.122	I区5号建物出土遺物154・155		
P.L.60	I区1号建物出土遺物262・266～269		P.L.123	I区5号建物出土遺物156～161		
P.L.61	I区1号建物出土遺物270～275		P.L.124	I区5号建物出土遺物162～165		
P.L.62	I区1号建物出土遺物276～281		P.L.125	I区5号建物出土遺物166～171		
P.L.63	I区1号建物出土遺物282・284～286		P.L.126	I区5号建物出土遺物172～175		
P.L.64	I区1号建物出土遺物287～289		P.L.127	I区5号建物出土遺物176		
P.L.65	I区1号建物出土遺物290～295		P.L.128	I区5号建物出土遺物177～183		
P.L.66	I区1号建物出土遺物296～301		P.L.129	I区5号建物出土遺物184～201		
P.L.67	I区1号建物出土遺物302～307		P.L.130	I区5号建物出土遺物202～219・221		
P.L.68	I区1号建物出土遺物308～315・317・318		P.L.131	I区5号建物出土遺物220～222・223		
P.L.69	I区1号建物出土遺物316・320・321		P.L.132	I区6号建物出土遺物3～8		
P.L.70	I区1号建物出土遺物319・323～327		P.L.133	I区6号建物9～12、1号池田1・2、5号畑1・2、11号畑1出土遺物		
P.L.71	I区1号建物出土遺物328～335・337～339		P.L.134	I区12号畑1～8、6号石垣1、3号溝1、9号溝1、2号屋敷跡1～6出土遺物		
P.L.72	I区1号建物出土遺物336～340・342～344		P.L.135	I区2号屋敷跡下1～8、2～4号畑1～17出土遺物		
P.L.73	I区1号建物出土遺物345～353					

P.L.136	I区2～4号畑18～35、2号溝1～4、51区1号集石1、1号被熱岩1出土遺物
P.L.137	I区1号井戸1～4、1区道橋外1～3出土遺物
P.L.138	I区道橋外33～38、Ⅱ区7号建物1～20・22・23出土遺物
P.L.139	Ⅱ区7号建物出土遺物21・24～33
P.L.140	Ⅱ区7号建物出土遺物34～37
P.L.141	Ⅱ区7号建物出土遺物38～42
P.L.142	Ⅱ区7号建物出土遺物43
P.L.143	Ⅱ区7号建物出土遺物44～47
P.L.144	Ⅱ区7号建物出土遺物48～59
P.L.145	Ⅱ区7号建物出土遺物60～81
P.L.146	Ⅱ区7号建物82、9号石垣1～14出土遺物
P.L.147	Ⅱ区3号屋敷跡1～15、51区2号集石1～3、51区1号土坑1、3号屋敷跡下1・2、8号畑1～3、1号トレンチ1・2、3号トレンチ1出土遺物
P.L.148	Ⅱ区15号トレンチ1～5、道橋外1～9、Ⅲ区22号畑1、23号畑1・2、24号畑1、59区1号土坑1～3、60区2号土坑1～7出土遺物
P.L.149	Ⅲ区22号トレンチ1、24号トレンチ1、25号トレンチ1～3、26号トレンチ1、27号トレンチ1、28号トレンチ1、Ⅳ区9号建物1～18出土遺物
P.L.150	Ⅳ区9号建物出土遺物19～28
P.L.151	Ⅳ区9号建物出土遺物29
P.L.152	Ⅳ区9号建物出土遺物30
P.L.153	Ⅳ区9号建物出土遺物31～40
P.L.154	Ⅳ区9号建物出土遺物41～48
P.L.155	Ⅳ区9号建物出土遺物49～65
P.L.156	Ⅳ区4号屋敷跡下1～14、10号建物44～53出土遺物
P.L.157	Ⅳ区10号建物出土遺物54～63・65

P.L.158	Ⅳ区10号建物出土遺物64・66～68
P.L.159	Ⅳ区10号建物出土遺物69～142
P.L.160	Ⅳ区10号建物出土遺物143～146
P.L.161	Ⅳ区10号建物出土遺物147～150
P.L.162	Ⅳ区10号建物出土遺物151～163
P.L.163	Ⅳ区10号建物出土遺物164～173
P.L.164	Ⅳ区10号建物出土遺物174～189
P.L.165	Ⅳ区5号屋敷跡1号炉1・2、5号屋敷跡下1～6出土遺物
P.L.166	Ⅳ区5号屋敷跡1号施設出土遺物1～3
P.L.167	Ⅳ区5号屋敷跡1号施設4、2号施設1・2、11号建物1～17出土遺物
P.L.168	Ⅳ区11号建物18～26、6号屋敷跡1出土遺物
P.L.169	Ⅳ区13号建物出土遺物1～34
P.L.170	Ⅳ区13号建物出土遺物35～46
P.L.171	Ⅳ区13号建物出土遺物47～63
P.L.172	Ⅳ区13号建物出土遺物64～74
P.L.173	Ⅳ区13号建物出土遺物75～92
P.L.174	Ⅳ区13号建物出土遺物93～105
P.L.175	Ⅳ区13号建物出土遺物106～117
P.L.176	Ⅳ区13号建物出土遺物118～127
P.L.177	Ⅳ区13号建物出土遺物128～150
P.L.178	Ⅳ区13号建物151～156、14号建物1～22出土遺物
P.L.179	Ⅳ区14号建物出土遺物23～33
P.L.180	Ⅳ区8号石垣1・2、5号道1・2、7号屋敷跡1～3、16号畑1～6出土遺物
P.L.181	Ⅳ区道橋外1、道橋外1～8、1区(縄文)1～34出土遺物
P.L.182	1区出土遺物(縄文)35～76
P.L.183	Ⅱ区1～5、Ⅲ区1～35、Ⅳ区1・2出土遺物(縄文)

表目次

表1	東宮道跡調査経過	2・3
表2	川原畑村石高表	13
表3	川原畑村人口推移表	13
表4	周辺道跡一覧表	18・19
表5	東宮道跡1区道橋一覧表	22

表6	東宮道跡Ⅱ区道橋一覧表	201
表7	東宮道跡Ⅲ区道橋一覧表	225
表8	東宮道跡Ⅳ区道橋一覧表	233
表9	東宮道跡出土縄文土器総量一覧表	316

第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

吾妻川は、その源を群馬・長野県境の烏居峠に発し、浅間山・草津白根山の中間を東流して万座川・熊川・白砂川等の支流を合わせ、途中、吾妻峽と称される美観をつくりながら、さらに温川・四万川・名久田川等の支流を合わせ、渋川市付近で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。

ハッ場ダムは、その吾妻川の中流に建設される、①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③都市用水の補給(水道用水・工業用水)などを目的とする多目的ダムで、天端標高586m、堤高131m、流域面積3.04km²、総貯水容量1.075億m³の規模を測る重力式コンクリートダムである。ダム位置は、左岸が群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字ハッ場、右岸が大字川原湯字金花山にあり、名勝「吾妻峽」の入口部付近にあたる。

ハッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年5月に調査着手後、平成4年7月、「ハッ場ダム建設事業に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結されることによって本格着工となった。

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関しては、平成6年3月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と受託者である群馬県教育委員会教育長とが年度区分ごとに発掘調査受委託契約を締結のうえ、以後発掘調査が実施されることが決定したのである。

この協定を踏まえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年4月1日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の間で、「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書(第1回変更)」が締結され、発掘調査受委託契約についての変更が行われた。これにより、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長へ変更となり、現在の調査体制に至っている。

また、平成17年4月1日、同協定書(第2回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が、「平成18年3月31日」から「平成23年3月31日」まで延長され、さらに、平成20年3月31日、同協定書(第3回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成28年3月31日」まで延長された。

東宮遺跡は長野原町大字川原畑字東宮地内に所在する。これまで、平成7年度(平成7年12月4日～12月22日、平成8年2月22日～3月7日)及び平成9年度(平成9年8月18日～8月29日)の2カ年度にわたって、工所用進入路(川原畑進入路)建設及び町道付け替えに伴い、発掘調査が実施されてきた。調査の結果、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物(以下、「天明泥流」と略す)に埋没した畑跡が3地点において検出され、新発見の遺跡となった。『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』2002群埋文303集により、既に報告済みである。

その後、ハッ場ダム建設工事の進展に伴い、これまで実施されてこなかったダム水没予定地域の埋蔵文化財調査が着手されることになり、東宮遺跡は、その先がけとして、発掘調査対象遺跡に選定された。

まず、平成18年5月12日、群馬県教育委員会文化財保護課により、東宮遺跡東部分について試掘・確認調査が実施され、結果、事業地内の一部で、天明泥流に埋没した畑跡の分布が確認された。次に、平成18年9月21・22日、同課により、遺跡西部分についても、試掘・確認調査が実施され、天明泥流に埋没した屋敷跡及び畑跡の分布が各2地点で確認された。どちらの試掘・確認調査の結果からも、本格的な発掘調査の必要があるとの判断に至った。

第1章 調査の方法と経過

その後、平成19年5月25日付け群埋八第34-1号で文化財保護法第92条を届出し、本格的な発掘調査が、平成19年11月1日に開始された。

第2節 調査の方針・方法・経過

1 調査の方針

東宮遺跡では、平成18年9月に実施された群馬県教育委員会文化財保護課の試掘・確認調査の結果から、天明泥流に埋没した屋敷跡の存在が2地点において確認されていた。その1地点は発掘調査が実施された「1号屋敷跡」であり、もう1地点は4号屋敷跡の西側に隣接する地点で、未調査である(平成24年3月末時点)。

確認された各屋敷跡は、平面距離で約50mの範囲内で検出されていることから、ハッ場ダム建設に関わる長野原町大字5地区においては、これまでに発掘調査例のない、近世集落主体部(当時の「川原畑村」)に関わる調査となることが予想された。

また、調査原因が、ダム水没予定地域の発掘調査であることから、以後、調査範囲が、遺跡全体もしくは新発見の遺跡をも含めて、川原畑地区全体へ広範囲に拡大していくことも予想できた。

そこで、以上の経緯を踏まえた上で、調査方針は、「集落の構成要素である遺構(屋敷・畑・水田・道など)を精査し、記録保存を実施するとともに、集落の全体像(景観)を明らかにすること」とした。

2 調査の方法

東宮遺跡は、主に、吾妻川中位河岸段丘面上に立地し、厚さ50cm～1.5mの天明泥流に被覆されている。

調査は、まず、バックホーを使用することにより、天明泥流の除去作業から始めた。その後、発掘作業員を導入し、ジョレンや移植ゴテ等による遺構の検出作業、並びにトレンチ掘削や截ち割り作業等により、遺構調査を実施した。

遺物取り上げについては、地点別取り上げを基本とし、分布範囲の地点的な集約を想定した4mグリッド一括取り上げを適宜行った。

遺構平面測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル平板測量を基本として、縮率1/10・1/20・1/40を基準に、縮率を適宜選択して実施した。

遺構断面測量も平面測量に準じた。

遺構写真については、委託業者による航空写真撮影(ラジコンヘリ使用)、現場担当者による地上写真、並びに高所作業車使用による高所写真撮影を行った。現場担当者による撮影には、デジタルカメラ(Canon EOS Kiss Digital N)と6×7版モノクロネガフィルムを使用した。

3 調査の経過

東宮遺跡の調査は、平成19年11月1日に開始され、第一次調査(平成19年11月1日～12月26日)、第二次調査(平成20年4月1日～12月26日)、第三次調査(平成21年7月1日～12月26日※8月と11月は発掘調査中断)が実施されてきた。発掘調査期間内の個別遺構調査進行状況については、「表1 東宮遺跡調査経過」の通りである。

第一次調査では、I区において、1号屋敷跡及び2号屋敷跡の検出作業を実施し、1～7号畑、1・2号溝、3号石垣、1号井戸、51区1号集石、1号被熱岩などの調査を実施した。

1号屋敷跡及び2号屋敷跡については、天明泥流除去作業の進行とともに、建物の床板面より下部の建築部材等が原位置を保ったままの状態でも腐蝕せずに、極めて良好に、そして大量に遺存していることが判明してきた。また、木製の遺物(下駄・膳・漆椀・曲物・箱等)やその他の脆弱な遺物(草履・種実・線香等)も同様に、多量に遺存していることも判明した。そこで、1・2号屋敷跡については、12月末までの調査終了は困難であるとの判断により、精査は次年度4月からの調査へ見送られることとなった。

検出された1・2号屋敷跡は、建築部材及び木製遺物等の冬季凍結を防止するため、ブルーシート及び厚さ約20～30cmの土で全面的に被覆され、越冬することになった。

第二次調査では、I区において、前年度に既に検出されていた1・2号屋敷跡の調査と、2・7号溝などの検出及び調査を実施した。そして、調査区の拡張に伴い、II区では、3号屋敷跡と8・17・19号畑の検出と調査、

Ⅲ区では、10・13・14・15・22・23・24・25号畑、3号道、5号石垣、59区1～6号土坑、60区1・2号土坑、59区1～8号ピットの検出と調査を実施した。さらに、Ⅳ区では、4号屋敷跡と6号道(旧道)を検出して調査し、また、5・6・7号屋敷跡を検出したが、調査未了により、次年度への継続調査となった。

第三次調査では、Ⅳ区において、5・6・7号屋敷跡などの調査を再開したが、他遺跡の発掘調査が急務となったため、調査終了には至らず、ブルーシート及び厚さ約20～30cmの土により当該遺構を全面的に被覆し、平成22年度以降の継続調査対象区域となって現在に至る。

第3節 調査区の概要

1 調査区の設定

平成6年度から始まったハツ場ダム建設に伴う発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて、「ハツ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。以下、本報告書でもそれに準拠し、必要部分について掲載する。

調査における遺跡番号は、ハツ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区(1:川原畑、2:川原湯、3:横壁、4:林、5:長野原)、東吾妻町の大字3地区(6:三島、7:大柏木、8:松谷)に番号を付し、ハツ場ダムの略号(YD)に続ける。ハイフン以下は各地区内に所在する遺跡に対して調査順に通し番号を付し、遺跡番号とする。東宮遺跡は「YD 1-02」である。

基準座標は、国家座標(2002年4月改正以前の日本測地系)に基づく平面直角座標第IX系(日本測地系)を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点(座標値 $X=58000.0$ 、 $Y=97000.0$)とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。本遺跡はこのNo.42に所在する。さらに、1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。

「区」の100m方眼は、さらに4m方眼で625区画に分割され、その4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを、南北には1～25までの算用数字を用いながら、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

また、遺構図や本文中の記載において、特に混乱が予想されない場合は地区番号を略して用いている。

2 調査前の状況

I区は、南側の町道1-5号線、西側から北側にかけての町道1-11号線(旧道)、東側の町道1-4号線により区画された調査区を呼称する。

I区には、5年ほど前まで1軒の住宅が存在した。出土した2号屋敷跡の直上の現地表面である。居住するとともに土地の所有者であった篠原家は、時期は確定できないながら、以前は野口姓を名乗っており、ある時点で同地区内の篠原家と姓を交換し現在に至るといえる。この篠原家(江戸時代当時は野口家)は、郷土の偉人である野口円心(1726～1806)の生家とも伝わる家系である。

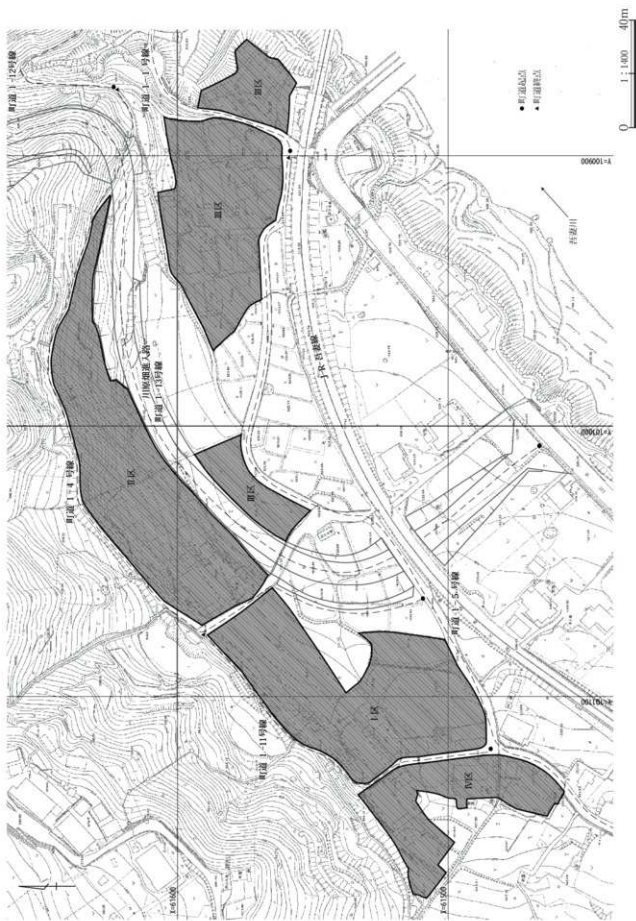
また、1号屋敷跡の直上の現地表面は、土地を所有していた野口家では「ヤシキアト」あるいは「ヤシキタンボ」と呼ばれる湿地(昭和以降、比較的水はけの良い南部分は水田に造成したという)となっていた。一方、水はけの悪い北部分は常に沼地状となっており、防火用水池として利用された時期もあったという。

また、2号屋敷跡直上には、地区上水道本管が東西方向に埋設されている。

天明泥流の堆積状況について、1号屋敷跡は厚さ100～110cm、2号屋敷跡は80～130cm、2～4号畑、1号道、1号井戸は50～120cmの表土及び天明泥流堆積物により被覆されていた。ただし、1号石垣については、その上端部約30cmが、4号石垣については、その上半部約130～140cmが泥流に埋没していない状況で現地表面に露出していた。また、2～4号畑は緩やかな南向きの傾斜面に造成されており、段丘崖へ向かって泥流の堆積厚は漸次薄くなる傾向が認められた。

II区は、西側と北側は町道1-4号線(北側は旧道に相当する)と南側の1-13号線(工事用進入路)に区画された調査区を呼称する。

II区にも5年ほど前まで1軒の住宅が存在した。出土



第1図 東宮遺跡調査区全体図



1号屋敷跡調査前状況① 南西→



3号屋敷跡調査前状況 南→



1号屋敷跡調査前状況② 南東→



7号屋敷跡調査前状況 東→

した3号屋敷跡の直上の現地表面である。居住するとともに土地所有者であった野口家は、当該地域では「東の家(ヒガシンチ)」と呼ばれる東宮地区を代表する旧家のひとつで、天明泥流被災に関わるいくつかの伝承も残る家系である。

また、Ⅱ区の北側の境界は、町道1-4号線(旧道)を挟んで三ッ堂跡(平成21年3月移転)と隣接する。この旧三ッ堂には、「浅間押のときは耶馬溪に水がつかえて三ッ堂の石段(19段)の下から3段目のところまで水がのった」という伝承がある(群埋文319集)。今回の発掘調査では、町道1-4号線及び旧三ッ堂石段は調査区外であったが、その直下の傾斜面までは調査の対象となった。

天明泥流の堆積状況について、3号屋敷跡は、厚さ50～100cmの表土(盛土)及び天明泥流堆積物に被覆されていた。また、8号畑は厚さ約100cm、17・19号畑は50～80cmの表土及び天明泥流堆積物に被覆されていた。

Ⅲ区は、西側と北側は町道1-13号線(工事用進入路)、東側は松葉沢、南側はJ R吾妻線に区画された調査区を呼称する。

Ⅲ区は、東宮地区の東部の現況集落部(「東沢地区」と地元では俗称する)に相当するため、近年まで8～9軒の住宅が存在していた。既に全ての住宅の移転は終了しているが、住宅のコンクリート基礎及び地中に埋設された上水道管は現存しており、重機による表土及び泥流除去作業には慎重さが求められることが予想できた。

また、13・22・24号畑直上には、地区上水道本管が北西から南東方向に埋設されている。

天明泥流の堆積状況については、全体的に厚さ約1m前後の表土及び天明泥流堆積物に被覆されていた。ただし、段丘崖へ向かって天明泥流の堆積厚が漸次薄くなる傾向が認められるとともに、23号畑を被覆する表土及び天明泥流堆積物は削平によるためか堆積厚は比較的薄かった。

Ⅳ区は、西側は境沢(東宮地区と西宮地区との境界)、南側は町道1-5号線(旧道)、東側は1-11号線(旧道)に区画された調査区を呼称する。

Ⅳ区は、東宮地区の西部の現況集落部に相当するため、近年まで、5～6軒の住宅が存在していた。うち、5号



I区調査前状況 南西→



IV区調査前状況① 東→



II・III区調査前状況 南西→



IV区調査前状況② 北東→

屋敷跡直上の住宅は平成20年夏まで存在しており、移転解体直後、秋から発掘調査対象地となった。

天明泥流の堆積状況については、全体的に厚さ約1m前後の表土及び天明泥流堆積物に被覆されていた。ただし、段丘崖へ向かって天明泥流の堆積厚が漸次薄くなる傾向が認められる。それとともに、7号屋敷跡については、現況住宅造成のための削平の影響も考えられ、堆積厚は50～70cm程度である。

3 基本土層

東宮遺跡は、吾妻川中位河岸段丘面上に立地し、最上位段丘面との境界を形成する段丘崖により、北側の遺跡範囲は区画されている。遺跡は全域が天明泥流に被覆されており、その堆積の厚さは平均約1m(50cm～1.5m)である。天明泥流は、比高差約50mに及ぶ段丘崖の中腹まで一時的に水位が達していると考えられ、漸次堆積厚は小さくなる傾向にはあるが、本調査により、標高542.0mのレベルまで、到達点を確認した。天明泥流の発生日時は、天明三年(1783年)7月8日(新暦8月5日)

である。

天明泥流の直下には、浅間A軽石(As-A軽石)が約1cmの厚さで堆積している。As-A軽石降下日時は、新暦7月27～29日とされている(関俊明 2003)。軽石降下日時と泥流発生日時との間には1週間の時間差が存在するため、As-A軽石堆積層は純層に限られることはなく、畑の耕作状況(培土=サクキリ等)や屋敷内(庭など)の清掃・除去状況等の理由により、二次的堆積層も確認されている。

天明三年の遺構面の下層には、黒色土層(部分的に浅間粕川テフラ=As-Ks混入)、さらに、黄色ローム主体の礫層(土砂崩落層)等が堆積しているが、調査区内には湧水(伏流水)が広範囲に多数存在するため、深層までの明確な基本土層の確認には至らなかった。

以下、第2図として東宮遺跡における基本土層模式図を掲載しておく。

参考文献

- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡(1)』
第287集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『ハツ場ダム発掘調査集
成(1)』第303集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『久々戸遺跡・中郷Ⅱ遺
跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』第319集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』
第356集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』第401
集

I	I層：暗褐色土(10YR3/3)。現在の耕作土及び表土。
II	II層：暗褐色土(10YR3/4)。天明三年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流堆積物(天明泥流)。径5～10cm礫15～30%混入する。
III	III層：浅間A軽石(As-A；1783年)。発泡のよい白色軽石。径2～4mm大の軽石が主体。少量ではあるが、径10mm大の同質の軽石を含む。
IV	IV層：黒褐色土(10YR2/2)。粒子細かく、締まり・粘性ともに弱い。部分的に、浅間柏川テフラ(As-Kk；1128年)がブロック状に混入する。
V	V層：黒褐色土(10YR3/2)。粒子細かく、締まり・粘性とも、IV層より強い。白色或いは黄色軽石粒3～5%混入する。
VI	VI層：黄褐色土(10YR5/6)。段丘崖方向からの土砂崩落に伴うと考えられるロームの二次堆積層。径20～30cmの角礫20～30%混入する。

第2図 東宮遺跡基本土層

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

長野原町は群馬県北西部、吾妻郡の南西隅に位置する。町域の北部を吾妻川が東流し、川を挟んで北西には草津白根山、南西には浅間山が位置する。また東部には、吾妻川より北側に高間山(1342m)や王城山(1123m)、南側に丸岩(1124m)や菅峰(1474m)、浅間隠山(1757m)、鼻曲山などが南北に連なる。長野原町は、その地形の特徴から、高間及び白根の両山系と菅峰に挟まれた吾妻川流域地帯の北部と浅間高原地帯の南部とに大別される。

吾妻川は、長野県境の鳥居峠(1362m)付近に水源を発して東流し、町域のほぼ中央では川幅をやや広くするものの、東端では第3紀層を刻んで吾妻渓谷を形成している。その支流は、両岸の山地から発する河川や溪流が多く、左岸には草津白根山麓から発する万座川や赤川、遅沢川、上信越国境の白砂山麓から発する白砂川などが南流する。また右岸には、浅間山麓から発する小宿川や、鼻曲山麓から発する熊川などが北流する。流長76.2kmの吾妻川は、渋川市街地付近で、全長322kmの利根川に合流する。

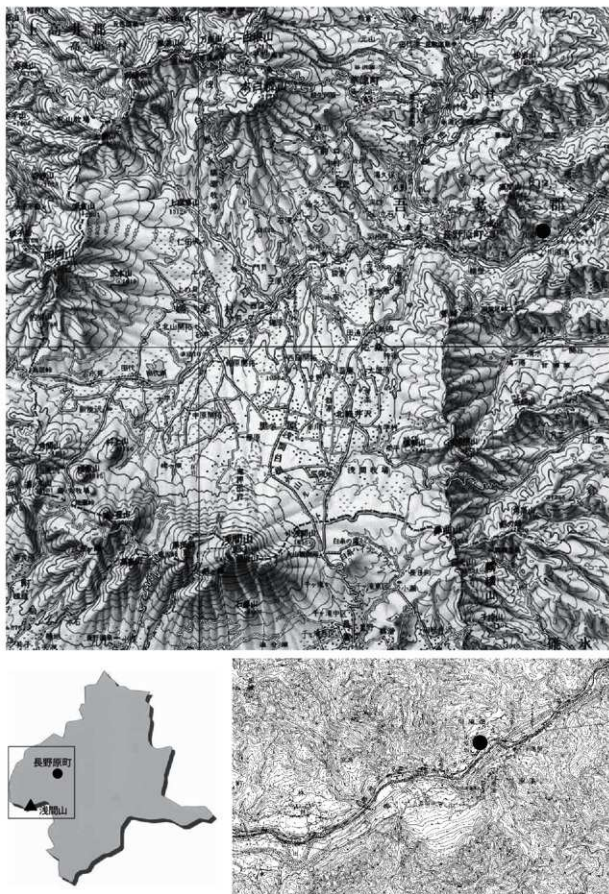
長野原町は、地質構造上では那須火山帯と富士火山帯が接する付近にあるため、周囲の山地は火山活動により形成された火山性山地が多く、浅間山や白根山は現在も活動を続ける。高間山や王城山、菅峰も約100～90万年前頃活動していた火山であるが、現在は浸食が進みほとんど原形を止めていない。菅峰火山から流出した溶岩が断層によって独立したものが「丸岩」である。丸岩は南側を除いた三方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、吾妻川方面から望むと巨大な円柱状に見える特徴的な岩峰である。それは、長野原・横壁・林・川原湯・川原畑のハツ場ダム関連の5地区どこからでも望むことができるランドマークとなっている。

吾妻川兩岸には、吾妻川からの比高差を基準に、最上位・上位・中位・下位の4段階の河岸段丘面が形成されている。現在の吾妻川からの平均的な比高差は、最上位段丘で約80～90m、上位段丘で約60～65m、中位段丘

で約30～50m、下位段丘で約10～15mを測る。

長野原町の地質形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の南西部、長野県境に位置し、古い方から黒斑山・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2568mの成層火山である。約2.1万年前の黒斑火山の噴火では、山体崩壊によって「応桑泥流」が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めており、その後の浸食によって吾妻川兩岸に最上位と上位の河岸段丘面が形成されたといわれる。浅間山はその後も多く火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間草津黄色軽石(As-Ypk: 1.3～1.4万年前)の堆積が顕著である。また浅間Bテフラ(As-B: 1108年)や浅間柏川テフラ(As-Kk: 1128年)も平安時代の黒色土中に数cmの厚さで確認できる。さらに天明三年(1783年)の噴火により発生した泥流は下位段丘面や中位段丘面を平均約1mの厚さで覆っている。

本遺跡は、標高約530～540mの吾妻川左岸中位河岸段丘面上の大字川原畑字東宮に所在し、高間山の南東麓に位置する。高間山頂から吾妻川左岸に露出する川原湯岩脈(国指定天然記念物)の方向へは、南に延びる細長い尾根が張り出しており、尾根の東、川原畑地区内を流れる戸倉沢(とくらざわ)・ミヨウガ沢・境沢(さかいざわ)・松葉沢(まつばざわ)・ハツ場沢(やんばざわ)・穴山沢(あなやまざわ)、その支流の鈴沢(すずざわ)と温井沢(ぬくいざわ)等の溪流は、すべて高間山及びこの尾根に源を発している。従って、川原畑地区内の溪流は、源流付近では東流し、中・下流から吾妻川へ流れ込む付近にかけて、次第に南流する傾向がある。本遺跡は、西側の境沢、東側の松葉沢に区画された中位河岸段丘上の平坦地に主として立地している。



第3図 遺跡位置図 (国土地理院1/200,000地形図「長野」平成18年11月1日発行・1/50,000地形図「草津」平成11年1月1日発行を使用)

第2節 歴史的環境

1 川原畑村の概要・変遷

長野原町大字川原畑は、群馬県北西部の高間山南東麓に位置し、その大部分は山林である。集落は吾妻川左岸の河岸段丘面上(中位及び最上位河岸段丘)に存在し、中位段丘面上の集落部を川原畑村下村、最上位段丘面上の集落部を上村と一般に称する。

「河原畑村」の地名は、天正十二年(1584年)と推定される十二月二十五日付の真田昌幸朱印状に見える(『群馬県史・資料編7・中世3』1986所収「渡文書」)。その後、天正十八年(1590年)より沼田藩真田氏の領地となり、天和元年(1681年)真田氏改易後、幕府領となった。江戸時代における川原畑村の石高の推移は「表2 川原畑村石高表」の通りである。

なお、寛文三年(1663年)の石高については、当時の沼田藩5代藩主真田伊賀守信利が、真田松代本家の10万石に対抗するため、表石3万石に対して14万4000石を強引に打ち出し幕府に報告した検地(古検)によるもので、農民の難渋は並大抵のものではなかったとされている。

ここで、寛文検地帳に見える川原畑村の記述を挙げておく。

(表書)

寛文三年

川原畑村 御検地帳

卯ノ九月廿三日

田畑 合三拾六町五反三畝拾五歩

内

上田 七反五畝貳拾歩

白米拾壹石三斗五升

中田 九畝拾四歩

白米壹石貳斗三升壹合

下田 三畝七歩

白米三斗五升六合

下々田 貳畝貳拾六歩

白米貳斗五升八合

上品 拾貳町六反三畝貳拾七歩

白米百五拾壹石六斗六升八合

中品 五町五反八畝貳拾九歩

白米五拾五石八斗九升七合

下品 五町五反九畝八歩

白米四拾四石七斗四升壹合

屋敷 九反六歩

白米拾石八斗貳升四合

高合 三百四拾壹石七斗貳升壹合

内 拾三石壹斗九升五合

田方

三百貳拾八石五斗貳升六合

畠方

右の外落地

中品 壹畝七歩

貳筆

検地役人 小幡四郎兵衛 外三人

一方、貞享二年(1685年)の石高については、前橋藩主酒井忠挙の家老高須準人が、天和元年(1681年)真田信利の領地没収後、再検地(新検)を実施したことによるもので、寛文検地(古検)と比較すると、石高はおよそ半減されている。村々では、以前の真田信利の苛政が厳しかったため、これを「貞享の御助け縄」と呼んだという。

明治時代に入ると、明治5年(1872年)の大小区制期には第20大区第10小区に属し、明治11年(1878年)の郡区町村制に移行すると、林村、横壁村、川原畑村、川原湯村が組み合わされて林村に戸長役場が置かれた。その後、明治17年(1884年)には、戸長配置区域の改正があり、川原畑村外3ヵ村戸長役場として、川原畑村に連合戸長役場が置かれることとなった。さらに、明治22年(1889年)の市町村制の施行により、10ヵ村が合併して長野原町になると、旧来の町村は大字となり、長野原町大字川原畑村と称したが、大正6年(1917年)からは村の呼称がとれ、長野原町大字川原畑となった。

人口・戸数(世帯数)について、明治時代の大字別の明細が分かるものとしては、明治11年と明治22年の二つの記録しかない。それ以後は、5年毎の国勢調査の結果をもとにして、集約すると「表3 川原畑人口推移表」の通りである。



第4図 川原畑村絵図(天保八年) 吾妻川を流下した大明泥流は、旧道にまで及んでいた。上が北。

表2 川原畑村石高表

年号	石高
万治二年(1659)	75石9斗1升6合
寛文三年(1663)	343石8斗6升
貞享二年(1685)	159石9斗1升3合
元禄十五年(1702)	159石9斗1升3合

2 川原畑村と交通

鎌倉時代の建久四年(1193年)、源頼朝三原野狩の往路は、碓氷峠を越え、軽井沢、中軽井沢を経て六里ヶ原を通り、柳路は、狩宿村から万騎峠を越え、関屋(本宿村)に向かったと伝承されている。

また、戦国時代になり、永禄六年(1563年)、長野原合戦の際の、岩櫃軍の長野原城への侵攻路をみても、天険を越え大城山(王城山)へ駆け上った道や暮坂峠を越え湯窪(湯久保)へ、または火打花を経て長野原へと入る道があったとされている。

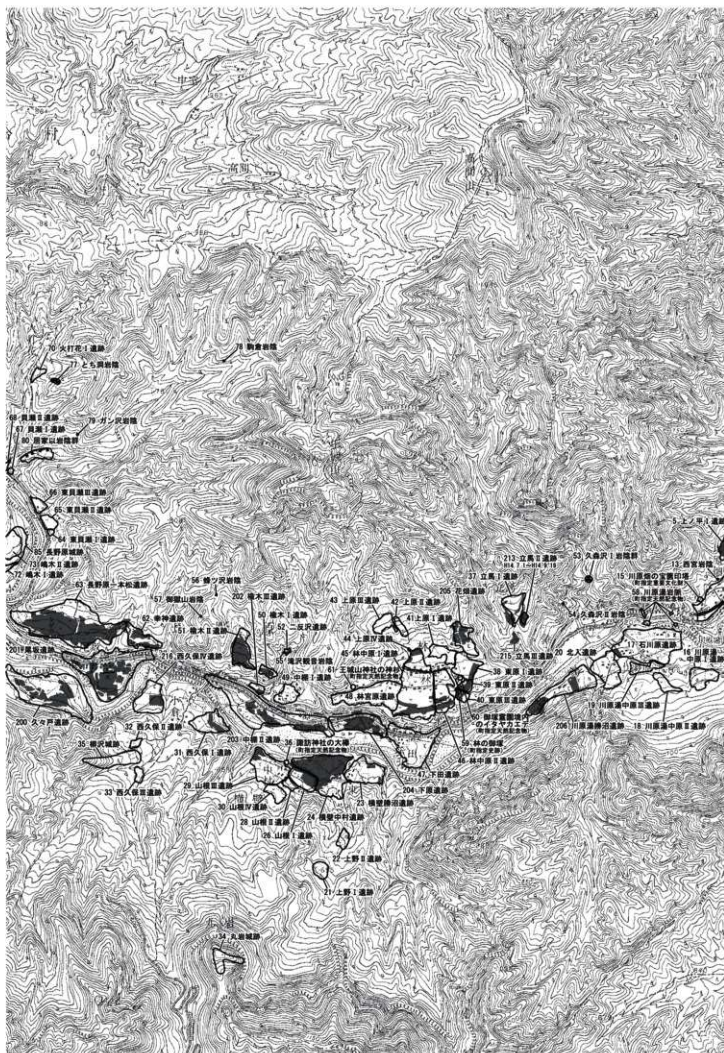
さらに、この時代からは、霊湯草津温泉への浴客の往来も始まり、江戸時代初期には川原湯温泉に浴するもの

表3 川原畑人口推移表

年号	世帯数	人口	備考
明治11年(1878)	37	172	
明治22年(1889)	35	206	長野原町成立
昭和19年(1944)	64	287	うち疎開戸数4
昭和26年(1951)	75	359	
昭和30年(1955)	69	315	
昭和35年(1960)	66	296	
昭和45年(1970)	75	316	
昭和50年(1975)	78	299	
昭和55年(1980)	79	290	
昭和60年(1985)	80	261	
平成2年(1990)	82	242	
平成7年(1995)	83	239	
平成12年(2000)	80	211	
平成17年(2005)	30	83	

も数多くなったことから、長野原町を通過する中山道裏街道は、相当の交通量があったものと想像できる。

川原畑村の旧道は、天保十四年(1843年)の絵図によれば、川原畑上村・下村を分ける段丘崖の中腹から麓に当



たる部分を東西に走行し、東は旧三ツ堂の石段下を通過して吾妻溪谷(道隆神峠)へ、西は旧諏訪神社の石段下を通過して久森峠へと抜けている(第4図「川原畑村絵図」参照)。当時の川原畑村の集落はこの旧道に沿って東西に細長く形成され、その南側になだらかに広がる日当たりの良い河岸段丘平坦面は畑を中心とした耕作地として利用されていたことが推測できる。

3 川原畑村に残る口伝、伝承

天明三年(1783年)7月8日(新暦8月5日)、浅間山の大量火に伴い発生した泥流(天明泥流)は、吾妻川を流下し、沿岸の村々を呑み込みながら甚大な被害をもたらした。当時の川原畑村(現吾妻郡長野原町大字川原畑)は、地形上、上村と下村の別があったが、天明泥流の流下により下村のほとんどが壊滅した。当時の原町名主富沢久兵衛『浅間記』の記述によれば、村の被害は、「二十一軒流、四人死」とある。

同地に残された口伝や伝承の中には、天明泥流に関わるものもみられた。1号屋敷跡に関連すると思われる口伝や伝承をここで紹介する。

- 「この屋敷では酒造を行っていた。(天明泥流被災時に)大切な酒は馬五頭にかけて逃げた。」
- 「この屋敷のお婆さんは、一度は(天明泥流から)逃げたが、位牌を取りに家に戻った。しかし、何度か往復するうちに最後は流されて死んでしまった。『ゴスケよさらば』と言い残し・・・」
- 「この屋敷は、(天明泥流被災後)同じ場所に規模は小さいながらも屋敷を復興した。その後、屋敷は別の場所へと移転したが、²ヤシキアト₁や²ヤシキタンボ₁の呼び名は残った。」
- 「この屋敷の主は野口喜左衛門という。屋号は²〜(カネ)口(クチ)₁。川を頭に付し²カワカネクチ₁ともいう。」

※第4図「川原畑村絵図」(天保八年)は、所蔵者である高山直行氏に許可を頂き掲載をした。

参考文献

- 群馬県史編さん委員会編 1986『群馬県史』資料編7中世3
- 萩原 進 1963『富永加部安盛哀記』『あがつま史帖』西毛新聞社
- 萩原 進 1986『浅間山天明噴火史料集成』II群馬県文化事業振興会
- 長野原町誌編纂委員会編 1976『長野原町誌』上巻
- 上毛民俗学会編 1987『長野原町の民俗』
- 関 俊明 2006『天明泥流はどう流下したか』『ぐんま史料研究』第24号
- 群馬県立文書館
- 藤原正洋 2008『天明泥流に呑まれた屋敷の謎』『埋文群馬』47号(財)
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団

第2章 遺跡の環境

表4 周辺遺跡一覧表

所在 大字	町道跡 番号	道路名	YD番号	調査年度(●:空堀調査 ○:試掘調査)																		遺構・遺物の時期	備 考
				6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22			
川原畑	208	東宮遺跡	YD1-02		●			●								○	●	●	●	近世	田9を群理文303集(ハッ場2集)で報告 田9・20・21を本書、群理文514集(ハッ場36集)で報告		
川原畑	210	石畑遺跡	YD1-03	○		○	○	●												縄文・弥生・近世	田8・9・10を群理文303集(ハッ場2集)で報告 田0を群理文303集(ハッ場2集)、田16・17を群理文401集(ハッ場13集)で報告		
川原畑	3	三ノ平1遺跡	YD1-04					○												縄文・弥生・平安			
川原畑	11	二社平宮跡						○												不明			
川原畑	4	三ノ平2遺跡	YD1-06																	縄文・平安・中世	田6を群理文401集(ハッ場13集)で報告		
川原畑	5	上ノ平1遺跡	YD1-07						○								●	●		縄文・平安	田8を群理文440集(ハッ場23集)で報告		
川原畑	1	福井1遺跡																		縄文・平安			
川原畑	2	福井2遺跡																		縄文			
川原畑	6	上ノ平2遺跡																		不明			
川原畑	7	西宮遺跡	YD1-08														○			縄文			
川原畑	8	増沢宮跡																		縄文			
川原畑	9	石畑1宮跡																		縄文			
川原畑	10	石畑2宮跡																		不明			
川原畑	12	三ツ堂宮跡																		不明			
川原畑	13	西宮宮跡																		不明			
川原畑	209	二社平遺跡	YD1-05	○		○														縄文・平安・近世	田6・10を群理文303集(ハッ場2集)で報告		
川原畑	16	川原畑中原1遺跡																		縄文			
川原畑	17	石川原遺跡																		縄文			
川原畑	18	川原畑中原2遺跡																		平安			
川原畑	19	川原畑中原3遺跡																		縄文・平安			
川原畑	20	北人遺跡																		縄文			
川原畑	206	川原畑勝沼遺跡	YD2-01					●									●	●		縄文・古墳・平安・近世	田0を群理文303集(ハッ場2集)、田15・16を群理文356集(ハッ場6集)で報告		
川原畑	212	西ノ上遺跡	YD2-02														●			近世	田4を群理文349集(ハッ場4集)で報告		
川原畑	207	金花山西跡																		中世			
川原畑	217	下南原遺跡																	○	中世・近世			
横塚	23	横塚勝沼遺跡	YD3-01	●	●															縄文・弥生・平安・中世・近世	田6・7を群理文303集(ハッ場2集)で報告		
横塚	31	西久保1遺跡	YD3-02					●	●											縄文・弥生・平安・中世・近世	田1・12を群理文303集(ハッ場2集)で報告		
横塚	24	横塚中村遺跡	YD3-03	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	縄文・弥生・平安・中世・近世	天明面を群理文319集(ハッ場3集)、縄文中期住居を群理文355-368-381-406集(ハッ場5・7・10・14集)、土坑を群理文436集(ハッ場20集)、掘立建物・列石等を群理文439集(ハッ場22集)で報告		
横塚	29	山根田遺跡	YD3-04					●									○	●		縄文・弥生・平安・近世	田0を群理文303集(ハッ場2集)、田3・18を群理文429集(ハッ場17集)で報告		
横塚	21	上野1遺跡																		縄文・平安			
横塚	22	上野2遺跡																		平安・近世			
横塚	26	山根1遺跡								●								●	●	平安			
横塚	28	山根2遺跡														○	○	○		平安・近世			
横塚	30	山根3遺跡														○	○	○		縄文・平安			
横塚	32	西久保2遺跡																		平安			
横塚	33	西久保3遺跡																		不明			
横塚	34	丸平地跡																		中世			
横塚	35	横川地跡																		中世			
横塚	216	西久保4遺跡																		近世			
林	47	下田遺跡	YD4-01																○	縄文・近世	田6・7・9を群理文303集(ハッ場2集)で報告		
林	41	上原1遺跡	YD4-03																○	縄文・平安・近世	田0を群理文303集(ハッ場2集)で報告		
林	205	花畑遺跡	YD4-05					●	●	●										縄文・平安	田0～12を群理文303集(ハッ場2集)で報告		
林	202	榎木田遺跡	YD4-06					●												縄文・弥生・平安・中世	田0を群理文303集(ハッ場2集)で報告		
林	203	中瀬2遺跡	YD4-07							●	●	●	●							近世	田1～13を群理文319集(ハッ場3集)、田15を群理文349集(ハッ場4集)で報告		
林	204	下原遺跡	YD4-08							●	●	●	●							古墳・平安・中世・近世	田2・13を群理文389集(ハッ場3集)、田6・17を群理文389集(ハッ場12集)で報告 平安時代・中近世を群理文443集(ハッ場18集)で報告		
林	51	榎木2遺跡	YD4-09															●	●	縄文・平安・中世			
林	52	二反沢遺跡	YD4-10								●									中世・近世	田2を群理文379集(ハッ場9集)で報告		
林	37	立馬1遺跡	YD4-11									○							●	縄文・弥生・平安・中世・近世	田14・17を群理文388集(ハッ場11集)で報告		
林	213	立馬2遺跡	YD4-12															●		縄文・弥生・平安	田4を群理文375集(ハッ場8集)で報告		
林	44	上原4遺跡	YD4-13																●	縄文	田5を群理文429集(ハッ場17集)で報告		

第2章 遺跡の環境

財団法人 第441集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2008『長野一本松遺跡(4)』
財団法人 第461集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009『長野一本松遺跡(5)』
財団法人 462集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009『横壁中村遺跡(8)』第
財団法人 466集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009『横壁中村遺跡(9)』第
財団法人 471集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009『上郷岡原遺跡(3)』第
財団法人 488集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2010『横壁中村遺跡(10)』第
財団法人 492集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2010『横壁中村遺跡(11)』第
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2000『年報19』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2001『年報20』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2002『年報21』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2003『年報22』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2004『年報23』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2005『年報24』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2006『年報25』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2007『年報26』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2008『年報27』
財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009『年報28』

第3章 発見された遺物

東宮遺跡は、多様な遺物が数多く出土し、また脆弱な遺物さえも良好に遺存するなど、特異な出土様相を呈している。これらの遺物は、湧水による影響や被覆する表土及び天明泥流堆積物の保水性及び保湿性が高いことなど、多くの偶然が重なり良好に遺存したものである。

出土遺物は多様で、陶磁器や金属器、石製品のほかに、漆製品や木製品などが数多く出土している。遺物の中には、加工時の痕跡や使用時の痕跡、欠損部を補修した補修痕跡までもが確認された。これら多様なそして多量の出土遺物は、天明三年新暦8月5日（以下日付は新暦で表記する）の泥流堆積物で被覆されており、天明三年という時期と東宮遺跡出土という地域が限定できる貴重な遺物群ともいえる。

東宮遺跡の屋敷跡は、傾斜地を平坦に整地し、屋敷境に石垣と溝を設け屋敷敷囲としていた。本遺跡を被覆する天明泥流の様相から、この屋敷境の石垣を乗り越え、多くの遺物が混在することは考えにくい。東宮遺跡を被覆する天明泥流の様相については、第4章第1節1「東宮遺跡を被覆する天明泥流と遺物出土状況」に後述するが、少なくとも屋敷跡ごとに出土遺物は帰属され、天明三年8月5日を、極めて良好に遺存しているものと考えている。そのため、各屋敷跡、各建物の違いも確認することができ、当時の村落景観を具体的に描けるほどの出土状況ともいえる。

ただし、1号建物北側の1号倒木付近のように、1号建物と4号建物の遺物が混在していることが考えられる地点もある。そのため、報告する屋敷跡出土遺物の中には、各建物で使用されていたものが多く含まれていることを追記しておく。

本章では、天明泥流で被覆された遺物を、各屋敷跡或いは建物や畑などの遺構ごとに報告する。出土地点の明らかな遺物については、天明泥流により移動した状況も踏まえ、各遺構に帰属させている。具体的には、建物においては雨落ち溝も含めた範囲をおよそ建物の範囲とし、出土遺物をその建物に帰属させている。

東宮遺跡からは、天明三年8月5日の段階で既に埋没していた近世遺構や、それに伴う遺物、各屋敷地の拡張

及び造成に伴い混入した遺物等が出土している。これらは、屋敷の拡張・造成及び建物の増改築の経緯を知る上でも貴重な遺物と考えている。そのため、本報告書の中では、各屋敷跡下出土遺物或いは屋敷跡下より検出された各遺構に帰属させ報告している。

天明三年8月5日の段階で既に埋没していた遺物については、可能な範囲で区分している。具体的には、調査所見と出土位置等から検討して報告している。ただし、出土遺物の中には出土地点を確認することができないものも見られた。これらについては検討することができず、調査所見に従って報告している。また、僅かではあるが攪乱による混入も見られた。報告する遺物の全てを、天明泥流で被覆された天明泥流下とそれ以外に区分できなかったことを追記しておく。

東宮遺跡では、天明泥流で被覆された建物や畑などの遺構から、多くの遺物が出土している。それら近世遺物に混在して、縄文から中世以前の遺物も僅かに出土している。中世遺物については、近世屋敷跡の経緯を知る上で重要と考え、各屋敷跡や畑等で報告している。しかし、縄文土器を中心とする原始・古代の遺物については、天明泥流下で確認された遺構及び出土遺物等を報告した後、本章第5節にて報告する。

本報告書は、東宮遺跡出土の遺物について報告するものである。検出された遺構に関する詳細は、『東宮遺跡（1）—遺構・建築部材編—』（以下『東宮遺跡（1）』と略す）の中で既に報告されている。そのため、本報告書における遺構の記載は、『東宮遺跡（1）』の報告内容を抜粋し、その概要を記すまでに止めている。ただし、その後の整理作業の中で、改めて確認された内容や修正点、及び出土遺物や遺物出土状況を理解する上で必要と思われる内容についてはその限りではない。

報告する遺物は多様であり、加工痕跡や使用痕跡、欠損部の補修痕跡までもが確認された。これらを実測図に表現することを主眼としたため、欠損部の表現については一部割愛し簡略化している。ただし、欠損部を漆継されていた場合や溶接されていた場合はその限りではない。

第3章 発見された遺物

出土した漆製品には透き漆や黒漆、赤色漆が塗布されており、これらは可能な範囲で実測図に表現している。蒔絵を施した漆製品など複雑に塗り分けられたものや、欠損により範囲が判然としないもの等については実測図に漆の表現をしていない。実測図に表現された漆の範囲は、遺物を観察し、使用等により欠損したと判断した箇所についても表現をしている。

その他、実測図に使用した点描等の概要については図中に示した。詳細は、図版及び遺物観察表を参照して頂きたい。

第1節 I区の調査成果

I区では、建物7、畑10(平坦面4)、道1、石垣6、溝7、橋1、集石1、開墾や開墾のために火の熱を利用して岩盤を打ち割った痕跡(被熱岩と呼称)1を確認し、発掘調査を実施した。そのうち、天明泥流下の遺構としては、建物6、畑10(平坦面4)、道1、石垣5、溝2、橋1があり、検出された遺構の大半を占めていた。また、僅かではあるが、被災時には既に廃絶された近世と思われる遺構なども検出されている。

検出された遺構のいくつかは、一般に「屋敷」と呼ばれる、主屋及び付属建物、畑(前菜園)や石垣、溝等により構成される生活単位区画に集成可能であるため、I区では、計2区画の屋敷跡を確認し調査を実施した。1号屋敷跡は、主屋1と付属建物3の計4棟の建物と畑3、石垣2、溝1、道1、橋1で構成され、2号屋敷跡は主屋1と付属建物1の2棟の建物と畑3、石垣2、溝1で構成されている。

天明泥流被災以前の遺構については、建物1、集石1、溝4、被熱岩1を検出した。

天明泥流被災後の遺構については、石垣1、井戸1、溝1、溜池1を検出した。うち、1号石垣は検出当初1号屋敷跡に伴う遺構と考えられたが、精査の結果構築時期は、泥流被災後と判明した。1号溝は天明泥流下の畑である3号畑を切って構築されている。

1 1号屋敷跡

(1) 1号屋敷跡の概要(第6図、PL. 1-1)

1号屋敷跡には屋敷跡北西隅付近に湧水地点があり、

表5 東宮遺跡I区遺構一覧表

帰属時期	遺構名
天明三年以前	8号建物、51区1号集石、2・7・8・9号溝、1号被熱岩、1号焼土、1・2・3・4号床下土坑
天明三年 (泥流下)	1号屋敷跡(1・2・3・4号建物、1・6・9号畑、2・4号石垣、4号溝、1号道、1号橋) 2号屋敷跡(5・6号建物、5・11・12号畑、6・7号石垣、3号溝) 2・3・4・7号畑、3号石垣
天明泥流被災後	1号石垣、1号溜池、1号井戸、1号溝

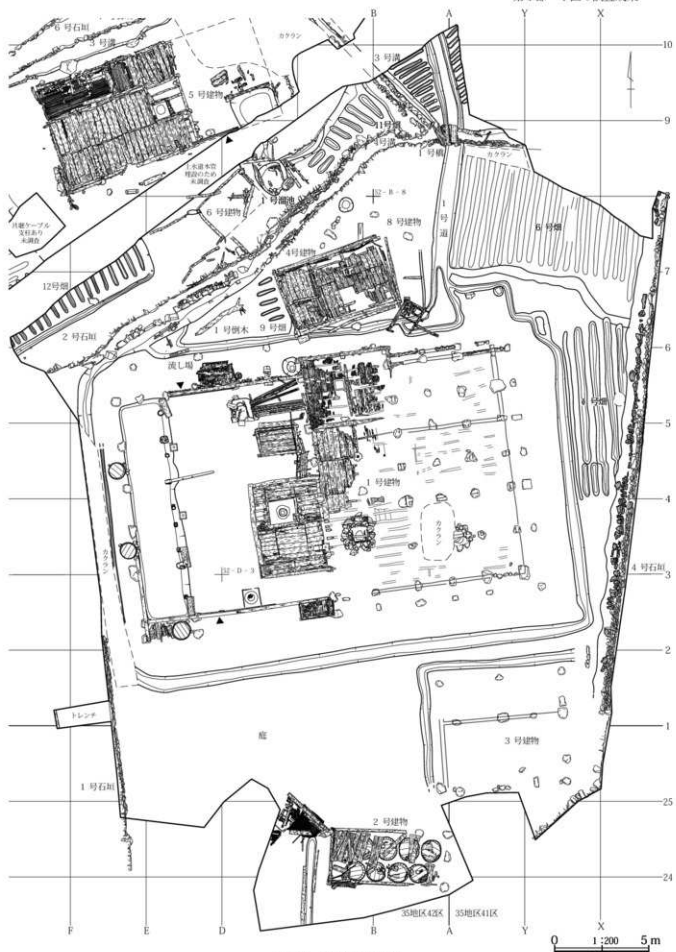
※建物に付属する遺構(囲炉裏、床、唐臼、施設など)、及び畑に付属する遺構(平坦面など)は上記遺構一覧からは省略した。

そのため、西半部では、覆土である天明泥流の保水性及び保湿性が高く、出土する建築部材や木製品、その他、藁や竹、布や紙などを素材とする製品から種実や骨類に至る脆弱な遺物についても数多く出土している。

この遺存度が高い部分の平面的な境界については、1号建物では2号施設と床の間を結ぶやや北東軸ラインより西側。また、4号建物と2号建物も遺存度が高い。保水性及び保湿性の高い泥流により、空気との接触を遮断されているため酸化が防止され、腐蝕の進行が抑制されたものと考えられる。

ただし、遺存度が高い部分についても、被覆する厚さ約1mの天明泥流を断面的に観察すると、天明三年当時の地面から40～50cm上までが限界であり、現地表面へ近づくと従い遺存度は低くなる。従って、出土した遺物についても、およそ床面付近までの遺物の遺存度は高い。これは泥流の特徴によるものであり、また、被覆する泥流が建物の屋根まで到達するものではなく、1mほどの厚さであったため、屋根材や壁材、柱などは被災後抜き取られ、取り除かれたことも考えられる。

1号屋敷跡は、1号建物(主屋)を中心に、南側の庭を挟んで8基の桶が埋設された2号建物、その東側の礎石建物である3号建物、1号建物の北側裏に位置する4号建物の計3棟の付属建物が存在し、合計4棟の建物から構成される。



第6図 1区1号屋敷跡

第3章 発見された遺物

屋敷内には、その他に前菜園と考えられる小規模な畑が東側に2枚(1・6号畑)、北側に1枚(9号畑)存在し、屋敷跡北西隅の湧水地点付近からは屋敷の境界に沿って4号溝が東流する。また、1号建物北東隅から1号井戸へと繋がる道(1号道)があり、4号溝を渡る場所には板を渡した簡易な橋(1号橋)が存在する。

1号屋敷跡の北側の境界については、2号石垣と4号溝の位置や構造を根拠として区画した。しかし、1号井戸とそれに繋がる1号道、また、その周辺の2・3・4号畑についての所有管理状況も、1号屋敷跡に関連し、帰属する可能性があることも追記しておく。

屋敷跡の境界は、北側は2号石垣とそれに沿って東流する4号溝、東側から南東方向に向かっての境界は4号石垣により区画されている。ただし、4号石垣は南側の調査区外(町道1-5号線)へと延長しているため検出不可能であり、また、2号建物の西側部分の現地表面には電柱が立っているため、屋敷跡の南側の境界及び他遺構の存在の様子は不明である。また、4号石垣の北端部も調査区外へと延長しており、2号石垣や4号溝との合流部の状況も不明である。さらに、西側の境界も、1号石垣が天明泥流被災後の構築と判明したため、町道1-11号線にほぼ接する付近まで境界は延びるものと考えられる。町道1-11号線の現地表面より70～80cm下面には、天明三年当時の旧道が泥流下に埋没していると想定されることから、1号屋敷跡との境界は比高差170cm程度の段差を伴うため、石垣が構築された面が補強されている可能性が高い。

1号屋敷跡からは、近世と思われる遺構で、天明泥流に被災した際には既に廃絶されていた遺構が数カ所で検出されている。これらの遺構は、1号屋敷跡の主屋である1号建物とも重複しており、天明泥流に被災するまでの屋敷拡張及び造成過程や、1号建物の増改築の可能性を示す遺構だと考えている。詳細については、第4章第1節5に後述する。

(2) 1号建物(第7～20図、PL. 1-2、2-16-2)

① 1号建物の概要

1号建物は、51区X・Y-2～6、52区A-1～6、B～E-1～5グリッドに位置する。側土台を基準に心々制により計測すると、桁行(東西)20.24m(緑を

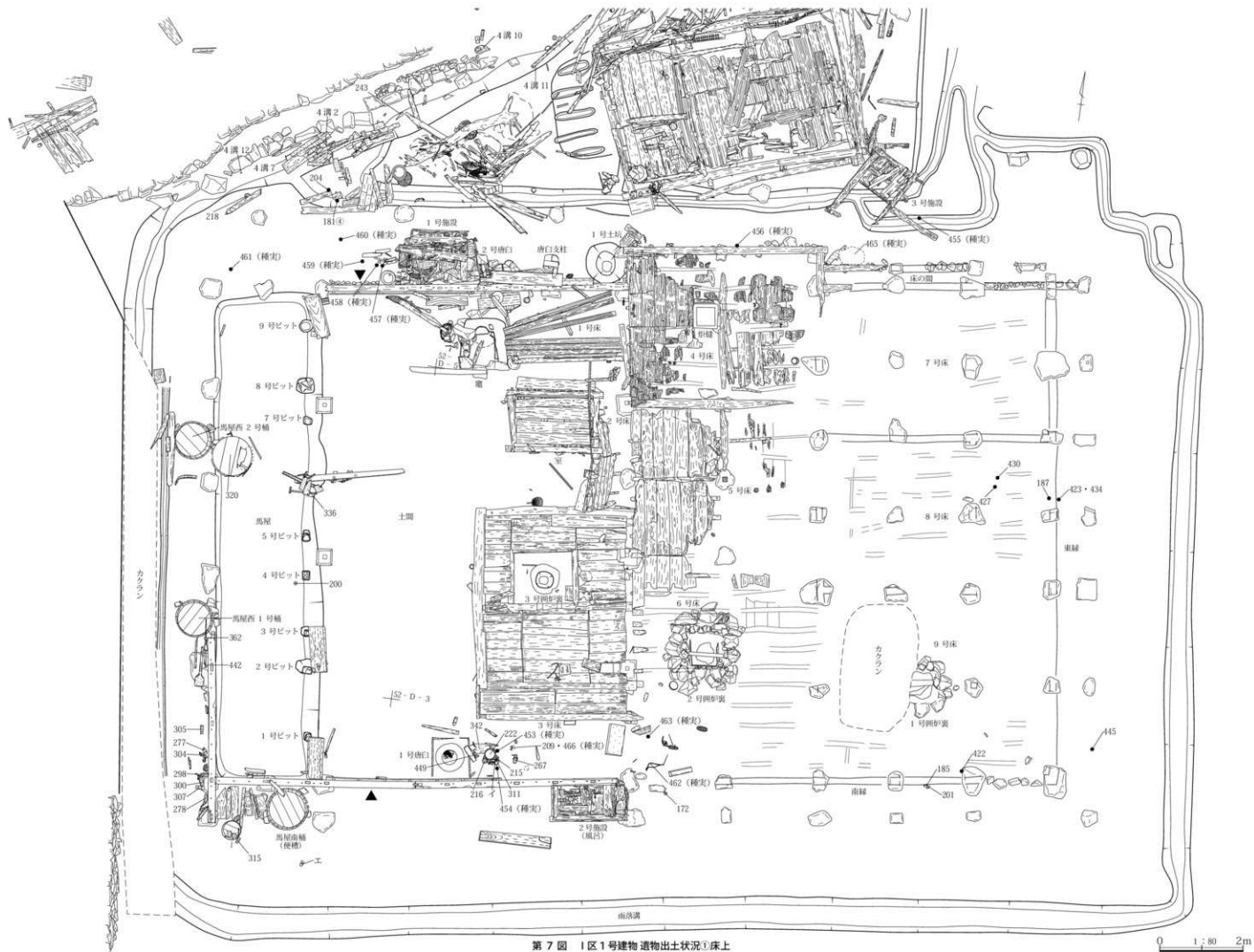
想定した礎石からは21.08m)、梁行(南北)12.8m(緑を想定した礎石及び3号施設を含めると15.9m)の規模を測る。1号建物は、1号屋敷跡の主屋で土台建物である。建物出入口は土間南側に表口、土間北側に裏口が確認できる。建物西半部分には、土間・馬屋・竈・室・囲炉裏が付属する比較的低い床(3号床)などが配置される。一方、東半部分は床部にあたり、3号床より1段床レベルの高い板の間である4・5・6号床や、さらに1段床レベルの高い板の間と考えられる7・8・9号床や床の間などが配置される。

建物の周囲部分については、馬屋の西側、南側に、計3基の桶が埋設され、西側2基の埋設桶は家畜の糞尿の備蓄用、南側1基の埋設桶は便槽と考えられる。また、建物の東側と南側には、約84cmの幅で張出した緑と考えられる下屋構造部が付属する。うち、土間出入口の東脇部分は風呂と考えられ、その使用水は床下の枘から地下に埋設された竹管を通して、馬屋南の便槽桶へ流れ込んで蓄えられていたと考えられている。土間裏口を外側へ出た位置には、下屋の屋根構造を伴うと考えられる流し場、唐臼、また建物北東隅には礎石のみしか遺存しないが、用途不明の引出部が存在する。

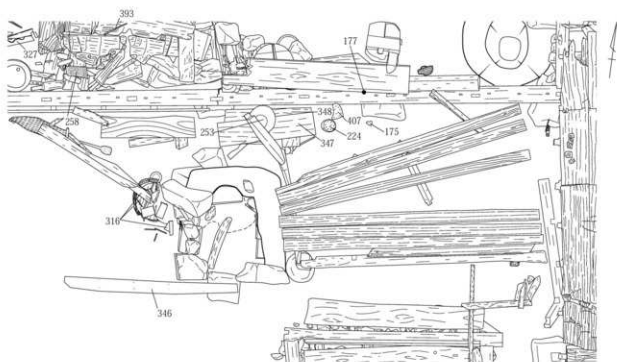
建物の外壁が立ち上がる部分には礎石上に側土台が据えられ、建物の外周を廻ると思われる。建物西半部は保水性及び保湿性により土台は遺存しているが、東半部は乾燥により土台は腐蝕し、土台痕のみが遺存する。また、土台が乗らない礎石上には柱や束が直置きされていたものと考えられる。礎石の石材については、変質安山岩1、石英閃緑岩2、角閃石安山岩2、含角閃石安山岩5で、その他は全て粗粒輝石安山岩であった。

土台は基本的に礎石上に据えられて10～15cm高い場合もあり、土台を水平に据えるため、また、土台底部と地面との間に隙間を生じさせないために、土台の底部に凹部を刻み、礎石の高い部分をはめ込んで処理する工夫も観察できた。同様に、礎石間の地面上に小礫を並べて敷き、直上に土台を据える場面も観察できる。

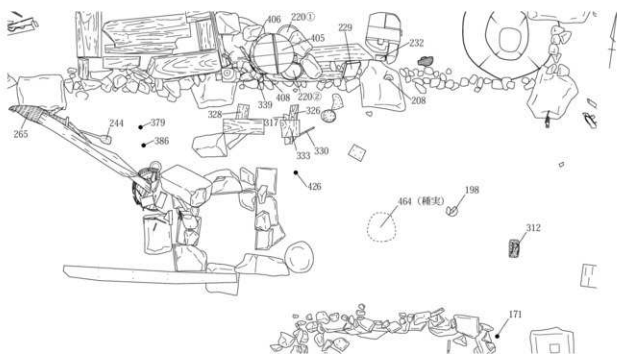
遺存する土台の表面には、柱や小舞と呼ばれる部材が接合したと考えられる枘穴が施されている。小舞は土壁を構成する芯材であることから、1号建物の外壁は土壁で覆われていたと考えられる。一方、土間表口及び裏口



第7図 Ⅰ区1号建物 遺物出土状況①床上



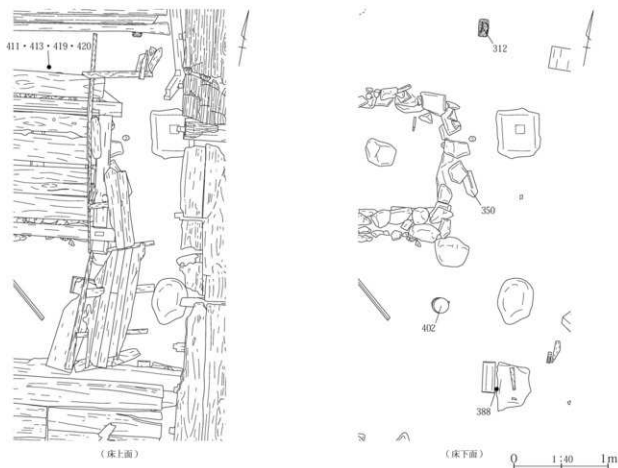
(床上面)



(床下面)

0 1:40 1m

第9図 1区1号建物1号床遺物出土状況



第10図 1区1号建物2号床遺物出土状況

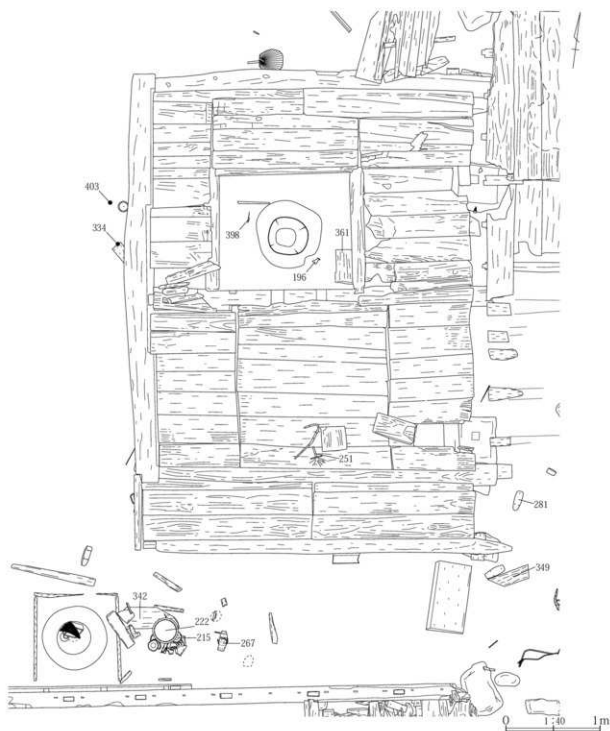
に相当する土台の表面には、小舞の接合する枘穴は存在せず、土台の表面が磨り減り、土台の角が丸くなっている。これは、日常の人の出入りに伴う摩滅によるものと考えられる。また同位置には土間出入口の戸に対応するものと考えられる敷居及び木製のレール状の遺物も付属している。

1号建物の礎石間を心々制により計測すると、4～9号床では大半が約184cmを測った。だが7・8・9号床では東西方向の礎石間の心々寸法が約184cmであったのに対し、4・5・6号床では同じく東西方向が約230cmと明らかに異なることが確認された。同様に、礎石間の心々寸法は南北方向でも異なることが確認できた。7・8号床では、南北方向の礎石間の心々寸法が約184cmであったのに対し、9号床では南北方向の礎石間の心々寸法が約230cmであった。4・5号床では、南北方向の礎石間の心々寸法が約184cmであったのに対し、6号床では礎石間の心々寸法が約276cmと異なっていた。

1号建物を当初よりこの形状で建てようとするならば、礎石間の寸法を複雑に変え、礎石列が食い違うよう

に配置することは考えにくい。1号屋敷跡下からは重複して8号溝が検出されたが、8号溝は、古い段階の1号屋敷跡北西側地境を流れる地境溝と思われる。1号屋敷跡では、天明三年に被災する以前に、敷地を北西側へ拡張する敷地造成が行われていたものと考えている。8号溝と重複する1号建物も、敷地の拡張に伴い建物を西側に増改築されたものと推測される。

1号建物は、建物を増改築した結果、本来土間や馬屋であった場所を板の間などに改変したと思われる。それまで配置された礎石をそのままに板の間に変更したことからは、礎石心々寸法が複雑に混在する結果になったのではないかと推測している。1号建物に使用されている礎石は大規模で、容易に動かすことはできない。また、礎石の配置を変えることは、それまで使用していた大引や根太、その上の構造までも変える必要があるだろう。必要な部分のみを変更しての増改築、この結果、礎石の配置が複雑になったことも想定できよう。礎石心々寸法の詳細と1号屋敷跡の変遷については、『東宮遺跡(1)』及び第4章第1節5を参照して頂きたい。



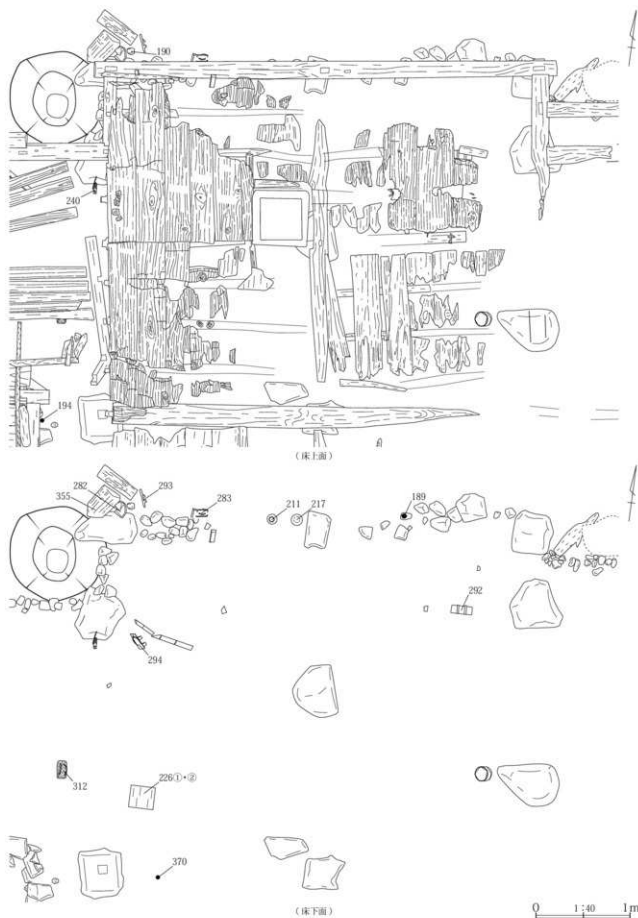
第11図 1区1号建物3号床遺物出土状況①床上

②1号建物遺物出土状況

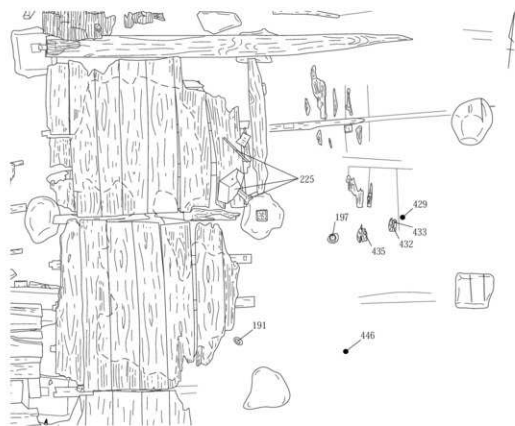
1号建物からは、被覆する天明泥流の保水性及び保湿性の高い建物の北西側を中心に、多様なそして数多くの遺物が出土している。これらの遺物は、被覆する天明泥流により移動したものと推測され、1号床下や3号床下などの土間に近い床下と建物の北側及び建物北側にある1号倒木付近から数多く出土している。

東宮遺跡を被覆する天明泥流は、およそ南東から北西

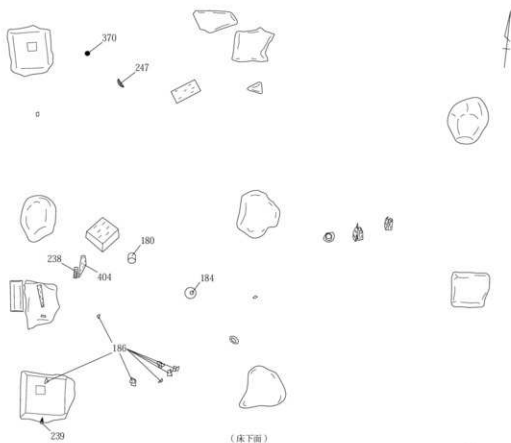
方向に流入し、数回に亘り本遺跡に到達したものと考えられる。当初の天明泥流は、水分を多く含む比較的低くゆるやかな流れであったと思われる、この泥流によって床下に多くの遺物が流れ込んだものと推測している。また当初の天明泥流は、建物南側出入口付近から流入したと思われる、建物の土間付近に脱ぎ置かれていたと推測される下駄や草履等の履物は、3号床などの土間付近にある床下や北側の建物土台付近で堰き止められるように出土して



第13図 1区1号建物4号床遺物出土状況



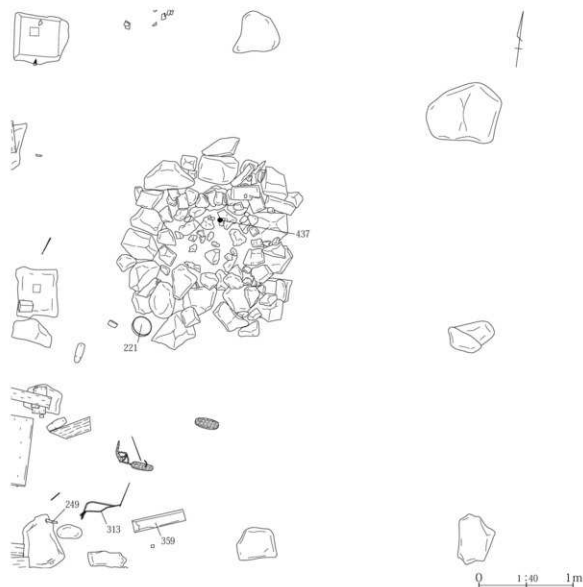
(床上面)



(床下面)

0 1:40 1m

第14図 I区1号建物5号床遺物出土状況



第15図 1区1号建物6号床遺物出土状況

たことも考えられる。

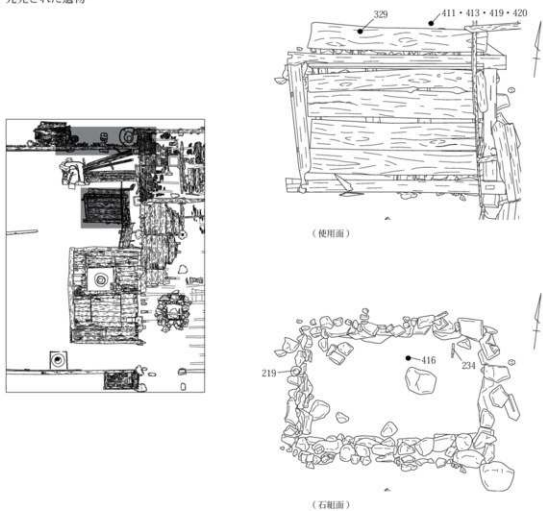
竈北側及び1号床下付近からは、小さな楕円形の空間に多数の蚕蛹が遺存していた。土間付近にあったろう藪が天明泥流により流され、建物北側土台付近で堰き止められたと思われる。出土した蚕蛹については、町田順一氏（元群馬県蚕糸技術センター所長）により、天明期に飼育されていた蚕蛹と同様の特徴を持つことが確認された。詳細は、第4章第2節5を参照して頂きたい。

蚕蛹が多く出土した同地点付近からは、木鉢（1建No.253）が出土した。これは蚕を入れるための木鉢であり、養蚕道具のひとつではないかと考えている。他に出土した木鉢とは形態が異なり、1建No.253の木鉢内面は丸く仕上げられ、内面に漆が塗られていた。これは、木鉢の中に蚕を入れた際、蚕を傷つけないための工夫では

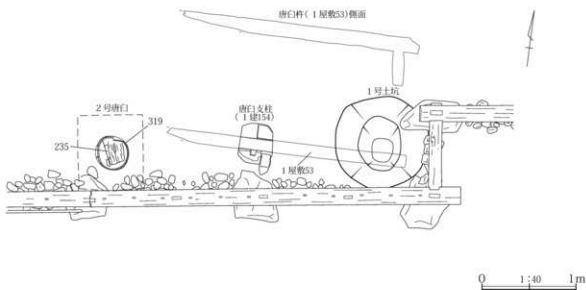
ないかと思われる。同地点付近からは、蚕に寄生するカイコノウジバエの蛹も出土している。これらの出土遺物は、天明期の養蚕の実態を良好に伝える貴重な遺物だと考えている。

【3号床付近】（第11・12図、Pl. 4～8-4）3号床上及び北側からは団扇（1建No.250・251）が出土した。遺存度の違いはあるが、出土した団扇の柄には、ともに肩竹とも呼ばれる一文字状の竹が付き、同じ形態の団扇と考えている。1建No.250の団扇では、紙の一部も遺存していた。僅かに残る色調から、出土した団扇は洗団扇の可能性が高いと思われる。

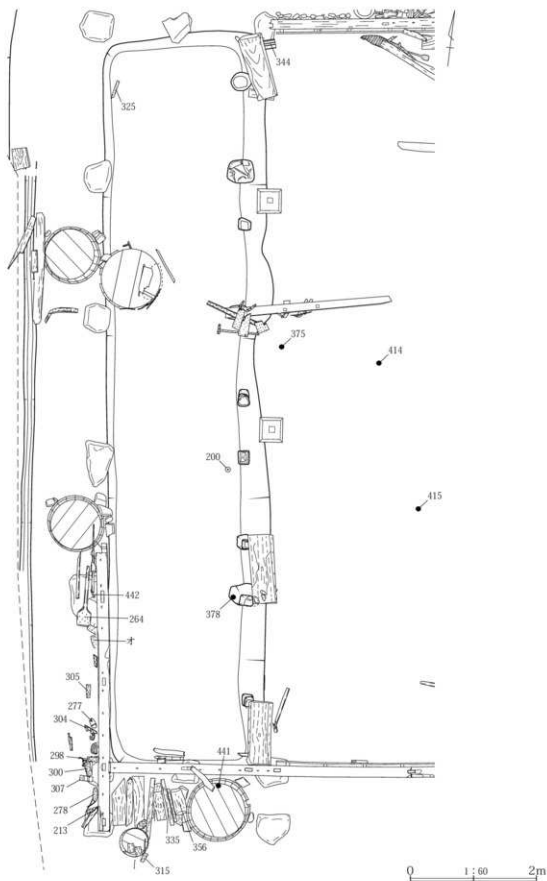
3号床は、床板の下から数多くの遺物が出土している。その大半を占めるのが、下駄や草履等の履物である。3号床はいわゆる「アガリハナ」と思われる。3号床付近



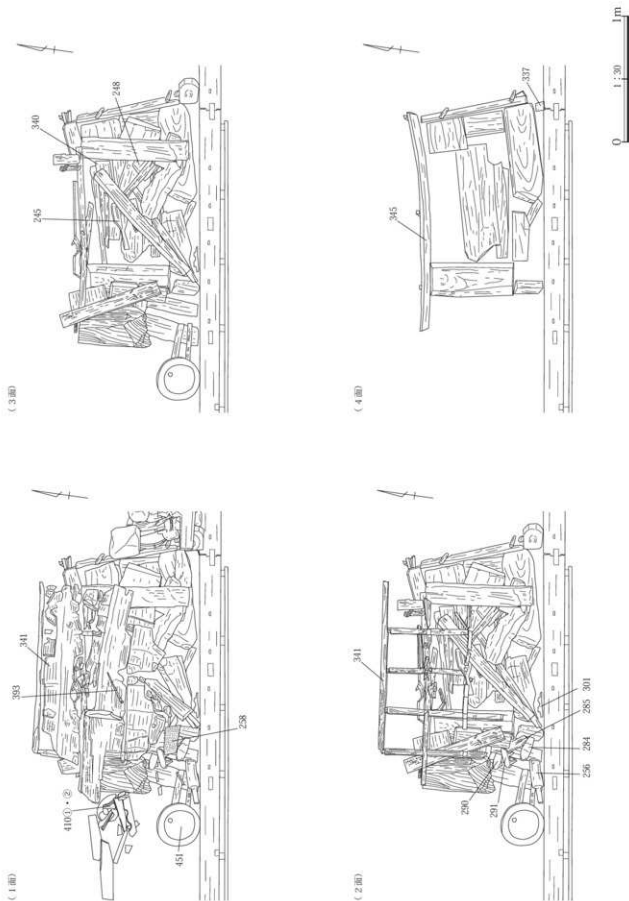
第16図 I区1号建物室内遺物出土状況



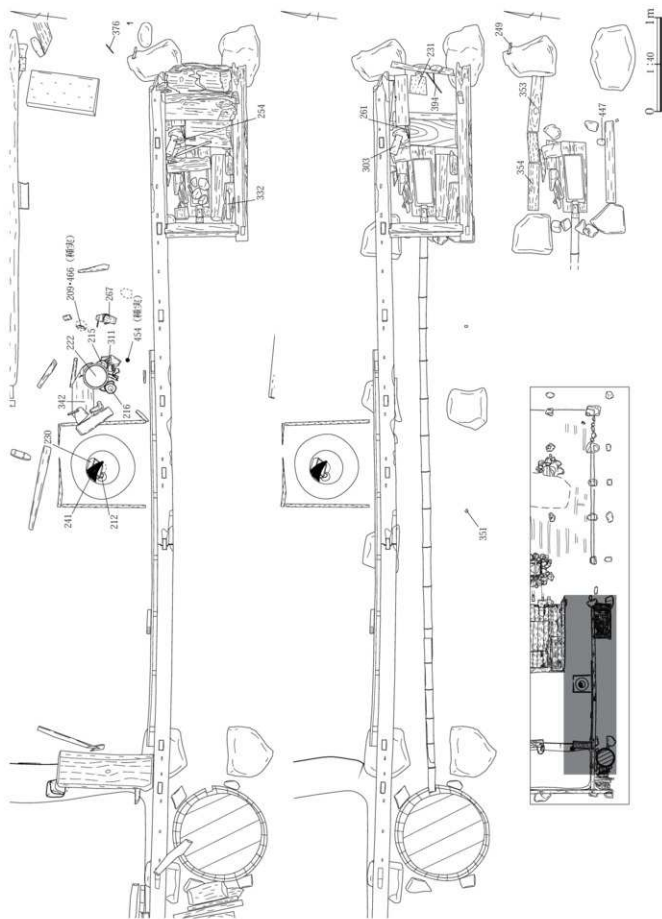
第17図 I区1号建物2号唐白・唐白支柱・1号土坑・唐白柱



第18図 Ⅰ区1号建物 馬屋遺物出土状況



第19図 I区1号建物1号施設遺物出土状況



第20図 1区1号建物 2号施設・馬屋南桶・1号唐臼遺物出土状況

第3章 発見された遺物

で脱ぎ置かれた多くの下駄や草履は、天明泥流が到達した際に押し流され、床下へ移動したのではないかと考えている。

3号床下からは、履物以外にも多くの道具類が出土している。被覆する天明泥流の様相を加味すれば、これらは床下に置かれていたものではなく、近隣の床上か土間、馬屋付近で使用されていた道具類であり、泥流により床下へ流れ込んだものと思われる。

【4・5・6号床】(第13・14・15図、PL. 8-5~10-2) 5号床上からは、木製の行灯(1建No.225)が出土した。同屋敷跡4号建物からは、灯火皿に使用する油を搾った圧搾機(4建No.86)が出土している。これらは、天明期の灯火具事情を知ることのできる貴重な遺物と考えている。

前述の通り、4・5・6号床では、建築部材の遺存状況が東側に行くにつれて悪い。4・5・6号床上及び床下には、より多くの道具類が埋没していた可能性はあるが、腐蝕したためか出土していない。4・5・6号床下では、西側の土間寄りから下駄や草履等が出土している。1号建物における遺物出土状況を見ると、土間出入口付近より流れ込んだと思われる当初の天明泥流は、土間より離れた床下にまで激しく流入してはいないと思われる。4・5・6号床での遺物出土状況を見ても、遺物は激しく移動することなく、比較的良好に当時の様相を遺存しているものと推測している。

【室】(第16図、PL.15-1・2) 室には根太があり、根太上の板は釘で数カ所固定されていた。容易に開閉ができないことから、室ではないと思われる。そのためか、室内から出土した遺物は少なく、1建No.234の刀子程度であった。

【2号唐臼付近】(第17図、PL.14-5~8) 2号唐臼には、底板のない桶(1建No.319)が逆位に据えられていた。唐臼内にある穀物がこぼれ落ちないように、高さを増していたものと推測している。しかし、2号唐臼内には、天明泥流下に比較的厚く黒褐色粘性土の堆積が確認された(『東宮遺跡(1)』参照)。

1号倒木付近から唐臼の杵(1屋敷No.53)が出土している。仮に、杵を唐臼杵の支柱(1建No.154)に据えてみると、杵が2号唐臼方向には向かないことが分かる(第17図参照)。据えられた際の杵の位置やその長さから

も、1号土坑に唐臼があったものと推測している。1号土坑覆土は天明泥流堆積物であった。被災後、唐臼を掘り出し埋め戻したためではないかと考えている。

【馬屋付近】(第18図、PL.12-5~13-6) 馬屋南西側からは、履物や道具類が多数出土した。これらは、被災する以前より屋敷外にあったとも考えられるが、天明泥流の様相や出土遺物に履物等が多いことから、土間や馬屋付近にあったものが泥流で押し流され、建物西側土台付近で堰き止められたのではないかと考えている。

馬屋からは、線香が遺存する色絵香炉(1建No.200)が出土した。香炉には、燃え残った極めて脆弱な線香が、多数灰に刺さった状態で遺存していた。灰の一部は欠損するが良好に遺存しており、香炉が天明泥流で遠く流され移動してきたとは考えにくい。出土地点は、比較的原位置に近いのではないかと考えている。馬屋付近で線香をたく理由については明らかでない。1号建物において香炉が出土した馬屋側は、およそ西南西方向に位置し、建物南西方向には浅間山があることを追記しておく。

馬屋北西から北側の土台は出土していないが、調査所見から後世掘り出されたものと推測している。同様に同位置には遺物も埋没していたと思われるが、この際に廃棄された可能性が考えられる。

【1号施設付近】(第19図、PL.10-3~11) 1号施設では碇等の道具類が出土した。同施設は馬屋や廬付近に位置しており、ここで使用された道具類が混在し出土したものである。対になる下駄(1建No.290・291)が出土したが、調査所見から、流し場で使用するため1号施設付近に置かれていたものと推測している。

1号施設最上からは、板戸状の木製品(1建No.341)が出土した。同施設からは、両面に墨書された板(1建No.248)も出土しているが、ともに用途については明らかでない。

【2号施設(風呂)・1号唐臼付近】(第20図、PL.12-1~4、13-7・8、14-1~4) 2号施設は風呂と考えられる。2号施設からは、円孔のある軽石製品(1建No.447)が出土した。風呂で使用されていた可能性が考えられる。

1建No.249は、両面に墨書された木札である。2号施設付近から出土したが、用途については明らかでない。墨書された「菟左衛門」(助之丞)は、1号建物に関連

する人名とも思われる。

1号唐臼の中には、箒(1建No.241)、杵(1建No.230)、漆椀(1建No.212)が遺存していた。ともに唐臼で使用されていたものと思われる。唐臼東側からは、釘痕の残る板材(1建No.342)が出土した。出土状況や形状から、1号唐臼の蓋ではないかと考えている。当時、箒や杵、漆椀が収まる1号唐臼上には、この木製の蓋がされていたものと推測している。

③1号建物出土遺物

1号建物からは、陶磁器、漆器、木製品、金属製品、石製品など、多様な遺物が良好な遺存状況で数多く出土している。出土した遺物の多くには、製作時の加工痕跡や使用時の使用痕跡、欠損部を補修した補修痕跡までもが良好に遺存していた。これらは、天明泥流により被覆され、使用時のまま埋没した東宮遺跡の特徴をよく表している遺物群だと考えている。

また、被覆する天明泥流の様相から、各屋敷跡の遺物が複雑に混在することは考えにくい。これらは、時代が限定されるとともに、出土地点も原位置に近いものと考えている。1号屋敷跡出土遺物においても、他の屋敷跡の出土遺物と混在することなく、各建物、少なくとも1号屋敷跡には帰属できる遺物だと考えている。

ここでは、1号建物出土遺物の中で特筆すべき遺物について詳述する。線香が遺存した色絵香炉(1建No.200)は馬屋で、口縁部を下にした状態で出土した。線香の詳細については第4章第2節7を参照して頂きたい。同様に染付香炉(1建No.199)にも灰が遺存し、3号床付近より出土した。灰の良好な遺存状況から判断すると、天明泥流で長く移動したとは考えにくく、出土地点付近で使用されていたものと推測される。灰を遺存した筒形香炉は、5号建物でも出土している。5建No.116の香炉は、口縁端部が欠損しており、灰落しとして使用されていたことが考えられる。灰が遺存した香炉は5点出土したが、その全てが線香立てや香炉として使用されたものではなく、その用途は多様であったと考えている。

木製の行灯(1建No.225)は5号床上から出土した。隣接する4号建物床上からは木製の圧搾機(4建No.86)が出土している。圧搾機に残る付着物の成分を分析すると、灯火皿の付着物と同様の成分であることが確認された。このことから、圧搾機は、灯火皿に使用する油を搾

るための道具と考えられる。1号屋敷跡からは、灯火皿や灯火受皿、行灯、圧搾機や油を搾ることが可能な種実など、天明期の灯火具に関連する貴重な道具類が数多く出土している。

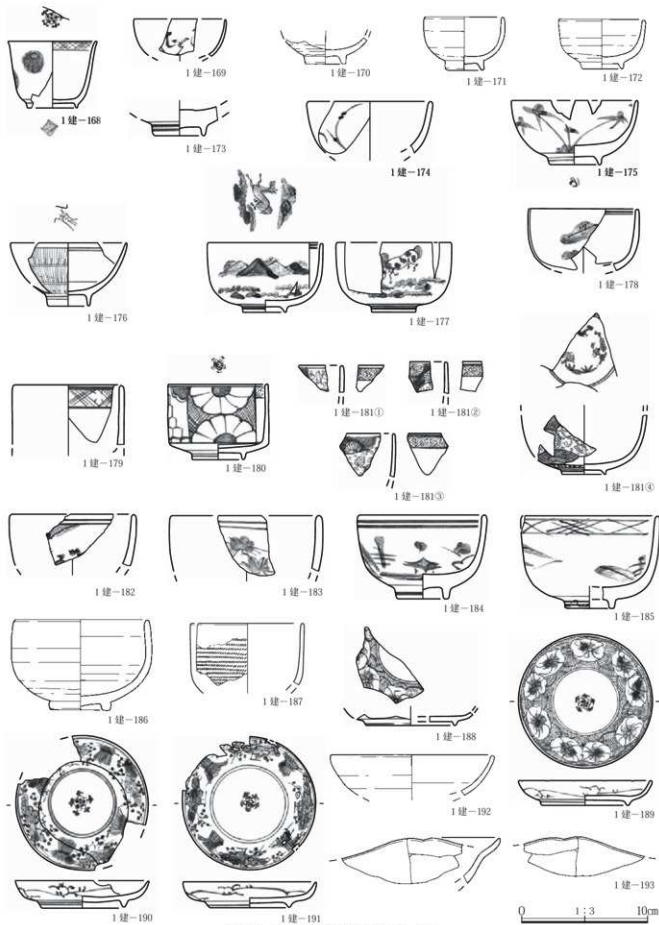
1号建物からは46点と数多くの下駄が出土した。多くは床下、建物北側及び西側の土台付近からまとまって出土している。これらは、当初東宮遺跡に到達した天明泥流により押し流されたものと考えられ、被覆する天明泥流の様相から、他の建物の下駄が混在したとは考えにくい。1号建物からは草履も出土した。腐蝕により朽ちてしまった草履も多いと思われるが、確認された草履と下駄だけでも履物の数は非常に多い。

出土した下駄の中に、屋号のような印が刻まれているものが4点確認された。印の種類は多様で、刻まれた位置も様々であった。下駄に刻まれた印は、下駄の所有者を識別するためのもののだと思われ、少なくとも異なる印の下駄が同一人物のものとは考えにくい。複数の異なる印を刻む下駄が出土したことは、天明泥流で被災する寸前、1号建物にこの建物以外の住人を含む、多くの人々が集まっていた可能性を示唆するものだと考えている。

墨書や刻書された遺物も多く見られた。砥石には、「口(カネ)」に「口(カネクチ)」と「市助」「太郎」などの名前が刻書されていた。墨書された木札にも「崑左衛門」「助之丞」などの名前が見られた。1号建物に関連する人名とも思われる。出土した遺物には、他にも多くの文字が残されていたが、詳細は第4章第3節3を参照して頂きたい。

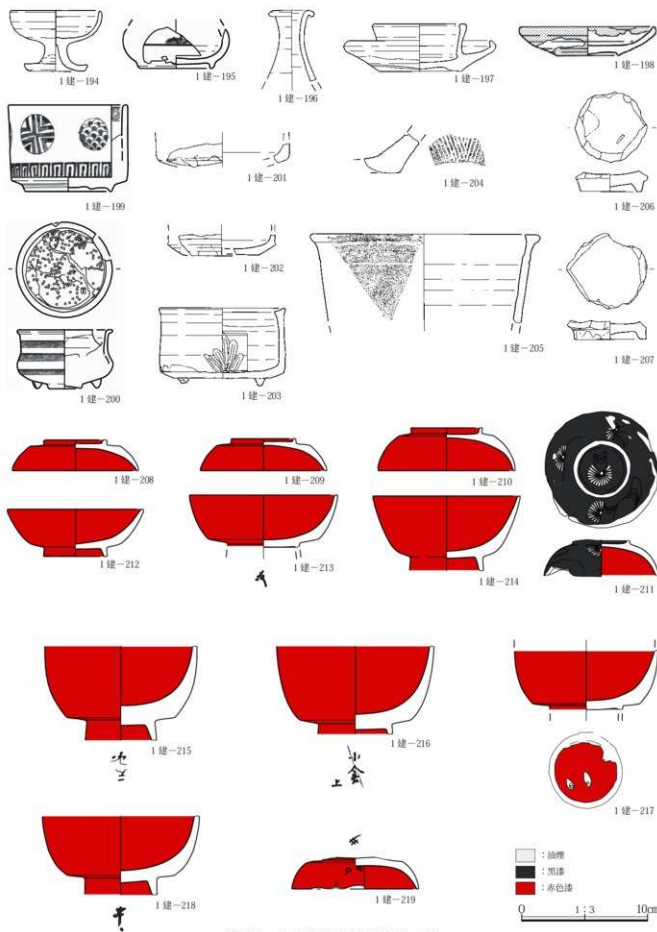
鉄鍋は遺存状況が極めて良好なものと、破片で出土したものが確認された。1建No.408の鉄鍋は、木製の蓋がされたままであり、極めて良好な遺存状況で出土した。亀裂状に欠損した箇所には溶接による補修痕跡が見られ、その上にはススが良好に遺存していた。溶接により補修した後も、鉄鍋を使用し続けていたものと考えている。鉄鍋の溶接による補修については、第4章第4節9を参照して頂きたい。一方で、出土した鉄鍋の中には、破片で出土したものも多い。天明泥流は数回に亘り到達したのと考えられるが、礫を含む泥流が被覆した際に激しく破損したか、或いは錆による劣化が顕著に進んだものと考えている。

出土陶磁器には、破損部を漆によって補修した漆継も

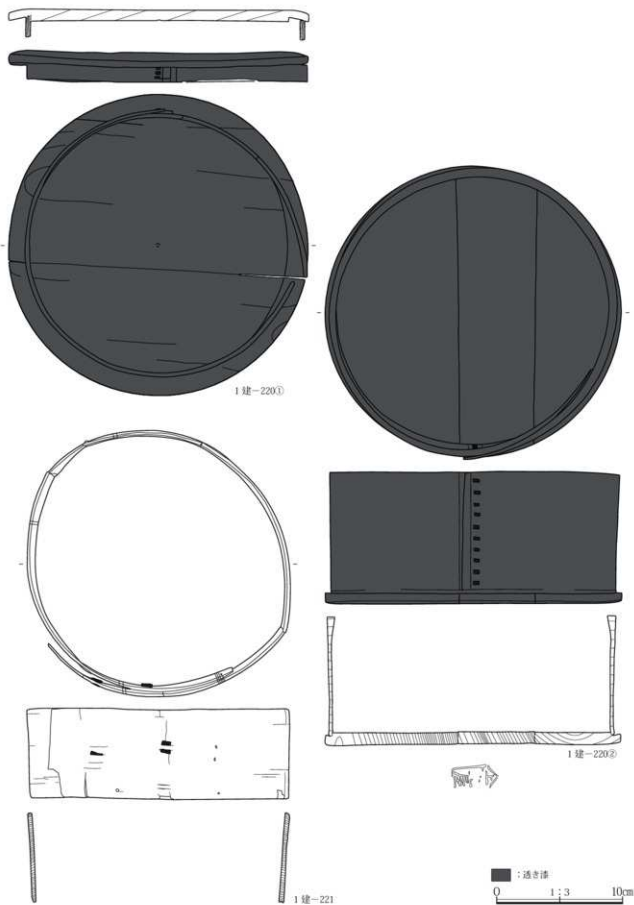


第21図 Ⅰ区1号建物出土遺物168～193

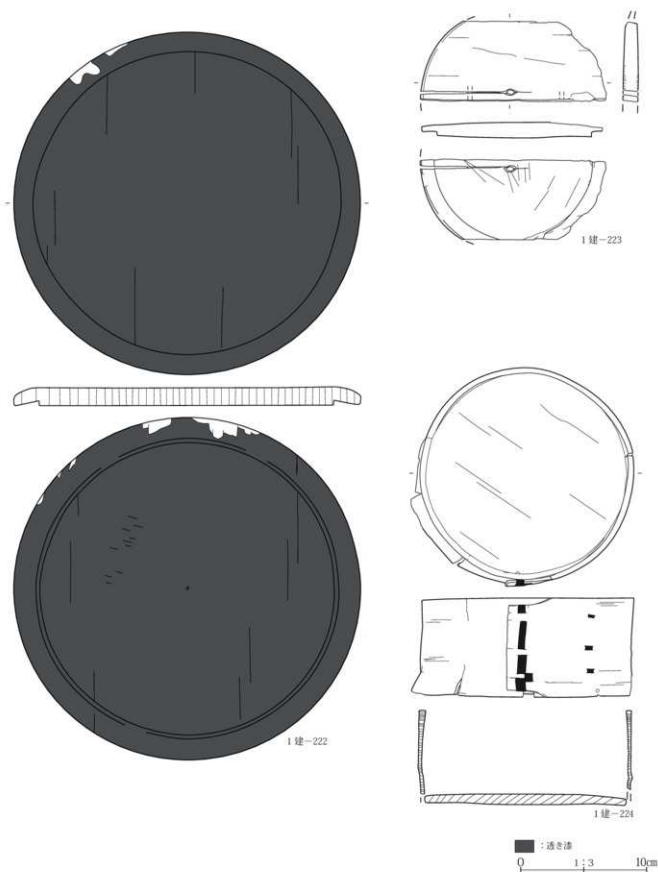
第1節 1区の調査成果



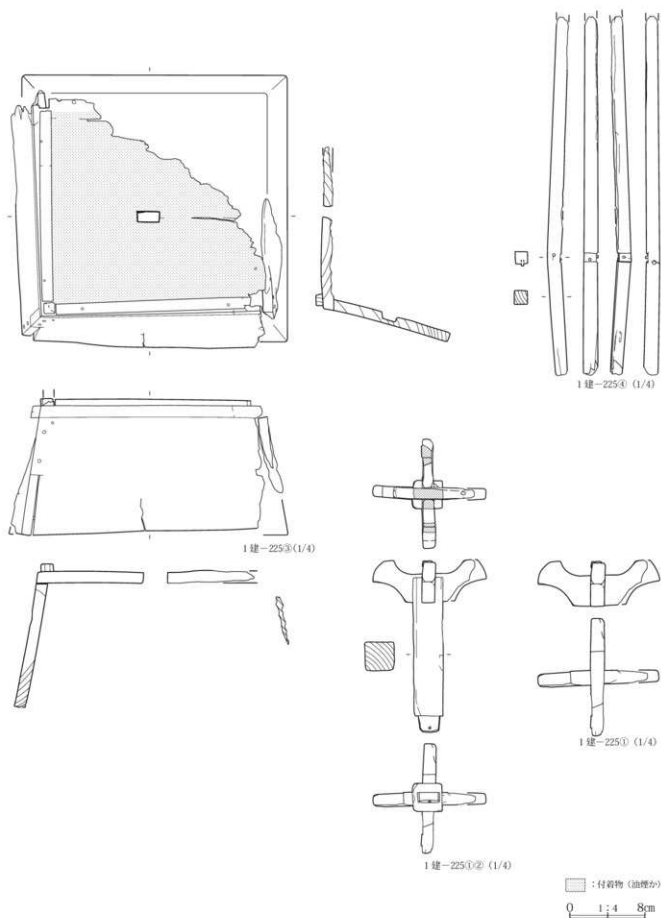
第22図 1区1号建物出土遺物194～219



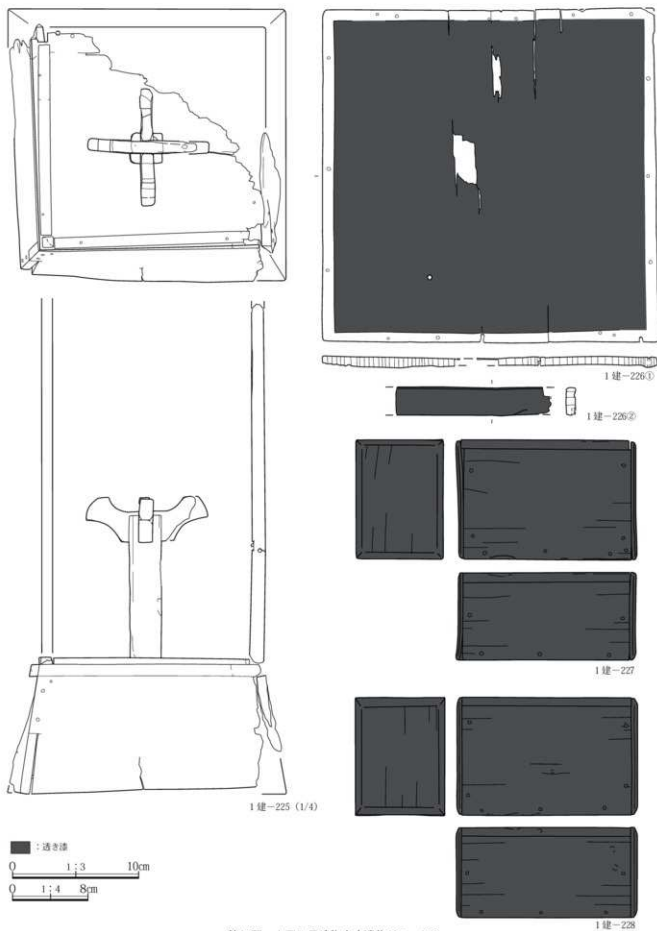
第23図 Ⅰ区1号建物出土遺物220・221



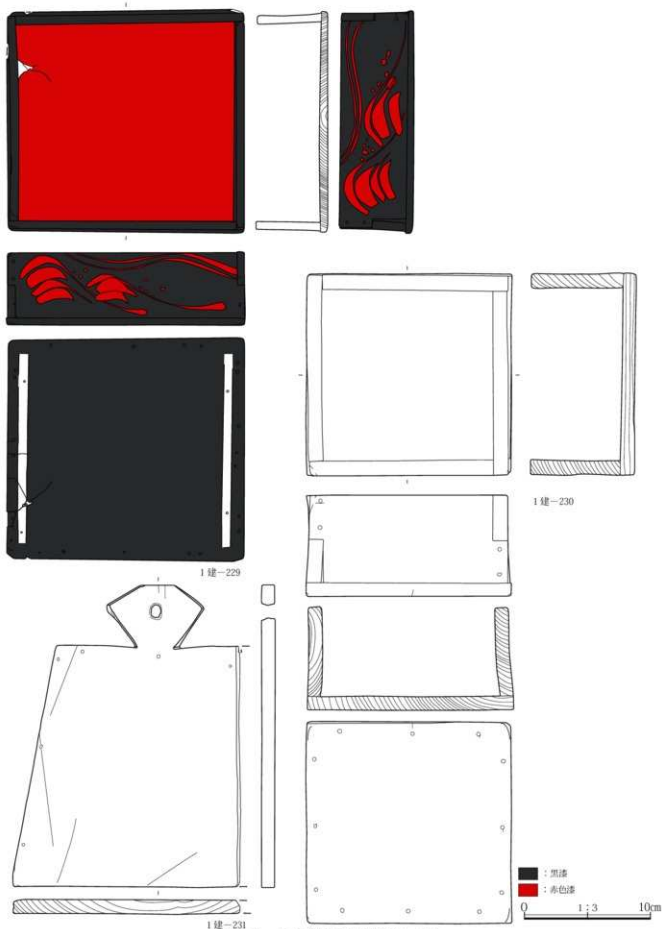
第24図 1区1号建物出土物222～224



第25図 1区1号建物出土遺物225

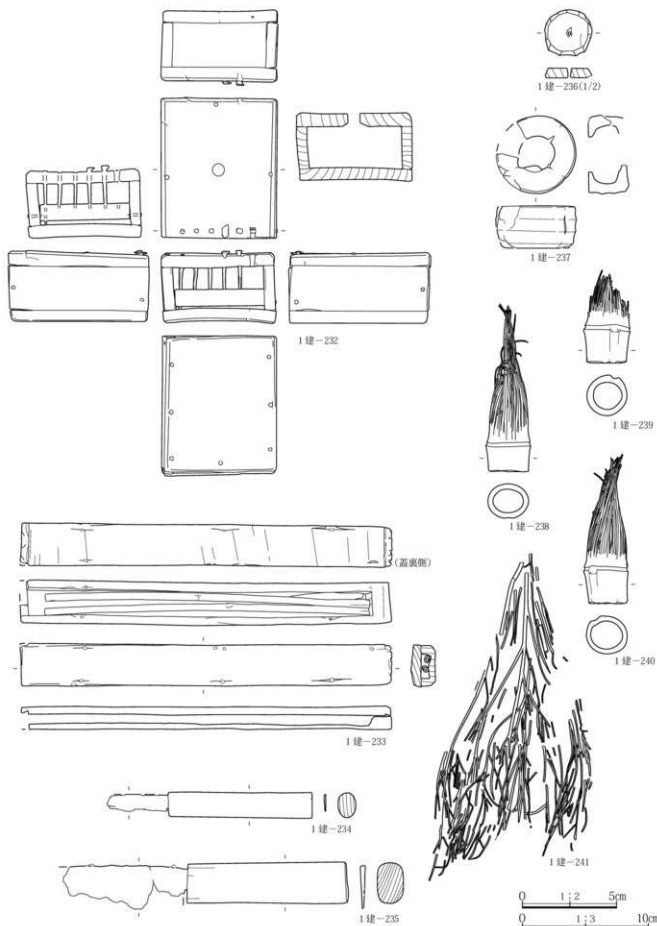


第26図 1区1号建物出土遺物225～228

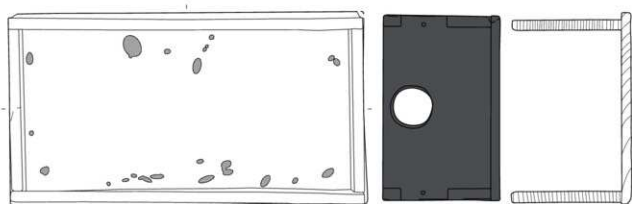


第27図 I区1号建物出土遺物229～231

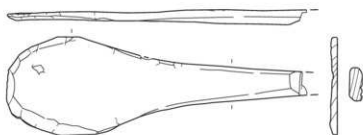
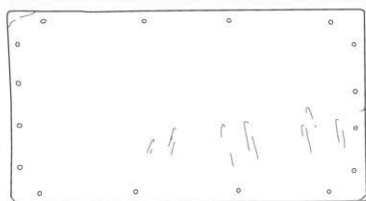
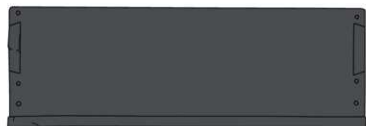
第1節 1区の調査成果



第28図 1区1号建物出土遺物232～241



1建-242

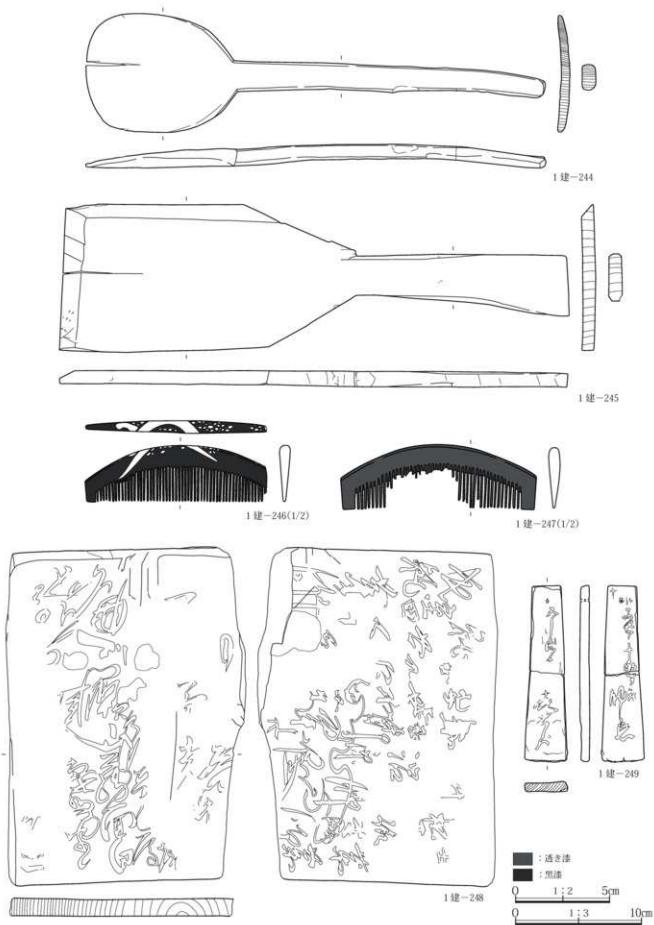


1建-243

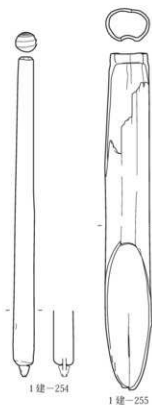
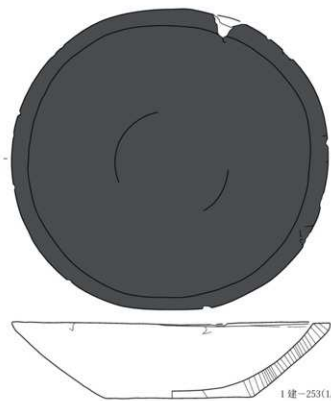
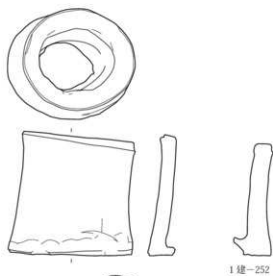
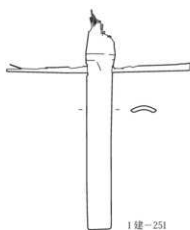
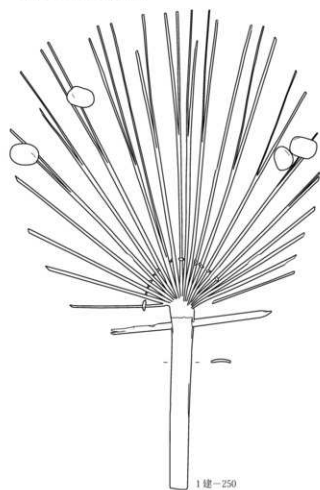
■ : 透き漆
 ■ : 炭化黒銅

0 1:3 10cm

第29図 1区1号建物出土遺物242・243

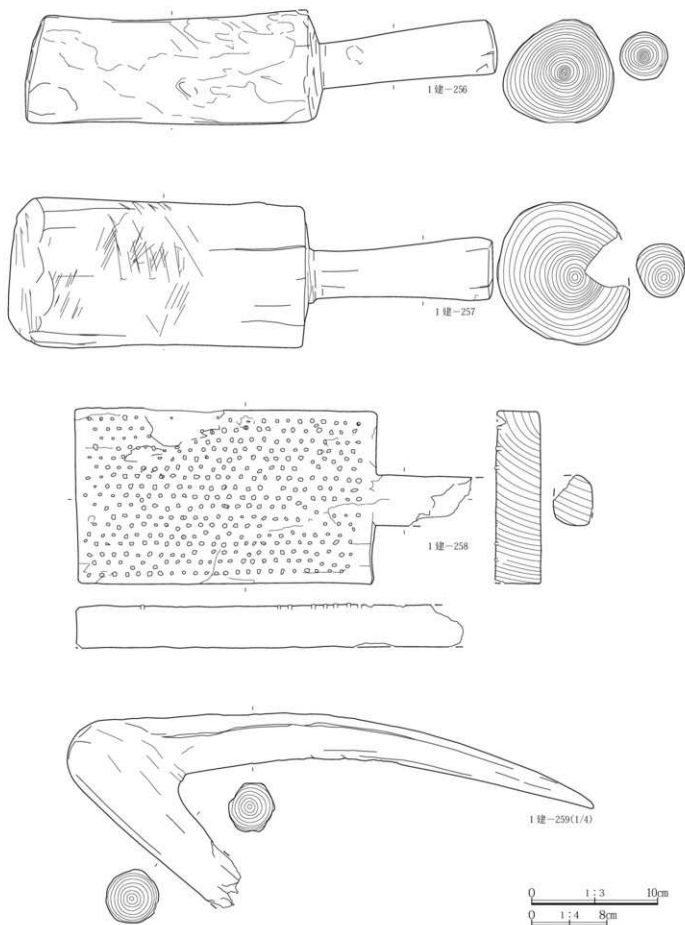


第30図 1区1号建物出土物244～249



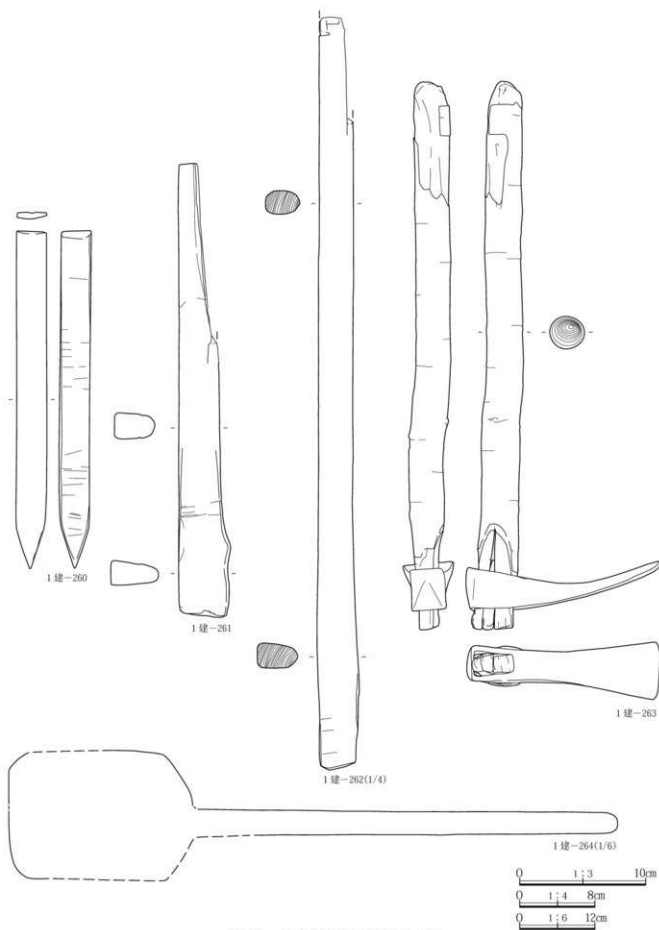
第31図 1区1号建物出土遺物250～255

第1節 1区の調査成果

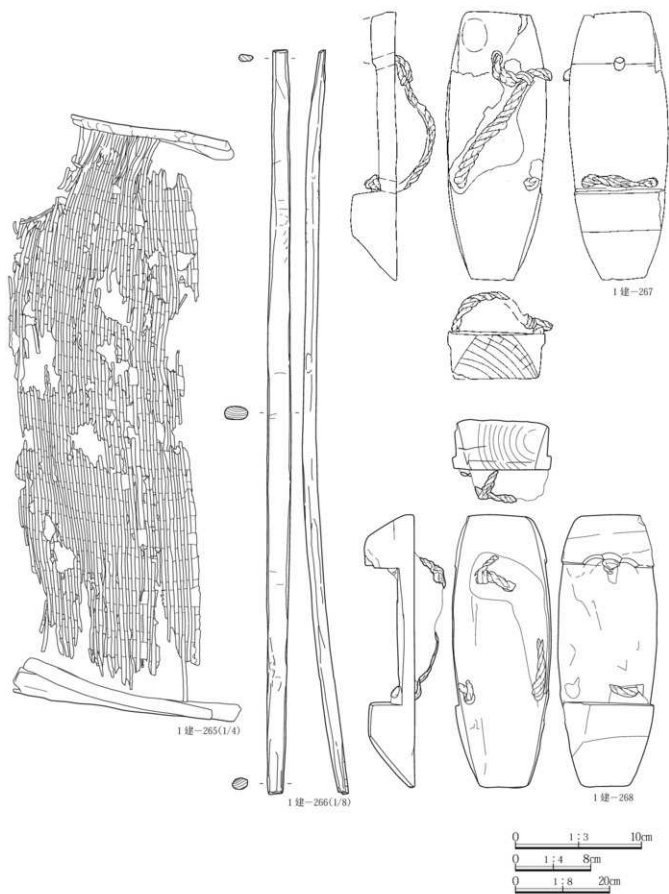


第32図 1区1号建物出土遺物256～259

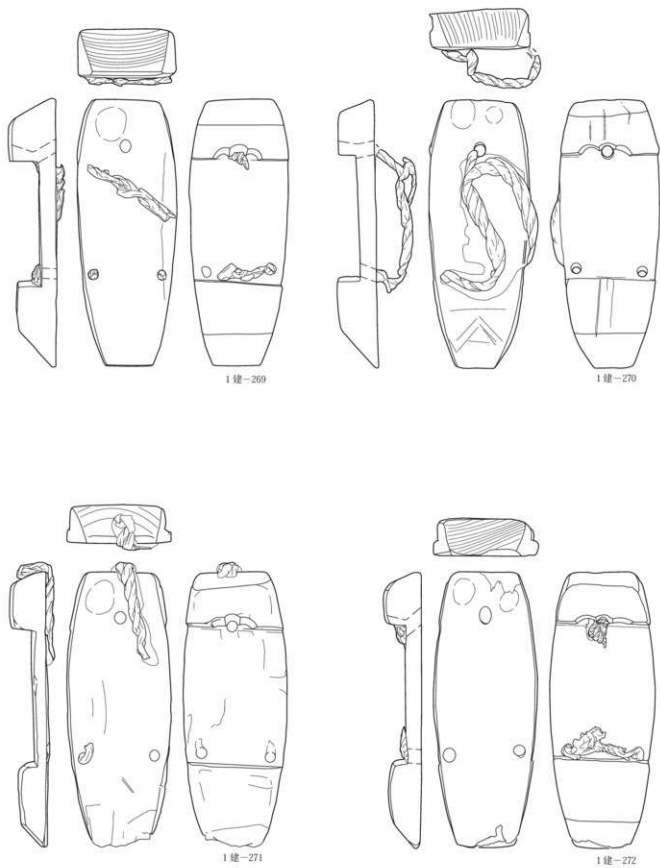
0 1:3 10cm
0 1:4 8cm



第33図 1区1号建物出土遺物260～264

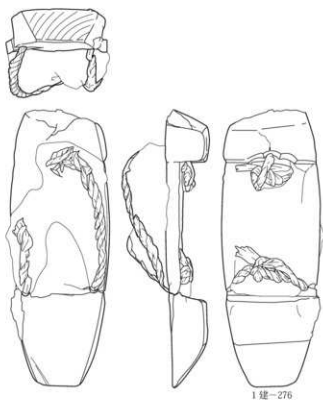
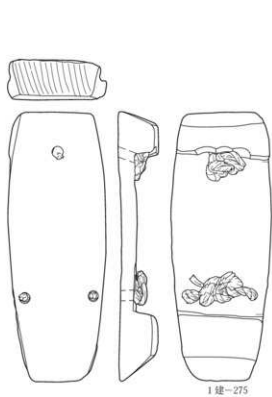
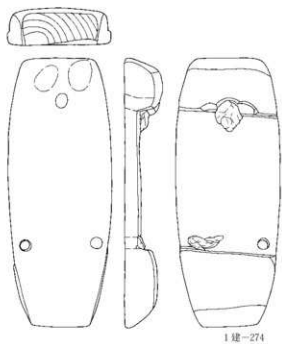
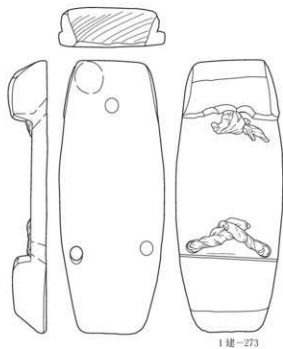


第34図 1区1号建物出土遺物265～268



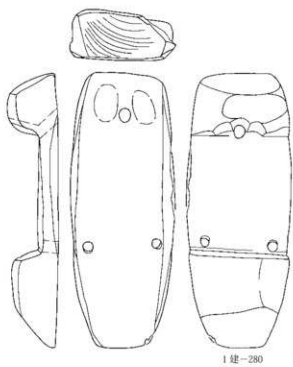
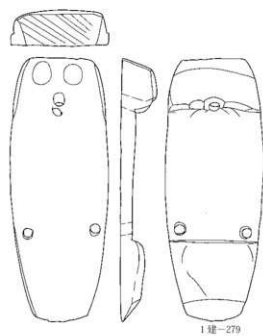
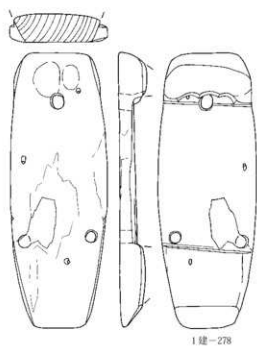
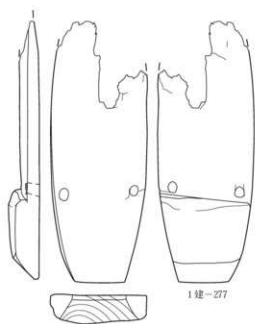
0 1:3 10cm

第35図 I区1号建物出土遺物269～272



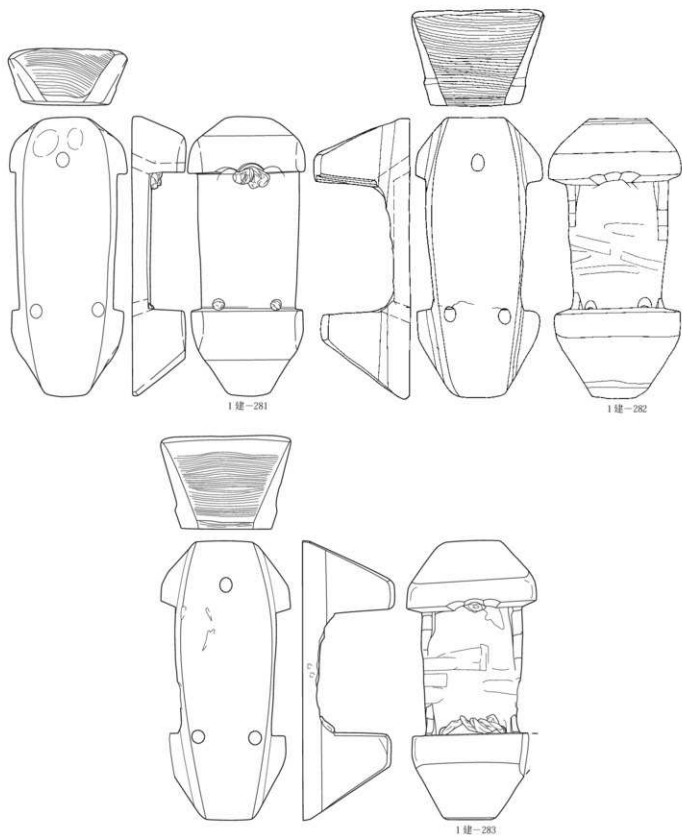
0 1:3 10cm

第36図 1区1号建物出土遺物273～276



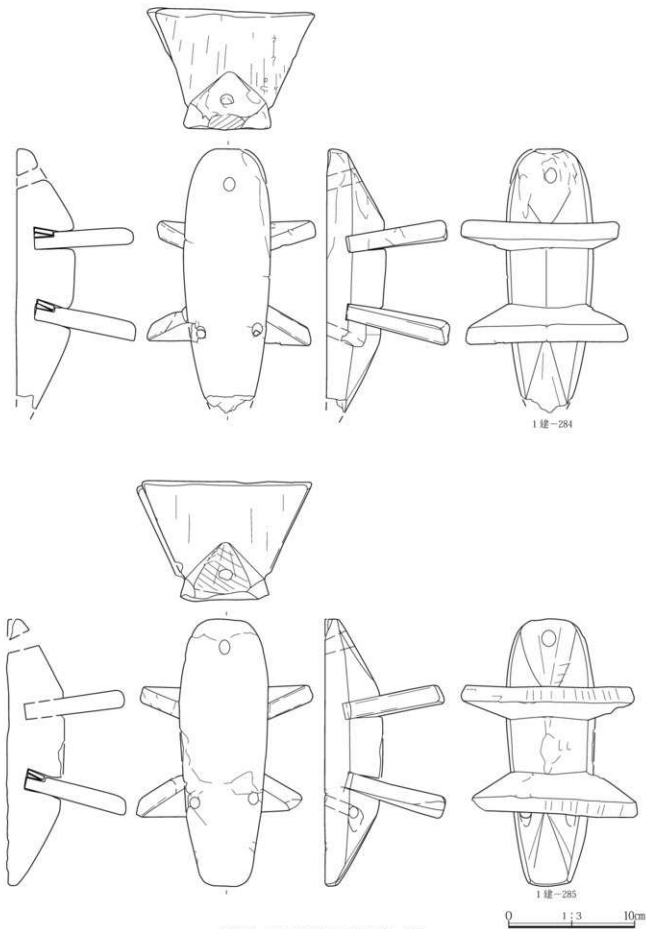
0 1:3 10cm

第37図 1区1号建物出土遺物277～280

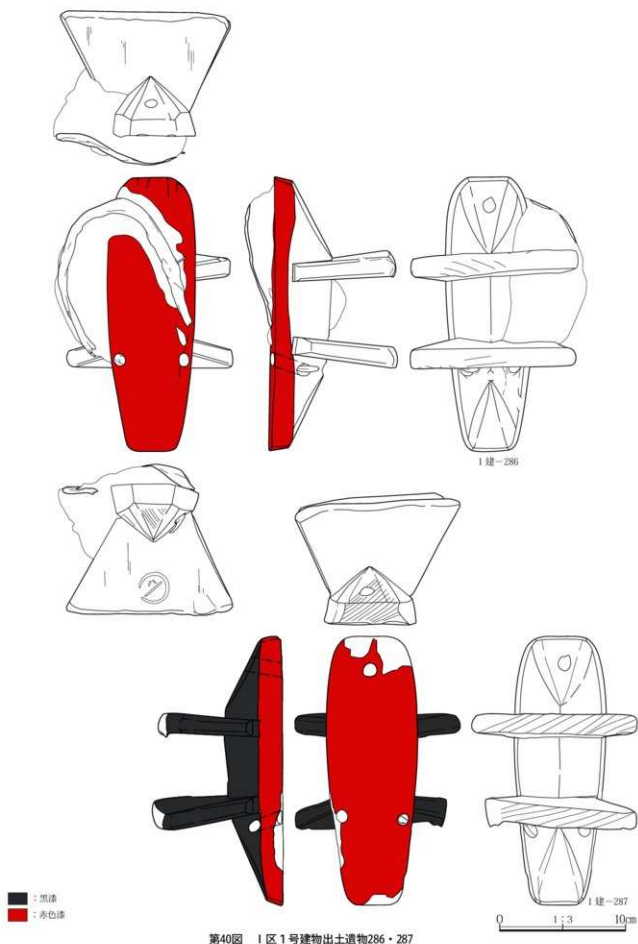


0 1:3 10cm

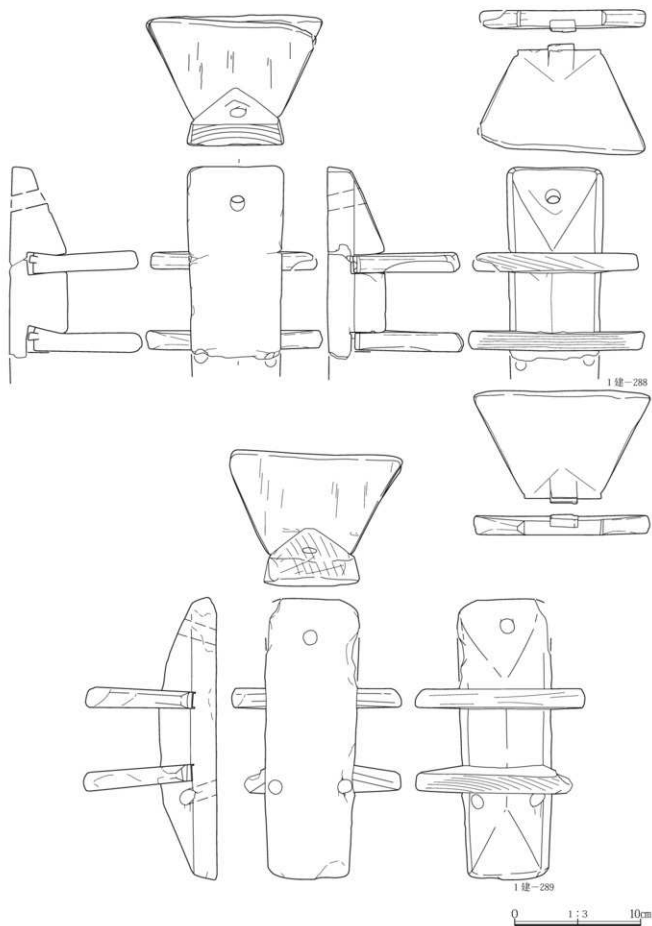
第38図 1区1号建物出土遺物281～283



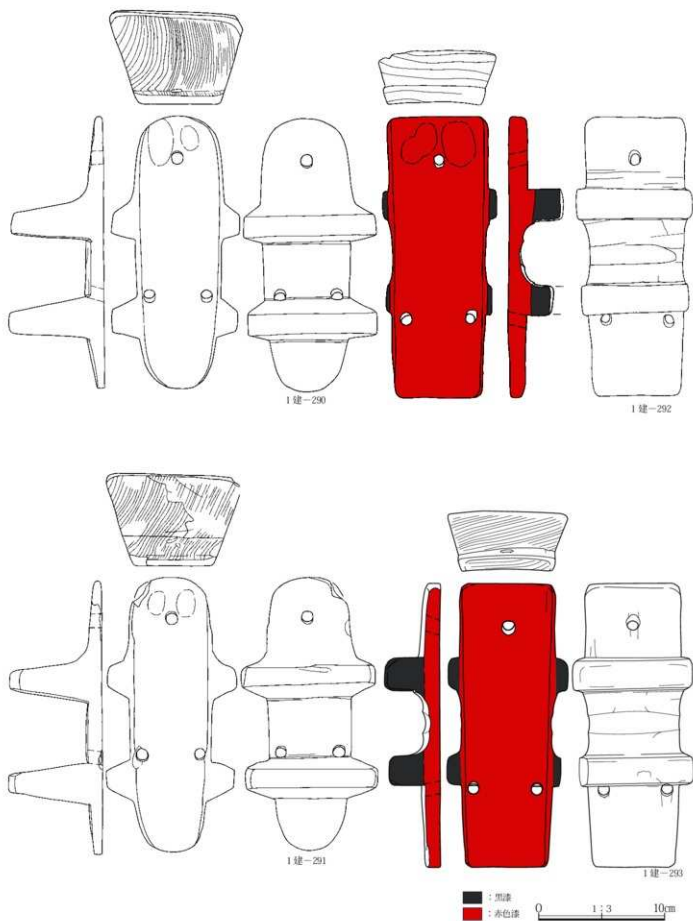
第39図 Ⅰ区1号建物出土物284・285



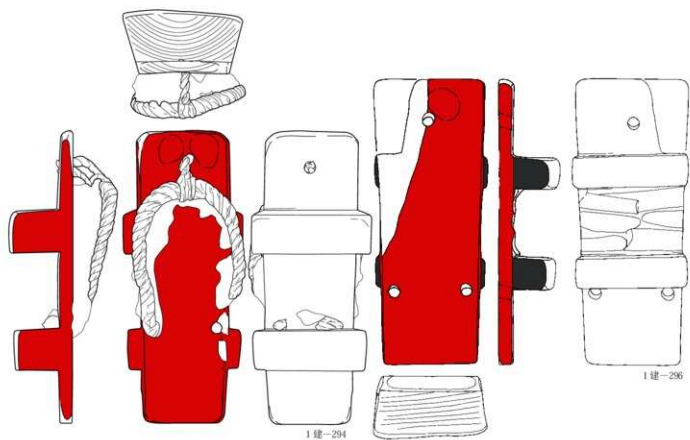
第40図 1区1号建物出土物286・287



第41図 I区1号建物出土遺物288・289

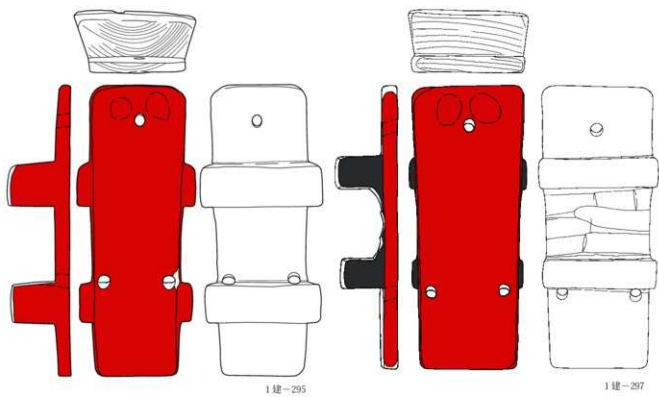


第42図 1区1号建物出土遺物290～293



1建-294

1建-296

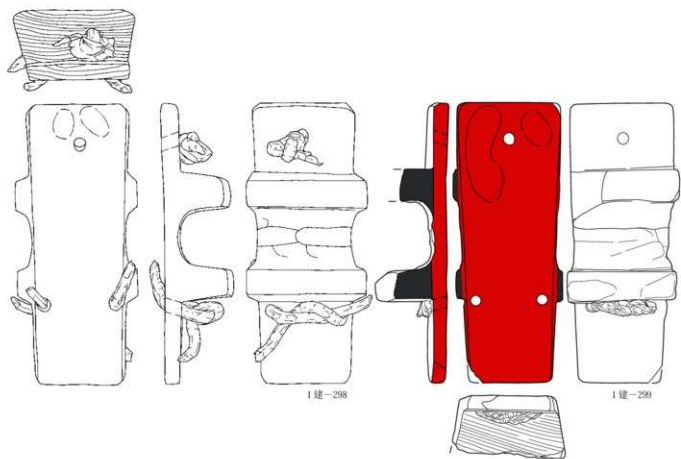


1建-295

1建-297

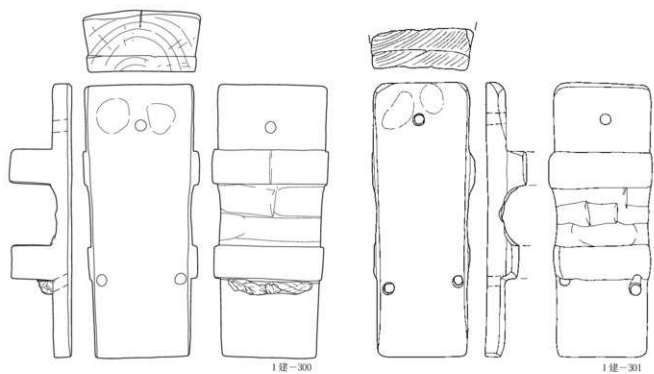


第43図 1区1号建物出土遺物294～297



1建-298

1建-299

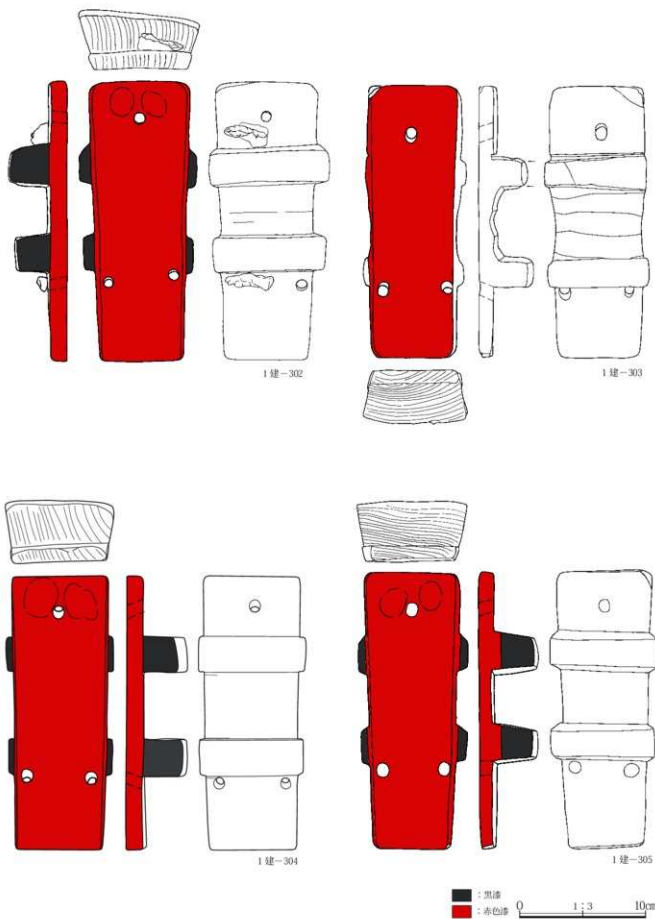


1建-300

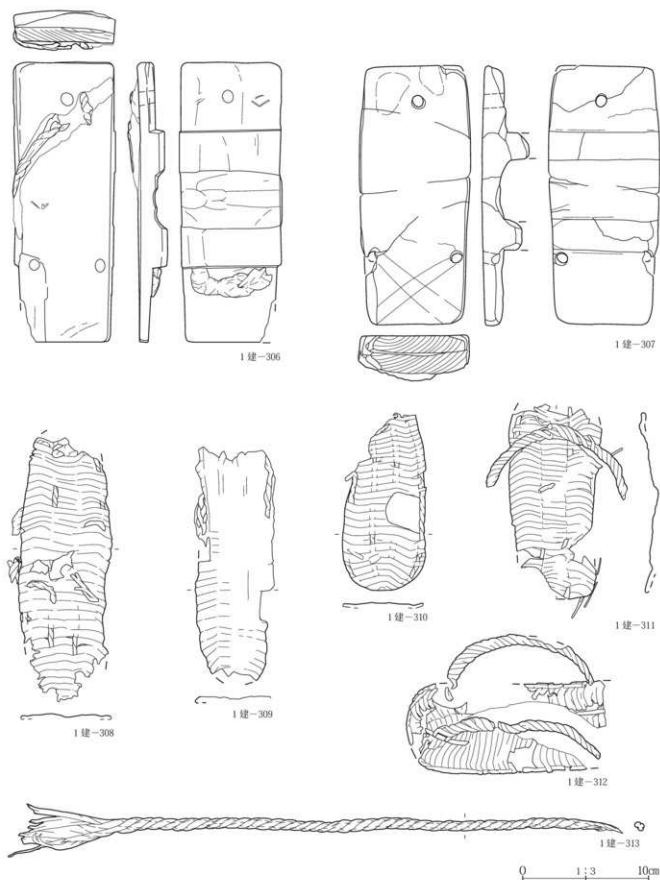
1建-301



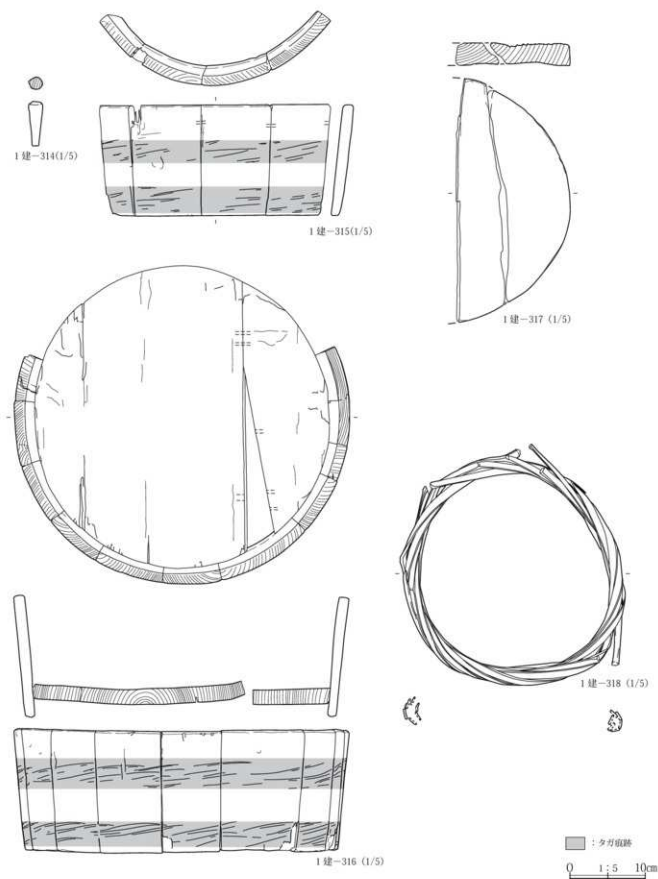
第44図 1区1号建物出土遺物298～301



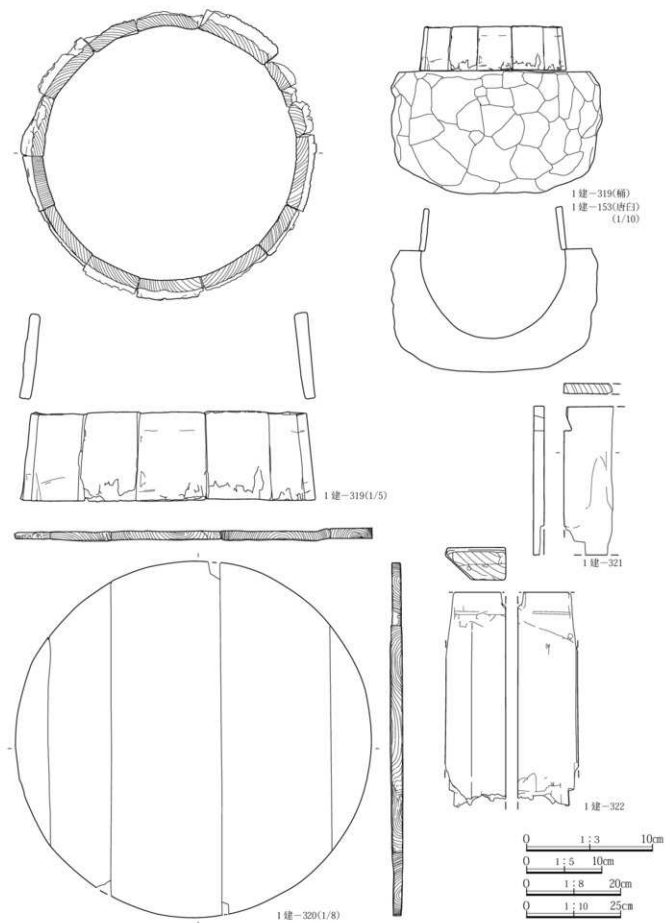
第45図 1区1号建物出土遺物302～305



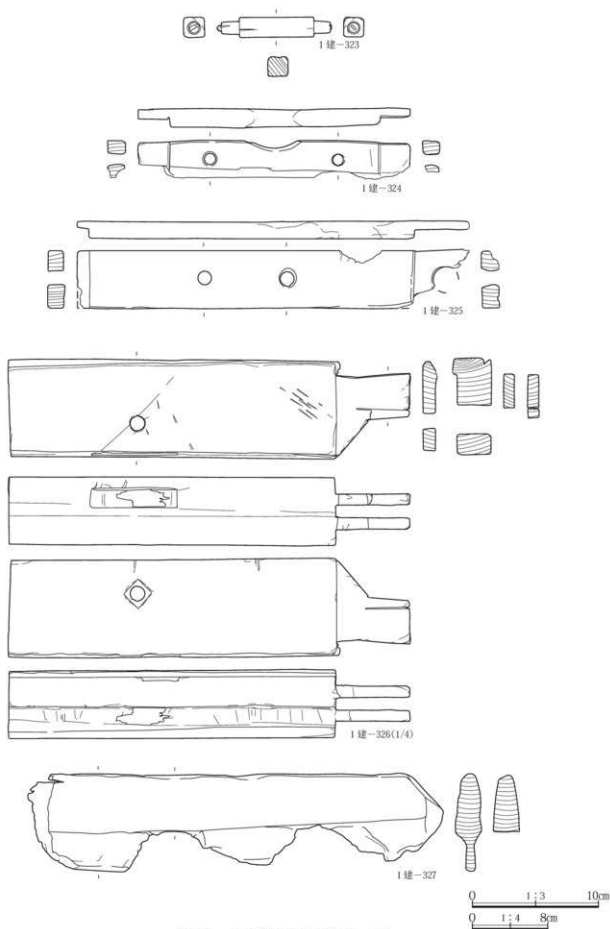
第46図 1区1号建物出土物306～313



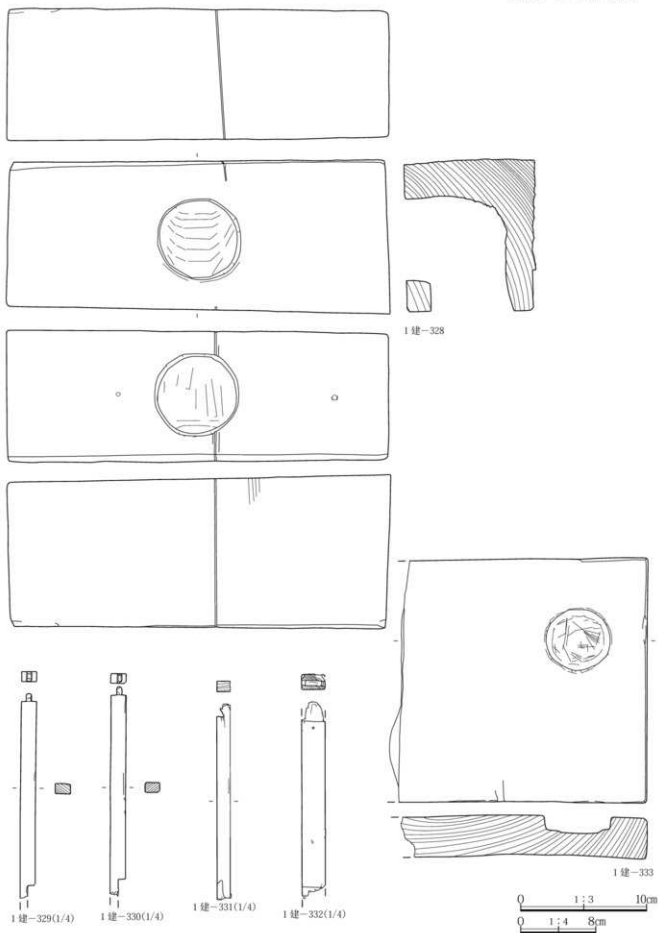
第47図 Ⅰ区1号建物出土遺物314～318



第48図 1区1号建物出土物319～322

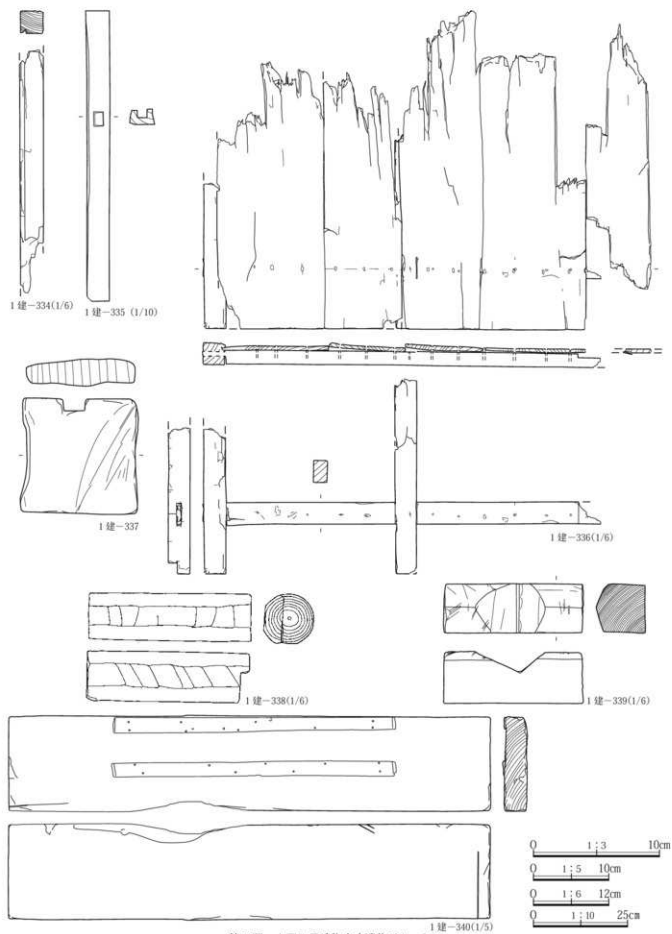


第49図 Ⅰ区1号建物出土遺物323～327

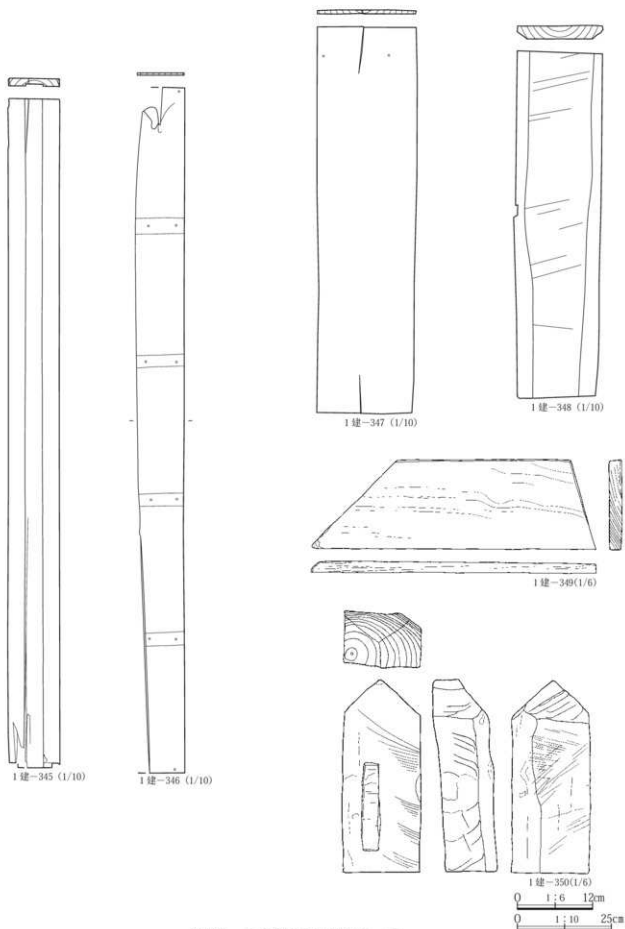


第50図 1区1号建物出土遺物328～333

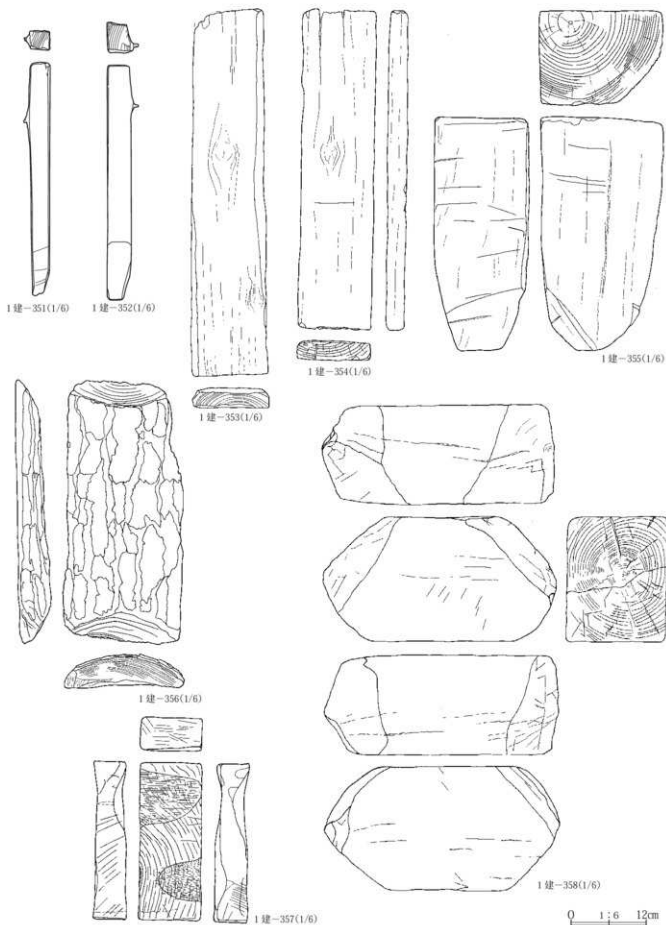
第3章 発見された遺物



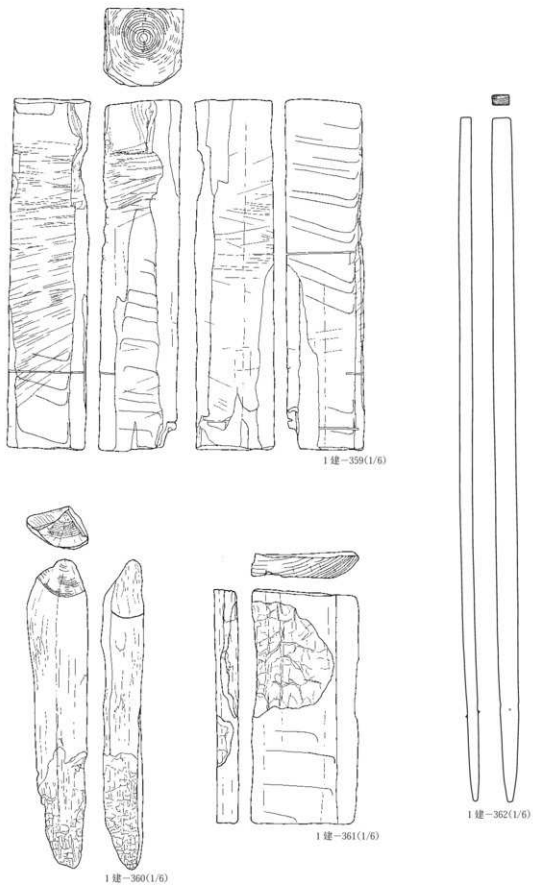
第51図 Ⅰ区1号建物出土遺物334～340



第53図 1区1号建物出土遺物345～350



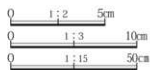
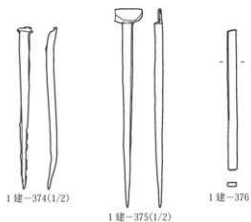
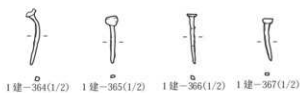
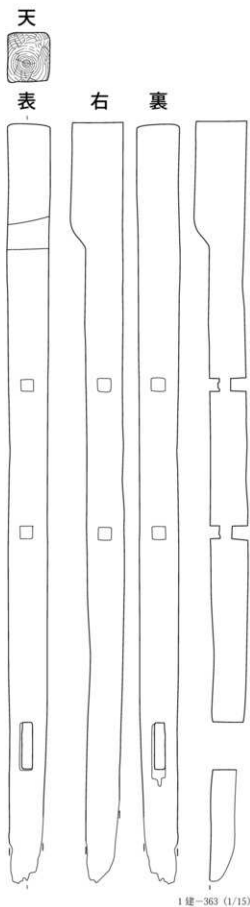
第54図 1区1号建物出土遺物351～358



0 1:6 12cm

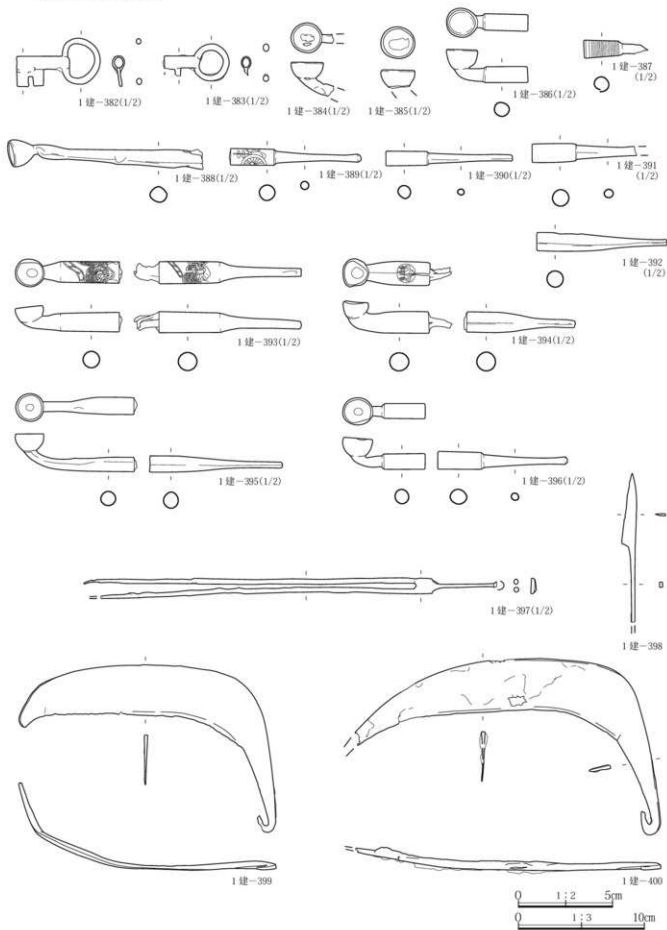
第55図 1区1号建物出土遺物359～362

第1節 1区の調査成果

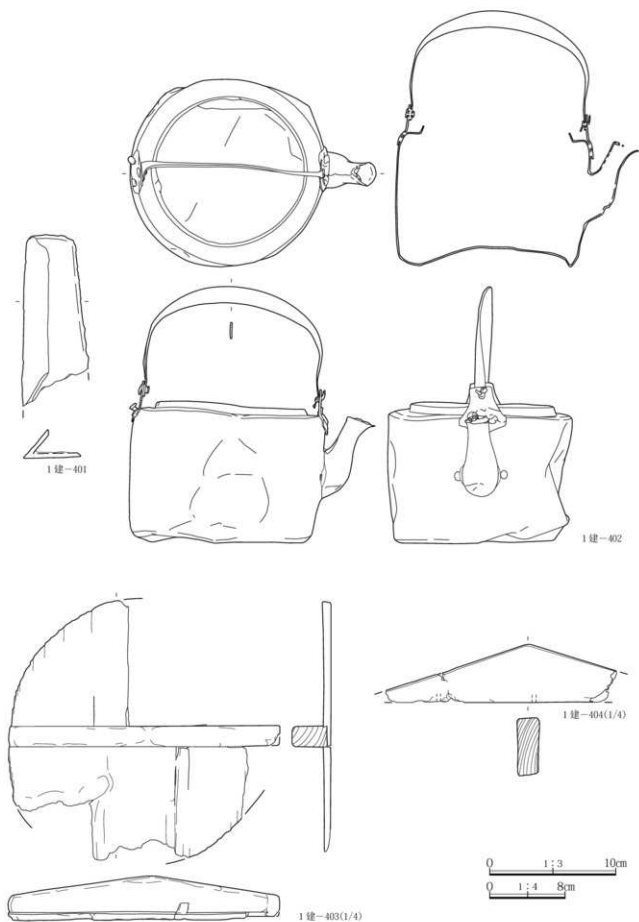


第56図 1区1号建物出土遺物363～381

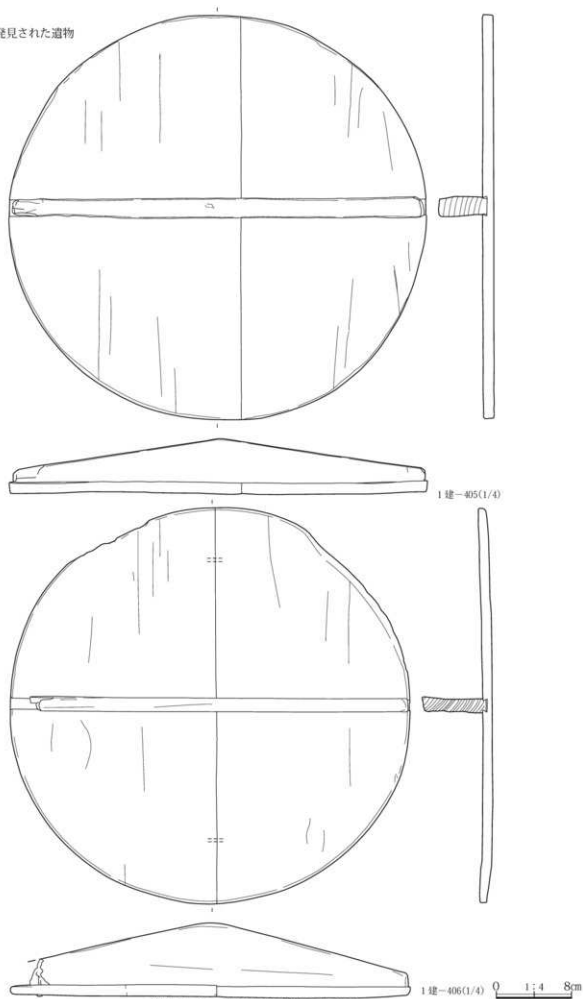
第3章 発見された遺物



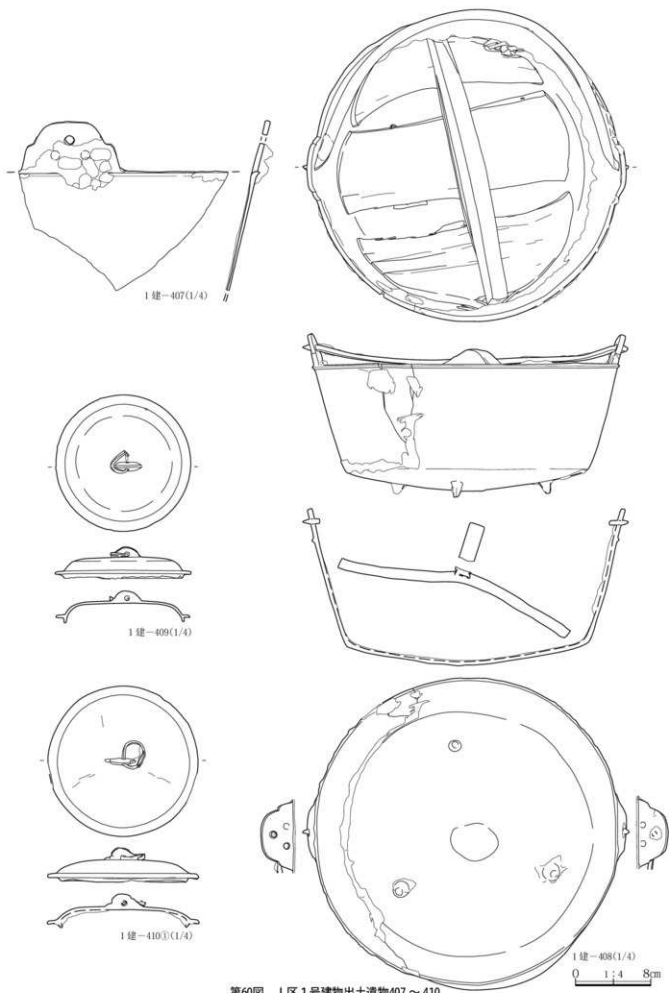
第57図 1区1号建物出土遺物382～400



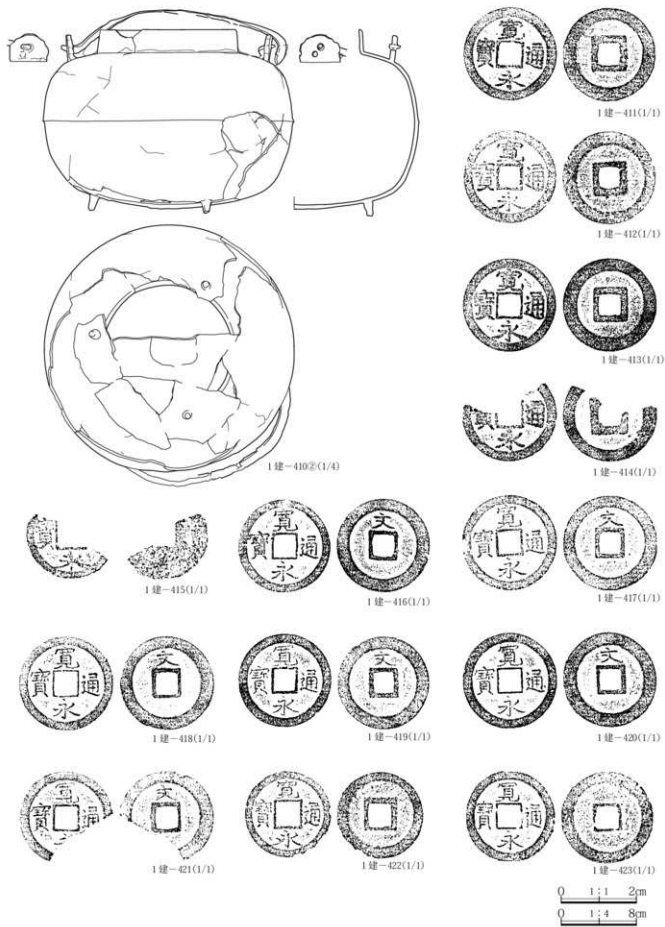
第58図 1区1号建物出土遺物401～404



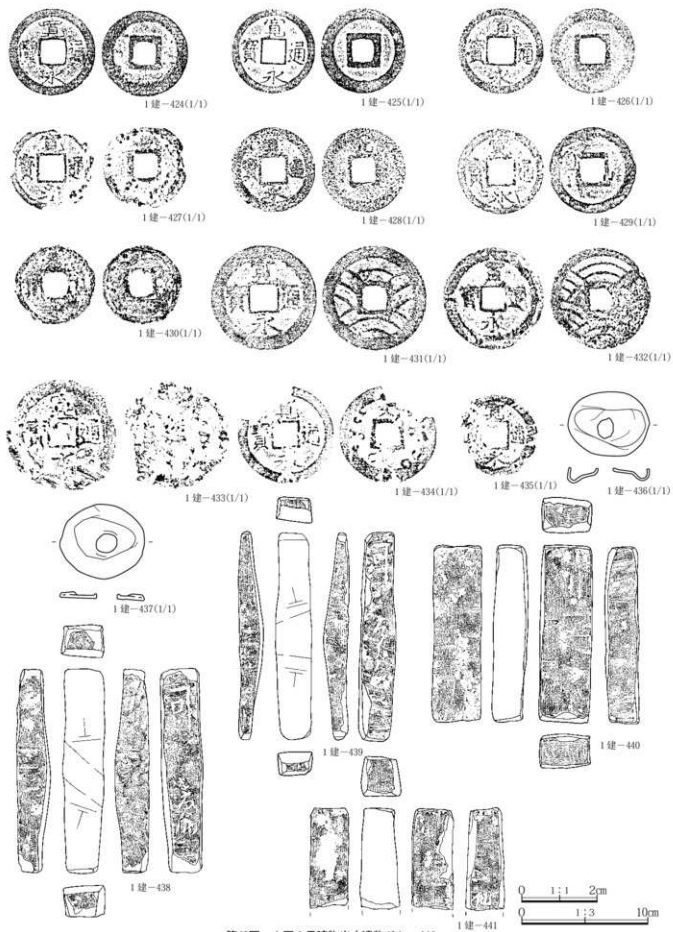
第59図 Ⅰ区1号建物出土遺物405・406



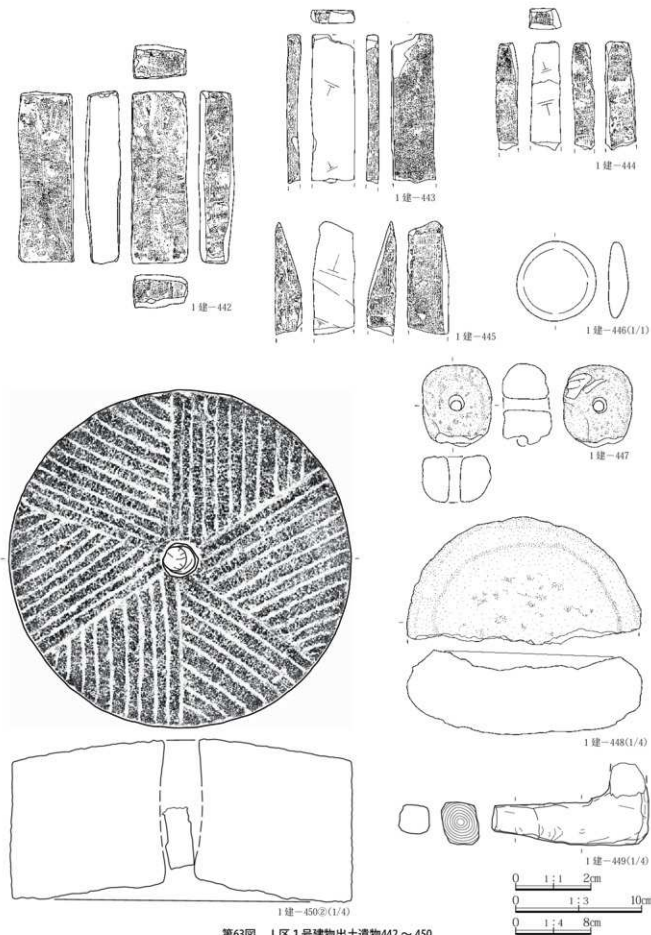
第60图 Ⅰ区1号建物出土遗物407~410



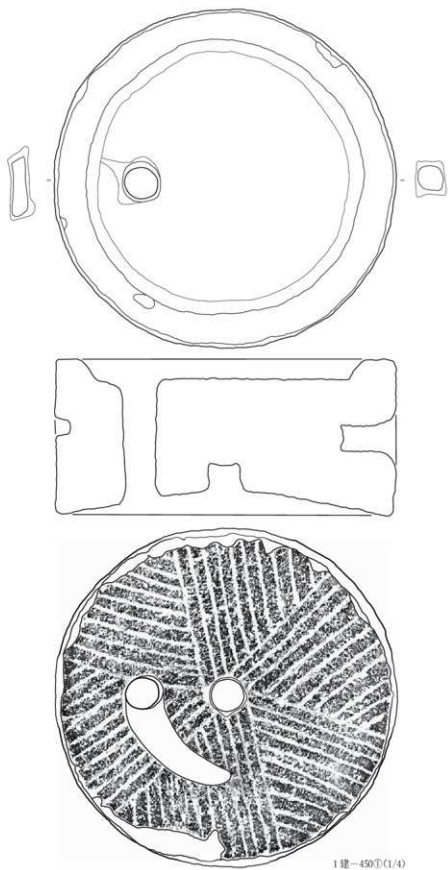
第61図 Ⅰ区1号建物出土遺物410～423



第62図 1区1号建物出土物424～441



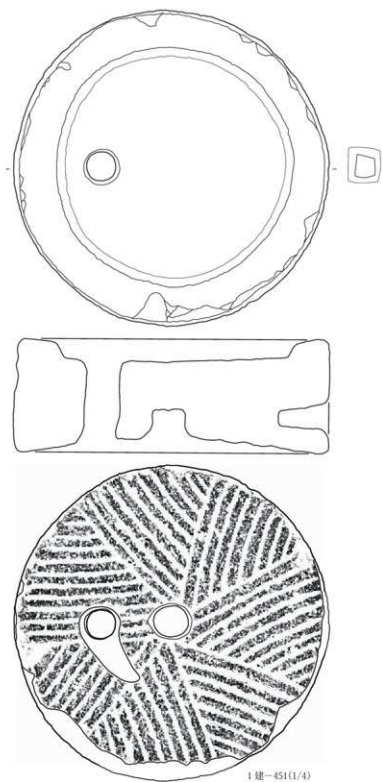
第63図 Ⅰ区1号建物出土遺物442～450



1建-450①(1/4)

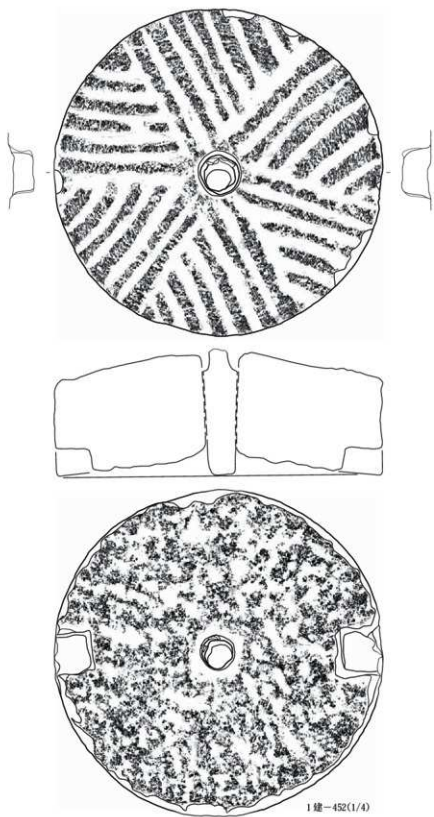
0 1:4 8cm

第64図 1区1号建物出土遺物450



第65図 1区1号建物出土遺物451

0 1:4 8m



0 1:4 8cm

第66図 1区1号建物出土遺物452

第3章 発見された遺物

多く確認された。これら出土遺物に見られる多様な補修の様相からは、大規模な主屋である1号建物の住人であっても、破損したものを捨てるのではなく、可能であれば補修し再利用していたことが窺い知れる。遺物に見られる多様な補修痕跡については、第4章第2節3で後述する。

道具や箱も数多く出土した。1建No.232は、釘を格子状に打ち込んだ側板を持つ小型の箱である。格子状の側板も含め、全て木釘で固定されているために、どこも側板も開閉することはできない。箱の用途については不明である。1建No.233は箸箱である。中には篠竹を裁断したような簡素な箸が収納されていた。箸箱は木釘で蓋が固定され、端部には蟻形の欠込が施されていた。欠損するものの、ここには小さな扉が差し込まれていたと思われる、この扉がスライドし箸を出し入れしていたものと推測される。

1建No.468は筵とも思われるが、詳細は明らかでない。その素材については分析を行った。詳細は第4章第4節5を参照して頂きたい。

(3) 2号建物 (第67・68図、PL.16-3~17)

① 2号建物の概要

2号建物は1号屋敷跡の南端部に位置し、北側の1号建物(主屋)とは中間に広い庭を挟んで存在する。1号屋敷跡の付属建物であり、8基の桶が地面に埋設された土台建物である。41区Y-23・24、42区A・B-23・24グリッドに位置する。2号建物の規模は、組まれた土台は僅かに菱形状に歪んで変形しており、また土台の東部分は腐蝕し欠損するため桁行については推定であるが、桁行(東西)6.13m×梁行(南北)2.76mの規模を測る。

埋設された桶は3規格に分類でき、1~4号桶が同規格で口径約115cm×底板径97cm×高さ約90cm、5・6号桶が口径約105cm×底板径89cm×高さ87cm、7・8号桶が口径約100cm×底板径81cm×高さ約90cmである。樹種は1~4号桶はクリ、5~8号桶はマツと異なることが確認された。

1~4号桶の上面は、長さ155~165cm×幅約24cm×厚さ約3cmの板で覆われており、桶に蓋がされていたと考えられる。腐蝕を免れほぼ方形のまま出土している板は12枚確認でき、そのうち、最も西寄りの2枚の板は、

コの字状に四部が施された、いわゆる「二本橋」と称される便桶の渡し板(蓋板)と考えられる。

出土状況では、板に覆われていなかった5~6号桶に関して、桶内部から板の一部や破片が出土しており、板により蓋がされていた可能性が高いが、不確定である。

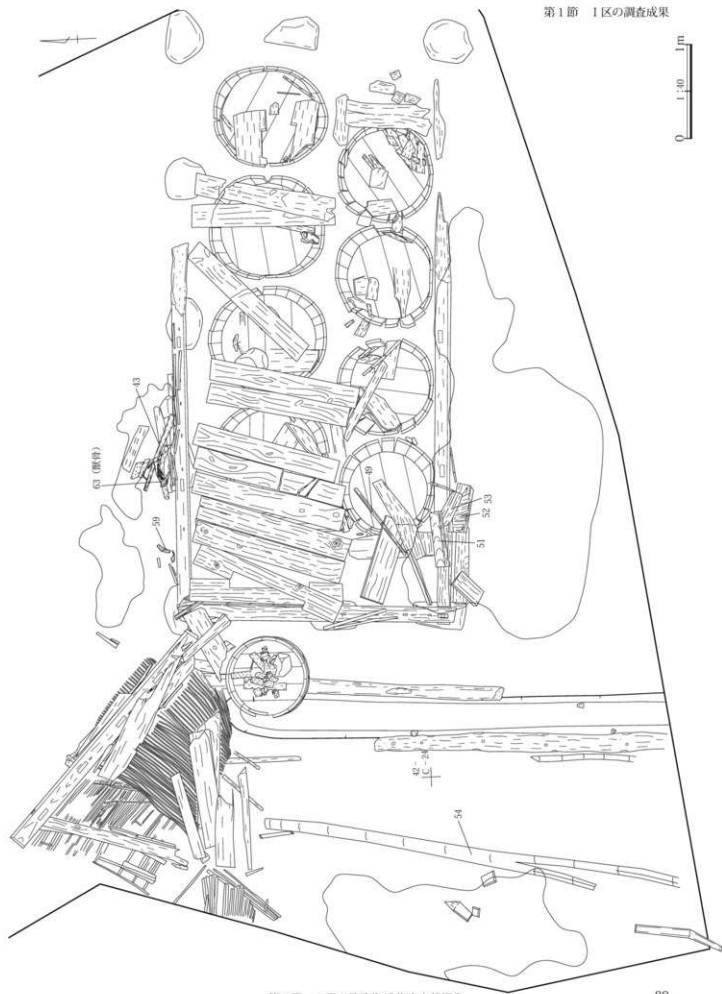
建物周辺には堆肥や肥料の原材料となる蚕糞(当該地域では「コクソ」と称する)と思われるものが堆積していた。また、埋設桶内底部付近の堆積土壌中より、ヒトの寄生虫卵が検出されたことなどを併せ、この建物は、便所及び、人糞や蚕糞と思われるものなどを原材料とした肥料の作製用及び貯蔵用の施設を兼用した建物であると考えられる。当該地域には、主屋とは別の付属建物内に桶を3~6基埋設し、うち1~2基を便所として使用するとともに、他は人糞や蚕糞、馬糞等を混合して肥料を作製し備蓄する民俗例があり、この桶を「ナラシダメ」と称する。2号建物の埋設桶はこの「ナラシダメ」に相当する可能性が高いと考えられる。

礎石は側土台下に計10基敷設され、礎石下及び礎石間には径10~30cmの垂角礫が敷き詰められていた。礎石の配置については間隔が不均一で、北側土台下には5基配置されるのに対し、南側土台下には東西両端部2基以外には敷設されない。

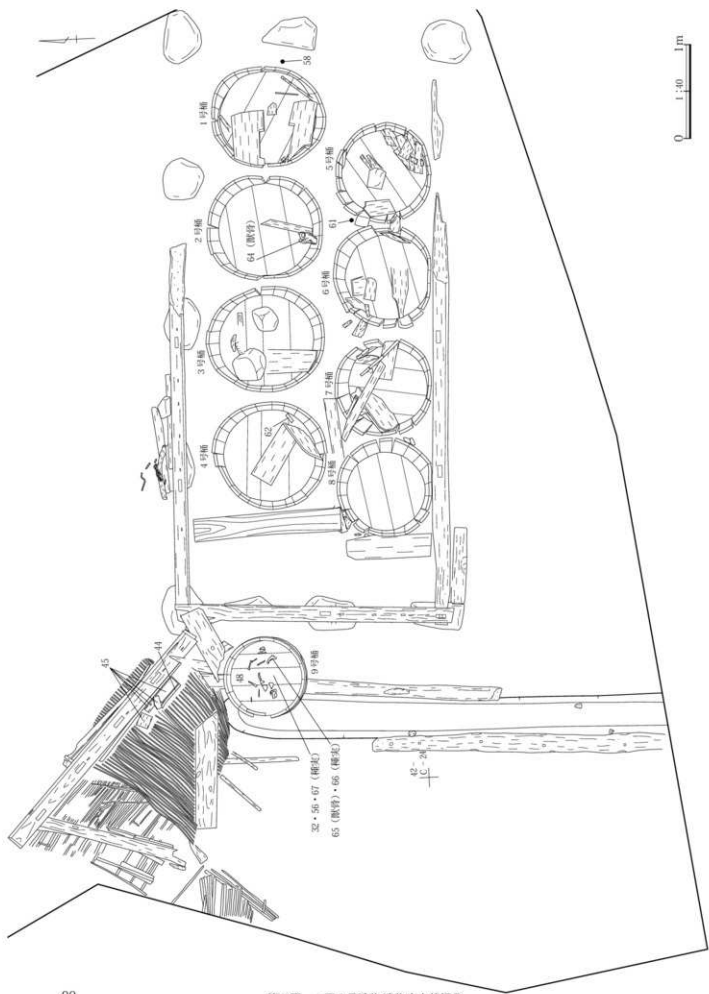
礎石の上には土台が据えられている。西側土台の南木口の枅穴に対して、南側土台の平枅が接合していた。西側土台の北木口と北側土台の接合に関しては、仕口が多少破損していたため推定であるが、やはり同様に西土台の枅穴に対して北土台の平枅が接合していたと観察から推定できる。

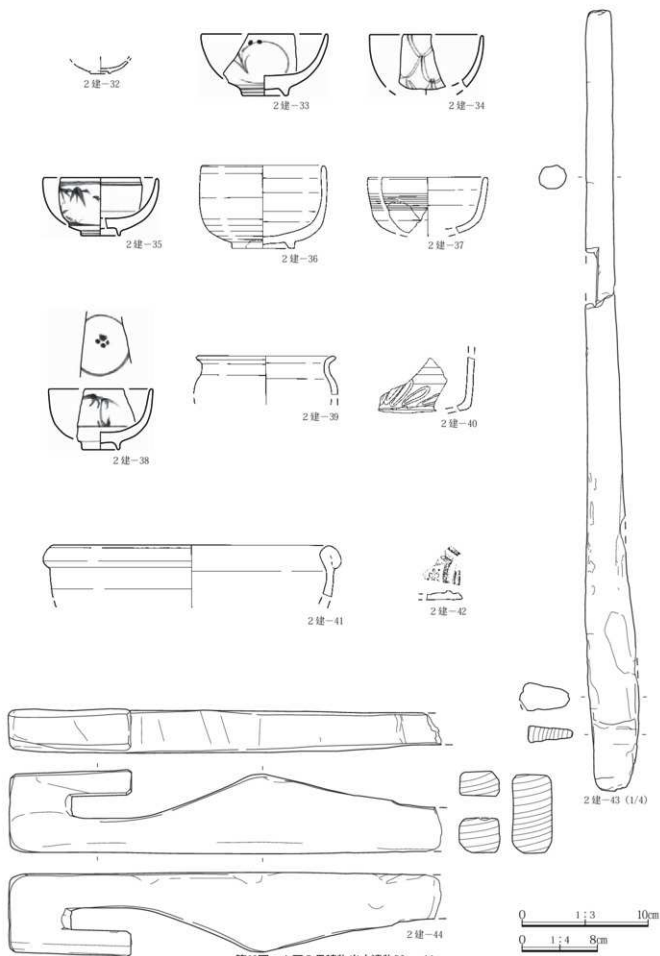
遺存する土台のうち、北側土台の上面には柱が接合したと考えられる枅穴と土壁の構造材である小舞が接合したと考えられる枅穴が全面に施されている。一方、西側土台の南半部分には小舞に対応する枅穴が施されているが、北半部分にはそれが無い。さらに、南側土台の上面には柱に対応する枅穴は施されているが、小舞に対応する小枅穴は一切確認できない。すなわち、建物北側と建物西側南半部分の壁面には土壁が立ち、建物西側北半部分と建物南側の壁面には土壁が立ち上らなかった可能性が高い。2号建物1号施設は建物西側北半部分の壁面と思われ、この壁面には上部から簾が掛けられていた。

建物西側には、2本の角材及び丸太材を土止めとし杭

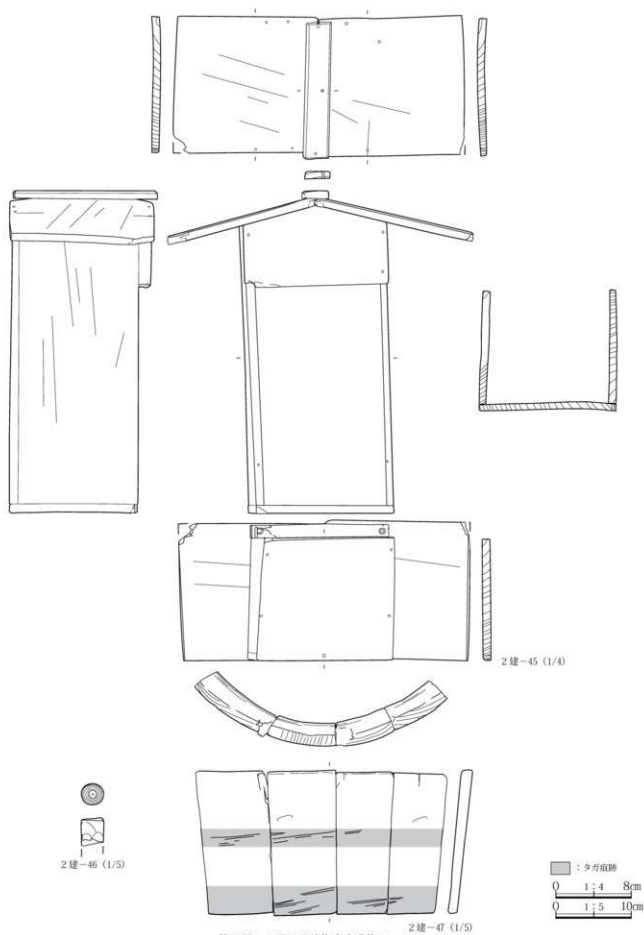


第67図 1区2号建物遺物出土状況①

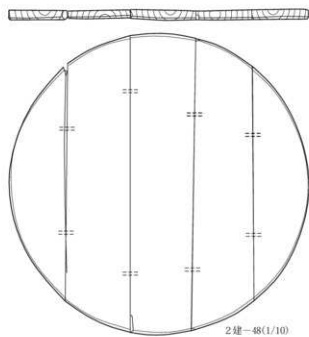




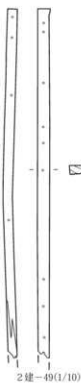
第69图 1区2号建物出土文物32~44



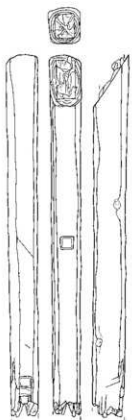
第70図 1区2号建物出土遺物45～47



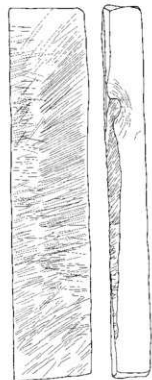
2建-48(1/10)



2建-49(1/10)



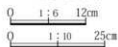
2建-50(1/6)



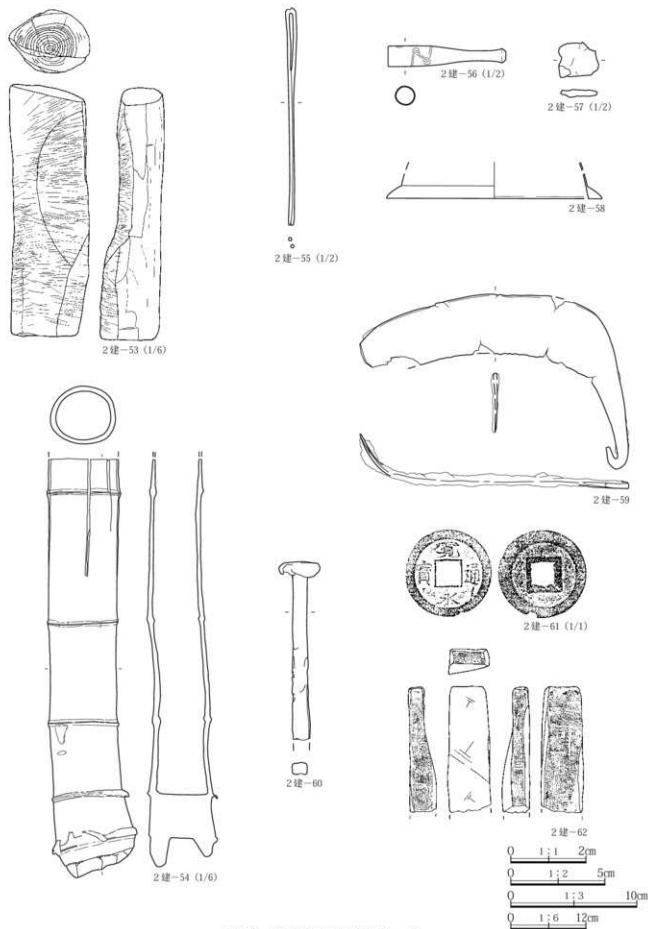
2建-51(1/6)



2建-52(1/6)



第71図 1区2号建物出土物48～52



第72図 1区2号建物出土物53～62

で固定された溝が存在する。この溝は2号建物の雨落溝と考えられ、溝内及びその西側の地面にはAs-A軽石が堆積しているのに対し、溝と建物との間の地面に堆積は見られなかった。2号建物或いは建物内の桶にあったろう肥料の中に、雨水が入らないようにするための施設であったとも考えられる。

2号建物を肥料の作製用及び貯蔵用の施設を兼用した建物と考え、1号建物の馬屋規模との関連が推測される。1号建物の馬屋が大規模になれば、多くの埋設桶が必要となるだろう。桶が3規格あり、使用した樹種も異なるのは、埋設桶を増やした結果ではないかと考えている。

②2号建物遺物出土状況

2号建物は、建物の西壁面を構築していたと思われる柱や簾（1号施設）が、天明泥流により北西方向に倒伏し遺存していたものと考えられる。そのため、北西方向にある遺物については、2号建物に帰属する可能性が高い。調査時に2号建物とされた遺物の中には、天明期よりも新しい陶磁器が確認された。良好に遺存する2号建物ではあるが、攪乱もあり、後世の遺物が僅かに混入しているものと考えている。

③2号建物出土遺物

2号建物より出土した遺物の中で、特筆すべきものに家形をした木製品（2建No.45）がある。8枚の板材を木釘で接合し、家形にした木製品である。正面下側には木釘の痕跡が見られ、欠損するが正面下部にも材がついていたと思われる。正面上方には、船馬の様な形態をした五角形の材がついており、これと対になるような材が欠損しているのだろう。正面上方五角形の材下辺には、円形の孔が両端に2カ所穿たれている。穿たれた円孔は、その位置から、観音開きのような扉の支柱を入れるための孔と考えている。2号建物は、便所であり肥料を作製及び貯蔵するための施設であった可能性が高い。遺物の形態と建物西壁面を構築していたと思われる柱付近で出土したことなどから、家形木製品には、お札などが入れられていたのではないかと考えている。

2建No.44は自在鉤状の木製品である。中央部が山形をしているが、自在鉤状の箇所から山形の頂点までは弧状になっている。端部が欠損しておりその用途は明らかでないが、その形状から桶の側板を製作する際に使用し

た道具のように思われる。

2建No.60の鉄製品は欠損するも、9建No.42に近似している。その形状から、桶のタガを取りつける際に使用する道具のように思われる。9号建物は「酒蔵用」と墨書された刷毛が出土したことから、酒蔵である10号建物との関連が指摘される。また9号建物からは、僅かな範囲から多くの桶・樽類が出土している。同様に2号建物からも、埋設された8基の桶の他にも9号桶（2建No.48）が出土している。桶・樽類が多く出土した両建物から、近似した道具が出土したことを追記しておく。

鋭利な刃物の痕跡を残す材（2建No.51・52・53）も出土した。作業台とも考えられる。便所であり肥料を作製及び貯蔵するための施設と、出土した作業台との関係については明らかでない。2号建物からは、鎌（2建No.59）なども出土しており、納屋としての役割を持っていたとも考えられる。

9号桶からは、イメの頭蓋骨及び左右下顎骨、ネコの四肢骨、二ホンアナグマの四肢骨が出土した。天明泥流により流入したのではないと思われるが、桶内より出土した理由は明らかでない。同様に2号桶からは二ホンゾカの頭蓋骨が出土した。桶と獣骨との関係については今後の課題としたい。

(4) 3号建物（第73図、PL.18-1）

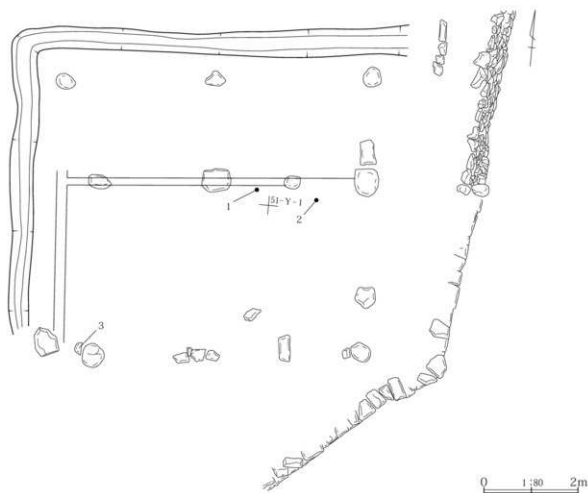
①3号建物の概要

3号建物は1号屋敷跡の南東端部に位置し、東側の4号石垣、西側の2号建物と隣接する。41区X・Y-25、42区A-25、51区X・Y-1、52区A-1グリッドに位置する。東西6.5m×南北5.9mの規模を測る。礎石の配置は基本的に、東西2間×南北2間であるが、1間の中間にもう1基礎石が据えられていた。

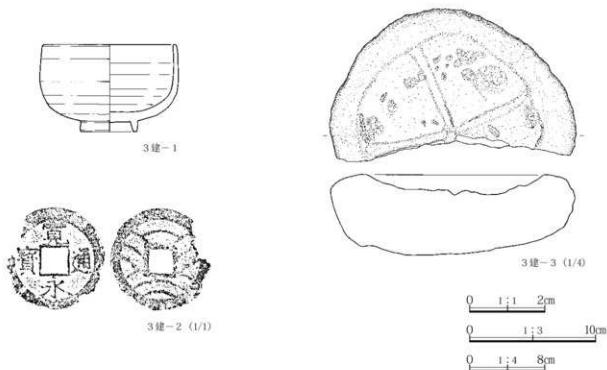
建物西側と建物中央部には、礎石列上に土台が据えられていた痕跡が残る。土台痕の規模は西側が幅22cm×深さ20cm、中央部が幅18cm×深さ10cmで、やや西側土台の方が太い。中央部の土台痕の北側面を境界として建物北半部分は、前述した1号建物や2号建物築造後の盛土に覆われ、建物南半部分より1段高く造成されている。礎石の石材は全て粗粒輝石安山岩である。

②3号建物遺物出土状況及び出土遺物

3号建物は土台建物と思われるが、建築部材はなく礎



第73図 I区3号建物 遺物出土状況



第74図 I区3号建物出土遺物1～3

石のみが遺存していた。出土遺物も僅かである。被覆する天明泥流は南東から北西方向に流入したと思われる、建物西側より出土した遺物の一部は3号建物に帰属する可能性が考えられる。

3号建物から特筆すべき遺物は出土していない。ヒデ鉢(3建No. 3)と思われる石製品は欠損しており、出土状況から土台下の礎石の一部として使用されていたものと考えている。

(5) 4号建物(第75・76図、PL.18-2~21-4)

① 4号建物の概要

4号建物は1号屋敷跡の北端部に位置し、1号建物の北側に存在する。52区A・B・C-6・7グリッドに位置する。建物の四方に据えられ組まれた土台はやや歪んだ長方形を呈しているが、桁行(東西)5.7m×梁行(南北)3.6mの規模を測る。地面からの床高は25~35cm(H=532.20~532.30m)を測る。

4号建物は、1号屋敷跡の付属建物で土台建物である。土台、大引、根太、床板、柱や敷居の一部等が遺存している。建物内部は基本的に床板が貼られているが、床面の中央部やや南寄り部分に方形の開口部が存在し、床下へと連結している。検出当初、囲炉裏を想定したが、灰、石組の基礎及びその痕跡は検出されなかった。

1号屋敷跡を構成する1~4号建物のうち、この4号建物は、建物ごと全体に天明泥流により運搬されたと考えられ、原位置を保っていない。4号建物は推定される原位置から、西方向へ約13°回転しながら、建物北東隅の位置で比較すると約1.5m移動している。

建物の建築部材に関しては、土台、大引、根太、床板、柱や敷居の一部が接合し組まれた状態で出土している。また、北壁を構築していたと考えられる土壁の床面付近の一部が遺存して出土している。しかしながら、床面より上部構造の大半部分は失われている。4号建物の土台は、1号建物や2号建物のように、整然と敷設された礎石の上に据えられていたわけではなく、基本的には、土台の下には礎石を敷設しない構造と考えられる。

4号建物の床下の地面には天明三年時には廃絶された建物(8号建物)の礎石列及び敷き詰められた小礫の地盤が存在し、その建物の規模や囲炉裏痕と考えられる位置は、4号建物のそれらと合致する。従って、4号建物は、

天明三年以前には、8号建物の基礎の上に建てられていたが、その後、検出された雨落溝等から推定される原位置へ移築されて、天明泥流に被災し、約1.5m流されたことになる。4号建物を推定される原位置へ戻すと、8号建物の東隅の礎石及び北・西隅を結ぶ礎石列上の中間にあたる礎石が4号建物の礎石として再利用されている可能性がある。

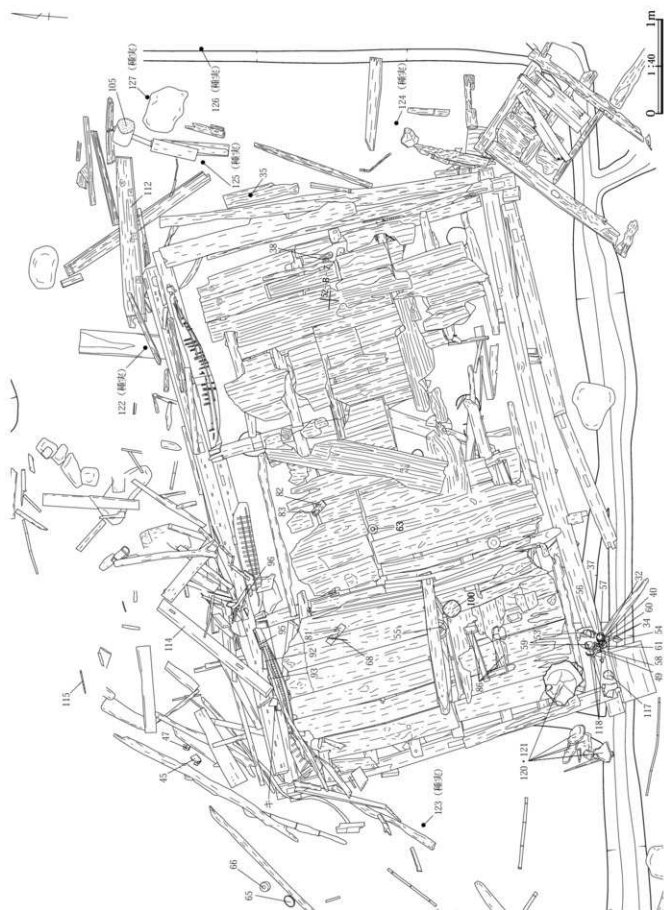
北・東・南側土台にはそれぞれの土台の外側に寄り添うように、1本ずつ土台状の部材が据えられている。これらの建築部材は、4本の側土台をはじめ、他の大引や根太等の部材とも一切接合して出土しておらず、用途や使用状況は不明である。しかしながら、天明泥流の流下及び運搬状況から判断し、この出土状況と類似した形態で建物の周囲に据えられていた可能性は高く、不確定ながら、これらの部材も仮に「土台」として扱っておく。

4号建物については、柱が土台に接合した状態で、その一部が遺存して出土している。北側土台には、等間隔(約184cm間隔)に3カ所、柱が納の仕口により接合しており、立てられた柱の根元には納穴が施されて、2本の太引の北木口の納が接合したままの状態出土している。太引は、南北方向に3本使用されている。根太は、東西方向に計16本、南北方向に根太掛けを兼用して1本使用されている。東西方向の根太は、およその長さから判断して3通りあり、①6尺(約182cm)程度、②9尺(約273cm)程度、③12尺(約364cm)程度に分類できる。

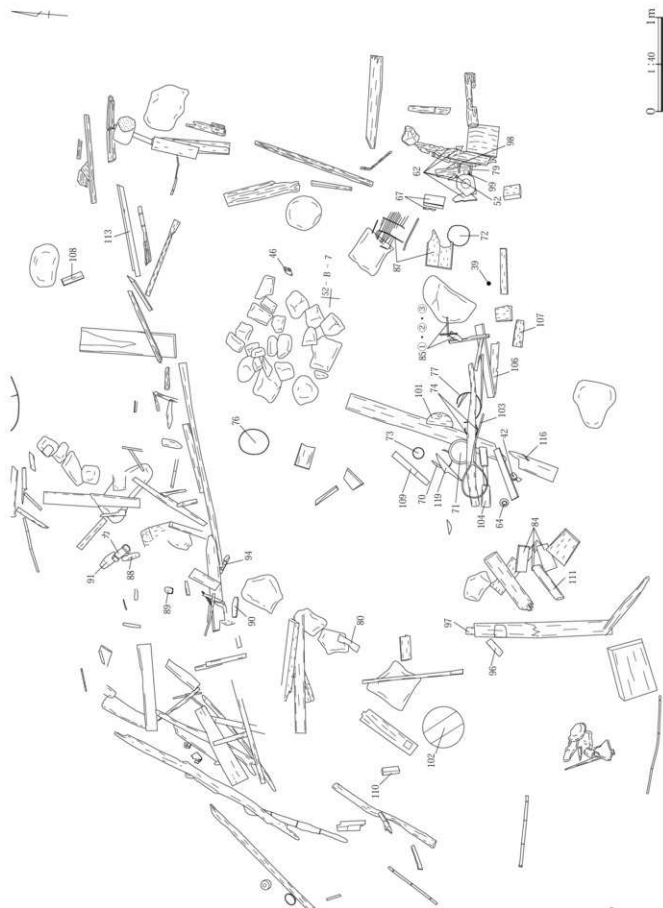
北側土台の表面(上面)には、土台上に壁面として立ち上がっていたと考えられる土壁の一部が遺存している。土台の中央部と東寄りの部分に遺存しており、東寄りの方が遺存状況が良い。土壁は天明泥流の流下により北西方向へ倒されたと考えられ、壁面の内面(建物内部)が上面を向いて出土している。土壁の厚さは8~10cm程度で、縦方向には幅2~3cmの竹或いは木製の小舞が立ち並び、横方向には竹を1~2cmに裂いた小舞が3段組まれている様子が確認できる。壁面には黄色ロームが使用されている。

② 4号建物遺物出土状況

4号建物からは、組物となる陶磁器や木製の道具類など多様な遺物が数多く出土している。また出土状況も特徴的で、1号建物側の床下から数多くの遺物が出土している。これは、4号建物においても天明泥流が遺物を押



第75図 Ⅰ区4号建物 遺物出土状況①床上



第76図 1区4号建物 遺物出土状況②床下

第3章 発見された遺物

し流し、床下に入り込んだためと考えている。また泥流の様相を考慮すれば、4号建物の床下より出土した遺物の中には、隣接する1号建物に帰属すべき遺物もあることが考えられる。しかし、これらを建物ごとに区分することは難しく、4号建物の床下より出土した遺物については4号建物の遺物として報告する。

4号建物は、天明泥流により西方へ約13°回転しながら1.5mほど移動した建物である。移動した距離は僅かだが、床上にあったろう遺物についても、同様或いはそれ以上に移動したものである。そのため、建物北側及び西側より出土した遺物は、4号建物に帰属すべき遺物が多く混在しているものと考えている。

4号建物では、床上から多くの遺物が出土している。東宮遺跡の中でも良好な遺存状況であるが、その一因として多くのものが床上に置かれていたことが考えられる。陶磁器の一部は重ねられた状態で出土しており、その傍証となるだろう。具体的には、建物南西隅から、4建No.56の上に、下からNo.58・60・59とNo.57・40・32・37が重ねられ、他にNo.34、No.49、No.53、No.61が重ねるように出土している。

油を搾るための圧搾機（4建No.86）など、道具類も数多く出土した。また、お膳や重箱の他に、染付中皿など的高級品も見られた。これらの出土状況及び出土遺物からも、4号建物は1号屋敷跡で物置のような役割も果たしていたことが推測される。

③4号建物出土遺物

4号建物からは多くの陶磁器、道具類が出土した。陶磁器では、染付中皿（4建No.54・55・56）が3点出土した。同様に竹文の染付皿であり、組物と考えられる。同じく染付端反碗（4建No.33・34・35）も組物と考えられ、いくつかの組物が確認できた。

4建No.61は京・信楽系の陶器と思われる。梅の飾りがつく中央の突起部分は空洞であり、この空洞には障壁があると思われる。「十分盃」とも呼ばれるこの陶器は、サイフォンの原理により、一定量の液体を注ぐと高台内の円孔から中に注がれた液体が全て流れ出る仕組みと思われる。出土例は極めて少ない。十分盃は実用品ではないだろうが、どのような場面で、この盃が使用されたのかは明らかでない。大規模な1号建物を主屋とする1号屋敷跡から出土しており、特別な陶器であるとも考えら

れる。

4建No.52は京焼風の皿である。高台内に「首」と墨書されていた。2屋敷No.3にも同様の皿に「首」と墨書されていた。「首」の示す意味も含め、詳細は明らかでない。

4建No.67の重箱は、内面を赤色漆で仕上げ、外面には時絵により竹などの文様が描かれていた。また床下ではあるが、東宮遺跡では唯一、赤色漆で仕上げられた曲物（4建No.72）も出土している。4号建物からは多様な漆製品が出土しており、大規模な主屋を持つ1号屋敷跡らしい出土状況といえるだろう。

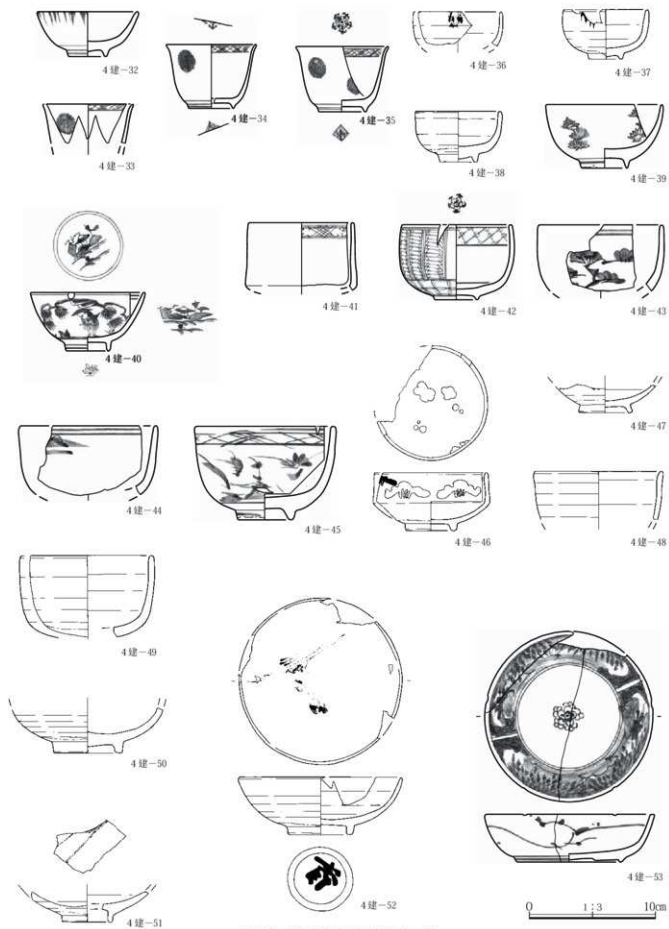
特筆すべき遺物のひとつに木製の圧搾機（4建No.86）がある。木架状の溝が彫られた⑤は2点あり、袋に入れられた種実を、その間に据えたものと思われる。⑤の左右には楔（③・④）があり、これを打ち込むことで⑤に左右からの圧力が掛かり、⑤の間に据えられた種実から油を搾る仕組みだと考えられる。圧搾機には付着物が遺存していた。これと灯火皿に残る付着物とを分析すると、同様の成分であることが確認された。このことから、圧搾機は灯火皿などに使用された、油を搾るための搾油機であると考えられる。分析の成果は第4章第4節8を参照して頂きたい。

4建No.87は、側面が格子状となる木製の箱と思われる。底板が40×30cmほどの規模で、側面が竹串のようなもので格子状になる形態から、虫籠や鳥籠のような木製品であると考えている。

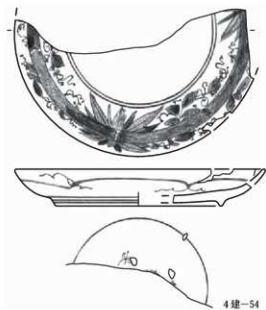
4号建物からは、床下を中心に多くの道具類が出土している。比較的大型の道具があり、1号建物北側に置かれていた道具が、天明泥流で4号建物の床下に流れ込んだとも考えられる。4建No.105は掛丈で、柄が細くやや脆弱な印象を持つ。4建No.104は、やや小型の竪杖である。4建No.103は「たも綱」のようにも見える道具である。綱を想定した範囲には何も遺存しておらず、道具の用途については推測の域を出ない。

陶磁器（4建No.53・55・56・57）には漆継により補修した痕跡が明瞭に残っていた。曲物（4建No.72）では、欠損部分を木皮で繋げ補修したと思われる補修痕跡が確認された。鉄鍋（4建No.121）にも溶接によって補修された補修痕跡があり、出土遺物に残る多様な補修痕跡が確認できた。

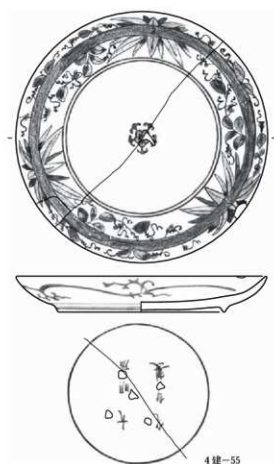
第1節 1区の調査成果



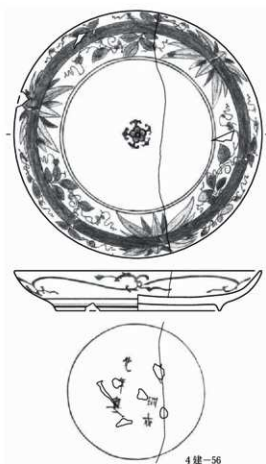
第77図 1区4号建物出土遺物32～53



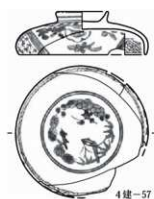
4建-54



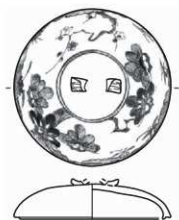
4建-55



4建-56



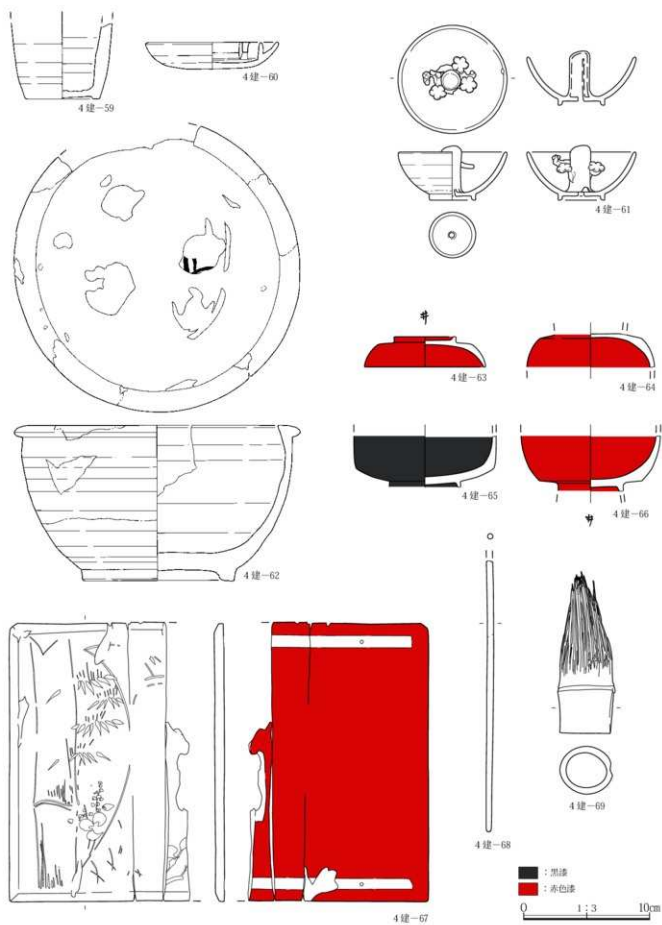
4建-57



4建-58

0 1:3 10cm

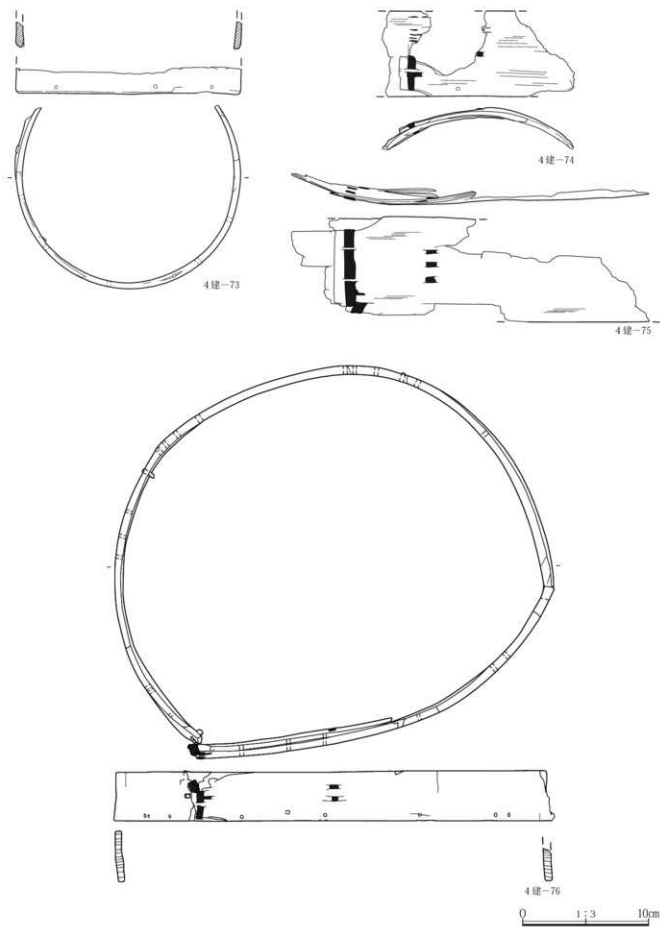
第78図 Ⅰ区4号建物出土遺物54～58



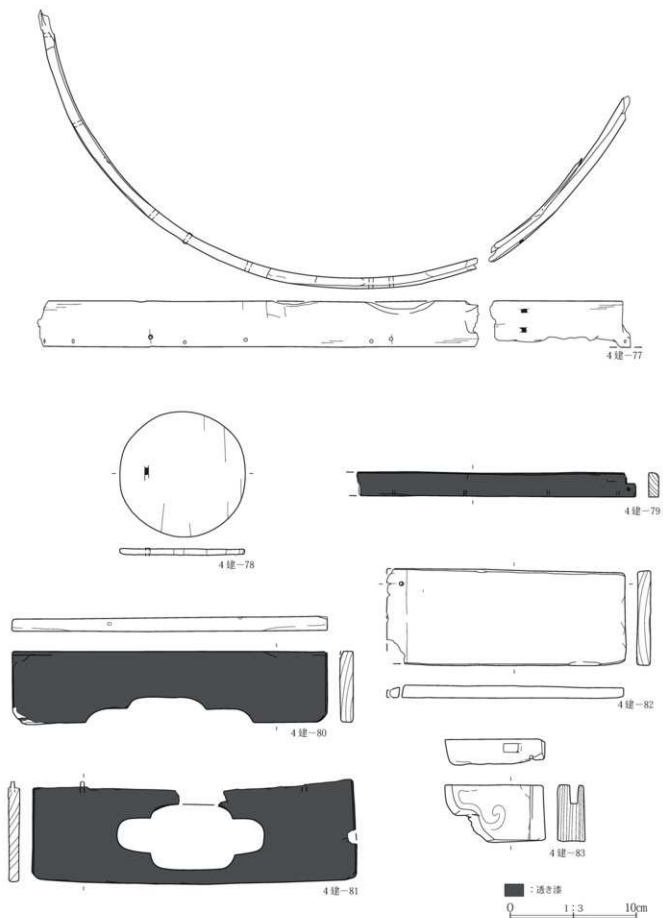
第79図 1区4号建物出土遺物59～69



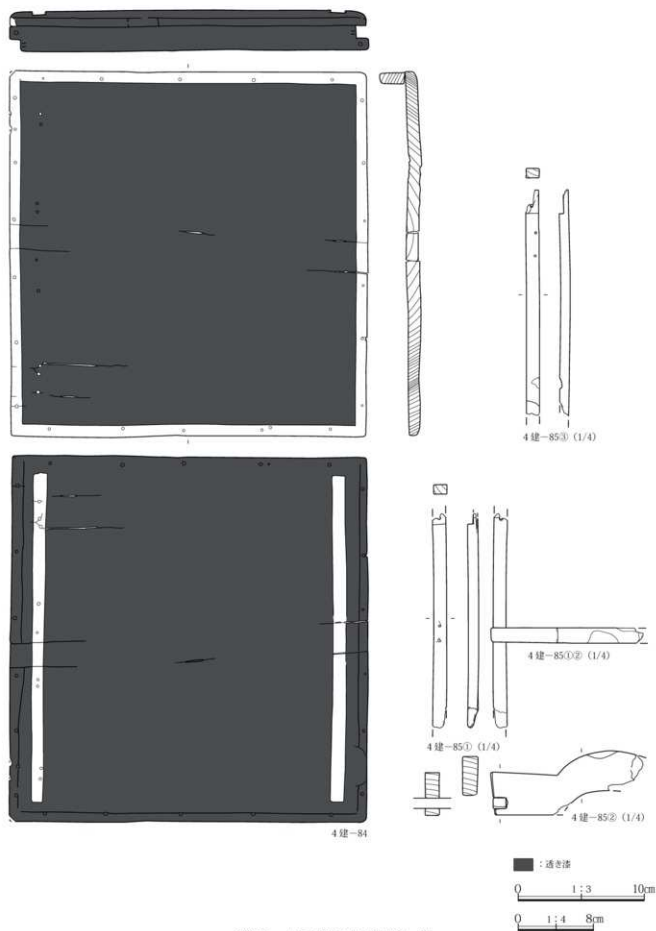
第80図 1区4号建物出土遺物70～72



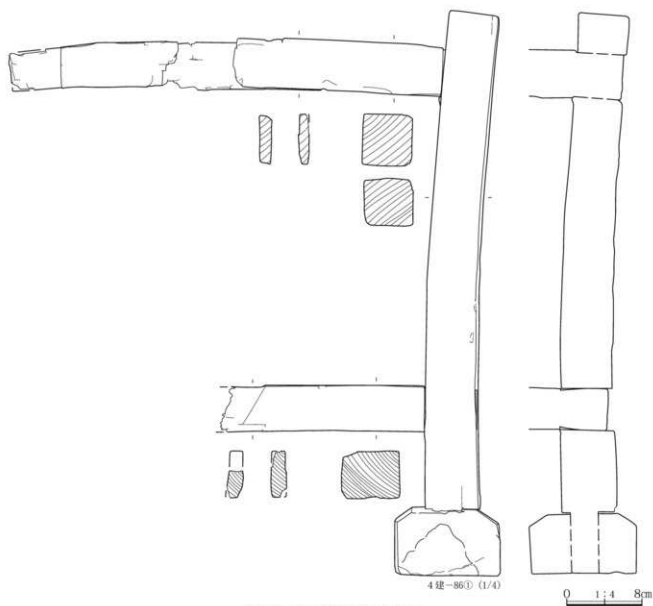
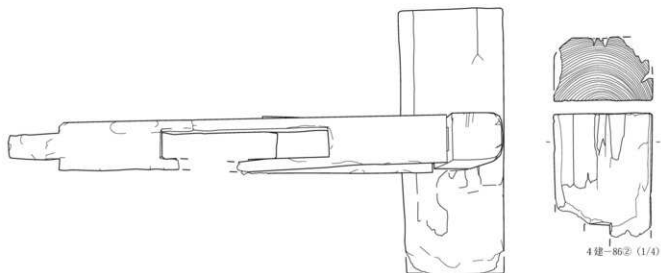
第81図 1区4号建物出土遺物73～76



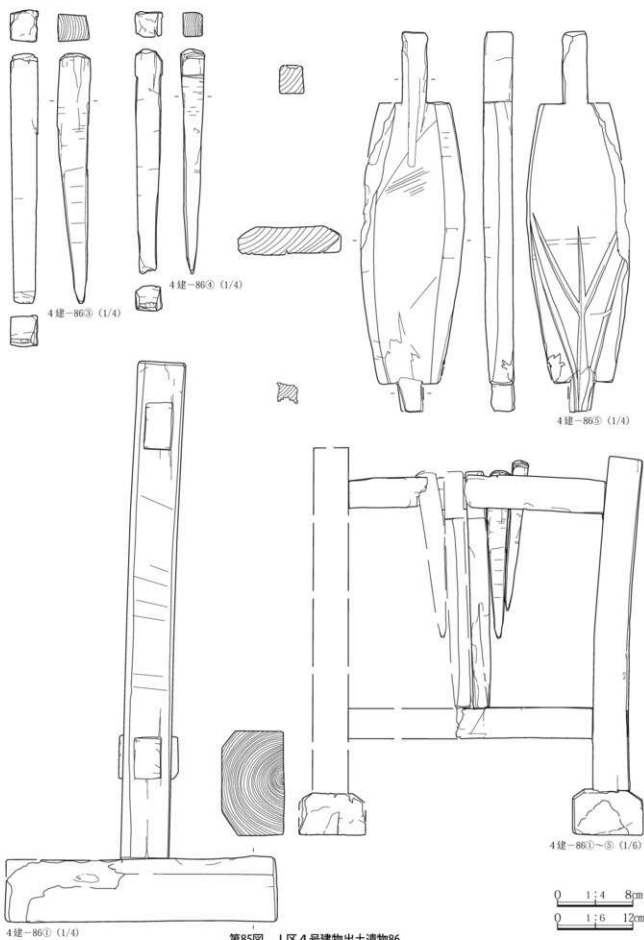
第82図 I区4号建物出土遺物77～83



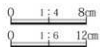
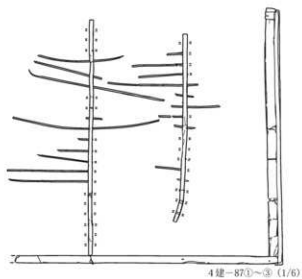
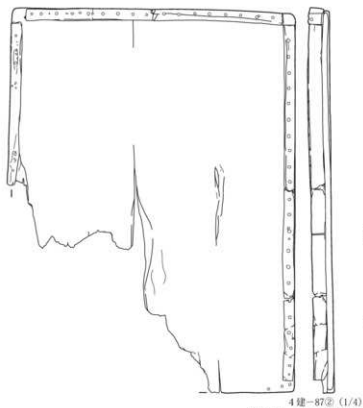
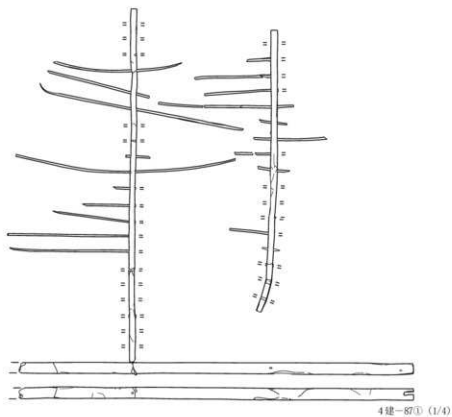
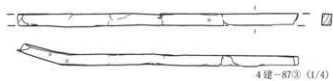
第83図 1区4号建物出土遺物84・85



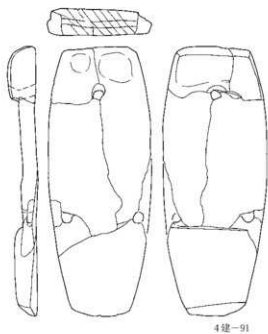
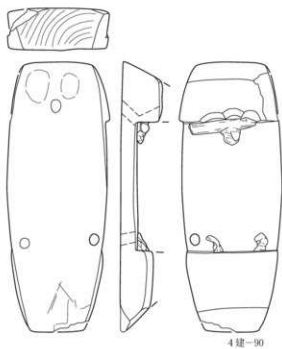
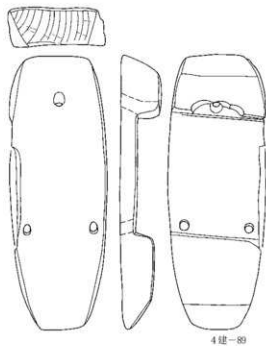
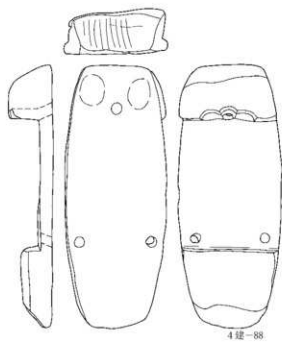
第84図 I区4号建物出土遺物86



第85図 1区4号建物出土遺物86

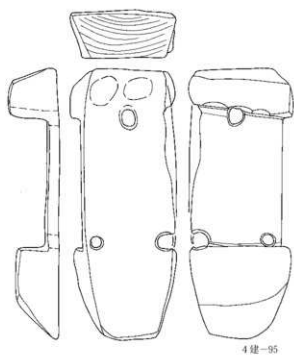
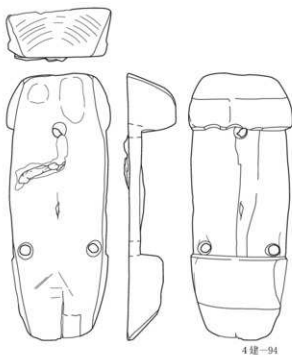
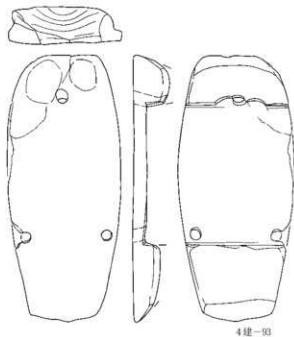
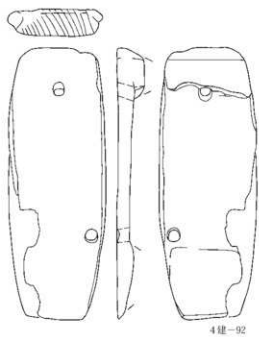


第86図 I区4号建物出土遺物87



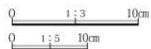
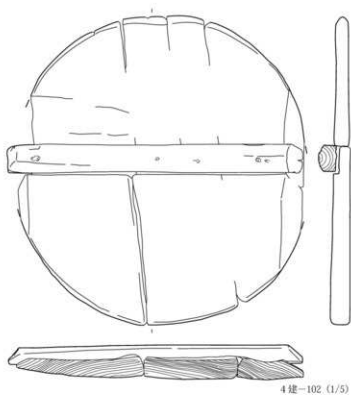
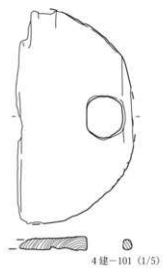
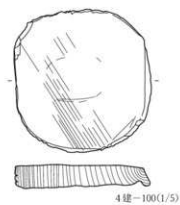
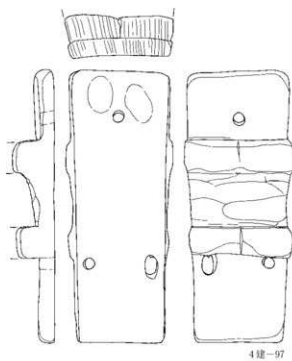
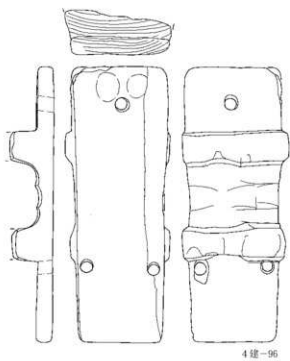
0 1:3 10cm

第87図 1区4号建物出土遺物88～91

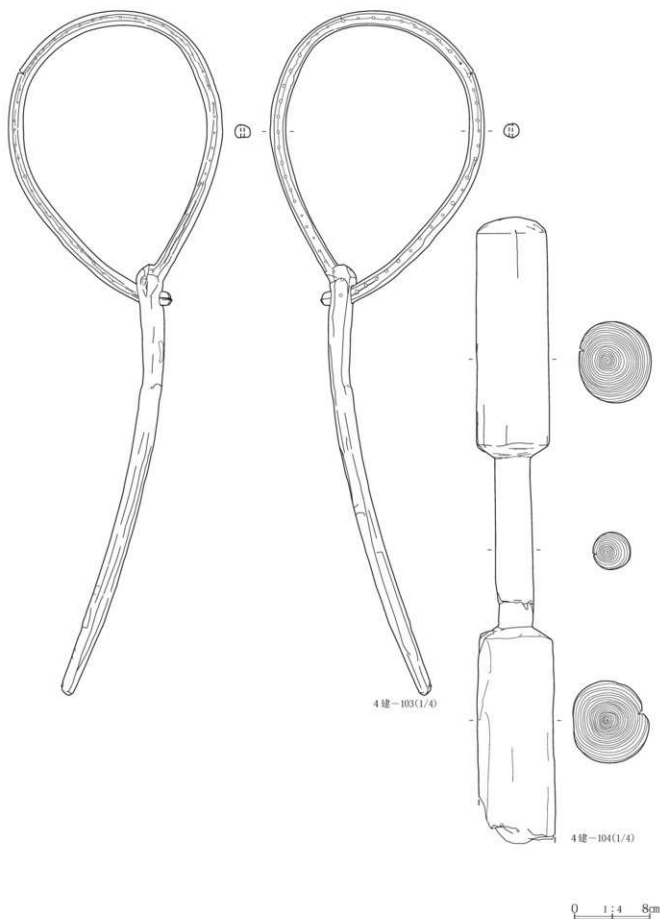


0 1:3 10cm

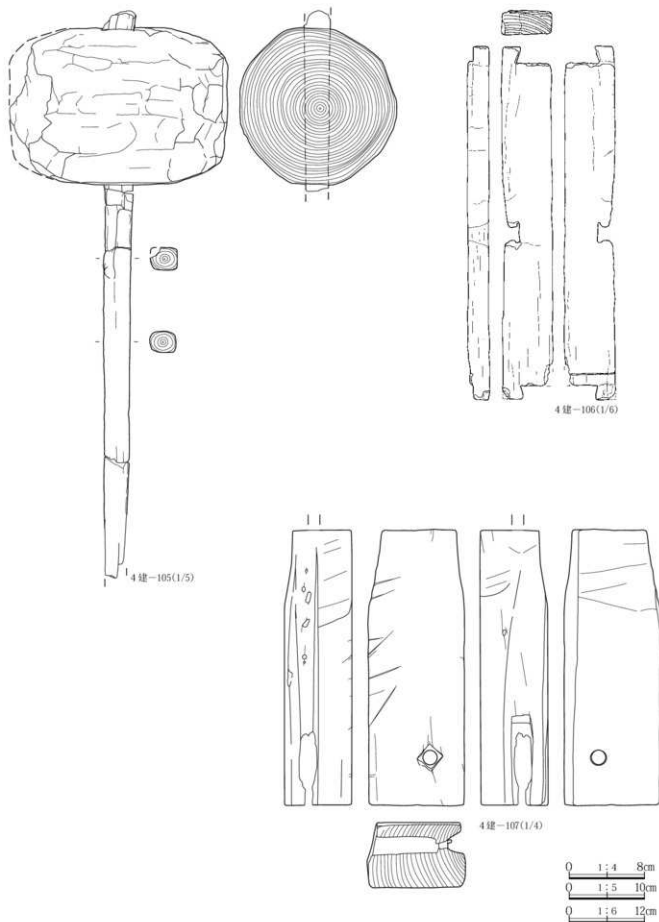
第88図 1区4号建物出土遺物92～95



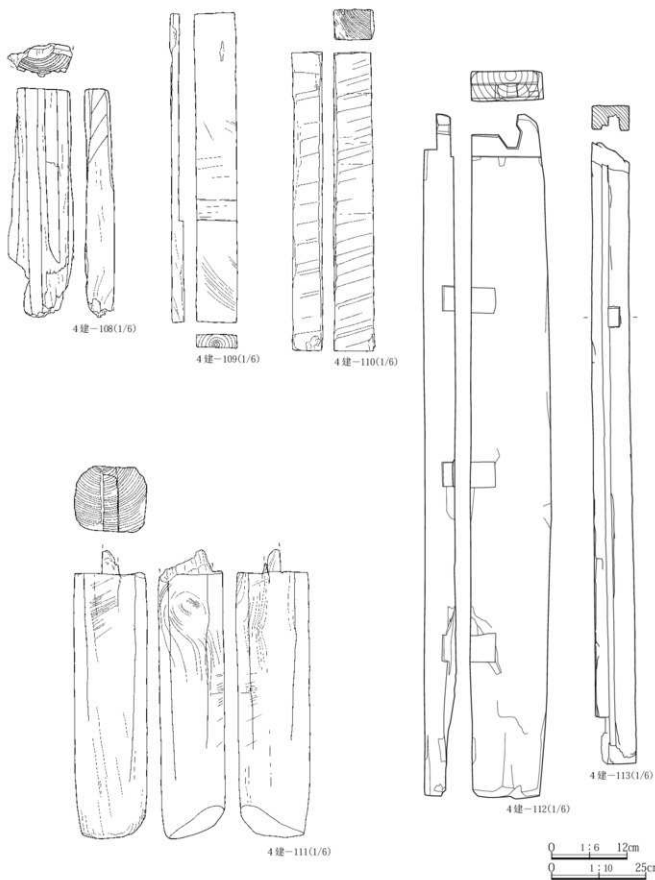
第89図 1区4号建物出土遺物96・97・100～102



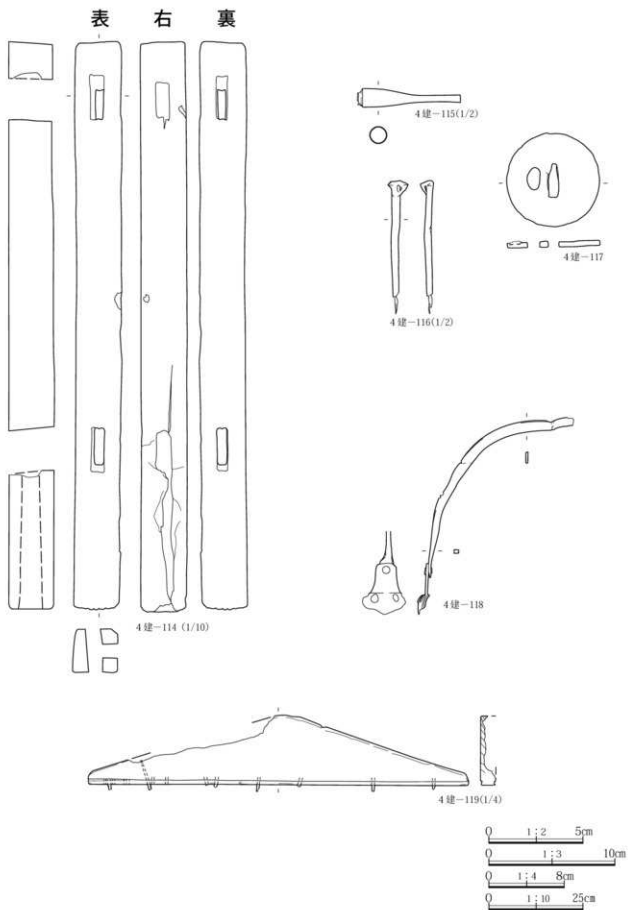
第90図 Ⅰ区4号建物出土遺物103・104



第91図 1区4号建物出土遺物105～107



第92図 Ⅰ区4号建物出土遺物108～113



第93図 1区4号建物出土遺物114～119



第94图 Ⅰ区4号建物出土遗物120·121

(6) 8号建物(第95図、PL.21-5)

① 8号建物の概要

8号建物は1号屋敷跡の北端部、52区A・B-6・7、C-6グリッドに位置する。建物の礎石については、桁行5.5m×梁行3.6mの規模を測る。また、礎石の基盤となっている敷礎の範囲については、桁行方向約7.5m×梁行方向約7.5m×深さ30～50cmの規模を測る。

礎石の基盤には、径10～20cmの垂角礫が30～50cmの厚さで敷き詰められている。その敷礎の上には礎石が据えられ、礎石列の外周部を被覆するように、径5～10cmのやや小振りの垂角礫が5～10cmの厚さでさらに敷き詰められている。この敷礎の目的や用途については不明である。

建物中央部には、敷礎を構成する礫よりやや大きめ(径20～40cm)の垂角礫が集中する部分が確認でき、囲炉裏の基礎となる石組の痕跡の可能性が高いと考えている。

8号建物は、天明泥流被災時に上屋(建物)は存在せず、礎石と礎敷が遺存していた。前述の4号建物とは時期差は確定できないが、囲炉裏位置も含め平面的に重複する。建物の出土状況から考えると、天明三年(1783年)以前に8号建物が建てられ、その後推定される4号建物の原位置へ上屋を土台ごと移築し、天明泥流に被災したことになる(第95図参照)。以上を踏まえれば、8号建物と4号建物は同一の建物と考えても良いだろう。

8号建物をほぼ同じ位置で、棟方向を変えるような移築をした理由に、8号溝の存在が挙げられる。8号溝は古い段階の1号屋敷跡地境溝と考えられ、8号建物は、8号溝とそれに続くであろう4号溝東側に沿うように建てられていた。8号溝は、その後1号屋敷跡が北西側に拡張・造成されたことで埋められ、代わって4号溝西側が地境溝として掘られた。この時に屋敷境は大きく変容したため、新しい屋敷境に沿うように8号建物は移築されたのではないかと考えている。詳細は第4章第1節5を参照して頂きたい。

8号溝は、1号建物北西側に植えられていた1号倒木の根元下付近を通る。この1号倒木の樹種を、『東宮遺跡(1)』では「槐(エンジュ)」と報告したが誤記であり、「ウメ」であることが確認された。樹皮付近の遺存

状況が悪く樹齢は明らかでないが、樹皮付近までで22年ほどの年輪を数えることができ、これが1号倒木のおよその樹齢だと考えている。

1号倒木は、その出土状況から、天明泥流で被災するまで1号建物北側に立木し生育していたものと思われる。8号溝は、この1号倒木の根元下付近を通る。1号倒木が植えられたのは、天明三年(1783年)よりも樹齢の22年を差し引いた1761年頃と思われる。根元下を通る8号溝が埋められ1号屋敷跡が拡張・造成されたのも、およそ同時期である18世紀中頃ではないかと推測している。これらの年代については推測の域を出ないが、1号屋敷跡の拡張・造成後ほどなくして、8号建物の上屋は4号建物の原位置に移築されたものと考えている。

② 8号建物遺物出土状況及び出土遺物

前述の通り、8号建物は古い段階の4号建物跡と思われる。8号建物範囲から出土した遺物は、4号建物に帰属すべき遺物だと考えられる。そのため、8号建物出土遺物については出土位置を確認した後、4号建物出土遺物として報告した。しかし、出土位置を確認できない遺物及び8号建物地山中の遺物については、8号建物出土遺物として報告している。

出土した陶磁器は、連房5～7小期(連房式登窯第5～7小期の略。以下同様に略す)に収まり、天明期よりもやや古い。8建No.5は石皿の破片とも思われるが、転用され8号建物礎石に使用されたことも考えられるためここで報告する。

(7) 1号石垣(第97図、PL.22-3)

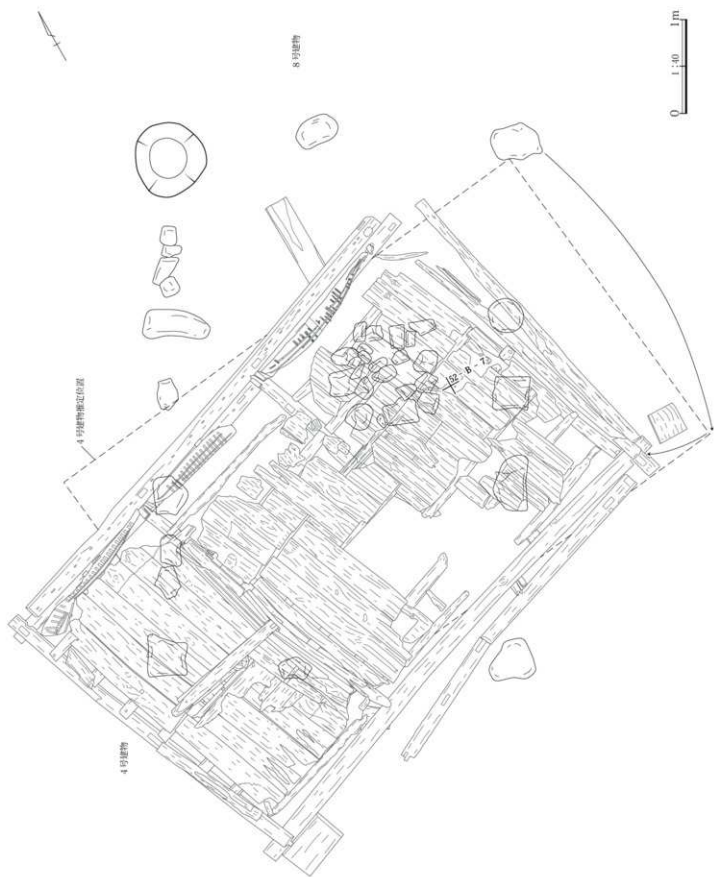
① 1号石垣の概要

1号屋敷跡の西部、42区E-24・25、52区E-1・2グリッドに位置する。調査前の状況では、石垣の上部約30cmの部分は天明泥流堆積物等に被覆されておらず、現地表面に露出していた。

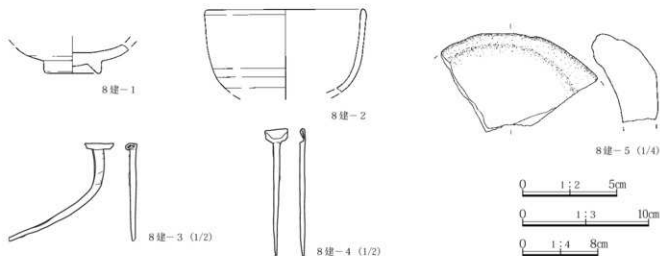
石垣の根石のレベルには、一部角材が据えられ、その上に石組が構築された部分も確認できる。築石の中には、長さ1.2mにも及ぶ長方形の切石も転用されている。

石垣裏側の地山(法面)は天明泥流堆積物であり、石垣はその土層を切って構築されている。裏込めには径10～15cmの垂角礫が充填されていた。

② 1号石垣遺物出土状況及び出土遺物



第95図 1区8号建物



第96図 1区8号建物出土遺物1～5

1号石垣からは、陶磁器や鎌などが出土した。天明泥流の様相や、1号屋敷跡の西側に位置することからも、1号建物の遺物が混在している可能性も考えられる。

(8) 4号溝 (第97図、PL.22- 1)

① 4号溝の概要

1号屋敷跡の西側から北側の境界に位置し、2号石垣に沿って東流する。51区Y- 8、52区A・B- 8、C- 7、D- 6、E- 5・6グリッドに位置する。出土状況では、溝の壁面を構成する石組の上面はAs-A軽石に被覆されており、水面下の溝底部にもAs-A軽石の堆積が確認できた。

1号屋敷跡の北側では境界を形成する2号石垣に沿って東流するが、屋敷跡西側では、溝は1号建物の西側土台に沿う形で北流していたものと考えられ、2号石垣段下でやや屈曲して流下方向を東寄りへと転換する。

2号石垣と4号溝は、平面的にほぼ中央部を境界に東西部分の構造上の相違が認められた。原因については、前述した8号溝との関連のなかで、敷地造成段階と敷地拡張段階との間に生じる構造上の差異が想定できる。これは、1号屋敷跡の拡張と造成の結果、2号石垣と4号溝の西側部分が増築されたためと考えられる。

8号溝と4号溝の連結部分については、平面的にも構造的にも全く違和感はなく、一時期、一連の溝として使用されていた可能性は極めて高い。

② 4号溝遺物出土状況及び出土遺物

4号溝からは、木製品も含め多くの遺物が出土した。湧水により良好に遺存したものと考えている。

出土した遺物であるが、被覆する天明泥流が南東から

北西方向に流入したことから、その大半が1号及び4号建物に帰属すべき遺物だと思われる。しかし、これらの遺物を、各建物及び4号溝に区分することは難しく、ここでは4号溝出土遺物として報告する。

4溝No. 8は、平面円形の凹みが施された板材である。また、4溝No. 9は、平面台形に彫り凹められた板材である。ともに、用途等の詳細は明らかでない。

(9) 1号橋 (第97図、PL.22- 1・2)

① 1号橋の概要

1号屋敷跡の北東隅、屋敷跡から1号井戸へと延長する1号道上で、4号溝を渡る位置に掛けられている。51区Y- 8、52区A- 8グリッドに位置する。出土状況では、橋の上面はAs-A軽石に被覆されていた。

溝の壁を構築する石組に、板材10枚程度を二から三重に渡して掛け、基礎や下部構造などを伴わない簡易な構造の橋である。

② 1号橋遺物出土状況及び出土遺物

4号溝に掛かる橋であり、4号溝と同様に1号及び4号建物に帰属すべき出土遺物もあると思われるが、区分することは難しく、ここでは1号橋出土遺物として報告する。

(10) 1号屋敷跡遺物出土状況及び出土遺物 (第97・98・99図、PL.22- 4～23)

① 1号屋敷跡遺物出土状況

1号屋敷跡からは、屋敷北側及び西側を中心に多くの遺物が出土している。これは、天明泥流が南東から北西

第3章 発見された遺物

方向に流入してきたことが主な原因と思われる。また、同地点付近が湧水地点であることから、天明泥流で押し流された遺物が腐蝕することなく遺存したものと考えている。

1号屋敷跡北西側には1号倒木がある。出土状況から、天明泥流により倒伏するまで、原位置に立木として生育していたと思われる。この1号倒木が倒伏すると堰のようになり、天明泥流で押し流された1・4号建物の遺物が堰き止められたと考えている。そのためか、1号倒木付近からは多数の遺物が折り重なるように出土している。この様な出土状況から、1号屋敷跡出土遺物の多くは、1号建物及び4号建物に帰属する遺物と考えられる。だが、倒木付近で混在した出土遺物を各建物に帰属させることは難しく、ここでは1号屋敷跡出土遺物として報告する。

1号屋敷跡出土遺物の大半が1号倒木付近より出土した。ここでは、1号倒木及び倒木付近の遺物出土状況を中心に述べる。

【1号倒木付近】(第97・98・99図、PL.22-4～23) 1号屋敷跡北側、52区C・D-6グリッドに位置する。木の根元の位置は、平面的に原位置を保っている。検出当初は、天明泥流により運搬された流木も想定したが、根入部分を根元部分の下面から検出し、天明泥流被災時には原位置に立木として生育していたことを確認した。『東宮遺跡(1)』では、1号倒木の樹種を「槐(エンジュ)」と報告したが、誤記であり「ウメ」であることを確認した(樹種同定は能城修一氏による)。ここで改めて報告する。なお、木の倒伏方向は南西(N-124°-W)である。

1号倒木下からは8号溝が検出された。8号溝は古い段階の1号屋敷跡地境溝の可能性が高いと思われる。1号倒木の根元は8号溝付近で重複するように検出されており、遺物の重複関係からも、1号倒木は8号溝が埋められた後に植えられたと考えられる。1号倒木は天明三年(1783年)の泥流で被災し倒伏したが、8号溝は倒木の樹齢ほど前には埋められていたことになり、1号屋敷跡の拡張や造成もその頃には行われていたものと推測される。

1号倒木の幹の太さは、樹皮のないその根元付近で25cmほどを測る。僅かに樹皮付近の遺存状況が悪く樹齢は明らかでないが、22年ほどの年輪を数えることができ、

これが1号倒木のおよその樹齢だと考えている。このことから、8号溝が埋められ、1号屋敷跡が検出された時のような遺構になるのは、天明三年(1783年)から樹齢の22年を引いた18世紀中頃ではないかと推測している。

1号倒木付近からは、漆器や木製品を多く含む多数の遺物が折り重なるように出土している。天明泥流によって流された遺物は、同じく泥流によって倒伏した1号倒木に堰き止められ出土したのだと考えている。また、1号倒木に止まらなかった遺物は、石垣を乗り越えるほどに押し流されることはなく、石垣付近に止まり出土したものと考えている。

出土した遺物の中には、1号及び4号建物に帰属するものも含まれている。具体的には、1号屋敷No.53の唐白杵は、1号建物の唐白支柱(1建No.154)に据えられていたものと推測される(第17図参照)。しかし、その全てを各建物に帰属させることは難しく、ここでは1号屋敷跡出土遺物として報告する。

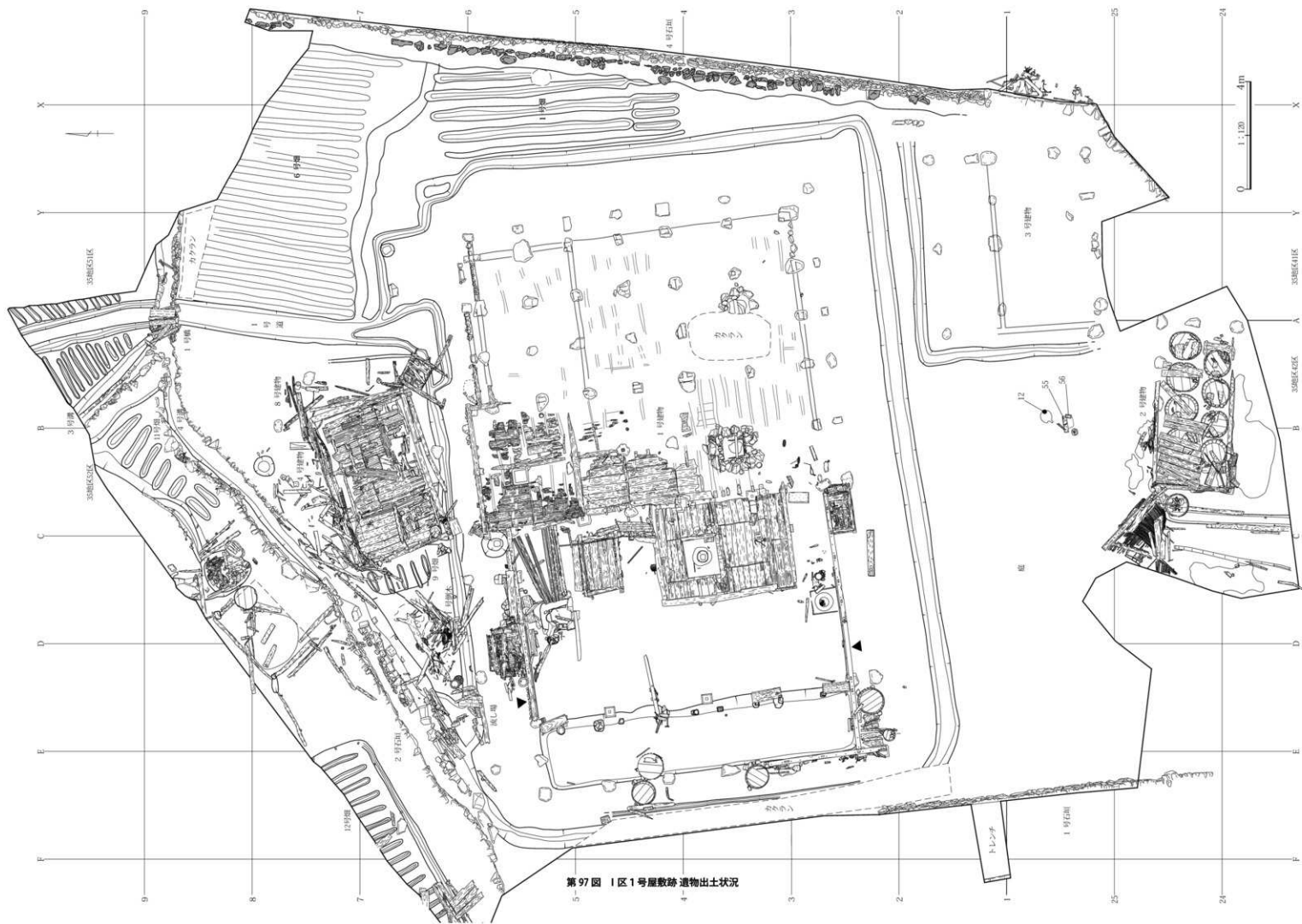
②1号屋敷跡出土遺物

1号屋敷跡出土遺物の大半は1号倒木付近から出土している。天明泥流により北西側へ多くの遺物が押し流されたことや、湧水地点に近く、漆器や木製品が極めて良好に遺存したことなどが原因と思われる。

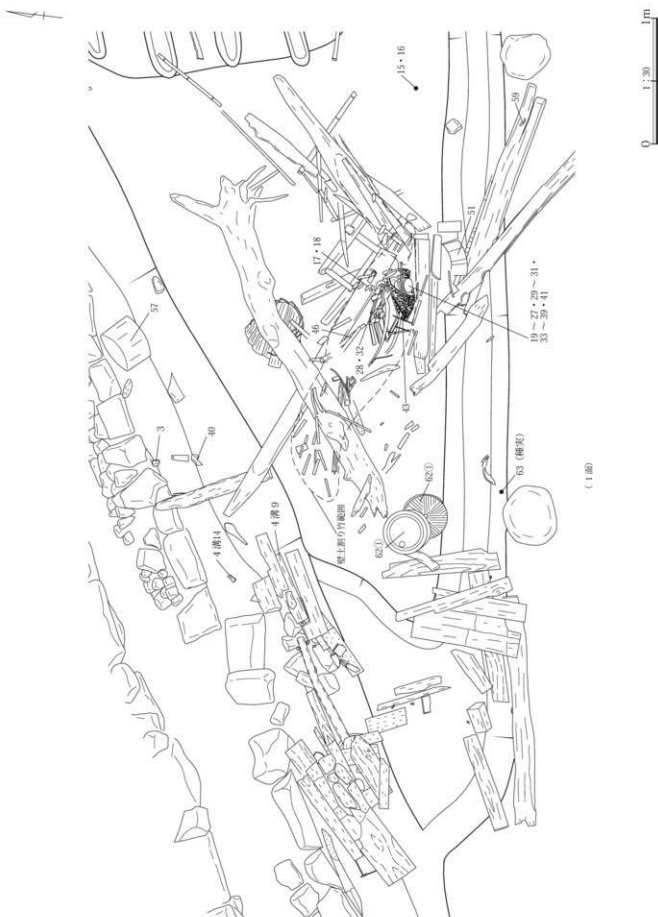
特筆すべき遺物に、半胴(1屋敷No.16)がある。木製の蓋(1屋敷No.15)がされ、中にはウメが多数遺存していた。一部果肉も残り、出土状況から「梅干し」と考えられる。この半胴は、半胴という器種が梅干しを入れる容器として使用された具体例としても貴重であり、時期と地域が限定できる点でも類例のない出土遺物といえる。また、半胴が出土した付近にある1号倒木の樹種はウメであり、半胴に遺存したウメとの関連が指摘される。

竹籠(1屋敷No.42)には、赤色漆で仕上げられた漆椀が重ねられ収められていた。具体的には、1屋敷No.38・33・35・26・29・30・27・25とNo.34・39・36・37・31・24・23・22・21・20・19の順で重なるように遺存していた。漆椀は碗の蓋も含め20点ほど確認されたが、付近からは他にも漆椀の出土があり、同様に竹籠内にあった可能性が考えられる。

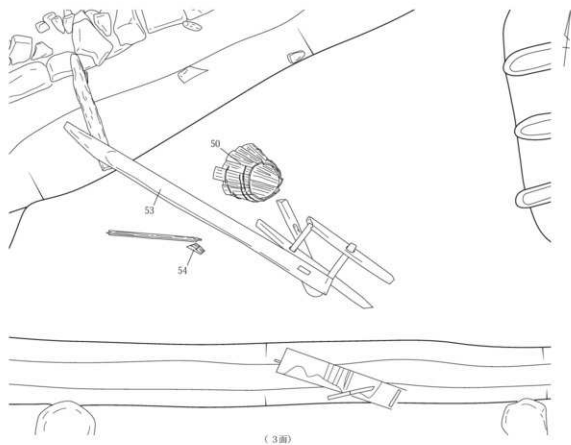
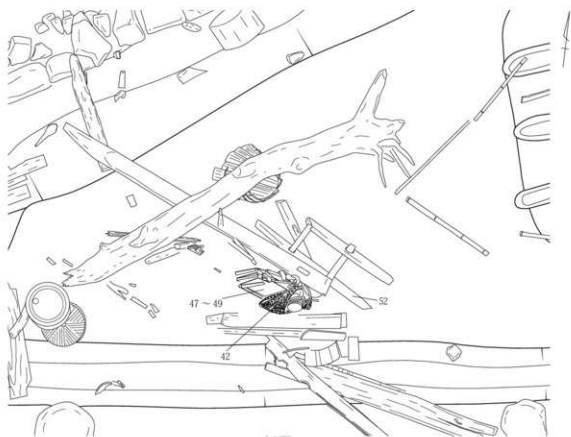
1号倒木付近からは、漆で仕上げられたお膳(1屋敷No.46～49)も出土した。1屋敷No.47・48・49のお膳



第97図 1区1号屋敷跡遺物出土状況



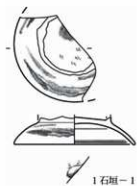
第98図 1区1号屋敷跡 遺物出土状況①1号倒木付近



0 1:30 1m

第99図 Ⅰ区1号屋敷跡遺物出土状況②1号倒木付近

第1節 1区の調査成果



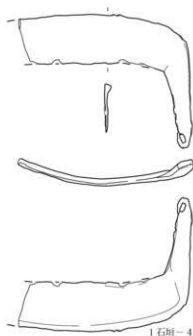
1石垣-1



1石垣-2



1石垣-3



1石垣-4

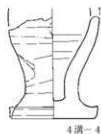


4溝-1

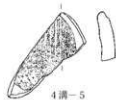


4溝-2

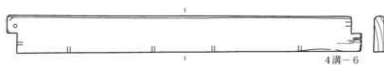
4溝-3



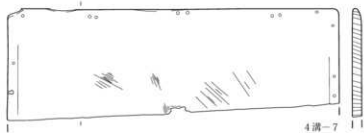
4溝-4



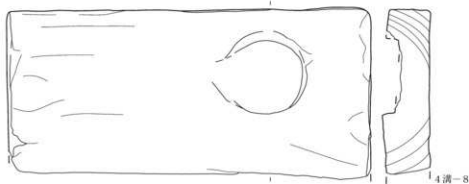
4溝-5



4溝-6



4溝-7



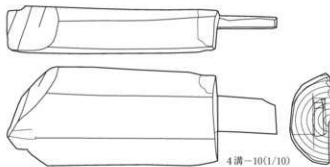
4溝-8

0 1:3 10cm

第100図 1区1号石垣1~4、4号溝1~8出土遺物



4溝-9 (1/6)



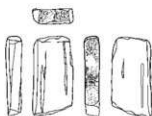
4溝-10(1/10)



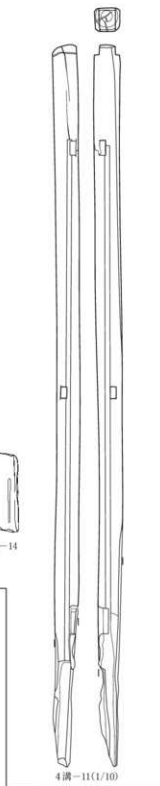
4溝-12 (1/2)



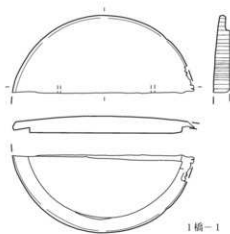
4溝-13 (1/1)



4溝-14



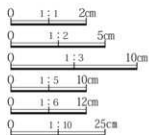
4溝-11(1/10)



1柄-1



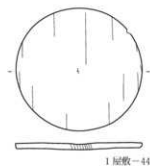
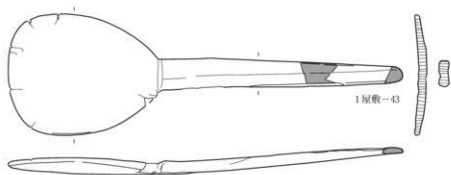
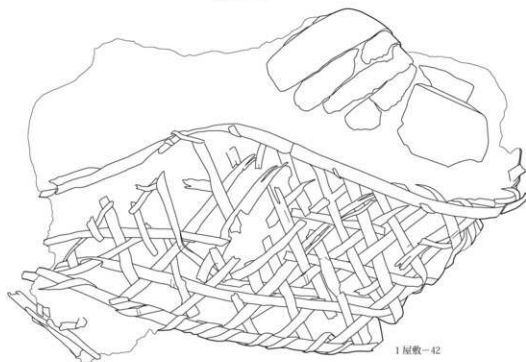
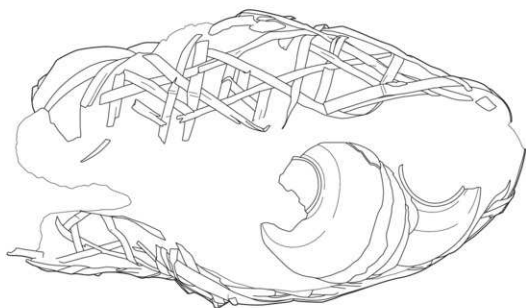
1柄-2 (1/5)



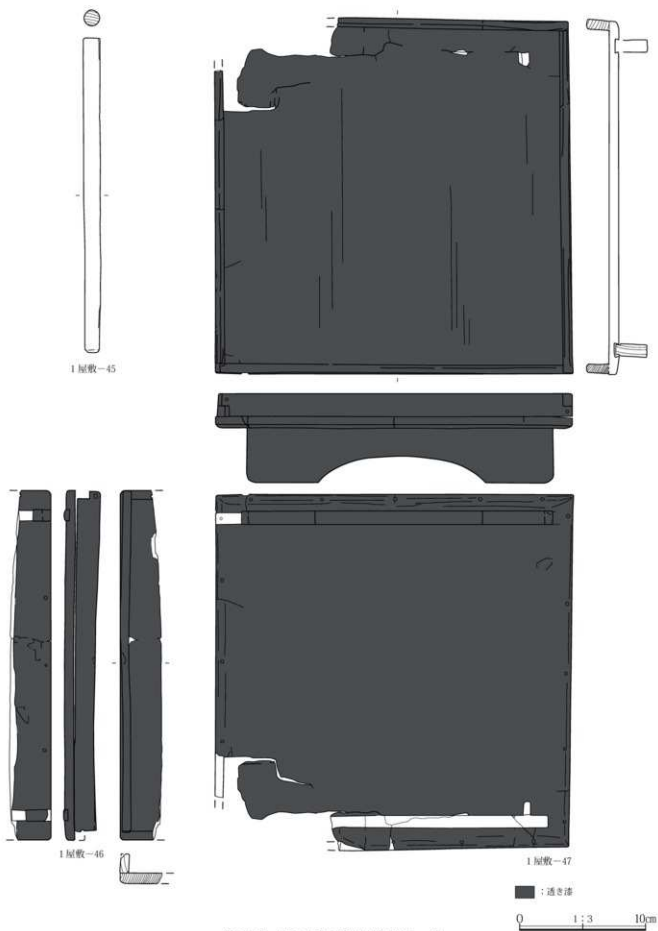
第101図 1区4号溝9～14、1号柄1・2出土遺物



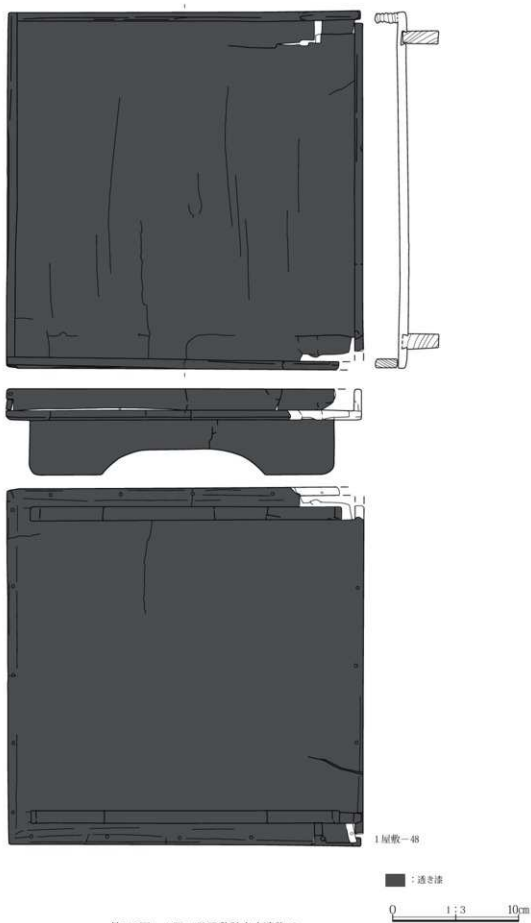
第103図 1区1号屋敷跡出土遺物23～41



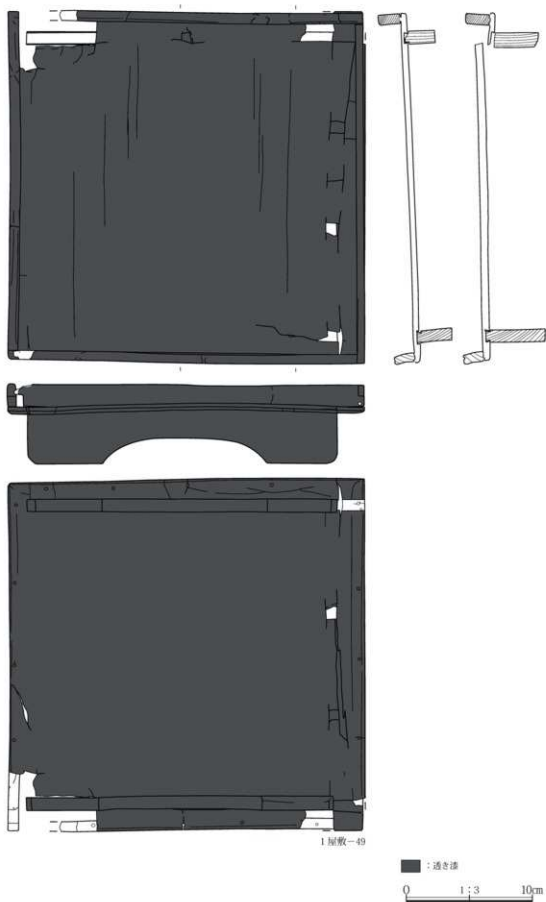
第104図 1区1号屋敷跡出土遺物42～44



第105図 Ⅰ区1号屋敷跡出土遺物45～47

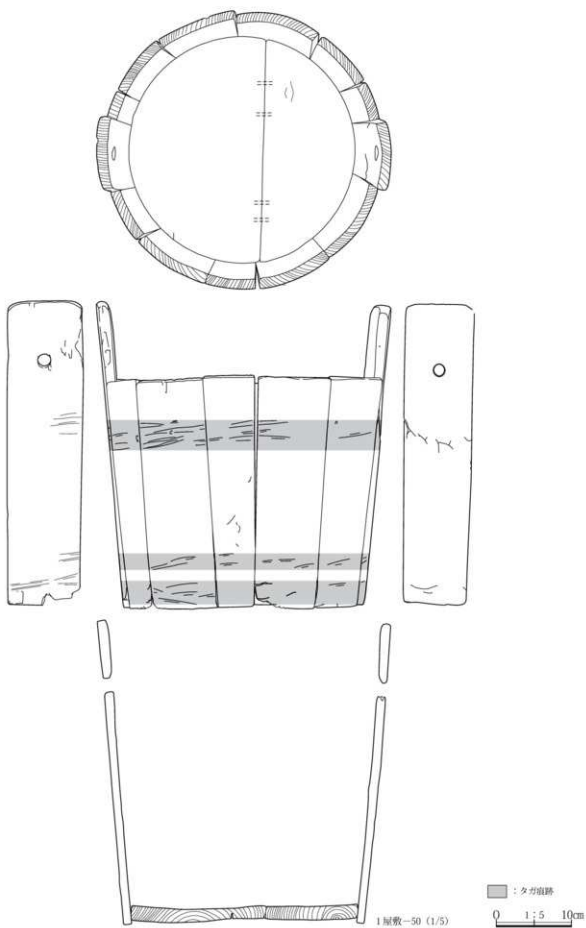


第106図 1区1号屋敷跡出土物48

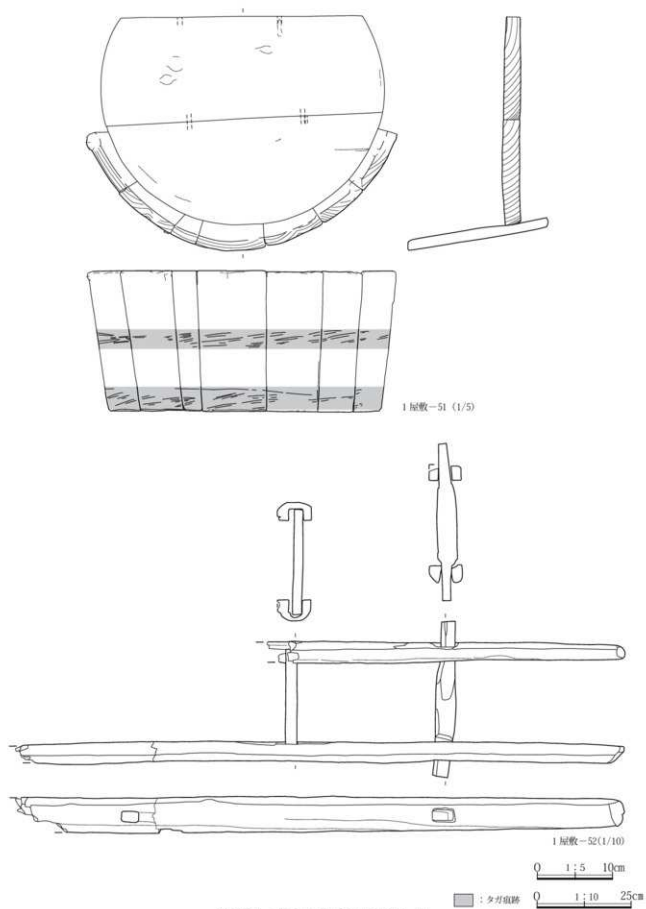


1 屋敷-49

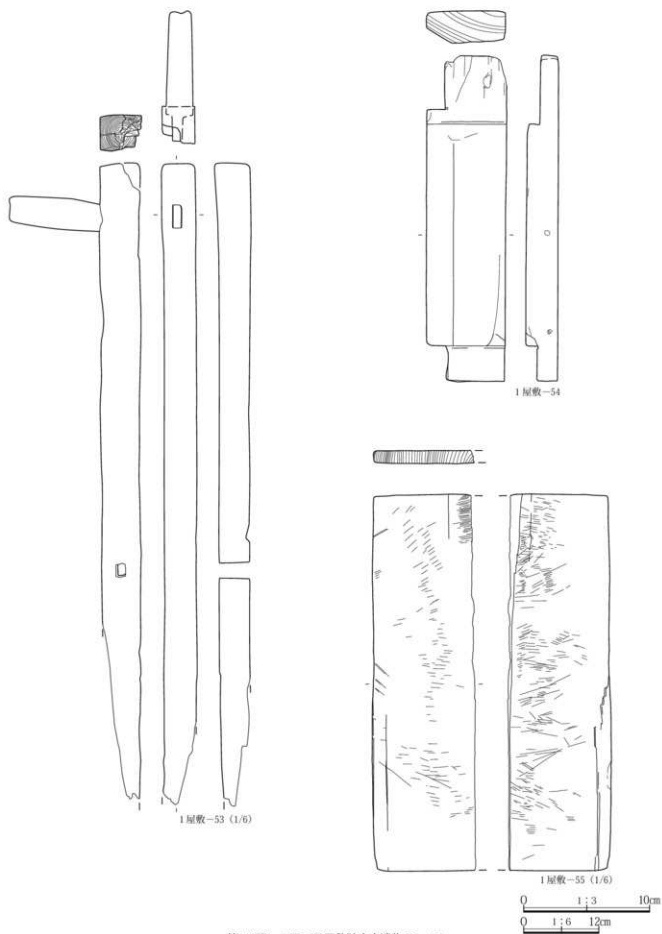
第107図 1区1号屋敷跡出土遺物49



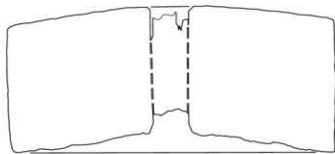
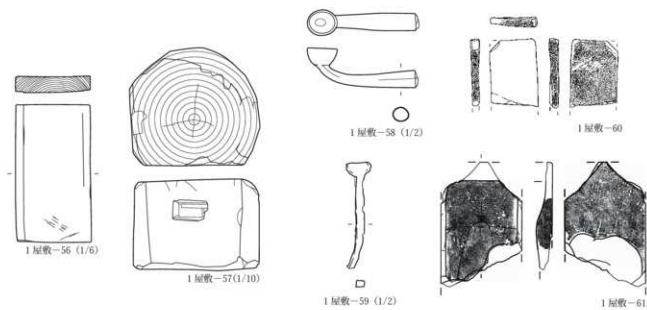
第108図 1区1号屋敷跡出土遺物50



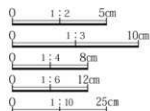
第109図 I区1号屋敷跡出土遺物51・52



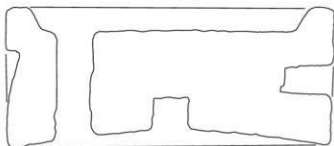
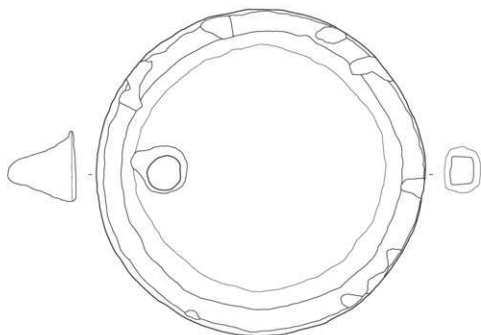
第110図 1区1号屋敷跡出土遺物53～55



1 屋敷-62② (1/4)



第111図 1区1号屋敷跡出土遺物56～62



1層敷-62③ (1/4)

0 1:4 8cm

第112図 1区1号層敷跡出土物62

第3章 発見された遺物

は重なるように出土しており、被災前も同様に重ねられていたものと思われる。

出土した梯子（1号敷No.52）は、幅も狭く脆弱な印象を持つが、使用していた当時の人々の体格を想像させる。梯子は1号倒木と重なるように出土した。倒木はウメであり、ここで使用されたことも考えられる。

唐白杵（1号敷No.53）は、唐白支柱（1号建No.154）に据えられていたと思われる。第17図の通り、支柱に据えられた際の杵の方向と距離から、1号土坑に唐白があったものと考えられる。

出土した石臼（1号敷No.62）は、上臼と下臼とが揃い、軸棒も残るなど良好な遺存状況であった。

(11) 8号溝（第113図、PL.24-1・2・3）

① 8号溝の概要

52区D-3グリッド（南西端部）から52区C-7グリッド（北東端部）へ向かって緩やかに流下する。幅15～35cm（溝の内法）×深さ35～40cm×全長約17mの規模を測る。平面形状はクランク状である。

掘り込まれた溝の底部は、石などは敷設されず平坦である。溝壁には1段から4段程度の石組が溝の深さ35～40cmを確保するようにほぼ垂直に造成され壁の崩落を防いでいる。さらに溝の上部は30～80cm大の天井石（平石）に覆われている。また、4号溝との合流部付近では一部、天井石と石組との間に板材が蓋状に挟まれている部分も観察できた。

8号溝は4号溝東側と同様（或いは同時期）に、古い1号屋敷跡地境に掘られた溝と考えられる。8号溝は、1号建物北側、天明泥流で被災倒れた1号倒木の根元下辺りを通る。1号倒木はウメであり、樹齢は22年ほどと思われる。これらのことから、次のような過程が想定される。古い段階の1号屋敷跡地境溝である8号溝は、天明三年（1783年）より1号倒木の樹齡ほど前（18世紀中頃か）には埋められ、北西側への敷地拡張及び造成が行われた。その後1号倒木が植えられ、1号建物も北西側に増築されたと考えている。

8号溝は土間と馬屋との境でクランクし、何かを避けるような平面形状をしている。これは、古い段階の1号屋敷跡地境を示すとともに、ここに溝を屈曲させる原因があったとも考えられる。4号床下土坑はこの辺りに位

置し、これが理由とも思われるが推測の域は出ない。

② 8号溝遺物出土状況及び出土遺物

17世紀後半の色絵香炉、18世紀前半の陶胎胎付や肥前系陶器碗・皿が出土した。また、連房7か8小期の丸碗が出土している。出土状況の詳細は明らかでないが、出土陶磁器の年代と、想定される1号屋敷跡の拡張・造成過程とに大きな齟齬はないと思われる。

(12) 4号床下土坑（第113図、PL.24-4）

① 4号床下土坑の概要

1号建物室の下、52区B・C-4・5グリッドに位置する。

床下土坑は4基検出されたが、4号床下土坑は炭化物層の広がりと考えられ、遺構範囲も明瞭ではない。このことから、土坑とすべきか判断に迷う遺構でもある。

遺構の全てを検出していないため、規模や形状についてはおおよそである。東西（770）cm×南北430cm、平面やや歪んだ隅丸方形形状を呈するか。調査時、遺構はさらに東側へと広がると指摘されていた。

② 4号床下土坑遺物出土状況及び出土遺物

4号床下土坑からは、17世紀後半の肥前系青磁皿が出土した。瀬戸・美濃系陶器も連房5～7小期までには収まる。出土陶磁器から、4号床下土坑は8号溝よりも早い段階で埋没していた可能性も考えられるが、遺物も少なく明らかでない。

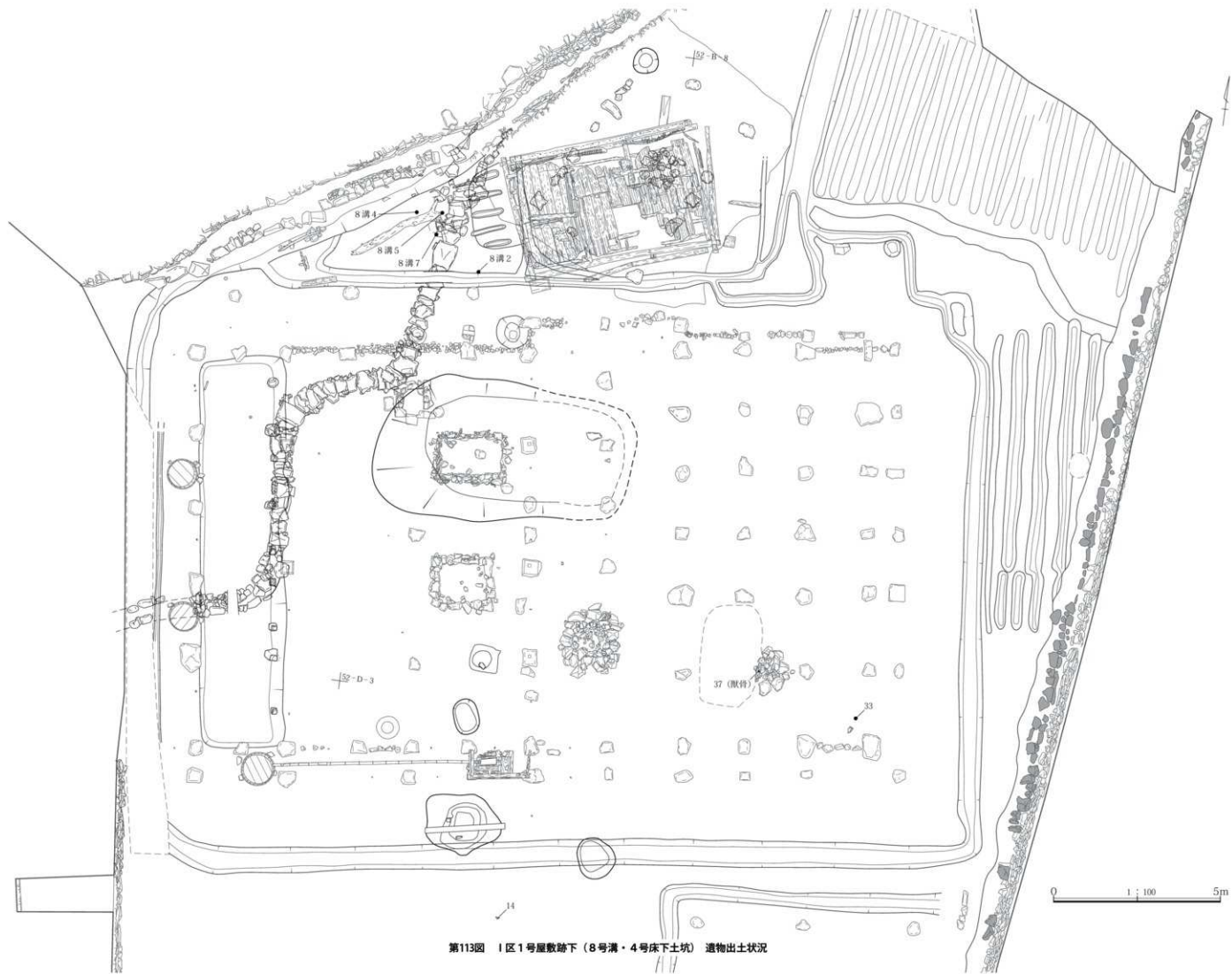
(13) 1号屋敷跡下の遺物出土状況及び出土遺物（第113図、PL.24）

① 1号屋敷跡下の概要

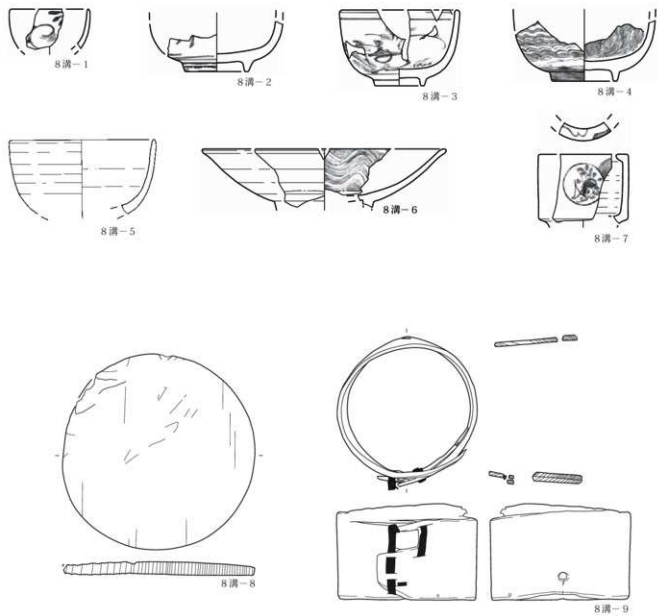
1号屋敷跡下からは、焼土1、土坑4、溝1が検出された。各遺構の時期はそれぞれ異なると思われるが、検出状況や出土遺物から、天明三年までには廃絶された近世の遺構と考えている。そのうち、8号溝と4号床下土坑は既に報告した。ここでは、1号屋敷跡下より出土した遺物について報告する。縄文土器や石器については本章第5節にて報告する。

② 1号屋敷跡下遺物出土状況及び出土遺物

1号屋敷跡下から多くの遺物が出土した。中世では青磁碗（1号敷下No.1・2・3）が出土している。内耳土器（1号敷下No.4）や渡来銭（1号敷下No.34）もあり、



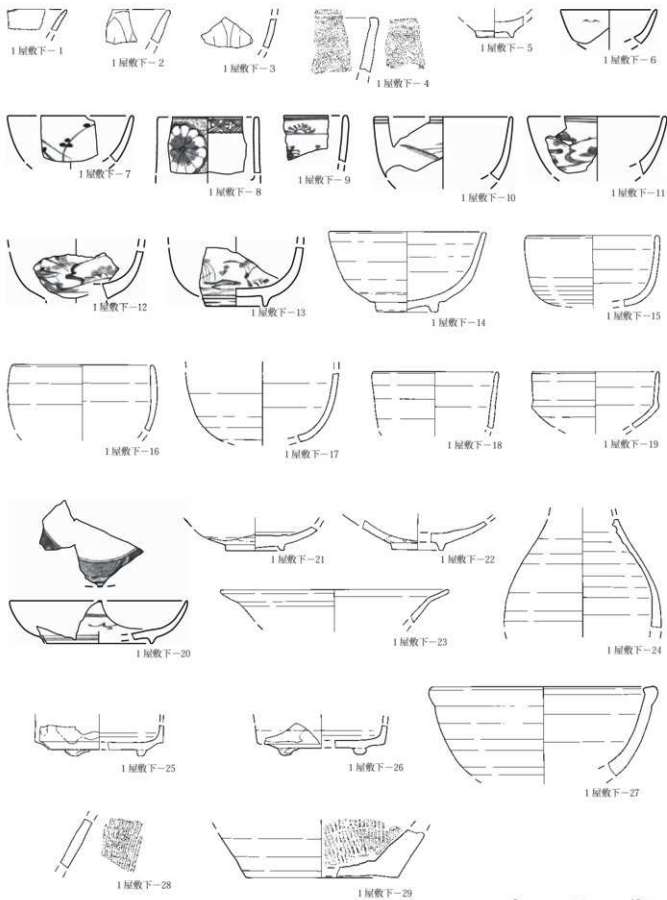
第113图 1区1号屋敷跡下(8号溝・4号床下土坑) 遺物出土状況



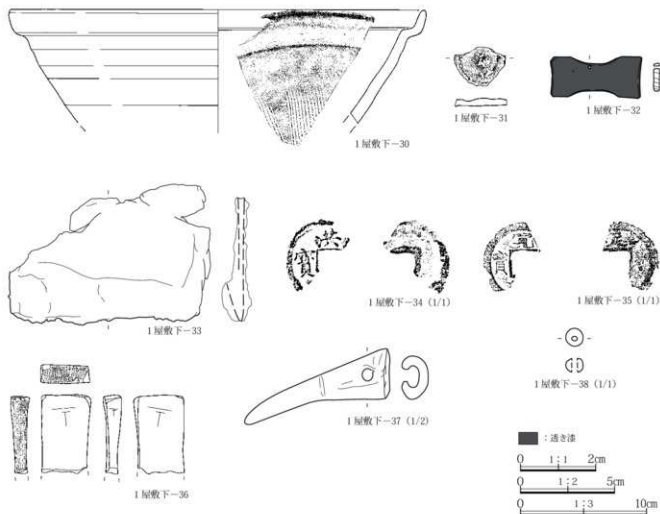
0 1:3 10cm

第114図 1区8号溝1～9、4号床下土坑1～3出土遺物

第3章 発見された遺物



第115図 Ⅰ区1号屋敷跡下出土遺物1～29



第116図 1区1号屋敷跡下出土遺物30～38

中世遺構の存在も考えられる。

近世遺物も多く、肥前系陶磁器では17世紀末頃から確認でき、18世紀後半頃も多く見られる。瀬戸・美濃系陶磁器も同様に、連房4小期から確認できるが、天明期に近い連房8小期も見られた。

出土陶磁器から考えると、1号屋敷跡には、17世紀末頃には前身となる屋敷があり、18世紀中～後半頃になると検出された1号屋敷跡のように拡張・造成されたものと思われる。これは、1号倒木と8号溝との重複関係及び倒木の樹齢から想定される8号溝の埋没時期（18世紀中頃か）とも大きな齟齬はなく、1号屋敷跡の拡張・造成の時期が出土陶磁器の年代からも確かめられたものと考えている。

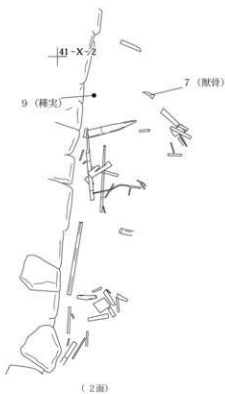
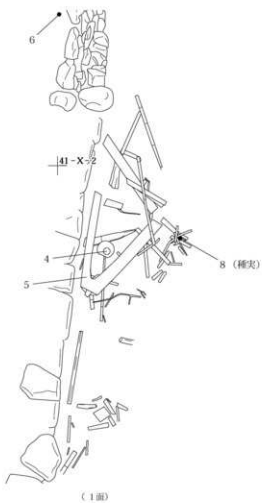
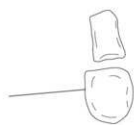
(14) 4号石垣(第117図、PL.25-1・2)

① 4号石垣の概要

4号石垣は、1号屋敷跡の東から南東部にかけての境界を形成する。41区W・X-24・25、51区W-1～7グリッドに位置する。

石垣は、高さ最大2.6mの規模を測る。石垣の段下は地盤が軟弱であるが、根石に特別規模の大きな石を使用している様子はない。築石は垂角礫や垂円礫など自然石を主体とするが、一部に割石も使用されており、石垣の面は比較的平坦に揃っている。断面において、石垣の面から約90cm裏側に掘方のラインを確認できた。裏込めには径10～20cmの垂角礫を主体とする土が充填されていた。

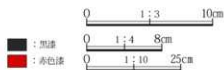
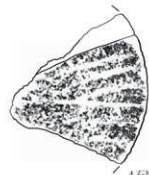
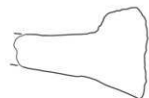
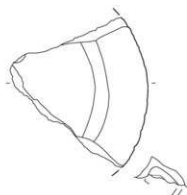
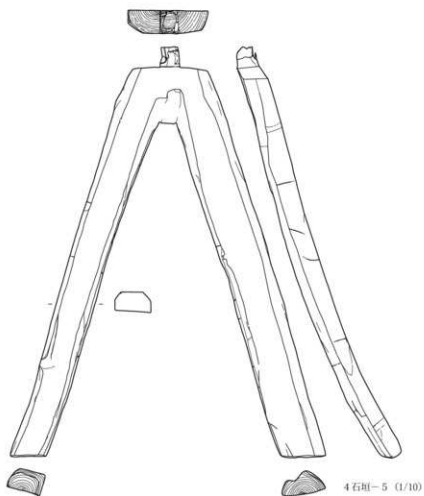
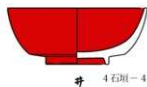
4号石垣は平面図で見ると、外側(東側)下部構造が1列、内側(西側)上部構造が1列と、二重構造状を呈する。この二つの構造には時期差があり、外側下部構造は天明泥流下に帰属するが、内側上部構造は、泥流被災後、堆積した泥流の段下崩落防止に新たに積み足された



0 1:40 1m

第117図 Ⅰ区4号石垣遺物出土状況

第1節 1区の調査成果



第118図 1区4号石垣出土遺物1～6

ものと考えられる。

② 4号石垣遺物出土状況及び出土遺物

4号石垣の出土遺物は、1号屋敷跡東側外、1段下に位置する。そのため、出土した遺物は検出された7カ所の屋敷跡には帰属しないと考えられる。ここより出土した遺物は、検出されていない他の屋敷跡に帰属される遺物とも思われるが、詳細は明らかでない。

出土遺物には、使用用途不明の木製品（4号垣No. 5）がある。道具の脚部と思われるが、詳細は不明。

2 2号屋敷跡

(1) 2号屋敷跡の概要（第119図、Pl. 1-1・25-3）

2号屋敷跡は80～130cmの厚い天明泥流堆積物に完全に被覆されていた。南側に隣接する1号屋敷跡が、平面的には、東部分と西部分を被覆する泥流の保水性の違いによって遺存度が大きく異なったのに対し、2号屋敷跡を覆う泥流はほぼ均一に保水性及び保湿性を保っており、5・6号建物に伴って出土した木製の建築部材や遺物等の遺存状況は1号屋敷跡のそれを上回る程度に良好であった。ただし、1号屋敷跡同様、被覆する厚さ80～130cmの泥流を断面的に観察すると、遺存度が高いのは、天明三年当時の地面から40～50cm上面までが限界であり、現地表面へ近づくに従い遺存度は低くなる。従って、出土した建物の場合、およそ床面以下の建築部材の遺存度は高いのに対し、床面以上の建築部材の遺存度は低くなるのが特徴である。ただし、被覆する泥流の厚さが1m前後であったことから、建物の屋根や柱までもが泥流に埋没することはなかったと思われる。建物の屋根や柱などは、被災後に取り除かれた、或いは掘り出され再利用されたのではないかと考えている。

2号屋敷跡は、5号建物（主屋）と、その南側の庭に位置する6号建物（付属建物）の計2棟の建物により構成されている。他に屋敷内には、前菜園と考えられる小規模な畑が西側に2枚（5・12号畑）、南東部に1枚（11号畑）存在し、主屋裏の北側には、屋敷の境界を形成するとともに、段丘崖の自然法面の崩落を防止するように6・7号石垣が構築される。さらに、7号石垣段下には、石垣に沿って3号溝が東流し、屋敷東側で流下方向をやや南向きに転換して、1号橋付近で4号溝へと合流する。

屋敷跡の境界は、北側は6・7号石垣とそれに沿って

東流する3号溝、東側は流下方向をやや南寄りに転換した3号溝、南側は1号屋敷跡との境界を形成する2号石垣により区画されている。隣接する1号屋敷跡とは2号石垣を境界としてその北側に位置し、さらに約1mの比高差を有する。

なお、西側の境界は、2号石垣が町道1-11号線（調査区外）へと延長しているため検出不可能であり、5号畑もまた、町道東側の路肩崩落の危険のため、畑境の検出には至らなかった。しかしながら、町道1-11号線の現地表面より70～80cm下面には天明三年当時の旧道（6号道）が泥流下に埋没していると想定されることから、屋敷跡西側の境界が町道以西に延長することはなく、平面的に現町道1-11号線が屋敷跡西側の境界と考えられる。ただし、5号畑の標高は平均約534.0mに対し、西側に隣接すると考えられる旧道の標高は約535.0mと想定されることから、屋敷跡西側の境界には、旧道と5号畑との間に約1mの比高差が生じることとなる。

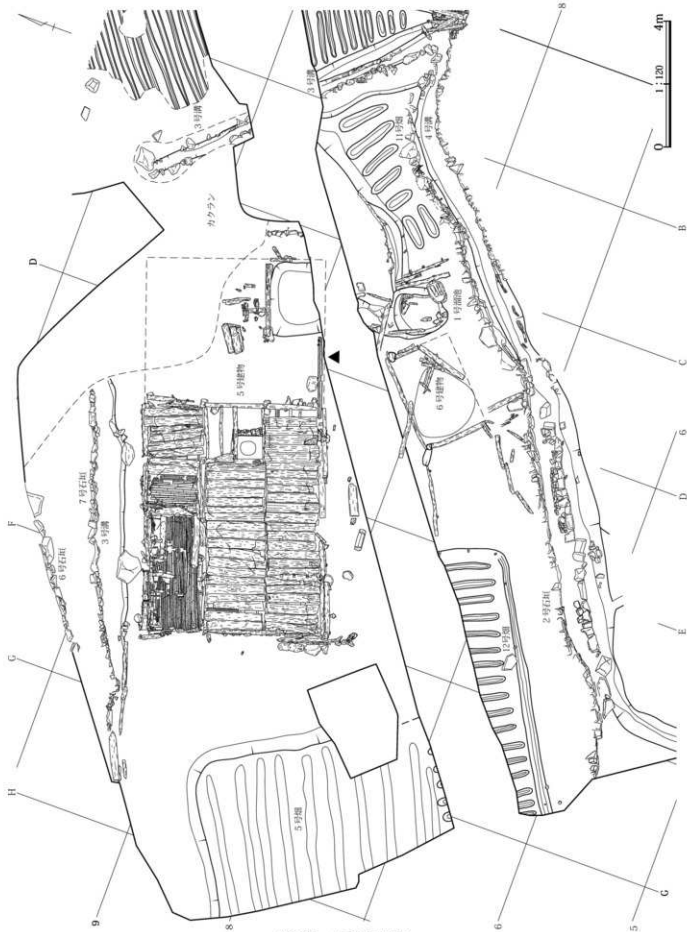
5号建物土間付近に重複して9号溝が検出されている。9号溝は8号溝と同様に、古い段階の屋敷跡地境を流れる溝であったと考えられる。東側の合流地点は検出されていないが、5号建物北側及び東側の二カ所で検出された3号溝を結ぶような位置で確認されている。しかし、5号建物下から検出された遺構は9号溝のみであり、1号建物のような複雑な礎石（掘立柱）の配置や複数の床下遺構などは確認されていない。遺構の検出状況からは、1号建物のように、明らかな建物の増改築を示す痕跡を確認できなかった。

2号屋敷跡は敷地がやや狭く、9号溝が地境溝としてあった当時は、主屋となる建物を建てることは難しいとも考えられる。5号建物と重複する遺構が9号溝以外に確認できないことや9号溝出土遺物から考えても、9号溝を埋め、5号建物を経て、その後泥流に被災するまでの間は、比較的短い期間であったとも推測される。

(2) 5号建物（第120・121・122図、Pl. 25-3～30-3）

① 5号建物の概要

5号建物は、2号屋敷跡の中央部やや北西寄り、52区C～F-8・9、D-10グリッドに位置する。建物の北東部から東側にかけての境界部分は視乱により不確定であるが、桁行（東西）12.07m×梁行（南北）5.82mの



第119図 Ⅰ区2号屋敷跡

第3章 発見された遺物

規模を測る。本来の床高は推定で、1・2号床が30～40cm(H=533.40～533.50m)、3・4号床が20～25cm(H=533.40m)と考えられる。建物裏側には屋敷跡の北側の境界を形成する段丘崖の自然法面が迫っている。

5号建物は2号屋敷跡の主屋であり、掘立柱建物である。ただし、部分的には礎石が据えられ、その上面に柱が直置きされていたり、礎石間には土台状の建築部材が据えられていたり、構造はやや複雑である。建物出入口は、土間南側に表口が想定されるが、土間北側の裏口及びその周辺に想定される竈等は攪乱により確認できない。建物は東部分に土間や馬屋が配置され、中央部から西部には床部が配置される。床部は南側の2/3の範囲(1・2号床)には床板が敷き詰められ、囲炉裏が1基東側に設置される。一方、床部北側の1/3の範囲(3・4号床)は、床を支える下部構造が1・2号床とは異なり、床面には竹簀子が敷き詰められている部分が多い。

5号建物は保水性及び保湿性の高い厚さ80～130cmの天明泥流堆積物に被覆されており、出土した木製の建築部材や遺物等の遺存状況は1号屋敷跡のそれを上回る程度に良好であった。ただし、建物北東隅の境界部や土間奥手直上の現地表面には、半地下状のコンクリート構造の室が近年まで構築されており、遺構は攪乱を受けていた。土間奥手には竈が構築されていた可能性が高いが検出できず、また、建物北東隅の建物範囲や構造等も未確認のまま調査を終えた。

建物の平面的な出土位置については、基本的には原位置を保っているといえる。すなわち、礎石・土台状の部材、掘立柱根入部、囲炉裏、馬屋、1号施設、2号施設の位置は原位置から動いていない。ただし、立ったままの状態の掘立柱及び柱等は、西方向へ平均14°傾斜して出土している。これは、天明泥流の流入方向とその営力に関わるものと考えられ、建物は西方向へ倒壊しながら、床面のレベルでは、全体に20cm程度西方向へスライドしているものと考えられる。

次に、建物の出土状況を断面的に見ると、床部の1・2号床について、大引など大型部材が下面で床面を保持している部分は当時の床高をおよそ保っている。しかし、根太のみで床面を保持している部分については、天明泥流の密圧によるものと考えられるが、根太は中央部分で折れ曲がり、床面はレンズ状に凹んでいる。さらに床部の3

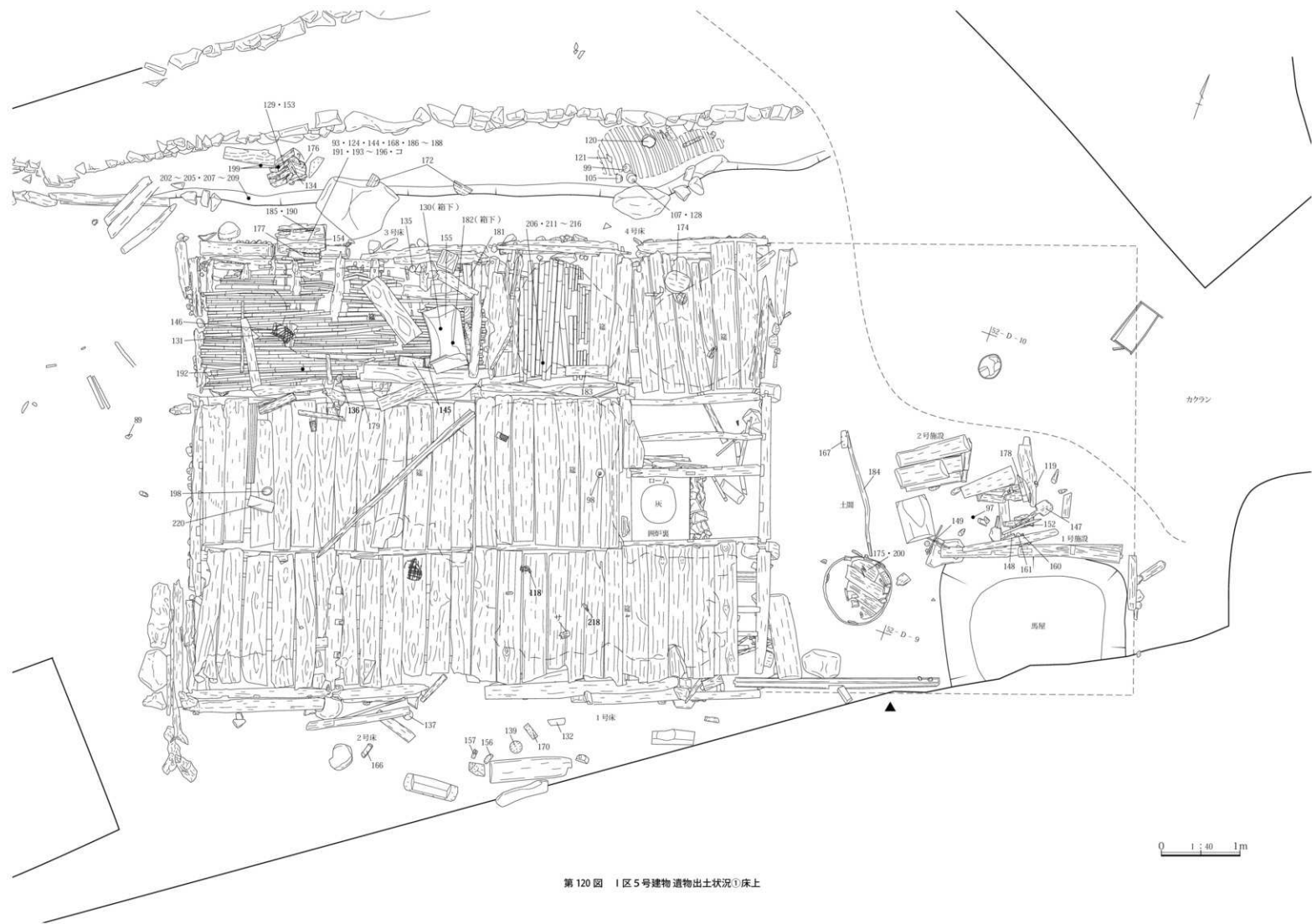
・4号床については、床全体の崩落が著しい。3・4号床の竹簀子や床板が敷き詰められた床面は、1・2号床に対応する掘立柱や南北方向の大型の部材(大引)が存在しないうえ、床全体が泥流の密圧により押し潰されている。その結果、出土状況では、1号床と4号床の境界部には、床面レベルで30cm程度の比高差が生じることとなったが、本来、1・2号床と3・4号床の比高差は約5cmの範囲内であったと考えられ、1～4号床はほぼ全体に同レベルであった可能性が高い。

【囲炉裏】(第122図、PL.30-1・2・3)5号建物1号床東部分の土間に近い位置に構築され、52区D-9グリッドに位置する。囲炉裏座面東側の木柱(根太)は腐蝕によるためか或いは被災後に取り除かれたためか欠損するものと考えられるが、その他は原形を留め、原位置を保っている。

囲炉裏座面の木柱の内法寸法で東西約70cm×南北約80cm、基礎の石組の状態では東西・南北とも約110cmの規模を測る。地面と木柱上面との比高差は45cm(H=533.50m)である。通常、囲炉裏は座面と燃焼部との間に10～20cm程度の比高差を有する場合が多いと思われるが、5号建物の囲炉裏は、燃焼部灰層と座面とのレベルがほぼフラット(5cm未満)であることが特徴のひとつといえる。

囲炉裏は地面に石組の基礎を遺築する。石組はまず、平面方形の四隅に径25～30cmのやや大型の垂角礫を使用し、その礫の角を直角に合わせるようにして据え、縁辺部にはやや小振りの垂角礫を並べる。縁辺部には、さらに1～2段、径10～20cmの垂角礫を、隙間を作らないように整然と積み上げている。1号建物1・2・3号囲炉裏と比較しても、極めて作業が緻密である。石組内部には、地面の上に粘性を伴う黒色土を約5cmの厚さで搬入して貼り、その上に径5～10cmの垂角礫を1段敷いた後、黄色ロームを直方体状に成形しながら充填する。黄色ローム上面には、燃焼部を中心に灰層が約10cm厚で堆積するのに対し、周辺部の灰層は厚さが2～3cmと薄い。また、燃焼部灰層の下面のロームは被熱により、約10cmの厚さで赤化、焼土化している。他の囲炉裏の場合、燃焼部上面は中央部がやや凹んでいることが多いが、この囲炉裏では、明瞭な凹みは確認できず、表面には凹凸も多い。

囲炉裏の石組の基礎の下面には、さらに下部構造体が



第120図 I区5号建物遺物出土状況①床上



第 121 図 I 区 5 号建物 遺物出土状況②床下

存在する。この下部構造体は、5号建物囲炉裏と平面的にも重複し、造り替え以前の古い囲炉裏の痕跡の可能性も考えられる。しかし、この下部構造体には、石組や直方体状に成形されたローム等、囲炉裏を構成する特徴的な要素が確認できないため、囲炉裏の痕跡とも考えにくく、上面の5号建物囲炉裏との構造上の関連や関係も含めて不確定な部分が多い。

囲炉裏下からは多くのモモの種が出土している。モモと囲炉裏との関連については明らかでない。

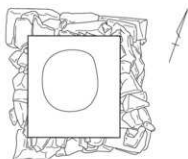
5号建物囲炉裏下面の下部構造体は、まず、平面円形の土坑状の掘り込みに、円筒形（中空）の木筒が埋設されている。検出当初、底部を欠く桶が埋設されているのではないかと考えたが、精査の結果、桶の側板ではなく、一木を刳り貫いて円筒状に製作しているものであることが分かった。ただ、腐蝕が著しく、その原形の大半を留めていないため、形状については不確定である。埋設された木筒上面には、淡い焼土がうっすらと堆積し、その周辺部にも同様に灰が堆積している。また、薄く堆積した焼土及び灰の周辺を取り囲むように、長さ20cm程度の木杭が10～12本地面に打ち込まれていることも特徴的である。木杭は、5号建物囲炉裏の石組範囲と平面的に重複しているものと同様でないものが存在するため、直接的に5号建物囲炉裏と関連するものではないと考えられる。1号建物の遺方（丁張）杭と形状や出土状況等、類似する要素も観察できるが、用途は不明である。

② 5号建物遺物出土状況

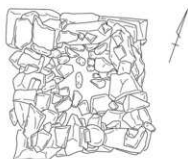
5号建物では、極めて良好に建築部材が遺存しており、同様に漆器や木製品も良好な遺存状況で出土した。5号建物は1号屋敷跡の1段上に位置しており、被覆する天明泥流も、1号屋敷跡と比較すればやや緩やかであったと思われる。床下の遺物が少なく、他の建物よりも床上から多くの遺物が出土していることから、遺物の出土地点はより原位置に近いものと考えている。

特筆すべき出土状況に木製の箱（5建No.154）がある。この箱は内面に木製の仕切りがあり、陶磁器や道具類、下駄が収められた状態で出土した。収められていた遺物は、5建No.93・124・144・168・186・187・188・191・193～196で、木製の蓋がされていたものと思われる。

同様に転用されたと思われる樽（5建No.176）の中には、お櫃（5建No.129）、篩と思われる曲物（5建



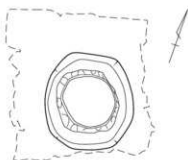
(使用面)



(石組面)



(下面)

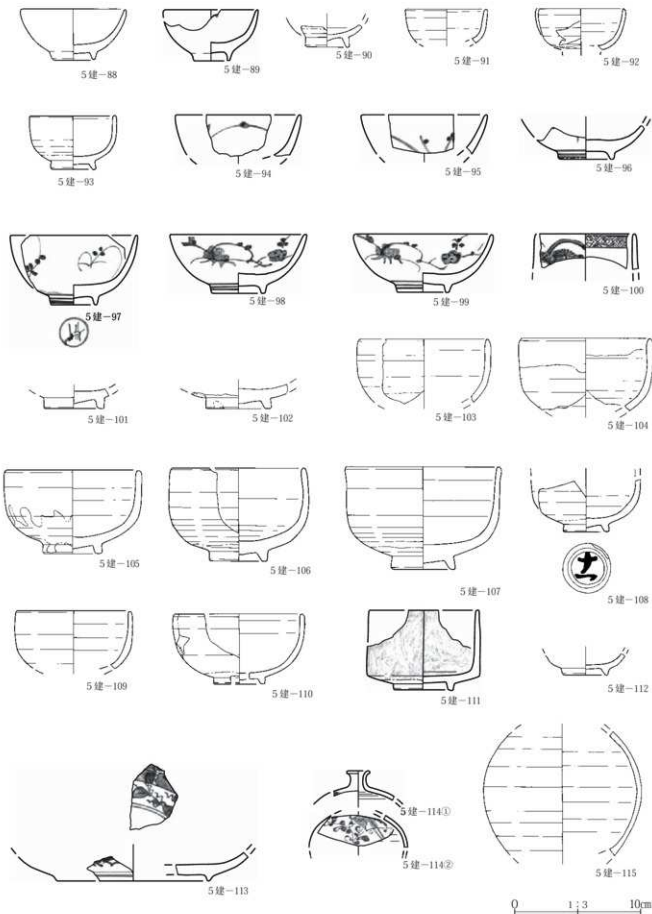


(下面)

0 1:30 1m

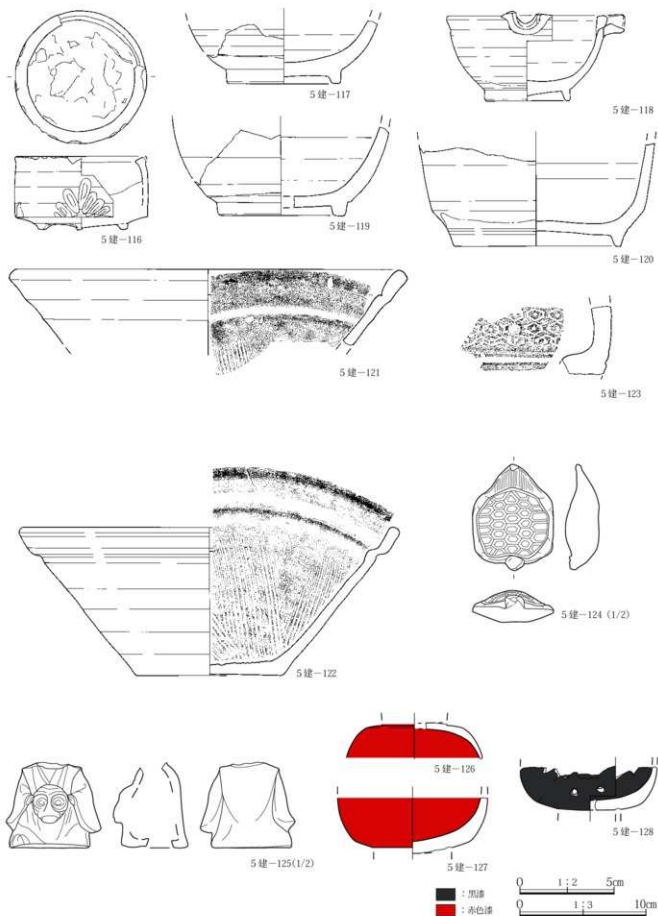
第122図 1区5号建物 囲炉裏

第3章 発見された遺物

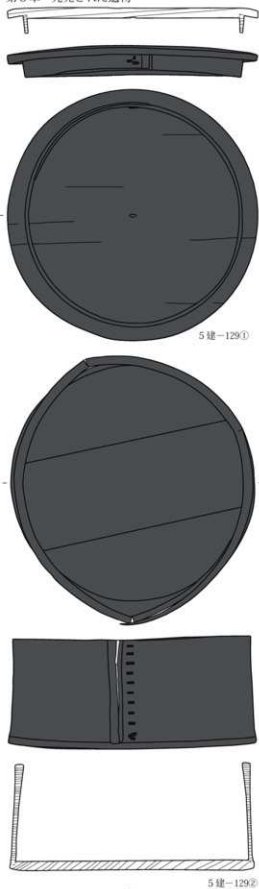


第123図 I区5号建物出土遺物88～115

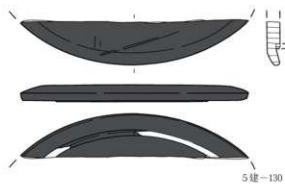
第1節 1区の調査成果



第124図 1区5号建物出土遺物116～128



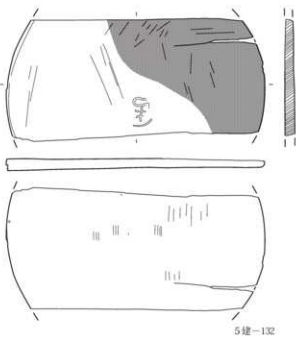
5建-129②



5建-130



5建-131

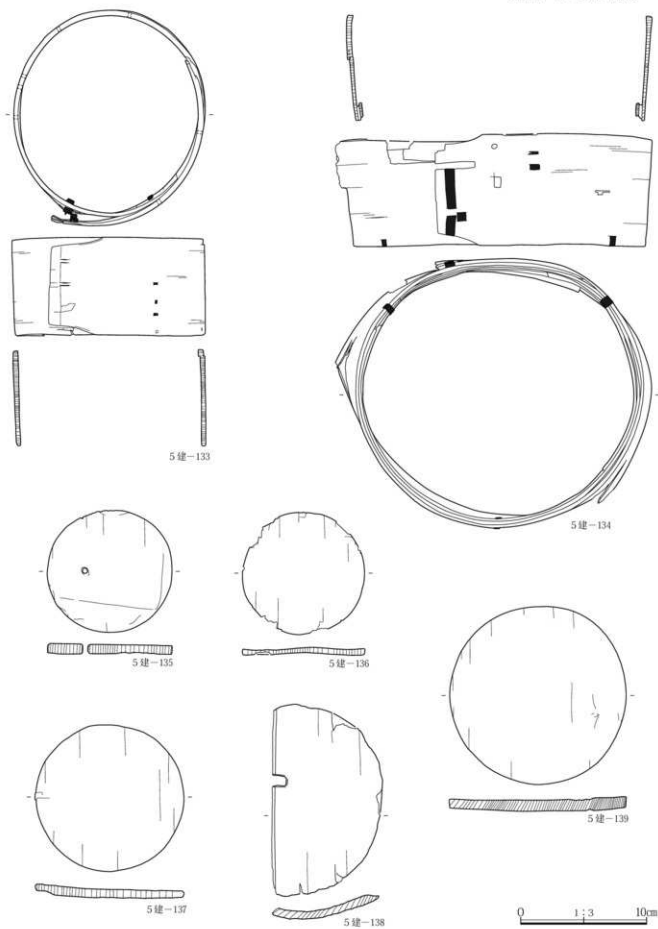


5建-132

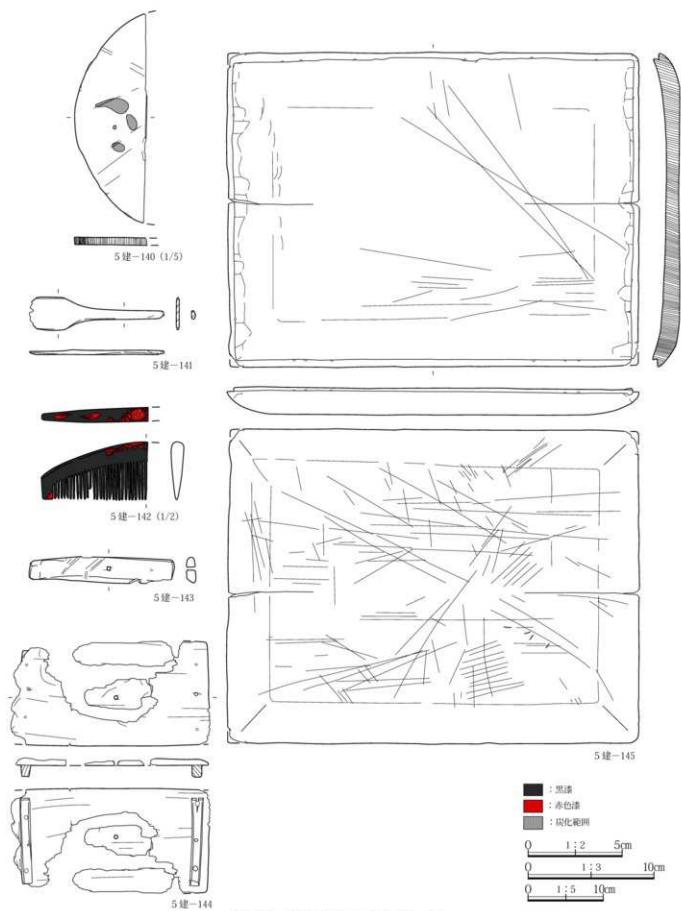
■ : 透き漆
 ■ : 炭化範囲

0 1:3 10cm

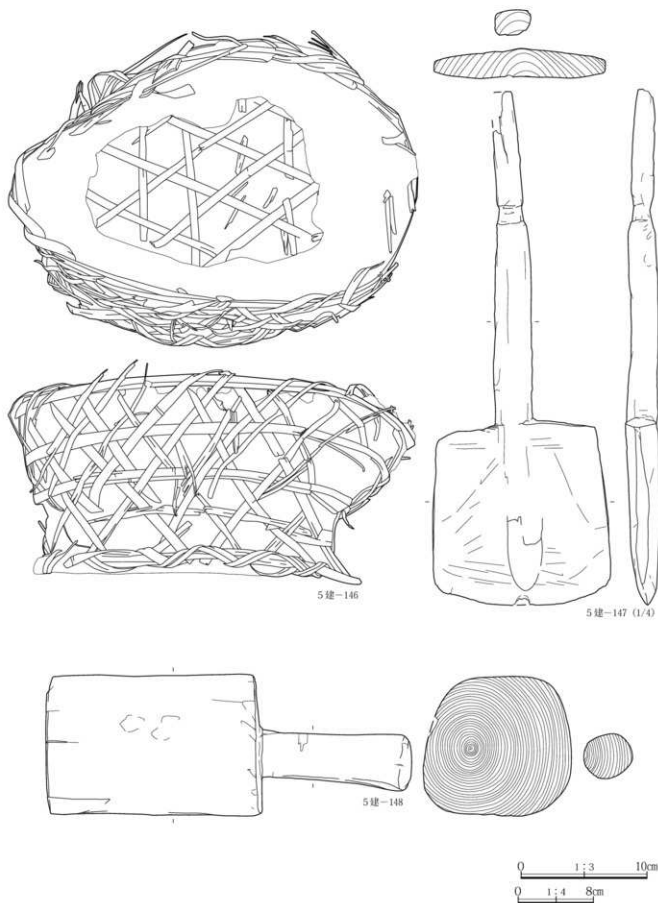
第125図 I区5号建物出土遺物129～132



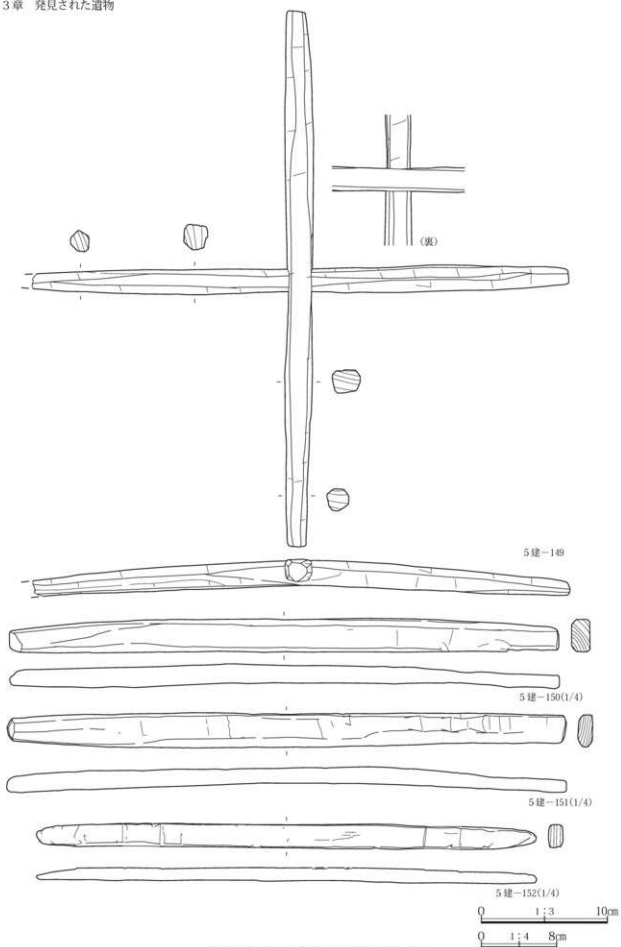
第126図 1区5号建物出土物133～139



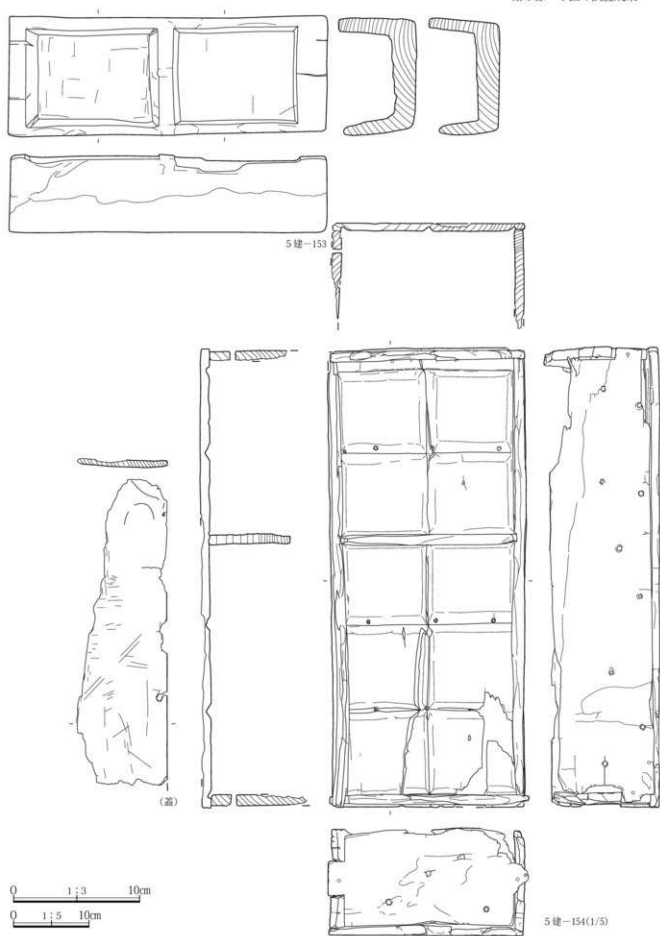
第127図 I区5号建物出土遺物140～145



第128図 1区5号建物出土物146～148



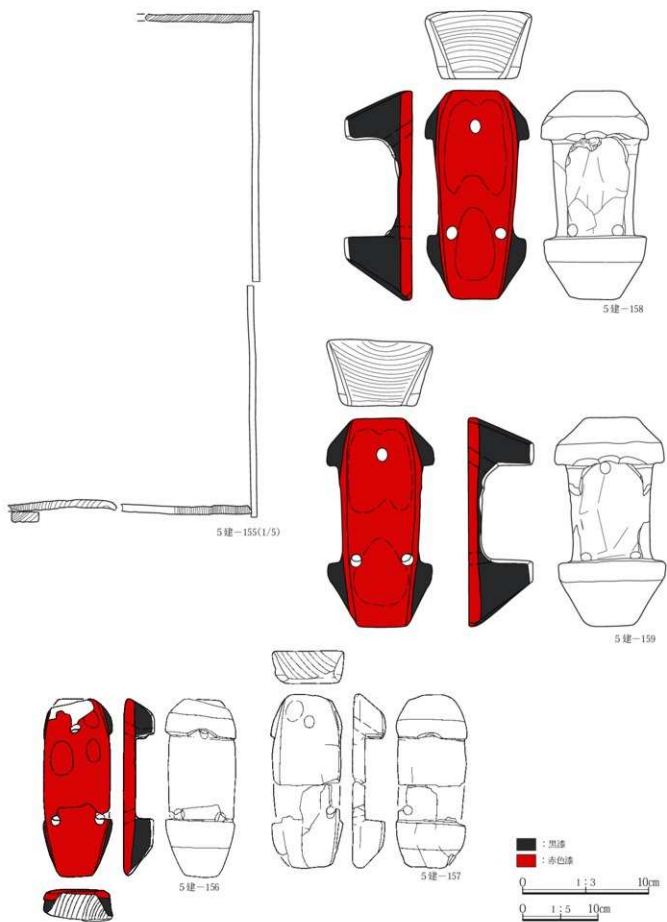
第129図 Ⅰ区5号建物出土遺物149～152



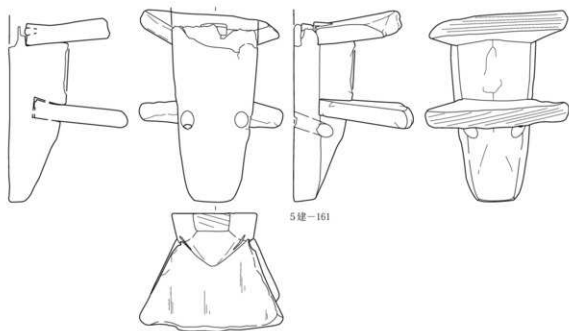
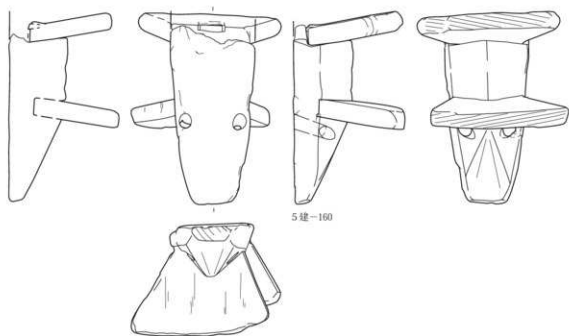
第130図 1区5号建物出土遺物153・154



第131図 1区5号建物出土遺物155

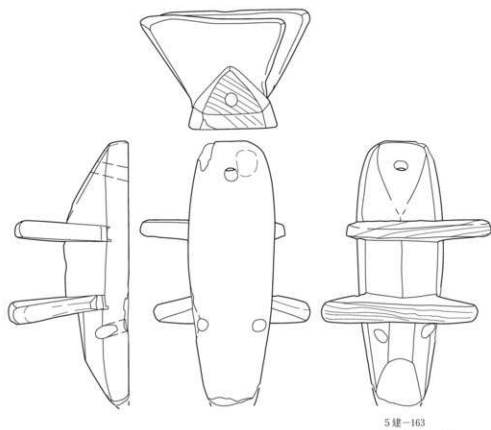
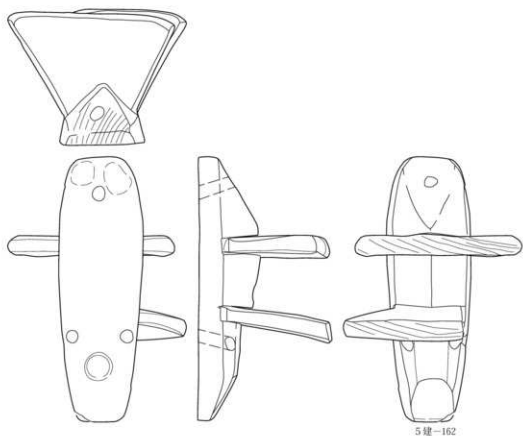


第132図 1区5号建物出土遺物155～159



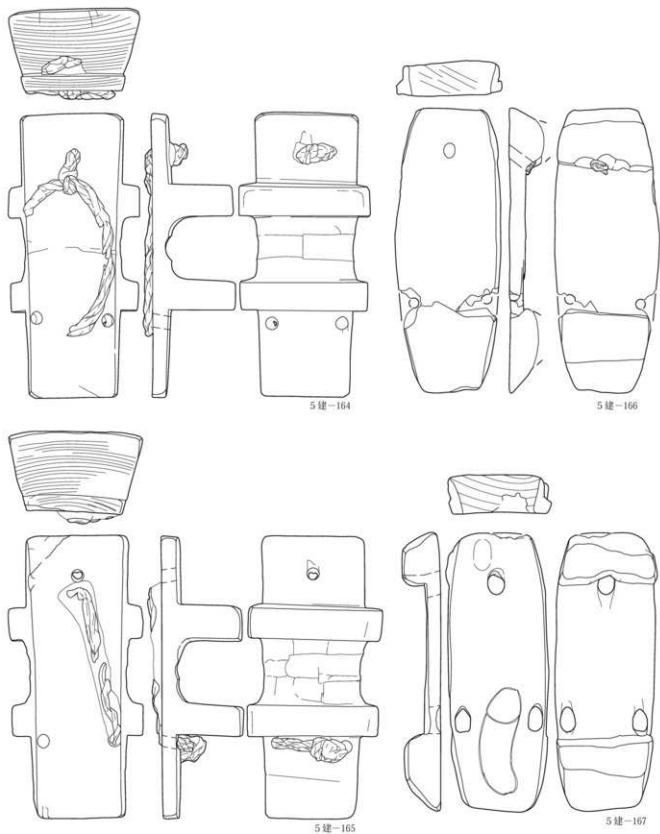
0 1:3 10cm

第133図 | 区5号建物出土遺物160・161

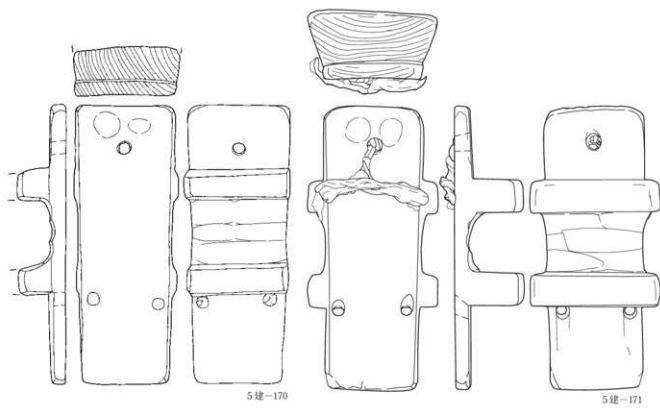
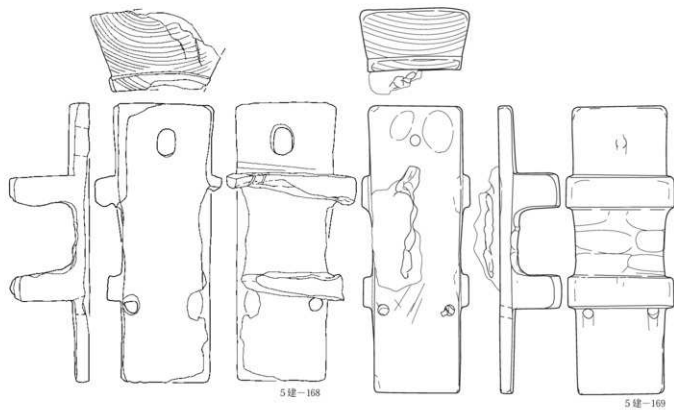


0 1:3 10cm

第134図 1区5号建物出土遺物162・163

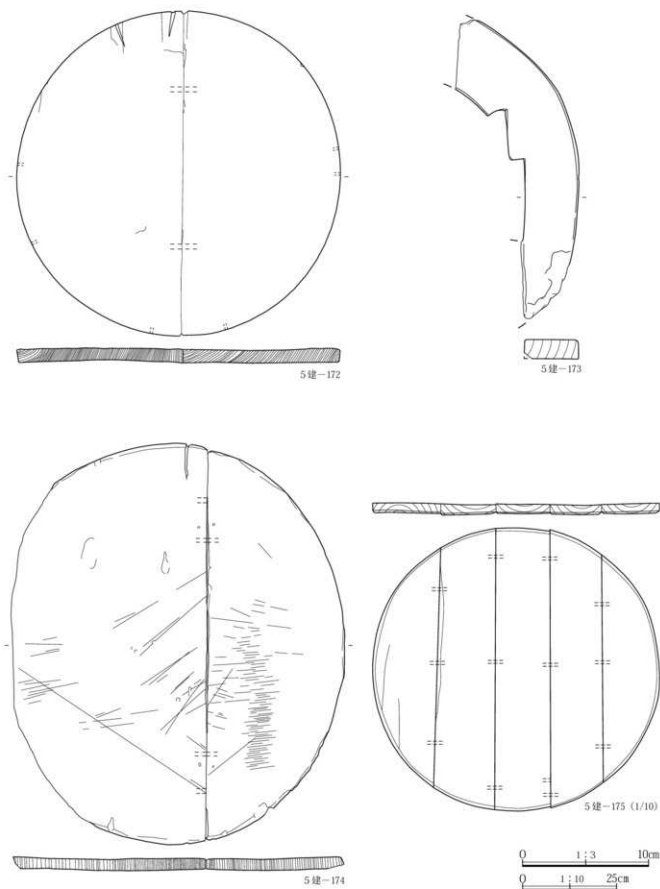


第135図 I区5号建物出土遺物164～167

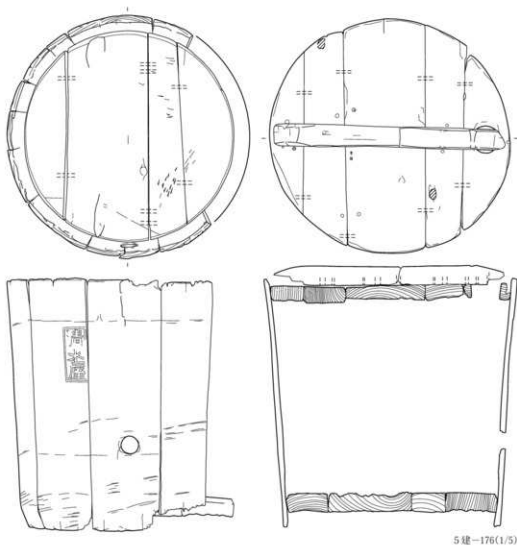


0 1:3 10cm

第136図 1区5号建物出土遺物168～171



第137図 I区5号建物出土遺物172～175

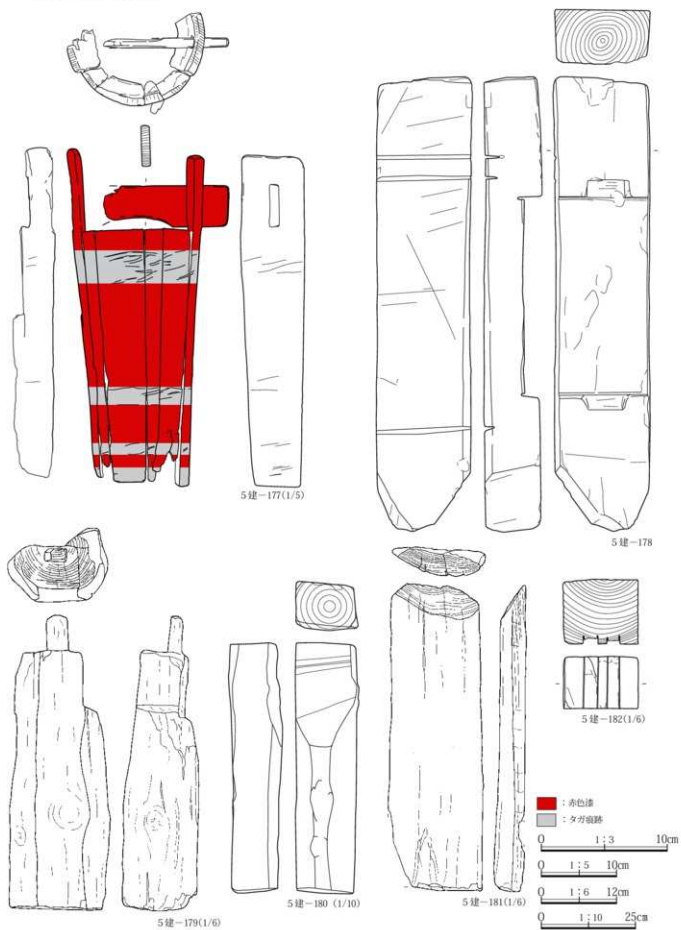


5建-176(1/5)

▨ : 補修範囲

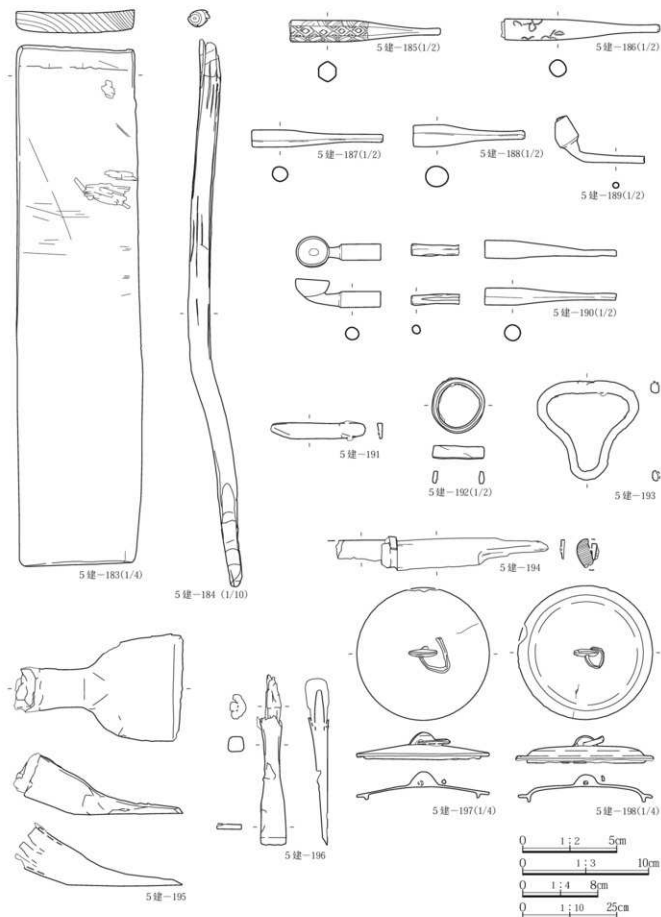
0 1:5 10cm

第138図 1区5号建物出土遺物176

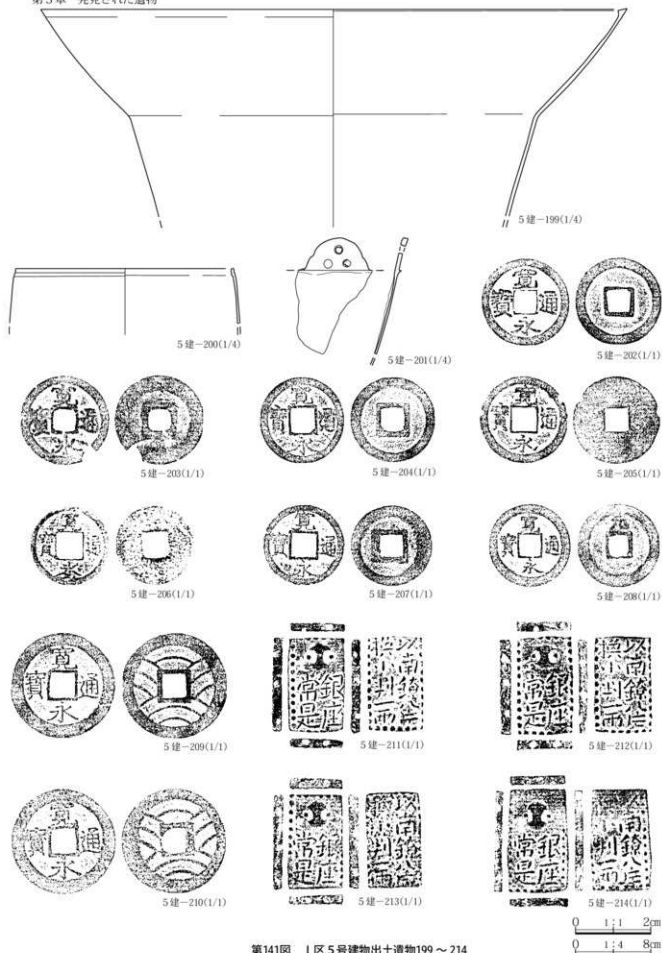


第139図 I区5号建物出土遺物177～182

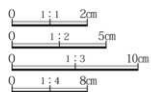
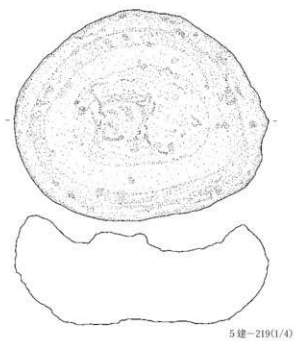
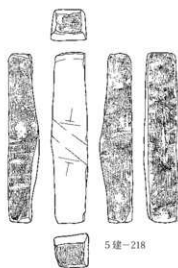
第1節 1区の調査成果



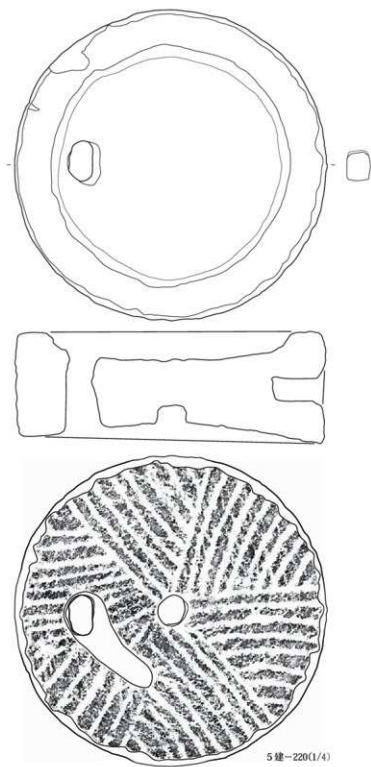
第140図 1区5号建物出土物183～198



第141図 I区5号建物出土物199～214



第142図 1区5号建物出土遺物215～219・221



0 1:4 8cm

第143図 1区5号建物出土遺物220

No.134)が取られ、樽の蓋部分に取手をつけた蓋がされていた。詳細については、ともに第4章第1節2にて後述する。

これらの特異な出土状況が3号床付近で確認されたことは、5号建物が、東宮遺跡の中でも極めて良好に被災前の状況を遺存していたためと考えている。だが、箱の中に未使用に近いと思われる下駄と陶器、煙管などが取められていた理由については明らかでない。箱との関連については明らかでないが、隣接して赤色漆で仕上げられた樽(5建No.177)が出土したことを追記しておく。

3号床からは竹籠(5建No.146)が出土した。形状は1屋敷No.42の竹籠に近似する。1屋敷No.42の竹籠の中には複数の漆桶が取められていたが、5建No.146の中からは何も出土しなかった。

5号建物からは下駄が出土した。出土した下駄は、対になるものが隣接しており、このことから5号建物が良好に遺存していることが分かる。子供用と思われる小型の下駄(5建No.156～159)は4点、2対確認された。このような小型下駄の出土例は、東宮遺跡では5号建物のみである。下駄の詳細は、第4章第2節4を参照して頂きたい。

③ 5号建物出土遺物

内面に灰を残す香が(5建No.116)が出土した。口縁端部の欠損が顕著で、火落しとして使用されていたものと思われる。

5建No.124は亀形の陶器である。中空であるが、水滴のような孔も見られない。器壁は薄く非常に軽いため、水に浮くことが確認された。実用品ではないと思われる。

3号床上からは大型の箱(5建No.155)が出土した。木製の箱の中には、多量のアワの有ふ果を主体にキビなどが確認された。詳細は第4章第4節1を参照して頂きたい。これらの出土状況から、5号建物ではアワなどを主食としていた可能性が考えられる。

5建No.134は曲物である。底部が欠損しており判然としなが、内面底部付近に幅1cmほどの板が二重につき木皮で止められていた。その形状から、篩の可能性が考えられる。

5建No.153は、長方形の材を2カ所方形に割り抜いたものである。内面には炭化した範囲が顕著に見られたことから、火打箱と考えている。

東宮遺跡からは多くの桶・樽類が出土しているが、5建No.177のように赤色漆で仕上げられた樽は他に例がない。形状も特徴的で、底部径が小さく器高が高い。祝樽のように思われる。

5建No.222は布である。断片であり詳細は明らかでないが、繊維素材については、アサであることが確認された。詳細は、第4章第4節6を参照して頂きたい。

(3) 6号建物(第144回、PL.30-4～31-1)

① 6号建物の概要

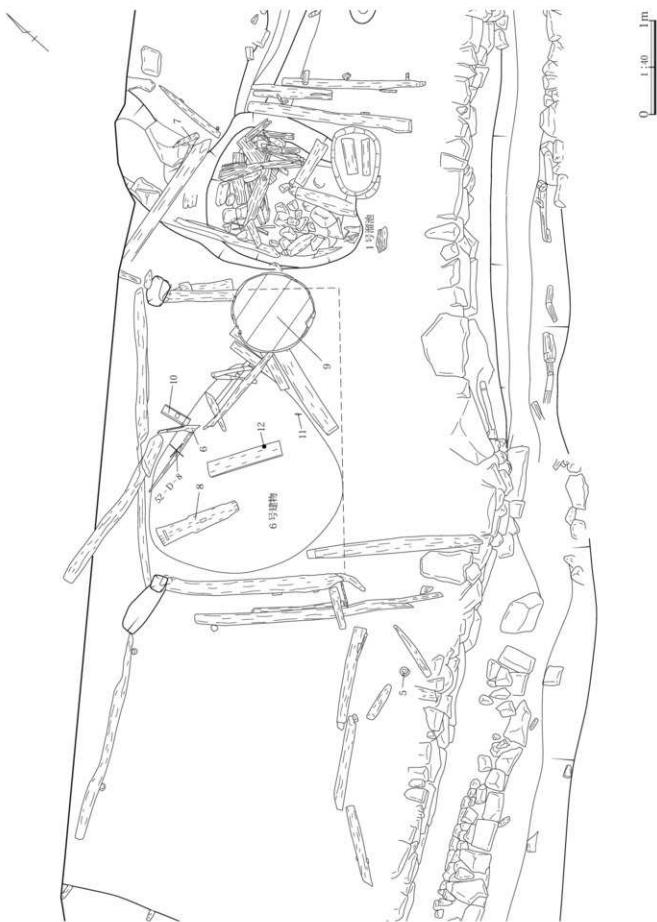
6号建物は、2号屋敷跡の南東部、52区C・D-7・8グリッドに位置する。桁行(東西)3.1m×梁行(南北)2.0mの規模を測る。桁行は、6号建物北側に掘り込まれた掘立柱の柱穴の心々を基準に計測し、梁行は、建物南側の地面に据えられた土台状の部材の長さを基準に計測した。ただし、南側の土台の南端部は腐蝕により一部失われており、梁行の規模については推定である。

6号建物は主屋(5号建物)の土間及び馬屋の南側に位置し、1号屋敷跡との境界に隣接する。2号屋敷跡の付属建物で、掘立柱建物である。建物内部の地面に肥料と考えられる堆積物が分布しているため、肥料備蓄をひとつの目的とした建物が想定できる。肥料と考えられる堆積物は、径約2m×厚さ約15cmの範囲に堆積している。堆積物は、植物の葉を主体とする層と褐色の粘性土との互層になっており、これは、1号建物馬屋内部に堆積していた家畜糞と、糞とともに家畜に踏み込ませる植物の葉や草との互層に堆積状況及び土質が類似する。

建物の北・東・西側の地面に据えられた土台状の部材は原位置を保っている。また、建物北側中央部の掘立柱は、原位置に立ったままの状態出土しているが、天明泥流の営力により、西方向へ倒伏しかけている。さらに、建物内部には、建物の柱や貫と考えられる部材が倒伏して出土している。

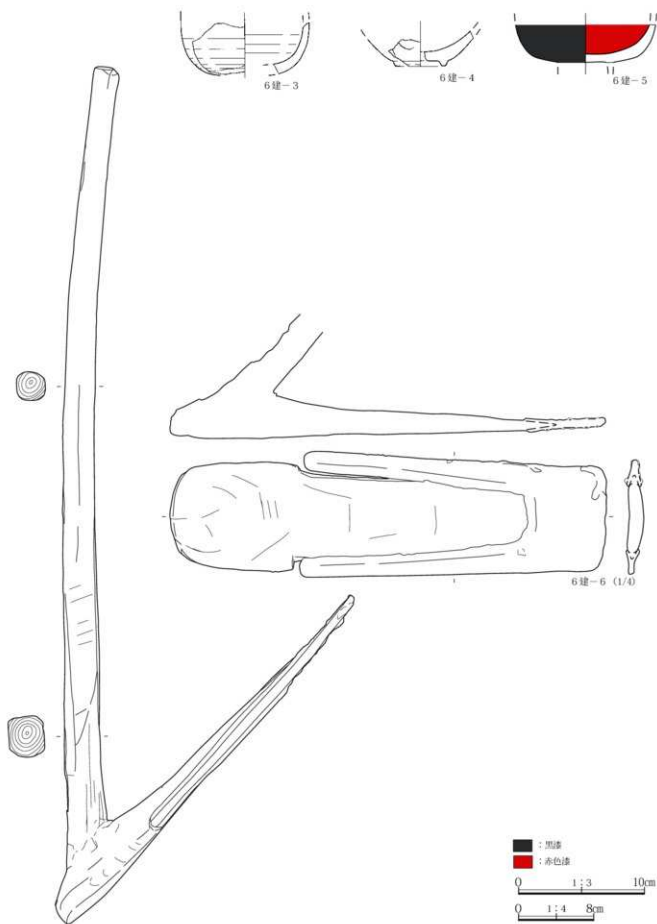
6号建物北側には掘立柱の柱穴が3基掘り込まれ、うち、中央部の柱穴には掘立柱が遺存する。3基の柱穴の深さは50～60cmである。

北・東・西側の地面には土台状の部材が据えられている。これらの部材は、5号建物の土台と同様に、柱・大引など上部構造を保持するものではなく、どちらかといえば、土止めの役割を果たしているように考えられる。

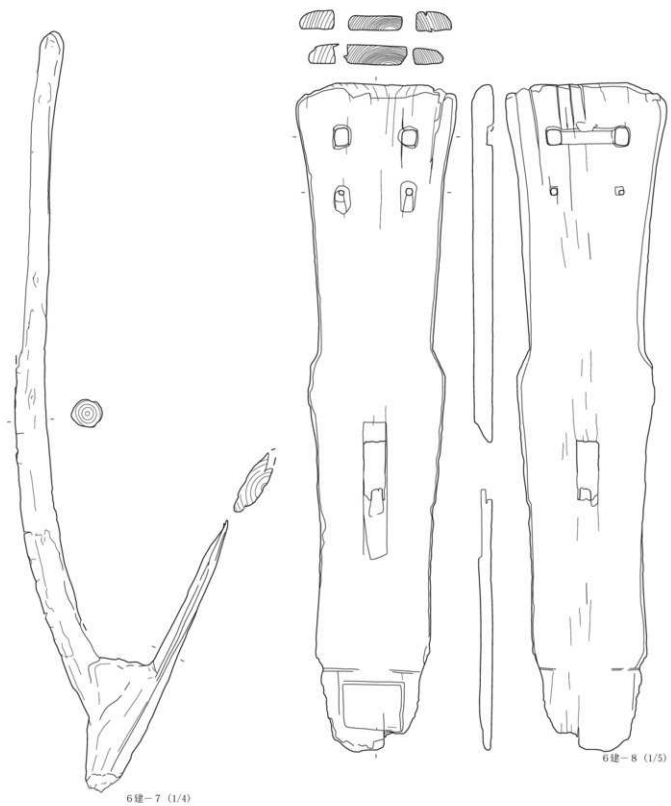


第144図 Ⅰ区6号建物 遺物出土状況

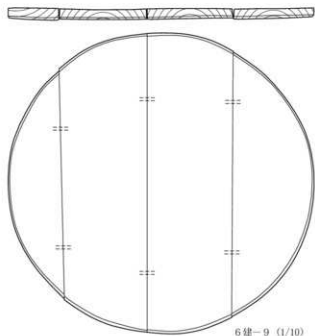
第1節 1区の調査成果



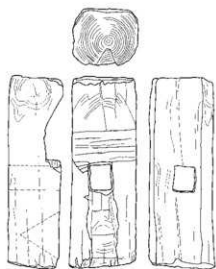
第145図 1区6号建物出土遺物3～6



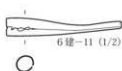
第146図 I区6号建物出土遺物7・8



6建-9 (1/10)



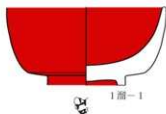
6建-10 (1/6)



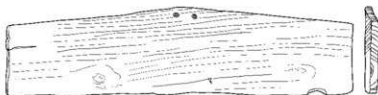
6建-11 (1/2)



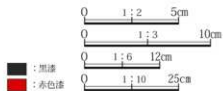
6建-12 (1/2)



1溜-1



1溜-2 (1/6)



第147図 1区6号建物9～12、1号溜池1・2出土遺物

第3章 発見された遺物

②6号建物遺物出土状況及び出土遺物

6号建物からは、鎌（6建No. 6・7）や踏躰（6建No. 8）などの農耕具が出土した。2号屋敷跡における、6号建物の役割を考える上で重要な遺物だと考えている。

6建No. 6の鎌は、木製の柄に袋状の刃がついた極めて良好な遺存状況で出土した。また、刃部や柄の一部は欠損するものの、鎌（6建No. 7）や踏躰（6建No. 8）も良好に遺存していた。

(4) 1号溜池（第144図、PL.31-2）

①1号溜池の概要

1号溜池は、2号屋敷跡の南東部、52区C-8グリッドに位置する。5号建物馬屋の南側、6号建物の東側に隣接する。「溜池」の遺構名を付し、2号屋敷跡の関連遺構として扱ったが、溜池は泥流被災後に掘り込まれたもので、泥流中に混入する不要な浅間石やその他の不要木材などを投げ込み、廃棄した「土坑」と考えられる。従って、2号屋敷跡を基準にして考えれば、その一部を破壊している擾乱扱いの遺構である。

ただし、溜池の南東隅には、丸太材の内部を削り貫いて製作された桶状の器が埋設されており、これは2号屋敷跡に伴うものと考えられる。また、その北側、溜池の北壁にも同様に埋設された桶状の器の一部が遺存しており、2号屋敷跡では、この位置に、2基の桶状の器が並列して埋設されていたと考えられる。

埋設された桶状の器は、5号建物（主屋）馬屋の南側に隣接する位置にあること、その規模や埋設状況等から、便槽或いは民俗例「ナラシダメ」に関連する可能性も考えられる。

②1号溜池遺物出土状況及び出土遺物

湧水により木製の遺物が出土した。前述の通り、2号屋敷跡を基準とすれば擾乱とも思われ、出土遺物も後世の混入とも考えられる。

1溜No. 2は五角形の板材である。使用用途も含め、詳細は明らかでない。

(5) 5号畑（第148図、PL.31-3）

①5号畑の概要

2号屋敷跡の西部、52区F-6・7、G-6・7・8、

H-7・8グリッドに位置する。5号建物（主屋）と町道1-11号線に挟まれた区画に立地し、南側の12号畑と隣接する。屋敷内の前菜園に相当する小規模な畑と考えられる。

畑は、やや周囲の敷地より高いレベルに造成されており、比高差は10～15cmを測る。畝サクの高低差は不明瞭であるが、As-A軽石はサクに堆積している。畝間は平均76cmと比較的広い。

②5号畑遺物出土状況及び出土遺物

湧水により木片が遺存していたが、出土状況からも、本来は他の遺構に帰属すべきものと思われる。報告する遺物も同様に、他の遺構に帰属する可能性が考えられる。

(6) 11号畑（第148図、PL.31-4）

①11号畑の概要

2号屋敷跡の東端部、52区A・B-8・9グリッドに位置する。屋敷跡の東側の境界を形成する3号溝と南側の境界を形成する2号石垣に挟まれた狭隘な区画に立地する。5・12号畑同様、前菜園に相当する小規模な畑と考えられる。

畑の畝立ては不明瞭であるが、僅かに凹んだサクにAs-A軽石が堆積しているように見える。サクの数は合計7本で、うち2本が畑区画内の最も狭隘な部分を有効に利用するかのよう、異なった方向に作られている。

②11号畑遺物出土状況及び出土遺物

11畑No. 1は鎌である。11号畑で使用されていたものが、天明泥流で埋没し出土したと思われる。或いは隣接して6号建物があり、この建物に帰属すべき遺物の可能性も考えられる。

(7) 12号畑（第148図、PL.31-5）

①12号畑の概要

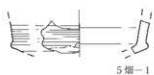
2号屋敷跡の南西部、52区D-7、E-6・7、F-6グリッドに位置する。北側の5号畑に隣接し、5号畑同様、前菜園に相当する小規模な畑と考えられる。

畑の北部分及び北側の境界は検出できなかったが、南側の境界には溝状の浅い凹みが廻っていることが確認できた。畑西側の境界も検出には至らなかったが、町道1-11号線の位置が境界となっていることが想定できる。

畑の畝立ては、5号畑と比較すれば、やや明瞭で、サ



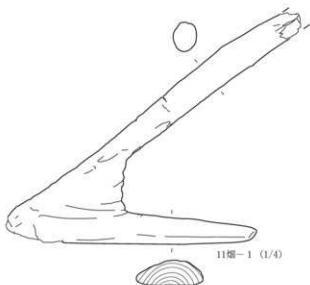
第148図 I区2号屋敷跡遺物出土状況



5号-1



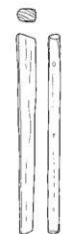
5号-2 (1/1)



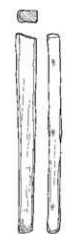
11号-1 (1/4)



12号-1 (1/4)



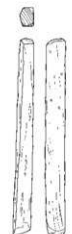
12号-2 (1/6)



12号-3 (1/6)



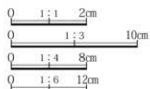
12号-4 (1/6)



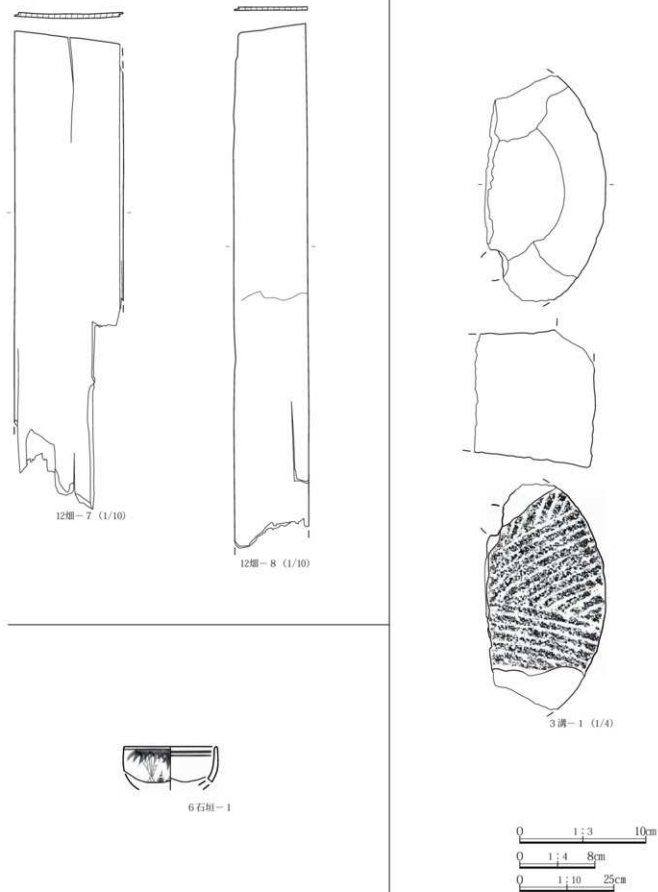
12号-5 (1/6)



12号-6 (1/6)



第149図 1区5号畑1・2、11号畑1、12号畑1～6出土遺物



第150図 1区12号畑7・8、6号石垣1、3号溝1出土遺物



第151図 1区2号屋敷跡出土遺物1～6

クにAs-A軽石が堆積している。敵幅も比較的狭い。上水道本管理設部分を挟んで南側と北側に検出したサクの一部が同一のサクと考えられるから、1本のサクの長さは約3mである。

②12号畑遺物出土状況及び出土遺物

湧水により、多くの木製遺物が腐蝕することなく出土した。板戸状に見える遺物もあるが、その用途は明らかでない。また、畑上に遺存していたことから、他の遺構に帰属すべき遺物とも考えている。

12畑No. 1は、鎌と思われる柄の端部に鋸の痕跡が確認された。転用されものと考えている。

(8) 6号石垣 (148図)

①6号石垣の概要

2号屋敷跡の北側の境界を形成する。52区E-10、F-9・10グリッドに位置する。調査前の状態で、石垣及び法面は、表土及び天明泥流堆積物により、20～30cmの厚さで覆われていた。

南西方向から北東方向に、平面的には直線状に走行する。長さ5.4m、高さ最大0.8mの規模を測る。2号屋敷跡北側の境界を形成する段丘土の土砂崩落を防止する目的で築造された石垣と考えられる。

②6号石垣遺物出土状況及び出土遺物

6号石垣からは染付碗が出土した。天明期に近く、出土状況から5号建物に帰属する可能性も考えられる。

(9) 3号溝 (148図)

①3号溝の概要

2号屋敷跡の北側から東側の境界に沿って東流し、4号溝と1号橋付近で合流する。52区A-8・9、B-9・10、C・D・E-10、E・F・G-9グリッドに位置する。溝は、屋敷跡北側から東側の境界に沿って流下している。しかしながら、流下方向の転換点に相当する部分については検出には至らず、その位置や形状、構造等については不明な部分が残る。

3号溝を仮に北部分と東部分とに分けて述べる。

北部分の北壁は7号石垣により構築され、ほぼ垂直に立ち上がっているのに対し、南壁は地山が緩やかに立ち上がっている（比高差10～15cm）。また、西側部分の北・南壁に相当する部分には、木材が敷設され、壁を補強しているようにも見た。溝幅は、西側ほど狭く（約20cm）、東側ほど広くなる（約70cm）。

東部分は、東・西壁とも、径20～30cmの垂角礫が使用された二段程度の石組で構築されている。溝幅は10～15cmと狭いが、深さは約30cmと比較的深い。

②3号溝遺物出土状況及び出土遺物

出土遺物は僅かである。出土した石臼（3溝No. 1）は欠損しており、溝壁面の一部に転用されたものとも考えられる。

(10) 2号屋敷跡遺物出土状況及び出土遺物 (第148図)

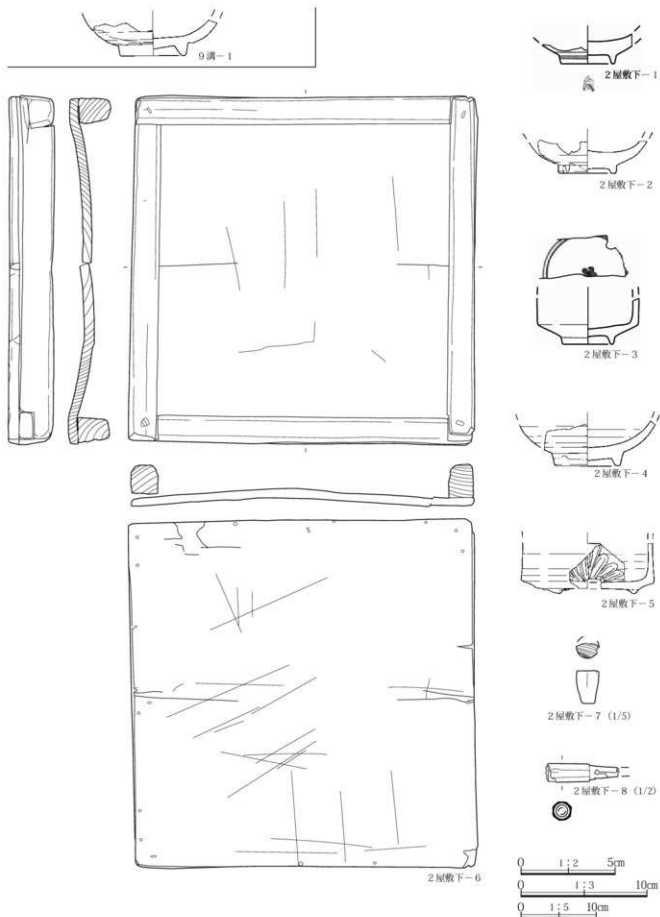
①2号屋敷跡遺物出土状況

2号屋敷跡は良好に遺存されていたためか、出土遺物の多くは建物に帰属することができた。2号屋敷跡とし



第152図 Ⅰ区2号屋敷跡下遺物出土状況

第1節 1区の調査成果



第153図 1区9号溝1、2号層敷下1～8出土遺物

第3章 発見された遺物

て報告する遺物についても、主屋である5号建物に帰属する可能性が高いと考えている。

②2号屋敷跡出土遺物

特筆すべき遺物に2号敷No. 3の陶器皿がある。高台内に「首」と墨書されており、同様の遺物が4建No. 52でも出土している。「首」の示す意味も含め、詳細については明らかでない。

(11) 9号溝 (第152図、PL. 31-7)

①9号溝の概要

9号溝は、5号建物土間北東側を、緩やかに北側へ曲がるように東流する。溝東側の合流地点は判然としませんが、5号建物北側で検出された3号溝と、5号建物東側で検出された3号溝とを繋ぐような溝と思われる。52区B・C・D-9・10、E-10グリッドに位置する。

9号溝の出土状況は、8号溝と近似している。ともに天明泥流で被災した屋敷跡地境溝と合流している点や、周辺の地形、等高線に沿うように走行している点、建物と重複して検出された点や、天井石を持つ点など共通項は多い。これは、8号溝と同様に、9号溝が古い段階の2号屋敷跡地境を流れていた地境溝であったためだと考えている。また、5号建物北側で検出された3号溝西側では、溝の壁を補強するためか木材が敷設されていた。9号溝の構造と同様であり、興味深い共通点である。

②9号溝遺物出土状況及び出土遺物

9号溝からは、連房6小期の尾呂茶碗(9溝No. 1)が出土した。出土遺物は僅かであるが、9号溝の時期を考える上で重要な遺物と考えている。

(12) 2号屋敷跡下の遺物出土状況及び出土遺物 (第152図、PL. 31-6・7)

①2号屋敷跡下の遺物出土状況

2号屋敷跡及下からは、9号溝が検出されている。屋敷跡下から近世遺構が検出されたためか、2号屋敷跡下の出土遺物は比較的多い。

②2号屋敷跡下の出土遺物

特筆すべき遺物に2号敷下No. 6のお膳がある。出土した他のお膳とは形態が異なることから、その用途は異なることも考えられる。

2号敷下No. 6は木製のお膳であり、比較的脆弱な遺

物と思われるが、5号建物土間下より良好な遺存状態で出土した。これは、埋没した後間もなく、保水性及び保湿度のある天明泥流に被覆されたためではないかと考えている。

出土陶磁器は、瀬戸・美濃系陶器は連房6～8小期に収まり、肥前系時期も18世紀前半～1780年代に収まる。比較的天明期に近い時期のものが多く、9号溝埋没時期を考える上で重要な出土遺物と考えている。

3 その他の遺構

(1) 2・3・4号畑 (第154図、PL. 32-1)

①2・3・4号畑の概要

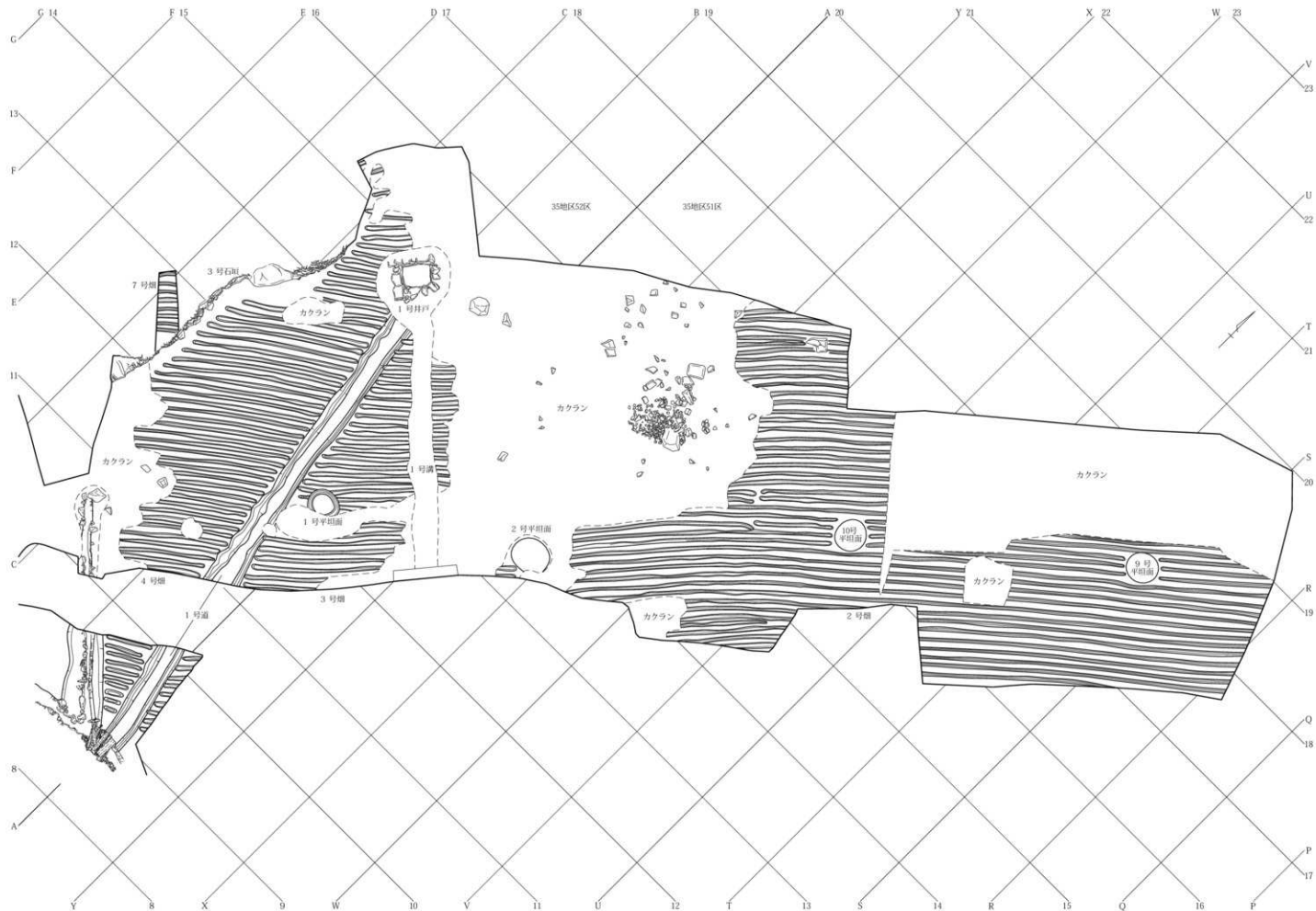
【2号畑】51区Q-17、R-17・18、S-16・17・18、T-15・16・17、U-14・15・16、V・W-13～17、X-13・16・17グリッドに位置する。畑の東・南側の境界は、調査区外により検出できず、北側部分も現代の宅地造成に伴う切土工事により壊されていた。また、西側部分も、畑検出面積が現地表面より約30cmと浅いため、現代の畑耕作によると考えられる攪乱が侵入し、畝サクが確認できなかった。

【3号畑】51区Y-9～14、52区A-11～14グリッドに位置する。畑の西側の境界は、1号屋敷跡から1号井戸へと伸びる1号道により区画される。しかしながら、北・東側は攪乱により境界は確認できない。南側も調査区外により境界は確認できないが、1号屋敷跡との隣接部(1号橋北側)に3号畑の一部と考えられる畝サクが数本検出されているため、畑の南側の境界は6～7m南東方向へ拡張する可能性もある。

3号畑の畝サクは、1号井戸から南流する1号溝に明らかに切られている。

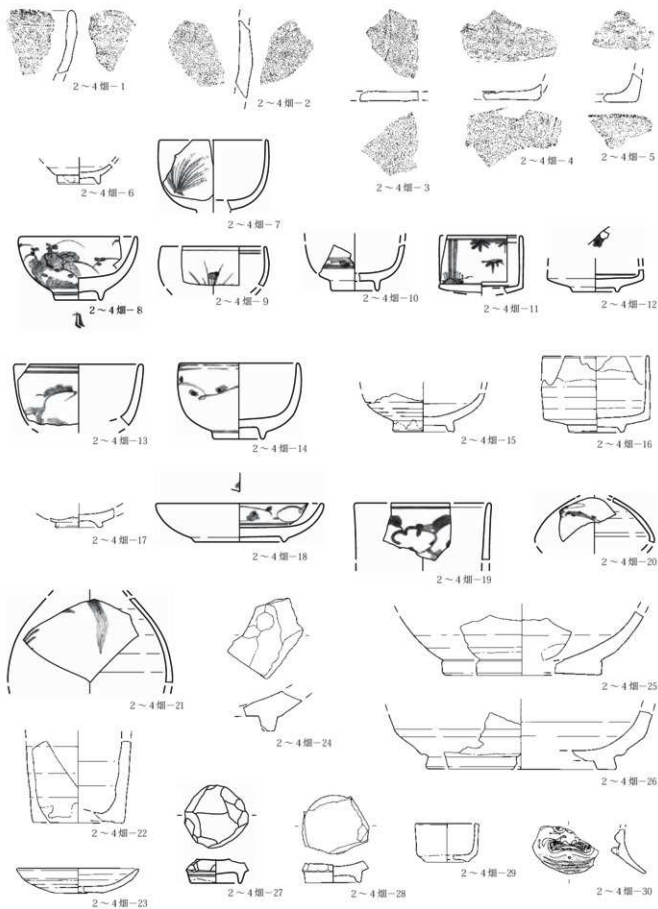
畑の畝サクは等高線にほぼ平行して走行し、高低差は明瞭でサクにAs-A軽石が堆積している。

【4号畑】52区A-9～13、B-10～15、C-11～15グリッドに位置する。畑の東側の境界は、1号道により区画され、西側の境界は3号石垣により区画される。ただし、北側の境界については、1号井戸の北側まで4号畑の畝サクが延長しているため、7号畑との境界について不明な部分が残る。西側南寄りの境界も、攪乱により不確定ではあるが、2号屋敷跡の東側の境界で区画される

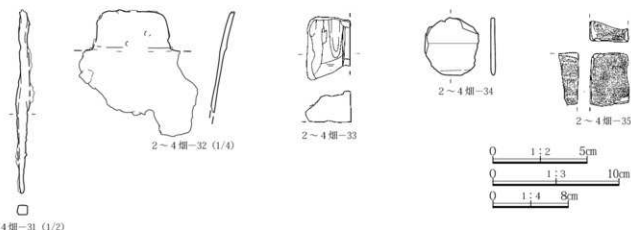


第154図 1区2・3・4号堀

第1節 1区の調査成果



第155図 1区2・3・4号畑出土遺物1～30



第156図 1区2・3・4号畑出土遺物31～35

と考えられる。畑の南側は、1号道と3号溝に挟まれた三角形の狭い区画に4号畑の延長部と考えられる畝サクの一部が検出されている。

畑の畝サクは等高線にほぼ平行して走行し、高低差は明瞭でサクにAs-A軽石が堆積している。

②2・3・4号畑遺物出土状況及び出土遺物

広範囲であるため、畑としては出土遺物が多く、また時期幅もある。近世陶磁器は、器種や年代からも近隣の建物に帰属する遺物とも考えられる。

内耳土器（2～4畑No. 1～5）がやや多く出土した。2・3・4号畑下からは溝や集石などの遺構が検出され、一部は中世遺構とも考えられる。報告する遺物も、これらの遺構に帰属する遺物とも考えられる。

(2) 2・3・4号畑下の遺構

ここでは、2・3・4号畑下より出土した遺構について、その概要と出土遺物等について報告する。

①2号溝（第158図、PL.32-3）

51区W-14、X-15、Y-16グリッドに位置する。長さ14.9m×幅60～90cm×深さ30cm（2号畑面より深さ70cm）の規模を測る。2号畑面より、約40cm掘り下げて溝に伴う礫上面を検出した。溝の底部はやや丸味を帯びて掘り凹められている。礫は径15～40cmの垂角礫が使用され、中空の空間を作るように、両側に礫を壁状に並べ、天井にやや大きめの平石を載せている。

このような構造的な特徴から暗渠と考えられる。この溝が、上面の2号畑に伴う暗渠と考えれば、その帰属時期は天明三年（泥流下）となるが、不確定である。

2号溝からは渡来銭から昭和までの銭貨が出土した。

この何れが2号溝の時期を示す遺物かは明らかでない。

②51区1号集石（第158図、PL.32-4）

51区W-13・14グリッドに位置する。長径2.0m×短径0.7mの楕円形状を呈する。底部はやや丸味を帯びて15cm程度掘り凹められている。径5～10cmの垂角礫が集められている。2号畑面より20～30cm下面で検出したが、掘り込み面は不明である。土坑状の掘り込み礫を投げ入れて廃棄し、土で被覆された可能性もある。

51区1号集石からは、内耳土器（1集石No. 1）が出土した。中世所産と思われ、1号集石も中世の遺構と考えられる。

③1号被熱岩（第158図、PL.32-5）

51区W・X-15グリッドに位置する。開墾や開墾の障害となる不要な岩盤に対して、露頭に火を焚いて熱し、水を掛け急冷して剥離したり、割ったりした痕跡と考えられる。遺構名は「被熱岩」と仮称した。

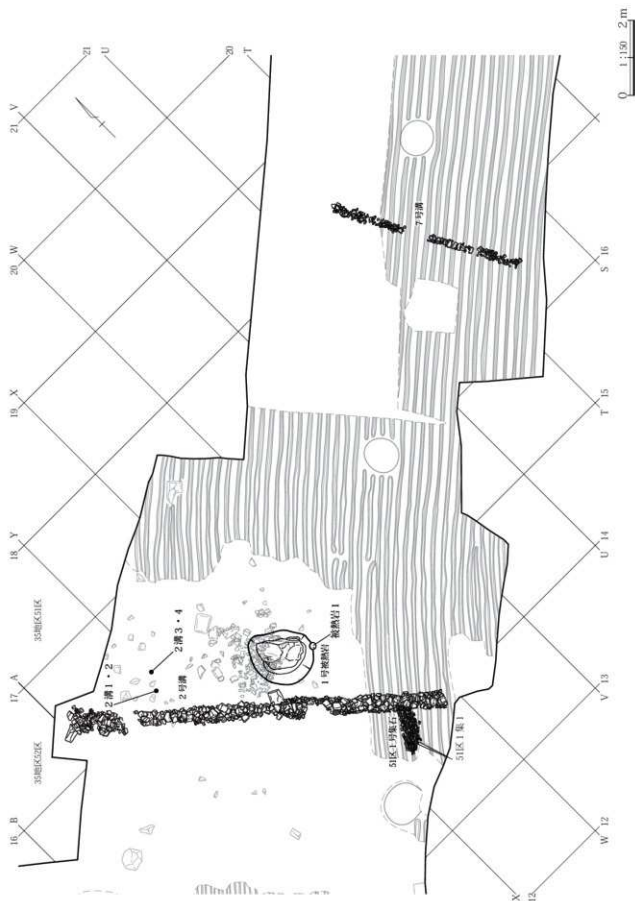
1号被熱岩からは石臼（被熱岩No. 1）が出土した。詳細については明らかでない。

(3) 1号井戸（第160図、PL.32-2）

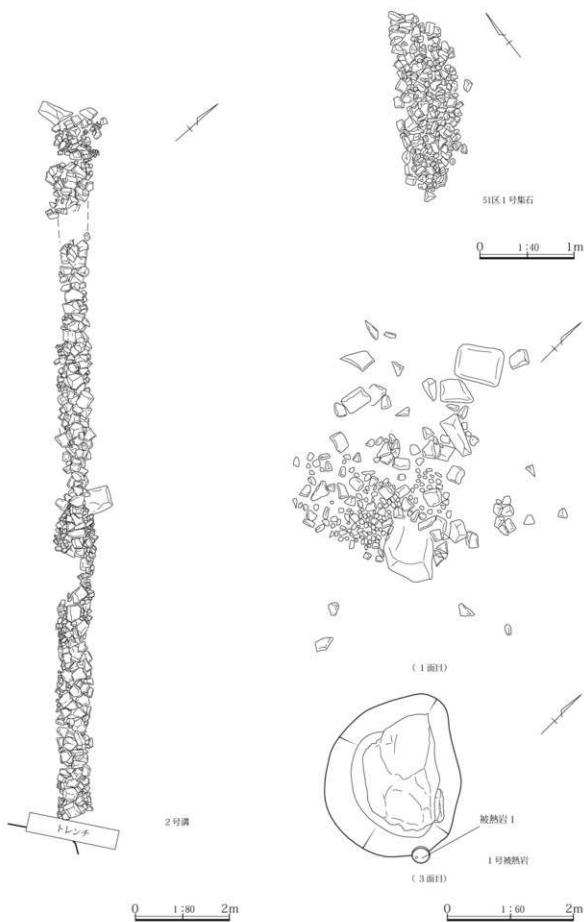
①1号井戸の概要

1号屋敷跡から北方向へと延びる1号道の延長部、52区B-14グリッドに位置する。孔口は1.2m×1.0mの規模の長方形形状を呈する。深さ約1.6m（南東側）、発掘時にも湧水が確認でき、水深は70cm（水位H=534.40m）であった。孔内は、長方形の平面形状を意識しながら、川原石や垂角礫が使用され、精緻な石組が築造されているが、底部に石組・石敷はない。

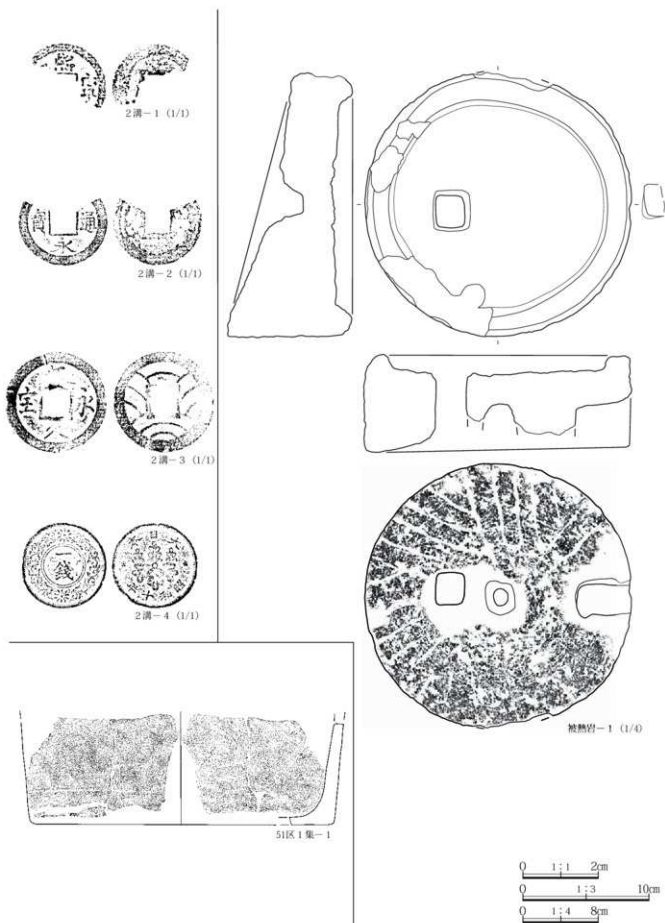
覆土は、天明泥流被災後に、泥流中に多量に混入する



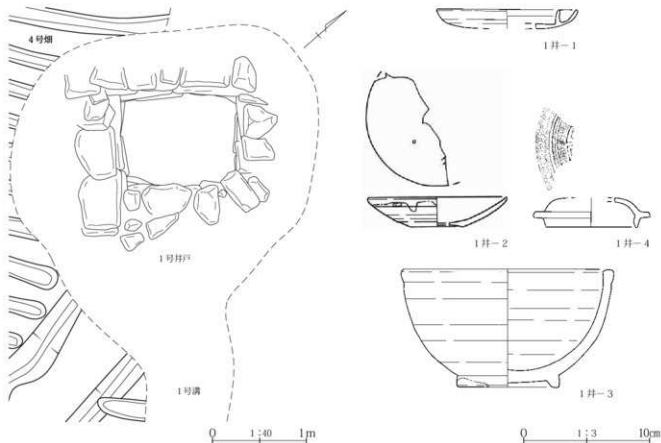
第157図 1区2・7号溝、51区1号集石、1号被熱岩 遺物出土状況



第158図 1区2号溝、51区1号集石、1号被熱岩 遺物出土状況



第159図 1区2号溝1~4、51区1号集石1、1号被熱岩1出土遺物



第160図 Ⅰ区1号井戸、1号井戸出土遺物1～4

「浅間石」が人為的に廃棄されていた。井戸築石の上面にもAs-A軽石の堆積は確認できなかった。また、井戸は4号畑の一部や1号道を切って構築されているとともに、井戸から南東方向へ流下する1号溝も、3号畑の畝サクを明らかに切って構築されていることから、帰属時期は天明泥流被災後であると判断した。

1号屋敷跡から1号橋を経由して北へ延びる1号道は、まっすぐに井戸へと向かっていることなどから、天明三年段階にも、何らかの形で井戸がこの位置に存在して使用されており、泥流被災後、その井戸は復旧されるとともに改築され、同時に1号溝が構築された可能性も考えられる。

② 1号井戸遺物出土状況及び出土遺物

1号井戸出土遺物は、連房8小期から近世以降までと時期幅がある。出土陶磁器から考えても、1号井戸は天明泥流被災後の遺構だと思われる。

(4) Ⅰ区遺構外出土遺物

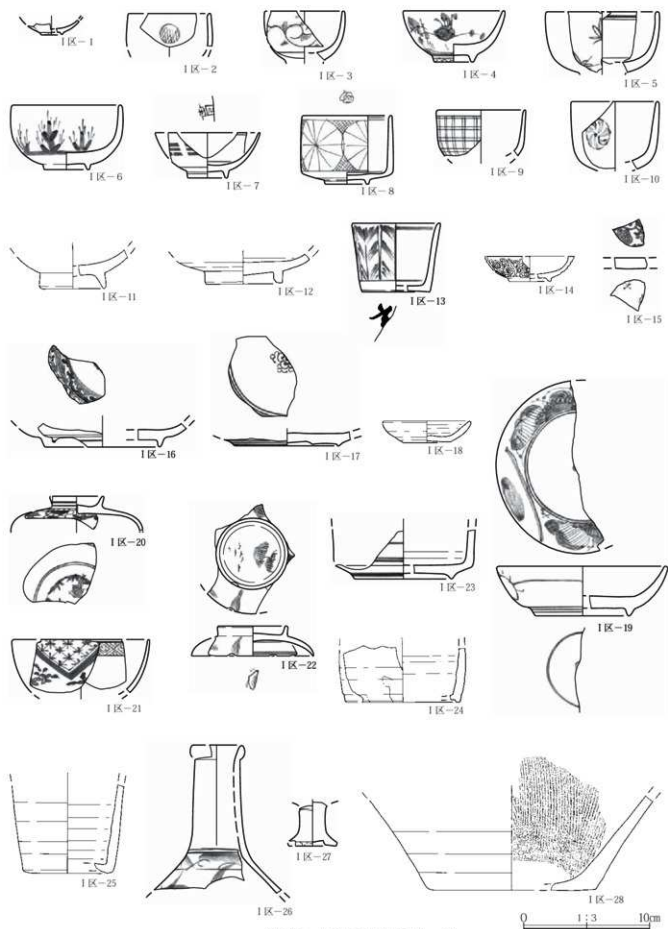
Ⅰ区遺構外で報告する遺物は、他の調査区遺構外と比較してもその数は多い。遺構が良好に遺存され、遺物が

多く出土したⅠ区を反映した結果と思われる。また、出土した遺物の多くは、本来は、多くの遺物が出土した各建物に帰属されるべきものだと思う。しかし、出土位置の確認ができないため、ここでの報告とする。

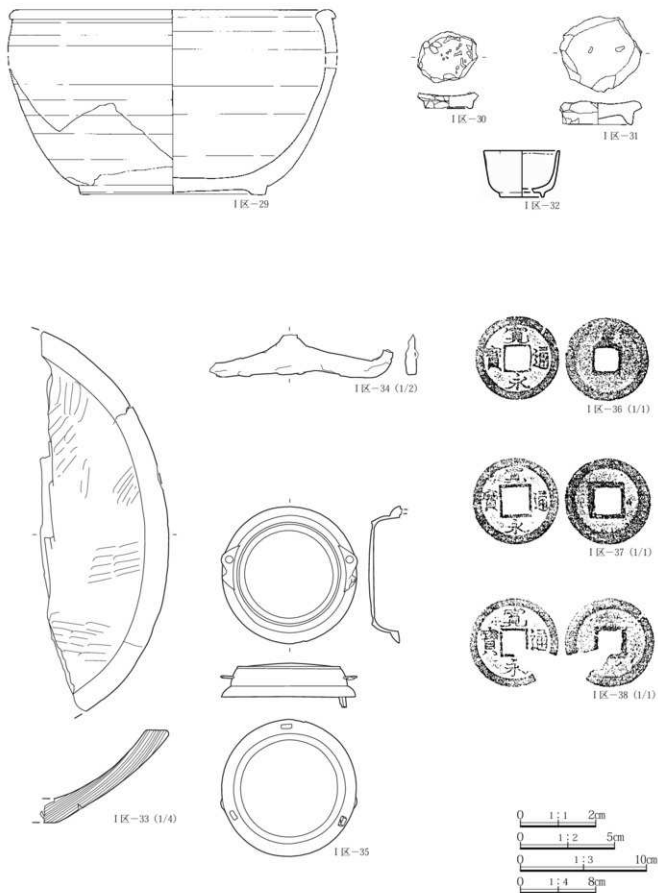
Ⅰ区遺構外No.34は火打金と思われる。出土した遺物の中で、明らかな火打金はこの1点のみであった。

Ⅰ区遺構外No.35は鉦鼓である。鉦鼓は、小破片で判然としないものを除けば、13建No.132とⅠ区遺構外No.35の2点のみである。

第1節 1区の調査成果



第161図 1区遺構外出土物1～28



第162図 I区遺構外出土物29～38

第2節 II区の調査成果

II区では、建物1、土坑1、集石1、畑6、道1、石垣1、溝1を確認し、発掘調査を実施した。そのうち、天明泥流下の遺構は、建物1、畑6、道1、石垣1、溝1とその大半を占めている。屋敷跡は1カ所を確認し、調査を実施した。3号屋敷跡は主屋1と畑（前菜園）3、道1、石垣1、溝1で構成されている。

1 3号屋敷跡

(1) 3号屋敷跡の概要（第163・164図、PL.33-1）

3号屋敷跡は50～100cmの表土及び天明泥流堆植物に被覆されていた。現地表面には近年まで住宅が建てられていたため、造成工事に伴うと考えられる攪乱が、屋敷跡中央部から南側にかけて多数侵入していた。

屋敷跡を被覆する表土及び天明泥流堆植物は、1号屋敷跡や2号屋敷跡を被覆していた保水性及び保湿性の高いものではなく、木製の建築部材等の遺存状況は全体的には良好ではなかった。ただし、屋敷跡北西側の境界付近には、僅かな湧水地点が存在するため、7号建物の土間から建物北側及び5号溝や9号石垣付近では、部分的に遺存状況が良好であった。

3号屋敷跡は、7号建物（主屋）と、屋敷跡の南側の前菜園と考えられる小規模な畑3枚（18・20・21号畑）で構成される。3号屋敷跡では付属建物は検出されていない。7号建物北側には、屋敷の境界を形成するとともに、段丘崖の自然法面の崩落を防止するように9号石垣が構築され、さらに段下には、石垣に沿って5号溝が西流している。また、屋敷跡の南側からは、7号建物の土間出入口部へ向かって道（4号道）が延びている。

7号建物の前庭と20・21号畑との中間（境界）には2～3段階程度の低い石垣が南西から北東方向に走行し、段下にはそれに沿って道状の凹みが存在し、東側の調査区外へと延長している。また、18号畑の北側部分には腐葉土と考えられる肥料が堆積していた。

3号屋敷跡主屋である7号建物下からは、51区1号土坑、51区2号集石が検出されている。1号土坑は7号建物南東側の雨落溝下付近から、2号集石は建物土間南側出入口付近から検出されている。7号建物下から遺構が

表6 東宮遺跡II区遺構一覧表

編属時期	遺構名
天明三年前	51区1号土坑、51区2号集石
天明三年（泥流下）	3号屋敷跡（7号建物、18・20・21号畑、9号石垣、4号道、5号溝）
	8・17・19号畑

※建物に付属する遺構（囲炉裏、馬屋など）は上記遺構一覧からは省略した。

検出されたことは、3号屋敷跡においても天明泥流に被災するまでの間、敷地の拡張や造成、建物の増改築が行われた可能性を示唆するものと考えている。

(2) 7号建物（第164図、PL.33-2～35-6）

① 7号建物の概要

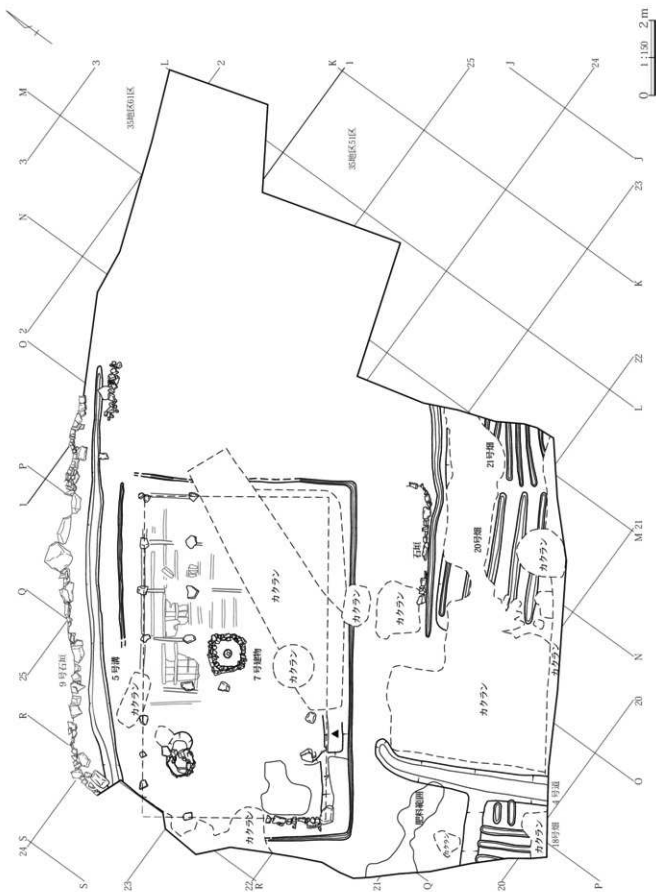
3号屋敷跡の主屋であり、土台建物と考えられる。3号屋敷跡の北西部、51区N-22・23、O-22～25、P-21～24、Q-21・22・23グリッドに位置する。建物の南東部は攪乱の侵入により不確定であるが、桁行（東西）12.81m×梁行（南北）7.36mの規模を測る。床高も不確定であるが、土間東側の床板痕が地面から20cm（H=534.30m）、囲炉裏の上面が地面から30cm（H=534.35m）を参考に記しておく。

建物出入口は土間南側と想定されるが、土間北側の裏口は攪乱により確認できない。7号建物は西部に土間や馬屋が配置され、土間奥手に焚口が東側を向いた竈が設置される。また、中央部から東部分には床部が配置される。囲炉裏は想定される床部分の西端に配置されている。

建物を構成する施設（馬屋、竈、囲炉裏）及び礎石は基本的に原位置を保って出土している。また、礎石上に据えられていた土台の腐蝕した痕跡、或いは根太や床板の痕跡も平面的には原位置を保っていると考えられる。

建物の四方には雨落溝が廻っている。建物北側では、雨落溝は建物の基礎面とほぼフラットであるのに対し、南側では、段差が存在し、比高差30～40cmを測る。

礎石は、建物の北側から西側にかけて、計17基程度が遺存している。礎石には、平石及び川原石が多用されているが、馬屋正面に向かって左右（東西）隅の礎石は、



第163図 II区3号屋敷跡

やや厚みを有する。さらに、馬屋石（東）側の礎石とその東側に隣接する礎石は、やや建物内部（土間）へ入り込んだ位置に据えられている。

土台は、建物北側と東側の一部において、地面及び礎石直上の土台痕を検出した。土台痕の幅は平均15cmである。大引は、建物内部において、南北方向に痕跡を4～5本検出した。この痕跡は土台痕の可能性も考えられるが、地面より5～15cm浮いた状態で、天明泥流堆積物を間層に挟んで検出されていることを考慮すると、大引の痕跡の可能性の方が高いと判断した。根太は、建物内部において、東西方向に根太痕を約20本検出した。根太痕の幅は平均10cmである。床板は、建物内部において、南北方向に痕跡を10～15枚検出した。

7号建物西側には、土台の一部と思われる建築部材が遺存していた。『東宮遺跡（1）一遺構・建築部材編一』（以下、『東宮遺跡（1）』と略す）に未掲載であったため、ここで改めて報告する。

②7号建物遺物出土状況

7号建物からは、1・4・5号建物のように、建築部材が原位置を保ち極めて良好に遺存してはいない。湧水地点が僅かであったことがその要因と思われる。

しかし、7号建物北側である9号石垣下付近では漆器や木製品などの脆弱な遺物が良好に遺存していた。前述の通り、3号屋敷跡北西側の境界付近に、僅かな範囲だと思われる湧水地点が存在するためと考えられる。

東宮遺跡を被覆する天明泥流は、南東から北西方向に流入したと思われる。これは3号屋敷跡でも同様と思われる。7号建物に掃蕩すべき遺物が天明泥流により建物北側へ押し流され、9号石垣下付近より出土したと考えている。

出土した木製品等の中には、脆弱であり保存処理できない遺物も見られた。出土状況等については、第164図に報告したので参照して頂きたい。

③7号建物出土遺物

特筆すべき遺物に、連房8小期（連房式登室第8小期の略。以下同様に略す）のすり鉢（7建No.21）がある。このすり鉢は焼成前に生地が割れたと思われる、櫛歯状の道具で割れた箇所を補修した補修痕跡が内外面に見られた。すり鉢は、その後施釉し焼成されたが、7号建物で使用した際に欠損したと思われる、漆を接着材として補修

した漆継も確認された。生産地である瀬戸と、消費地である東宮遺跡とで、ともに補修が行われた痕跡を残す遺物である。

出土した漆椀（7建No.24～32）は、外面を透き漆や黒色漆、内面を赤色漆で仕上げられたものが多くを占めていた。1・2号屋敷跡からは、内外面赤色漆で仕上げられた漆椀が出土し、外面を透き漆や黒色漆で仕上げた漆椀は確認できなかった。各屋敷跡によって異なる道具を持ち、趣味や趣向に違いがあることが分かる。

7建No.33・34は、規格の異なる重箱と思われる。外面には、同様に櫛歯状の道具で波状の文様が施され、透き漆で仕上げられていた。

7建No.39は湾曲した欠込を持ち、目盛が刻まれた板材である。東宮遺跡から出土した遺物の中で、目盛の確認できたものは、13号建物から出土した棹桿（13建No.75）と7建No.39の板材のみである。欠損部が多く詳細は明らかでないが、その形態からも秤の一部と考えられる。

東宮遺跡からは多数の鎌が出土した。出土した鎌刃部の角度から考えると、多くは右利き用の鎌と思われる。7建No.52の鎌は、端部が欠損しており鎌刃部の角度が明らかでないが、出土した多くの鎌とは異なる角度と思われる。左利き用の鎌ではないかと推測している。

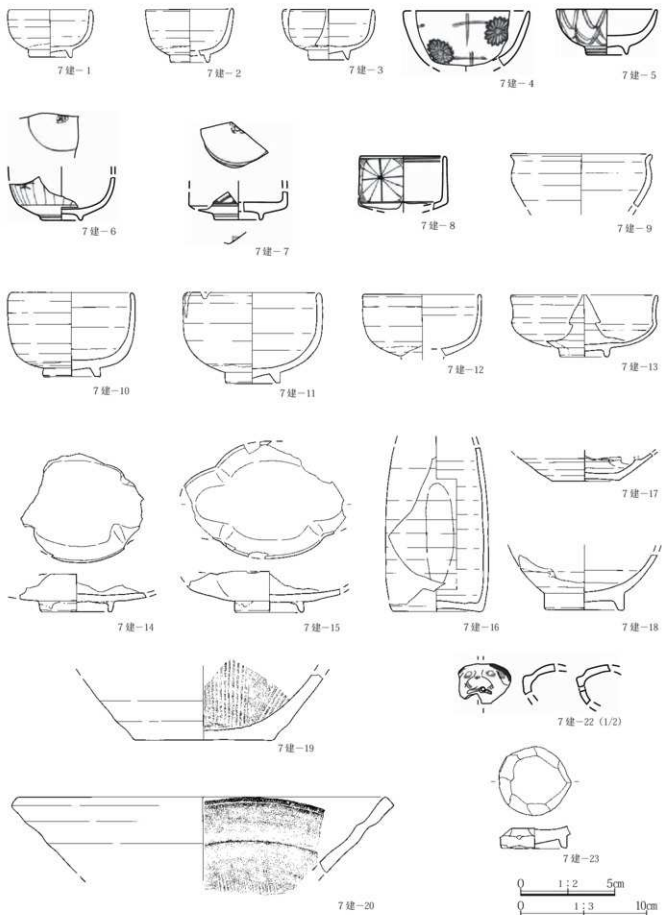
東宮遺跡から出土した刀は7建No.55のみである。柄は欠損するが良好に遺存していた。しかし、刃部は錆により鞘から抜けず、刃部の形状等は明らかでない。黒漆で仕上げられた鞘には小柄または斧を収める箇所や、栗形が遺存していた。小型の刀と思われるが、鞘に残る小柄または斧の収まる箇所は大きい印象を持つ。

出土した茶缶（7建No.56）は蓋を伴い出土した。錆により劣化が顕著であったが、形状は1建No.402に近似している。

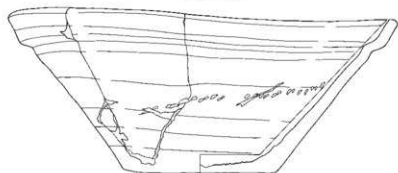
出土した鉄鍋類は3点（7建No.57・58・59）あり、それぞれ規格が異なる。その中でも特徴的な鉄鍋類は、7建No.59である。小型で注口を持つことから、他の鉄鍋類とは用途が異なるものと思われる。7建No.58の小型の鉄鍋には、欠損部を溶接により補修した補修痕跡が明瞭に遺存していた。

7建No.80は木製の台に入った砥石である。東宮遺跡からは多くの砥石が出土したが、石材の多くは砥石

第3章 発見された遺物



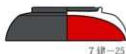
第165図 II区7号建物出土遺物1～20・22・23



7建-21



7建-24



7建-25



7建-26



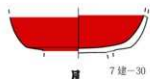
7建-27



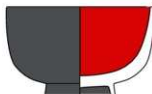
7建-28



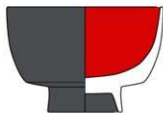
7建-29



7建-30



7建-31

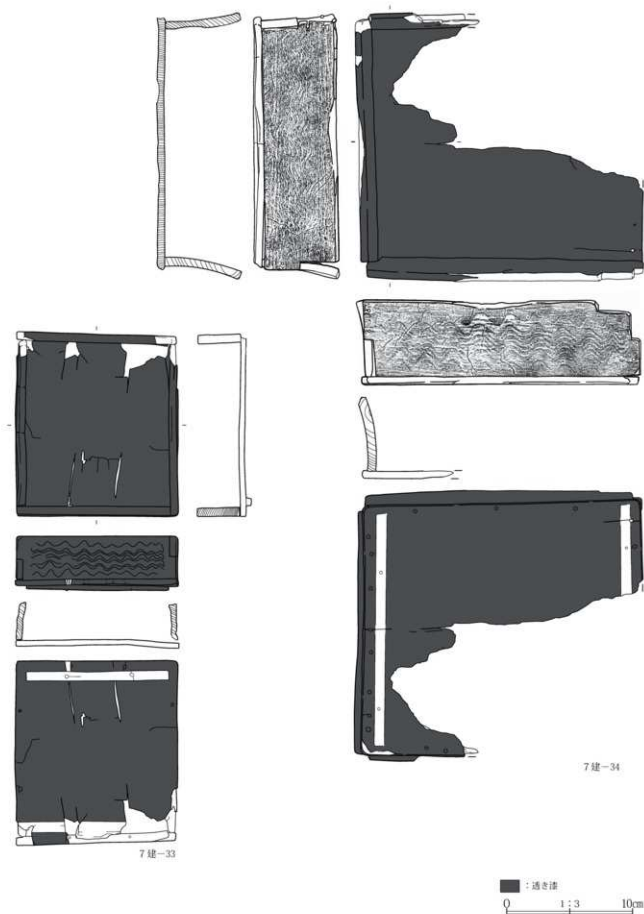


7建-32

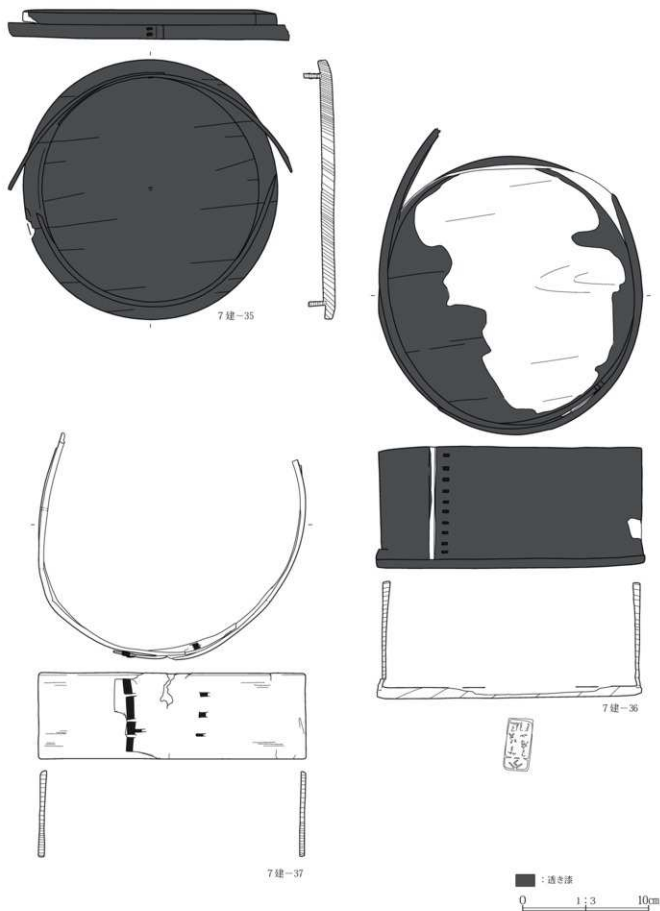


0 1:3 10cm

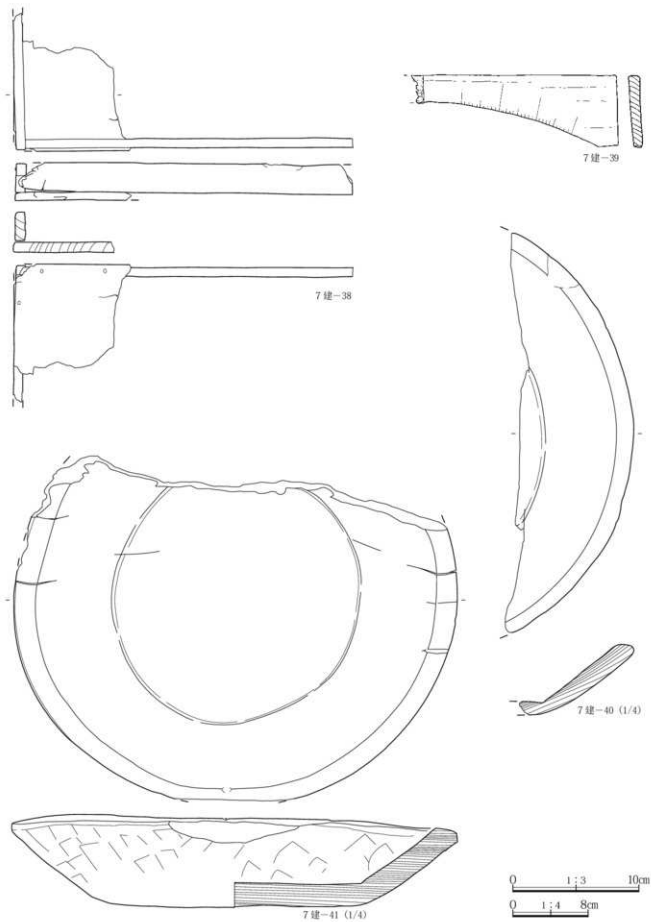
第166図 II区7号建物出土遺物21・24～32



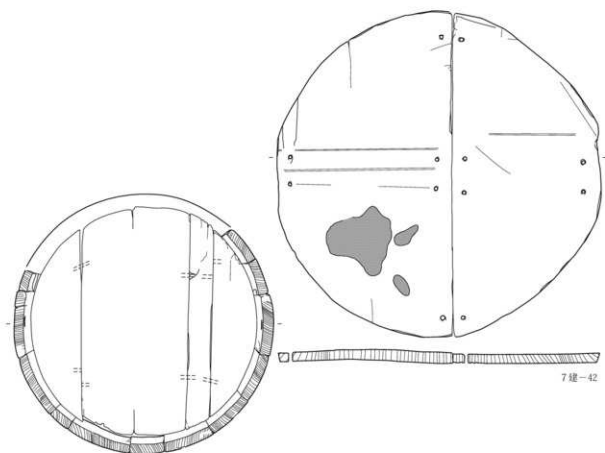
第167図 II区7号建物出土遺物33・34



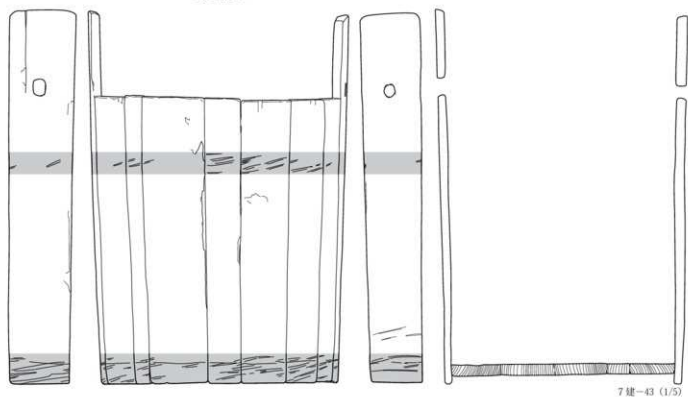
第168図 II区7号建物出土遺物35～37



第169図 II区7号建物出土遺物38～41



7建-42

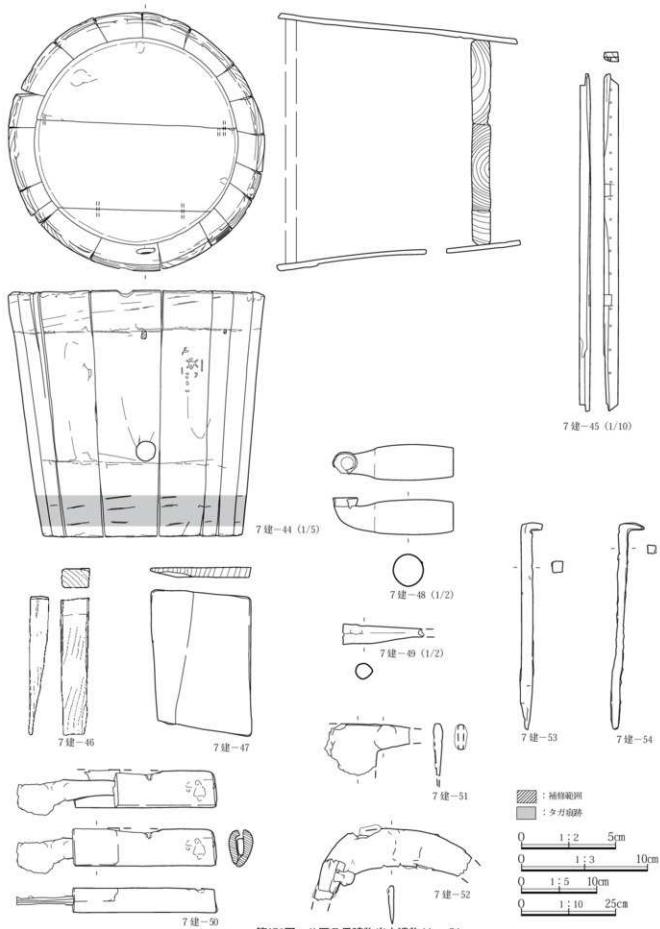


7建-43 (1/5)

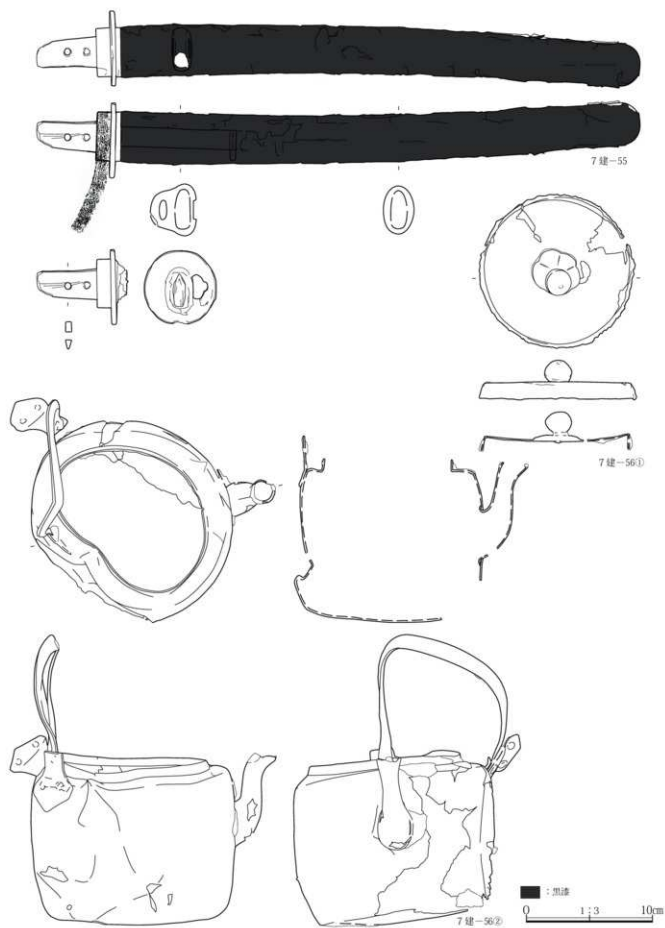
□ : 土刀痕跡
 ■ : 炭化範囲

0 1:3 10cm
 0 1:5 10cm

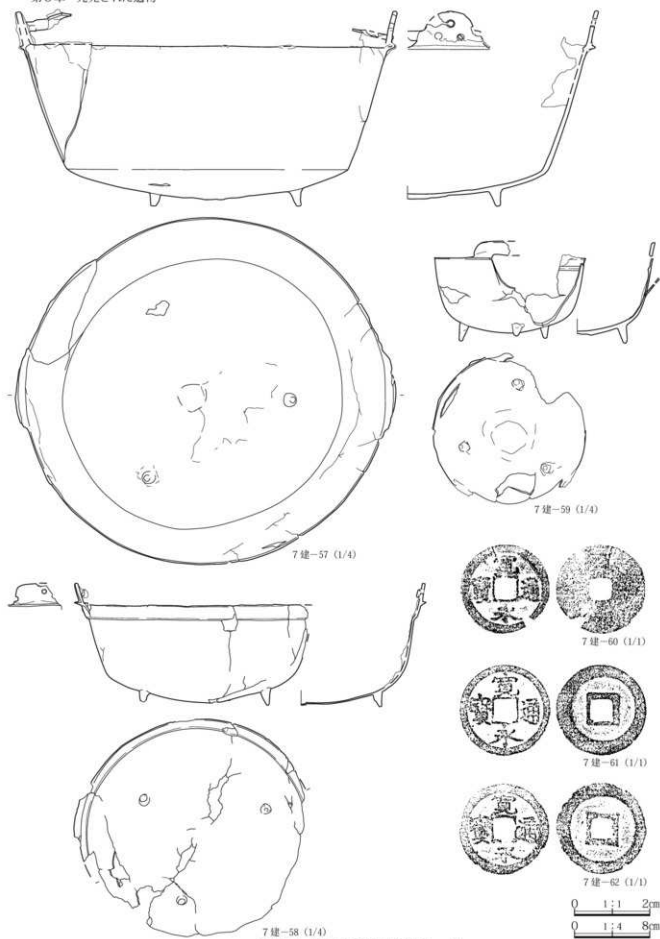
第170図 II区7号建物出土遺物42・43



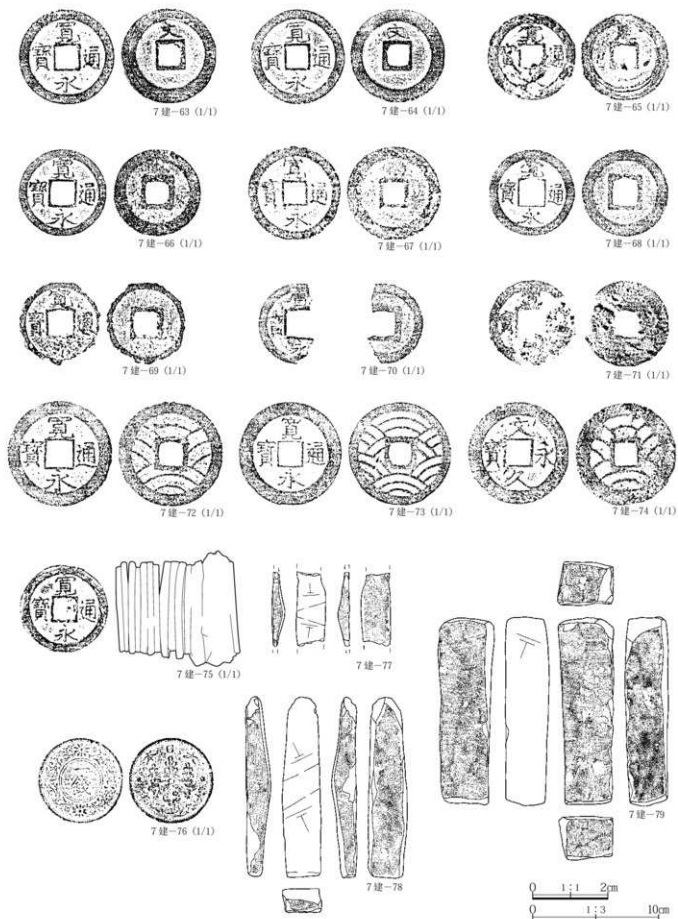
第171図 II区7号建物出土遺物44～54



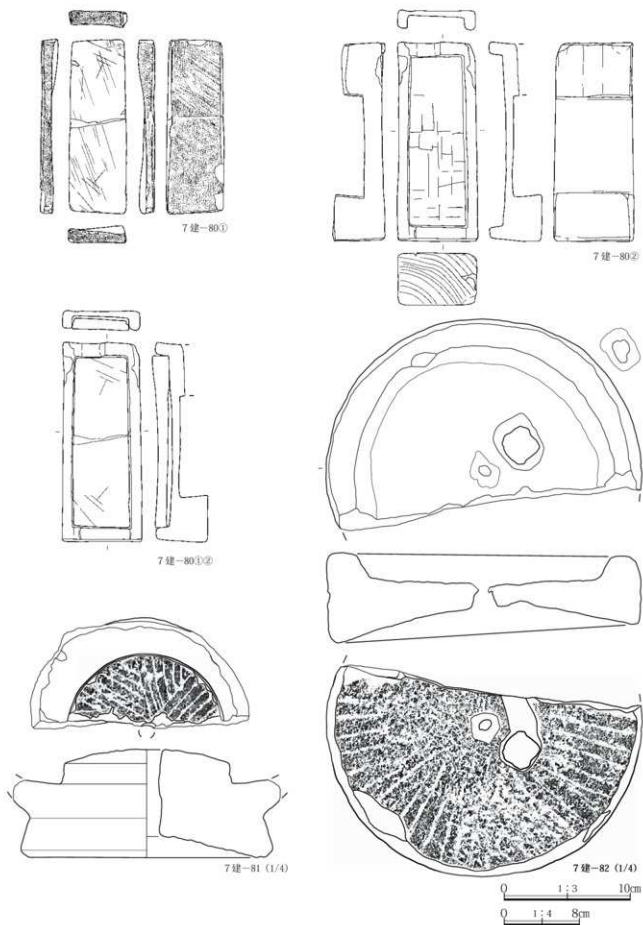
第172図 II区7号建物出土遺物55・56



第173図 II区7号建物出土遺物57～62



第174図 II区7号建物出土遺物63～79



第175図 II区7号建物出土遺物80～82

(石英閃緑ひん岩質)であった。7建No.80と同様に粘板岩の砥石は僅かであり、また木製の台に遺存した砥石はNo.80のみである。石材から仕上げ砥と思われる。砥石を台に取めると、台よりも砥石が薄くなる箇所が見られた。そのため、台に取めた状態では砥石を使用していないものと考えている。

(3) 9号石垣(第163・164図)

① 9号石垣の概要

9号石垣は、屋敷跡の北側の境界を形成する。3号屋敷跡北側の境界を形成する段丘崖の土砂崩落を防止する目的で築造された石垣と考えられる。51区O-25、P-24・25、Q-24、R-23・24、61区O-1グリッドに位置する。

9号石垣の規模は、長さ15.9m、高さ最大0.8m。地山法面に存在する自然の大石(径約110cm)も石垣の一部に取り込んで構築されている。段数は部分的に4段程度確認できるが、高さや段数は全体的に一定しない。

② 9号石垣遺物出土状況及び出土遺物

3号屋敷跡を被覆する天明泥流は、南東から北西方向に流入したと思われる、7号建物の遺物は9号石垣側に押し流されたと考えている。そのため、9号石垣付近で出土した遺物の大半は7号建物に帰属するものと思われる。出土位置を確認し、多くは7号建物の出土遺物として報告している。しかし、調査時の資料がなく、出土位置が確認できないものについては、調査所見に従い9号石垣の遺物として報告する。

9号石垣出土遺物の多くは陶磁器である。陶磁器の年代や器種を考えても、7号建物に帰属する可能性が高いと思われる。

(4) 3号屋敷跡遺物出土状況及び出土遺物(第163・164図、PL.35-7)

① 3号屋敷跡遺物出土状況

3号屋敷跡において出土遺物は僅かだ。原因として9号石垣側におもった湧水地点が挙げられる。9号石垣側からは漆器や木製品など脆弱な遺物も出土しているが、7号建物内では、建築部材が一部遺存する程度であった。より多くの遺物が埋没していたことも考えられるが、攪乱による影響、或いは腐蝕したものと思われる。

3号屋敷跡から出土した遺物は、大半が7号建物北側、7号建物と9号石垣との間で確認された。被覆する天明泥流の様相を考えれば7号建物に帰属するものと思われる。出土位置を確認し7号建物出土遺物として報告している。また、報告する3号屋敷跡出土遺物も陶磁器が多く、その年代や器種を考えても、7号建物に帰属すべき遺物が多く含まれていると思われる。

② 3号屋敷跡出土遺物

3屋敷No.14は鉄鍋であるが、器高の低い焙烙のような鉄鍋である。器高の高い他の鉄鍋とは、用途が異なるものと考えている。

3屋敷No.15は軽石で作られた石鉢状の石製品である。用途も含め、詳細は明らかでない。

出土遺物の中には、攪乱によるためか後世の遺物も混入していた。報告する遺物の中にも、後世の遺物が僅かに混在しているものと思われる。

(5) 51区2号集石(第178・179図、PL.35-8)

① 51区2号集石の概要

7号建物土間南側出入口付近の下面、約10cmの深さにおいて検出した。51区P-22・23グリッドに位置する。平面は不整形円形を呈し、2.5m×1.4mの規模を測る。土坑状の掘り込みは確認できず、径10～20cmの垂角礫が1・2段程度、集積されている。

② 51区2号集石遺物出土状況と出土遺物

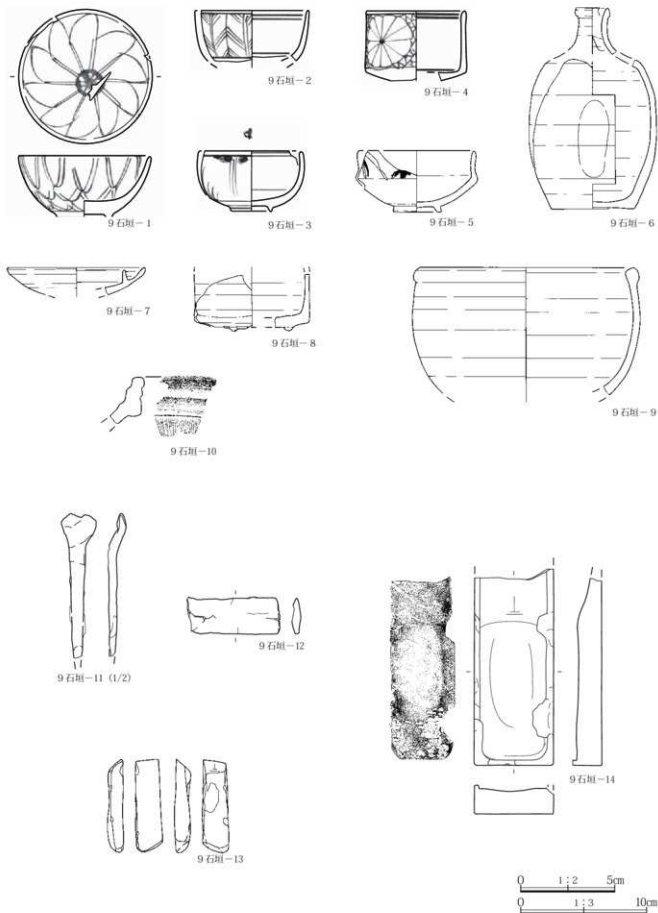
51区2号集石からは、礫上面付近で小型の土師器皿(51区2集No.1)が出土した。東宮遺跡で出土した土師器皿(カワラケ)は、器種を判別できる中ではこの1点のみである。底部外面には墨書があり、「中」とも読める。「中」の文字が確認できる遺物は、土師器皿と1建No.286の下駄のみである。

51区2号集石からは、17世紀末～18世紀前半頃の皿(51区2集No.3)と、連房6か7小期の尾呂茶碗(51区2集No.2)が出土した。ハツ場地域でカワラケの出土例は少なく、また良好な共存関係でもないのだが、ともに近世であり、51区2集No.1の土師器皿も近世産の可能性が考えられる。

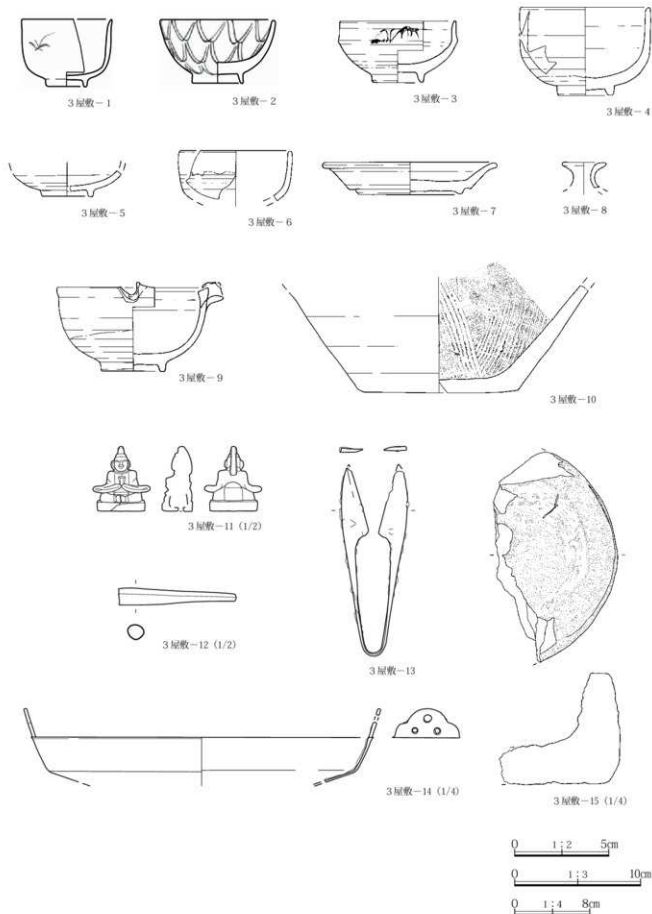
(6) 51区1号土坑(第178・180図、PL.36-1)

① 51区1号土坑の概要

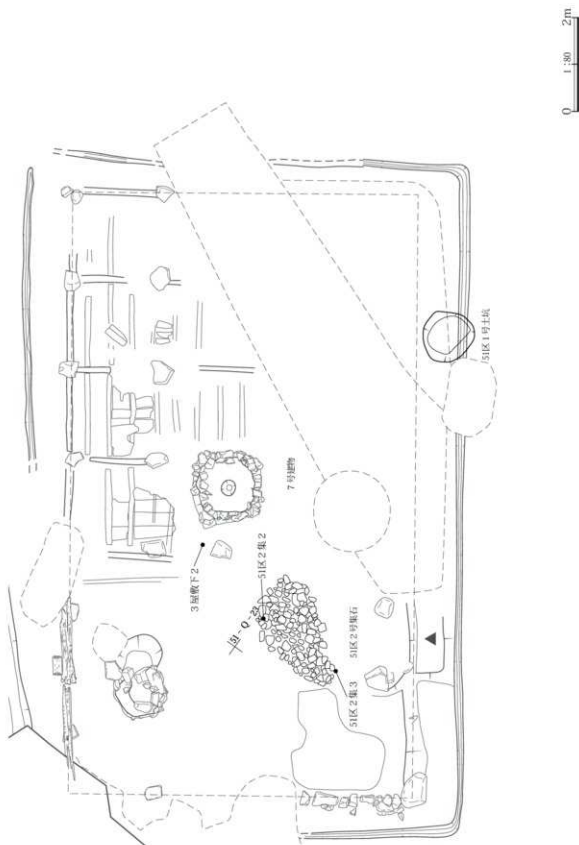
第3章 発見された遺物



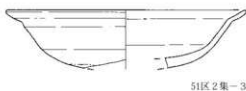
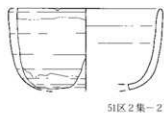
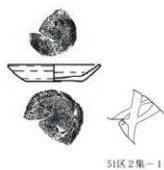
第176図 II区9号石垣出土遺物1～14



第177図 II区3号層敷跡出土遺物1～15

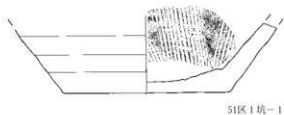
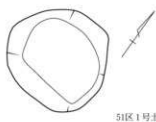


第178図 II区3号屋敷跡下(51区2号集石・1号土坑) 遺物出土状況



0 1:3 10cm

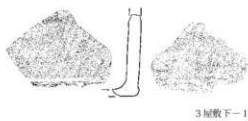
第179図 II区51区2号集石、2号集石出土遺物1~3



0 1:40 1m

0 1:3 10cm

第180図 II区51区1号土坑、1号土坑出土遺物1



0 1:1 2cm

0 1:3 10cm

第181図 II区3号屋敷跡下出土遺物1・2

第3章 発見された遺物

7号建物南東側雨落溝の下面約10cmの深さにおいて検出した。51区N・O-22・23グリッドに位置する。平面円形を呈し、径1.1m×深さ40cmの規模を測る。土坑の掘り込みは明確で、平坦な底部から壁もほぼ垂直に立ち上がる。径5～15cmの垂角礫がぎっしりと充填されている。

②51区1号土坑遺物出土状況と出土遺物

出土したすり鉢(1坑No.1)は連房8小期である。出土状況も明らかでなく、遺構の重複関係を考えても、7号建物に帰属すべき遺物ではないかと考えている。

(7) 3号屋敷跡下の遺物出土状況及び出土遺物(第178図)

①3号屋敷跡下遺物出土状況と出土遺物

3号屋敷跡下からは、51区2号集石や51区1号土坑が検出された。集石及び土坑の詳細については前述した通りである。ここでは屋敷跡下より出土した遺物等について報告する。

3号屋敷跡下からは、中世と思われる内耳土器(3号屋敷跡No.1)が出土した。しかし、出土した内耳土器片は僅かである。出土した銭貨は、いわゆる新寛永3期の寛永通寶と思われる。囲が裏脇下より出土しているが、理由については明らかでない。

2 その他の遺構

(1) 8号畑(第182図、PL.36-2)

①8号畑の概要

段丘崖の急傾斜地の一部で、僅かに傾斜が緩やかとなった狭隘な部分を利用した畑である。61区A-6、B-E-5・6、F-5グリッドに位置する。

畝サクは等高線にほぼ平行して走行し、高低差は明確である。畝部分の耕作土中にAs-A軽石ブロックが混入しており、As-A軽石降下後、培土(二番ザク)が行われたものと考えられる。

②8号畑遺物出土状況及び出土遺物

8号畑からは、僅かだが陶磁器が出土した。天明泥流により、押し流されてきたものとも思われるが、周辺の調査例もなく詳細は明らかでない。

(2) II区トレンチ(第182図)

①II区トレンチの概要

II区では、重機による本格的な泥流除去掘削作業に先立ち、トレンチ掘削調査(1～19号トレンチ※17号トレンチは欠番)を実施し、遺構の有無や存在する遺物の種類、また、天明泥流堆積物の堆積厚等について、事前に把握を行った。ここでは遺物が出土した1・3・15号トレンチについて、その概要と出土遺物等について報告する。

【1号トレンチ】1号トレンチは、住居に伴う現況石垣の段下部分を80～120cmの深さで掘削し、表土及び天明泥流堆積物を除去した。As-A軽石の堆積面は確認できなかった。3号屋敷跡南側に位置する。

II区1トレNo.1は産地不明の施軸陶器である。天明期よりも新しい陶器と思われるが、詳細は明らかでない。

【3号トレンチ】3号トレンチは、住居に伴う現況石垣の段下部分を約70cmの深さで掘削した。As-A軽石の堆積面を確認したが遺構は検出できなかった。3号屋敷跡東側に位置する。

3号トレンチは3号屋敷跡内にあり、出土した銭貨(II区3トレNo.1)は3号屋敷跡に帰属するものとも思われる。出土した銭貨は、いわゆる新寛永3期の寛永通寶と思われる。

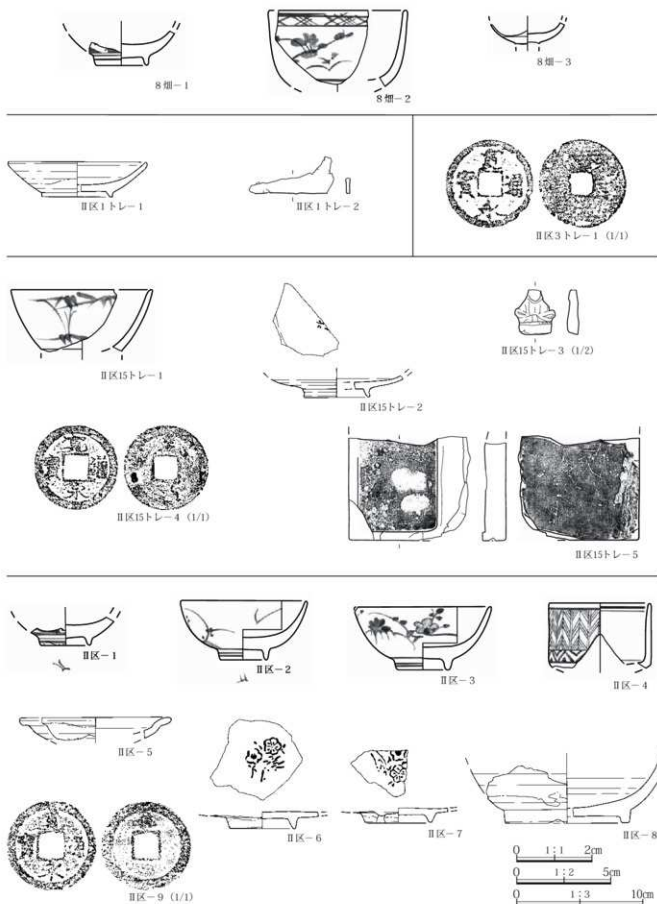
【15号トレンチ】15号トレンチは、現況住居跡の裏庭部分を約90cmの深さで掘削した。トレンチ北部分ではAs-A軽石の堆積面、南部分では硬化面を検出した。3号屋敷跡北側に位置する。

15号トレンチは3号屋敷跡内にあるためか、出土遺物は比較的多い。出土位置から、遺物の一部は7号建物に帰属することも考えられる。II区15トレNo.5は、年代の明らかでない硯である。裏面に「□山秋次郎」と判読できる刻書が確認された。

(3) II区遺構外出土遺物

遺構に帰属できない遺物について報告する。II区で検出された屋敷跡は3号屋敷跡のみである。そのため、報告する遺物の中には、3号屋敷跡の遺物が混在しているものと考えている。報告する遺物の大半は陶磁器である。陶磁器の年代や器種からも、3号屋敷跡に帰属する可能性が高いと思われる。

第3章 発見された遺物



第183図 Ⅱ区8号畑1～3、1号トレンチ1・2、3号トレンチ1、15号トレンチ1～5、Ⅱ区遺構外1～9出土遺物

第3節 III区の調査成果

III区では、天明泥流下の遺構として、畑8、道1、石垣1を検出し、発掘調査を実施した。また、天明泥流被災以前の遺構として、土坑8、ピット8を検出し、調査を実施した。土坑のうち2基（59区1号土坑、60区2号土坑）は、中世に帰属する墓坑である。

1 天明泥流下の遺構

『東宮遺跡（1）—遺構・建築部材編—』（以下『東宮遺跡（1）』と略す）では、天明泥流により被災したIII区の遺構として、10・13・14・15・22・24・25号畑、5号石垣、3号道を報告している。

III区では、畑跡や段上の畑の法面保護を目的としたような石垣、畑の間を通る道などの遺構は検出されているが、屋敷跡は検出されていない。III区で確認された畑跡は、I・II・IV区で検出された屋敷跡に住んでいた人達の畑とも捉えられるが、今回の調査の中で確認することはできなかった。ここでは、天明泥流で被災した遺構のうち、22・23・24号畑について、その概要と出土遺物について述べる。

(1) 22号畑（第186図、PL.36-3）

①22号畑の概要

22号畑は、60区H・I-21～24、J・K・L-19～24、M-19・20・21・23・24、N-23・24グリッドに位置する。畝サクは等高線にほぼ平行して走行し、高低差は明瞭である。畝幅は37cmと狭い畑である。サクにはAs-A軽石が堆積していた。

②22号畑遺物出土状況及び出土遺物

22号畑からは、陶磁器などの遺物が僅かに散見できた。報告する連房5小期（連房式登窯第5小期の略。以下同様）の尾呂茶碗（22畑No.1）も含め、報告する遺物が22号畑に伴うものか、天明泥流により移動してきたものかは明らかでない。

(2) 23号畑（第186図、PL.36-4）

①23号畑の概要

23号畑は、59区R-18・19、S～V-16～19、U-20グ

表7 東宮遺跡III区遺構一覧表

帰属時期	遺構名
天明三年以前	59区1～6号土坑、60区1・2号土坑、59区1～8号ピット
天明三年（泥流下）	10・13・14・15・22・23・24・25号畑、5号石垣、3号道

※建物に付属する遺構（囲い裏、馬屋など）は上記遺構一覧からは省略した。

リッドに位置する。平坦な段丘面に拓かれた畑である。表土及び天明泥流堆積物の厚さが比較的薄く、攪乱が広範囲に侵入している。13号畑と同一畑となる可能性がある。畝サクは等高線にほぼ平行して走行し、高低差は明瞭である。畝幅は35cmと狭い畑である。サクにはAs-A軽石が堆積していた。

②23号畑遺物出土状況と出土遺物

23号畑からは、青磁蓮弁文碗（23畑No.1）、大窯2か3段階の皿（23畑No.2）が出土した。ともに中世所産である。

2号畑下からは、60区2号土坑が検出されている。60区2号土坑は渡来銭を伴う中世墓坑と考えられ、23畑No.1・2は、これら中世遺構に伴う遺物が、耕作面近くで確認されたものではないかと考えている。

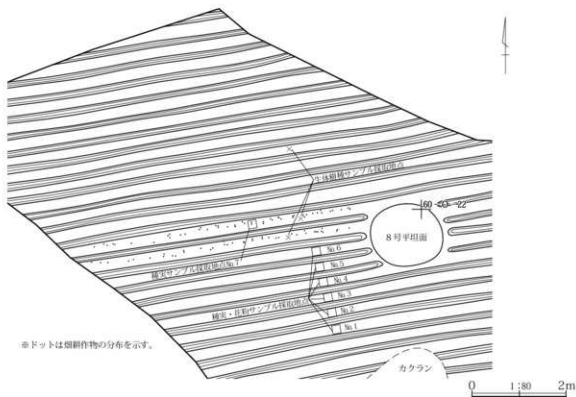
(3) 24号畑（第184・186図、PL.36-3）

①24号畑の概要

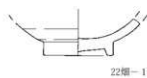
24号畑は、60区M・N-19～22、O-20・21・22、P-20～23、Q-21・22グリッドに位置する。

特筆すべき事項として、畝頂部には無数の耕作物の根元部分が遺存していたことが挙げられる。遺存した耕作物については、生体樹種サンプルとして採取を行い（採取地点については第184図参照）、株式会社パレオ・ラボに樹種同定を依頼した。サンプルは生育途中の根及び茎の根元付近であり、樹種の同定にまでには至らなかったが、解剖学的検討の結果、双子葉植物であることまでは確認された。これは、同様に採取された種実や花粉分析とともに、当時の畑作の様相を知り得る極めて貴重な調査例といえる。

また、畑から検出された種実の中には、栽培種だけでなくアサ、ソバ、シソ属、ナス属、イネ、オオムギなどが



第184図 III区24号畑 (サンプル採取地点)



22畑-1



24号畑耕作物 (竹串部分) 遺存の様子 南西→



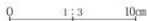
23畑-1



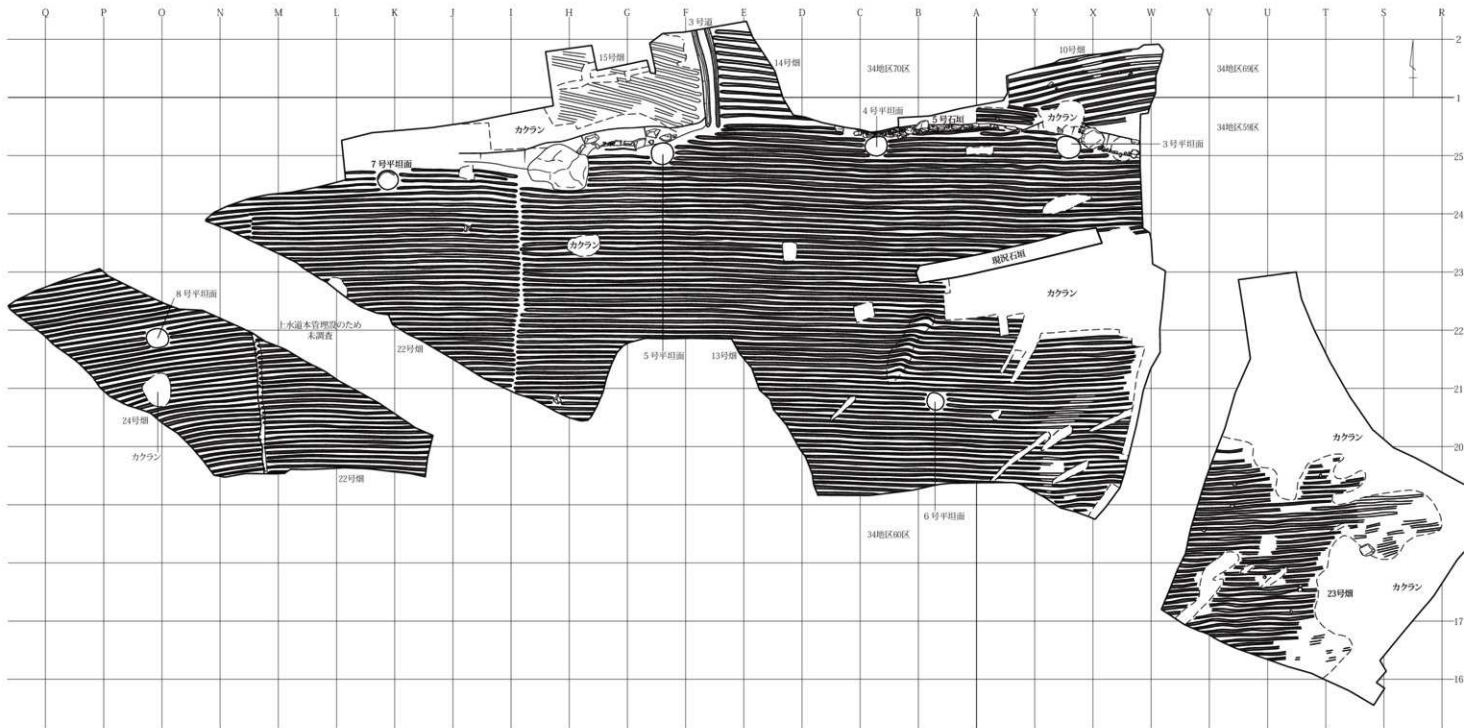
23畑-2



24畑-1



第185図 III区22号畑1、23号畑1・2、24号畑1出土遺物



第186図 Ⅲ区 22・23・24号地

ある。その全てを栽培してはいないと思われるが、採取した狭い範囲でこのような成果が得られたことから、連作障害を避けるため多様な作物が栽培されたことも考えられる。種実や花粉分析等の詳細については、第4章第4節1・3・4を参照して頂きたい。

畝サクは等高線にほぼ平行して走行し、高低差は明瞭である。畝幅は34cmと狭い畑である。サクにはAs-A軽石が堆積していた。

②24号畑遺物出土状況と出土遺物

24号畑からは、口縁部には円孔が穿たれた内耳土器(24畑No.1)が出土した。遺物は僅かで、詳細は不明。

2 天明泥流被災以前の遺構

『東宮遺跡(1)』では、天明泥流被災以前の遺構として、59区1～6号土坑、60区1・2号土坑及び59区1～8号ピットを報告している。

東宮遺跡で検出された天明泥流被災以前の床下土坑や溝は、大半が近世に比定される。東宮遺跡において中世遺物は散見できるが、中世と判断できる遺構が検出されたのは本調査区のみである。

報告する土坑は、出土遺物から中世墓坑と考えられる。Ⅲ区からは、青磁碗や内耳土器など中世遺物が出土しており、土坑を中世と判断した。しかし、渡来銭のみが出土する例は、古寛永が広く流布する17世紀前半頃まで続くと思われ、近世初頭の墓坑である可能性も考えられる。東宮遺跡では、中世遺構が検出されたⅢ区以外からも、中世遺物は散見できる。遺物の出土状況を踏まえると、土坑以外にも中世遺構が存在した可能性も考えられる。

(1) 59区1号土坑(第187・188図、PL.36-5)

①59区1号土坑の概要

59区1号土坑は、59区W・X-25グリッドに位置する。天明泥流下の畑(10号畑)から60～70cm掘り下げた面です。土坑底部の骨及び渡来銭を検出した。出土状況から墓坑と判断できる。土坑掘り込み面は、確認できる範囲で畑面より約20cm下面と考えられる。土坑の規模は、径約70～80cm×掘り込み面よりの深さ約50cmの土坑である。底形は円形か隅丸方形を呈する。

②59区1号土坑出土人骨と出土遺物

40歳代～50歳代の女性人骨1個体が出土した。被葬

者は、座葬か屏葬で埋葬されたと推定される。出土時には、古病理は認められなかった。人骨の詳細については、『東宮遺跡(1)』を参照して頂きたい。

59区1号土坑からは、熙寧元寶(1068北宋)1枚、永樂通寶(1408明)2枚、計3枚の渡来銭が出土している。

(2) 60区2号土坑(第187・189図、PL.36-6)

①60区2号土坑の概要

60区2号土坑は、60区K・L-20グリッドに位置する。天明泥流下の畑(22号畑)から30～40cm掘り下げた面です。土坑底部の骨及び渡来銭を検出した。出土状況から墓坑と判断できる。土坑の底部の規模は、東西約60cm×南北約100cmで、底形及び土坑形状は不確定である。

②60区2号土坑出土人骨と出土遺物

人骨が出土したが、年齢・性別等は不明である。人骨の詳細については、『東宮遺跡(1)』を参照して頂きたい。土坑からは、天禧通寶(1017北宋)、皇宋通寶(1039北宋)、紹聖元寶(1094北宋)、元符通寶(1098北宋)、嘉熙通寶(1237南宋)、永樂通寶(1408明)が各1枚と、永樂通寶他3枚の渡来銭が壺着した状態で出土した。出土した渡来銭は計9枚である。出土地点については、調査時の資料がなく明らかでない。

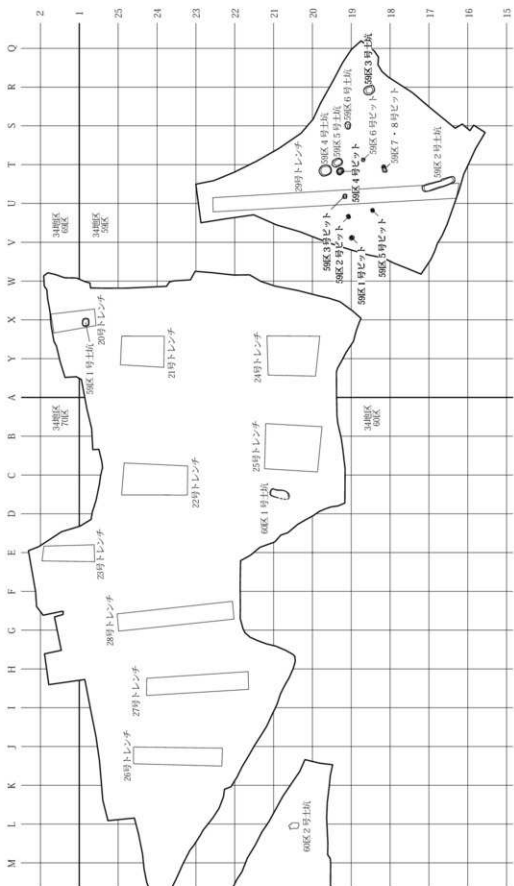
(3) Ⅲ区トレンチ調査(第187図、PL.36-7・8)

①Ⅲ区トレンチの概要

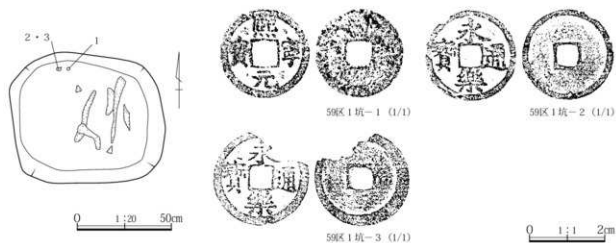
Ⅲ区では、10カ所でトレンチ調査を実施した。遺物が出土した、22・24～28号トレンチは13・22号畑下を中心に調査したものである。

②Ⅲ区トレンチ遺物出土状況及び出土遺物

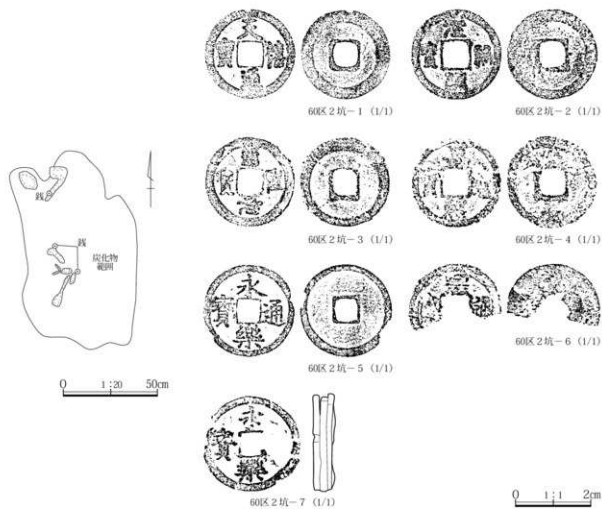
22・24～28号トレンチから遺物が散見できた。24・26・27号トレンチからは、青磁蓮弁文碗(Ⅲ区26トレNo.1)や線刻の青磁碗(Ⅲ区27トレNo.1)、内耳土器(Ⅲ区24トレNo.1)が出土した。また、22・25号トレンチからは、連房1小期の志野皿(Ⅲ区22トレNo.1)や天目茶碗(Ⅲ区25トレNo.1)、連房2小期の鉄絵皿(Ⅲ区25トレNo.3)が出土した。



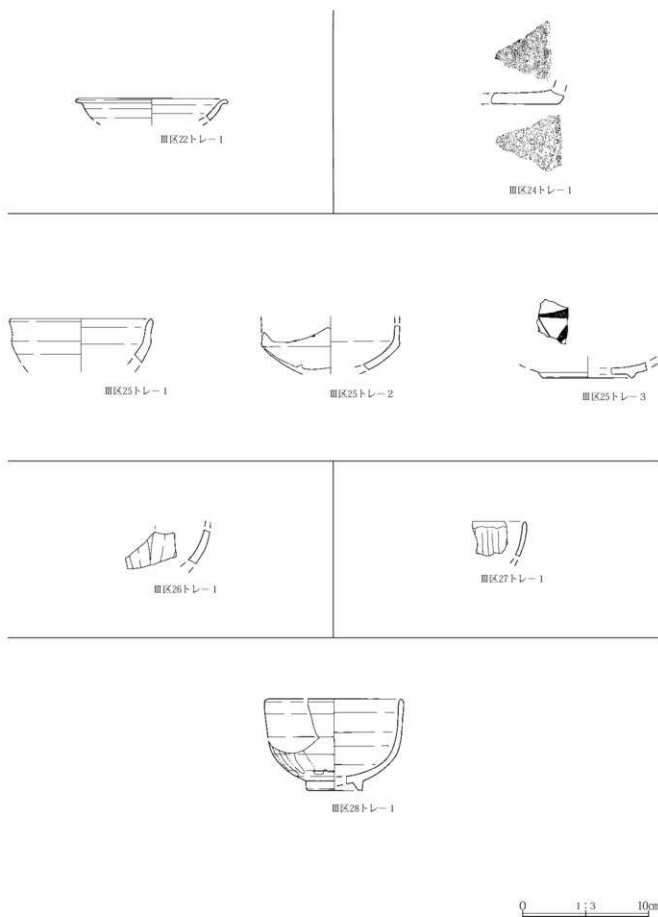
第187図 Ⅲ区トレンチ、59区1号土坑、60区2号土坑



第188図 Ⅲ区59区1号土坑、1号土坑出土遺物1～3



第189図 Ⅲ区60区2号土坑、2号土坑出土遺物1～7



第190図 III区22号トレンチ1、24号トレンチ1、25号トレンチ1～3、26号トレンチ1、27号トレンチ1、28号トレンチ1出土遺物

第4節 IV区の調査成果

IV区では、天明泥流下の遺構として、建物7、畑3、石垣11、溝1、道2（旧道含む）を検出し、発掘調査を実施した。IV区で天明泥流被災以前と判断できた遺構は、建物下より検出された焼土1、石組遺構1のみである。被覆する泥流の薄い調査区を中心に攪乱は見られるものの、遺構重複は僅かであった。

IV区では、計4区画（4軒）の屋敷跡を確認し、調査を実施した。4号屋敷跡は主屋1、石垣1、溝1で構成され、5号屋敷跡は、「酒蔵」と考えられる建物1、付属建物1、施設2、畑1、石垣3で構成されている。6号屋敷跡は主屋1、畑1、石垣2で構成され、7号屋敷跡は主屋1、付属建物2、畑1、石垣4、道1で構成されている。

1 4号屋敷跡

(1) 4号屋敷跡の概要（第191図、PL.37-1）

4号屋敷跡は70～100cmの表土及び天明泥流堆積物により、ほぼ均一に被覆されていた。現地表面には近年まで住宅が存在していたが、住宅造成に伴う攪乱は予想外に少なく、遺構の遺存状況は比較的良好であった。

屋敷跡を被覆する表土及び天明泥流堆積物は、保水性及び保湿性の高いものではなく、木製の建築部材等の遺存状況は良好ではなかった。ただし、屋敷跡西側の境界付近には、湧水地点が散在するため、9号建物西側の裏庭、及び6号溝付近では、腐蝕を逃れた脆弱な遺物の出土も確認できた。

4号屋敷跡は、ほぼフラットな敷地内に、9号建物（主屋）と、屋敷跡西側の境界を形成すると考えられる10号石垣、その段下を石垣に沿って北流する6号溝によって構成されている。なお、付属建物及び前菜園（畑等）は検出されていない。

屋敷跡の境界は、西側は10号石垣と6号溝によって形成されると考える。屋敷跡西側現況の石垣の直下からは、天明当時の石垣（10号石垣）が出土し、その一部を検出調査している。石垣の南部分は、現況屋敷の石垣に平面的に沿う形で、調査区外方向へほぼ直線的に延長していることが予想され、現況石垣の位置から大きく外れる可

表8 東宮遺跡IV区遺構一覧表

帰属時期	遺構名
天明三年前	1号焼土、1号石組遺構
天明三年 (泥流下)	4号屋敷跡（9号建物、10号石垣、6号溝）
	5号屋敷跡（10・12号建物、1号畑、11・12・13号石垣、1・2号施設）
	6号屋敷跡（11号建物、27号畑、15・18号石垣）
	7号屋敷跡（13・14・15号建物、26号畑、8・14・16・17号石垣、5号道）
	16号畑、19号石垣、6号道

※建物に付属する遺構（囲が裏、馬廄、唐臼、便槽など）、は上記遺構一覧からは省略した。

能性は低いと考えられる。

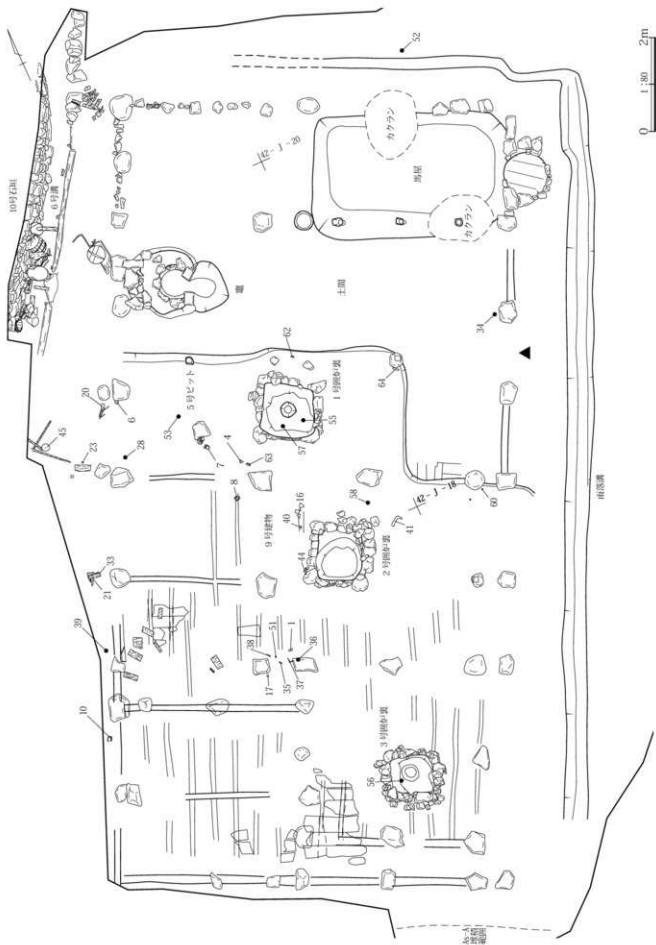
北側の境界は、5号屋敷跡南側の13号石垣に区画されると考える。4号屋敷跡（平均L=535.10m）と5号屋敷跡（平均L=534.30m）との敷地レベルの比高差は約80cm存在することを追記しておく。

東側の境界は、町道1-5号線（調査区外）が存在するため、検出不可能であったが、町道の下面には町道1-11号線直下で検出された6号道が南西方向へ延長するものと考えられるため、屋敷跡の境界は、町道1-5号線の路線範囲に収まる可能性が高い。

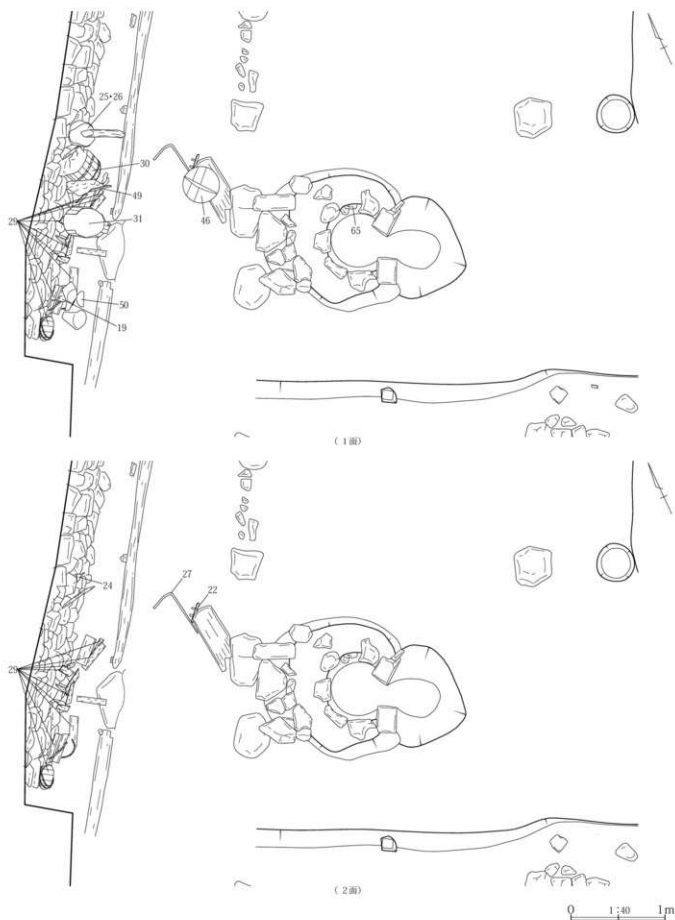
南側の境界には、西側と同様に、高さ約1.5mの現況石垣が存在した。石垣の東部分を一部除去し、調査を実施したが、境界の検出には至らなかった。屋敷の範囲がさらに南側へ拡大するのか、或いは現況石垣の範囲で収まるのかは不明である。

4号屋敷跡では、9号建物2号囲が裏に切られるように1号石組遺構が検出されている。遺構の時期については、遺構に帰属する遺物もなく明らかではないが、出土状況から天明泥流で被災した9号建物よりも古い遺構だと考えている。また、9号建物の礎石は1号建物と同様に礎石心々寸法が複雑に混在し、礎石列も東西方向、南北方向ともに食い違う箇所が見られた。これらのことから、9号建物を増築した可能性が考えられる。

(2) 9号建物（第191・192図、PL.37・38）



第191図 IV区4号屋敷跡(9号建物)遺物出土状況



第192図 IV区9号建物 窟付近遺物出土状況

第3章 発見された遺物

① 9号建築物の概要

9号建築物は4号屋敷跡の中央部に相当する、42区 H-18・19・20、I・K-16～20、J-15～20、L-16・17グリッドに位置する。建物は、遺存する土台痕及び礎石列を参考に心々寸法で計測すると、桁行（南北）16.5m×梁行（東西）8.25mの規模を測る。床高については、1・2・3号囲炉裏の上面レベルが平均、地面から30cm（H=535.90m）であることを参考に記しておく。

9号建築物は4号屋敷跡の主屋であり、土台建物と考えられる。9号建築物出入口は土間東側が想定される。建物には、北部分に土間や馬屋が配置され、土間奥手に焚口が東側（出入口正面方向）を向いた竈が設置される。また、中央部から南部分には床部が配置される。囲炉裏は想定される床部分に、南北方向に3基配置されている。

9号建築物を構成する施設（馬屋、竈、1・2・3号囲炉裏）及び礎石は基本的に原位置を保って出土している。また、礎石上に据えられていた土台の腐蝕した痕跡、或いは大引や根太、床板の痕跡も平面的には原位置を保っていると考えられる。

9号建築物の東側と北側には雨落溝が廻っている。南側に溝は確認できなかったが、As-A軽石の堆積範囲を検出できたため、軒下の長さは推測できよう。

礎石は、平石及び川原石が多用され、計46基程度が遺存している。建物内部の礎石列に関しては、列相互の間隔に差があったり、列途中で礎石が途切れたり、或いは独立した礎石列が存在していたり、複雑な配置となっている。また、土間部と床部との境界（鍵手に折れた位置）の礎石上には、東が直置されたと考えられる平面方形の痕跡が確認できた。

土台は、建物西側と東側の一部、また、南側において、地面及び礎石直上の土台痕を検出した。土台痕の幅は平均15cmである。大引或いは土台と考えられる痕跡は、建物内部において、主に東西方向に4～5本検出した。これらの痕跡は平面的には正確に各礎石列上に位置し、断面的にも地面或いは礎石直上に検出されていることから、土台痕の可能性も高いと考えられる。根太は、建物内部において、南北方向に痕跡を40本程度検出した。根太痕の幅は平均10cmである。

床板は、建物内部において、東西方向に痕跡を10～15枚検出した。

9号建築物の礎石心々寸法は、東宮遺跡で検出された他の主屋の礎石心々寸法とは明らかに異なる。他の建築物の床部は、主に約184cmであったのに対し、9号建築物では、約184cm、約214cm、約273cm、約307cm等と多様な寸法が混在していることが確認された。このような建物構造を持つのは、東宮遺跡では9号建築物のみである。9号建築物では、2号囲炉裏に切られるように1号石組遺構が検出されている。しかし、8号溝のような建物に重複する古い段階の地境溝は検出されていない。大規模な敷地造成を行い、建物を大きく増改築した痕跡は確認されなかったが、1号石組遺構を古い段階の建物に付随する遺構と考えることもできる。攪乱もあまり不明瞭な部分はあるが、屋敷跡の拡張や造成、建物の増改築の可能性は否定できないだろう。

② 9号建築物遺物出土状況

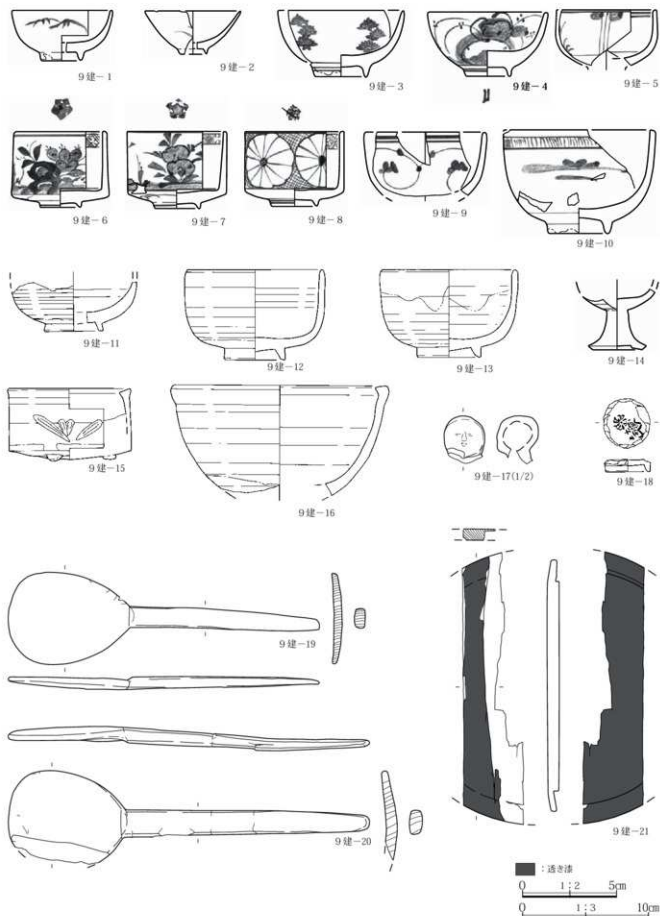
9号建築物からは、建物の西側、10号石垣下及び6号溝から数多くの遺物が出土している。天明泥流で押し流された遺物が、西側の10号石垣下付近に止まり出土したのと思われる。10号石垣付近には湧水地点があることから、埋没した遺物は腐蝕を逃れ、結果多くの桶などが出土したのだと考えている。

4号屋敷跡の西側境界を形成する10号石垣は、その一部が検出されたのみである。検出されていない10号石垣下付近には、さらに多くの遺物が遺存している可能性も考えられる。

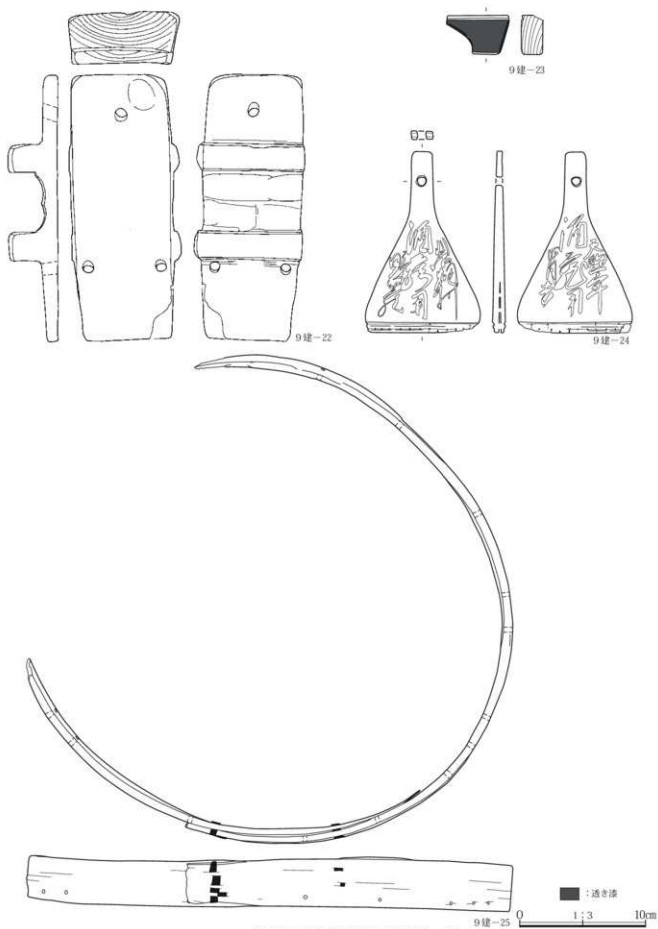
【竈付近】（第192図、PL.38-1～7）9号建築物では、竈付近から多くの遺物が出土した。出土状況から、竈付近或いは土間にあった遺物が天明泥流で西側に押し流され、遺存したのと思われる。9号建築物から出土した桶や曲物は、10号石垣下の僅かな範囲から出土している。石垣が検出されていない範囲も広くあり、さらに多くの桶・樽類や曲物が遺存している可能性もあるだろう。

9号建築物北側には、隣接して10号建築物がある。10号建築物は酒造りを行っていた「酒蔵」と思われるが、判断した理由のひとつに9号建築物より出土した刷毛（9建No.24）の存在がある。9号建築物出土の刷毛には、両面に墨書がされていた。ここに「天明二年」「酒蔵用」と書かれていたことから、槽場跡の残る10号建築物を酒蔵と判断した。

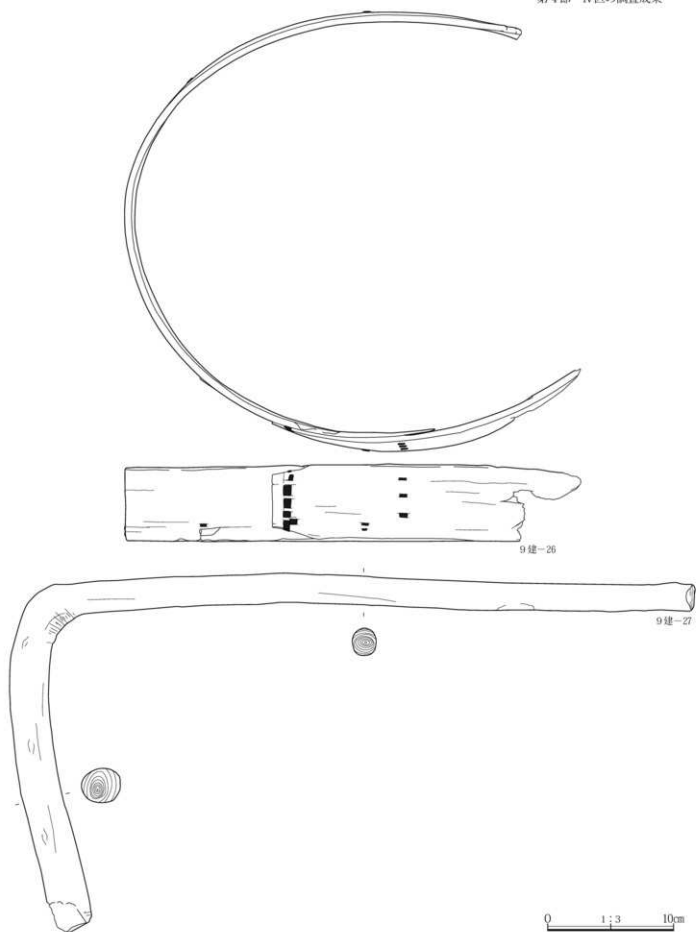
被覆する天明泥流の様相や遺物出土状況等から判断す



第193図 IV区9号建物出土遺物1～21

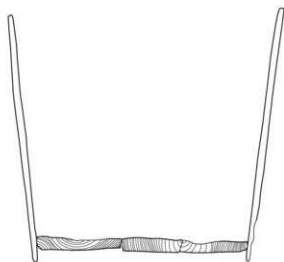
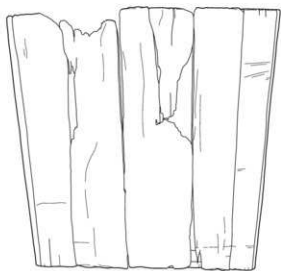
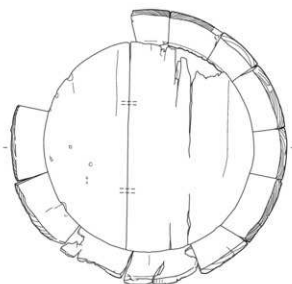


第194図 IV区9号建物出土遺物22～25



第195図 IV区9号建物出土遺物26・27

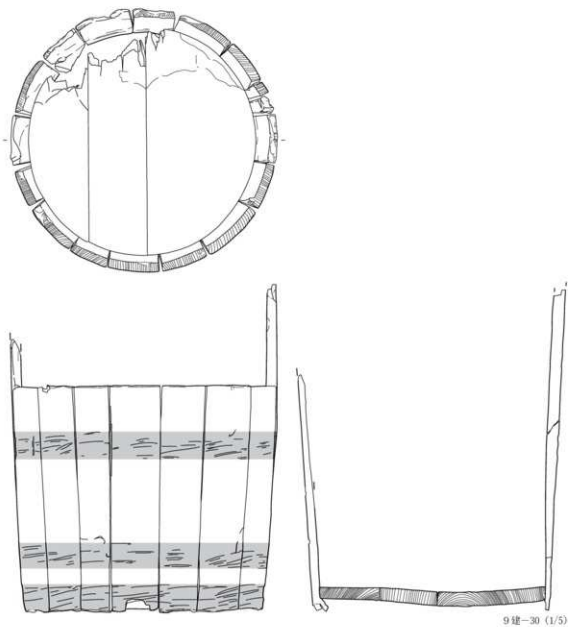

9建-28 (1/5)



9建-29 (1/5)

0 1:5 10cm

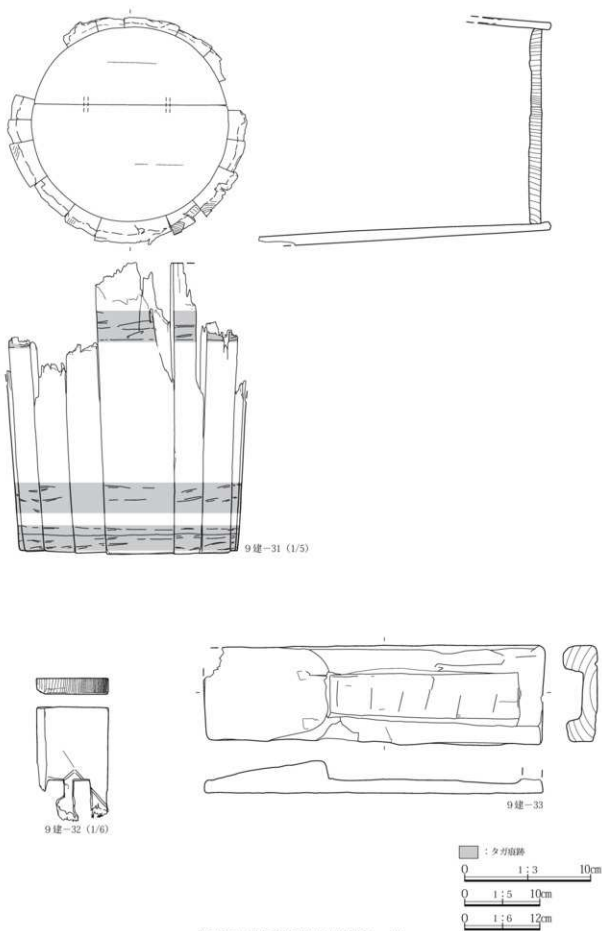
第196図 IV区9号建物出土遺物28・29



■ : 土丹前跡

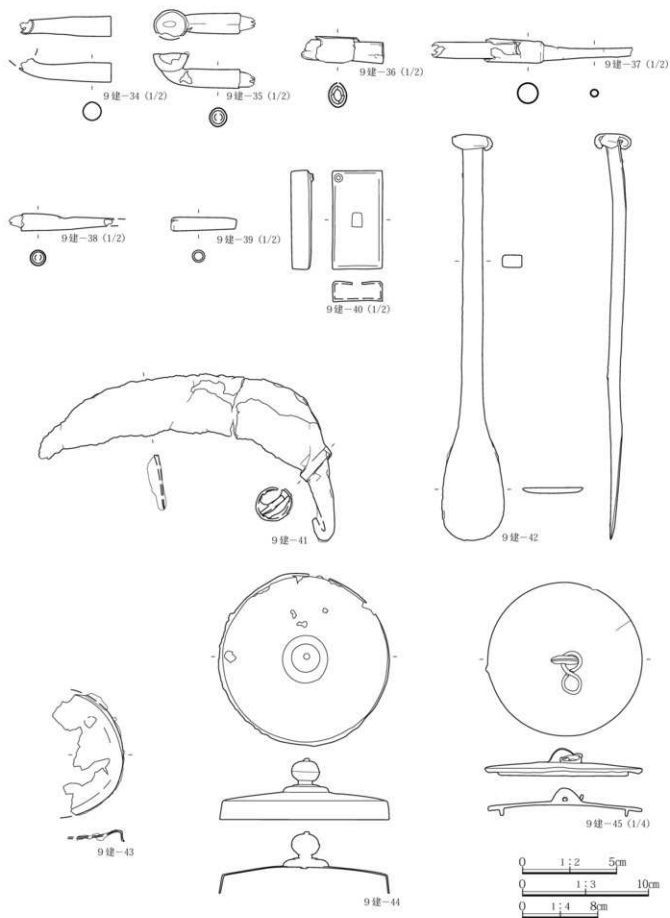
0 1:5 10cm

第197図 IV区9号建物出土遺物30

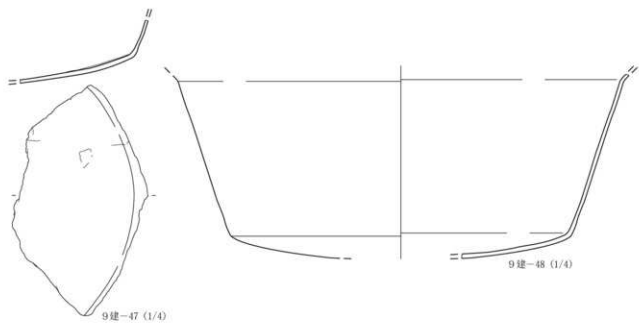
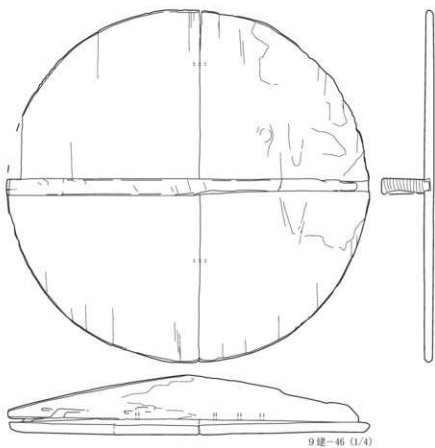


第198図 IV区9号建物出土遺物31～33

第4節 IV区の調査成果

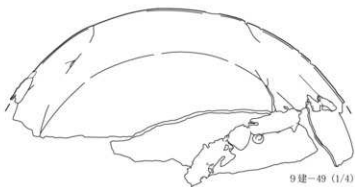
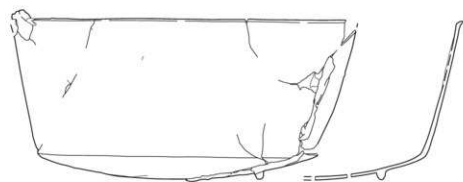


第199図 IV区9号建物出土遺物34～45

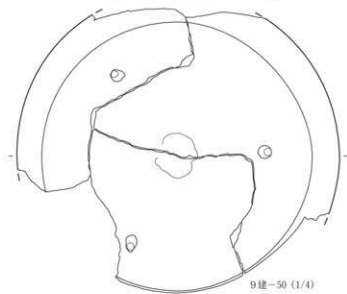
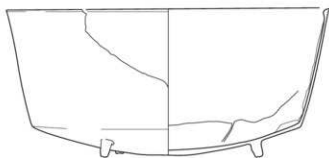


0 1:4 8cm

第200図 IV区9号建物出土遺物46～48



9建-49 (1/4)

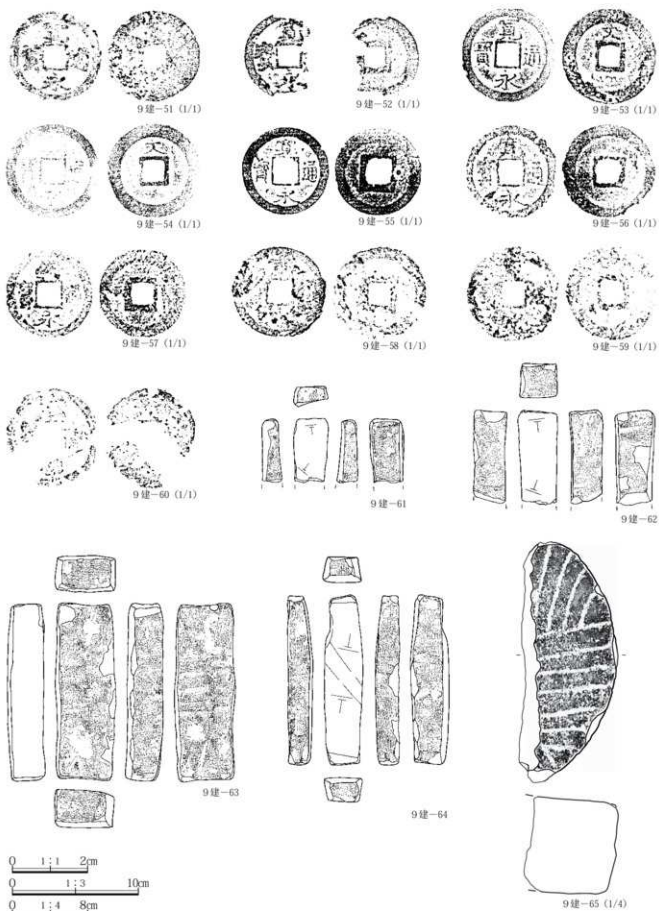


9建-50 (1/4)

0 1:4 8cm

第201図 IV区9号建物出土遺物49・50

第3章 発見された遺物



第202図 IV区9号建物出土遺物51～65

ると、9号建物と10号建物の遺物が混在している可能性は極めて低いと考えている。9号建物に「酒蔵用」と墨書のある刷毛が出土したことは、9号建物も酒造りに関わる建物であったか、或いは酒蔵で作業をしていた人達と関連のある建物であったと思われる。また、9号建物の狭い範囲から桶・樽類が多く出土したことは、酒蔵である10号建物との関連から、酒造りに使用した道具の一部が出土したとも考えられる。

9号建物から水滴（9建No.40）が出土している。墨書された刷毛が出土したこととの関連を指摘しておきたい。

③9号建物出土遺物

特筆すべき遺物に、両面に墨書された刷毛（9建No.24）がある。刷毛には「川原畑村 酒蔵用 野口蔵」、「天明二年 酒蔵用 四月吉（日）」と書かれていた。この出土遺物から、北側に隣接し、槽場跡を残す10号建物を「酒蔵」と判断した。刷毛（9建No.24）は、10号石垣に押しつけられるように出土した。この刷毛の上からは、器高の低い大型の曲物（9建No.25・26）が出土した。刷毛は、この曲物の中より出土したようにも見える。ともに天明泥流により押し流されたものだが、被災前も刷毛は2点の曲物の中か、或いは近接した位置に置かれていたものと推測している。

9建No.26の曲物には、他の曲物とは異なり、側板下部に木皮の痕跡が遺存していた。欠損するが、曲物の底には木皮で接合する板がつくものと思われる。形状から、麹造りなどに使用する「諸蓋」の可能性が考えられる。9建No.24の刷毛は、「酒蔵用」の墨書の通り、酒造りに使用されていた可能性が高いだろう。9建No.25或いはNo.26の曲物の中で、墨書した刷毛を使用し、麹造りなどの作業が行われていた可能性について指摘しておきたい。

9建No.42は鉄製の道具である。下部は杓文字状になり、上部には釘上部のような形状を残す。桶のタガをつける際に使用する道具とも思われるが、詳細は明らかでない。このような道具が出土したのは、8基の埋設桶が検出された2号建物と9号建物のみである。ともに、桶・樽類と関連が深い建物であったことを追記しておく。

9建No.30の桶の中には、多量のアサの種実が遺存していた。天明泥流で被覆されたのが天明三年新暦8月5

日（以下日付は新暦で表記する）のことであり、通常であればアサは収穫時期であり、「麻ごぎ」の作業をしている頃と思われる。8月5日に、多量のアサの種実が桶の中から出土した理由については明らかでない。今後の課題と考えている。

9号建物からは、およそ同規格の鉄鍋（9建No.47～50）が4点出土した。同規格の鉄鍋類の出土点数としては、他の建物と比較しても多い。酒造りを行っていた、隣接する10号建物との関連も指摘しておきたい。9建No.49には、欠損部を溶接して補修した補修痕跡が確認された。溶接部の分析成果は、第4章第4節を参照して頂きたい。

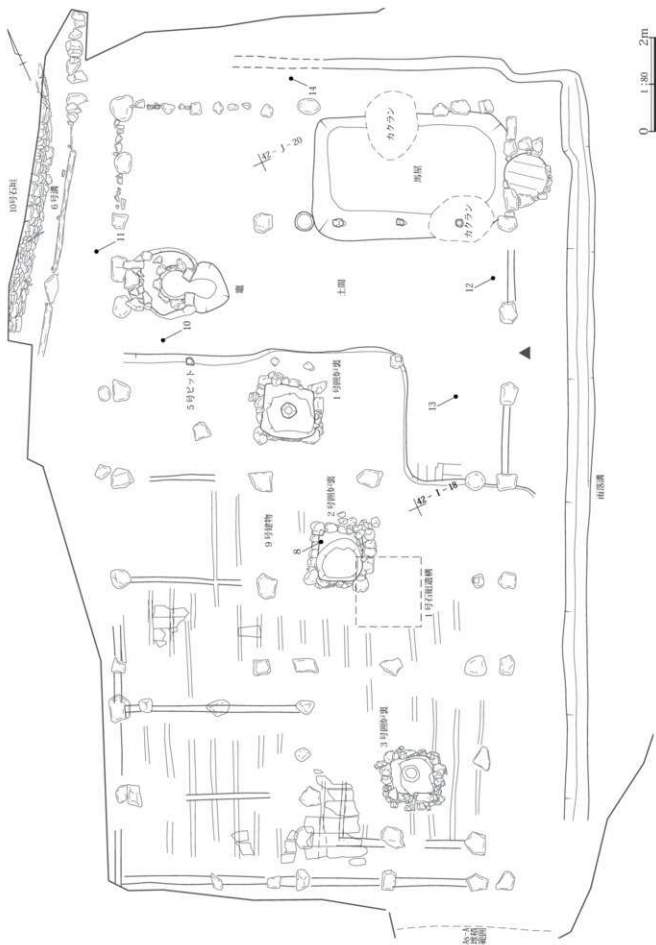
9建No.27は手斧の柄とも思われる、L字状に屈曲する木製品である。端部には刃部との接合痕跡もなく、柄としては脆弱な印象もあり、詳細は明らかでない。

(3)4号屋敷跡下の遺物出土状況及び出土遺物（第203図、Pl.39-1・2）

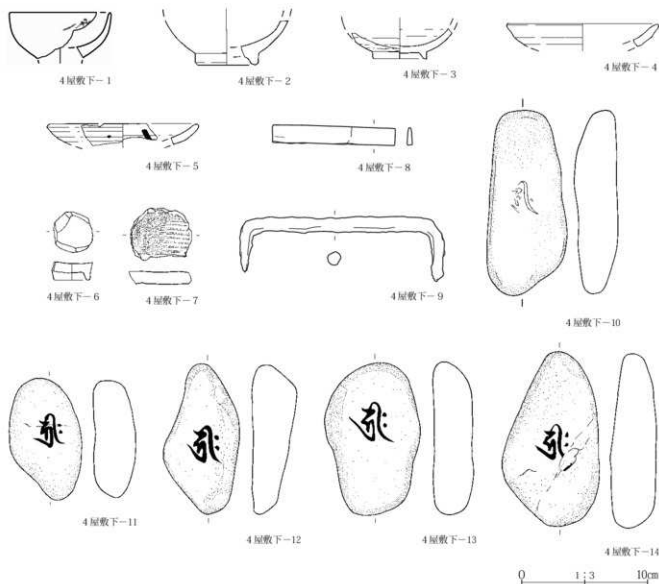
4号屋敷跡下からは、1号石組遺構が検出されている。1号石組遺構は、調査時には9号建物を切る新しい遺構との判断であった。しかし、9号建物2号囲裏と一部重複するものの、囲裏裏は欠損することなく検出されていることから、石組遺構は囲裏よりも古い遺構と判断した。詳細は「東宮遺跡（1）」を参照して頂きたい。

4号屋敷跡下からは、陶磁器や金属製品などの遺物が出土した。その中で、特筆すべき遺物に墨書された罫（4号屋敷下No.10～14）がある。9号建物土間付近を中心に、屋敷跡下より出土した。キリークの種子が墨書されており、経石と思われる。書かれた種子の筆跡は近似しており、同時期に同じ人物が書いたものではないかと考えている。建物土間付近を中心に、5点或いはそれ以上の経石が屋敷跡下より出土しており、地鎮を目的として埋設されたものとも推測される。しかし、同様に経石が屋敷跡下から出土した例は、東宮遺跡の中では確認されていない。

4号屋敷跡下地山中からは、連房1か2小期（連房式登窯第1か2小期の略。以下同様に略す）の志野皿（4号屋敷下No.4）や連房3小期の鉄絵皿（4号屋敷下No.5）、17世紀中～末頃の肥前系碗（4号屋敷下No.2）が出土した。これらの陶磁器は、東宮遺跡で出土した近



第203図 IV区4号屋敷跡下遺物出土状況



第204図 IV区4号屋敷跡下出土遺物1～14

世陶磁器の中では最も古い部類となる。9号建物からも多くの陶磁器が出土したが、4号屋敷跡下地山中から出土したこれらの陶磁器とは、明らかな時期差が確認された。時期差のある近世陶磁器が、4号屋敷跡下から出土した理由については明らかでない。9号建物と重複する1号石組遺構や礎石心々寸法も含め、屋敷の拡張及び造成、建物の増改築の過程、或いは可能性について改めて検討する必要があるのかもしれない。

4号屋敷跡下で報告する遺物の中には、攪乱により混在した後世の遺物もあると思われる。年代を判断することが難しい遺物もあることから、ここでの報告とする。

2 5号屋敷跡

(1) 5号屋敷跡の概要(第205図、PL.39-3)

5号屋敷跡は、東側が厚さ約60cm、西側が約180cmの表土及び天明泥流堆積物により被覆されており、12号石垣の天端部も調査前の状況では埋没していた。屋敷跡を被覆する天明泥流堆積物は、屋敷跡西側部分で保水性及び保湿性が高く、12号石垣段下より出土した土壁は、極めて遺存状況が良好であった。また、土台や梁などの建築部材、多数の木栓や桶・樽などの木製品も12号石垣段下より腐蝕せずに出土した。

5号屋敷跡は、10号建物(酒蔵)と12号建物(付属建物)、屋敷跡の四方の境界を形成する11・12・13・19号石垣、室の可能性が考えられる1・2号施設、1号戸によって構成されている。その他、遺構名は付さなかったが、11・12・13号石垣段下には浅い溝が廻っている。

11号石垣段下の浅い溝には、節を抜いた竹管が敷設さ

第3章 発見された遺物

れていた。未調査部分があり全容は明らかでないが、1号施設付近から屋敷跡北東隅の11号石垣角に向けて走行している。溝は東側、屋敷跡北東隅方向へ傾斜していた。溝底部での比高差は約30cmほどであった。埋設された竹管には、1号施設寄りの1カ所に孔が穿たれており、節が抜かれていたことを考慮すれば、この溝と竹管が、1号施設付近で使用した水を屋敷の外へ排水するための施設とも考えられる。これと同様の施設は、1号建物2号施設（風呂）でも確認されている。

同様に節が抜かれた竹は、12号石垣段下でも出土している。この竹管も南側で孔が2カ所穿たれていた。出土状況から原位置を止めていないと思われるが、12号石垣と10号建物西側の土壁の間、裏手出入口付近から出土していることから、当時は12号石垣と10号建物西側礎石との間にあったものと考えられる。この場所には最大15cm幅ほどの浅い溝が南北方向に走行していた。調査時には雨落溝とも考えられていたが、これ以外に10号建物で明らかな雨落溝は確認されていない。

13号石垣段下は溝状になっており、東側に傾斜している。竹管や溝が排水施設とするならば、隣接する13号石垣側には延ばさず、遠く1号施設側を廻し建物北側を経由して排水させたものと思われる。その理由については明らかでないが、槽場跡や1号がは屋敷跡南側に集中しており、2号施設の階段や裏手出入口も同様に南側にあるのは、主な酒造りがこの導線の中で行われたことを推測させる。雑菌の繁殖を未然に防ぐために、排水を屋敷跡北側へ廻すようにしたことも考えられるだろう。

酒造りには大量の水が必要であるが、屋敷跡には井戸がない。屋敷跡南側13号石垣上には、被災した時も流れていたであろう沢があり、これを酒造りに利用していたことも考えられる。また、酒造りの施設が建物南側にあるのは、この沢の流れる位置に影響されたものかもしれない。

5号屋敷跡の境界については、北側は11号石垣により区画され、6号屋敷跡と隣接する。6号屋敷跡との比高差は約90cmである。西側は12号石垣及び1号施設により区画される。南側は13号石垣により区画され、4号屋敷跡に隣接すると考えられる。ただし、現況で、4号屋敷跡との境界部には東流する小規模な沢が存在するため、天明当時にもこの境界部に沢が存在した可能性もある。

4号屋敷跡（平均L=535.10m）と5号屋敷跡（平均L=534.30m）との敷地レベルの比高差は80cmである。

5号屋敷跡下からは、重複する遺構は検出されていない。このような遺構検出状況から考えても、屋敷が造られた後、大掛かりな敷地造成が行われたとは考えにくい。

5号屋敷跡で検出された10号建物は、酒蔵と思われる。隣接する9号建物出土の刷毛（9建No.24）に書かれた墨書に「酒蔵用」とあることから、10号建物は酒蔵の可能性が高いと考えている。また、刷毛に墨書された「天明二年」と出土陶磁器の年代から、10号建物は、建てられた後間もなく天明泥流で被災したものと考えている。

10・12号建物の周辺では明瞭な雨落溝がほとんど確認できず、北側の溝と12号石垣段下の溝以外に軽石の堆積も見られない。このような様相が見られたのは、東宮遺跡においては5号屋敷跡のみである。5号屋敷跡の出土状況から、1号がや1・2号施設の上には上屋のようなものがあり、浅間山噴火の際の降灰を防いでいたのではないかと推測している。しかし、上屋については不明瞭な部分も多く、その構造を明らかでない。

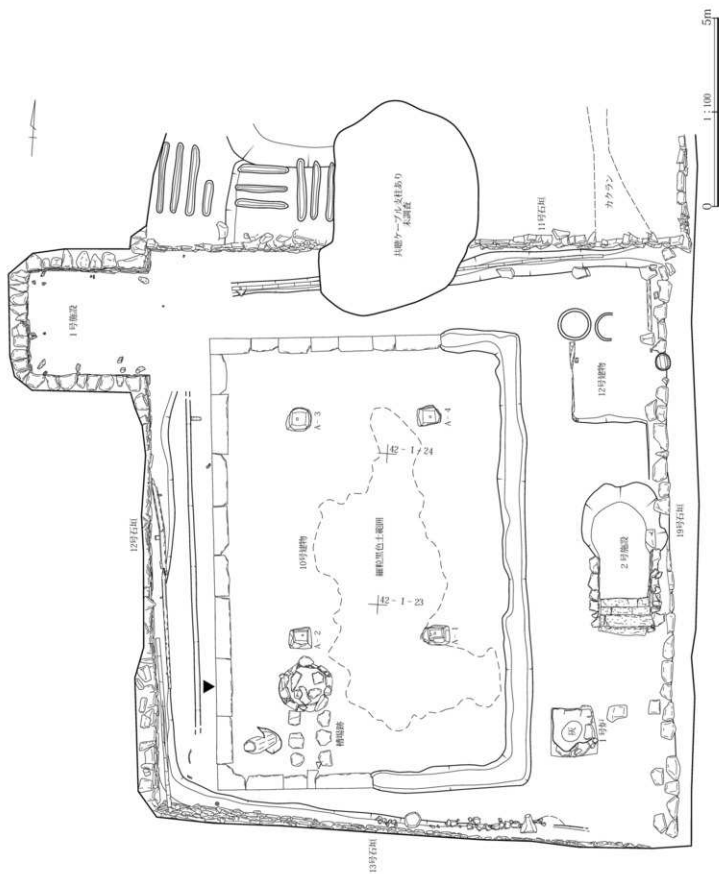
(2) 10号建物（第206・207・208図、PL.39- 4～43）

①10号建物の概要

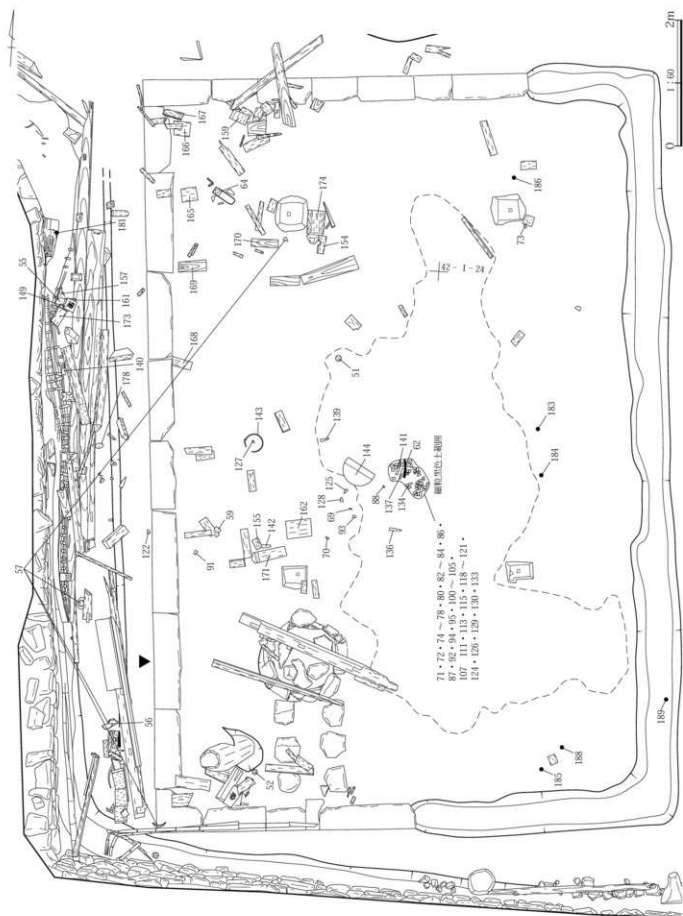
10号建物は、5号屋敷跡の中央部に相当する、42区G-21・22、H・I・J-21～24グリッドに位置する。酒蔵と考えられる土台建物である。建物は、側土台の下面に一列に隙間なく敷き詰められた平面長方形の切石の礎石列の心々を基準にして計測すると、桁行（南北）11.7m×梁行（東西）7.9mの規模を測る。

10号建物の側土台の下面には、切石（断面三角形及び台形）の礎石列が1列に隙間なく敷き詰められ廻っていたと考えられる。ただし、礎石列の東部分は泥流被災後、掘り出されて抜き取られたと思われ、その痕跡の溝のみが廻っている。建物出入口は建物南西部の槽場跡付近に裏口が確認できる。これは、付近から出土した土台に付属する出入口用の石段が、取り付けられた位置から判断した。一方、表口の位置は不確定である。

建物内部には酒搾り用の「槽場（ふなば）」と考えられる施設が存在する。槽場跡には、支柱（「男柱」とも呼称される）が1基埋設され、酒槽を固定したと考えられる礎石が6基、そして、槽口に対応し、搾酒を蓄える



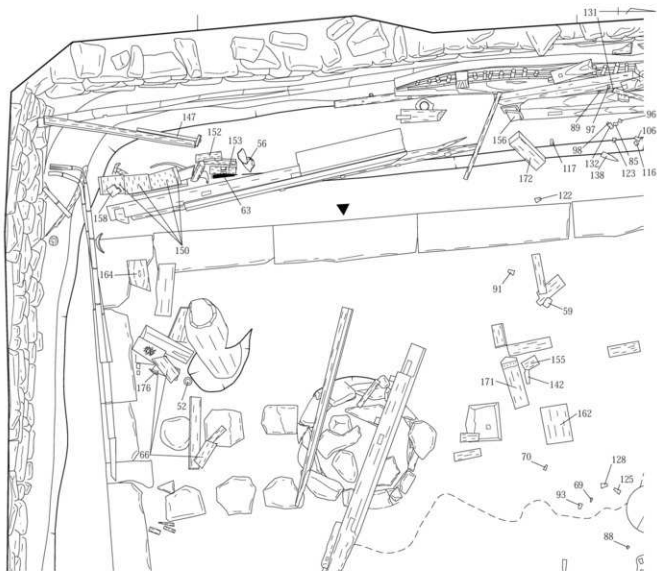
第205図 IV区5号屋敷跡



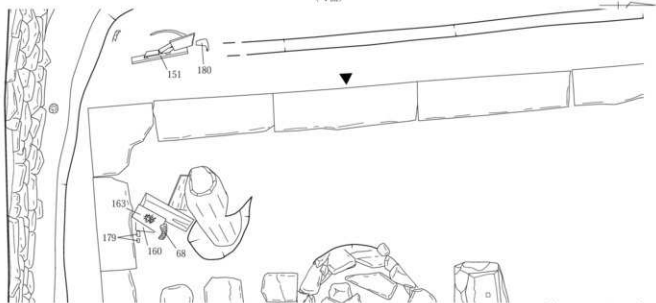
第206図 IV区10号建物 遺物出土状況①



第207図 IV区10号建物 遺物出土状況②



(1面)



(2面)

0 1:40 1m

第208図 IV区10号建物 槽場跡付近遺物出土状況

「垂壺(たれつぼ)」と考えられる石組・石敷の凹部が伴う。

建物西側の12号石垣には、10号建物西壁が天明泥流下の営力により移動し、石垣に寄り添うような状態で立ったまま出土している。

10号建物の側土台下面の切石を使用した礎石列及び、建物内部に敷設された4基の枅穴の施された礎石は原位置を保っている。また、槽場跡の支柱(男柱)は、天明泥流下の営力によると考えられるが、西方向へやや傾倒し、地上高約90cm以上は腐蝕により欠損している。酒槽を据え付け固定したと考えられる6基の礎石及び、垂壺と考えられる石組・石敷の凹部も原位置を保っている。

建物内部地面は、主屋の土間のように固く締まっており、酒造りの作業かどうかは別問題として、日常、この上で生活が営まれ、踏み固められたものと考えられる。

②10号建物遺物出土状況

10号建物では、建物西側から良好な遺存状況で多数の遺物が出土している。遺物の多くは、12号石垣側に押しつけられるようであり、被覆する天明泥流がおおよそ東側から西側に流入し、建物に帰属すべき遺物を石垣側へ押し流したものと考えている。

12号石垣下、建物の西側には、礎石上に据えられていた土台と土壁が良好に遺存していた。この土台と土壁の存在により、10号建物内にあった遺物と建物外にあった遺物とを、おおよそ大別できると考えている。

10号建物は酒蔵と思われ、出土遺物には酒造りに関連する道具も多い。木製の栓は、建物中央付近にまとまって出土した。土台を押し流すほどの泥流であっても、栓は建物中央付近でまとまり出土したことから、袋などの入れ物に多くの栓やササラなどが入れられていた可能性も考えられる。しかし、栓は多く出土しているのだが、樽の出土例は少ない。樽の出土例が少ない原因についてはいくつか想定できるが、推測の域を出ない。

【槽場跡付近】(第208図、PL.42・43) 10号建物南西部、42区1-21・22グリッドに位置する。垂壺と考えられる石組の凹部及び酒槽を固定したと考えられる6基の礎石は原位置を保っている。ただし、支柱(男柱)は、天明泥流下の営力によると考えられるが、16°西側方向へ傾倒し、上半部は腐蝕により失われている。さらに、支柱が傾倒したことにより地面には深い亀裂が入っている。

垂壺が据えられたと考えられる石組の凹部は、径約

100cm×深さ約50cmの規模を測る。6基の礎石は、心々で東西80cm×南北110cmの規模を測る。支柱(男柱)は、径約34cmの丸太材であり、深さ約100cmが根入部として埋設されている。

槽場とは、酒の「搾り」(もろみを搾る)の工程で使用される施設である。もろみは酒袋に入れられて酒槽の内部に積み上げられ、酒槽内部の袋の上には、「桝木→番台→枕」の順で木材が積み上げられる。これらの木材の上に撥棒と呼ばれる太い梁状の水平材が渡され、その重量が酒槽内に圧力を加え、酒が搾られる。撥棒は男柱と呼ばれる支柱の枅穴に一端が差し込まれて固定され、他方の端には縄で石を多数くくりつける。男柱には上方へ大きな力加わるので、地中深く埋設されているのが一般である。槽場は「てこ」の原理が利用されており、男柱が支柱(支点)、撥棒が作用点、撥棒の先端に縄でくくりつけられた石の重みが力点として作用し、酒が搾られる仕組みである。酒槽で搾られた酒は、槽口(ふなぐち)と呼ばれる下部の注口から流れ出し、垂壺に蓄えられる。

ここに、遺構として遺存しているものは、垂壺に相当すると考えられる平面円形の石組の凹部と酒槽を据えたと考えられる6基の礎石、男柱の下半部である。酒槽等は腐蝕の痕跡もない。一方、男柱の上半部は腐蝕或いは後世に取り除かれたためか欠損している。

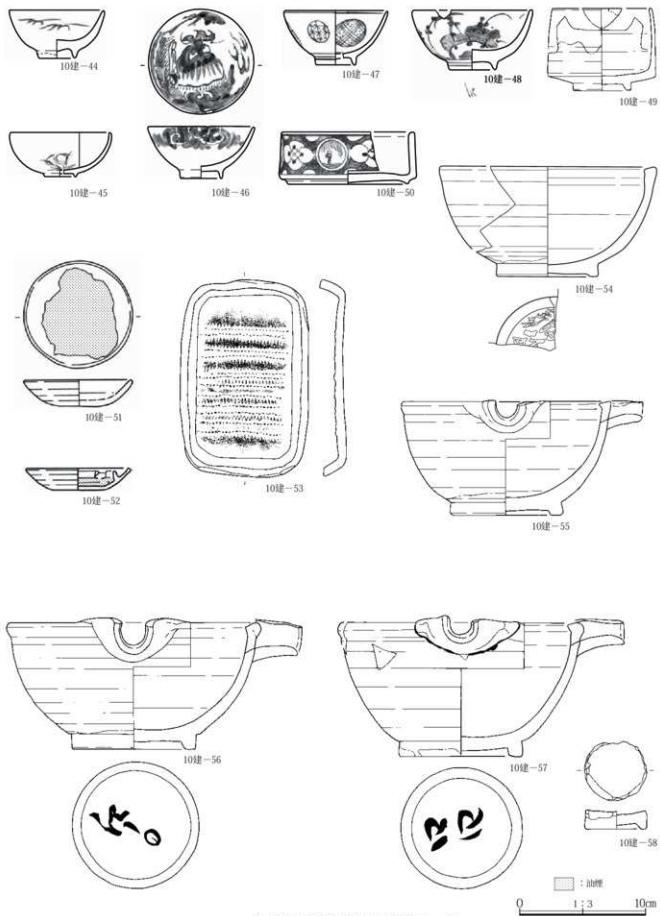
垂壺に相当すると考えられる凹部は、径約100cm×深さ約50cmの平面円形状の石組の遺構である。石組は2～3段で積み上げられている。凹部底部には5基の平石が水平に敷設され、搾酒を蓄える桶などの容器が、壺や甕の代替として据え置かれたと考えられる。

6基の礎石は、径25～30cmの平石及び川原石が使用され水平に敷設されている。その上には酒槽が据え置かれ固定されたと考えられる。

男柱は、槽場跡の西部分に立っている。

東宮遺跡が天明泥流に被災したのは8月5日のことであり、この時期に酒槽でもろみを搾る作業は行われていないと考えられる。雑菌等の繁殖を防ぐためにも、道具類は熱湯などで殺菌し片付けられていたことだろう。5号屋敷跡出土遺物の中に酒造りに関わる遺物が少ない印象を持つことから、道具が他の場所に持ち出された可能性も否定できない。また、使用用途の明らかでない出土

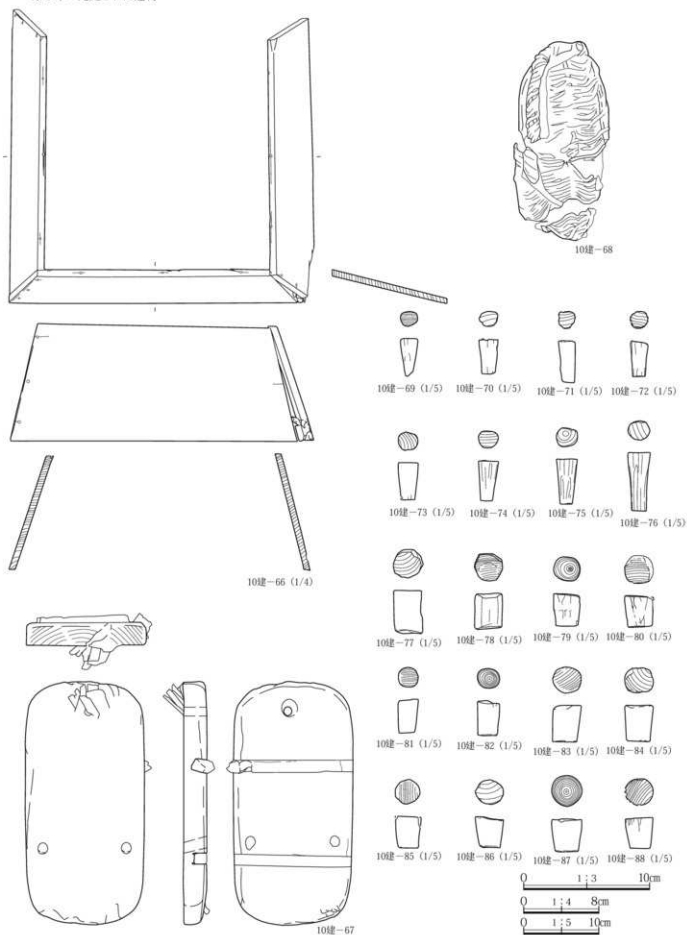
第3章 発見された遺物



第209図 IV区10号建物出土遺物44～58

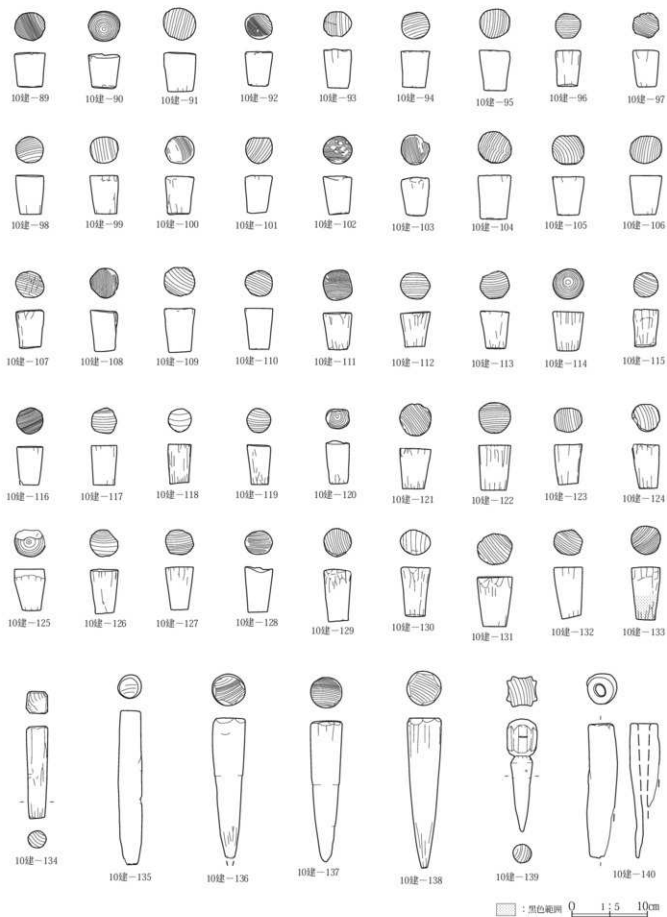


第210図 IV区10号建物出土遺物59～65



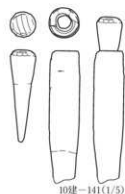
第211図 IV区10号建物出土遺物66～88

第4節 IV区の調査成果



第212図 IV区10号建物出土遺物89～140

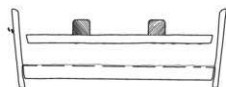
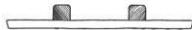
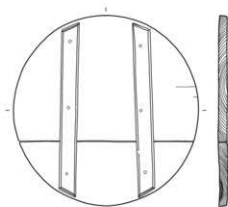
第3章 発見された遺物



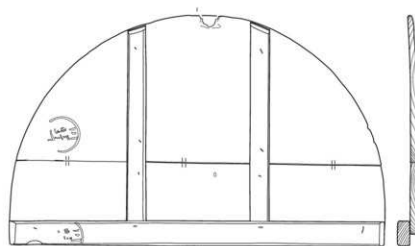
10建-141(1/5)



10建-142(1/5)



10建-143(1/5)



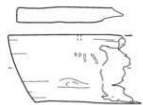
10建-144(1/5)



10建-145①(1/5)



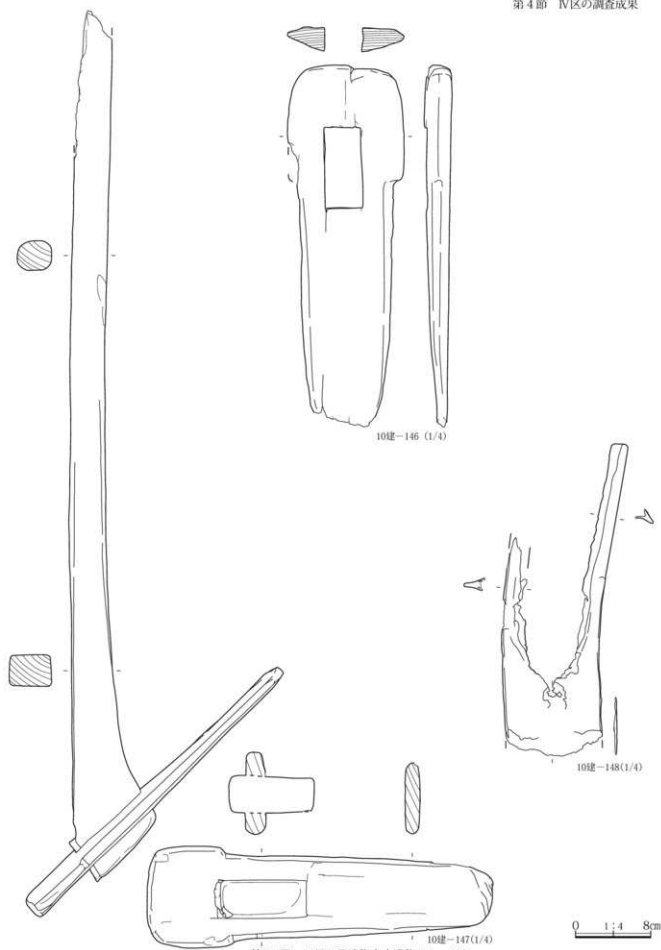
10建-145②(1/5)



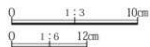
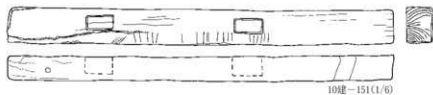
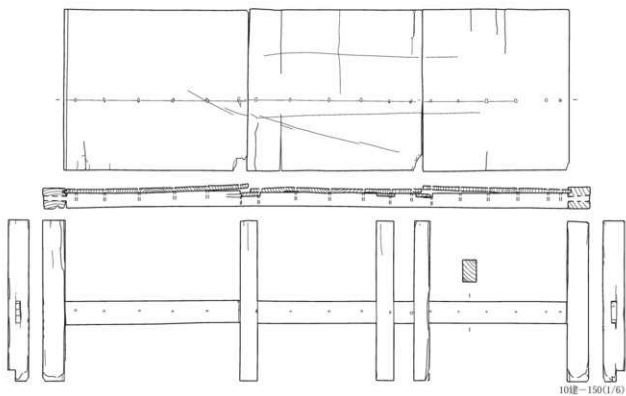
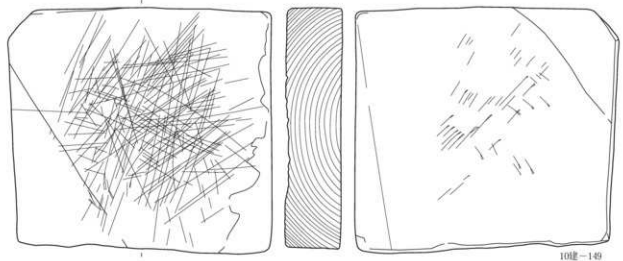
10建-145③(1/5)

0 1:5 10cm

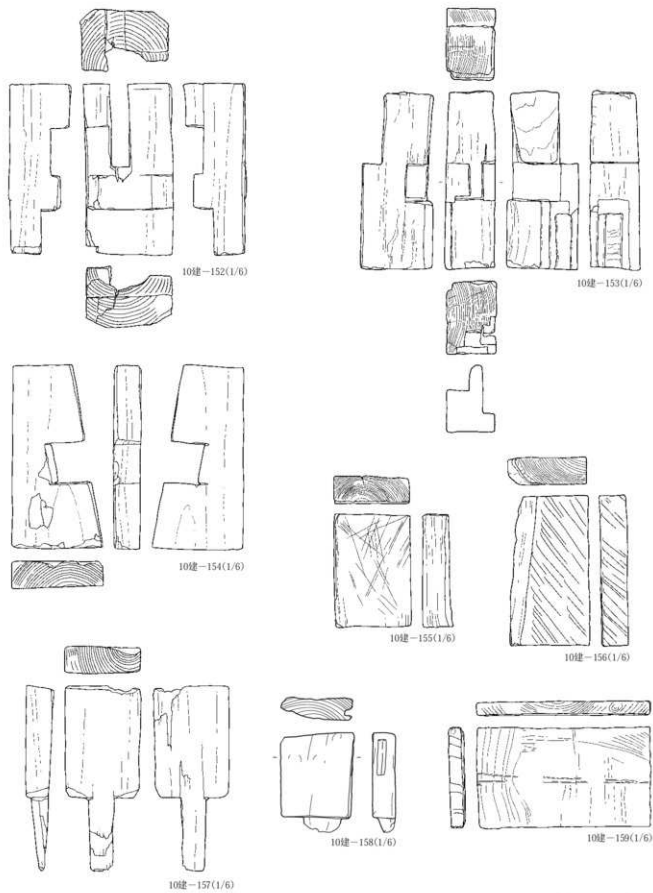
第213図 IV区10号建物出土遺物141～145



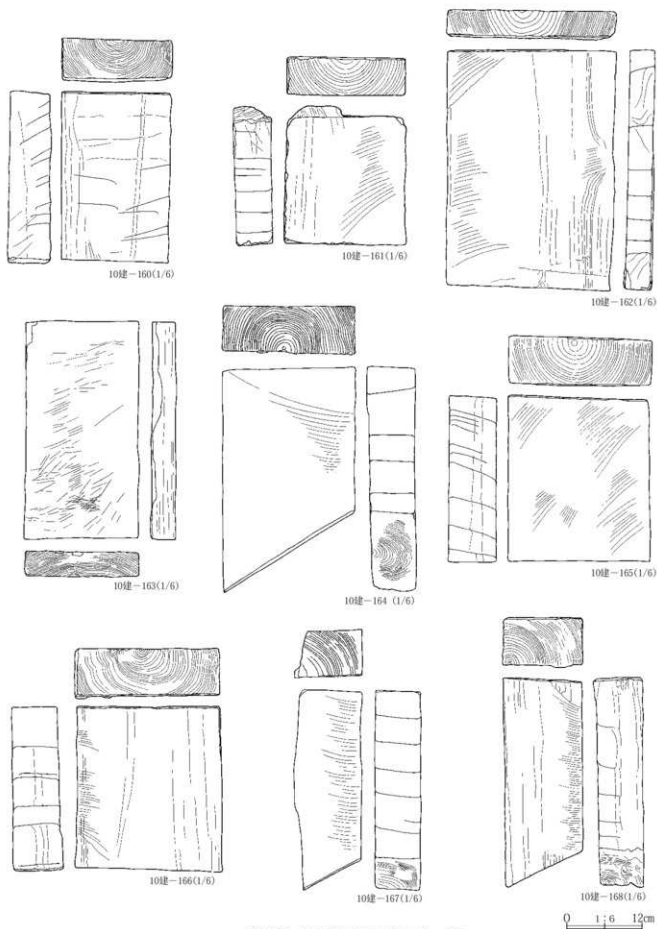
第214図 IV区10号建物出土物146～148



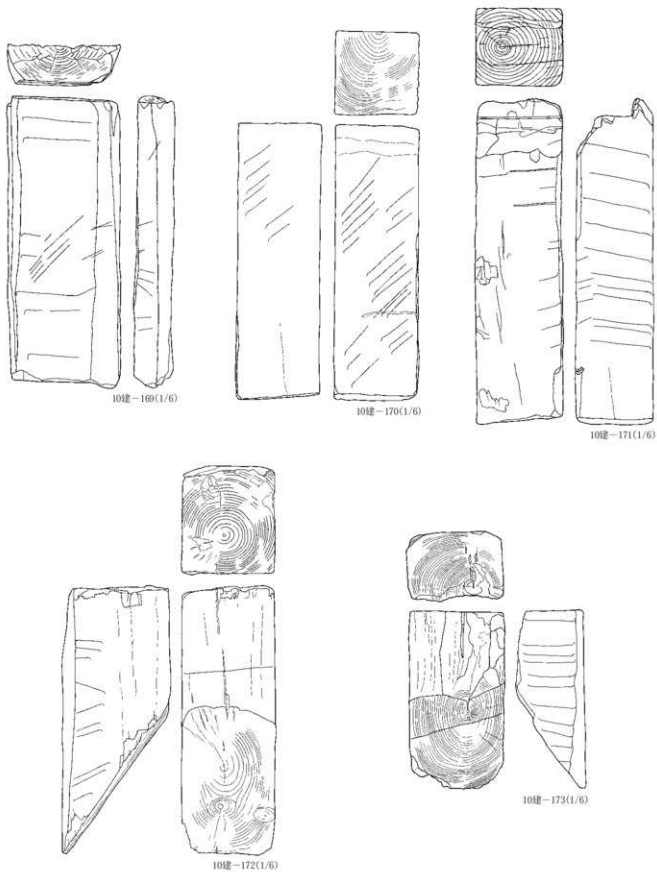
第215図 IV区10号建物出土遺物149～151



第216図 IV区10号建物出土物152～159

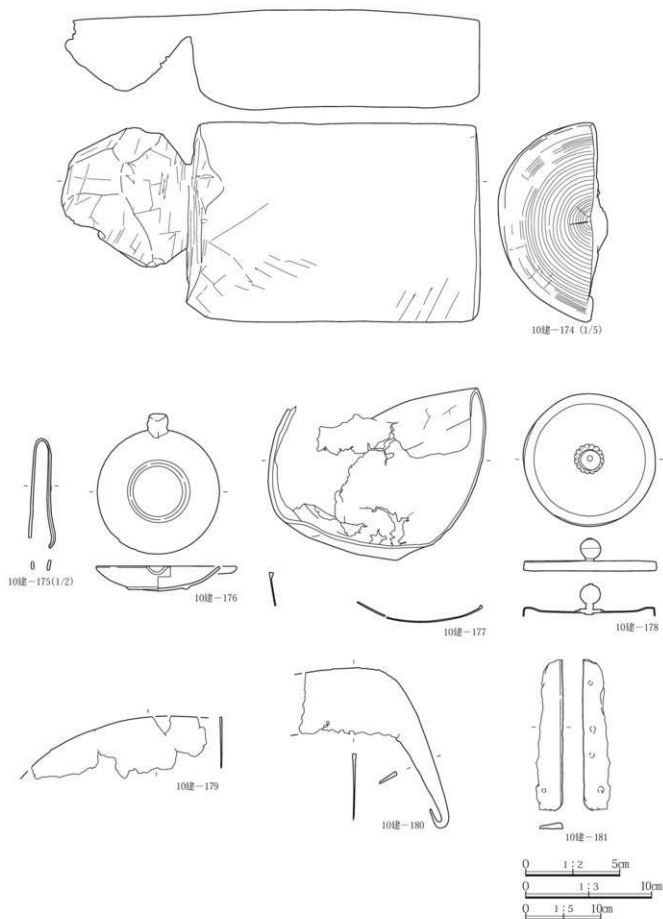


第217図 IV区10号建物出土遺物160～168

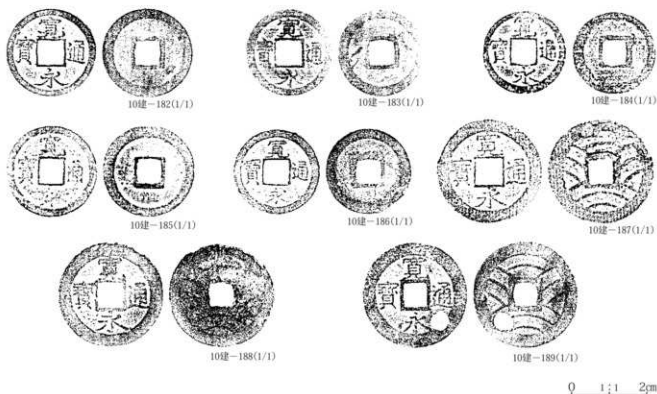


第218図 IV区10号建物出土物169～173

0 1:6 12cm



第219図 IV区10号建物出土遺物174～181



第220図 IV区10号建物出土遺物182～189

遺物の中に、酒槽などの酒造り道具の一部が混在していることも考えられる。

槽場跡周辺からは木製品が多く出土している。用途不明の木製品もあり、この中に酒槽の一部や酒造りに使用した道具類が混在していることも考えられるが、これを明らかにすることはできなかった。

③10号建物出土遺物

10号建物は酒造りを行っていた酒蔵と考えられ、出土遺物には酒蔵に相応しい遺物も見られた。そのひとつが木製の栓であり、破片を除けば73点とその数は多い。栓は、加工痕跡が明確に残るものと、痕跡が確認できないものにと大別することができた。これは、使用により加工時の痕跡が摩滅したものと考えられる。

10建No.134～142は樽栓の「呑」と「呑口」と思われる。10号建物から出土した桶・樽類は少ないが、栓の出土量から考えても、より多くの桶や樽などが使用されていたものと推測している。しかし、天明泥流で被災したのが8月5日であり、酒造りは行われていない時期とも思われる。出土遺物に酒造りの道具類が少ないのは、被災時には片付けられていたためか、或いは被災後に掘り出された可能性も考えられる。

10建No.143は、いわゆる「半切桶」である。側板の一

部が欠損するものの、タガも遺存するなど極めて良好な出土状況であった。桶内面には、底板に接するように木製の蓋がされていた。この蓋を外すと、内面には一様でない付着物が見られた。出土した建物が酒蔵であったことから、酒造りに必要な酒母や酵母、麹が遺存している可能性が考えられ、付着物の分析を実施した。分析結果については、第4章第4節10を参照して頂きたい。

10建No.144は樽の蓋と思われる。「○(マル)」に「川野口」の焼き印が2カ所に見られた。10建No.145は、桶か樽の側板及び底板の一部である。10建No.144と同様に「○(マル)」に「川野口」の焼き印が見られた。

片口(10建No.54～57)は4点出土した。ともに連房8小期であり、隣接する9号建物で出土した刷毛(9建No.24)に墨書された「天明二年」と組跡はない。片口のうち3点には高台内に墨書があり、特に10建No.56には「河ノ口」とも読める墨書が見られた。10建No.144の樽の蓋や10建No.145の桶や樽の一部に見られた、「○(マル)」に「川野口」の焼き印と同様の意味を持つ墨書ではないかと考えている。

10建No.62・63はササラと思われる。酒造りに使用された道具のひとつと考えている。

10建No.65・66は板材である。端部に木釘の痕跡が残

第3章 発見された遺物

り、箱状であったと思われる。欠損部が多く判然としないが、酒造りに使用した道具の一部とも考えられる。

10建No.150は組まれた骨組みに板を打ちつけた木製品である。用途は不明だが、1号建物でも同様の遺物（1建No.336）が出土している。

10号建物からは、用途不明の多くの木製品が出土している。これらの木製品の一部が組み合わさることで、酒造りに必要な道具になるとも思われたが、限られた期間でその全てを確認することはできなかった。10号建物からは槽場跡が検出されたが、酒槽は確認されていない。出土した木製品の一部が、この酒槽になることも考えられる。

10建No.64は灯火具と思われる。皿状に彫られた位置には灯火皿が置かれたと思われ、使用によるためか、皿状に彫られた周囲には油煙が残り炭化していた。

(3) 5号屋敷跡1号施設（第222図、PL.44-1～4）

① 5号屋敷跡1号施設の概要

5号屋敷跡1号施設は、屋敷跡北西部、42区J・K-24・25グリッドに位置する。石垣状の石組及び施設内部の石組に沿いに打ち込まれた多数の杭は原位置を保っている。

施設の空間は、天明泥流堆積物に完全に被覆され、調査前状況では、石組の先端部も露出していなかった。施設検出作業の途中では、大小の木材が多数出土したが、原位置を保ったものや使用状況が明確なものはほとんどなかった。間口は（南北）2.7m×奥行（東西）3.2m×高さ1.7mの規模を測る。

北・西・南側の境界を形成する石組（石垣）は7～8段に整然と積み上げられている。また、石組の立面には、5～10cmの厚さで黄色ロームが土壁状に塗り固められている。

施設内の地面には、割材や角材の杭が2本1組で石組に沿って打ち込まれている。また、出入口付近には両側にやや規模の大きい杭が1本ずつ立てられている。

上屋構造は確認できなかったが、温度や湿度を一定に管理する「室（むろ）」施設とも考えられる。

『東宮遺跡（1）』では、10建No.28の杭出土位置について誤りがあった。第222図に、改めて報告する。

② 5号屋敷跡1号施設遺物出土状況及び出土遺物

5号屋敷跡1号施設は「室（むろ）」施設とも考えられるが、その目的や用途は明らかでない。出土遺物には多くの木製品が見られる。しかし、天明泥流により5号屋敷跡及び10号建物出土遺物が混在していることが考えられ、出土遺物からも1号施設の目的や用途を判断することは難しい。

5号敷1施設No.1は木製の蓋である。大型だが、10建No.144に近似しており、大型の樽の蓋とも思われる。5号敷1施設No.2は作業台と思われる。径5mmほどの円形痕跡を多数残しており、特徴的な作業台と考えている。

(4) 5号屋敷跡2号施設（第223図、PL.44-5・6）

① 5号屋敷跡2号施設の概要

5号屋敷跡2号施設は、屋敷跡の東部、42区G-22・23グリッドに位置する。石垣状の石組や石段は原位置を保っている。

施設は天明泥流堆積物に完全に被覆されていたが、施設北部分には、土坑状に擾乱が侵入している。これは、天明泥流被災後に、復旧等、何らかの目的により人為的に掘られた土坑が、泥流主体の二次堆積土により、再度埋没したものと考えられる。

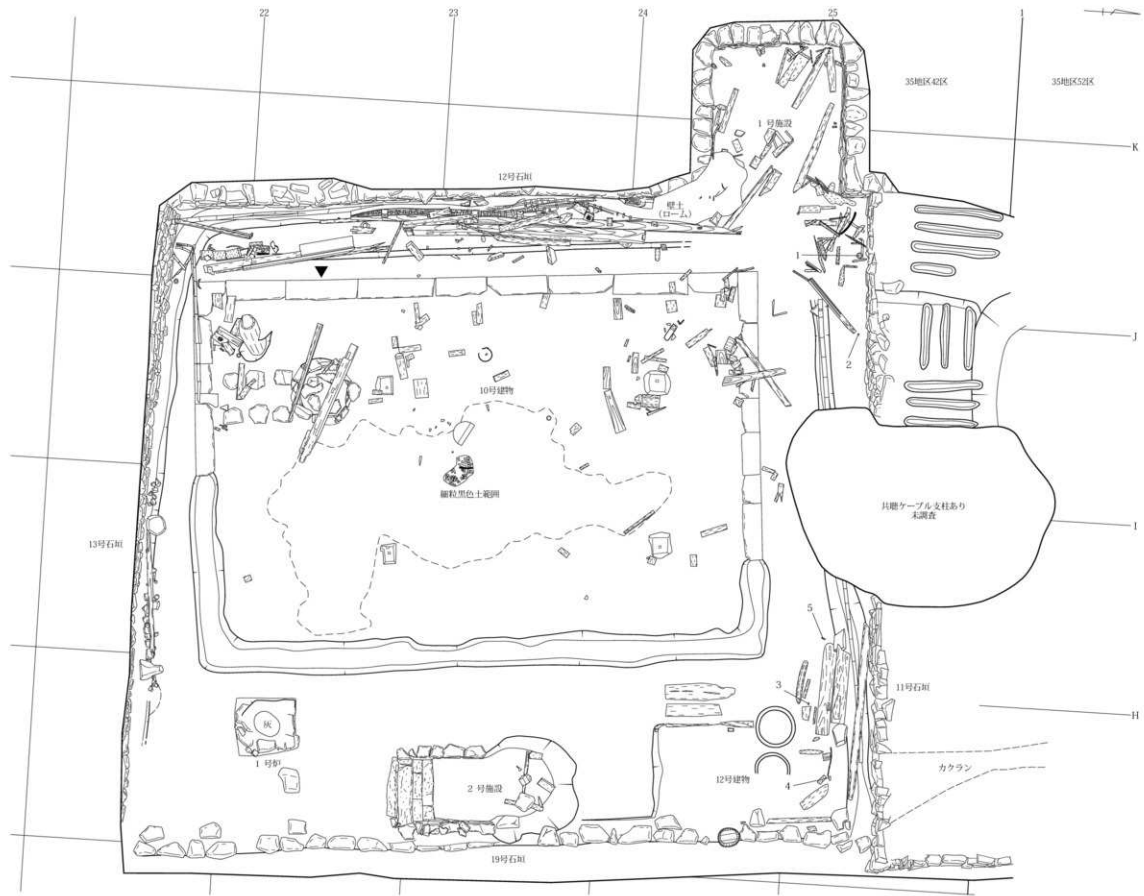
2号施設は半地下施設であり、施設北部分には擾乱が侵入しているため本来の形状は不明であるが、東・西側と同様の石垣状の石組が廻り、南側に設置された石段が地下施設への出入口であったのではないかと考えられる。間口は（東西）1.3m×奥行（南北）3～3.5m（推定）×深さ1mの規模を測る。

2号施設南側には、切石を使用した石段が4段作られる。東・西側にはノミ痕の残る切石が使用された3～4段の石組が築造されている。

上屋構造は確認できなかったが、温度や湿度を一定に管理する「地下室（ちかむろ）」施設とも考えられる。

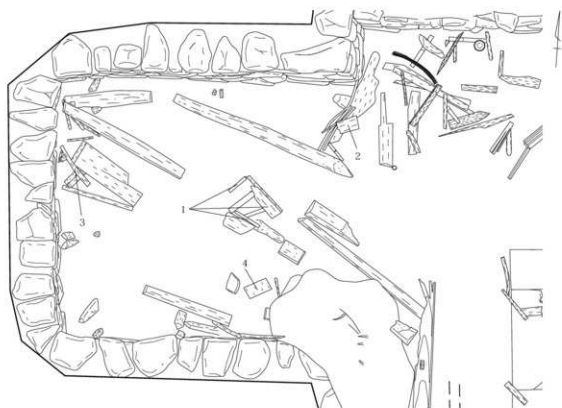
② 5号屋敷跡2号施設遺物出土状況及び出土遺物

5号屋敷跡2号施設は「地下室（ちかむろ）」施設とも考えられるが、その目的や用途は明らかでない。出土遺物には木製品等もあるが、2号施設には施設北部分に擾乱もあり、後世の混入とも考えられる。また、用途不明の木材が出土したが、出土遺物からも2号施設の目的や用途を判断することは難しい。

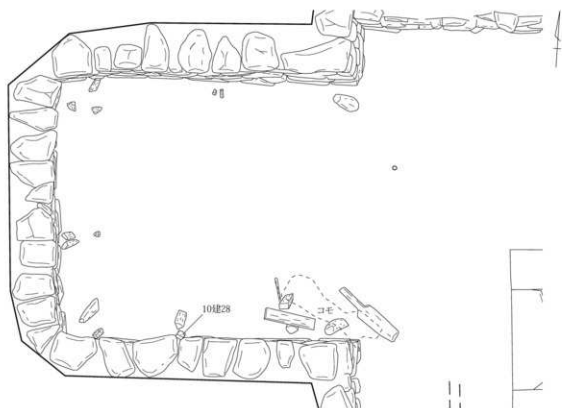


0 1:30 2m

第221図 IV区5号屋敷跡遺物出土状況



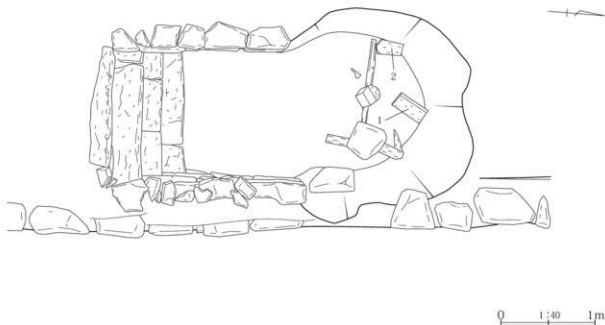
(1面)



(2面)

第222図 IV区5号屋敷跡1号施設遺物出土状況

0 1/40 1m



第223図 IV区5号屋敷跡 2号施設遺物出土状況

(5) 5号屋敷跡1号炉(第224図、PL.44-7)

① 5号屋敷跡1号炉の概要

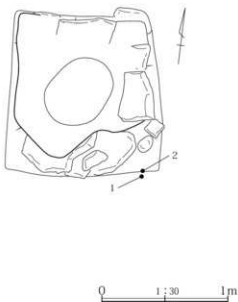
5号屋敷跡1号炉は、屋敷跡南東部、屋敷の庭に相当する42区G-22グリッドに位置する。炉燃焼部(灰層)より下部の構造はほぼ遺存しており、原位置を保っている。

形状はいわゆる「囲炉裏」に類似するが、10号建物の外部に位置するため、また、酒蔵に通常付属する釜場施設(水に漬けた酒米を蒸す施設)との関連も考えられるため、「炉」として扱った。

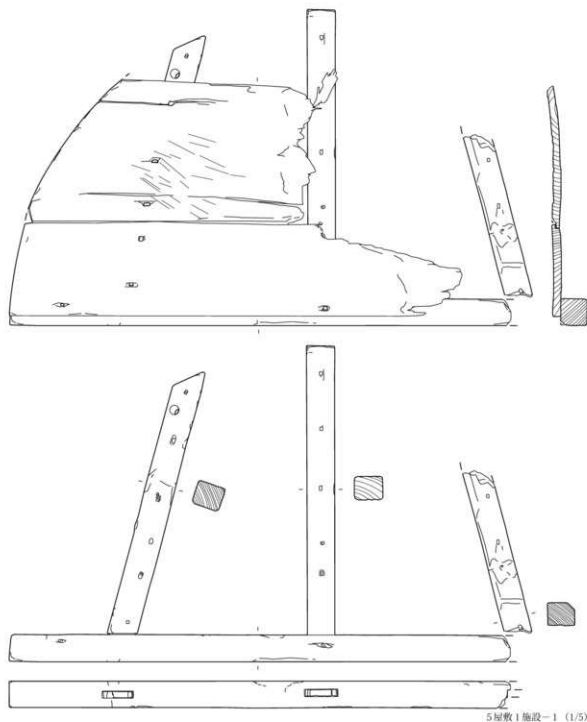
1号炉の東側及び南側には礎石列が確認できるとともに、炉の周辺にはAs-A軽石の堆積が確認できなため、上屋構造の建物に伴われていた可能性もある。

燃焼部の灰層は、東・南部分がやや欠損するため、推定だが、ほぼ平面方形を呈し、南北約130cm×東西約120cmの規模を測る。燃焼部中央には径50～60cmの灰層が存在する。基礎の石組も、ほぼ平面方形を呈し、南北約130cm×東西約120cmの規模を測る。地面と囲炉裏燃焼部中央との比高差は30cmである。

地面に石組の基礎を造築する。石組は1～2段組で、



第224図 IV区5号屋敷跡 1号炉遺物出土状況



5層敷1施設-1 (1/5)

0 1:5 10cm

第225図 IV区5号屋敷跡1号施設出土遺物1



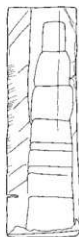
5号敷1施設-2



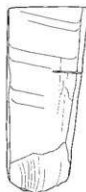
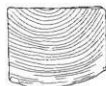
5号敷1施設-3 (1/6)



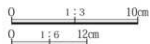
5号敷1施設-4 (1/6)



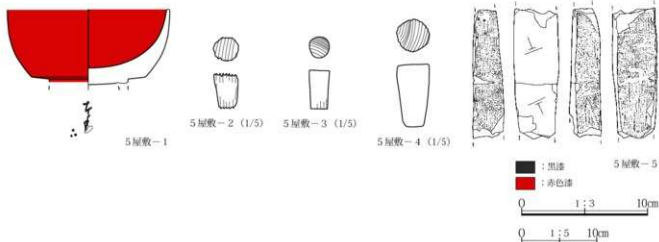
5号敷2施設-1 (1/6)



5号敷2施設-2 (1/6)



第226図 IV区5号屋敷跡1号施設2~4、2号施設1・2出土遺物



第227図 IV区5号屋敷跡 1号炉1・2、5号屋敷跡1～5出土遺物

1段目に径40～50cmの大きな垂角礫や川原石を据え、その後、径10～20cm程度の垂角礫を2段目に積み上げた部分がある。平面方形の石組の内部に礫や石は充填されていない。

石組の内部には下層から上層に至るまで、ローム質の褐色土が1層充填され、直方体状に成形されている。燃焼部には灰層が13cmの厚さで堆積している。

釜場施設には通常、甕が想定されるが、焚口や袖石、燃焼部などは検出されていない。

② 5号屋敷跡 1号が遺物出土状況及び出土遺物

5屋敷1号No. 1・2は銭貨である。ともに寛永通貨であった。1号がと出土した銭貨との関連については明らかでない。

(6) 5号屋敷跡遺物出土状況及び出土遺物 (第221図)

① 5号屋敷跡遺物出土状況

5号屋敷跡では、被覆する天明泥流により、多くの遺物が建物西側、12号石垣側へ押し流されていた。石垣下以外から出土した遺物も、10号建物、或いは各施設や炉内で出土しており、各遺構出土遺物として既に報告して

いる。そのため、5号屋敷跡として報告する遺物は僅かであるが、屋敷跡とした遺物の中にも、10号建物に帰属される遺物が多いものと考えている。

② 5号屋敷跡出土遺物

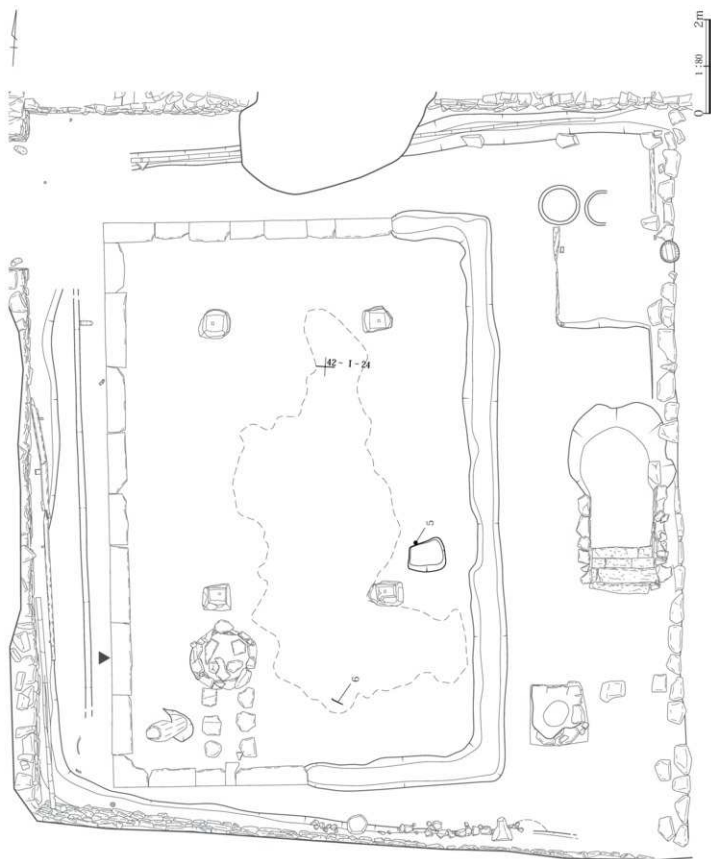
5号屋敷跡からは、赤色漆で仕上げられた漆椀（5屋敷No. 1）や椀（5屋敷No. 2～4）、砥石（5屋敷No. 5）などが出土した。前述の通り、出土した遺物の多くは、10号建物に帰属する可能性が高いと考えられる。出土した砥石（5屋敷No. 5）には「七」と刻書されていた。「七」が示す意味については明らかでない。

(7) 5号屋敷跡下の遺物出土状況及び出土遺物 (第228図、PL.44-8)

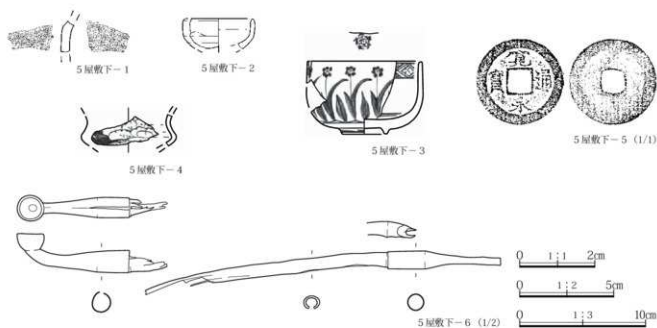
① 5号屋敷跡下の遺物出土状況

5号屋敷跡下からは、土坑状の落ち込みが確認されたが、明らかな遺構は検出されていない。

ここでは、5号屋敷跡下より出土した遺物について報告する。報告する遺物は、内耳土器を除けば近世遺物が大半を占めている。また、陶磁器の年代を見ると天明期に近いことも確認された。



第228図 IV区5号屋敷跡下遺物出土状況



第229図 IV区5号屋敷跡下出土遺物1～6

②5号屋敷跡下の出土遺物

5号屋敷跡下からは、陶磁器や煙管、銭貨が出土した。近世陶磁器では、連房7小期の小碗（5号屋敷No. 2）、1780～1810年代の染付碗（5号屋敷No. 3）、18世紀後半の色絵香か油壺（5号屋敷No. 4）が出土した。ともに天明期に近い時代の遺物である。

9号建物から出土した刷毛（9建No.24）には、「酒蔵用」「天明二年」などと墨書されていた。また、10号建物出土陶磁器には、連房8小期頃の陶器や18世紀後半頃の染付があり、5号屋敷跡下出土陶磁器と明確な時期差が確認できなかった。これらを考慮すれば、5号屋敷跡に10号建物が建てられたのは、刷毛に墨書された「天明二年」に近い時期だと思われる。10号建物は、建てられた後間もなく、天明泥流により被災したものと考えている。

屋敷跡下から出土した煙管（5号屋敷No. 6）には、羅字が遺存していた。脆弱な羅字が出土したのは、煙管が屋敷下に埋没して後間もなく、保水性・保湿性の高い天明泥流で被覆されたためと思われる。屋敷跡が造られた後、泥流で被災するまでの間は短期間であったことの傍証となるだろう。第229図には、遺存していた羅字の長さで煙管をおよそ配置している。また羅字の端部には、そぎ尖らせた痕跡が確認できた。

5号屋敷No. 1は中世所産の内耳土器頸部片である。中世遺物も僅かであるが散見できた。

3 6号屋敷跡

(1) 6号屋敷跡の概要（第230図、PL.45-2）

6号屋敷跡は表土及び天明泥流堆積物で被覆されており、厚いところでは約150cmにもなるが、屋敷跡東側は薄く、15・18号石垣に近い西側へ向かって厚く堆積する様相であった。屋敷跡が検出された場所は、東宮遺跡の中では比較的標高が高いためか、被覆する表土及び天明泥流堆積物の薄い箇所が見られ、数カ所で攪乱も確認されている。

屋敷跡を被覆する表土及び天明泥流堆積物は、1号屋敷跡や2号屋敷跡を被覆していた保水性・保湿性の高いものではなく、出土した建築部材等の遺存状況は良好ではない。そのためか、大引や根太の痕跡も不明瞭であり、11号建物の床部構造を明らかにすることはできなかった。ただし、屋敷跡北西側の18号石垣との間より、壁材の一部と思われるローム質土や水平部材とも思われる痕跡が確認されている。

6号屋敷跡は、主屋である11号建物と、屋敷跡の四方の境界を形成する11・15・18・19号石垣、屋敷跡南側で検出された前菜園である27号畑で構成されている。主屋以外の付属建物については確認できていない。

屋敷跡の境界については、北側は15号石垣によって区画されており、5号道、17号石垣を挟んで7号屋敷跡と隣接する。6号屋敷跡と7号屋敷跡との比高差は、隣接

第3章 発見された遺物

する場所で最大約1.8mである。

東側は19号石垣により区画され、町道1-11号線（6号道か）に接するようにある。19号石垣は北側へ向かって低くなり、屋敷跡との境界をなす程度となっている。南側は11号石垣により区画され5号屋敷跡と隣接する。6号屋敷跡と5号屋敷跡との比高差は、隣接する場所で最大約1.6mあり、5号屋敷跡は、4・6号屋敷跡よりも一段低い位置にある。西側の境界については18号石垣により区画されている。しかし、検出された範囲は一部分であり、その大半が調査区外のため全容は明らかでない。

隣接する5号屋敷跡や前菜園である27号畑の検出状況を加味すれば、6号屋敷跡は僅かに西側へ広がる程度の範囲であったと推測できる。屋敷跡北側の境をなす15号石垣と11号建物北側の雨落溝、屋敷跡東側の境をなす19号石垣との間には、平面およそ三角形の平坦地がある。ここに主屋である11号建物に付属する建物や前菜園（畑等）があったことも考えられるが、攪乱のため検出することはできなかった。

南側の境界は、11号石垣を隔て、5号屋敷跡に隣接するようにある。5号屋敷跡は、酒蔵と思われる建物跡が検出されており、11号建物との関連も注目される。

6号屋敷跡には攪乱や未調査範囲も多く、屋敷跡の全容については不明瞭な部分も残る。しかし、調査範囲の中からは、床下土坑や古い段階の屋敷跡地境溝などは検出されなかった。遺構検出状況から考えても、屋敷が造られた後、大掛かりな敷地拡張及び造成が行われたとは考えにくい。

主屋である11号建物下からも、建物の増改築の可能性を示す遺構は検出されなかった。攪乱により明らかでない箇所もあるが、礎石心寸法やその配置も規則的であり、礎石の様相からも大規模な増改築が行われた可能性は少ないと考えている。

(2) 11号建物（第231図、PL.45-2～46-3）

①11号建物の概要

6号屋敷跡の主屋であり、土台建物と考えられる。52区G-1・2・3、H・I・J-1～4グリッドに位置する。建物は、遺存する土台痕及び礎石列を参考に心寸法で計測すると、桁行（南北）11.66m×梁行（東西）

7.46mの規模を測る。建物北側の礎石列は食い違うようになり、短い桁行（南北）では11.04cmとなる。床高については、囲炉裏の上面レベルが平均、地面から20cm（H=535.40m）であることを参考に記しておく。

6号屋敷跡は未調査部分もあり、主屋である11号建物が屋敷跡のどの位置にあったかについては明らかでない。建物出入口は土間東側が想定される。一部未調査部分もあり、裏手出入口については明らかでないが、馬屋南側であろうか。建物には、北部分に土間や馬屋が配置され、土間奥手に竈が設置される。焚口は、東側或いは北側か。建物中央部から南部分には床部が配置される。囲炉裏は想定される床部に1基配置されている。

建物を構成する施設（馬屋、竈、囲炉裏）及び礎石は基本的に原位置を保って出土している。また、屋敷跡を被覆する表土及び天門泥流堆積物は、保水性・保湿度の高いものではないため、礎石上に据えられていた土台の腐蝕した痕跡、或いは大引や根太、床板の痕跡は不明瞭であった。そのため、図示することもできていない。

建物の東側と西側の一部を欠くものの、建物を廻るよう雨落溝が確認された。雨落溝北側は、緩やかにクラックするように検出された。11号建物の北側礎石列は、建物ほぼ中央付近で60cmほど南北に食い違う。壁面がどのようなであったか、その痕跡は確認できなかったが、検出された建物北側の雨落溝の平面形状から、少なくとも屋根は壁に規定されるように緩やかに曲がっていたものと考えられる。

建物東側の礎石配置を西側に合わせず、結果、建物北側の礎石列が食い違うようになっていた理由は判然としない。礎石の食い違う箇所には隣接するように何かの施設があり、これを避けるためとも想定できるが、関連するだろう遺構は検出されなかった。

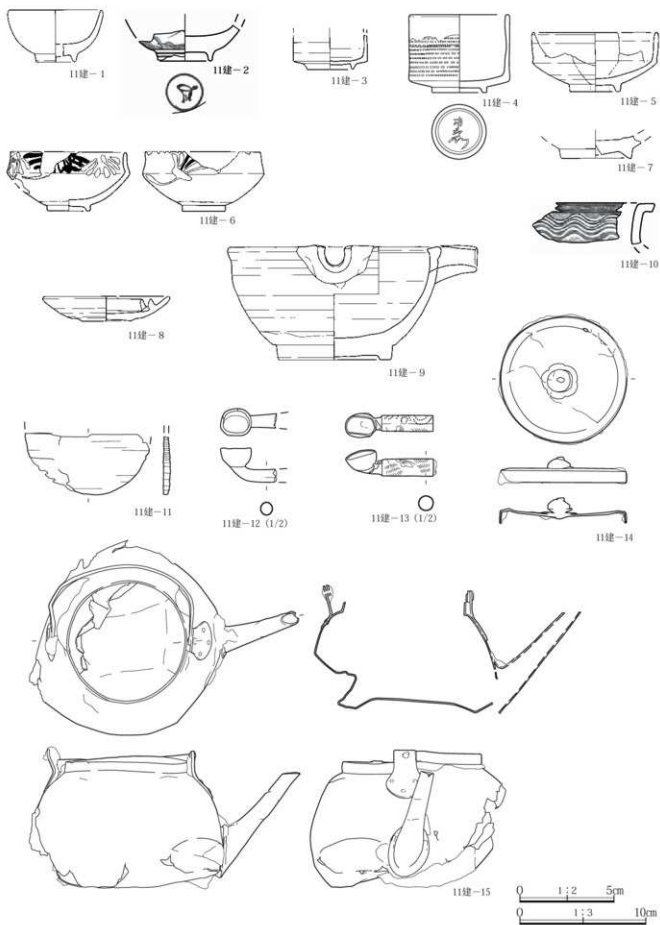
礎石は、平石及び川原石が多用され、計26基程度が遺存している。攪乱等により一部の礎石は確認できなかったが、礎石の配置は規則的であり、建物北側礎石列以外は食い違うところもなかった。

土間部と床部との境界は、鍵手に折れたように確認された。同様の形態は9号建物でも確認でき、また1号建物も同様とも考えられる。

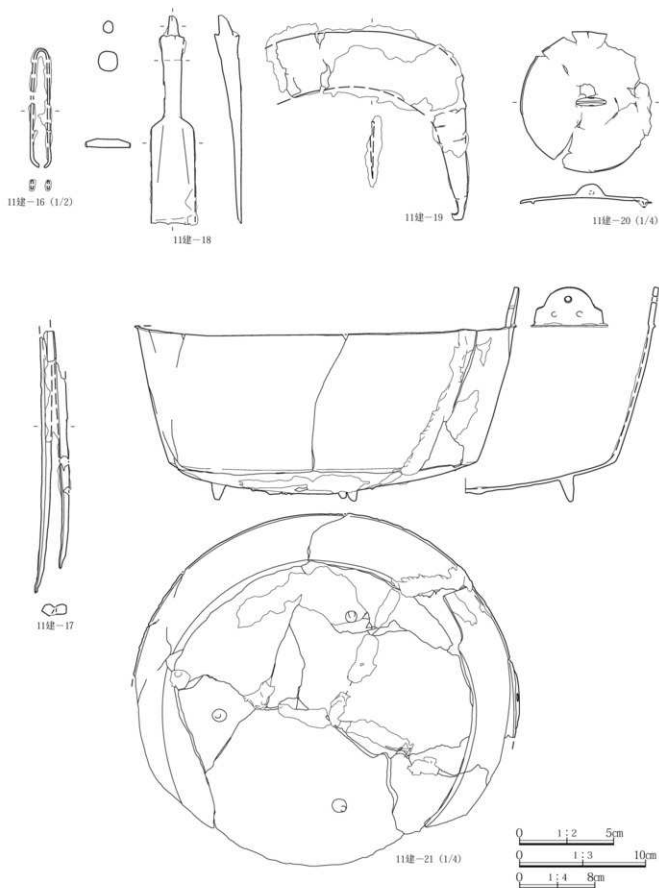
②11号建物遺物出土状況

6号屋敷跡は未調査範囲も多く、そのため11号建物の

第4節 IV区の調査成果

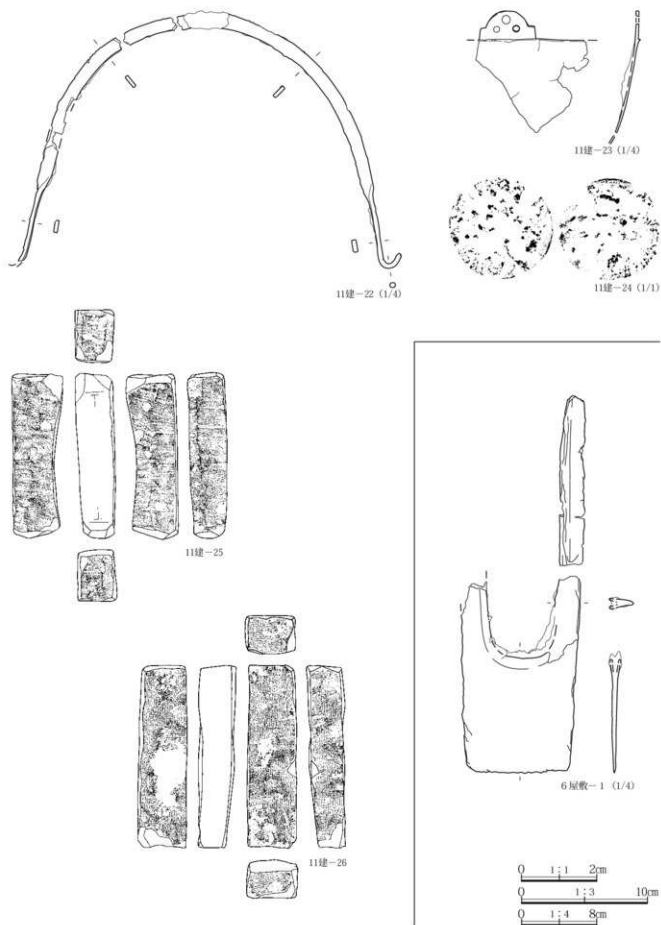


第232図 IV区11号建物出土遺物1～15



第233図 IV区11号建物出土遺物16～21

第4節 IV区の調査成果



第234図 IV区11号建物22～26、6号屋敷跡1出土遺物

遺物出土状況も不明瞭な箇所が多い。

11号建物からは陶磁器や金属製品、石製品が出土した。湧水地点がないためか、或いは湧水地点が18号石垣付近にのみあったためか、木製品の出土量は少ない。

11号建物出土遺物は建物西側、18号石垣側から多数出土した。11号建物の遺物が、被覆する天明泥流により西側へ押し流されたため、18号石垣下付近から多数出土したものと考えている。そのため18号石垣側より出土した遺物も、11号建物に帰属すべき遺物であると考えている。

③11号建物出土遺物

特筆すべき遺物に、鋳湯呑(11建No. 4)がある。高台内には、焼成前に「市左衛門」と刻書され、施釉し焼成されていた。このことから、生産地である美濃で、「市左衛門」と刻書された陶器であることは明らかだ。

多量に同規格で焼成された陶磁器に、生産地で名前を記した例は、管見の範囲では、東宮遺跡13号建物で出土した13建No.32の柳茶碗と11建No. 4の鋳湯呑の2点程度である。13建No.32の柳茶碗には、施釉前に生産地で「孫兵衛」と書かれていた。ともに美濃、連房8小期である。

11建No.15は葉缶である。東宮遺跡からは他にも葉缶が出土した(1建No.402、7建No.56)が、11建No.15の葉缶は他の葉缶(1建No.402、7建No.56)とは形状が異なる。また、11建No.15の葉缶胴部と注口部の境には障壁があり、茶漉し状に円孔が数カ所穿たれていた。他の葉缶にはこのような障壁はなく、使用用途に違いがあることも想定できる。

11建No.21は鉄鍋である。溶接により欠損部を補修した補修痕跡が明瞭に確認された。

11建No.18はノミである。穂先は長く、刃部の幅が広い。刃部の厚さが薄いことから、突きノミの可能性が考えられる。

(3) 6号屋敷跡遺物出土状況及び出土遺物(第230図、PL.46-4)

①6号屋敷跡遺物出土状況

6号屋敷跡を被覆する表土及び天明泥流堆積物は、保水性・保湿性の高いものではなく、出土した建築部材等の遺存状況も良好ではない。11号建物も含め、木製品の出土量も僅かであった。また、6号屋敷跡は未調査範囲も広く、そのためか、6号屋敷跡出土遺物も僅かであっ

た。

②6号屋敷跡出土遺物

6屋敷No.1は鎌の刃部である。15号石垣下より出土している。被覆する天明泥流から考えても、11号建物に帰属すべき遺物と思われる。

4 7号屋敷跡

(1) 7号屋敷跡の概要(第235図、PL.46-5)

7号屋敷跡は50～70cmの表土及び天明泥流堆積物により被覆されていた。表土及び天明泥流堆積物の比較的薄い箇所が多いためか、東宮遺跡の中でも比較的多くの攪乱が見られた。

屋敷跡を被覆する表土及び天明泥流堆積物は、保水性・保湿性の高いものではなく、木製の建築部材等の遺存状況は良好ではなかった。広範囲に渡り攪乱を受けていたためか、礎石が欠損する箇所も見られた。また、建物内で確認された大引や根太の痕跡は僅かであったが、その中には所位置を保っていないと思われるものや、不明瞭なものも見られた。

7号屋敷跡は、ほぼ平坦な敷地内に、主屋である13号建物と付属建物と思われる14号建物、屋敷跡北西側の山際の地境にある8・14号石垣、13号建物の南側から東側へ通る1-11号道(6号道)によって構成されている。前菜園(畑等)については確認できなかった。

15号建物は13号建物に接した位置で確認されており、出土状況から13号建物の一部とも考えられる。独立した建物番号を付すのは適当ではないとも思われるが、ここでは調査時の呼称を優先し報告する。

7号屋敷跡の境界は、北側は8・14号石垣、西側は16号石垣、東側は1-11号道(6号道)によって形成されると考える。北側や南側の一部は調査区外のため、境界を示す痕跡は確認できなかった。屋敷跡は調査区外に広がる可能性があり、その範囲は明らかでない。

7号屋敷跡南東側には5号道がある。これは屋敷跡と6号道とを繋ぐ道であり、一段高い位置にある屋敷跡から6号道に出るための坂道だと考えている。

屋敷跡南側の境界は、この5号道、15・17号石垣を隔てて6号屋敷跡に隣接するようである。6号屋敷跡(平均L=535.20m)と7号屋敷跡(平均L=537.80m)との敷地レベルの比高差は、約2.6m存在することを追記し

ておく。

7号屋敷跡では、13号建物下より1号焼土が検出されている。遺構の時期については出土遺物もなく明らかでないが、出土状況から天明泥流で被災した13号建物よりも古い遺構だと考えている。また、13号建物の礎石心々寸法は、確認できる床部でその大半が約184cmであったが、囲炉裏が検出された床部中央付近では、北東から南西方向でこれとは異なる心々寸法であることが確認された。

1号焼土や礎石間の心々寸法の様相は、13号建物が増築された可能性を示しているとも考えられる。このような様相から、屋敷跡の拡張や造成まで行われていた可能性も考えられる。しかし、7号屋敷跡からは、8号溝のような古い段階の地境溝などは検出されていない。攪乱も多く、詳細は明らかでないが、7号屋敷跡が造られた後、大掛かりな敷地拡張及び造成は行われていないと考えている。

(2) 13号建物 (第236・237図、PL.46-5~49)

①13号建物の概要

13号建物は、7号屋敷跡の主屋であり、土台建物と考えられる。7号屋敷跡は調査区外へ広がることが考えられ、屋敷跡での位置については不明。52区K-3・4・5、L-2~6、M-1~6、N-1~5、O-2・3・4グリッドに位置する。建物土間部分の攪乱は著しいが、雨落溝や他の建物跡及び礎石列を参考に心々寸法で計測すると、桁行（北東から南西）約17.02m×梁行（北西から南東）約7.36mの規模を測る。南東側の礎石を含めると北西から南東方向では約8.59mであった。ただし、土間部分は攪乱が著しく、桁行の規模はおおよそと考えて頂きたい。また、接する15号建物を13号建物と一連の建物と考えれば桁行（東西）は約20.82mとなる。床高については、囲炉裏の上面レベルが平均、地面から17cm（H=537.82m）であることを参考に記しておく。

建物出入口は、土間南東側で礎石間の寸法が長くなっていたことから、建物南東側中央付近が想定される。しかし、出入口が想定される場所には唐臼が埋設されており、建物の出入口については検証が必要であろう。

建物南東部分にある土間は攪乱により大きく欠損しており、建物規模や裏手出入口、馬屋の様相などは明らか

でない。馬屋も建物南東側に桶が埋設された痕跡があるため、この付近と思われるのが明らかでない。竈は比較的良好に遺存していた。土間奥手に設置された、焚口は南東側（出入口正面方向）を向いていたと思われる。また、中央部から北西部分には床部が配置される。囲炉裏は想定される床部分に1基配置されている。

建物南西側にある広範囲の攪乱には、石や灰、焼土などの痕跡が見られた。礎石等の配置からも、ここに囲炉裏があった可能性が高いと考えている。

建物南西側、礎石から建物の外にかけて、壁土の一部とも思われるローム質土が確認された。天明泥流の営力により、南西側に倒壊した建物の土壁の一部とも思われるが、遺存状況も悪く不明瞭な部分が多い。

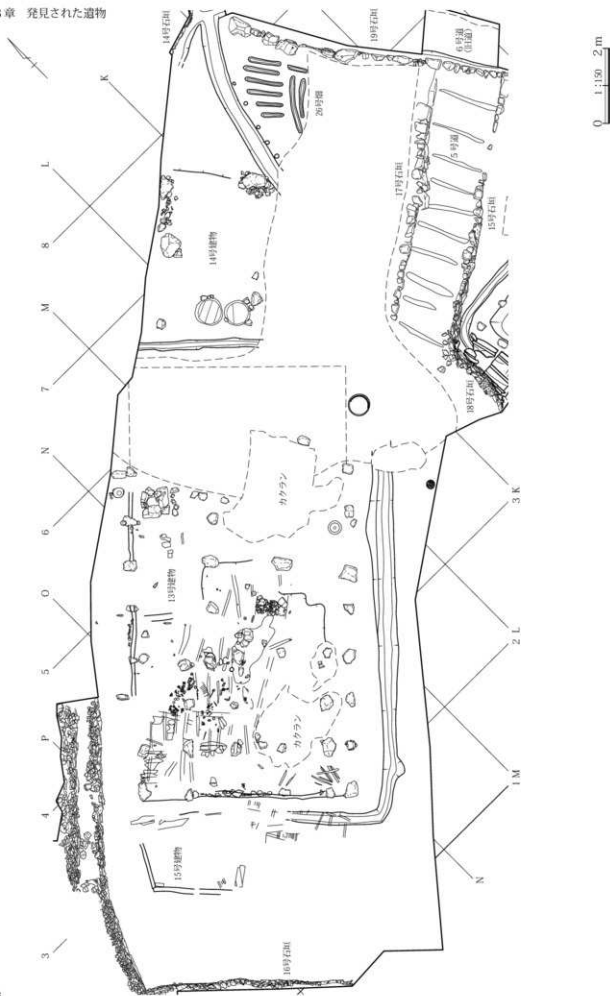
13号建物を構成する施設（竈、囲炉裏）及び礎石は基本的に原位置を保って出土しているが、攪乱により、一部の礎石は原位置から僅かにずれていると思われる。平面図にある攪乱範囲で確認された礎石がそれにあたる。また、礎石上に据えられていた土台の腐蝕した痕跡、或いは大引や根太、床板の痕跡も確認できたが、平面的に原位置を保っているものは少なく、泥流によるものが、僅かに動いているものが多いと思われる。また、床部が想定される建物南西側には、石や灰、焼土が見られることから、攪乱により壊された囲炉裏があったと考えている。

13号建物の南東及び南西部分には雨落溝が廻っている。北東部分にある溝も13号建物の雨落溝であると思われるが、北東側に隣接する14号建物の雨落溝とも考えられる。地形が北西方向へ高まるため遺構の遺存状況も悪く、北西側の雨落溝を確認することはできなかった。

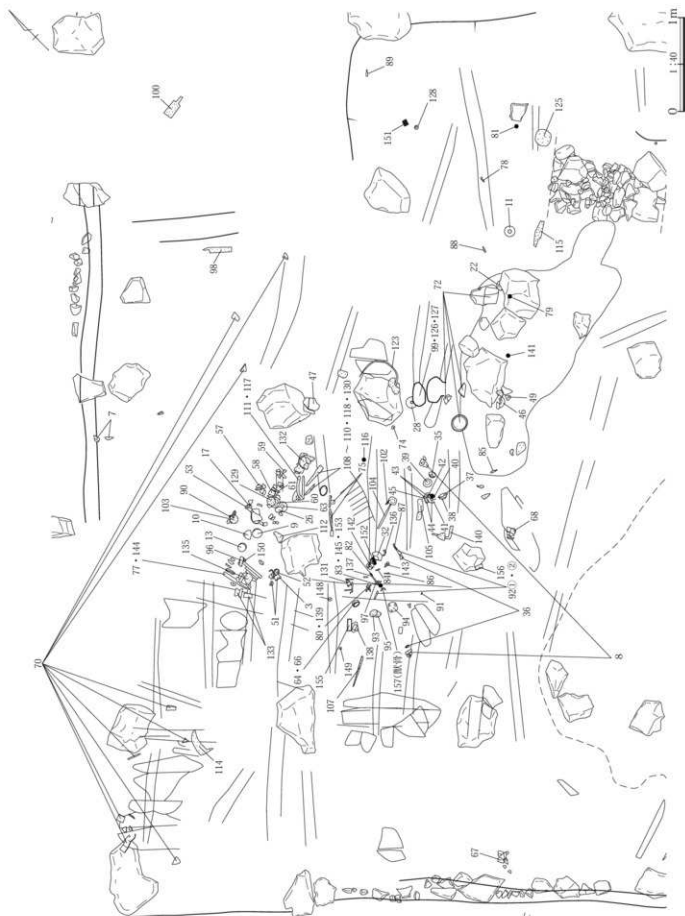
礎石は、平石及び川原石が多用され、攪乱で礎石であるか判断できないものを除けば、計35基程度が遺存している。建物内部の礎石列に関しては、列相互の間隔に差があったり、列途中で礎石が途切れたり、或いは独立した礎石列が存在していたり、複雑な配置となっている。

土台は確認できなかったが、建物西側を中心に、地面及び礎石直上の土台痕を検出した。土台痕の幅は、遺存状況も悪く明らかでないが、約18cmであった。

大引或いは根太と考えられる痕跡も、建物西側を中心に確認できた。大引痕は不明瞭なものが多い。根太痕は、主に南西から北東方向に向いていることが確認できた。



第235図 IV区7号屋敷跡 遺物出土状況



第237図 IV区13号建物南西 遺物出土状況

第3章 発見された遺物

根太は、その痕跡から礎石間に4本ほどあったと思われる。大引或いは根太痕の幅は、遺存状況も悪く明らかではないが10～20cmであった。被災した際の泥流の影響によるものか、或いは後世の攪乱によるものか、これらの痕跡は平面的に原位置を保つものが少なかった。

床板の痕跡は、建物西側において僅かに確認できた。根太の痕跡に対して直行するように確認でき、原位置を保つものもあるのだろう。

②13号建物遺物出土状況

13号建物は、東宮遺跡の中では比較的標高の高い位置にある。そのためか、被覆する天明泥流堆積物は薄く、攪乱も多い。一方で、天明泥流により大きく移動した遺物は少なく、建物床部付近からまとまった範囲で遺物が出土するなど、より原位置近くに遺物が遺存しているものと考えている。

13号建物からは、数多くの陶磁器や金属製品が出土している。しかし、被覆する表土及び天明泥流堆積物が薄く、また湧水地点が近隣にないためか、木製品の出土量は僅かであった。

13建No.77は、漆で仕上げた木質部と螺番が出土しており、屏がつく箱状の遺物と思われる。その近辺では、陶磁器や金属製の道具類や木質の残る道具類が出土しており、その一部はこの箱状の遺物の中にあつたものと思われる。金属製の花瓶(13建No.133)も近接して出土しており、13建No.77は仏壇のようなものとも思われる。

金属製品の中には、木質部が付着し遺存している道具類(13建No.92・108・111・117・132)が見られた。道具類はまとめて確認されており、箱の中に収められた遺物が、原位置近くから出土したのと考えている。

棹秤(13建No.75)は鍾を革袋に入れ、棹は筒状の入れ物に入れられた状態で出土した。また、鏡(13建No.103)には、布と思われる繊維の一部が遺存していた。同様に、おろし金(13建No.100)の柄にも、布と思われる繊維の一部が遺存していた。布の上に置かれていたが、包まれていた可能性を指摘しておきたい。

13建No.78の煙管は間戸裏付近で出土した。火皿部分には刻み煙草が詰められており、火をつける前の状態で出土した。13号建物は、被覆する天明泥流堆積物も薄く、被災前の状況を良好に遺存していることが推測される。間戸裏近辺より、煙草に火をつけない煙管が出土したこ

とは、8月5日の浅間山噴火後、天明泥流により被災するまでの間、混乱した状態であったことを伝える出土状況ではないかと考えている。

③13号建物出土遺物

13号建物からは、陶磁器や金属製品を中心に多くの遺物が出土した。前述の通り、木製品は少ない。

特筆すべき陶磁器に柳茶碗(13建No.32)がある。胴部外面には、施釉前に「孫兵衛」と鉄で書かれていた。生産地である美濃で、「孫兵衛」と書かれた陶器であることは明らかだ。

多量に同規格で焼成された陶磁器に、生産地で名前を記載した例は、管見の範囲では、11号建物で出土した11建No.4の置湯呑とこの柳茶碗(13建No.32)の2点程度である。11建No.4の置湯呑には、施釉前に生産地で「市左衛門」と書かれていた。ともに美濃、連房8小期である。

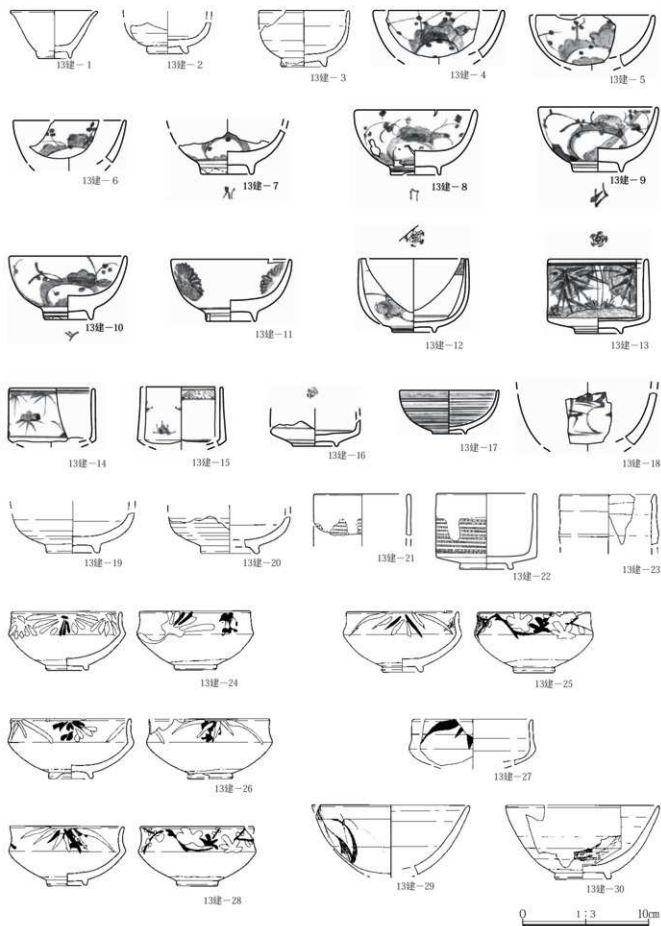
13号建物出土の陶磁器は天明期頃のものが多い。また染付碗や小皿、瓶の中には同規格のものが複数あり、組物と思われる。

13建No.64の小型筒形香炉の内面には灰が遺存していた。13建No.68の筒形香炉には、内外面に墨書がされていた。文字については判読することができなかった。

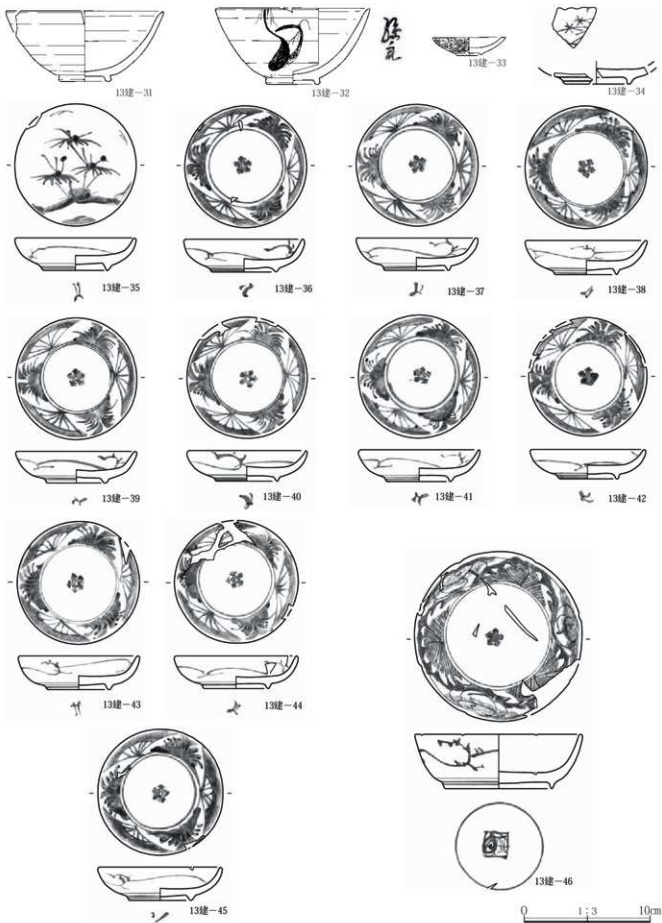
13建No.75は棹秤である。棹の中央部は欠損しているが、極めて良好に遺存していた。棹は木製で3種類の目盛りがあり、鉤や鍾を下げるための金具が三カ所につけられていた。目盛り部分は小さな釘が打ち込まれ、紙で文字のようなものも書かれていた。棹には漆の一部と思われるものが遺存しており、漆で仕上げられていたと思われる。鍾は六角形に削り面取りされ、四面には刻印、刻書が見られた。刻印は薄く判読困難だが、①は「守隨」と読める。②は棹にある文字と同じか。鍾は革袋に入れられていた。革袋端部には針穴が多数あり、袋状に縫われていたと思われる。棹も、入れ物に入れられた状態で出土している。

13建No.76はブラシ状の道具である。竹串と思われるものを差し込みブラシ状にしている。1建No.258と同様の道具と思われる。

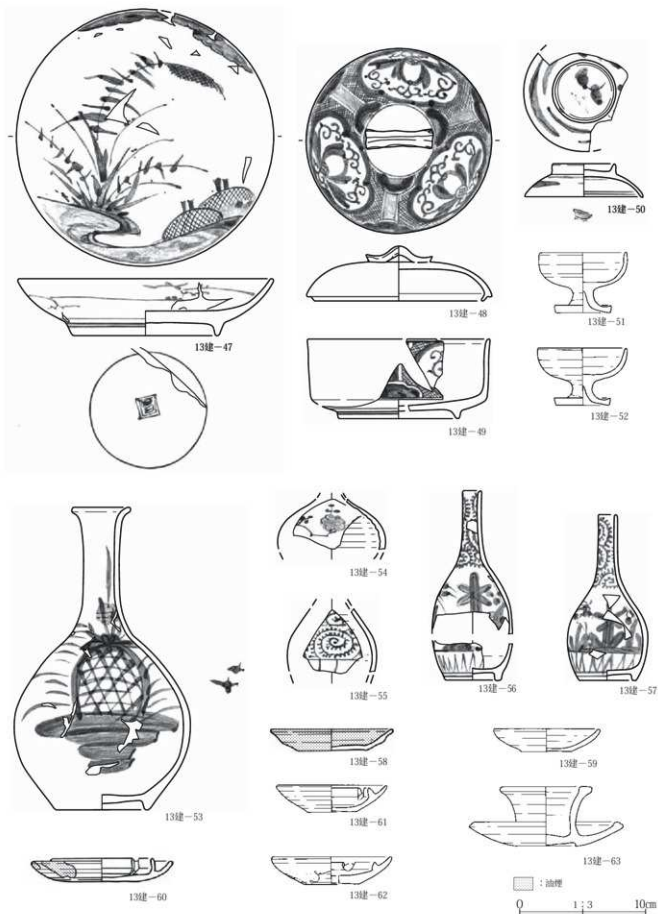
特筆すべき煙管に13建No.78の煙管がある。火皿部分には「刻み煙草」が詰められており、火をつける前の状態で遺存していた。詰められた刻み煙草の大きさは12mm



第238図 IV区13号建物出土遺物1～30

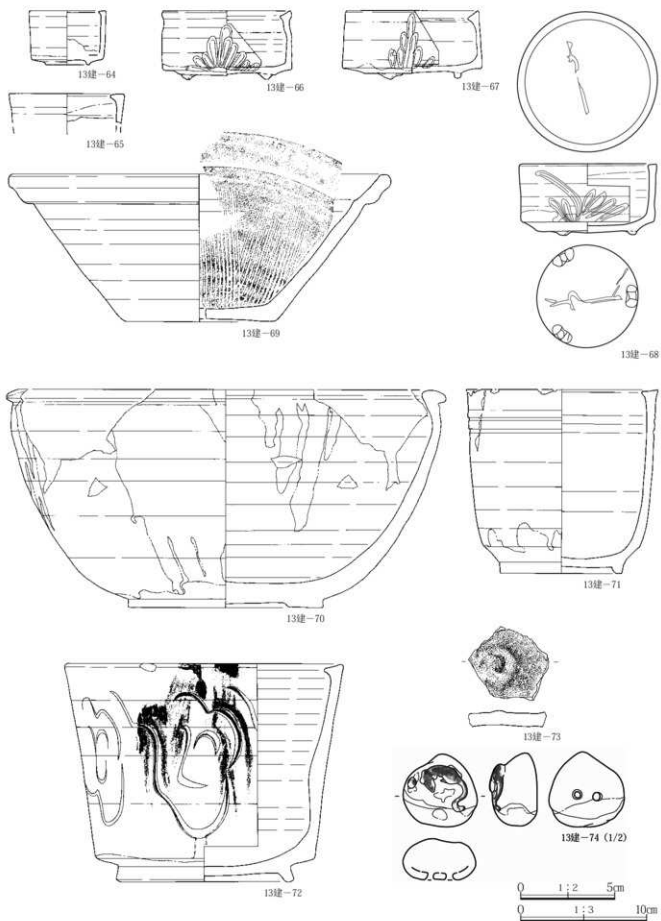


第239図 IV区13号建物出土遺物31～46

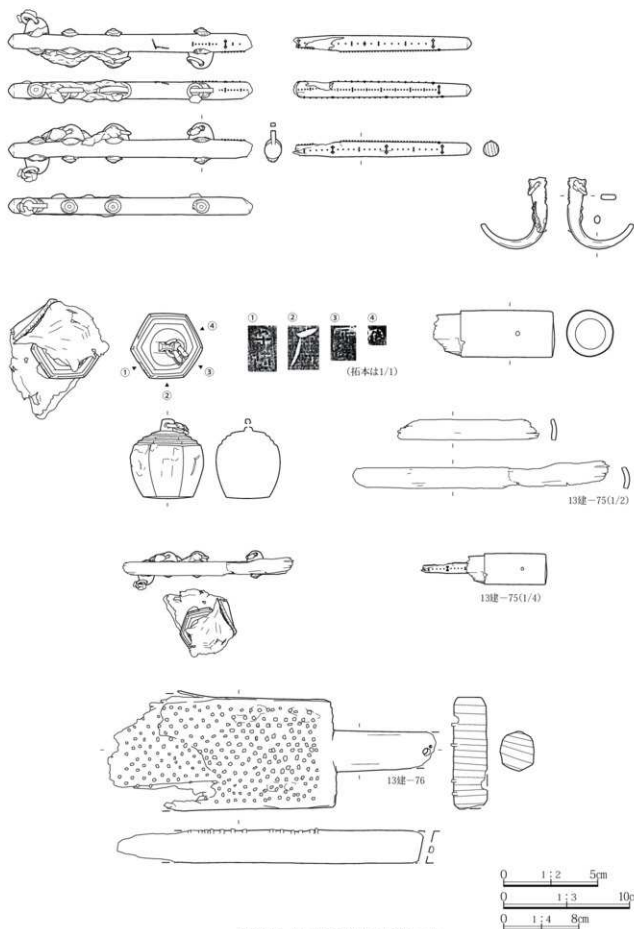


第240図 IV区13号建物出土遺物47～63

第3章 発見された遺物

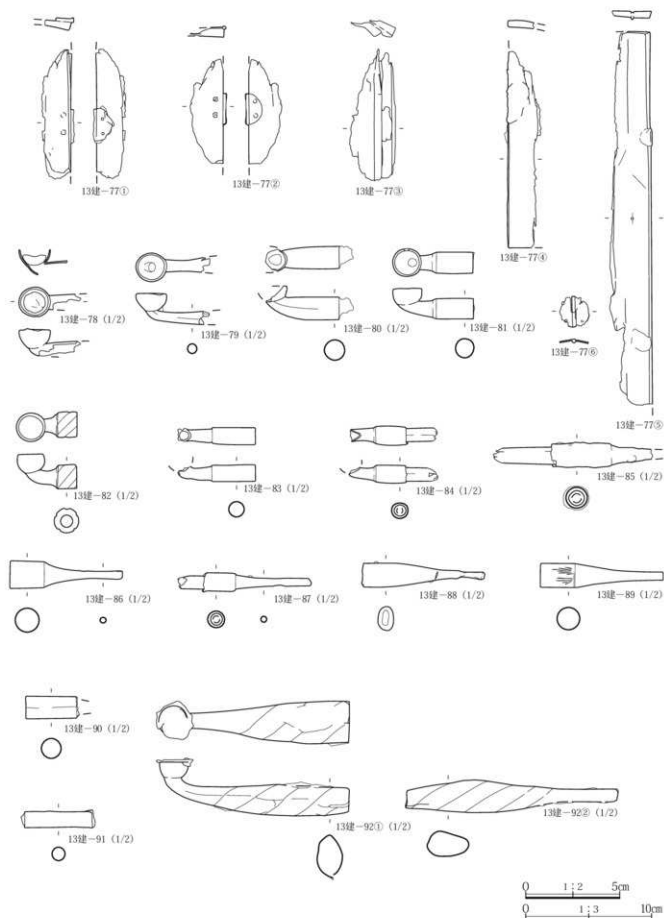


第241図 IV区13号建物出土遺物64～74

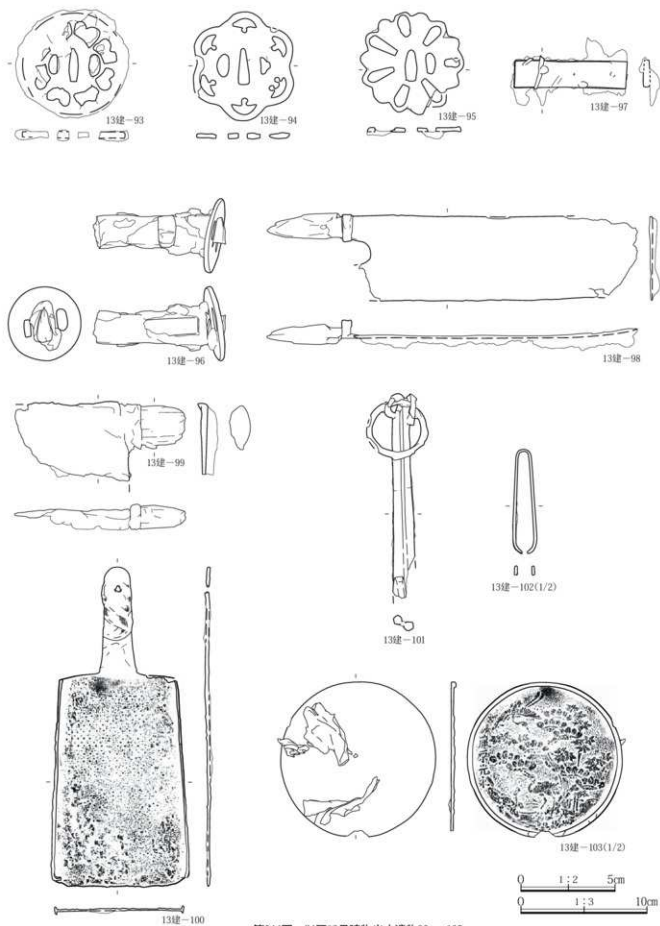


第242図 IV区13号建物出土遺物75・76

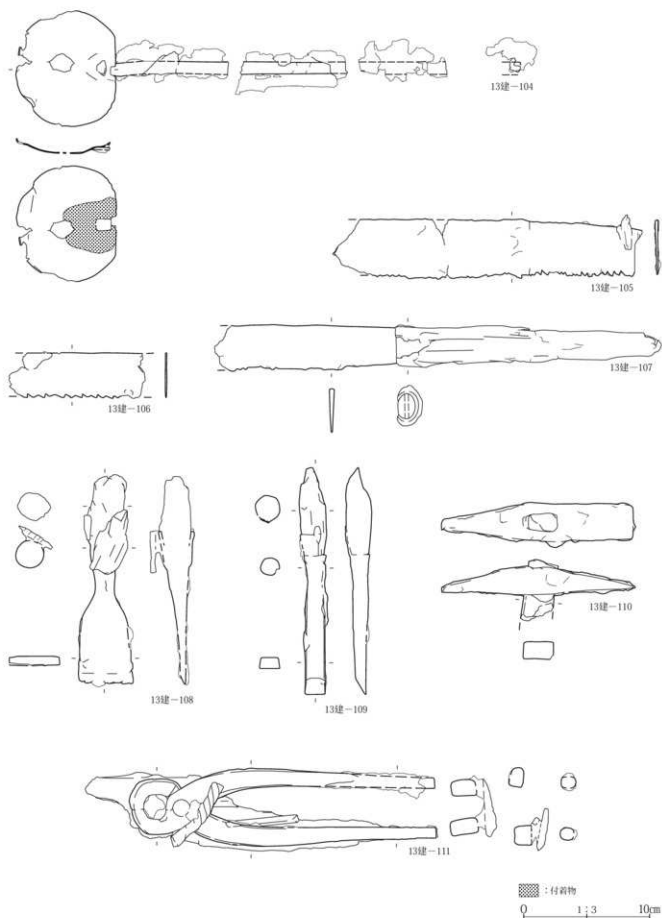
第3章 発見された遺物



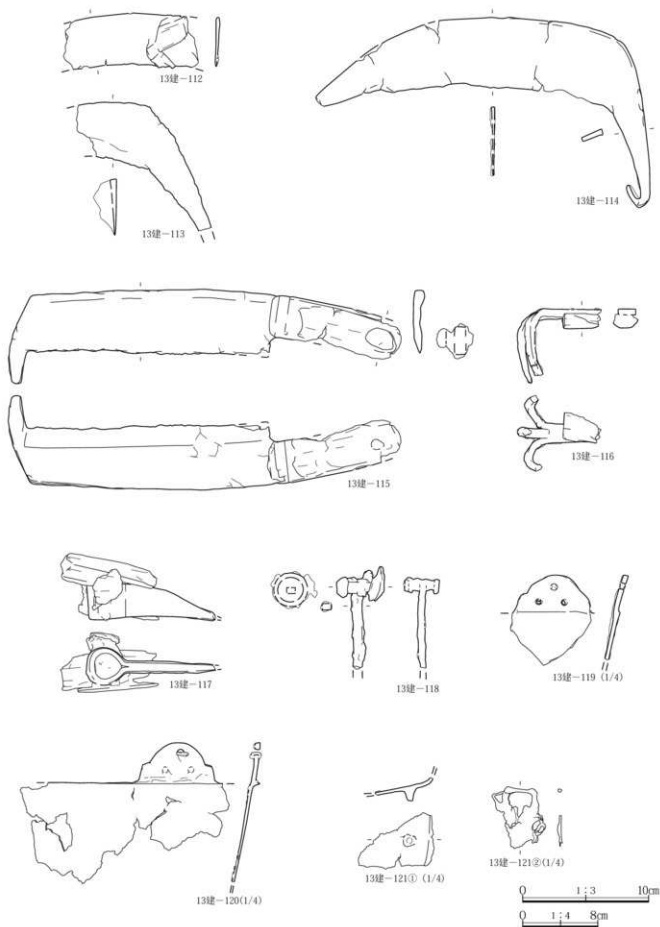
第243図 IV区13号建物出土遺物77～92



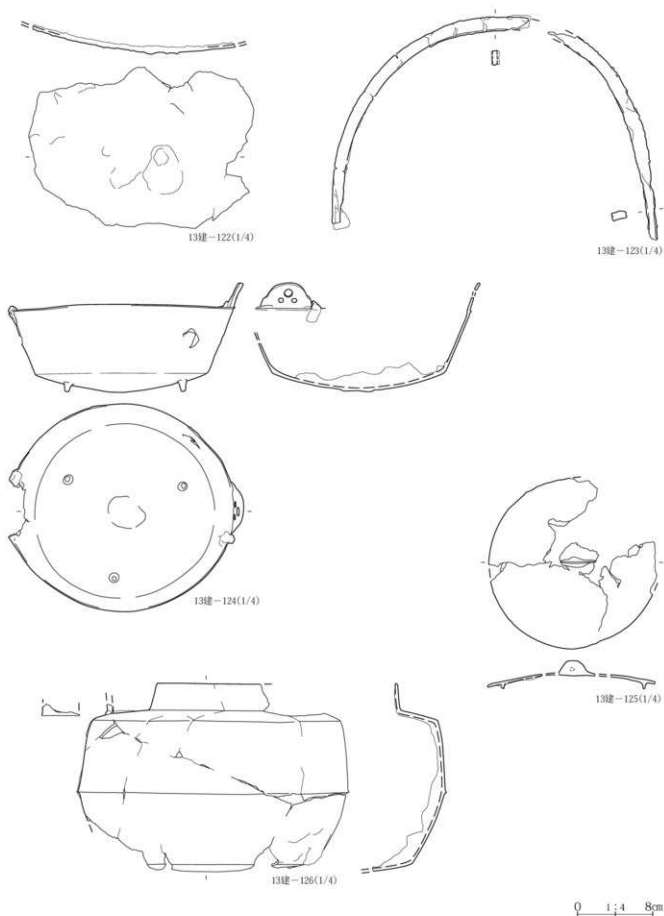
第244図 IV区13号建物出土遺物93～103



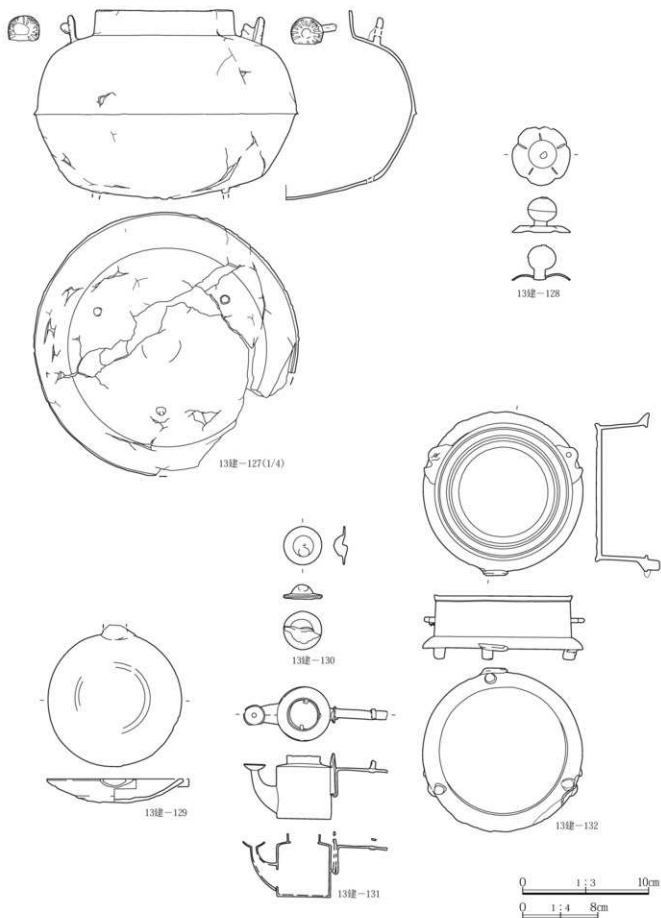
第245図 IV区13号建物出土遺物104～111



第246図 IV区13号建物出土物112～121

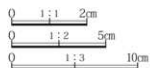
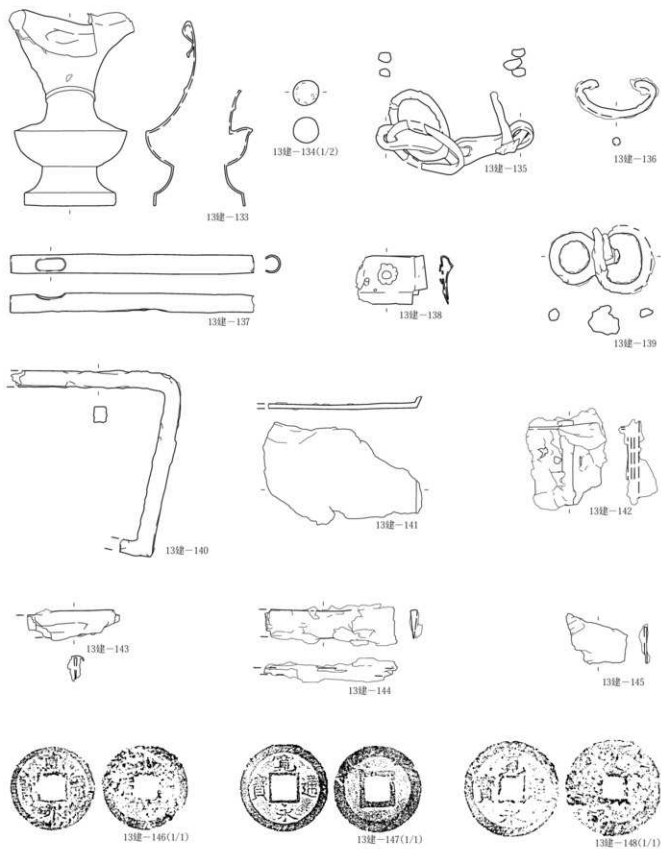


第247図 IV区13号建物出土遺物122～126

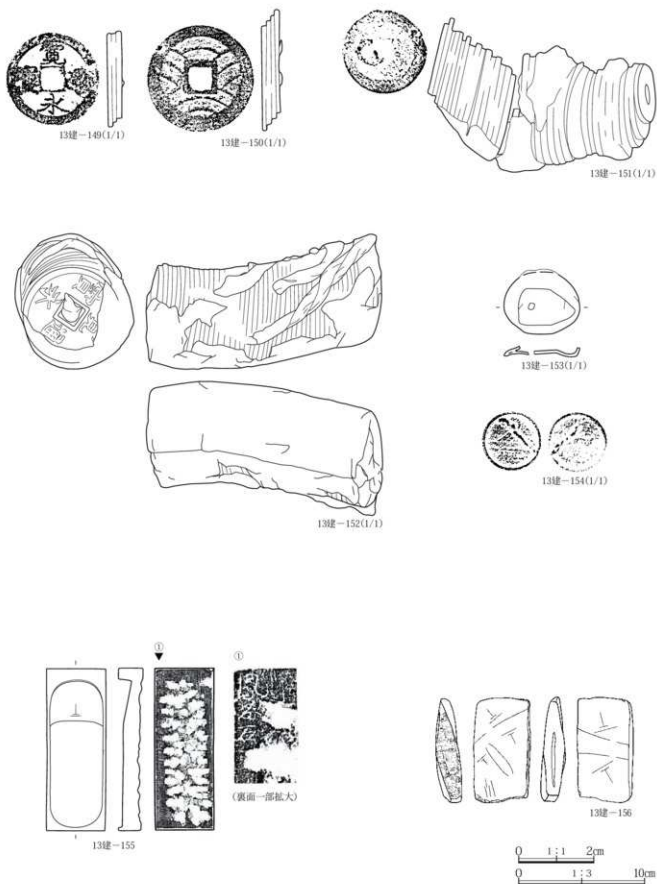


第248図 IV区13号建物出土物127～132

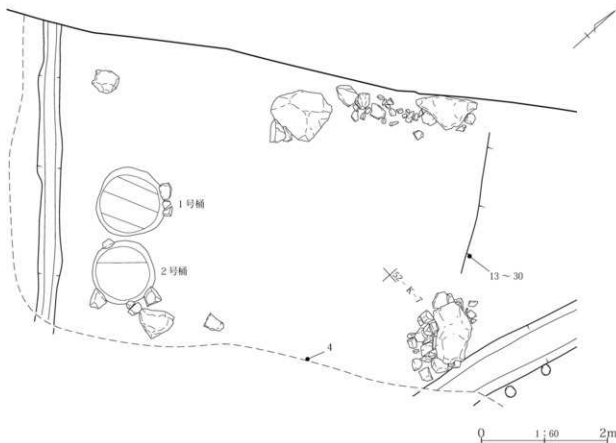
第3章 発見された遺物



第249図 IV区13号建物出土遺物133～148



第250図 IV区13号建物出土物149～156



第251図 IV区14号建物 遺物出土状況

×5mmほど。刻み煙草の幅は、確認できた範囲で0.37～0.69mmであった。

13建No.96の刀は柄が欠損し、刀身と鞘の一部と鐔が遺存していた。東宮遺跡より出土した刀は、7建No.55と13建No.96の2点のみである。

13号建物からは、他の建物よりも多くの道具類が出土した。鋸(13建No.105～107)、ノミ(13建No.108・109)、ペンチ状の矢床(13建No.111)、玄翁状の工具(13建No.110)とその種類も多い。

鉄鍋や茶釜も多く出土した。出土した鉄鍋には、欠損部に溶接による補修痕跡が確認された(13建No.121・124)。茶釜(13建No.126・127)は2点と、他の建物よりも多く出土している。

13建No.131は、葉缶状の形状をした小型の金属製品である。灯火具と思われるが、詳細は明らかでない。

13建No.151は銭網と思われる。端部に壺着していた銭貨は、周辺部を削り小さくした「寛永通寶」であった。周辺部を削り小さくした理由は明らかでない。

特筆すべき石製品に硯(13建No.155)がある。細長い短冊状の硯で、裏面上左の海部寄りに「鳳名石」、同左

下に「二」と刻書されていた。「鳳名石」は、硯の石材名と思われる。新城市教育委員会の岩山欣司氏より、『和調泉』の中に、「鳳来寺硯」の石材名として「鳳名石」があることをご教授して頂いた。出土した硯は、鳳来寺硯の可能性が高いと考えている。

鳳来寺硯は、鳳来寺参詣者の参詣記念と実用を兼ねた土産品として作られていたといわれている。13建No.155の硯も、新城市近辺より、東宮遺跡13号建物まで運ばれてきたものではないかと推測している。

(3) 14号建物(第251図、PL.50-1)

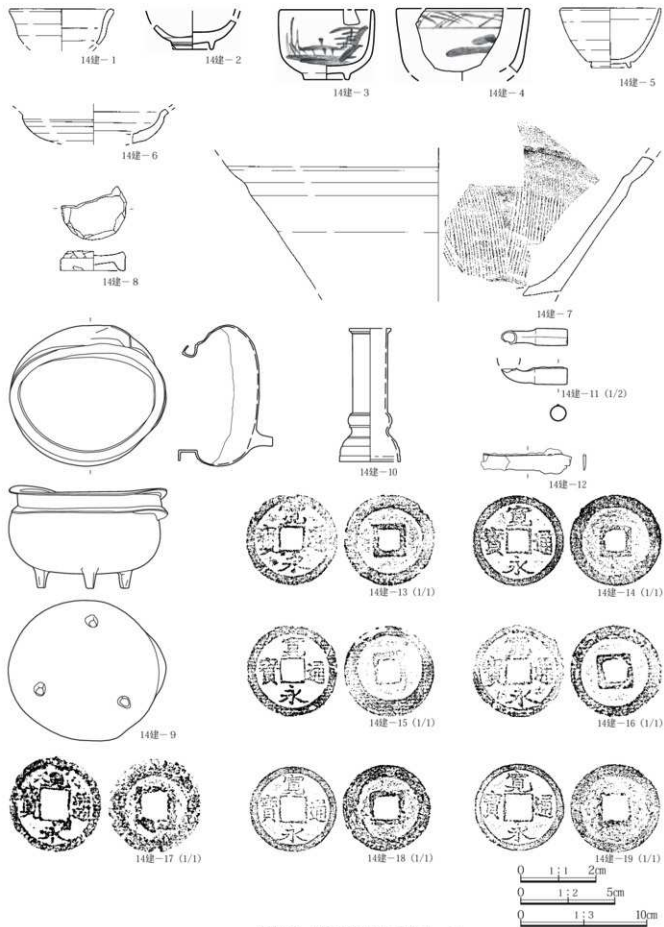
①14号建物の概要

14号建物は、7号屋敷跡の付属建物と思われる。13号建物の北東側に隣接しており、52区J・L-6・7、K-5・6・7グリッドに位置する。

北西側は調査区外、南東側は攪乱があり、14号建物の桁行や梁行は確認できない。確認できる範囲での長軸は11.4mほど、短軸は7.4mほどであった。

建物内には、遺構の形状から2個の桶が隣接して埋設されていたと思われるが、桶は確認できなかった。1・

第4節 IV区の調査成果



第252図 IV区14号建物出土遺物1~19



14建-20 (1/1)



14建-21 (1/1)



14建-22 (1/1)



14建-23 (1/1)



14建-24 (1/1)



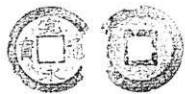
14建-25 (1/1)



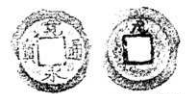
14建-26 (1/1)



14建-27 (1/1)



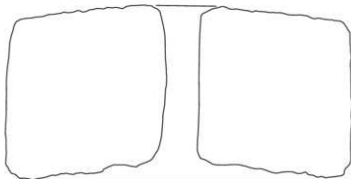
14建-28 (1/1)



14建-29 (1/1)



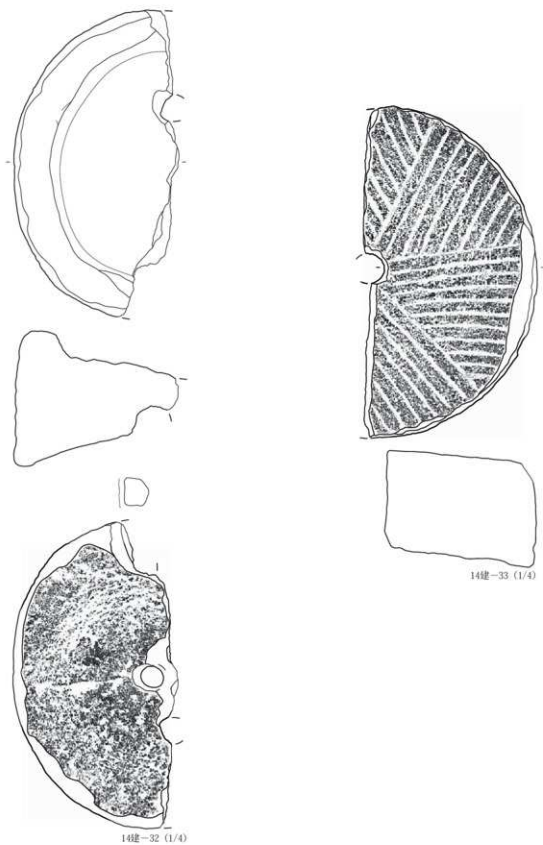
14建-30 (1/1)



14建-31 (1/4)



第253図 IV区14号建物出土遺物20～31



第254図 IV区14号建物出土遺物32・33

第3章 発見された遺物

2号桶の埋土は天明泥流堆積物であった。

建物は7号屋敷跡の付属建物と思われるが、建物の全域を検出することもできず、建物の性格を判断することは難しい。

14号建物は礎石建物であったと思われるが、桁行や梁行も分からないため、その構造を明らかにすることはできない。しかし、確認できる礎石2基では大型の礎石を使用しており、栗石で補強するような構造であった。他にも礎石と思われる礎は確認できたが、出土位置から攪乱等の影響を受けているものと思われる。南西側に見られる溝は雨落溝と思われ、14号建物或いは13・14号建物の雨落溝と考えられる。それ以外の雨落溝の痕跡は明らかでない。

②14号建物遺物出土状況及び出土遺物

14号建物からは比較的多くの銭貨が出土した。理由については明らかでない。

内面に灰を残す金属製の香炉(14建No. 9)が出土した。また、14建No.10は金属製の線香差しと思われ、僅かに線香が残っていた。ともに新しい時期の遺物とも考えられるが、出土位置からここでの報告とする。

(4) 8号石垣 (第255図、PL.50-3)

①8号石垣の概要

7号屋敷跡の北西側の境界を形成し、16号畑に隣接する。52区O-3・4、P-2・3・4、Q-2グリッドに位置する。

16号石垣と平面的にはほぼ直角に連結し、どちらも本来、一体の石垣である。なお、石垣の段上には、16号畑が耕作されている。石垣は上・下段の二重構造となっているが、上段部分は現況でほぼ露出していたのに対し、下段部分は天明泥流堆積物に埋没しており、As-A軽石に被覆されていた。

石垣は長さ12.0m、高さ最大3.2mの規模を測る。石垣は上・下段の二重構造となっており、下段は南西方向から北東方向へ直線的に走行するのに対し、上段は途中で鍵手状に折れ曲がりながら走行する。上・下段の中間部には踊場状の平坦面が形成されている。上段と下段との差異については、この形造的な差とともに、現況で露出していたか、或いはAs-A軽石に被覆され泥流に埋没していたかの差も認められ、造築時期の差も想定される。

つまり、下段は泥流被災以前、上段は被災後の造築となる可能性である。

石垣下段の最大段数は小礫が多いが20段ほど、野面積みで、石垣底部に大型の礫をおよそ横長に使用している。石垣上段の最大段数は同様に小礫が多いが13段ほど、野面積みで、石垣下部を中心にやや大型の礫を使用している。

②8号石垣遺物出土状況及び出土遺物

8号石垣出土遺物は僅かであり、他の屋敷跡のように、石垣側から多くの遺物が出土することもなかった。東宮遺跡の中でも標高の高い位置にあるため、天明泥流で大きく移動する遺物が少なかったためと考えている。

報告する陶磁器も、器種や年代から、7号屋敷跡或いは13号建物の遺物とも考えられる。

(5) 5号道 (第255図、PL.50-1)

①5号道の概要

5号道は、6号屋敷跡の北側、7号屋敷跡の東側にある。52区H-5・6、I-4・5・6、J-4・5グリッドに位置する。一段高い位置にある7号屋敷跡から、6号道へと延びる坂道であり、南西方向から北東方向へ傾斜した坂道である。検出された長さは約11.2m、道幅は2.5mほどの直線的な道である。

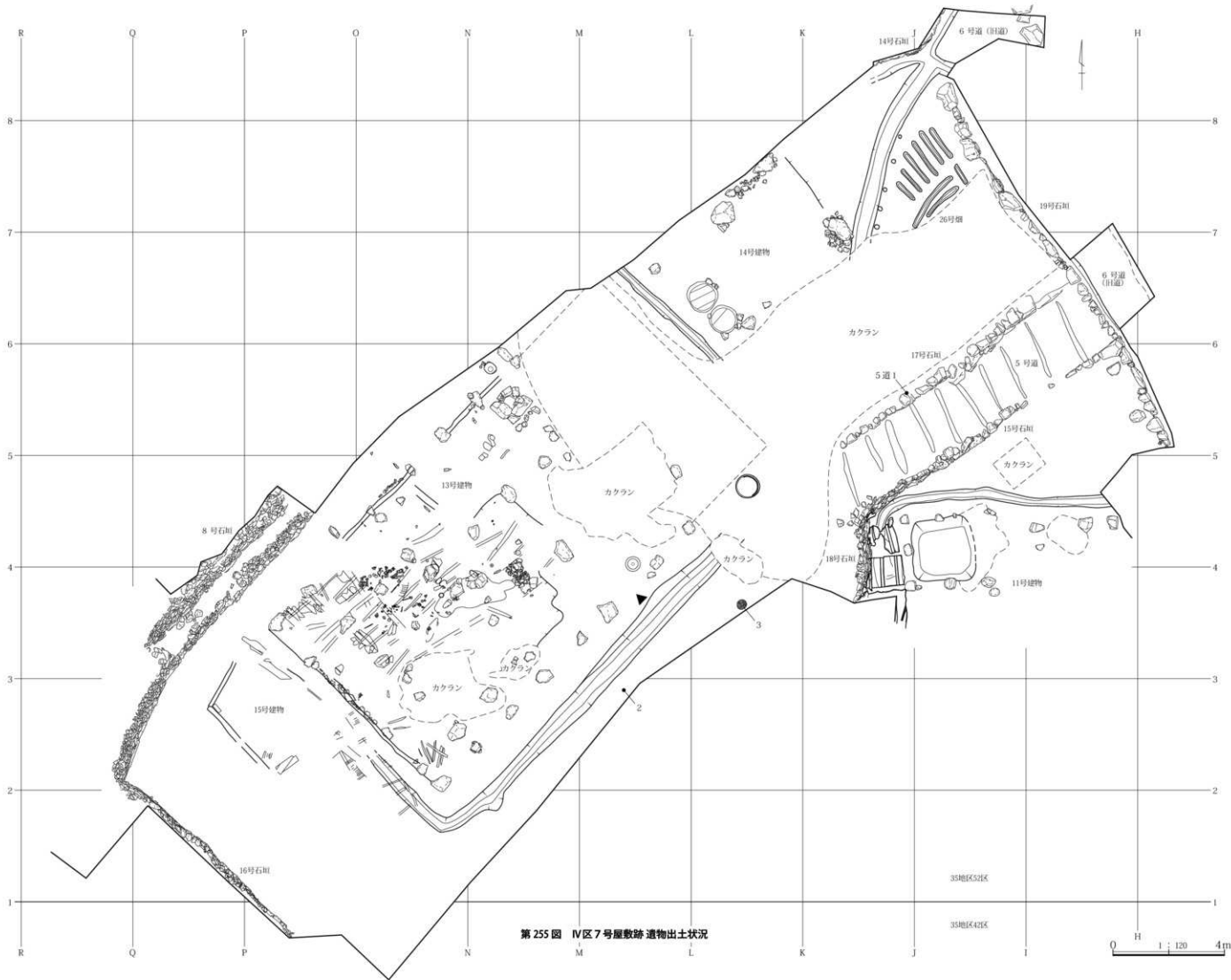
道の両辺には、平行するように15・17号石垣がある。両石垣は、6・7号屋敷跡の地境であるとともに、傾斜地を平坦に造成した際の土止めの役割も担っていたと思われる。

5号道では、ほぼ等間隔に溝状の落ち込みが検出された。溝の間隔は60～110cmほどであった。10カ所ほどで確認された溝は浅く、南北方向に段差のような落ち込みみとして検出された。

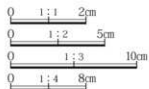
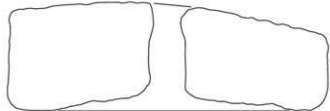
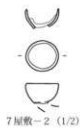
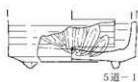
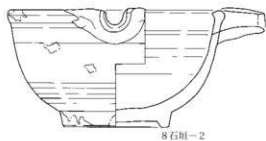
As-A軽石は道全体で確認できたが、10カ所の落ち込み部分では軽石が見られなかった。傾斜角度が11°ほどの坂道ではあるため、雨などで滑らないようにするため階段状の段差をつけていたとも考えられる。溝状の落ち込みにはAs-A軽石が見られないことから、滑り止めの木などが敷設されていたことも想定されるが、腐蝕或いは攪乱によるためか欠損しているものと考えている。

②5号道遺物出土状況及び出土遺物

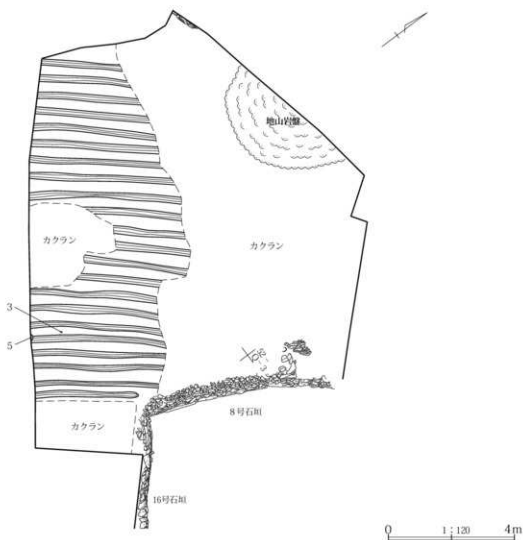
5号道出土遺物は僅かであった。香炉や銭貨を報告し



第255図 IV区7号屋敷跡遺物出土状況



第256図 IV区8号石垣1・2、5号道1・2、7号屋敷跡1~3出土遺物



第257図 IV区16号畑

たが、7号屋敷跡の遺物とも考えられる。

見できた。

(6) 7号屋敷跡遺物出土状況及び出土遺物(第255図)

①7号屋敷跡遺物出土状況

東宮遺跡において、7号屋敷跡は比較的標高の高い位置にある。天明泥流堆積物も薄く攪乱は多いが、天明泥流で大きく移動した遺物は少なく、原位置近くから遺物が出土しているものと思われる。

仮に、被覆する表土及び天明泥流堆積物の保水性・保湿性が1・2号屋敷跡のように高いものであれば、13号建物では、原位置近くから多数の遺物が出土し、建物での道具の使用状況等についても詳細に検討できたと思われる。

②7号屋敷跡出土遺物

7号敷No. 1は内耳土器である。多くが近世遺物で占める7号屋敷跡においても、僅かであるが中世遺物が散

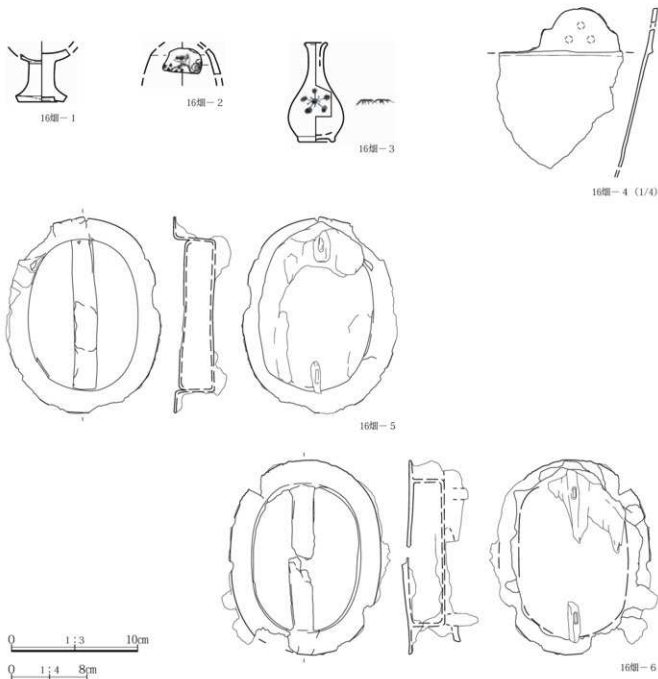
5 その他の遺構

(1) 16号畑(第257図、PL.50-4・5)

①16号畑の概要

7号屋敷跡西側にあり、52区Q-1・2、R-1・2・3、S-2・3グリッドに位置する。段丘崖から段丘面へと傾斜が緩やかに転換する位置に拓かれた畑である。畝サクは等高線にほぼ平行して走行し、高低差は明確である。畝幅は28cmと、比較的広い畑である。サクにAs-A軽石が堆積していた。畑を被覆する表土及び天明泥流堆積物の厚さが比較的小さいため、畑の東部分には攪乱が侵入し、その大部分が失われている。

畑の南西側には沢が東流しており、天明期においても同様であったと思われる。そのため、畑は南西側に大きく広がらないものと考えている。またこの沢は、4・5



第258図 IV区16号畑出土遺物1～6

号屋敷跡の間を東流することを追記しておく。

②16号畑遺物出土状況及び出土遺物

16号畑は、7号屋敷跡西側1段上に位置しており、7号屋敷跡の遺物が混在するとは考えにくい。出土した陶磁器は、16号畑或いは調査区外の屋敷跡で使用されていたものとも思われる。

出土遺物は僅かだが、実用的な道具は鉄鍋ほどで、他の遺物はやや特異なものが見られた。特筆すべき遺物が楕円形の金属製品（16畑No. 5・6）2点である。中央に橋状の取手がつき、裏面には2カ所、釘状の突起が見

られた。裏面には木質部が僅かに遺存していたことから、扉の取手部分とも思われる。詳細は明らかでないが、仮にこれを扉の取手とすると、蔵にある大型の扉につくほどの規模である。

(2) IV区遺構外、遺構外出土遺物

本報告書においては、可能な範囲で出土遺物の多くを掲載し、必要に応じて悉皆調査成果も掲載した。また、出土地点が確認できる遺物については、各遺構の範囲を想定し、天明泥流の流入方向も考慮して、可能な限り遺構に帰属させて報告している。しかし、限られた整理期間の中で判断できなかった遺物も多く、また調査所見等がないことから遺構外で報告した遺物も見られた。

ここで報告するIV区遺構外及び各区に帰属できなかった遺構外出土遺物についても、同様の理由から遺構に帰属できなかったものである。

IV区遺構外からは、連房8か9小期の灯火台が出土した。天明期頃の陶器であり、IV区の建物或いは屋敷跡に帰属すべき遺物と考えられる。

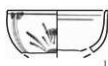
各区に帰属できなかった遺構外出土遺物に、陶磁器がある。多くは肥前系または瀬戸・美濃系の陶磁器であり、外面に雪輪草花文が描かれた染付碗（遺構外No. 2）のように、他の屋敷跡或いは建物においても出土例のある陶磁器であった。また、出土遺物はI区が多く、遺構外として報告する遺物も、I区の屋敷跡や建物に帰属されるものが多いと思われる。

一方で、肥前と思われる色絵花瓶（遺構外No. 6）口縁部片のように、他の遺構で出土例のない色絵も確認された。同様に、連房7小期の有耳壺（遺構外No. 7）や18世紀後半の瀬戸・美濃系呉須絵皿（遺構外No. 4）についても、他の遺構での出土例はない。

東宮遺跡では、脆弱な木製品や金属製品も多く出土した。その中には、報告すべき遺物もあると思われるが、脆弱な遺物のため保存処理ができなかったものや、限られた整理期間の中で報告できなかった遺物もあることを追記しておく。



IVK-1



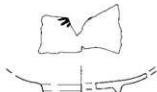
1



2



3



4



5



6



7



8



第259図 IV区遺構外出土遺物1、遺構外出土遺物1~8

第5節 原始・古代の出土遺物

東宮遺跡からは、7カ所の屋敷跡、畑27カ所、石垣19カ所、道6カ所、溝9条、溜池1カ所、集石2カ所、井戸1基、墓坑を含む土坑8基が検出されている。その多くは近世遺構であり、重複する遺構も少なく、極めて良好な遺存状況で検出されている。

中世以前の遺構に59区1号土坑や60区2号土坑などあるが、散見できる程度である。人骨や渡来銭が出土したことから墓坑と思われるが、中世以前の遺構は僅かであった。

東宮遺跡では、近世遺物は極めて良好に、また多量に出土しているが、中世以前の遺物は散見できる程度である。中世遺物は、墓坑から渡来銭、墓坑以外からは内耳土器や青磁鎗蓮弁文碗などの小破片が出土する程度である。しかし、中世遺物の検出された調査区以外からも、中世遺物の出土は確認されている。

検出された7カ所の屋敷跡は、緩やかな傾斜地を造成し、平坦にして屋敷としている。これらの屋敷が造られたことで、中世以前の遺構が壊された可能性も考えられる。少なくとも、中世遺物の出土状況からは、より多くの遺構の存在が考えられる。中世遺物の詳細については、出土地点ごとに報告した通りである。

東宮遺跡において、原始・古代と判断された遺構は検出されていない。しかし、縄文時代を中心に弥生時代前半頃までの遺物は出土しており、原始・古代の遺構が中世遺構や屋敷などの近世遺構により壊されたことも考えられる。縄文土器出土状況の詳細については、表9「東宮遺跡出土縄文土器総量一覧表」を参照して頂きたい。

本節では、縄文時代の遺物を中心に、東宮遺跡における原始・古代について述べる。原始・古代と判断された遺構は検出されていないため、出土遺物を中心に報告する。東宮遺跡は天明記流下より良好に検出された7カ所の屋敷跡を主とする近世遺跡である。出土した縄文土器は少なく、遺構も検出されていないため、ここでは縄文土器を中心に報告し、石器の一部については写真及び観察表のみの報告としている。

東宮遺跡より出土した縄文土器を概観すると、早期後半頃より確認できる。中期の出土量が多く、晩期末まで

あり、弥生土器も僅かに散見できる。

縄文前期では、諸磯b式期が多く63点を数える。そのうちの40点は、23号トレンチから出土している。諸磯b式期の遺構が、23号トレンチ付近にあったことが考えられる。またⅢ区からは、前期の縄文土器も比較的多く出土しており、Ⅲ区に前期の遺構が存在した可能性も考えられる。

縄文中期では、Ⅰ区から多くの土器が出土し154点を数える。そのうち、勝坂式期が23点、焼町式期が28点、加曾利EⅠ式期が24点とやや多い。Ⅰ区に、これらの時代の遺構が存在していた可能性も考えられる。Ⅲ区では、加曾利EⅢ式期が32点を数え、そのうち31点は25号トレンチから出土している。加曾利EⅢ式期の遺構が25号トレンチ付近にあったことが考えられる。

縄文後期においてもⅠ区から多くの土器が出土し、49点を数える。しかし、特別に多くの遺物が出土した地点や時期は確認できなかった。縄文晩期以降についても同様である。

Ⅳ区から出土した縄文土器は僅かであった。遺構が希薄であるためか、Ⅳ区が屋敷跡を中心とする範囲であり、屋敷を造成した結果、遺構が壊された可能性も考えられる。

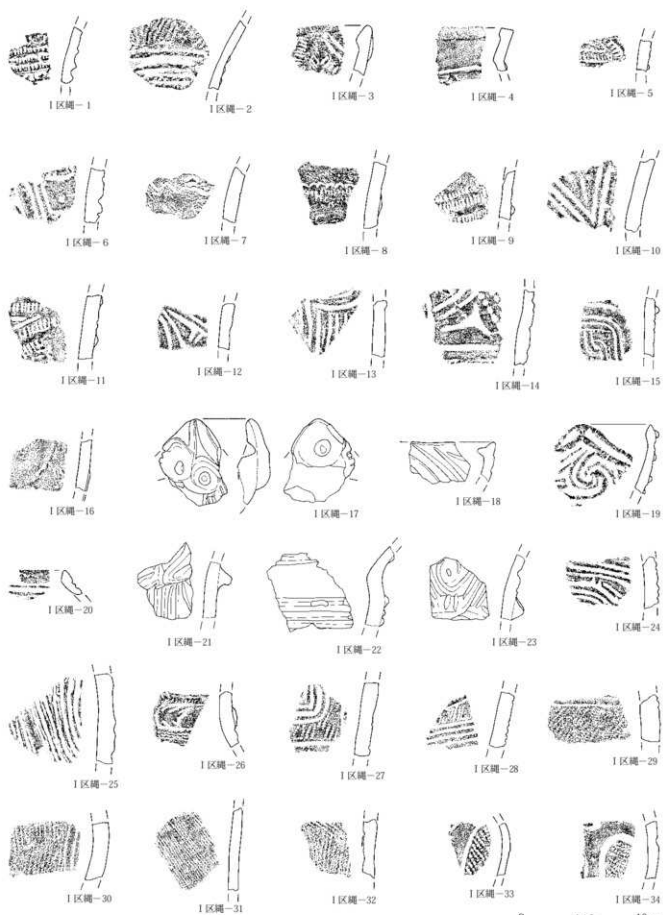
石器は、石鏃や打製石斧、磨石や敲石など22点を報告している。掲載した石器の中には、一部中世や近世の石製品が含まれている可能性もあるが、東宮遺跡では各区より縄文土器が出土しており、磨面を有するものについては縄文時代の石器と考え報告する。

実測図や掲載した写真以外にも、Ⅰ区では黒曜石の石鏃1点、同石核1点、同未製品2点の他に黒曜石の剥片・破片6点などが出土している。縄文中期の土器も多く出土しており、同様に石器も多く出土したものと考えられる。

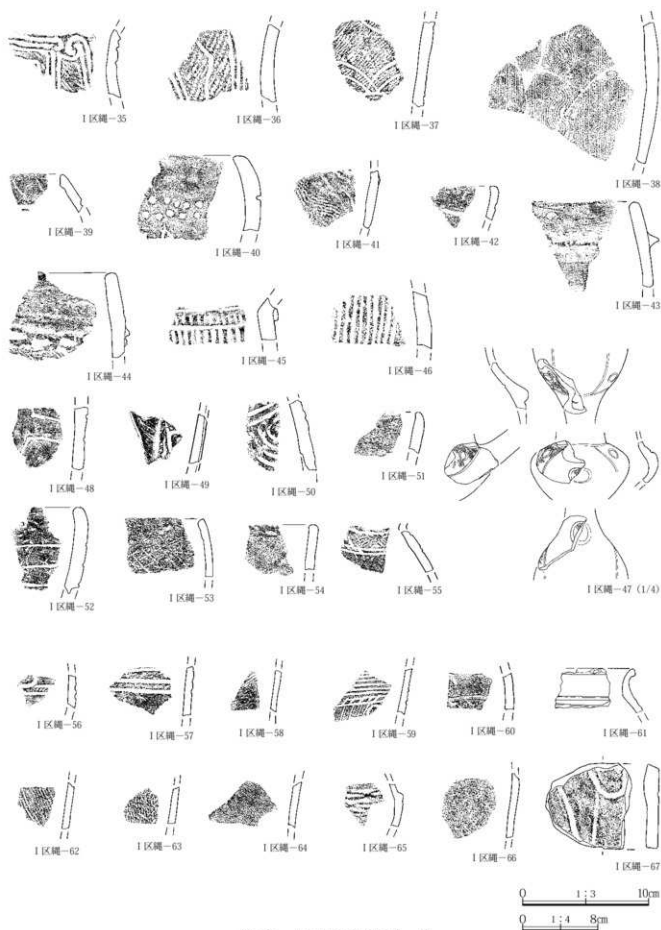
Ⅱ区では黒曜石の剥片・破片が21点、同加工痕や同未製品（石鏃未成品）が出土した。

Ⅲ区でも多くの縄文土器が出土したためか、石器も比較的多く確認された。Ⅲ区出土の石器は、黒曜石の石鏃未製品1点、同石核2点、同剥片・破片32点を数える。

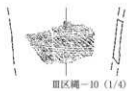
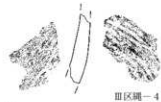
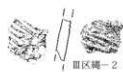
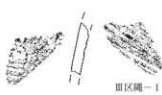
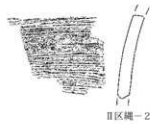
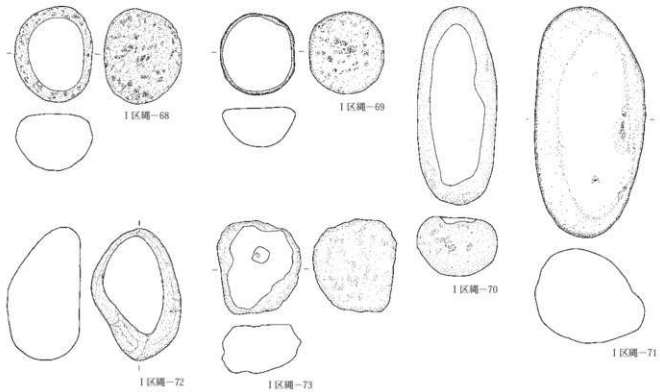
Ⅳ区では珪質変質岩の加工痕や打製石器、黒曜石の剥片19点などが出土した。



第260図 1区出土遺物(縄文) 1~34

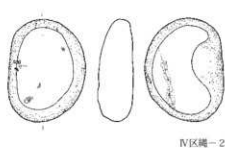
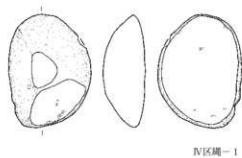
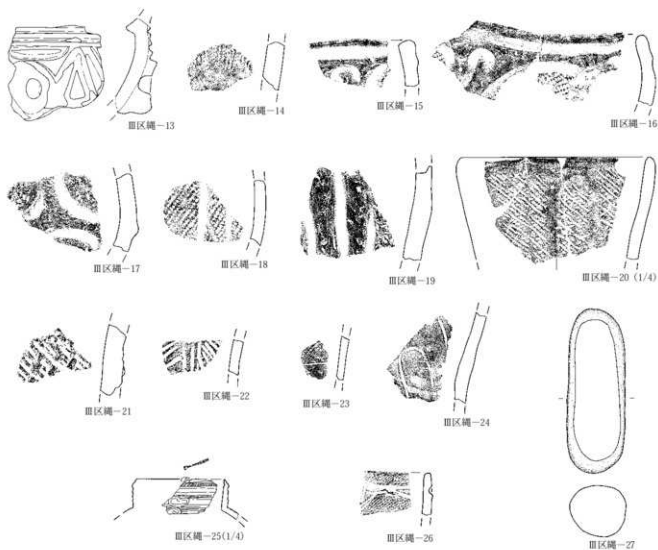


第261図 I区出土遺物(縄文)35～67



第262図 Ⅰ区68～73、Ⅱ区1～3、Ⅲ区1～12出土遺物(縄文)

第3章 発見された遺物



第263図 III区13～27、IV区1・2出土遺物(縄文)

第4章 調査の成果とまとめ

東宮遺跡は、数々の偶然が重なり合うことで、これまでに例のないほど良好に、天明三年(1783年)新暦8月5日(以下日付は新暦で表記する)をそのままに遺構や遺物が遺存している。原位置或いは原位置近くで出土した建築部材や多様な遺物からは、当時の村落景観や生活様相までも詳細に検証することができ、極めて希少な遺跡といえる。また、出土した遺構及び遺物は、天明泥流で一度に被覆されており、時期と地域が限定できる点でも貴重である。

東宮遺跡から検出された7カ所の屋敷跡からは、6軒の主屋と複数の付属建物、そして酒を搾る槽間跡を持つ酒蔵が確認された。同時代の屋敷跡であっても、それぞれに違いがあり、また共通点もある。これは出土した種実等でも同様と考え、その成果をまとめ報告している。

礎石上には大引や根太、床板までもが原位置を保ち、極めて良好に遺存していた。樹種同定成果からは、樹木の特性を活かして使用する箇所を変えていることが確認できる。一方で、隣り合う床板で異なる樹種を使用していることも確認された。遺構重複や礎石間の寸法、建築部材の樹種から考察される建物の増改築についても報告している。

出土陶磁器については悉情的な調査を実施した。これは、出土状況が極めて良好であり、また出土した多様な遺物の中で、陶磁器の編年研究が最も充実しているためである。これまでに例のない遺構の検出状況や多様な遺物を解釈する上で、共伴する陶磁器の年代観が基礎的な支えになるものと判断したためである。検出された各屋敷跡には重複する近世の遺構があり、建物跡にも同様に増改築の痕跡が確認されたが、これらの時期差は僅かであろう。遺構を考察する上でも、出土陶磁器の悉情的な調査成果は重要な役割を果たした。

脆弱な遺物も極めて良好に、多量に遺存していた。その中には、これまでに類例のない遺物も見られた。特に灯火具関連については、充実した内容で出土している。木製の行灯(1建No.225)や圧搾機(4建No.86)が出土したが、特に圧搾機は、その付着物と灯火皿の付着物

とを分析し同様の成分であったことから、灯火皿に使用された油を搾る「搾油機」であることが確認できた。

出土遺物には、未製品や未使用に近いもの、廃棄寸前まで使用されたものまで様々な状態のものがある。漆継で補修された陶磁器や、欠損部を溶接により補修した鉄鍋類など、多様な遺物に様々な補修痕跡までもが確認された。その数量も含め報告する。

これら貴重な調査成果は、東宮遺跡の立地及び被覆する天明泥流の様相に大きく左右されたものであった。被覆する天明泥流の勢いがもう少し強く、そして厚いものであれば、検出された全ての成果は押し流されてしまったであろう。また、本遺跡が平野部に立地していれば、遺構出土遺物の多くは混在してしまっただけと思われる。これに加え、湧水等により脆弱な遺物までもが良好に遺存したことや、その後の攪乱も僅かであったことが、多くの成果を確認できた前提となっている。

本章では、東宮遺跡から得られた多様な成果を、第1節で「遺構」、第2節で「遺物」、第3節で「文献や伝承等」、第4節で「自然科学分析」におよそ大別し報告する。また、発掘調査及び整理作業の中で、多くの方々へ専門的な見地からご教授して頂いた。これらの成果についても掲載している。詳細については、各節において後述する。

第1節 東宮遺跡出土の遺構について

東宮遺跡からは、7カ所の屋敷跡や石垣、畑跡などが検出され、各屋敷跡では主屋や付属建物、酒蔵等が確認された。建物の中には床板までもが原位置を保ち遺存しており、これほど良好な建物が複数検出された出土例はこれまでになく、極めて貴重な資料である。また、検出された遺構は天明泥流で一度に被覆されており、時期と地域が限定できる点でも極めて良好な資料といえる。これら検出された遺構の詳細な成果については、『東宮遺跡(1)―遺構・建築部材編―』(以下「東宮遺跡(1)」と略す)を参照して頂きたい。

本節では、検出された遺構についての成果とまとめを

報告する。東宮遺跡の成果は、東宮遺跡を被覆する天明泥流の様相が大きく影響している。第4章第1節1では、その前提となる天明泥流の様相について報告する。

良好に遺存した遺物の中には、収納されたまま出土した遺物も見られた。第3章で詳述できなかった、5号建物出土の樽や箱に収められた遺物とその出土状況について報告する。

同様に天明泥流で被覆された屋敷跡ではあるが、出土遺物は様々であった。出土した種実等についても同様と思われ、各屋敷跡の相違点等を概観する。

『東宮遺跡(1)』では、建築部材樹種同定の成果を報告した。そこには、樹木の特性を活かした使用状況とともに、建物の増改築の痕跡までもが確認された。良好に遺存した1・2・4・5号建物での成果を報告する。

また、出土陶磁器の悉皆的な調査成果や遺構の重複関係、建築部材の樹種等から、村落の変遷や建物の増改築の様相についても言及する。

検出された建物について、建築学的な知見からの復元案など、専門的な見地からの成果についても報告する。

本節の内容には、『東宮遺跡(1)』とは異なる計測値、解釈もあるが、これは異なる見地からの解釈のためと考えて頂きたい。発掘調査及び整理作業の中で確認された成果については、『東宮遺跡(1)』の通りである。また、本節では主に遺構について報告するが、出土遺物や自然科学分析の成果も踏まえ言及している。遺物や分析成果の詳細は、後述しているので参照して頂きたい。

1 東宮遺跡を被覆する天明泥流と遺物出土状況

はじめに

東宮遺跡からは、良好な遺存状況の建物跡が検出され、多様な遺物が数多く出土している。これらの出土遺物が、当時の生活のどの様な場面、状況を反映しているのかを知るためには、浅間山噴火活動の概要と、本遺跡を被覆する天明泥流の様相を理解することが重要と考える。天明三年(1783年)新暦5月(以下新暦で表記)より始まる浅間山噴火活動はどの様な経緯をたどるのか、その概要と、東宮遺跡の遺構や遺物の出土状況から推測される、遺跡を被覆する天明泥流の様相について言及したい。

天明三年の一連の浅間山噴火活動は、その詳細につい

ては諸説ある。ここでは、東宮遺跡を理解する上で浅間山噴火活動の概要を知ることとを目的とするため、諸説については言及していない。

1. 天明三年浅間山噴火活動の経過

東宮遺跡は、長野原町大字川原畑字東宮にあり、高間及び白根の両山系と菅峰に挟まれた吾妻川流域地帯に位置している。本遺跡は、主に、吾妻川中位河岸段丘面上に立地した緩やかな傾斜地にあり、吾妻川河床よりおよそ40mの比高差を有する。

浅間山は、長野県と群馬県の県境に位置し、古い方から黒斑山・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。浅間山は、本遺跡の南西側約23kmの距離にあるが、両山系に挟まれた地形のため遺跡から浅間山を臨むことはできない。本遺跡は、河岸段丘面上に立地し、緩やかな傾斜地に位置する。そのため、屋敷地は平坦に整地され、石垣などで土止めをした後、建物が建てられたと考えられる。

天明三年(1783年)浅間山噴火活動は、5月9日頃よりはじまったと思われる。噴火活動はその後断続的に続き、一時鎮静化することもあったようだが、7月下旬から8月に入ると激しさを増していった。天明三年の噴火活動による降灰は、浅間山の東側、碓氷郡や高崎方面に多くの被害をもたらした。東宮遺跡においても被覆する天明泥流下からAs-A軽石が確認されたが、降灰被害については碓氷郡や高崎方面が甚大であったと思われる。東宮遺跡24号畑からは栽培されていた作物の一部が検出され、1号建物からは蚕繭が出土した。浅間山噴火による影響でこの地を去ることなく、8月5日まで日常生活を続けていたことが窺える。

天明三年8月5日午前10時頃、浅間山はそれまでの噴火活動で最大級の噴火をする。これまでにない甚大な噴火による噴出物や崩れた山体は、その一部が北側に流れ下ったと思われる。浅間山北側には吾妻川が東流するが、この吾妻川に流れ込み天明泥流が発生することになったと考えられる。

吾妻川を流れ下る天明泥流は、流域の村々に甚大な被害をもたらしながら、長野原町にある吾妻渓谷に流れ込む。岩や樹木、建物を巻き込んだ天明泥流は、狹隘な箇所もある吾妻渓谷で詰まり、逆流したといわれている。

その後、吾妻渓谷を抜けた天明泥流は、利根川に合流、利根川流域の村々にも甚大な被害をもたらしながら、江戸や鎌倉にまで流れ着くこととなる。

天明三年の浅間山噴火活動は、8月5日の大噴火後も鎮静化せず、10月頃ようやく鎮静化していった。

2. 東宮遺跡を被覆する天明泥流の様相

東宮遺跡は吾妻川左岸に位置し、現在の吾妻川からの平均的な比高差が約30～50mの、主に吾妻川中位河岸段丘面上に立地する。天明三年8月5日午前10時頃、浅間山が大噴火し、天明泥流が本遺跡を被覆するまでにどのくらいの時間を要したのかは明らかでない。同地に泥流が到達した様子を伝える文献もなく、後述するが、天明泥流は複数回に亘り到達しており、どの時点の泥流について記されたかにより異なる見解になることも考えられる。東宮遺跡に泥流が到達した時間の目安として、下流の中之条町で約1時間後に、群馬県中央部に位置する玉村町五科付近で午後2時頃に泥流が到達したとの記録も残るが、同様の理由からおおよその到達時間と考えたい。

東宮遺跡は川原畑村の一部である。『浅間山津波実記』には、川原畑村の天明泥流による被害を「一河原畑 廿七軒流 四人死」と記されている。ここで記載されている21軒は主屋と思われる。本遺跡からは、7カ所の屋敷跡から6軒の主屋と伴う複数の付属建物、1軒の酒蔵が検出されており、被災した川原畑村の3割ほどが検出されたことになる。

東宮遺跡の建物跡は、礎石上に大引、根太、床板がおおよそ原位置を保った状態で出土している。雨落溝やAs-A軽石の有無により、各建物の屋根の形状まで確認することもできる。これらの出土状況から、小規模な4号建物については、天明泥流の営力により僅かに移動していたことが確認された。

遺物の出土状況、1号倒木や4号建物の検出状況から、東宮遺跡を被覆する天明泥流は、おおよそ南東から北西方向に流入したものとと思われる。これは、吾妻川の流下方向とは逆方向であり、近隣（吾妻渓谷か）で逆流した天明泥流が本遺跡を被覆したものと推測している。

天明泥流の詳細は、1号屋敷跡の遺構及び遺物の出土状況からも確認できる。1号建物には床板が遺存していたが、建物北側にある1号床板及び竈北側の板を剥が

すと楕円形の小さな菌の痕跡があり、中から蚤蛹が多数出土した（第1図参照）。東宮遺跡に到達した天明泥流が、当初より移動し、極めて軽く脆弱な菌が出土することはないだろう。多数の菌の痕跡が確認できたことは、少なくとも当初の天明泥流は、水分を多く含む比較的緩やかな流れであり、浅いものであったと考えられる。当初の泥流の深さは床下ほどであり、流入した泥流は、菌を浮かせながら床下に潜り込み、菌は建物土台或いは土壁によって堰止められたと推測している。

土間に近い3号床下からは数多くの遺物が出土している（写真1参照）。遺物は下駄や草履を多く含む多様なものであり、少なくとも日常生活の中で床下にあるものとは考えにくい（写真2参照）。履物が多いことから、土間にあったものが天明泥流により床下へ押し流された可能性が高いだろう。これらの出土状況から、当初の泥流は1号建物南側出入口付近から土間に流れ込んだ可能性が高いと考えている。

東宮遺跡を被覆していた天明泥流堆積物の厚さは、傾斜地に立地するため調査地点により異なるが、1m前後であった。この高さほどの天明泥流が一度に本遺跡を被覆していれば、多くの遺物や建物は遠く押し流されていただろう。異なる様相の泥流が、少なくとも2回以上に亘り到達したものと考えている。また遺物出土状況から、当初到達した天明泥流は、水分を多く含む比較的浅い緩やかな流れのものであり、流入した方向はおおよそ南東から北西方向であったと推測している。

3. 東宮遺跡の立地と出土遺物

東宮遺跡は、緩やかに傾斜する傾斜地に位置する。その傾斜地を平坦に整地した後、石垣で止めし、溝を巡らせて屋敷地としている。そのため、各屋敷跡で標高も異なり、確認された表土及び天明泥流堆積物の厚さにも違いが見られた。

各屋敷跡を被覆する天明泥流の様相は、詳細には異なると思われるが、泥流がおおよそ南東から北西方向に流入したことや、複数回に亘り泥流が到達したこと、当初の泥流が比較的浅く緩やかで水分を多く含むものであったこと、最も勢いのある泥流であっても建物を流し去るほどの勢いはなかったことなど共通点も挙げられる。

第4章 調査の成果とまとめ

湧水地点の多寡による影響など、各屋敷跡により木製品や漆器、建築部材等の遺存状況には違いも見られるが、建築部材を含め原位置或いは原位置近くで出土する遺物が多い。床から出土する遺物もあり、また5号建物では、箱や樽(転用か)の中に道具類が収められた状態で出土している。

このような出土状況から、東宮遺跡に流入した天明泥流は、各屋敷跡の石垣を大きく乗り越えるほどの勢いや厚さはなく、そのため遺物は大きく移動していないと考えている。また、当初の浅く緩やかな泥流で被覆された遺物もあり、脆弱な土器のような遺物であっても原位置付近から出土したのだと推測している。多様な遺物が数多く出土したが、出土遺物の多くは各建物、或いは少なくとも各屋敷跡には帰属するものと考えている。

4. 特異な遺物出土状況

1号建物からは、多くの下駄や草履が出土した。下駄だけでも46点を数え、その数は多い。そのうちの4点には、屋号のような印が刻まれていた(第1図参照)。印には「○(マル)」に「中」の焼き印や、二重の「×」、横線の下に「△」を二重か、「八(ヤマ)」かなどがある。これらの印は屋号を含む印であり、下駄の所有者を判別するための印だと思われる。異なる印の4点の下駄は、少なくとも同じ所有者のものではないだろう。

1号屋敷跡では出土した砥石に「ㄗ(カネ)」に「口(カネクチ)」とあり、これは1号屋敷跡の屋号とも思われるが、下駄に同様の印はなかった。これは、1号建物以外の人々の下駄が、1号建物から出土した可能性が高いことを示すものと考えている。

東宮遺跡は、天明三年8月5日の様子を色濃く残している。それは、同年8月5日までの日常だけではなく、浅間山が大噴火し、天明泥流が甚大な被害をもたらす間の、混乱した状況までもが含まれているのではないだろうか。

天明三年8月5日午前10時頃、浅間山は大噴火したが、これは東宮遺跡に居た人々にも容易に知り得たことだと思われる。噴火の大音響とともに立ち上る噴煙、空は夕刻のように暗くなっていったことだろう。噴火に伴う地震で建物は大きく揺れ、人々はこれまで経験のない噴火の様相に戸惑い、不安に駆られていたことと思われる。

このような緊迫した状況で、日常生活を続けているとは考え難い。浅間山大噴火から天明泥流が発生し、東宮遺跡に到達するまでの間(1時間未満ほどであろうか)、混乱した状況は続いていたと思われる。

下駄は、履いた人とともに移動するものである。1号建物から多くの下駄が出土したことは、1号建物に多くの人々が集まったことを示唆するものと考えている。そのため、多様な印を刻む下駄が1号建物から出土したのではないかと推測している。当初東宮遺跡に到達した天明泥流は、1号建物南側出入口付近から流入し、土間に置かれていた履物を床下に押し流したと思われる。1号建物に居た人々は、避難する際、履物を履いて逃げる余裕がなかったのか、或いは避難する際には、泥流が履物を床下に潜り込ませてしまったのかは明らかでない。

13号建物では、火皿に刻み煙草が残る煙管(13建No.78)が出土した。囲炉裏脇で出土した火をつける前の刻み煙草は、当時の混乱した状況を伝える遺物のひとつではないかと考えている。

おわりに

天明泥流は人々の想像を遙かに超える事象であり、泥流で被災するまでの短時間に、建物が被災することを想定し、避難することを考えられた人はいなかったのではないだろうか。今何が起きており、今後どうすべきか、大規模な1号建物に人々が集まり、相談することは自然なことだったのかもしれない。

東宮遺跡は、脆弱な遺物であっても極めて良好に遺存し、また原位置近くから出土した。陶磁器や石製品だけではなく、当時の緊迫した状況を検証することもできなかった。東宮遺跡の特異な出土状況の成果といえる。

1号屋敷跡に関する伝承の中に、「酒を馬に付けて逃げた」や「位牌を取りに家に戻った」などがある。伝承の真偽は明らかでないが、東宮遺跡を被覆する天明泥流が当初より勢いのあるものであれば、これらのことは不可能であったと思われる。本遺跡を被覆する天明泥流の様相の傍証になるものと考えている。

引用・参考文献

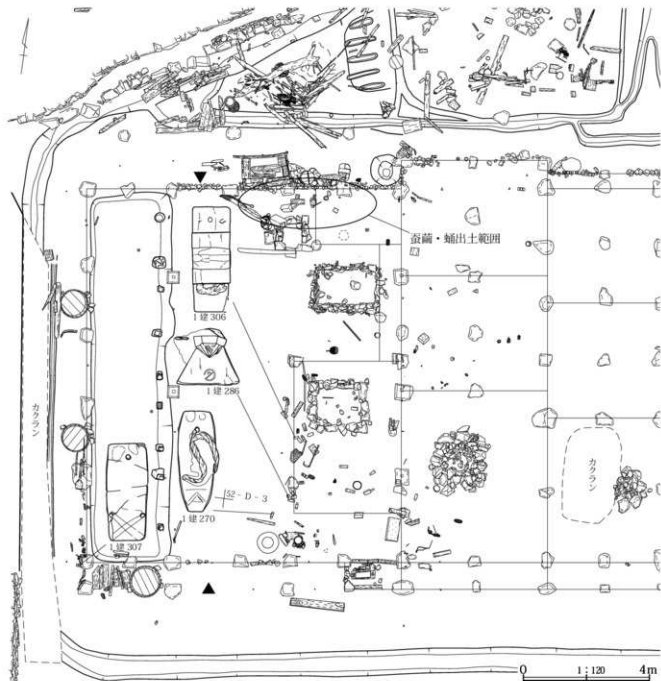
群馬県史編さん委員会編 1980『群馬県史』資料編1近世3



写真1 1号建物3号床下遺物出土状況①



写真2 1号建物3号床下遺物出土状況②



第1図 1区1号建物床下遺物出土状況

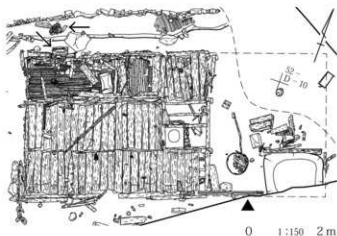
2 5号建物3号床付近遺物出土状況

東宮遺跡では、天明三年8月5日の色濃く残した出土状況が各地点で見られた。詳細は第3章の中で報告したが、ここでは5号建物3号床付近において、収納された状態で出土した樽と箱について詳述したい。

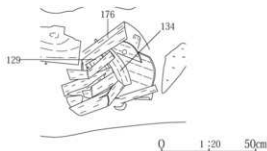
【樽（5建No.176）】5建No.176は樽であるが、樽の蓋には円孔を塞ぐように取手がついていた。このような出土状況から、樽は収納のための道具に転用されていたと思われる。中には、蓋がされたお櫃（5建No.129）、篩と思われる曲物（5建No.134）が第3図のように重ねて収められ、蓋がされた状態で出土した。火打ち箱と思われる5建No.153については、出土状況の資料がなく明らかではないが、同様に収納されていたものと思われる。

【箱（5建No.154）】5建No.154は、中に仕切りのある箱である。各所に円孔を穿つなどの造作が施されており、使い込まれた箱であることが分かる。箱には、煙管（5建No.186～188）や小碗（5建No.93）、木製の蓋（5建No.144）と下駄（5建No.168）が収められていた。下駄は対であったが、一方は欠損が著しく図化はしていない。No.168も他の下駄と比較すれば遺存状況は悪いが、使用時の痕跡が明瞭でないことから、未使用に近い状態の下駄が対で収められていたものと推測している。下駄は、仕切りされた狭い範囲に収められていた（写真参照）。他の遺物の出土状況については資料がなく確認できないが、収納範囲から判断すると、大半は小碗や煙管などと一緒に収納されていたと思われる。また、箱に隣接して赤色漆で仕上げられた樽（5建No.177）が出土した。同様の樽の出土例は、本遺跡では確認されていない。

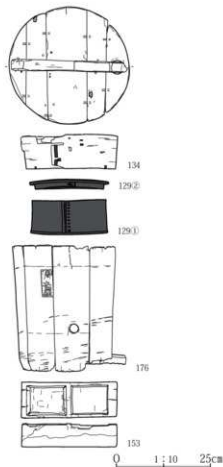
5号建物では床上で多くの遺物が出土した。1号屋敷跡の1段上に位置しており、天明泥流による影響がより少なく、遺物が移動することも僅かであったのではないかと推測している。被覆する天明泥流を考慮すれば、報告した樽と箱は、近接する3号床近くに置かれていたものと思われる。しかし、これらの道具類が、樽や箱の中に日常的に収納されていたものかについては明らかでない。



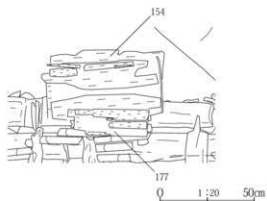
第1図 1区5号建物



第2図 樽（5建176）内遺物収納状況①



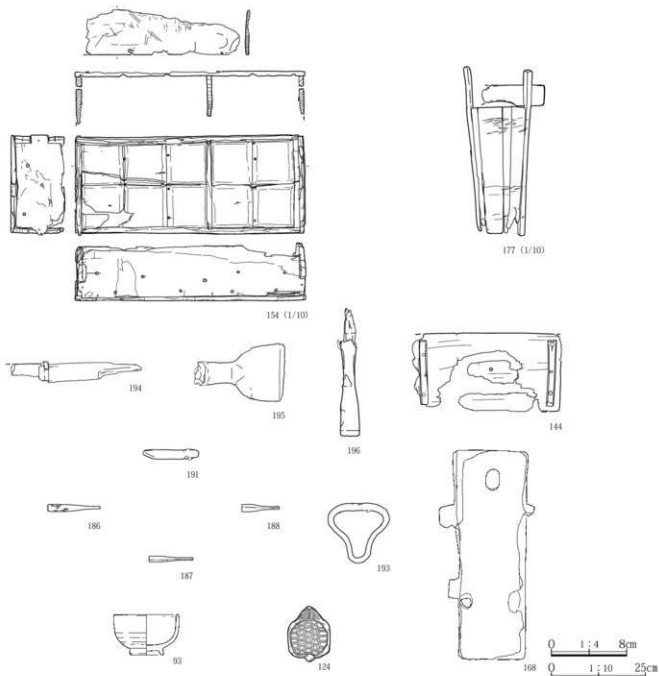
第3図 樽（5建176）内遺物収納状況②



第4図 箱（5建154）出土状況



箱（5建154）内遺物収納状況



第5図 箱（5建154）内に収納された遺物（93・124・144・168・186～188・191・193～196）

3 東宮遺跡各屋敷跡出土の種実

東宮遺跡からは、多くの種実や大型植物遺体が確認された。詳細は後述されているが、ここでは、各屋敷跡から出土した種実をまとめ、各屋敷跡の特徴を概観することを目的とする。出土した種実の詳細は、第4章第4節1の通りである。第1図にある各屋敷跡の種実円グラフは、第4章第4節1の表より作成したが、多量の種実数量については明らかでないものもあり、円グラフの割合はおよそと考えて頂きたい。

1号屋敷跡では多くの種実が出土したが、遺存状況が悪く、種実の報告例も僅かな屋敷跡もある。また、出土した種実を悉皆的に調査した結果ではないことを追記しておく。

1. I区の屋敷跡

【1号屋敷跡】1号屋敷跡は、規模の大きな1号建物を目とする。1号建物は広い馬屋を持ち、馬屋からは家畜糞とともに多くの葉が互層になって出土している。家畜糞中の葉については第4章第4節2を参照して頂きたい。

1号屋敷跡では6,795点ほどの種実が報告されている。特筆すべき種実に、半胴（1号屋敷No.16）より出土したウメがある。半胴には木製の蓋がされ、中から果肉の一部が遺存したウメが出土したことから、「梅干し」だと思われる。1号建物北側にある1号倒木はウメであり、半胴も倒木付近で出土した。1号倒木のウメを梅干しにした可能性も考えられる。

穀物では、オオムギが多く5,000点を超える。コムギは2点、イネは20点と僅かであり、アワは94点、ヒエ・キビは120点、ソバは171点ほどであった。

その他の栽培植物では、キュウリ1点、アズキ1点、ゴボウ3点、エゴマ8点、ウリ属18点、カボチャ49点、ナス311点ほどを数える。悉皆的な調査ではないので数値はおよその傾向であるが、多様な野菜を栽培し食していたことが確認できた。

また、アサは44点あり、アサの栽培も行ったのかもしれない。他にクリが3点、クルミが10点、モモが57点、アンズが44点ほど出土している。

1号建No.466からアブラナ科の果実が多数出土している。4号建物からは油を搾る圧搾機（4号建No.86）が出土しており、これらを使用したことも考えられる。

【2号屋敷跡】2号屋敷跡の主屋は、東宮遺跡では唯一の掘立柱建物である。2号屋敷跡では368点ほどの種実が報告されている。特筆すべき種実に、木製の箱（5号建No.155）の中から出土した、多量のアワがある（数量は未確認）。箱は穀物を入れる容器と思われる、5号建物ではアワを主食としていたことが考えられる。

5号建物囲炉裏下よりモモの核が出土した。囲炉裏下には木筒が埋められ、木杭も散見できた。東宮遺跡と同様の囲炉裏出土例はなく、モモと囲炉裏との関係についても明らかでない。

2. II区の屋敷跡

【3号屋敷跡】3号屋敷跡の主屋は7号建物である。

3号屋敷跡では280点の種実が報告されている。アワが242点、ヒエが37点出土した。他にもモモが1点出土した。

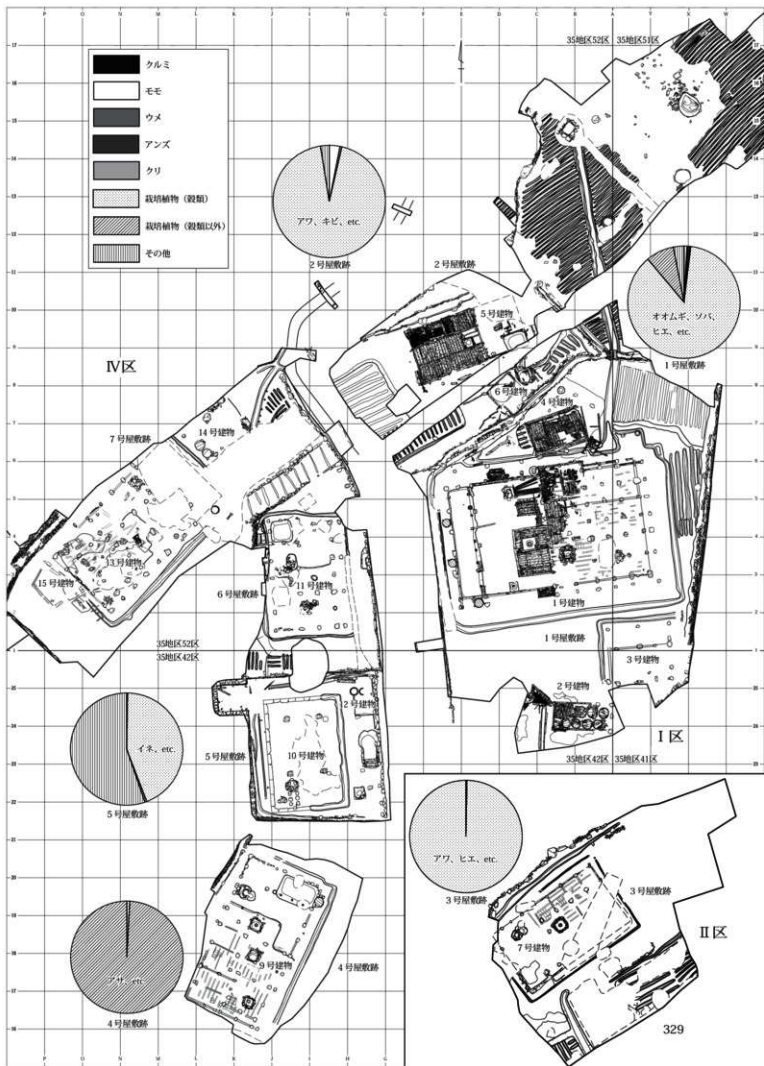
3. IV区の屋敷跡

【4号屋敷跡】4号屋敷跡では809点の種実が報告されている。ここで報告する種実の大半は、桶（9号建No.30）の中より出土したアサである。悉皆調査ではないため数量はおよそであるが、出土状況から、桶一杯にアサの種実が遺存していたと思われる。

8月5日にアサの種実が多量に出土したことから、栽培を目的としていない種実が多量に保存されていたことも考えられる。しかし、その詳細については明らかでない。

【5号屋敷跡】5号屋敷跡は、酒蔵である10号建物がある。報告された種実は292点である。

10号建物は酒蔵であり、酒造りが行われていたものと思われる。しかし、8月5日に被災したためか、出土した酒造りの道具類は少ない印象を持つ。同様の理由からか、種実の出土量も少ない。その中でもイネが100点出土しており、酒蔵らしい出土様相といえる。



第1図 各屋敷跡出土種実

4 東宮遺跡建築部材樹種同定の成果

はじめに

東宮遺跡では、1・2号屋敷跡を中心に、極めて良好に建築部材が遺存していた。出土した建築部材等の詳細な成果については、『東宮遺跡(1)』を参照して頂きたい。

ここでは、良好に遺存していた1・2・4・5号建物の建築部材について、樹種同定成果をまとめ、どの樹種をどの場所に使用しているのかその使用傾向と、建築部材の樹種から推測される建物の変遷について報告する。各図中には、点描表現の違いにより、建築部材の樹種が判別できるようにしている。また建築部材は、上から床板、大引・根太、束・土台・掘立柱と重なり合っているため、図面を分けて表現している。

検出された建築部材については、その全ての樹種を確認することはできなかった。ここでは報告には、同床の床板であれば、およそ同種の樹種であろうとの推測を前提としている箇所もあることを追記しておく。

1. 1・4号建物(第1・2・3図)

第1図には、1・4号建物の床板等の樹種同定成果を報告している。1号建物では、4・5号床でマツ属複雑管束亜属、1号床でスギが使用されていた。各床ごとに使用された樹種は、およそ同種であることが分かる。しかし、3号床では異なる様相が確認された。

3号床では床板の樹種が複数あり、マツ属複雑管束亜属、クリ、スギが混在していることが確認された。3号床については『東宮遺跡(1)』の中で詳述されているが、大引や根太などの接合状況から、少なくとも南側へ80cm程度広げた拡張部があることが報告されている。これを前提に考えると、拡張部の床板にはスギが使用されていることが分かる。

拡張部の床板にスギが使用されていたことは、床板にマツ属複雑管束亜属を使用した床よりも、スギを使用した床の方が新しく足された床である可能性が考えられる。1号床の床板はスギであった。また、根太もやや脆弱であることから、1号床についても後に造られ、足された床であることが想定される。

3号床では、拡張部以外の床板に、マツ属複雑管束

属とクリが複雑に混在し使用されていた。1号建物の他の床では、確認された範囲では、各床ごとに同種の樹種が使用されている。3号床で複雑に樹種が混在する理由として、欠損した床板を張り替える際、異なる樹種の床板が使用されたためではないかと推測している。

4号建物の床板でもマツ属複雑管束亜属が使用されていた。

1号屋敷跡の建物では、床板にマツ属複雑管束亜属を使用し、後に拡張或いは欠損した箇所については、異なる樹種の床板を使用することがあったと考えている。

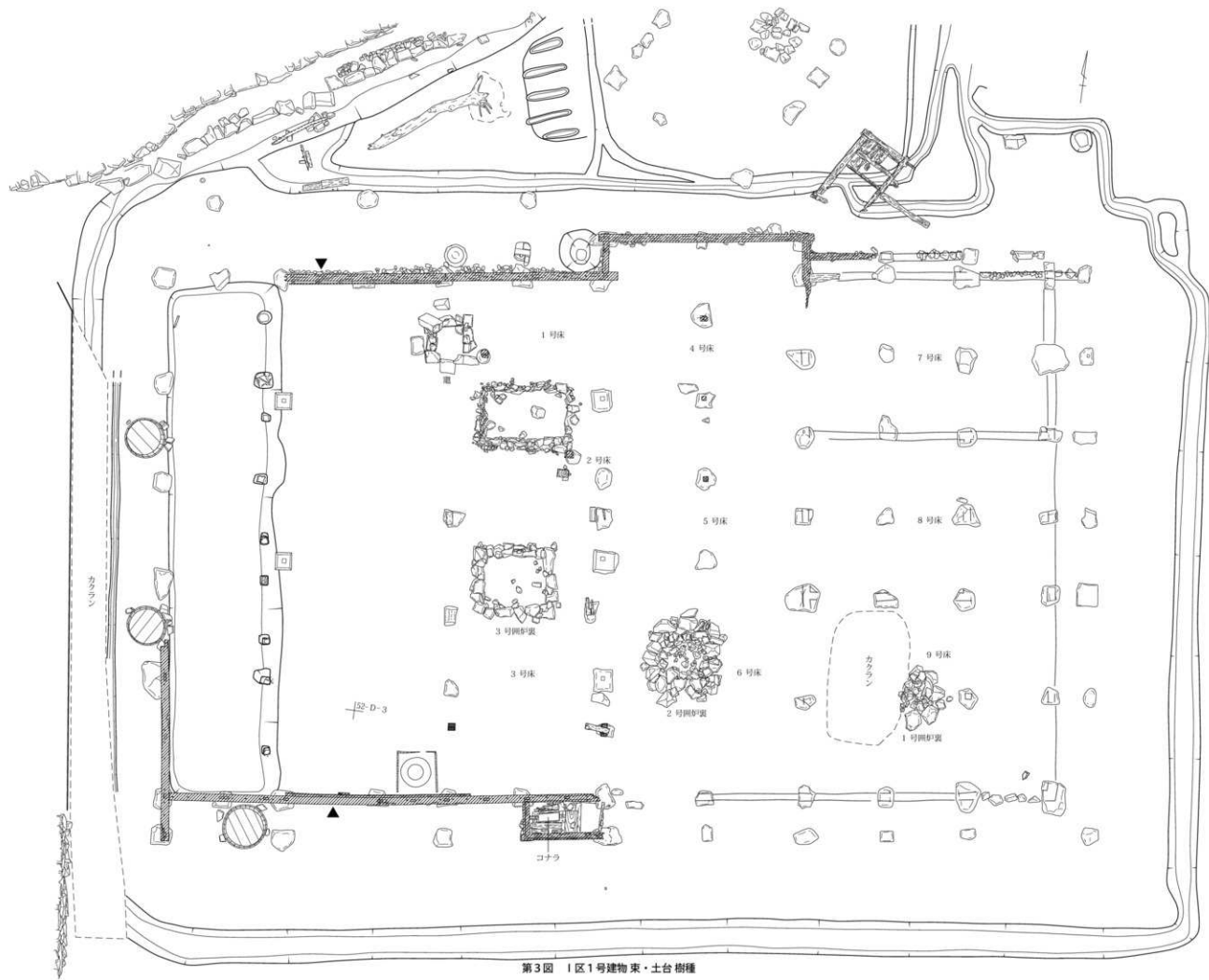
第2図では大引・根太、第3図では束・土台の樹種を報告する。大引や根太には、マツ属複雑管束亜属が使用されていることが分かる。また、土台などにはクリが使用されていた。マツやクリは、ともに耐久・耐湿性が強いといわれており、鉄道の枕木などにも使用されている。第2・3図からは、木材それぞれの特性を考慮し、建物に使用する箇所により樹種を選別していることが確認できる。1建No.31は掘立柱だが、地中に直接立てられていた部材にもクリが使用されていた。また、土間に接するようにある室の床板及び根太や枠にもクリが使用されていた。これも同様の理由からと考えている。

2号床の大引・根太はスギとマツ属複雑管束亜属複雑が混在し、脆断な造りであった。2号床も拡張部である可能性を指摘しておきたい。

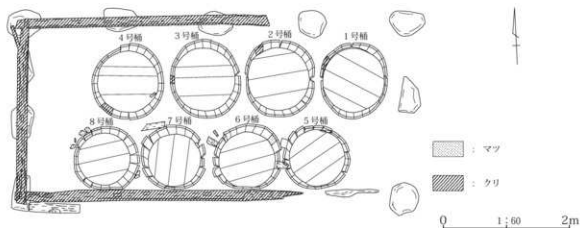
2. 2号建物(第4図)

2号建物の土台にはクリが使用されていた。クリは、耐久・耐湿性が強いといわれており、その特性から土台に使用したのだと考えている。2号建物には埋設された8基の桶がある。埋設桶の詳細は、第3章及び『東宮遺跡(1)』を参照して頂きたいが、8基の埋設桶の規格は異なっていることが分かる(第4図参照)。大別すると、北側4基と南側4基。詳細にみると、南東側2基と南西側2基も区分され、3規格に分類できる。埋設された桶側板の樹種を見ると、北側4基の埋設桶はクリを、南側4基の埋設桶はマツ属複雑管束亜属を使用していることが確認された。

2号建物北側両端の2基の埋設桶から人の寄生虫卵が検出されたことなどから、2基は人の便槽として使用されていたことが確認されている。残る6基は、人糞や家



第3図 Ⅰ区1号建物 床・土台 樹種



第4図 1区2号建物 樹種

畜糞等を混合し、肥料を作製し貯蔵するための埋設桶だと報告されている。

『東宮遺跡(1)』では、1号建物が増改築された可能性について報告されている。1号建物で最も特徴的である大規模な馬屋は、後に大きく造り替えられたことも考えられる。2号建物埋設桶のうち6基を、家畜糞も利用した肥料作製の施設だとするならば、大規模な馬屋が造られた際に、必要となる埋設桶の数も増やされたことが想定される。桶の規格や側板の樹種が異なる理由も、このような建物の変遷に影響された結果ではないかと考えている。

3. 5号建物(第5・6図)

5号建物は掘立柱建物であり、東宮遺跡で出土した他の建物とは異なる。しかし、1・4号建物と同様に、木材の特性を考慮し、使用する箇所を樹種を選別していることが確認された。

第6図の掘立束・土台では、地面に直接立てられた掘立柱(束)にクリが使用され、一部にマツ属複雑維管束亜属が使用されていた。1建No.31の掘立柱同様に、耐久・耐湿性の強い樹種を選んだものと思われる。馬屋に隣接する1号施設でも、地中に接する部材はクリを使用していた。ここでは図示していないが、6号建物掘立柱においても同様にクリが使用されていた。

一方、土台・大引・根太の樹種については、複雑に混在していることが分かる。第6図の大引・根太の図面では、北側1/3(3・4号床)と南側2/3(1・2号床)で構造が異なる。また、北側の3・4号床には、竹藪子が敷き詰められるなど、同様の範囲で床も異なることが報

告されている。

5号建物においても増改築された可能性が指摘されており、北側1/3(3・4号床)と南側2/3(1・2号床)で土台・大引・根太の構造が異なるのは、5号建物が増改築された結果とも考えられる。そのため、使用された樹種も混在しているものと推測される。

5号建物では、床板の多くは樹種同定されていない。しかし、狭い範囲で、スギ、マツ属複雑維管束亜属、竹藪類が混在していた。土台・大引・根太の樹種も複数混在していたが、同様に増改築或いは欠損部の補修による結果ではないかと考えている。

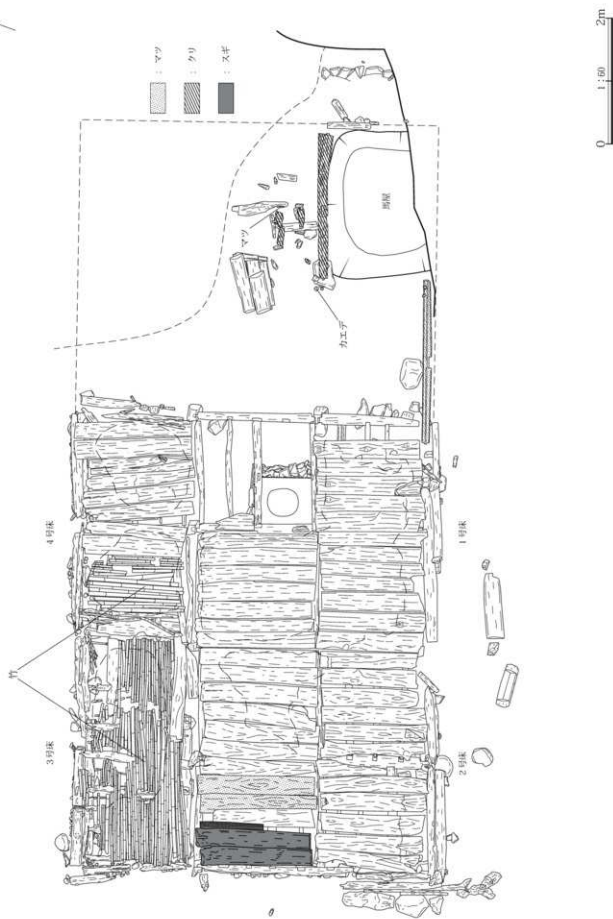
4. まとめと課題

東宮遺跡における建築部材樹種同定については、出土量も極めて多く、その全てを確認することはできなかった。ここでの報告も、全ての樹種同定を行っていれば異なる見解になったかもしれない。特に、2号建物埋設桶や5号建物床板、4号建物床板については、樹種同定された部材も僅か、およその傾向が分かるのみである。

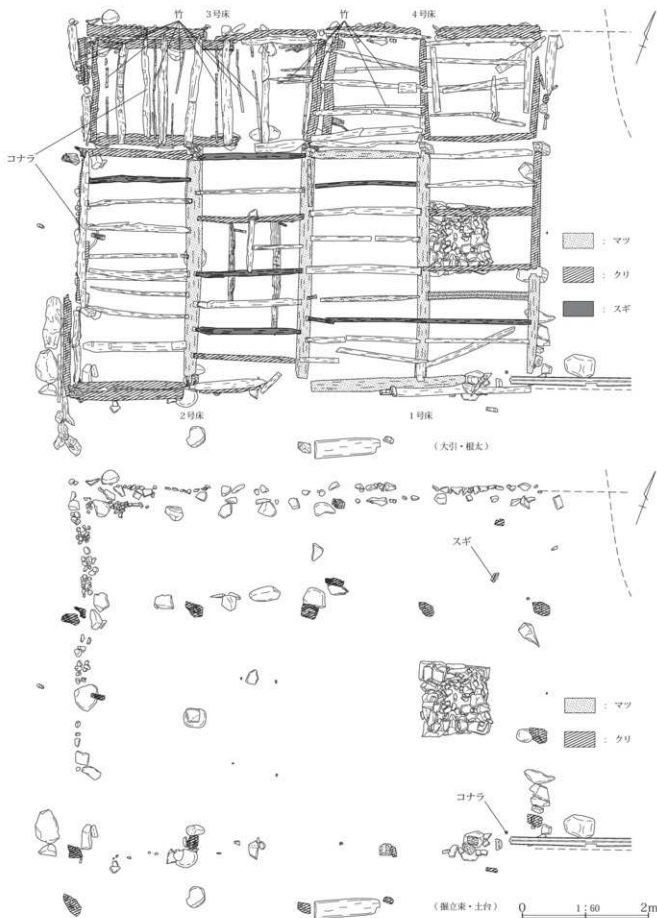
しかし、1号建物での成果と大きく異なる結果が、他の建物で確認されるとは考えにくい。建築部材の樹種が異なることで確認した建物の増改築の可能性と、同様の樹種を使用して同じように増改築していた可能性については否定できないと考えている。

参考文献

群馬県埋蔵文化財調査事業団2011『東宮遺跡(1)』第514集



第5図 1区5号建物①床板樹種



第6図 Ⅰ区5号建物②大引・根太・掘立束・土台 樹種

5 東宮遺跡の調査成果から考察する村落変遷

はじめに

東宮遺跡は、天明三年(1783年)新暦8月5日の天明泥流で被覆されており、極めて良好に建物跡や遺物が遺存されていた。また、出土遺物の多くは混在することなく、少なくとも各屋敷跡には帰属される。

ここでは、出土した陶磁器を悉皆的に調査し、各屋敷跡ごとに報告する。また、陶磁器の年代や遺構の重複関係、建築部材等の考察から、各屋敷跡がどのような順に造られたのかを報告する。特に良好に遺存していた1・2号屋敷跡については、建物の変遷についても報告する。

表1～14は、各屋敷跡の未掲載遺物も含めた瀬戸・美濃系、肥前系陶磁器をまとめたものである。僅かに混在した近代以降の陶磁器については割愛している。具体的に、瀬戸・美濃系陶磁器では連房11小期(連房式登窯第11小期の略。以下同様に略す)までとし、肥前系陶磁器では19世紀中頃までとしている。出土陶磁器については、瀬戸・美濃系陶磁器を愛知学院大学教授藤澤良祐氏に、肥前系陶磁器を元九州陶磁資料館館長大橋康二氏に鑑定して頂いた。

以上の成果を踏まえた変遷案が、第1・2図である。また、第3図は『東宮遺跡(1)』で報告された、4号建物の変遷を掲載している。

1. 各屋敷跡の出土陶磁器

【1号屋敷跡】(第1・2・3図、表1・8)1号屋敷跡では、1・4号建物及び1号建物北側から、多数の陶磁器が出土した。出土陶磁器を概観すると、連房5・6小期頃より多くの瀬戸・美濃系陶磁器が確認された。肥前系陶磁器では17世紀後半～18世紀頃に多く、次いで18世紀後半に多くなる傾向が見られた。

1号屋敷跡下からは、8号溝や床下土坑が検出されている。8号溝からは、17世紀後半～18世紀前半までの陶磁器が出土した。4号床下土坑からは、17世紀後半の皿、連房6小期の碗、連房5～7小期の徳利が出土した。8号溝は古い段階の1号屋敷跡地境に掘られた溝であり、4号床下土坑も室下で確認された。これらの遺構と出土遺物は、1号屋敷跡の変遷を知る上で重要と考え

ている。

1号屋敷跡下からは、18世紀前半頃を中心に陶磁器が出土した。屋敷の拡張及び造成が行われたため、多くの近世陶磁器が出土したのだと考えている。

【2号屋敷跡】(第1・2図、表2・9)2号屋敷跡の出土陶磁器を概観すると、連房7小期頃より多くの瀬戸・美濃系陶磁器が確認された。肥前系陶磁器では17世紀末頃より散見できる。

2号屋敷跡下からは、9号溝が検出された。9号溝からは、連房6小期の碗が出土し、屋敷跡下からは、18世紀前半～後半にかけての陶磁器が散見できた。

【3号屋敷跡】(第1図、表3・10)3号屋敷跡の出土陶磁器を概観すると、連房5・6小期頃より多くの瀬戸・美濃系陶磁器が確認された。肥前系陶磁器では18世紀前半より散見できる。

3号屋敷跡下からは、51区2号集石と1号土坑が検出された。2号集石からは小型の土師器皿(カワラケ)や17世紀末～18世紀前半の皿、連房6か7小期の碗が出土した。

【4号屋敷跡】(第1図、表4・11)4号屋敷跡では、連房1・2小期より瀬戸・美濃系陶磁器が散見できる。肥前系陶磁器でも17世紀中頃より遺物が散見でき、同時期より遺物が確認できるのは、4号屋敷跡のみであった。屋敷跡下の出土遺物とも思われるが、特徴的な出土状況である。

だが、4号屋敷跡出土陶磁器の多くは、瀬戸・美濃系陶磁器では連房6小期頃より多く見られ、肥前系陶磁器でも18世紀前半～中頃より多く確認された。

4号屋敷跡下からは、1号石組遺構が検出されているが、遺構に伴う遺物は確認されていない。

【5号屋敷跡】(第1図、表5・12)5号屋敷跡からは、主屋である10号建物より多くの陶磁器が出土した。10号建物は酒蔵であることから、出土した片口の年代を確認する。片口は5点出土したが、全て連房8小期であった。また、他の瀬戸・美濃系及び肥前系陶磁器でも、天明期頃の陶磁器が多い傾向が見られた。

酒蔵である10号建物に関わる遺物に、隣接する9号建物で出土した刷毛(9建No.24)がある。「天明二年」「酒蔵用」と墨書されたこの刷毛からも、5号屋敷跡(10建物)が天明期頃に建てられたものではないかと推測させる。

第4章 調査の成果とまとめ

表11 IV区4号屋敷跡 肥前系陶磁器総量一覧表

種別・産地	年代	17世紀			18世紀			19世紀			時期不明	合計
		前	中	後	前	中	後	前	中	後		
磁付・磁形陶	1770～80年代						1					1
磁付・磁形陶	1780～19c前						2					2
陶器磁付・磁	18c前				2							2
磁付・磁	18c前				2							4
磁付・磁	18c第2					1						1
磁付・磁	18c第1・3					1						1
磁付・磁	17c中～末	1										10
磁付・磁	18c後						1					2
磁付・磁	18c第1～19c前						1					1
磁付・小皿	18c第2・3				1							1
磁付・小鉢	18c中～後						1					1
磁付・小鉢	18c後						2					2
磁付・小鉢合小皿	18c					1						1
磁付・小皿	18c後						1					1
磁器・小鉢	18c						1					1
磁付・皿	寛政						2					2
磁付・小皿												1
青磁・青磁か												1
磁付・正楽陶	18c後						1					1
磁付・皿	17c中				1							1
磁付・磁瓶の	17c後～18c前							1				1
磁器・磁瓶の												1
陶器磁付												1
不明	18c前				1							1

合計 138

表12 IV区5号屋敷跡 肥前系陶磁器総量一覧表

種別・産地	年代	17世紀			18世紀			19世紀			時期不明	合計
		前	中	後	前	中	後	前	中	後		
磁付・磁形陶												1
磁付・磁	18c後						2					2
磁付・磁	1780～180年代						1					1
磁付・磁	1780～19c前							1				1
磁付・磁	寛政							2				2
磁付・小皿	1770～80年代											1
磁付・小皿	1780～180年代							1				1
磁付・小皿	18c後							1				1
磁付・小皿合小鉢	18c中～後							1				1
磁付・小皿	18c後							1				1
磁付・皿	寛政							1				1
磁付・皿	1780～180年代								1			1
磁付・磁	18c後							1				1
磁器・磁生か												1
青磁・青磁か	18c後								1			1
磁器・磁瓶の												1

合計 22

表13 IV区6号屋敷跡 肥前系陶磁器総量一覧表

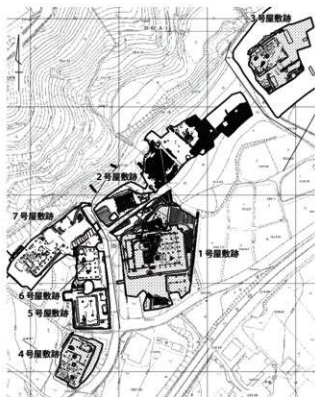
種別・産地	年代	17世紀			18世紀			19世紀			時期不明	合計
		前	中	後	前	中	後	前	中	後		
磁付・磁												11
陶器磁付・磁	18c前						2					2
陶器・磁か	17c後～18c前				1							1

合計 14

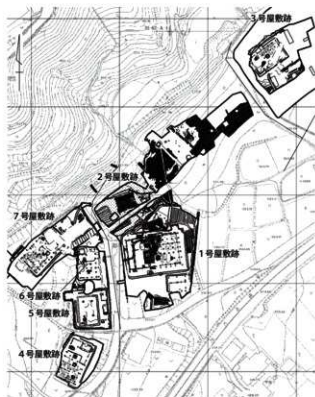
表14 IV区7号屋敷跡 肥前系陶磁器総量一覧表

種別・産地	年代	17世紀			18世紀			19世紀			時期不明	合計
		前	中	後	前	中	後	前	中	後		
磁付・磁形陶	1780～80年代						1					1
磁付・磁形陶	1780～19c前							2				2
磁付・磁形陶	1780～19c前							1				1
磁器・正楽陶	1780～180年代							1				1
磁付・磁	18c第2					1						1
磁付・磁	1780～80年代							1				1
磁付・磁	18c後							2				2
磁付・磁	18c					1						22
磁付・陶合												1
青磁磁付・磁												3
白磁・磁	18c第2か							1				1
陶器磁付・磁	18c前				2							12
磁												1
白磁・小鉢	18c前					1						1
磁付・中皿	1730～80年代						1					1
磁付・皿	18c後							2				2
磁付・小皿	1780～80年代							11				11
陶器磁付・皿	18c前							2				1
陶器・磁瓶												1
磁	1820～60年代							1	2			2
磁か	18c前							1				1
磁付・磁	18c							1				27
磁付・磁	18c後～19c前								1			1
磁付・皿	1770～80年代							1	1			2
磁付・皿	18c第4～19c前								1			1
磁付・磁付鉢	18c後							2				2
磁付・油瓶	18c第2・3							1				1
磁付・磁瓶の	18c後								1			1
磁付・磁瓶の	18c後～19c前								1			1
磁付・磁付	1730～80年代								1			1
不明	18c中～後							1				1

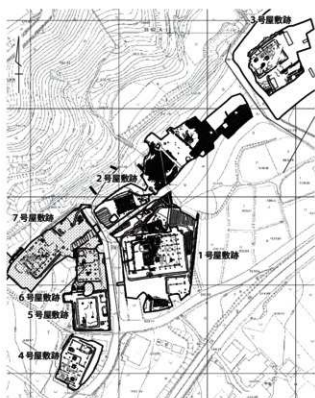
合計 136



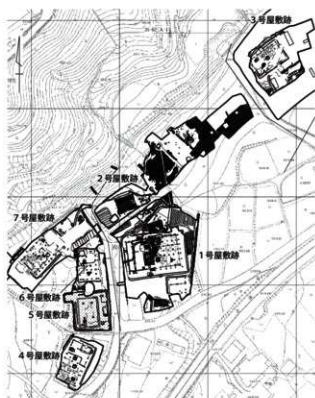
第1段階 1・3・4号屋敷（網掛け箇所）



第2段階 2号屋敷

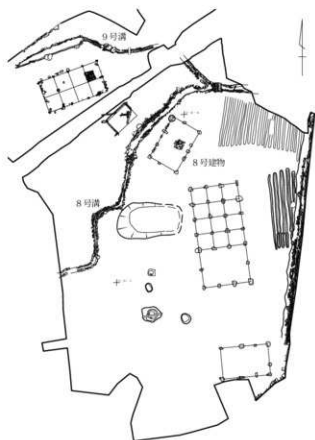


第3段階 6・7号屋敷

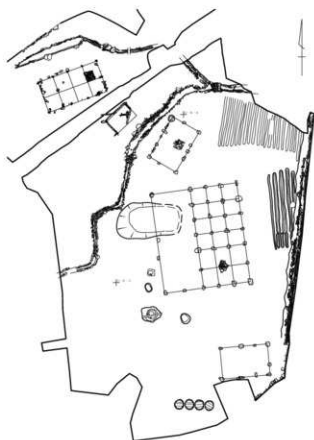


第4段階 5号屋敷

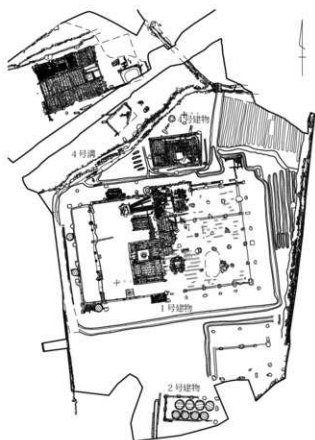
第1図 東宮遺跡屋敷跡変遷案



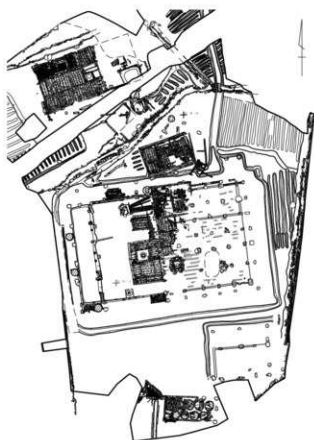
第1段階



第2段階



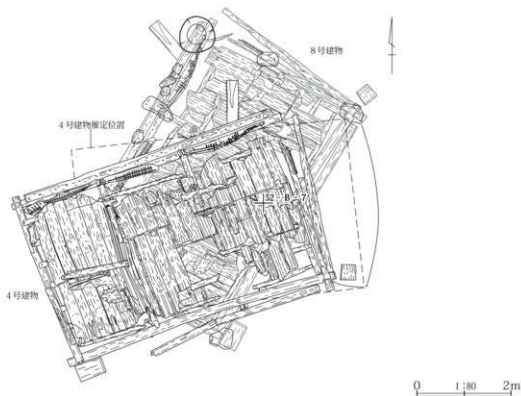
第3段階



第4段階 (天明泥流下)

0 1:450 10m

第2図 東宮遺跡1・2号屋敷跡変遷案



第3図 東宮遺跡4・8号建物変遷案

らも、第1段階の時期があったと考えている。5号建物は、大引・根太の状況から小規模の建物があったと思われるが、判然としない。これを第1段階と仮定する。

第2段階と第1段階の明確な区分はない。礎石心々寸法の成果から、1号建物では数回(2回ほど)の増改築が行われたと考えられ、第2段階を仮定した。2号建物の埋設桶は、1号建物の馬屋の規模とともに増やされたと思われ、第2段階では北側4基のみとした。

第3段階は、各屋敷を第4段階と同様に拡張・整備し、建物も同様に建て増しされた段階である。第3段階になる時期を知る手掛かりとして、1号倒木がある。1号倒木は樹齢22年ほどのウメである。この1号倒木の根元下から8号溝が検出されており、8号溝を埋めた後に1号倒木が植えられたことは明らかである。8号溝が埋められた後、どれ程の期間をおいて、またどのようなウメが植えたのかは明らかでない。しかし、天明三年より1号倒木の樹齢を引いた、18世紀中頃には、第3段階のような屋敷跡になっていたと思われる。これは、出土陶磁器の総量把握結果とも齟齬はないと考えている。

第4段階は天明泥流下から検出された状況である。

3. 4・8号建物の変遷(第3図)

8号建物は、4号建物と同規模の礎石のみを残す建物痕跡である。第2図の通り、1号屋敷跡は8号溝を地境とした時期があり、8号建物の礎石の上には、出土した4号建物の上屋が建てられていたと推測している。その後8号溝は埋められ、4号溝を地境とする新たな屋敷に拡張・整備された。

8号建物は、新たな地境溝に沿うように上屋を動かしたものと考えている。1号建物と4号溝は接するようであり、8号建物をそのままに大規模な1号建物を建てるのが難しかったのではないだろうか。検出された4号建物は8号建物の上屋であり、以上を踏まえれば、8号建物と4号建物は同じ建物と考えても良いだろう。

8号建物(旧4号建物)には囲炉裏溝があったが、4号建物には、囲炉裏開口部分下に囲炉裏痕跡はなかった。4号建物では、床開口部を囲炉裏として利用していなかったと考えている。

4号建物の原位置については、雨落溝から判断できる。4号建物が検出された位置は、ここより約1.5m移動していた。天明泥流で動いたものと考えている。

参考文献

群馬県埋蔵文化財調査事業団2011「東宮遺跡(1)」第514頁

6 I・II・IV区から検出された建物跡の建築史的検討

はじめに

本稿は、東宮遺跡発掘調査のうちI及びII・IV区から検出された建物跡を、建築史的に検討をするものである。筆者は、3回にわたり現地での調査に立ち会うことができた。本報告は、その時点での出土状況や、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団より提供を受けた資料¹⁾を基に行った報告である。

発掘調査により検出された遺構から、住居及び付属屋と思われる遺構9棟を考察した。

本遺構は、天明3年(1783)の浅間山大噴火による軽石の降下と、吾妻川流域に発生した泥流により埋没しているため、この時期を下限とし、それ以前に遡るものである。本遺跡の最も大きな特徴は、浅間山噴火時の軽石の降下による堆積状況から、建物の屋内と屋外を区別することが可能であった。また、泥流によりそのまま建物が埋没したことにより、遺物やディテールが良く残っている遺構の出土が多かったこと等が挙げられる。また、主屋と推定される建物を中心に、当時の農家の屋敷配置が良く残っており、屋敷の変遷を含め、当時の農村環境を推定する上でも貴重な遺構と思われた。

本文中、寸法の記載にあたりメートルと尺をそれぞれ併用して記した。建物遺構に使用された尺度を検討するにあたっては、遺構が存在した年代からみて曲尺(1尺=30.303cm)を用いた。また、本稿に限って柱間の表記については、長さの単位と区別するため、寸法を示す場合は大方を1.82m(1間)とアラビア数字で、また柱間等の割り付けや、部屋数を示す場合は、一間と漢数字で表記した。その他、建物の方位を示す場合は、桁行方向が面する方角を指すこととする。

なお、本報告書に掲載された考古学調査他の記録を参考にした場合、本文中に「調査報告」と記した。部屋名は、全て提供を受けた調査図面を使用した。

また、推定復元平面図に記載した番号符丁は、図面上説明を容易にするために、便宜的に記したものである。特に根拠があつての符丁ではない点をご理解いただきたい。

1号建物

1. 遺構の検出状況

1号建物が検出された敷地は、北側に位置する山の斜面を削平し、さらに東側に石積みの擁壁を設け平地を設けている。敷地は、北西から南東方向に向け緩やかに下る地形となり、東側では石垣積みの擁壁が敷地境を形成する。また建物背面では、北東方向から北西にかけて山止めとなる石垣積みの擁壁がある。

1号建物は、長軸をやや東に向ける南南東向きに配置されている。背面の北東側には、石垣との間に三角形の敷地があり、4号建物及び8号建物跡が一部重なり合っており検出されている。また、南東方向には3号建物、南側には2号建物がそれぞれ検出されており、付属屋と思われる建物遺構も含め、1号屋敷跡全体を構成しているようだ。

検出された1号建物の遺構は、地盤の含水の影響で、西側の土間を中心とした範囲では外周には土台、内部には板床が残っていた。しかし、東側半部は地盤の乾燥による腐朽により、土台痕が確認できたのみであった。

西側内部には、板敷き床である1号床、2号床、3号床及び3号囲炉裏、竈が1基、板で塞がれた室(むろ)、1号唐白などが検出された。また、西側に接しての馬屋²⁾と思われる範囲では、土間地盤面が全体的に掘り下げられ、遺物としては礎石や、飼葉桶などが検出されている。

一方、土間及び馬屋周囲からは、南側に2号施設(風呂か)、西寄りから便槽と思われる木桶、それぞれを結ぶように竹管の配管が確認されている。馬屋西側からは、外壁に沿って1号・2号桶、北側では板や床組と思われる遺物がみられる1号施設、接しては2号唐白、さらに柱の支柱と思われる木柱、1号土坑がある。

また、北側方向に約1.8m(6尺)離れた西寄りの位置に、東西を通り心として3個の玉石が並んで検出されている。

土間より東側の範囲からは、土台や根太の痕跡、また礎石が一定の通り心に従って検出されている。北側には、一部土台が残るほか、建物の内装遺物としては4号床及び炬燵、5号床、6号床板敷き、また2号囲炉裏の石組み、南東側からは1号囲炉裏の石組みの一部が残る。この部分は、攪乱がみられるため、石組みは一部欠損している。

その他、北東隅には本体礎石から張り出した位置に、礎石が1個と礎石を撤去した痕跡と思われる土坑が、東西の同一通り心上で出土している。その西側からは、雨落ち溝に覆い被さるように3号施設（建物の軸組の一部）が検出されている。

建物外周には、雨落ちと思われる溝が、ほぼ全周にわたり見られるが、北側は不規則な形状で、北東隅は北に向かって張り出している。溝の位置は、南と東、及び北西の土間付近では、側柱筋の礎石より2.1mほど外に出た位置に設けられている。

1号建物の規模は、東西方向（桁行方向）が21.34m（約70.4尺）、南北方向（梁行方向）は12.07m（約39.8尺）、延面積257.6㎡（77.9坪）である。

2. 遺構の残存状況と規模

馬屋 遺構の西側には、土間と隣接して桁行方向「十一」～「十四」通り（2.78m（9.17尺））、梁行方向「ろ」～「つ」通り（12.06m（39.8尺））の範囲に、土間と比べ15cmほど低い掘り込みが見られ、馬屋と推定される。南側の桁行方向及び「ろ」～「へ」間には、土台と思われる角材が残存する。また、土間西側の「十二」通りには、掘立柱の柱穴と思われる穴が、9カ所検出されている。このうち、「十二・ち」の柱穴を跨ぐように角柱状の部材が出土している。柱穴をから東北方向（土間側）に倒れこんだ状態で、西・北・南面には各2カ所ずつ穴が開けられていた。長さは3m、断面径はおおよそ15cm、柱穴側端部のみ長さ40cm程が15×20cmの断面径となっている。3面に開けられている穴や出土した位置等から推定すると、馬屋の間仕切り部分の掘立柱と推定される。これらの穴は、厩栓棒が入れ込まれていたと思われる、扉の仕切りも兼ねていたようである。

土間境の「十一」通りの礎石と、この柱穴の通り「十二」は、46cm（1.5尺）の間隔で並列に設定されている。

土間

室（むろ） 石積みの上に板決り（いたじゃくり）した土台を回し、中央に2本太めの根太、東側・西側の土間に隣接して細めの際根太をそれぞれ配している。土間よりおよそ土台1本分高い位置に上蓋である板が載せられている。板は4枚で、釘止めであった。

1号床 「七」～「九」通り、「れ」～「つ」通り間に設置されている。桁行方向2.82m（1.5間）梁行方向1.76

m（5.8尺）の平面規模で、床高は45cmほどである。

長さ2.7m（9尺）、幅11cm（3.6寸）程の板が7枚検出されている。東西に長く張られていたと思われるが、泥流に流されたようで一側は斜めになった状態であった。床の南側は、上り框を入れ見切っている。隣接して西側には竈があり、そこまでが板床の範囲である。床組は、上り框に根太彫りがなされ、南北方向に約45cm（1.5尺）間隔で根太が入れられていた。対面する壁側には、根太掛け等の部材は残存していないが、その上に床板が張られている。

竈の脇、板床の南西角には礎石があり、その上に東を立て、框を支えている。

2号床 1号床の南側に接し、3号床までの間に位置している。「七」通りから西に3尺ほど張り出して設けられている。床高はおおよそ45cmで、4号床と土間を繋ぐ上り縁のような機能を持っている。南北方向に長さ4尺、幅3寸の板を縁甲板張り（えんこういたばり）3列に張られていたようである。床組は、「七」通り柱間に組まれている足固めと、両端を1号及び3号床にかけて框がある。框の中程には礎石があることから、東により支えられていたことが判明した。その間に根太を渡し、板張りとしている。東は検出されていない。

3号床 南側に位置し、桁行方向3.64m（2間）、梁行方向4.55m（2.5間）の平面規模を持つが、南側72cm（約2.4尺）は後に増築されていたようである。北寄りに3号囲炉裏を設けた板床敷きで、表面に藁が敷かれその一部が検出されている。床高は、土間面よりおおよそ30cm（1尺）程で、礎石に直接框や大引を載せる、転ばし床である。

床板は、幅が25cmから30cm程度、長さは1.5m（5尺）から1.8m（6尺）ほどの板が使われている。北寄りの床板は、囲炉裏を中心に東西方向に長く並べられている。一方、南側の増築部分も同様に東西方向に張られているが、2列である。北側床との境には、框が残存しているため、それを除けて板を敷き始めている。

床組は、西側・南側・北側に縁框が入れられ、中央のみ東西方向に大引が1本配されている。いずれも礎石の上に直接置かれており、框というより中央の大引を含め土台といった趣である。組手は、「九」通りの框と北側及び南側の框は、いずれも肘付きの横平柄差しに組ま

れている。中央の大引は、両端共に堅平枿、榫はそれぞれ、胴付きの平枿としているが、横平枿となっている。この枿には鼻栓の穴が2カ所開けられている。いずれも「七」通り側は柱や束に差し込まれてはいない。

使用されているこれらの部材は、転用材あるいは古材を利用したと考えるのが妥当で、西側の緑椀は、断面形状が8面であったものを、礎石に接する面のみ研り直す加工を加えてあり、中央部分が西側に緩やかに湾曲している等の特徴から見ても、梁の転用が考えられる。また他の榫も同様の特徴を持ち、いずれも梁の転用材である。

大引は、根太彫りや枿の不自然さを考え合わせると、やはり転用材とみることができる。

根太は、南北方向に入れられており、中央より北側では囲炉裏があるため7本、南側では6本が検出されている。いずれも、緑椀及び大引に根太彫りがなされそこに落としまわっている。大引の根太彫りには、一部に蟻枿(ありほぞ)が切られているところもある。これは転用される以前の刻みを利用したようである。

南側に張り出した72cm尺(約2.4)の床は、榫の納め方等から見て、本体の床ができた後に増築されたものである。

3号囲炉裏は、大引及び3方向の根太を丸縁(ろぶち)とし、床下は石組みとなっている。

4号床 この床は、1号床の東側、本建物の中通り北側に位置し、ほぼ中央には炬燵が掘り込まれている。桁行方向は「五」～「七」通りの2.5間(4.64m)、梁行方向「よ」～「な」通り間の2間(3.71m)の平面規模を持つ。北側の3尺(92.7cm)は側柱通りから張り出している。

床高は、柱や束などの遺物が無いため特定するのは困難である。しかし、炬燵の石製火袋(1個の石を彫り凹めている)が完形のまま残存していたため、その高さからおおよそ推定ができた。炬燵の平面規模は外径約63cm角、高さは34cmである。周囲の床が落ちた状態で検出されていることから、板床との納まりは断定できないが、炬燵の際に残る板の切り込み状況や、が縁が検出されていないことから推定すると、床面とほぼ同一の高さと思える。このことから推測すると、4号床の高さは、土間地盤面より45cm程の高さであったようだ。

床板は、残存する板幅から30cm(1尺)程度、長さは

約1.75m(5.8尺)の材が南北方向に2列にわたり張られている。北側の張り出し部分の床も同一板床で通して張られていることから、当初からの板床と見ることができると考えられる。

床組は、4号・5号床境に幅18cm、高さ15cmの足固めが1本残っている。全体の2/3程度の残存率であるが、西側の端部には枿が残り、太枿穴のある切石の礎石に掛かっていることから、ここに立っていた柱に差し込まれていたものであろう。「六」通りの位置には礎石が残っていることから、束があり、足固めで支えられていたようである。また、この位置より直交して北方向に大引が1本、残っている。両端部が無いため、断定はできないが、北側に延びていることから、土台に立っていた柱あるいは束に差し込まれていたようである。

根太は、この中央の大引に直交するように東西方向に組まれている。根太間隔は45cm(1.5尺)で、部材の一部が残っている。土間側の根太には枿が切られているが、東側方向は残存していないため、不明である。大引には根太彫りなどの加工痕は見られないことから、大引を跨ぐ通し根太であったようである。

5号・6号床 5号・6号床は4号床の南側である。桁行方向「五」～「七」通り、梁行方向「ろ」～「よ」通り間に位置している。

5号床及び6号床は、遺構の状況から推測しても、間仕切りの位置は不明確である。部屋境を想定させる足固めや大引の痕跡が無い。唯一、「六」通りの「わ」～「よ」間に根太と直交するように大引が残っている。

根太と思われる痕跡は、5号・6号床の範囲に一部残っており、いずれも東西方向に向いている。この状況は、他の7号・8号・9号床も同様である。

床板は、5号床の西寄りに残存する。板幅は30cm(1尺)程度、長さは約1.9m(6.3尺)の材が南北方向に3段にわたり張られている。北側では7枚、南側は5枚、その間の1列には7枚残っている。

2号囲炉裏は、東西方向約60cm、南北方向約78cmで、構造は角礫の石組みである。石組みの南東隅には礎石が残り、調査時には束が腐食した状態で残存していた。囲炉裏の石組みは、この礎石(東石)を含めて構築されていることが判明しており、床を構築した後に囲炉裏が作られている。

7号・8号・9号床 7号床は、桁行方向「二」～「五」通り、梁行方向「わ」～「つ」通りに位置し、桁行方向5.56m（3間）、梁行方向3.71m（2間）の平面規模である。8号床は、梁行方向「と」～「わ」通りの間に位置し、梁行方向3.71m（2間）の規模である。9号床は、梁行方向「ろ」～「と」通り間に位置し、梁行方向4.64m（15尺）を一間2.32m（7.5尺）の間割りとした、二間の柱間を持つ。

7号床の北側、「つ」及び「ね」通りの「四」～「五」通り間には土台の一部が残っている。特に、「つ」通りから北に1.5尺（46.4cm）張り出した位置である「ね」通りの「三」～「五」通り間に土台及び土台痕が残っている。

また、「わ」通りには、「二」～「五」通り間に土台痕がある。

8号・9号床範囲に残存する礎石上面には、土台や束の圧痕が残っていることが報告されている。8号・9号床境となる「と」通りには土台が存在していたことが判明した。

1号囲が裏は、9号床のほぼ中央に切られており、東西50cm、南北60cmほどの平面規模を持っていた。他の2カ所の囲が裏に比べ、最も小規模である。

1号施設 土間の北側に接して、東西方向1.7m、南北方向1mの平面規模を持ち、3方を高さ25cmほどの板枠と、土台に囲まれるような形状で出土した。

調査報告では、「20～80cmの大型の角材が平面長方形に据えられ、上面にはやや小型の角材や板材、さらにその上面には格子状の木枠や板材などが積み上げられていた」とある。格子状の材は、板戸等の骨組みとも思えるが、確かではない。いずれにせよ、板枠で囲まれた範囲の上面に、板戸を転用したか、あるいは簡易な床組として組まれたものが、床を構成する部材であったと推定できる。

また1号施設を含むように、建物本体からおよそ1.85m（6.1尺）北側に、一間を3.71m（12.2尺）とした、二間分の礎石3個が検出されている。範囲内にはAs-A軽石の堆積が確認できないことから、屋根内であったことが発掘調査より確認されている。また、北側には軒先が推定できる位置に雨落ち溝も設けられていることから、この施設を覆う下屋であったと推定できる。

下屋内からは、1号施設の他、2号唐臼、石臼（石臼のみ）等が出土している。また、山側に設けられている4号溝を流れる流水を利用して、流し場施設があったことも併せて推定されている。

2号施設 土間の南側、土台の一部を共有して南に張り出している。桁行方向1.86m（6.1尺）、梁行方向92.7cm（3尺）の平面規模で土台が残っている。

本体建物の軒内にあり、保存状態が良く、風呂との推定がなされている。西に位置する木桶を直結して埋設された竹管で結ぶ排水設備が一体化したまま検出されている。

3号施設 7号床の北側、雨落ち溝の上に覆い被さるよう出土している。

外形寸法は、南北方向では2.2m（7.3尺）、東西方向は1.45mで、さらに1.45m（4.8尺）ほどの角状の部材が東側に接して出土している。17～18cmほどの断面径を持つ角材は3方向が組まれた状態で、中に45cm間隔で2本、根太の材が渡されている。根太に直交するように、板が張られていた。南側及び東側の一部が欠損しているため、全容は定かではないが、部材の残存状況から、南北方向の長さはほぼ推定できる。

また部材は、3カ所の隅に組み手と柱納穴、他に1カ所の柱納穴が確認できた。隅の組み手は、横平納差して、上面に柱納穴が穿たれている。

3. 使用尺度と柱間の割り付け

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行方向、梁行方向共に30.9cm（約1尺）、1間を1.855m（6.1尺）としている。

礎石配置より想定した柱間寸法を見ると、「七」通りを境に、東側と西側の梁行方向の通り心に食い違いが見られる。西側の土間を見ると、南側からの柱間は2.78m（9尺）が二間、6尺（1.85m）が二間、2.78mが一間、都合五間からなっている。一方、東側は南側から2.32m（7.5尺）が二間、1.85m（6尺）が二間となっている。

「七」通りの東側と西側の通り心では、92.7cm（約3尺）のズレが生じている。本来、この通り心が通り、そこに柱や床部材が組まれていなければ、建物として適切な構造的耐力を確保することはできない。「七」通りに土台が入れられていなかったことは、残存する部材で確認されている。つまり、ここに立つ柱は、石場建て工法であ

る。そのため東側の床下を支える大引などは、柱に差し込まれ、床組を構成していなかったことになる。3尺の食い違いは、柱間に束を用いて解決していたようである。いずれにしても、不自然な床組である。

4. 検出された遺構に見られる技術について

礎石 本遺構にみられる礎石は、3種類ほどの特徴が見られる。最も特徴があるのは、土間回りから出土した太納穴が穿たれた切石である。「七」通りと「十一」通りにあり、「七」通りでは3個、「十一」通りでは2個が検出されている。形状は上部を平面に、立面は台形あるいは方形で、下部は粗く面が刻まれている。土間には、方形に加工された部分が露出するような据え方がなされていたようである。土間を挟んで馬屋側と、板床側に対応するように配置されている。この部分に太納穴付きの礎石が使用されているのは、柱の底面に太納が切られていたからである。この様な細工が施されるのは、主要な柱、例えば大黒柱級の構造柱が立っていたと見ることができる。7.43m (24尺)の土間空間を1本で支える梁組は、大径木が使用されている。少なくとも4本の大梁を支える柱も、同様に断面径は太かったと思われる、それを受ける礎石は必然的に他とは違う仕様になる。礎石の平面寸法は、上面で30cm角程度であることから、使用された柱材の寸法が想像される。

残念ながら「ほ・七」通りに対応する礎石が「ほ・十一」通りからは検出されていない。調査報告では、礎石が据えられた痕跡も確認されていない。当然「ほ」通りには大梁が架けられていたことは、梁組を想定すると間違いないと思われる。しかしそれを受ける柱を支える礎石の痕跡が無い場合は、「十一」通り「ろ」～「り」間5.57m (18.4尺)には梁が入られ、その上に土間を支える大梁が載る架構であったとも推測できる。

他は、川原石に見られる丸面の形状の物や、表面を削った石などが多く見られる。また北側及び「十一」通りでは礎石間に、「一」～「七」通り間はほぼ柱心通りに沿って軸線が直交する位置に礎石が配置されている。

側回りの北側及び「十二」通りの礎石間には、角状の礎が土台に沿って敷き詰められている。これは2号建物などにも見られるが、土壁などの見切りとして用いられていた地覆あるいは地覆石などを支えていたものであろう。

土台回り 土間回り及び馬屋の一部にかけて、土台の残存状況は良好であった。16cm程度の断面径を持つ部材は、栗が使用されていた。部材はほぼ同様な仕上げ、仕様で、隣の土台接合は、大方が横平納差し、柱納穴の他に、縦間渡し穴が刻まれている。

写真1及び2は、土台の継手部分である。継手には雇い鎌納が用いられ、胴付きの欠き込みが男木・女木に刻まれている。納及び土台には車知栓(しゃちせん)や車知道の痕跡が無いことから、土台に落とし込み接合していたようである。

また写真の土台には、榑端(ひばた)が付けられている。柱の内法に敷居を入れ、建具を建て込まない開口部では、このような装置が用いられる。榑端と呼ばれる縦



写真1 土台継手部分。雇い鎌納を使った継手。正面は底面で、礎石の面にひかり付けのための欠き込みがある。写真上面は土間内部側となり、大戸等の建具の敷居の役割をする付け榑端が見える。また、胴付きミゾがあることから、この材は女木である。



写真2 土台継手部分。雇い鎌納を使った継手。写真正面は上面となり、写真上面は土間内部側となり、付け榑端が見える。木口には胴付きが刻まれていることから、この材は男木である。

長の材を、土台との間に飼物を入れ、栓により固定する。この極端上面に建具を載せ、可動させる。この土台は、土間北側の「九」～「十一」通りの間に用いられたもので、この間に間口1間の建具が入れられていたと推定できる。

1間幅の建具は重量があり、それを支えスムーズに可動させるために、建具に戸車を付ける方法と、敷居にコロ等を埋め込む方法がみられる。本遺構では、極端が付くことから、建具に何らかの器具が付けられていたであろう。

室 2号床の西側に設けられている室は、土間より50cmほど掘り下げ、4面を石積みとする構造である。石積みの上端に椽を四周させ、南北方向に根太を2本、両脇に際根太（きわねだ）を入れ、板の入子蓋（いれこぶた）を受けている。北側の椽には、内側に添え木が付けられ、やはり蓋を受けている。この添え木には根太の納穴が彫られていた。根太の存在は使い勝手良くないため、通常は行って来い式に取り外し可能とするが、本室は固定であった。

5. 間取りの検討

1号建物の規模は、他の建物跡に比べ3倍以上の平面規模がある。この建物の特徴としてまず挙げられるのが土間の広さと、隣接して西に繋がる馬屋と推定されている範囲であろう。

馬屋と推定される範囲は、桁行方向「十一」～「十四」通り2.78m（9.17尺）、梁行方向「ろ」～「つ」通り12.06m（39.8尺）の範囲であり、ここには地盤面の掘り込みが見られる。この掘り込みの西側と南側の2方向には土台が残存し、遺構の状況から北側にも土台が設けられていたと推定できる。西側の現存土台に刻まれている枅穴は、土間側の掘立柱の柱穴と対応する。この柱列のみ掘立柱とするのは珍しい。

馬屋は、全体で5房設定でき、梁行方向におおよそ2.29m（7.41尺）間隔で4房が設定できる。南側の1房のみ規模が大きく2.78m（9.17尺）ある。

掘立柱の柱穴は「十一」通りから西に46.2cm（1.5尺）寄った位置にある。この柱穴は、各部屋を間仕切りの柱、また出入口を構成する柱が立てられていた。出土した柱より、おおよそ1.45mの間口には、厩栓棒（ませんぼう）、房境も同様な材により仕切られていたもので

あろう。また、土間境からは3点の飼葉桶も出土しており、馬屋の状況を推定することができる。

西側の外部には、木桶が2カ所埋設され出土している。馬屋で飼育された家畜の糞尿などを集め堆肥としていたようである。

同様な事例は、中之条町大道に建つ重要文化財旧富沢家住宅（主屋^{3）}などにも見られ、馬屋の構造や仕様など、本遺構を推定する上で貴重な参考事例である。



写真3 旧富沢家馬屋 厩栓棒を入れる柱及び間仕切りの柱には、土台が入れられている。

土間への出入口は、南側と北側のあわせて2カ所に設けられており、南側及び北側共に「十」～「十一」通りの間に開口部が設けられており、残存する土台には戸を受ける付け極端（つけひばた）があり、位置の特定ができた。

南側大戸脇の犬走りには、2号施設（風呂）が、軒内に設けられている。桁行1間、梁行は3尺で、広さから見ても湯桶を置いて利用する風呂形式⁴⁾であったと推定できる。南側及び西側の土台の上端面には、柱枅穴および板決りが見られることから、この面の外壁は板壁であったと思われる。北側の土台の中段には、柱枅穴、および縦間渡しの穴が穿たれていることから、土壁の存在が推定できるが、風呂である以上土壁は不適である。風呂の出入口は、必ずしも見え隠れの位置とは限らないが、本建物の規模や格式などを想定すると、土間側に想定するのが妥当であり、建具の下に土壁があった可能性も検討できる。

第4章 調査の成果とまとめ

2号施設の西側には、木桶が設けられ、ここから排水された水が埋設された竹管（直径7～8cm）を通して流れ込むようになっていた。木桶は、小便器を兼ねた役割もしていたと思われ、風呂水と共に堆肥として利用されていた。

土間の内部には3号・2号・1号床が張り出して設置されている。また1号床の脇には竈、2号床の脇には室、南側大戸脇に1号唐臼が土中に埋め込まれている。

3号床は他の床より低く、床構造から見ると、転ばし床と思える。材料の多くは転用材で、榎・大引などの構造材の納まりも簡易である。この床が、当初から存在していたかは疑問が残る。むしろ当初は囲炉裏を囲んでの土座程度であったものを、後に改修したのではないだろうか。

また、南側に45cm（1.5尺）程張り出した床は、後から継ぎ足されたものであることが部材の組み方から判明している。

2号床は上り縁程度、また室に関しては、土間面に框を四周させ、その高さに入子蓋を釘止めで張っている。室であれば、本来は上げ蓋が一般的であるが、釘止められている。利用目的は不明である。

1号床は他に比べ、張られている板幅が狭く、残存する床板では珍しい。脇に竈があることからみれば、1号床はカッテとしての機能を持っていたとみて良いであろう。

土間北側に接しては、東西方向1.7m、南北方向1mの平面規模で、3方を高さ25cmほどの板枠で囲まれた範囲の上に、床を持つ1号施設がある。床は、板戸を転用したか、あるいは角材を床組として組み、簡易な板床を構成していたと推定できる。この施設には、土間からの北側に延びる下屋の存在が、残存する礎石3個や、軽石の降灰状況、雨落ち溝などから推定できた。規模は、南北1.82m（6尺）、東西7.42m（24尺）であったと推定できる。この下屋内からは、1号施設の他、東隣りに土中に埋められ、口縁内側に木桶の枠が入り込まれた状態で出土した2号唐臼、西側には上臼のみの石臼が出土している。また1号土坑は、唐臼を掘りあげた跡であるとの調査報告がなされている。これは、土坑の西から杵を付けた台枓を支える支柱が検出されており、この支柱に、台枓を組み込んだと想定すると、柄木の一方が土坑位置

と一致することから推定された。

一方、2号唐臼は土間内から発掘された唐臼とは、内部の形状が異なっている。唐臼の場合、内部の形状は口縁部に向かい内に返る徳利型の形状を持っている。しかし、2号唐臼は、通常の餅搗き臼と同様に、返りの無い形状である。形状の違いについては、『武蔵野の水車遺産について』⁷⁾で、「米搗きと麦搗きでは、内部の曲率が異なる」との報告がなされている。2号唐臼は餅搗き臼の転用の可能性もある。地中に埋め込んでの使用は支柱などを使用し、木桶枠は穀物を搗いたときに、はね返りが外にこぼれないような役目があったのではないだろうか。しかし、作業効率からみれば、唐臼が優れており、被災時には2号唐臼は利用されていなかったと推測できる。いずれにしても、一軒の農家が構える規模としては大きく、1号唐臼を含めると、かなり専門的に製粉や精麦、精米等の作業が可能であったと推定できる。



写真4 旧富沢家唐臼

4号及び5号、6号床は床仕上げ材が残存していることから、板敷きの部屋であったことが判明している。桁行方向は4.64m（15尺）を二間の等間割りとし、一間は2.32m（7.5尺）で、特徴がある。

北側の4号床には炬燵、南側の6号床には2号囲炉裏が設けられている。

部屋の仕切りを特定できる遺物は検出されていないが、「よ」通りには足固めの部材が残存している。この足固めは、しっかりと柱に差し込まれていたようで、「七」通りでは唯一、柱の通り心と床下構造が一致するのモト

微である。この部分に間仕切りを設けることは可能である。

上部構造を推定すると、北側に3尺張り出していることにより、この部分は下屋となる。そのため、天井は屋根が葺き降ろされ、屋根下地が直接露出していた可能性がある。炬燵が設けられていることを併せて考えても、4号床は建具などで間仕切られた内向きの部屋であったと推定できる。

一方、5号及び6号床は、残存部材から両室が間仕切られていた痕跡は検出できない。むしろ2号囲炉裏を中心とした一部屋、板敷きのヒロマとみるのが自然であろう。

7号・8号・9号床については、調査報告から4号・5号・6号床の床高より約10cm高いとの報告がなされている。この数値は、1号囲炉裏の構築状況から求められるもので、囲炉裏の構造上、枳縁の存在は想定できることから、枳縁寸法を差し引いた数値が床高となる。これを踏まえ、枳縁厚を5～6cm程度と見込み、4号・5号・6号床が板敷きであったとすると、その面より枳縁の見込み寸法を差し引いても、床高は4cm程度低くなる。その差から推定するなら、この部屋には畳が敷き込まれていたことも想像でき、床の仕上げに違いがあることが推定できる。

建築部材が残存していないことから、3部屋に仕切りがあったかは不明である。しかし、7号床と8号床との境である「わ」通りには、唯一土台痕が残っていること、また「と」通りの礎石には、土台と思える圧痕が検出されていることから、それぞれの室間には間仕切りが存在していた可能性が高い。

7号床の北面には、間口2間、奥行き1尺の張り出しが、土台から確認できる。ここには、簡易な床構えの存在が推定できる。

また9号床には、小規模ながら1号囲炉裏が存在していた。

6号床から7号・8号・9号床にかけて、鉤の手に縁が回っていたことが礎石から推定できる。

7号床の北側には、3号施設が存在していた。1号建物の北東隅に雨落ち溝が張り出し、礎石が1個、また礎石を撤去した痕跡が確認されていることから、この位置には主屋から張り出した建物の存在が推定できた。規

模は、東西方向1.82m(6尺)、南北方向は1号建物の「つ」通りより3.03m(10尺)の礎石上に柱心が想定でき、この柱心位置から3号施設を重ね合わせると、東西方向もほぼ同一通り心上に設定できた。

以上のことから、3号施設は1号建物の付属施設で、部材は土台及び板床であったと推定できる。北側の「む」通り隅には枿穴があることから、ここに柱が立つ。また「む」通りの中央である3尺の位置にも枿穴があることから、ここにも柱が立っていた。全体の規模は判明しないが、この位置にある建物であるなら、内便所等も想定できる。しかし、遺構から便所等の存在を推定させる遺物は検出されていない。

この建物は、「一」～「二」通り間に想定した縁の北側で、1号建物と繋がっていたと思われる。

6. 建物の推定について

上屋及び構造 本遺跡の特徴として、建物の上屋構造を知る遺物がほとんど検出されていない点が挙げられる。これは、近隣の遺跡も同様である。特に、1号建物の外観を推定する遺物や資料は皆無であった。唯一、上屋の形状を推定する貴重なヒントを与えてくれたのが、雨落ち溝の位置である。一般的に見られる建物より軒の出が多いことが、溝の位置から推定できる。これは屋根形状に絡む問題であり、併せて屋根構造を検討する必要がある。

一般的には、寺社建築等の大規模な建物や、書院、数寄屋建築等では、軒の出や、下屋、庇が深い事例が多い。民家建築では、茅葺き屋根の場合、屋根下地を含めた屋根構造がしっかりしていない限り、これほどの軒を四周させるのは困難である。また、下屋を回す場合は、柱が必要でその痕跡が無ければならない。本遺構は、側柱が立っていたと推定する礎石は南面及び東面のみで、その柱心通りからも約2.1m(7尺)は出ている。これほどの深い軒を一棟で確保するには、茅葺き屋根では困難とみるべきである。

現在、この付近で多く見られるトタン瓦葺き総2階建ての建物等では軒の出も多く、屋根構造の問題も解決できるが、これらの建物は養蚕が導入されて以降の建物である。しかし、平屋の板葺きあるいは杉皮葺き等の建物であれば、軒の深い建物を構築することができる。近似の事例としては高岡市に移築保存されている重要文化

第4章 調査の成果とまとめ

財田茂木家主屋であろう。板葺き切妻屋根で、登り梁等の構造部材を太くすることにより、深い軒を作り出すことができる。

屋根材については、近隣市町村である六合村¹⁰⁾や中之条町⁹⁾、高山村⁴⁾など現存する多くの建物は茅葺きであるが、板葺き屋根の存在は否定されていない。本遺構から屋根材の遺物が検出されていない以上、板葺きや杉皮葺き屋根建物の存在は否定できない。

間取り

1号建物は、前述のとおり西側に土間を持ち、中央に板敷きの部屋が2室あるいは3室、東側に床構えを持つ部屋が3室並ぶ間取りと推定できた。

各部屋の特徴を再度検討すると、土間は当地方では「デードコ」とも呼ばれ、土間を総称している。土間には、板敷が3カ所張り出している。北側の1号床は、竈とのセットで、カッチの機能を有していたとみて間違いないだろう。しかし、屋内には流しを設けた痕跡は無い。前述したように、北側の下屋内の4号溝沿いに流し場が設けられる外流タイプであったようだ。

2号床については土間境に設けられる上り縁。3号床は、前述したように、転用部材の使用や柱との取り付け方など、当初からの存在であったかは疑わしい。しかし、これほどの規模を持つ建物としては、家族以外の利用者、例えば小作人等の労働者や、馬を利用する人足の存在も推定できる。このような人々の利用を考慮して、大型の間が裏を中心とした簡易な床構えの板の間を増築したとも考えられる。

西側に隣接する馬屋は、推定では5頭の家畜に対応ができる規模である。1軒の建物としては別格といえよう。個人の農家として検討した場合、これ程の規模を必要としたのかは疑問が残る。旧富沢家の事例⁹⁾等を考えあわせれば、街道を使った交易などに絡む施設を兼ねていたと考えるのが妥当とも思える。

中央の4～6号床の板敷きの間については、北側の炬燵を持つ部屋は、「コジャシキ」あるいは「ヘヤ」と呼ばれる、納戸あるいは寝部屋等の機能を持った最も内向きの部屋であったと推定できる。

また5号・6号床については、2部屋か、あるいは1部屋か特定できない。近隣の事例から推定すると「ザシキ」・「ジャシキ」・「チャノマ」と呼ばれる、ヒロマとし

ての機能を持つ部屋であったと推定できる。家庭生活の中心として、また簡易な接待などを行なう部屋として、内向きの空間であったと推定できる。



写真5 旧富沢家 デーよりナカノデー、ジョウダンを見る。

7号・8号・9号床については、7号床北側に床構えが推定できることから、「オクリ」あるいは「オクリデー」などと呼ばれる上座の機能を持っていたと思われる。それに伴って8号及び9号床は、2部屋に仕切られていたと推定すれば、南側は「デー」と呼ばれる部屋であったと思われる。前掲の旧富沢家では「デー」、「ナカノデー」と続き、床構えを持つ部屋を「ジョウダン」と呼んでいる。いずれにしても、これらの部屋は、本建物中最も表向きの接客空間として位置付けられる。

これらの部屋の南側・東側には鉤の手に回る縁が推定できる。東の縁からは、北に別棟として存在していた3号施設に連絡している。3号施設の機能については不明であるが、外周を回る雨落ち溝の存在、縁と施設の間関係などから、少なくとも本建物と同時期の建立とみて良いのではないだろうか。

以上の特徴から見て、1号建物の間取り形式は、床をもつ部屋の間仕切り位置について確定できないため、限定はできないが、喰違い四間取り（くいちがいでつまどり）形式あるいは大規模型式、多室型式となろう。

7. 前身遺構について

土間の下から8号溝が検出された。4号建物の西側、山止めの石積み沿いから1号施設脇を通り、土間内部に入り込み、ほぼ土間と馬屋境を南走し、中ほどで西に転じ1号桶を横断するように西側の石積みに向かっていく。構築状況から判断すれば、溝を壊し、桶が埋設されたことが判明している。

構造は、割石で両側を積み、石蓋をかけ、上に土間土

が32～36cmほど被されていた。

1号建物は、この8号溝の上に構築されている。調査報告では「土間を含め建物の西から敷地西側は造成・拡張されている」との報告がなされていることから、1号建物は、8号溝構築以降、西側の敷地が拡大・造成された後に建設されたと推定できる。

1号建物以前、前身建物の存在であるが、確かに「7」通りを境に、想定した柱心に食い違いが見られるのは、報告の通りであり、増改築の可能性は十分に考えられる。しかし、土台がこれほどの規模、内容で出土していることは、仮に前身建物を組み込んで規模の拡張を図ったと推定しても、相当大掛かりな施工を伴うものである。

今回の発掘された遺物や資料からは、これ以上の推定はできない。

8. まとめ

本建物は平面規模の大きさ、南側軒内に設けられた風呂、馬屋施設の容量、土間北側に設けられた唐白を中心とした施設等、同地域から検出されている住居遺構とは全く性質の異なる規模・内容を持っている。

また、検出された土台は、当地方の民家形式や構造を知る上で貴重な技術資料である。この時期、土台を持つ建物の事例は少なく、北西より検出された5号建物のように掘立柱建物が同一地区に併存している。隣接する中之条町の調査報告を見ると、17世紀中頃から18世紀末までの民家で土台を持つのは1軒のみである。この1軒は、前述した旧富沢家である。高山村の調査報告では、19世紀に入らないと土台の存在は報告されていない。

いずれにしても、1号建物が存在していた18世紀後期に、これ程の内容や構造的特徴を持つ建物は少ない。一つの指標となり得る建物跡であり、貴重な遺構といえよう。

2号建物

1. 遺構の検出状況と規模

2号建物は、1号建物の南方向に約12m離れて建てられている。

建物跡は、長軸（桁行）が東西、短軸（梁行）は南北を向く配置である。

遺構の規模は、桁行6.18m（20.4尺）、梁行は2.73m（9尺）、面積16.9㎡（5.1坪）である。

検出された遺構からは、木桶が8本検出されている。北側および南側の東寄り2本は、底直径0.98m（3.2尺）、深さ0.9m（3尺）程の桶、残る2本は底直径0.89mの桶が4本ずつ出土している。

建物の遺構としては、土台が西側の全てと、南側及び北側の西寄り2/3程度に残存し、西側2カ所の隅では土台が組まれた状態で出土している。南側及び北側の東寄り1/3と、東側には土台は残っていない。

土台下からは、50cmほどの玉石状の礎石が10個、また礎石間からは、割栗石程の石が地覆石状に敷き詰められた状態で検出されている。礎石は、東側・西側・北側の土台筋に見られるが、南側からは検出されていない。

2. 遺構の残存状況

遺構の周辺からは、南側から土壌と思われるものが比較的広範囲に、また北側及び西側からは肥料と思われる物も検出されている。

木桶 桁行方向に1列4本、南側列（5～8号桶）、北側列（1～4号桶）との2列に並んで配置されている。土台内側の土間を1mほど掘り下げ、木桶口縁部を土間面からほぼ7～8cm出し、埋め込んでいる。

内部からは、完形の板が12枚、腐食した板を含めるとそれ以上の点数が検出されている。1～4号桶の上面には、長さ155～165cm、幅約24cm、厚さ約3cmの板が被された状態で、また、東側及び西側から検出された板には、対で、長手方向の中ほどに欠き込みがなされている。木桶に被せ使桶（俗に二本桶等と称される）として利用するための踏み込み板であったことが想定される。同様の加工が施された板が他にも出土していることから、少なくとも2カ所以上使桶として利用されている。他の板は、蓋として使用されていたようである。

基礎及び土台 基礎は、礎石が東側・西側・北側の土台通りに残っている。四隅及び東側間は1カ所、西側間には2カ所、北側間では3カ所である。南側には礎石が見られない。また、各礎石間には角状の礎が敷き詰められているが、南側は通して敷き詰められている。

土台は、西側には全長約3m、断面径15cm角で完形品が残る。一方、南側及び北側にも土台は残っているが、いずれも東寄り1/3と、東側の土台は無い。北側及び南側の土台は、それぞれ西側の土台と組まれている。

残存する土台には枿穴が刻まれている。また、西側の



写真6 2号建物北側からの全景
土台南寄り一間と、北側の各柱間には、壁下地となる縦間渡しの欠き込みが見られる。

北西側から検出された1号施設は、柱及び貫、竹簾状の遺物から構成されている。北西に向かって流れた泥流により押しつぶされ、この位置に運ばれたと思われるが、位置的に見て2号建物の一部、外壁を構成する部分と見ることができる。柱材には、南面上部に貫が差し込まれた状態、上面には4段にわたり貫穴が確認できる。その下に位置するように、竹簾状の遺物が検出されている。さらにその下からは、およそ1cmの厚さで壁土が検出されているが、壁下地となる小舞竹などは無かった。

外構 西側には、2号建物と平行して角及び丸太による土留めが検出されている。この土留めは、建物からはおよそ90cm～1mの間隔を置いて設置されている。

3. 使用尺度

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行方向、梁行方向共に30.3cm（1尺）としている。

桁行は全長6.18m（20.4尺）を四つ間割りとし、一間あたりを1.55m（5.1尺）としている。一方、梁行は全長2.73m（9尺）を二間とし、南一間を1.21m（4尺）、北寄りの一間は1.52m（5尺）としている。

4. 検出された遺構に見られる技術について

残存する土台隅の納まりは、南西隅については、南側の土台を平納とした男木、西側土台に納穴を開けた女木とする納差しである。更に、上面に柱の納穴を彫り、柱を立てていたと思われる。

写真7を見ると、納穴は2段に穿たれていることが判る。ここに立つ柱は重納（じゅうぼぞ）が切られていたことが推定できるが、土台の隅柱の納としては一般的ではない。



写真7 南西隅の土台隅の納まり。平納が差され、隅柱の重納に対応するため、二段に穴が刻まれている。

一方、北西角の土台隅は東西方向を下木、南北方向の土台を上木とした相欠きとしている。更に、上木には納穴が刻まれているが、下木までは伸びていない。この部分で折れてしまっているため、納穴全体の形状は確認できない。しかし、隅柱を立てる納穴としては簡易すぎる。本来の土台隅の納まりとは考えにくく、この点から考察すると、北側に土台が突きだしていた可能性もある。

1号施設に残る柱には、南面上段に貫が差し込まれていること、東面には4段に貫穴が見られることなどからして、北西隅の柱であったことが想定できる。また、この柱に絡んで検出されている竹の簾状遺物については、使用状況の特定は困難である。しかし、前述の柱が北西隅の柱であった場合、西側の一間には壁の痕跡が無い。この点からみれば、この間は開口部と推定できる。土壁が検出されていることから、開口部の上部、小壁には土壁、その下、内法間には竹簾のような目的で使用されていたと見ることもできる。

また、竹を押しつぶして簾状に広げた「ひしぎ竹」を利用したひしぎ竹壁、あるいはひしぎ竹を下地とし、その上に薄く壁土を塗った塗り壁などの事例もある。このような柱間の仕様であるならば、土台に痕跡が検出できなくとも問題はない。

5. 建物の推定について

本建物は、人糞や家畜糞、また蚕糞と思われる物を混ぜ、発酵熟成させ堆肥とする「ナラシダメ」の施設であったこと、また、便所として人が利用していたとの推定が報告されている。

土台に囲まれた屋内に8本の木桶が理め込まれ、周囲からは石灰が混ぜ込まれた蚕糞や肥料の痕跡が見られる

など、一軒の家にこれほど多数の木桶を持つ肥料小屋があるのは珍しい。1号建物（主屋）内には、4～5頭の家畜を飼うことができる規模であったことから、そこから排出される糞尿を利用して堆肥を作る施設は、それに見合う規模が必要だったのであろう。

遺構から建物を復元すると、まず南側の現存する土台には、約1.5m（5尺）間隔で2カ所の枘穴があり、さらに欠損した部分にも枘穴の存在が想定できる。この土台には、枘穴の間隔や大きさから、3本の柱の存在が推定できるが、礎石が検出されていない。柱間には、壁下地の痕跡は確認できない。また、西寄り一間の土台は、他に比べ上面に摩耗が見られる。このことから、開放あるいは簡易な嵌め込み戸等が想定でき、人の出入りが多かったのではないだろうか。

北側には、同様の柱枘穴が2カ所の柱枘穴が土台に残っている。礎石の配置などから、欠損した部分にも柱の存在が想定できる。柱間には、壁下地となる縦間渡しの欠き込みがあることから、全面が土壁か、窓などの開口部を持つ土壁と推定できる。

西側は、柱間の割り付けを等間割りとしせず、南寄り4尺、北寄り5尺としている。いずれも枘穴下には玉石状の礎石がある。北寄りの柱間の土台には土壁下地の痕跡が無く、また上面はかなり摩耗している。前述したように、1号施設として北西隅に立っていたと思われる柱や、その間にあったと思われる柱間装置が検出されている。土台に壁の痕跡が無く、土台上面が摩耗していることは、少なくともそこに開口部が存在し、人通りがあったとみるべきであろう。開口部上部には、小壁が存在していたことは十分に考えられる。簡易な壁として、むしろ竹下地に薄く土を塗る壁とも思える。また、最寄りの木桶は便所として機能していたようであるため、出入口となるこの部分には目隠しとしての簾が掛けられていた、とも推定できる。いずれにしても、この部分は開口部であったとみて問題ないであろう。

北西隅の土台の仕口には、納まりに不自然さが認められる。通常は南西隅のように平納差しとなり、そのために枘穴は重納に対応して、2種類の枘穴が見られる。相欠きとし上木に枘穴を開け、柱を差し込む仕口は簡易すぎ、柱がしっかりと立つには十分な深さを確保できない。このような納まりがなされているのは、改修などによる

ためか、転用材などを使用したためである。また、この部分の土台状況からみると、北側に延びていたことも想定できる。

外部は、西側には溝を構成する土留めがあるが、敷地が北西から本建物に向かって傾斜が認められることから、むしろ建物内への水の流れ込みを防ぐ堰のような役割があったようである。

いずれにしても、本建物は堆肥小屋として存在していたことは間違いない。

3号建物

1. 遺構の検出状況と規模

3号建物は、1号建物と2号建物の間、ほぼ1号建物の南東方向に位置している。南南東に長軸を向け、北側及び西側には鉤の手状に落着き溝がある。また東側から南東側は、約1mの落差を持つ石垣により屋敷境をなす。そのため、これ以上、平面規模の広がりはない。

遺構の規模は、東西方向（桁行方向）が6.66m（22尺）南北方向（梁行方向）は5.76m（約19尺）、面積38.4㎡（11.6坪）である。

2. 遺構の残存状況

礎石は、建物の柱通り筋筋から検出されている。ただし、西側通りには南北の隅に礎石は検出されているが、その間には無い。礎石の通り心とほぼ同一に、西側通りの南北方向、それと直交するように中通りの東西方向に、土台と推定できる痕跡がみられた。また西側の土台痕は、北側に延びる可能性がある。

3. 使用尺度

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行方向及び梁行方向共に30.3cm（1尺）、1間を1.82m（6尺）としている。

4. 建物の推定について

本遺構からは、礎石及び土台痕と思われる遺構が検出されているのみで、他に建物を推定する遺物は確認されていない。使用されている尺度から推定すると、1尺を30.3cm、桁行方向は22尺を等間割りとし11尺の二間、梁行方向は南寄り12尺、北寄りは7尺とする整った柱間寸法が用いられている。また、礎石及び土台痕らしき状況からみれば、土台を持った建物と見るのが妥当である。

また、床を構成すると思われるような遺物は検出され

ていない。

北側の桁行方向22尺(6.66m)、梁行方向7尺(2.12m)の範囲は、土層を見ると1号建物の庭を構成している盛土が、この範囲に入り込み、中通りの柱筋で終わっている。一方、南側の部屋の土層は、北側の庭から入り込んでいる盛土の下にある土と同じである。土層から見る限り、明らかに北と南の部屋を構成する土間には違いがある。

これらのことから3号建物を推定すると、南側は桁行方向22尺(6.66m)、梁行方向12尺(3.64m)の範囲で壁などで囲まれた部屋、また北側は3面が開放された下屋であったと考えられる。西側の土台痕は北に延びる可能性もあり、壁の延長も検討できるが、間取り構成への影響は考えにくい。

1号建物及び2号建物などの位置関係からみると、1号建物に付随する納屋あるいは物置などの機能を持った建物であったと推定できる。

4号(8号)建物

1. 遺構の検出状況と規模

4号建物は、1号建物の北側から床・大引・土台・床板・柱・敷居の一部、また土壁の一部が出土した。

この4号建物の床筋の下からは、8号建物の礎石のみが出土している。

4号建物は、2号屋敷跡をはさみ背面に山の斜面地が迫る。遺構は、長軸(桁行方向)がほぼ南東を向く。規模は、東西方向(桁行方向)が5.75m(約19尺)、南北方向(梁行方向)は3.64m(約12尺)、面積20.93㎡(6.3坪)である。天明の災害に際して「泥流により西方向に約13度回転しながら南側に約1.5m移動した」と調査により報告されている。

8号建物の礎石群は、4号建物の北東方向に位置している。長軸を東南方向に向け、その南西部の半分を4号建物により覆い隠された状態で出土している。

規模は、礎石より想定した通り心から、南北方向(桁行方向)が5.46m(約18尺)、東西方向(梁行方向)は3.64m(約12尺)、平面規模は19.9㎡(6坪)である。

礎石は、通り心と推定できる位置には11個、北側の隅のみ土坑状で、礎石は確認できない。この土坑について、調査報告では「天明三年当時には取り除かれて、浅い凹

みとなっている」と所見が述べられている。

礎石に囲まれた範囲は、角礫が敷き込まれた状態で検出されている。また、東側寄りには20～40cm大の石が、おおよそ1m角の方形に敷き込まれ出土している。調査報告では、囲葺裏の基礎となる石組みの可能性が高いと報告されている。

2. 遺構の残存状況

基礎 4号建物は、出土時に「8号建物の礎石の一部を再利用されている可能性……(中略)……南側土台の両木口付近及び土台の下からは比較的厚い平面形状の板材が数点出土していることから、これらが礎板として土台と地面との隙間を埋め、土台を保持するために使用されていた可能性もある。」との調査報告がなされている。

8号建物は、礎石の範囲及びその周囲、桁行では東側及び西側では2m、梁行では南側では60cm、北側では1mほどの範囲に中礫が敷き込まれている。敷き込みの厚さは、30～50cmが計測され、その上に玉石の礎石が据えられている。

礎石の外周の表面、犬走りと呼ばれる範囲には、5～10cmほどの礫が5～10cmの厚さで、密に敷き込まれている。

柱 4号建物の北側土台には、3カ所、柱の下部が残っていた。柱間寸法1.92m(6.33尺)の間隔で、そのうち2カ所は大引の枡が差し込まれた状態で検出されている。

いずれも、枡穴の上で折れており、枡道のみ確認でき、それより上の部分は無い。

土台 4号建物は、東側・西側・南側・北側の土台が残存していた。

西側の土台は、北側の土台に、枡が差し込まれたままの状態が出土している。一方、南側は短枡が切られ、南側の土台に大入れて差し込まれていたようだが、外れていた。

東側の土台は、北端部が腐朽していたが、北側の土台に平枡が差し込まれた状態で残存していた。また南側は、東側土台を上木に、渡り腰(あご)あるいは渡り掛けで組まれていたようだが、下木となる南側の土台が、南方向に90度回転し、西側の土台と共に外れた状態で検出されている。

その他 4号建物の土台南側に柱材と思われる角材が出土している。西側が柱の上部と思われるが、西寄り1/3ほどの位置で折れている。材の上端には枿が切られているが、下端には無い。東側、柱下部と思われる方には、榎あるいは敷居と思われる大入れの欠き込み、その上には2方向からの穴、さらにその上には敷居あるいは無目の大入れ欠き込みが見られた。

下部の榎あるいは敷居の大入れ欠き込みから約2.2m(7.3尺)上には、鴨居の横目違い枿欠き込みが見られ、直ぐ上に塗り込み貫穴、さらに小壁貫穴と思われる掘り込みがある。明らかに柱材であることは、加工痕により想定できるが、4号建物の柱として使われていたかは不明である。

北側土台に沿っては、若干土台より短い寸法で角材が検出されている。全長5.54m(18.2尺)、12.7cm(4.2寸)角ほどの断面径を持ち、出土状況では、上面には東側より3カ所の柱納穴と、小舞穴と思われる彫り込みが納穴間にみられる。納穴間の寸法は1.8m(5.94尺)で、ほぼ6尺に近く、小舞穴はこの間に約6カ所、ほぼ1尺ピッチで彫られていることから、一般的にみられる小舞穴とみてよいであろう。これらの特徴からみれば、桁の特徴をよく残している。しかし、4号建物に使われていた桁とするには、土台に残る柱納穴間の寸法、つまり柱間寸法に違いがあり、疑問が残る。

東側の土台に沿っては、北端部が腐朽した部材が出土しているが、使用目的は不明である。

大引・根太・板床 大引は、南北方向に1.92m(6.3尺)間に2列配されている。それぞれ北側には枿が残っているが、南側の端部は腐朽し、全体は確認できない。

根太は東西方向に配されており、16本出土している。東側土台に沿っては、根太掛けが1本入れられている。根太の長さはおおよそ3種あり、繋ぎは大引の上でなされているが、西側のみ全て土台に掛けている。

床板は、残存状況のよい板が6枚検出されている。南北方向にいずれも釘止めで、木裏を上面に敷かれていた、と調査報告がなされている。

南西寄りの床には約83cm(2.74尺)四方の、方形の開口が設けられている。

土壁 北側の土台上、三間の柱間から小舞下地の土壁が検出されている。壁厚は8～10cm程度、小舞は縦方

向が竹あるいは木で2～3cmピッチ、横方向は割竹で、出土した範囲で3段ほど確認されている。壁土は黄色のロームが使用され、中塗りや上塗りは確認されていない、との調査報告がなされている。

1号施設 遺構北西側から検出されている。柱の一部や板、内法、根太等が検出されている。施設全体は西方向に倒壊している。柱の東端部にあたる位置には、南北方向に配された大引があり、そこには柱の納穴がある。この状況から推測すると、1号施設は、この納穴を使用して立っていたと思われる。

3. 使用尺度

4号建物に使用されている尺度を検討すると、桁行方向、梁行方向いずれも30.3cm(1尺)である。柱間寸法は、桁行方向は1.919m(6.33尺)で、3.3寸間が延びている。一方、梁行方向は1.82m(6尺)である。

8号建物は、桁行方向、梁行方向いずれも30.3cm(1尺)、1間を1.82m(6尺)としている。

4. 検出された遺構に見られる技術について

4号建物の南側土台と組まれる西側土台は、南端に短枿が切られていた。また東側土台の南端部は、渡り窓あるいは渡り掛けとなっている。一般的に、土台の組み方としてはこのような接合方法はあり得ない。そのため、泥流で押し流された際に組み手が外れ、東側・西側・北側の土台がそのまま南側の土台上を転がったため、南方向に90度回転してしまったのであろう。

北側土台に組まれる西側土台、東側土台の端部は、いずれも男木で、平納差しとなっている。

西側土台には、北寄りに継手が残っている。継手の両端部には目違いが見られるが、大枿の穴が無いため、追掛(おっか)け継ぎと思われる。一般的に見られる土台などの継手の一種である。

西側の大引は、中程に納穴が穿たれている。また北端部は、下小根枿(したこねぼぞ)が切られており、土台に残った柱に差し込まれていた。東寄りの大引は、囲好裏と思われる位置の東際に位置しており、好縁を兼ねていたようだ。

南側土台脇から出土した柱に見られる加工痕を見ると、下端に枿が切られていないのは不自然である。下段の2方向の穴は貫穴と思われるが、このような場合、隅柱あるいは間仕切り壁が設けられる場合に見られる。内

法間には納穴など見られないことから、3面は開口部、1面は外部に面する位置に立っていたと推定できる。この場合、下段2方向の穴は床下の根太及び納穴とみることができ、下端に納が切られていないのは、礎石に直接立石場建ての柱であつたと考えられるが、土台を持つ本建物の構築部材と考えるのは困難である。

5. 建物の推定について

8号建物の礎石柱心通りから推定した柱間寸法と、4号建物の柱間寸法には、梁行方向は同じ3.64m(12尺)であるが、桁行方向で1尺の寸法差が生じている。4号建物の桁行柱間寸法は、一間が1.919m(6.33尺)、8号建物では1.82m(6尺)と、一間当たり3.3寸の差が生じている。この差から見る限り、8号建物と4号建物の建設時期は一致しない。むしろ、礎石と同時期の前身建物が、かつて存在していたことを推定させる。

その後、この礎石を利用して4号建物が建てられた。土台を持つ建物であるために、再利用は可能ではある。4号(8号)建物推定復元図では、8号建物の礎石上に、4号建物推定復元図を配置した。この検討で、最も重要な点は、板床の開口部や、大引と方形の石敷範囲との位置関係であったが、図からもわかるように問題は無い。このことから8号建物の礎石に、4号建物が建てられていた時期があつたことは、十分に考えられる。

次に、4号建物の位置であるが、調査報告では「西床下には9号畑」があること、「この建物の雨落ち溝と考えられる溝で囲まれた区画と出土状態の建物とは平面上合致しない」とのことから、泥流により押し流され、出土位置に移動したと報告されている。さらに、天明の災害前に敷地西側を拡幅して8号溝を廃棄し、1号建物の建設がなされた。そのため、1号建物以前に建てられていたと推定される4号建物を曳き家し、屋敷配置を整えた、との解釈がなされている。曳き家された位置からは、東側と北側の土台位置であつたと思われる所から、基礎の代わりとなる厚板等が検出されていることも報告されている。

確かに4号建物の出土位置は、泥流により流されていることは、ほぼ間違いないであろう。天明の災害を受ける前には、出土位置より1.5m北側、約13度西に回転した位置に曳き家されていた。北側の土坑は、災害以前に礎石が掘り出されていたなどの知見もあり、曳き家され

ていた点は否定できない。

また、上記推定建物位置の周囲には1号建物の北側雨落ち溝を共有しながら東側と西側に雨落ち溝が設けられている。災害時以前にはこの位置に曳き家され、1号建物と共に、屋敷配置が整えられたようである。

8号建物の礎石下、中礎の層であるが、一般的にみれば上屋建物の基礎を構成する割栗地業とみることができ、しかし、このような平面規模及び軒内と思える範囲まで割栗地業を行う事例は珍しい。一般的には、石場建てなどの独立基礎地業の場合、単独で割栗地業が行われる。土蔵造り等の上屋が重い場合、切石などによる布石積みとし、布掘りの線上に地業が行われる。しかし、これほど広範囲に割栗地業は行わない。施工理由としては、建物が建つ地盤の強化や、土壌改良といった点が検討できる。

上屋との関連から推定してみると、4号建物の場合、土壁の一部が検出されているが、特異な壁下地や壁量が検出されている訳ではない。前身建物については不明であるが、上屋構造との関係は想像しにくい。

次に、床構造から検討してみる。4号建物の床高は、地面からの床高25～35cmとの調査報告がなされている。発掘調査では、床束等の遺物は検出されていない点などからも、4号建物が8号建物の基礎を利用して建てていた時期には、床の構造は転ばし床であつたとみて間違いないだろう。その場合、大引の下に礎石を配すれば十分である。

この地業の目的は、4号溝及びその後にある山、地盤の造成経緯等から推定すれば、水分の多い地盤に対して礫を敷き込み、転圧することで土壌を改良し、地耐力及び排水力を向上させる目的であつたと推定できないだろうか。であるなら、少なくとも4号建物があつた時期は、床構造が転ばし床であつたとしても説明はつく。

また、側回りに敷き込まれた小礎は、上屋の軒内、犬走り部分を構築するために、割栗石の目潰し石として敷き込まれたと推定できる。

4号建物の間取りについては、西側の大引の途中で納穴が彫り込まれている。1号施設の柱底部は、この納穴に立っていたと推定でき、ここには唯一界壁が存在したことになる。調査報告では「根太や板が出土していることから、他より1段高い床を張った部屋であつたと推

定している。しかし、2本の根太状の材や板材の出土は、板壁を構成した胴縁とみることでもでき、板壁が倒れて出土したとも考えられる。

4号建物は、内部が少なくとも2部屋で構成されており、東側の部屋には囲炉裏に似た形状で床が開かれている。囲炉裏に伴う石組みや灰などは検出されていないが、置きベツツイ等が置かれていた可能性もある。

いずれにしても、4号建物は残存する部材の状況などからすれば、転用材を相当量使用した建物であったと推定できる。また、南側の土台の組み方等に見られる施工技術は、簡易な手法である。北側の土壁を除いて、他の外壁を想定する痕跡が見られないなど、大規模な改造などが行われたことも推測させる。

建物の仕様や規模、内部の囲炉裏状の設備などから推定すれば、人の居住した建物であったとみることが可能である。また、規模的には1号建物の主屋に対して倉等の収蔵を兼ねた施設であったとも考えられる。

5号建物

1. 遺構の検出状況と規模

5号建物は、1号建物の北北西、2号屋敷跡内に位置する。建物の背面には山の斜面地が迫り、敷地は東側・西側・南側に開けるように位置している。建物跡は、長軸がほぼ東西に延び、南南東側に正面を向ける配置で、掘立柱建物遺構である。

検出された遺構は、東側に土間及び馬屋、西に床板等が残る床部分である。土間の北東側は攪乱があるため、馬屋に絡む遺構が一部残存する他は残っていない。

遺構の規模は、東西方向（桁行方向）が11.83m（約39尺）、南北方向（梁行方向）は6.55m（約21.6尺）、面積77.49㎡（23.4坪）である。

2. 遺構の残存状況

土間 遺構の東側、土間には馬屋と推定される範囲に2.2m×1.8mほどの掘り込みが見られ、その北側には土台と思われる角材が残存していた。

また、1号床と土間境の南側柱沿いに、長さ2.64m、幅11.5cm、厚さ7.5cmの方形木材が検出されている。長軸方向の片面には、2本の溝が彫られた数居あるいは鴨居状で、中央の片面には長さ18cm、幅3cmほどの欠き込みが見られる。

土間中央部には木製の1号施設及び2号施設が検出されている。残念ながら、その他は攪乱により遺構の確認ができない。

床 一方、西側の床部分は、南側に1号・2号床、北側に3号・4号床がある。南側は桁行7.3m（24尺）、梁行3.8m（12.5尺）の範囲に幅30cm、長さ1.8mほどの板が2列にわたり張られている。1号床の中ほどには、80cm×86cmほどの囲炉裏が残存している。

この1号床及び2号床の一部には、葎が敷き込まれていたようで、その痕跡が検出されている。

一方、3号床は東西3.6m（12尺）、南北1.82m（6尺）の範囲に、東西に長く竹を敷き並べた竹貫の子床、東隣の4号床は西側の1.9m×1.7m範囲が竹貫の子床であるが、竹の敷き並べが南北方向となっている。また、東側は板張りとなっている。いずれも、葎敷きであったようで、表面に遺物が残存していた。

柱 柱は、1号・2号床回りでは掘立柱で、床上部で全て欠損している。残存する床下部分は、土中部（地中に埋設される部分）は丸柱状で、一部を除き樹皮は残存していない。地上部分は、角柱として加工されており、表面の一部には新（ちょうな）と思われる加工痕が残っている。断面径は約13.7cm（4.5寸）角である。また、土中に埋設されているが柱ではなく、東と思われるものも検出されている。



写真8 写真左下の柱には樹皮が残るが、他の柱は皮をはずし、新の加工痕が見られる。

3号・4号床範囲では、掘立柱が2カ所確認されている。

るが、他にはない。

床組 床組の構造は、大引及び根太、柱間を繋ぐ足固めの残存状況が良い。

大引は、1号床及び2号床には南北方向におおよそ3.8m(12.5尺)の長さで4列の大引が配されている。各大引間には直交して根太が36～39cm(1.2～1.3尺)間隔で配されている。

また、側回りの掘立柱間には足固めと思われる部材がそれぞれ配されている。特に1号・2号床と3号・4号床境(「四」通り)には、ほぼ1.82m(1間)間隔に5本の掘立柱が立つが、その間にはそれぞれ足固めが入れている。また、南西から南側の柱間には、ほぼ1.82m(6尺)の足固めが入っているのに対して、「に」及び「ぬ」通りの「二」から「四」通りまでの柱間には約3.6m(12尺)の足固め材が用いられている。一方、3号・4号床部分からは掘立柱は2カ所のみで、他には検出されていない。

床組からは、土台と思われる部材が検出されている。また地盤面からは土台下に地覆石と思われる石が敷き詰められている。

柱間には、足固めや根太掛けが検出されている。

3. 使用尺度

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行方向は30.3cm(1尺)、1間を1.82m(6尺)としている。一方、梁行方向は1号床及び2号床は1間を1.91m(6.3尺)としているのに対して、3号床及び4号床の梁行方向は1.82m(6尺)が使用されている。

4. 検出された遺構に見られる技術について

床回り 1号・2号床からは南北方向に4列の大引と掘立柱間に足固め材が組まれている。根太は約36cm間隔で、大引に対して東西に直交するように配されている。通し材は無く、全て大引間に入れられている。大引には根太彫りがなされ、落とし込まれている。

床板は、根太に直交して配され、上には葎が敷きこまれていた。両床共に整然と床板が並んでおり、特に間仕切り等の明確な痕跡が見られない。「に」通りのみ、地上に残る柱に足固めと思われる横架材が、柱に組まれた状態で残っていた。

3号・4号床は竹藪の子床となっている。3号床は、南と北側の柱筋に沿って根太掛けを設け、その間に大引

を入れず、直接根太が南北方向に渡されている。根太に直交して竹が敷き詰められ、實の子床を構成する。

一方、4号床は西側を竹藪の子、東側を板床としているため、東西に根太が入れられている。「へ」から「ち」通りには、根太掛けあるいは大引、土間境には足固めあるいは縁板材が入れられ、根太を受けている。

掘立柱 「一」通りは「二」通りから約91cm(3尺)南に張り出し、3カ所の掘立柱が検出されている。東方向にはこれ以上の遺構は検出されていない。



写真9 上部中央は「四ぬ」の柱。上部は床上位置で折れ曲がっている。

建物の主体部となる1号・2号床の側回りからはそれぞれ掘立柱が検出されている。特に「二」通りの「に」・「ほ」・「と」・「り」・「ぬ」の5カ所、「四」通りでは「に」・「へ」・「ち」・「り」・「ぬ」の5カ所である。

このうち、柱の通り心が対応するのは「に」・「り」・「ぬ」の3通りである。また、「一」通りからでは「ち」・「ぬ」通りが対応する。柱の通り心が一致することは、構造的視点からみると、柱の上部、小屋組を構成する梁との間わりが想定できるため、重要な点である。

3号・4号床回りからは、掘立柱の「四・ち」通り東寄り、「五・ち」通り東寄りから2カ所検出され、同一の梁方向通り心上に位置している。それ以外は遺物から推測すると玉石の上に柱を立てる石場建てあるいは、土台を持つ構造であったと思われる。

残存する掘立柱の柱痕をみると、主たる柱は60cm以上掘り込まれており、深い遺構では80cmにも及んでいる。

柱穴の底には根石を持つものもある。各柱は一樣に北西方向に傾き、地上で折れている。

5. 建物の推定について

本遺構は、調査時に土間の一部を除き、床板等の平面装置が残存していたため、ほぼ遺構の規模及び平面構成を把握することができた。

土間部分に関しては、桁行方向は4.55m (15尺)、梁行方向は5.64m (18.61尺)の規模と推定できる。南東隅には、2.2m×1.8mの範囲に掘り込み、その北側には掘り込みに沿って長い角材（形状や位置から見て土台）が残存していることから、馬屋であったと見ることができると推定される。

馬屋の土台の使用については、1号・2号床の柱通り、つまり「二」及び「四」通りは掘立柱であるため、土間の「ろ」通りは掘立柱であった可能性がある。当然、馬屋を囲む範囲の柱は建物を構成する側柱であったと想定できる。そのため、馬屋周辺の柱は、糞尿の関係から腐朽しやすく、土台を持つ構造であったことも十分に推定できる。しかし、本遺構の場合、土間内の間仕切りを構成していた部分には土台を入れていたとみるのが妥当と思われる。同様の事例は、中之条町に建つ重要文化財旧富沢家主屋にみることができる。

南側の1号床境から検出されている木材は、長さ2.64m (8.71尺)、幅11.5cm (3.8寸)、厚さ7.5cm (2.5寸)の形状で、平側面に2条の建具溝が刻まれ、中央の片側に長さ18cm (約6寸)、幅3cm (1寸)の欠き込みがなされ、両端には納が付く完形品である。加工痕等から両端を柱等に差し込まれた鴨居あるいは敷居とみることができると推定される。また中央の欠き込みは、中央部で柱あるいは束のような部材に添えられていたことを示している。

検出位置等から見ても、外部から土間への出入口を構成する開口部に使用されていたものと思われる。完形品であることから、また全長及び中央の欠き込み位置の寸法から、使用位置が検討できた。その結果、両端を構成する柱間寸法が2.64m (8.71尺)であり、中央に柱あるいは束が存在する位置として、検出した位置に想定できる出入口部分が最も妥当であった。部材両端の納の出寸法(約6cm)を加えると全長が2.7mとなり、想定した「二」通り「ろ」～「に」の間とほぼ合致することが判った。

以上のとおり、検出された遺構や遺物から土間部分を

推定すると、南側の1号床境に出入口があり、南東側には馬屋が設けられていたことが推定できた。

次に1号・2号・3号・4号床部分を検討する。

1号・2号床部分は、掘立柱の残存状況が良く、使用された柱間寸法の検討ができた。前述したように、桁行方向の柱間寸法は1.82m (6尺)が用いられているのに対して、梁行方向は「二」通りから「四」通り間の1間は、一間当たり1.909m (6.3尺)が使われている。桁行方向と梁行方向の柱間寸法に食い違いが見られるのは、土台を持たない建物に比較的好く見られる。

一方、3号・4号床を構成する「四」～「五」通りの柱間は1.82m (6尺)である。「三」～「四」と「四」～「五」間の柱間寸法に違いが見られるのは、建設時期に差があることが推定される。前述したように、この部分は掘立柱ではなく、土台を持っていたと推定した。

これらを考慮しても、梁行方向の柱間寸法が違うこと、掘立柱が使われていない（地下遺構の調査では、検出されていない）点等を考え合わせると、3号・4号床「四」～「五」通りの範囲は、増築された可能性が高い。

6. 間取りの検討

1号・2号床は板張りで、ほぼ同様の仕様で仕上げられている。1号床には囲が裏が検出されているほか、板床からは間仕切り等の存在を想定させる痕跡は確認できない。床上からは礎の痕跡が検出されているが、2号床の東側一部までである。

一方、3号床は東西方向に長く竹貫の子床となっている。4号床は、西半分が南北に長く敷き込まれた竹貫の子床、東側は板床となっている。いずれも竹貫の子床部分からは礎が検出されている。

南側の1号・2号床部分では、痕跡が少なく想定しにくいのが、1号床は囲が裏を中心としたチャノマ、その西側2号床は「デー」と呼ばれる客間の存在が、近隣地域での民家調査報告書4)、5)の事例等から見ることができると推定される。しかし、この二部屋を仕切る間仕切り装置の存在を特定する根拠が、大引や根太、礎石などからも見られない。一部屋であったとも考えられるが、高山村などではデーの開口は12尺6)が多い等の報告もあり、本遺構を比較してもチャノマとデーが並んで存在していた可能性が高い。

一方、3号・4号床は、竹貫の子床仕上げも違うこと

第4章 調査の成果とまとめ

から奥向きの部屋であったと想定できる。

2号床境には掘立柱が存在し、4号床とは竹筒の子の向きが異なっている。この点からみれば、3号床は壁により囲まれた、当地方では「ヘヤ」と呼ばれる閉鎖的な寝部屋、納戸であったと思われる。

4号床は、板敷きと竹筒の子床からなっており、土間境である点などを考慮すると「デードコ」あるいは「コジャンキ」と呼ばれる勝手と推定できる。

以上の特徴からみて、本遺構は不整形田の字型平面形式を持つ建物であったと推定できる。

また、3号・4号床が増築と推定できることから、本間取り以前は、梁行2～2.5間の二間取り平面形式であったと想像できる。

7号建物

1. 遺構の検出状況と規模

遺構概要

7号建物は、Ⅱ区3号屋敷内から検出され、長軸方向を南西から北東に持ち、Ⅰ区からは北東に位置する。

主屋の範囲には、南東方向、南西方向等に攪乱があり詳細を推定するのは困難であるが、雨落ち溝が4面から確認されているため、おおよその建物規模は推定できる。

主屋の背面、北西側には敷地境界と思われる位置には9号石垣があり、石垣に沿って5号溝が走っている。主屋南西側からは18号及び20号畑が検出されている。その先には4号道が確認されており、敷地境をなしているようである。南西側及び北東側は調査対象外であるため、屋敷全体の規模は不明である。

建物跡の概要

7号建物は、Ⅱ区では南西側に位置し長軸方向（桁行方向）は南西から北東方向、短軸方向（梁行方向）は南から北に向けて検出されている。

遺構の多くの部分に攪乱が見られる。特に南東側隅から南側桁側通りと、西側の妻側通りに顕著に見られる。そのため、建物跡の外部回りの礎石や痕跡の遺構が無く、全容の解明は困難である。

しかし、南西側及び北西側には礎石及び礎石上に土台痕、大引や根太、その上に張られていた板と思われる痕跡が検出されている。そのうち、土間南東側の2カ所の礎石は、被災時に移動したとも思われる。また土間と思

われる範囲からは馬屋と竈が、床部分と思われる位置からは囲が裏跡が1基出土している。

根太痕はおおよそ45cm（1.5尺）のピッチで配されている。板幅は26～27cm（8.5～9寸）程度で、梁方向（北西～南東）に張られている。

馬屋は想定範囲の中央に向かい、土間面から10cm程度掘り凹められており「礎石の位置及び畜舎糞の堆積範囲を考慮すると推定でき、南北2.6m×東西2.5mの規模を測る」との報告にもあるように、馬屋内に敷き込まれた草や葉が遺存（厚＝5mm程度）し、範囲を特定する根拠となっている。

竈は、外径1～1.1mで円形に基礎となる石組み、外部に塗り込まれた壁土（黄色ローム）が検出されている。また焚き口を構成する袖石が2本出土し、概要を知ることができる。

焚き口は北東に向き、その前には灰や熾を掻き出す掘り込みも存在している。

囲が裏は遺構中ほどの位置から検出されている。囲が裏下部の1.1m四方に方形に組まれた石組みや、灰などが検出されている。石組みの上には黒色土が敷き込まれその上に黄色ローム（一般的な壁土と思われる）が塗られていることから、囲が裏内部は壁土で塗り回されていたものであろう。

建物外周部は、ほぼ4面に雨落ち溝が検出されている。溝の一部は攪乱により壊されているが、東側及び北側は残存状況が良い。この溝に囲まれた範囲からは、As-A軽石が堆積していないことから、この範囲内の全域に建物が存在していたと推定できる。

推定される建物遺構の規模は、桁行が12.85m（約41尺）、梁行7.27m（約24尺）、面積93.42㎡（約28.2坪）である。

2. 遺構の残存状況

土間 遺構の南西側、桁行5.32m（17尺）、梁行7.27m（約24尺）、面積38.7㎡（11.7坪）が土間と思われ、礎石は北西側の二間（各4尺）、南西妻側の馬屋側に3カ所、奥に1カ所が出土している。また南東側には2カ所あるが、土間内部に入り込んだ位置にある。災害時に移動した可能性もあるとの調査報告もあり、判断としない。

馬屋 前述したように内部に敷き込まれた草や葉が出

土したことから推定されたもので、馬を飼育していたかどうかは定かではない。規模は、桁行2.5m（8尺）、梁行は2.72m（9尺）の規模と推定することができる。

床 土間北側には床の張られた部屋が続くと思われる。桁行7.52m（24尺）、梁行7.27m（約24尺）で平面規模は54.7㎡（16.5坪）の範囲である。

北東側の10カ所から礎石が出土し、この間に外側回りに土台、内部からは大引や根太、床板の痕跡が検出されている。根太は桁方向に約45cm（1.5尺）ほどの割り付けで、直交して床板が張られていた。残念ながら、床部分の南東側半分に攪乱が入っているため、これ以上の遺構は確認できない。

土間の際、床上からは囲炉裏が1基検出されており、礎石の平面的規模などから、1.1m（3.5尺）程度の寸法が想定され、間取りの検討に貴重な資料となった。

3. 使用尺度

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行では31.3cm（1.03尺）、1間を1.878m（6.2尺）としている。一方、梁行は、30.3cm（1尺）、1間を1.818m（6尺）とし、桁行と梁行には食い違いが見られる。

4. 建物の推定について

本遺構からは、土台や大引根、根太痕等が一部から検出されている。また、攪乱が大規模に見られるため、土屋を推定できる遺物が乏しい。残存する礎石及び部材痕、馬屋、竈、囲炉裏から建物を推定した。その結果、前述したように馬屋・竈・囲炉裏が位置する土間と、床上に設けられた囲炉裏と、それに続く部屋が推定できる。

土間の特徴としては、桁行方向の柱間寸法に他の遺構事例には見られない4尺間（1.25m）が使われている。土間は、桁行17尺（5.32m）を南西側寄り三間が4尺間、囲炉裏境の一間のみを5尺間（1.57m）としている。この柱間割りの目的については不明である。

土間への出入口については、南東側に1カ所大戸口が推定できるが、土間（デードコ）の奥に設けられる勝手口の存在については遺構からは推定できない。しかし他の遺構事例や、残存する古民家等を検討すると、勝手口の存在は否定できない。竈の位置からみれば、その奥の4尺間が想定できる。

馬屋は2.5m（8尺）×2.72m（9尺）の規模である。5号建物の規模は2.2m×1.8mであるので、2倍ほどの

平面規模を持っている。馬屋の構造及び出入口は不明である。

床部分は、1号建物や9号建物のように土間に張り出した床の存在が見られない。土間から直接囲炉裏のある床で、一間を形成していると思われ、規模は桁行1.88m（6尺）が二間の3.76m（12尺）で、梁行は7.27m（24尺）と思われる。土間に張り出し床などの存在が無いことから、勝手機能はこの板の間の奥に設けられていた可能性がある。ただ二間に分かれるのか、一間なのか、遺構からは判別できない。しかし、囲炉裏北西側の礎石間から検出された根太痕から推定すれば、ここに間仕切り等の存在は薄い。囲炉裏の位置関係から考察するなら、一間であった可能性が高い。

上記の部屋から北側には、桁行3.76m（12尺）、梁行は7.27m（24尺）の部屋が想定できる。半分以上が攪乱により遺構確認ができないため、間取り検討はできない。

ほぼ4面から検出された雨落ち溝は、建物からの出が桁側では約91cm（3尺）、妻側では約76cm（2.5尺）である。東側及び南側の隅部分の形状からみても、屋根は一層根であった可能性が高い。

5. 間取りの検討

本遺構の間取り形式を検討すると、土間及び床張りの部屋が想定できる。

土間の南東側には馬屋、奥に竈を中心とした勝手機能を含む、この地域での呼称である「デードコ」と思われる。

土間境に当たる囲炉裏を含むこの部屋は、ジャシキと呼ばれる日常生活が行われた部屋であろう。他の建物遺構では二部屋になる場合が多く見られるが、本遺構からは部屋を仕切る根拠はない。

北側に接する部屋は、デードと呼ばれる表向きの部屋であったことが推定できる。一般的には、二間に仕切られ、奥側にオクリと呼ばれる納戸が設けられる場合が多い。

残念ながら、部屋を仕切る痕跡がこの部分にも見られないことから、不明ではあるがオクリの存在は十分に想定できる。

以上のように、当遺構はジャシキ及びデーの存在が推定できることから二間取り型式、あるいはオクリを想定するなら三間取り型式に分類することができる。

9号建物

1. 遺構の検出状況と規模

遺構概要

9号建物は、IV区4号屋敷内から検出され長軸方向を北北東から南南西に持ち、東側には旧道が走る。

I区から比べ敷地は比較的平坦で、西側敷地境界と思われる位置には石垣が、また石垣に沿って溝が見られる。

北側敷地境は、10号建物との間にある石垣により仕切られているようである。また東側及び南側は調査対象外であるため、屋敷全体の規模は不明である。

建物跡の概要

9号建物は、本調査区では最も南側に位置している。1号建物等がある1号屋敷跡からは南南西に位置し、東側には道がある。他の屋敷跡から比べ平面上に位置している。9号建物は、北北東から南南西が桁方向となっている。

9号建物内部から、礎石及び土台や根太の建築部材の一部が検出されている。礎石は、建物全域から検出され、南側及び南西側、東側の側柱筋の一部礎石及び礎石間からは土台痕が確認されており、おおよそ15cm幅の土台が使用されていたことが判明した。

また、内部では大引あるいは土台と思われる痕跡や東の痕跡なども礎石上部に残っていた。

検出された遺構は、北側に土間・馬屋・竈がある。馬屋には2カ所ほどの攪乱が見られ、また東側に埋設桶が検出されている。

南側は、床板や根太・大引等の土台痕が残ることから床部分と推定できる。床部分には、3カ所の囲炉裏跡が検出されている。

建物外周部である、東側及び北側の雨落ち溝、西側の石垣下の溝や、南側のAs-A軽石の堆積範囲から考えれば、ほぼ建物の全域が推定できる。

遺構の規模は、東西方向(梁行方向)が8.24m(約26尺)、南北方向(桁行方向)は16.48m(約52尺)、面積135.8㎡(約41坪)である。

2. 遺構の残存状況

土間 遺構の北側、桁行8.08m(25.5尺)、梁行8.24m(約26尺)が土間と思われ、北東隅には馬屋がある。

張り出し床 1号囲炉裏がある2.75m(8.7尺)×5.87m(18.5尺)の範囲は、土間に張り出した床と思われる。

この床は、東西方向に長く設定できるが、大戸口までは延びていない。床の延長上に約一坪ほどの土間となり、発掘調査ではこの部分から3枚の板の痕跡が検出されている。「土間硬化面に敷かれていたと考えられる3枚の板の腐食痕を検出した」と調査報告がなされていることから、この部分のみ土間に直接板が敷かれていたようである。

「六」通りの「に」・「へ」・「と」位置には礎石、また「ち」～「り」間には5号ピットが検出されている。

西側には出が48cm(1.5尺)の、下屋と思われる張り出しが確認できる。

馬屋 規模は、桁行2.38m(7.5尺)、梁行は4.45m(14尺)の規模で、東側には土台下に外部に突き出すように直径90cmほどの木桶が埋設されている。土間境の「三」通りには、1号・2号・3号ピットが検出されており、掘立柱と思われる柱穴が3カ所ある。またの同一通り「へ」の位置には、礎石を撤去したと思われる4号ピットが検出されている。この範囲は、土間面より20cmほど掘り凹められている。

馬屋は、2方向(東・北)は土台を持つ柱により構成されていたと思われる。

東側に埋め込まれた木桶は直径90cm、深さ90cmあり、土台下より一部が馬屋側に、他は軒先の犬走りを占めるように配置されている。

床 礎石が残存しており、それに基づき間取りを推定すると、4室の部屋が想定できる。桁方向「九」～「十三」通り間3.8m(12.6尺)、梁方向「い」～「と」通り間5.23m(16.5尺)の2号囲炉裏を持つ範囲に1室設定できる。その西側、桁方向「九」～「十四」通り間4.76m(15尺)、梁方向「と」～「ぬ」通り間3.01m(9.5尺)に1室。桁方向「十三」～「十八」通り間4.59m(15.6尺)、梁方向「ろ」～「へ」通り間3.8m(12尺)に3号囲炉裏を中心とした1室が想定できる。その西側に桁方向「十四」～「十八」通り間3.66m(11.5尺)、梁方向「へ」～「ぬ」通り間4.12m(13尺)に1室である。

雨落ち溝 建物外周東側と北側の一部に雨落ち溝が検出されている。東側の雨落ち溝中心位置までは、柱心通りよりおおよそ1.5m(4.73尺)、北側では1m(3.14尺)の位置にある。

南側には雨落ち溝の明確な痕跡は無いが、As-A軽石の

検出された境界は南側柱から約1mと北側と同じ数値となっており、その間は屋根内であったことが推定される。

西側は、およそ1.6mの位置に10号石垣があり、その下には6号溝が存在している。西側はこの6号溝を雨落ちに利用しているようで、ほぼ建物の全体規模が想定できた。

3. 使用尺度

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行・梁行両方向とも、31.7cm (1.05尺)、1間を1.902m (6.28尺) としている。

4. 建物の推定について

本遺構からは、土台や大引痕、根太痕等が一部から検出されている。しかし、他に上屋を直接推定できる遺物が無いため、礎石及び馬屋・竈、3カ所の囲炉裏から建物を推定した。その結果、前述したように馬屋・竈・1号囲炉裏が位置する土間と、2号及び3号囲炉裏を中心とした床からなる間取りが推定できる。

「ろ」通りの東側に、2尺 (63.4cm) 出た位置に「い」通りの側柱筋が設定されているのは、架構方法を推定する上で興味深い点である。本遺構は、梁行の柱間を検討すると「ろ」～「へ」、「へ」～「ぬ」間の各12尺、都合24尺は上屋梁間として構成されている。中央「へ」通りが棟の位置と思われる。

一方、復元図のとおり土間及び2号囲炉裏のある部屋、3号囲炉裏のある部屋は床や縁の存在を推定できる痕跡が無いことから、土間のような存在のある「い」通りまでを部屋内としている。この「い」通りから「ろ」通り間は、下屋構造であったと推定できる。上屋梁間に下屋空間を付け足し、梁行を拡張し、部屋内とする架構方法が推定できた。

土間へは、東側に1カ所大戸口と、土間の奥に勝手口が設けられていると推定される。

大戸口の右手には馬屋、左手には張り出し床及び2号囲炉裏のある部屋に接する土間が入り込んでいる。馬屋は4.45m×2.38mの規模である。5号建物では2.2m×1.8mの規模であるのに対して、2.5倍ほどの平面規模を持っている。比較すると、馬であるならおよそ2頭分の面積である。

馬屋と土間境、「三」通りには3箇所の掘立柱跡が検出されていることから、1号建物などと同様に、馬屋の

間仕切りは掘立柱を建て、その間に厩枠棒を入れ込み、仕切りと出入りを兼ねた構造としたようだ。

東側には埋設桶が出土している。これは、1号建物や5号建物にも見られる木桶で、馬あるいは家畜の糞尿をこの桶に集めると共に、居住者の小使器と兼用されており、いずれも下肥用の糞尿を集める設備である。

張り出し床は、1号囲炉裏がほぼ中央に位置し、「六」通りに礎石及び柱穴と思われるピットが1カ所あることから、この位置に床を構成する束が立っていたと思われ、この位置まで床が張り出していたと推定できる。また「へ」と「と」の位置に79cm間隔で礎石があることから、土間側から1号囲炉裏までの間は床が無く、直接囲炉裏に踏み込むことができる造作であったと推定できる。このような囲炉裏形式は、中之条町や高山村等の民家にも多く見られていたことが各調査により報告⁴⁾、⁵⁾されている。

張り出し床は、「に」通りまで、東側は土間となっている。この部分には、土間面に直接置かれていたような腐食した板が出土している。この板には細工された痕跡も無く、張り出し床及び南側に隣接しての床に上がるための履脱ぎ用敷き込み板のような機能であったものであろう。

また、西側には幅1.9m、奥行き48cmの位置に礎石があることから、下屋部分に張り出してトダナ等の存在が推定できる。この範囲は、竈が隣接していることから、勝手としての機能を持っていたと思われる。一般的には、このような下屋への張り出しがある場合、流しなどの水回りの施設が考えられる。その場合は、遺構として下水溜や側溝などの排水設備が検出される必要があるが、検出されていない。水回りと想定するのは困難であるが、勝手まわりであるなら、食器などの生活道具を保管するトダナなどが想定できる。

床張りの部屋は4室想定したが、東側の各部屋には2号及び3号囲炉裏が検出されていることから、それぞれ囲炉裏を中心とした2室が想定できる。中通りの2号囲炉裏を中心とした部屋は桁行「九」～「十三」間で、梁方向は礎石の位置から「い」～「と」通りの範囲で1室が想定できる。その西側には桁方向「九」～「十四」、梁方向は「と」～「ぬ」通りの範囲で1室が想定でき、東西に2室部屋が推定できた。しかし、この2室に接す

る南側の部屋境の通りに食い違いが見られる。東側の部屋は「十三」通りが境となるのに対して、西側は3尺南に寄った「十四」通りが部屋境となり、食い違ってしまう。

南側の2室は、東側に3号囲炉裏を持つ部屋、西側には閉鎖的な部屋が想定できた。囲炉裏のある部屋は桁方向「十三」～「十八」、梁方向は「ろ」～「へ」通り間で、北側にある2号囲炉裏の部屋とは梁方向で79cm(2.6尺)の食い違いがある。西側の部屋は、桁方向「十四」～「十八」、梁方向は「へ」～「ぬ」通り間の範囲である。

3号囲炉裏のある部屋は、南側に間口3.8m(12尺)、奥行き79.3cm(2.5尺)のトダナ等の存在が、残存する礎石から想定できた。奥行きが2.5尺と少なめであること、囲炉裏を持ち、全体の間取りから想定して表向きに位置する部屋であること、などから間口1間はトコである可能性が検討できた。近隣の事例からも、デーと呼ばれる表向きの部屋には、トコやトダナを並べて構える造作が見られる。

東側「ろ」通りは、「い」通りから3尺ほど内側に入り込んでいる。礎石をみても縁などが設えられた痕跡は見られない。また、間取りと架構構造から想定すると、この部分は下屋部分となるが、他の部屋と同様に部屋内として位置付けられる。軒下ではあるが、犬走りなどと違う空間であったようだ。

南西側に位置する部屋は、3号囲炉裏のある部屋との境は礎石の配置からみると、ほぼ3尺間に柱の存在が検討できることから、両部屋の間は、壁などにより仕切られていたことが想定できる。また北側の部屋との境も間仕切りの存在が想定できることから、閉鎖的な奥向きの空間であったようである。

雨落ち溝から建物の外部を検討すると、北東側に特徴的な痕跡が確認できる。溝は、東側から北側に続いているが、北方向に曲がってからは溝の通りに若干食い違いが見られるのである。雨落ち溝であるから、軒先から落ちる雨粒により浸食され、軒先の出具合をトレースしてくれている。東側に比べ、北側の溝幅は狭く違いが見られる。本来一棟の屋根形状であれば、この位置の溝は食い違いを見せず、直線的な形状を残すはずである。また北側に向かっても軒が下がっていれば、同様な幅を持つ溝が想定できる。この食い違いは、この部分で屋根形状

あるいは構造に違いがあるため発生したと考えられる。

本遺構では、架構方法を推定しても、桁方向では「ろ」及び「ぬ」通りが上屋柱筋、また梁方向では「一」及び「十八」通りが上屋柱筋と思われることから、本屋根が掛けられていた範囲はこれらの通り心から、東面及び西面では約1.95m(6尺)、北面及び南面では99cm(3.1尺)である。

軒の寸法から検討するならば、南北に棟を持つ切妻造り屋根で、溝の痕跡を考慮するならば東側に庇が付く屋根が考えられる。また、入母屋あるいは寄棟造りを想定するならば、北側及び南側の軒先を切り上げた形式、例えば茅葺きの先造り屋根などが想定できる。しかし、架構方法や溝幅の違い等から検討するならば、妻側に庇あるいは軒を想定するのは無理がある。切妻造りの本屋根を妻側に3尺張り出していると考えるのが妥当であろう。

また茅葺きである場合、本調査区域を含め遺構から茅の出土例がほとんど確認されていない。

以上のことから推定するならば、本遺構では梁行7.61m(24尺)、桁行16.48m(52尺)の上屋柱間に本屋根を架け、東面のみ「ろ」通りより東に約6尺の下屋を出していたと考えるのが妥当である。

5. 間取りの検討

本遺構の間取り形式を検討すると、前述したように南北に長い間取りには、北側に約72.8㎡の土間、南側には69.2㎡の床張りの部屋がある。

土間の北側には、2頭分の馬を飼育することができるほどの面積を持つ馬屋、南側には1号囲炉裏及び戸棚を持つ16.1㎡の張り出し床がある。奥には竈があることから勝手機能を含む、この地域での呼称である「デーコ」と思われる。1号囲炉裏は、土間から直接寄ることができる造作であったと推定できる。

一方、床が張られていた範囲は4室に分けることができる。2号囲炉裏のある部屋はジャシキ、その西側はコジャシキと呼ばれる日常生活を中心に営む部屋と思われる。隣接する南側の2室とは部屋境が不規則で、3尺の食い違いが桁方向に生じてしまう。架構を想定するならば「十三」通りを部屋境とするのが一般的であるが、残存する礎石などから検討すると、3尺南側に部屋境を想定せざるを得ない。

南側の2室は、3号囲炉裏を持つ部屋は、トダナ及び

トコの構えが想定できることから、デーと呼ばれる表向きの部屋と思われる。デーの東側には、犬走りとは異なる空間であるノキタとこの地域で呼ばれている土間叩きが想定できる。

なお、1棟の建物で3カ所の囲炉裏が検出された例は、1号建物を除いて他に例が無い。特に3号囲炉裏は、発掘調査により囲炉裏跡と推定されているが、デーに設けられていることから推定すると、炬燵の可能性もある。1号建物での炬燵の規模から比べると90cmほどの平面寸法を持ち大きい、他地域¹⁰⁾の事例にはみられる。

デー及びコジャシキに接した南西隅の部屋はオクリと呼ばれる納戸と思われ、閉鎖的で最も内向きの部屋であったと推定できた。

以上のことから、間取りは4室となるが、ジャシキ・コジャシキとデー・オクリ境が不自然である。中央北側に向き、間口幅79.8cm (2.5尺)、奥行き95cm (3尺)ほどの空間が生じてしまう。地域の事例として、ジャシキに向いて仏壇等が設けられる事例は多いが、そのために軸組が食い違っているとは考えにくい。天明三年以前にこの部分を改造、あるいは南側にデー及びオクリを増築した等の検討はできる。

いずれにしても、本遺構は1号建物を除いても平面規模が大きく、囲炉裏が3カ所設けられているのは、他の遺構には見られない。また、馬屋の規模、デーの床構え等、他の遺構とは多少異なる設えである。架構方法を見ると、東側に2尺の下屋を付け梁行きを拡幅し、この範囲を部屋内にするなど、江戸時代後期に一般的に見られる架構方法の存在が想定できた。

間取り形式としては、不整形田の字(四間)型に分類できると思われる。

11号建物

1. 遺構の検出状況と規模 遺構概要

11号建物は、Ⅳ区6号屋敷内から検出され、長軸方向を南から北に持ち、1号建物の西側に6号道を挟んで位置する。

主屋の範囲には、馬屋の東側、土間北東隅の内部と外部に2カ所、竈・囲炉裏周辺、西側の中ほどに攪乱がある。雨落ち溝がほぼ4面から確認されているため、おお

よその建物規模は推定できる。

屋敷地は、東に向かって緩やかに下っており、敷地境は、東側に19号石垣があり、道を挟んで1号建物と接している。西側には18号石垣により7号屋敷跡と接しており、敷地高の落差は最大1.8mある。この石垣からは、土壁が張り付くように検出されている。南側は11号石垣を挟んで10号建物に続く。北側は15号石垣から5号道に接している。



写真10 11号建物俯瞰。11号建物は中央に道を挟み、南北に位置している。左は5号道、右は10号建物、中央上部は6号道を挟み1号建物に接している。

建物跡の概要

11号建物は長軸方向(桁行方向)は南から北方向、短軸方向(梁行方向)は西から東に向けて検出されている。

遺構には攪乱が見られ、特に土間と推定できる範囲の馬屋東側と、西側中ほどに見られる攪乱は、建物の外部回りを想定するのに重要なポイントであった。幸い礎石は外部回りも含め保存状態が良い。

土台痕や大引、根太痕は他の遺構に比べ残存状態は不明瞭であった、と調査報告がなされている。

また土間範囲からは、馬屋の他に竈が、床部分と思われる位置からは囲炉裏跡が1基出土している。

馬屋は、想定範囲縁辺から中央に向かい30cm程度掘り凹められており、南北2.58m×東西2.73mほどの規模である。

竈の検出状況はあまり良くない。焚き口は東側あるいは北側と想定されているが、不確定である。

囲炉裏は、床が張られていたと思われる位置から出土している。泥流によりかなり崩されたようで、残存状況は悪い。石組みの外径はおおよそ一辺1.3m～1.4mである。

建物外周部には、一部攪乱などにより消えているが、ほぼ4面に雨落ち溝が検出されている。南側及び北側は残存状況が良い。北側の溝は、馬屋前で緩やかに膨らみ、18号石垣の根元で曲がり南流している。この膨らみは、馬屋が北に張り出しているため、屋根の軒先がこの部分のみ張り出しているためである。通常、下屋あるいは本屋根は突き出すように掛けられているため、雨落ち溝の形状は鉤の手に曲がるのが一般的である。このような不自然な膨らみのある溝跡は、屋根形式が特異な形状であったと推定できる。

雨落ち溝に囲まれた範囲にはAs-A軽石が堆積していないことから、全域に建物が存在していたと推定できる。

推定される建物遺構の規模は、桁行が10.9m (36尺)、梁行7.27m (約24尺)、面積79.24㎡ (約23.9坪)である。

2. 遺構の残存状況

土間 遺構の北側、桁行4.54m (15尺)、梁行7.27m (約24尺)、面積33㎡ (9.96坪)が土間と思われ、礎石は馬屋東側の攪乱範囲を除き、側回りと床境の礎石もほぼ検出された。また土間叩きの精査から、鉤の手状に違いがあることが判明している。

北西隅には馬屋、その南側の床境には竈が出土している。

馬屋 規模は、南北2.58m×東西2.73mでほぼ正方形の形状をし、7㎡ほどの規模を持つ。ただ北側に75.8cm (2.5尺)ほど張り出した平面形式で、前述したように、この部分のみ雨落ち溝が北側に膨らんでいる。範囲内は周辺より30cm掘り凹められており、他の遺構と同様の形状である。

また、馬屋の西側の18号石垣に沿っては、土壁の遺構が出土している。「天明泥流により押し流され、偶然にも18号石垣に付着するようにおよそ7mほどの範囲で検出された」と調査報告にあり、貴重な資料である。壁幅はおおよそ2.3mあり、柱痕はほぼ手前の礎石の延長上にある。想定した馬屋の幅が2.58mあることから、報告書所見のとおり泥流により馬屋の西側壁が押し倒されたものであろう。柱痕から4～5寸 (12～15cm)幅の柱、貫は3～3.5寸 (9～10cm)幅である。

床 土間南側には、張り出した床が続くと思われるが、囲炉裏は南寄りにのみしか無く、他の遺構に見られるように日常生活の中心となる勝手付近には囲炉裏はみられ



写真11 18号石垣に付着した土壁。11号建物の馬屋西側に位置する。手前の石は、馬屋の西側を構成する礎石である。黄色部分が土壁、中央及び左側には石垣に向け柱痕が残る。また柱に直交して貫痕が3段確認できる。

ない。

調査報告では「土間部と床部との境界は、鍵手に折れたように確認された」と土間叩きの表面の違いを報告していることから、張り出し床の存在は否定できない。

竈の南寄りにも、床のある部屋を想定できるが、攪乱があるため、床下の礎石遺構が確認できない。しかし、前述したように土間叩きの分析からも東側の床に続き、南側に入り込んだ位置に床境が想定できた。

南側には、囲炉裏を中心とした部屋が想定できる。囲炉裏の構築高さが30cmと推定されていることから、床張りの部屋であったと思われる。2室に仕切られることも想定できた。その場合、西側寄りの9尺の位置に礎石が出土していることから、間仕切り位置としてはこの部分が妥当である。しかし、その場合囲炉裏位置に近接してしまい、間仕切りするのは不可能である。囲炉裏位置については、石組みがかなり崩れているが、炉心が確認されていることから、ほぼ位置の特定はできる。

東側は、南北方向に4カ所礎石が出土している。3.63m (12尺)間隔で、東側柱通りより90.9cm (3尺)の位置に礎石通り心がある。礎石配置や遺構の検出状況などからみれば、縁などの存在は考えにくく、大走りなどの土間叩きが推定できる

3. 使用尺度

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行・梁行共に30.3cm (1尺)、1間を1.82m (6尺)としている。

4. 建物の推定について

本遺構からは、土台や大引痕、根太痕等の明確な資料

は検出されていないため、1号建物等と同様に土台を持った建物であったのか、石場建てであったのか推定できない。そこで、残存する礎石及び馬屋、竈、囲炉裏から間取りを推定した。その結果、前述したように馬屋・竈がある土間と、床上に設けられた囲炉裏を中心とした部屋、その間にある張り出し床が想定できた。

土間の特徴としては、東側に1カ所大戸口が推定できるが、土間（デードコ）の奥に設けられる勝手口の存在については遺構からは推定できない。しかし竈が土間奥にあり、南側には床の存在が想定できることから、この近辺は勝手と推定できる。他の遺構事例や、残存する古民家等を検討すると、勝手口の存在は否定できない。

馬屋は2.58m (8.5尺) × 2.73m (9尺) の規模である。5号建物の規模は2.2m (7.2尺) × 1.8m (6尺) であるので、2倍ほどの平面規模を持っている。馬屋の構造及び出入口は不明であるが、西側から土壁が検出されていることから、外部に面する壁仕様は土壁仕上げであったことが判明した。

また、北側に75.8cm (2.5尺) 張り出している。平面形式からみると、当初からこの形状であったとは考えにくい。立地条件からみて、北側に張り出す余裕はあり、とするなら当初から北側を増して建てればよい。このような平面形式は、馬屋を設ける必要に迫られての改築か、あるいは増築によるものではないだろうか。

増築であれば、南側には竈、その先には板の間が設けられているため、内部を拡幅するには困難である。よって、外部に張り出さざるを得なかったであろう。また、この寸法であるなら、庇などを設けず、本屋根の軒内に納めることも可能である。しかし、馬屋前の雨落ち溝が北に張り出していることから、下屋や庇等この部分のみ屋根が張り出していたことは確かである。ただ溝の形状が不自然である。通常は鉤の手に溝ができるのであるが、東から延びてくる溝が、途中から斜めに曲がり馬屋前の溝に繋がっている。不自然な屋根形状が想定できる。

いずれにしても、馬屋を増築したと考えれば屋根形状も当初からものではなく、雨落ち溝の不自然さも、納得できる。

土間南側は、張り出し床が検討できる。奥の竈の位置からすれば、東西方向に一筋に通る床ではなく、竈前で南側に入り込んだ鉤の手状の床が想定できた。これは、

土間の張り床の精査からも同様な形状の違いが確認されており、床形状が裏付けられる。

南側の床は囲炉裏を持ち、規模は桁行3.64m (12尺)、梁行は7.27m (24尺) と思われる。

他の遺構では、囲炉裏は2～3カ所は検出されている。地域の自然環境からすれば、この数は妥当であり、本遺構のように1カ所であれば、土間から直接利用できる位置に設定されるのが一般的であろう。であるなら、土間境の床の存在は否定的にならざるを得ない。

他地域では、竈を囲炉裏代わりに使う場合もある。土間囲炉裏等とも呼ばれ、竈の掻き出しを囲炉裏のように使用するのである。そのような使用も想定できる。

囲炉裏のある部屋は、柱間寸法からみても西から9尺の位置に間仕切りの存在が考えられる。この場合、東側の囲炉裏のある部屋を表向き、西側を奥向き、あるいはオクリのような納戸と想定できる。しかし、囲炉裏の位置からみる限り、二部屋とするのは困難である。

雨落ち溝は、ほぼ4面から検出され、建物からの出は91cm (約3尺) である。馬屋の北側を除き、北東側及び南西側の隅部分の形状からみても、屋根は一屋根であった可能性が強い。

5. 間取りの検討

本遺構の間取り形式を検討すると、土間及び張り出し床が想定できる。奥に竈を中心とした勝手機能を含む、「デードコ」と思われる。

張り出し床は、ジャシキと呼ばれる日常生活が行われた部屋であろう。しかしジャシキと推定される範囲からは囲炉裏が検出されていない。ジャシキは他の遺構からみても囲炉裏の存在が重要である。火鉢等痕跡の残らない暖房手段もあるが、想定しにくい。ヒロマ形式のジャシキとみることにはできるが、特殊な例である。

南側の囲炉裏のある部屋は、デーと呼ばれる表向き部屋であったことが推定できる。一般的には、二間に仕切られ、奥側にオクリと呼ばれる納戸が設けられる場合が多いが、前述したように当遺構からはデーの奥にオクリを構成する間仕切りの存在が検討できない。デーの間のみであったとみるのが妥当である。

以上のように、当遺構はジャシキ及びデーの存在が推定できることから二間取り形式に分類することができる。

13 (15) 号建物

1. 遺構の検出状況と規模

遺構概要

13号及び15号建物は、IV区7号屋敷内から検出され、

13号建物は長軸方向（桁行）を南西から北東に持つ。15

号建物は南西側に接して検出されている。



写真12 13号建物及び14号建物俯瞰。13号建物は左下、14号建物はその上に2カ所の穴のある付近。また5号道（斜路）は石垣を積み、その右側に位置している。5号道は、6号道から別れ屋敷とを繋いでいる。6号道は右から左に進み、杉の木立の間を通り、山側に進む。

さらに北東側には14号建物の一部が検出されており、一つの屋敷を構成していたようである。

屋敷境界は、北西側に8号及び14号石垣、東北側には17号石垣と、その東側に5号道が6号道から分かれて敷地とを繋いでいる。5号道は斜路で、屋敷からは下るようになり6号道に接続している。5号道を挟んで南側に6号屋敷と11号建物がある。

主屋と想定される範囲の北東側には、大規模な攪乱が確認され、14号建物まで続いている。しかし、それ以外は建物の礎石や竈と思われる石組み、囲炉裏と思われる石組みがそれぞれ出土し、範囲を推定することができた。また、土台や大引、根太、板痕等も一部で検出され、北東隅近く、軒内の延長と思われる位置に埋設桶も確認された。その他、南西側及び15号建物東側には壁土と思われる遺構も検出された。

遺構全体としては、標高の高い位置から検出されてい

るため、泥流の堆積は他に比べ薄いと調査報告がなされている。そのため、被災以降の生活による攪乱なども多くあったようで、一部の礎石が移動するなど、遺構への影響があったと考えられている。



写真13 13号建物及び14号石垣。左側には13号建物の礎石及び竈の石組み、右側には14号及びその先に18号石垣がある。石垣は極端に建物に近く、礎石からは1 m未満の間隔である。

南西側からは15号建物が検出されたが、本遺構は礎石が出土しておらず、また13号建物に接して建てられていたようで、南西側の雨落ち溝も15号建物の手前で消えている。

建物の南東側から南西側にかけて、鉤の手に雨落ち溝が検出されている。北側は攪乱があるため確認はできず、北東にも一部雨落ち溝が検出されているが、北東側に隣接して存在する14号建物の雨落ち溝とも考えられる。北西側の雨落ち溝は確認されていないが、8号石垣が迫っていることから、石垣に沿って設けられていたと思われる溝が兼ねていたとみることもできる。

その他、北東側には14号建物の一部である埋設桶や雨落ち溝（13号建物の溝とも考えられる）の一部が確認されているが、攪乱と調査対象範囲から外れているために、全容は不明である。

13号建物は長軸方向（桁行方向）を南西から北東方向、短軸方向（梁行方向）は南東側から北西側に向けて検出されている。

建物跡の概要

遺構の北東部には攪乱が見られ、特に土間と推定できる範囲は広範囲に攪乱されており、北東側に一部残る雨落ち溝までである。この範囲には礎石も残存しておらず、建物の外部回りを想定するには困難であった。

しかし竈の残存状況は良く、石組みも切石を使い、袖

石、楯（まくさ）石も確認できる。



写真14 13号建物の竈石組み。右側は焚き口と推定される。手前の切石は袖石か、左側上部が欠き込まれているが、この部分に焚き口を構成する楯石がある。黄土色の土は、竈の上塗りの壁土である。

西側を中心に土台痕や大引、根太痕、また床板痕等が確認された。「土台は確認できなかったが、建物西側を中心に、地面及び礎石直上の土台痕を検出した」と調査報告がなされていることから、この範囲では土台を持つ建物であったと推定できる。特に西側の中ほどに45.5cmほど西側に張り出して並ぶ礎石間にも土台痕が検出されており、さらに北西に延びていた。

またこの範囲からは、土壁も検出されている。

馬屋は、攪乱の範囲にあったと思われるが、馬屋に見られる掘り込みなども含め、検出できなかった。しかし北東隅、建物の軒先内の位置に1号桶が出土している。これは、他の遺構にも見られる家畜の糞尿を集める施設と思われる。このことから推定すれば、桶に隣接して土間にあった可能性はある。

囲炉裏は遺構の中ほど、床が張られていたと思われる位置から検出されている。検出状況はあまり良くなく、石組み及び壁土のようなものが出土している。石組みの外径はおおよそ一辺1.27mほど、地面と燃焼部中央の高低差は17cmほどである。

東側には唐白が検出されている。出土位置は土間の南西側で、建物外部に近い。外径56cm、外高33cm、ほぼ土間と同一の高さで埋め込まれ、被災するまで使用されていたと報告されている。

その他、13号建物の確認面より下の層から1号焼土が検出されている。位置は、13号建物内から出土している囲炉裏の西側に隣接して確認された。出土遺物は無いが、

遺構の重複関係から、前身建物に絡むものであるとの判断がなされている。

雨落ち溝及び建物内と思われる範囲には、15号建物範囲も含めAs-A軽石が堆積していない。

推定される建物遺構の規模であるが、梁行は8.19m（約27尺）あり、さらに西側に45cmほど張り出している。一方、桁行は北側に攪乱があるため2通りの規模が推定できる。1つ目は、北側にある雨落ち溝が本遺構に伴うものであるなら、南側の雨落ち溝と礎石通り心の距離が90.9cmあるので、その事例から北側の推定通り心が設定できる。その仮定で想定すると、桁行きが16.98m（56尺）となる。2つ目としては、桁方向の柱間寸法1.82mが9間あるため、16.38m（54尺）となる。

面積は、1つ目の規模から推定すると、146.6㎡（約44.2坪）である。

15号建物は礎石が無く、土台痕のみの検出である。土台痕は南西側及び西側から2カ所鉤の手状に出土している。他に大引や根太などの建築部材の出土は無く、土台痕の幅は12～21cm、との調査報告である。

規模は「およそであるが、南西方向から北東方向が3.8mほど、南東方向から北西方向が3.03mほど」との報告である。12.5尺×10尺で3.5坪（11.5㎡）の規模である。

2. 遺構の残存状況

土間は13号建物の北側、桁行10.9m（36尺）、梁行8.19m（約27尺）面積89.7㎡（26.9坪）の土間と推定できる。土間に残る礎石は、北側の攪乱部分を除き、囲炉裏を中心とした範囲、及び西側の側柱筋にある。

東側の側柱近くに設置されている唐白は、外径56cmで外高33cm、で内側の形状は上方の口縁部に向かって広がる形状で、一般的に見られる徳利型の形状とは異なっている。唐白は、1号建物からも出土している。杵は、1号建物にも見られるように足踏み式の場合は、土中に杵を付けた台柄の支柱が無ければならないが、検出されていない。竪柱で掲ぐ方式であったものであろう。

竈は、約1.2m×1.1mの規模で、推定される高さは60cmである。骨格となる石組みが良く残っており、切石状の袖石や楯石が確認できる。

囲炉裏を中心とした範囲には、土間に張り出した床が想定できる。土間の叩きの精査から、仕上げに違いがあることが判明している。人が踏みしめたため、土間表面

第4章 調査の成果とまとめ

に違いが生じたのか、鉤の手状に違いが確認されている。この形状に沿って、上り縁が造られていたようである。土間への出入口であるが、大戸口は埋め込まれている唐臼の位置からその北寄りに設定ができる。また勝手口であるが、西側には8号石垣が迫って位置しており、出入口の必要性が薄いようにも思えるが、他の遺構からも存在は推定される。竈の西側に、土台痕が切れている間があり、勝手口を推定するには適当な位置と思えた。

北東隅には馬屋の存在が推定できた。1号桶の検出位置から想定できるもので、また規模は、攪乱部分の際に1カ所礎石が検出されていることから、この礎石の上に立っていた柱が馬屋に絡むものとみることができる。柱の位置から、桁方向は2.88m(9.5尺)、梁方向については、他の遺構の事例等を検討すると少なくとも馬1頭分であれば2.42m(8尺)、7mlほどの規模を持つと考えられる。

土間の南西側には、床の張られた部屋が続くと思われる。囲炉裏は土間に張り出した床のみであり、他には無い。礎石の残存状況からみると、桁方向は3間(18尺=5.46m)、梁方向は4.5間(27尺=8.19m)と思われるが、土間側では、西側に約45cm(1.5尺)張り出した位置が礎石通り心となっている。

床側も、土台痕が一部南西側に見られることから、この張り出しは全般にわたっていたと推定できるが、礎石は存在していない。土台痕を根拠とするなら、梁方向は8.64m(28.5尺)となる。

この床の範囲は、一部に攪乱があるため全容は不明だが、おおよそ1.82m(1間)間に礎石が据えられている。但し、東側の約90.9cm(3尺)の通り芯上に礎石が配されている。

南西側の礎石から外部にかけて2カ所、南西隅の建物内の位置に1カ所、合計3カ所に壁土(ローム質状)が検出されている。泥流により押し倒された状態で検出されており、建物の壁を構成していたものと思われる。2カ所は南西側の壁、1カ所の壁土は、内部からの出土のため、間仕切り壁と想定できる。

15号建物は、13号建物の南西側に接するように検出され、建物跡と推定する根拠は2カ所の土台痕のみであった。土台痕から、13号建物に接していた状況は把握できないが、本来この位置から検出すべき13号建物の雨落ち溝が途切れている。調査においても、存在すべき雨落ち

溝の痕跡は確認できなかった。また、攪乱などの状況は見られないことから、当初より建っていたのか、後に建築されたのか判然としない。いずれにしても、As-As軽石の堆積は確認されていないことから、13号建物に接して建っていた可能性はある。



写真15 13号建物及び15号建物前蔵。左側には15号建物の、その奥は8号石垣。右側には13号建物の礎石を見る。

3. 使用尺度

本遺構に使用されている尺度を検討すると、桁行・梁行共に30.3cm(1尺)、1間を1.82m(6尺)としている。

4. 建物の推定について

本遺構は、北東方向の大部分を攪乱により破壊されているため、建物全体の推定復元は困難であった。しかしこの範囲は、竈や唐臼・囲炉裏・1号桶などの出土により、土間であることが推定できた。また、南西側からは建物を知る直接資料は出土しなかったものの、土台痕や大引痕・根太痕・床板痕などが検出された。また、3カ所から壁土の倒壊跡が確認されている。そのために、南西側には板が張られた床が存在していたことが推定できた。

土間は、桁行11.5m(38尺)、梁行8.64m(28.5尺)の規模と想定できる。ただ、桁行の長さが、2尺ほど北東に延びている点については、柱の割り付けなどから検討しても若干疑問が残る。これは、北東側の建物範囲外にある雨落ち溝から北東側の側柱筋を推定したための結論であった。仮に、この溝が14号建物に絡むものであるなら、2尺の間延びの想定は不要で、10.9m(36尺)六間割りとなる。

残存する礎石及び竈・囲炉裏・唐臼などから間取りを推定した。前述したように囲炉裏及びその近辺に残存する礎石、土間跡に残る痕跡から張り出しの床が存在したことが推定できた。ただ土間叩きの痕跡などから形状を

復元すると、推定復元図のとおりで、土間境が複雑に入りのある形状となる。南東側の土間は「通シドマ」としたが、これは六合村ではこの様な形状の土間を呼称したもので、近隣の民家調査報告にも似た形状の土間が確認されている。推定復元では、張り出し床の範囲としたが、デー前面の濡れ縁まで延びることも考えられた。

また、馬屋の存在については、1号桶が北東隅の軒内から出土したことにより、他の遺構と同様に馬屋の存在を推定した。規模は、11号建物が2.58m(8.5尺)×2.73m(9尺)、5号建物は2.2m(7.2尺)×1.8m(6尺)で2倍ほどの平面規模の差があるが、土間の面積などから11号建物を参考とした。その場合、近辺で唯一残存する礎石に通りが設定できた。なお、馬屋の構造及び出入口は不明である。

土間の出入口については、東側に1カ所大戸口が推定できた。また、土間(デードコ)の奥に設けられる勝手口の存在については遺構から、竈の南西側に1カ所礎石間に土台痕が検出できなかった部分があったため、その位置を推定した。張り出し床の西側は、1.5尺の張り出しが存在するが、床の延長の間口6尺をトダナと推定し、竈などと共にこの範囲が勝手であったと思われる。

土間より南側は、張り出し床を介して、床を持つ部屋が検討できる。他の遺構事例や、礎石の配置などから少なくとも2室が想定できた。北西側筋から内側に土壁と推定できるローム質の土が検出されたことから、7.5尺入った位置に間仕切りを想定した。

続いて、南東側には桁行・梁行共に5.46m(18尺)の部屋があった。南西側からはローム質の壁土と推定されているものが2カ所検出されていることから、南西側に土壁を持つ板床張りの部屋が想定できた。

さらに、南東側の側柱筋から90.9cm(3尺)入り込んだ位置に礎石列が確認されたことから、幅3尺の濡れ縁を想定した。しかし、この部分は、前述したように、土間から延長しての通シドマが続くことも検討できた。

雨落ち溝は、南東から南西側に鉤の手に続くものが1カ所、北東側に1カ所、これは14号建物に絡む可能性のある溝である。建物からの出は、南の妻側は約90cm(3尺)、南東の桁側では1.36m(4.5尺)である。土間の北側を除き、南東側の隅部分の形状からみても、屋根は一層根であった可能性が強い。

本建物の軸組形式であるが、1号建物等と同様に土台を持った建物であったのか、石場建てであったのか、判然としない。しかし、礎石上に残る土台の腐食痕なども検出されていることから、一部には土台があった建物と推定できる。

囲炉裏の西側には隣接するように13号建物遺構の下層から、1号焼土が検出されている。調査報告では、天明三年より古く「平面形状は隅丸形状と思われる。南西から北東方向が140cm。深さは38cm」との概要からも、前身建物の遺構の可能性がある。また火を使った痕跡はあるが、囲炉裏ではなく、作業場跡のような遺構とも記されている。

13号建物の囲炉裏とは異なり、和床が土間面より掘り下げた構造に特徴がある。一見、作業場跡などにも見えるが、土座に切られた囲炉裏とみることできる。土座は板張りではなく、地面に直接藁や粉殻などを敷き込み、ムシロを置いたため、和を切る場合地面を掘り下げる構造となる。このような点からも、前身建物当時の囲炉裏として推定することもできる。

15号建物については、前述したとおり遺構の残存状況、出土遺物の少なさなど、建物を推定するのは困難である。仮に隣接しての建物であるとしても、土台を直接地面に置き、上屋を建て上げていくのは余程簡易な構造物とも思える。建物と考えるのであれば、掘立柱穴などの検出が望まれる。As-A軽石の存在が無いことから、噴火の際には何らかの上部構造物があったのは確かであるが、建造物として認識するには困難である。

5. 間取りの検討

本遺構の間取り形式を検討すると、土間及び板床張りの部屋が想定できる。

土間の大戸口脇に唐白、北東側には馬屋、奥に竈を中心とした勝手口の機能を含む、「デードコ」と思われる。

土間境の張り出し床は、囲炉裏が設けられている。しかし、ジャシキと呼ばれる日常生活が営まれた部屋に確立する以前の型式と推定でき、9号・11号建物に類似している。鉤の手になる奥の床は勝手と推定できる。

南側の部屋は、デーと呼ばれる表向きの部屋であったことが推定できる。デーの前には濡れ縁も想定できる。

デーの奥側に、オクリと呼ばれる壁に囲まれた閉鎖的な納戸が推定できる。

第4章 調査の成果とまとめ

以上のように、当遺構はジャシキとしての形態が確立する以前の状態と思えることから、デー及びオクリの2室からなる二間取り型式に分類することができる。

おわりに

以上のとおり、本報告では1号屋敷と推定された範囲の建物跡1号・2号・3号・4号及び8号建物、また屋敷の北北西裏から検出された5号建物、7号・9号・11号・13(15)号建物の合わせて9棟の建物遺構の検討を試みた。このうち、主屋と思われる建物は6棟あった。建物の規模は表1のとおりである。

主屋と思われる1号建物は、他の地区から検出した建物と比べても、表1のとおり2～3倍以上の平面規模を持つ。家畜を4～5頭収容が可能で、風呂やトコ構えを持つ座敷等、建物の構造や内容は他に例を見ない。一方、付属屋を見ると堆肥小屋や居住が想定できる4号建物、納屋あるいは物置の3号建物の3棟のみで、家格から推定すると不足感すら感じられる。

5号建物は最も平面規模の小さい建物である。1号建物に比べ約1/4の面積で、唯一本遺構の中で掘立柱建物であることが判明している。

本遺構での間取りの特徴をみると、6棟の主屋中、全ての建物跡から馬屋の痕跡が認められた。馬を飼育していたかについては、自然科学分析などから、馬の飼育について特定されているわけではない。しかし、他地域での事例を参考にすると、馬を飼育していた可能性は高く、18世紀後期にこれほど土間内に馬屋が設けられていたことは貴重な資料である。

次に、建物面積に対して土間の範囲¹⁾がどの程度を占めていたかについて表1に記した。建築年代によって比率が変化するか、あるいは地域的な違いがあるのか、など幾つかの項目が検討できた。

中之条町の資料²⁾よりおおよその比率を検討すると、18世紀に建築されたと思われる建物は、40%台半ばから50%台半ばの範囲である。一方、本遺構では11号・13号建物の比率が高いが、これはデーやジャシキなどの居住空間が確立せず、未成熟な住居形式が要因と思われる。1号や7号、9号建物などは、中之条町のデータと合致した数値を示しており、推定した間取り形態も食違い四間取りや大規模型式、また広間型や三間取り形式などと

確立している点が挙げられる。

表1

建物番号	桁行 m	梁行 m	面積 ㎡	土間面積 ㎡	土間面積 比率
1号	21.34	12.07	257.6	123.05	47%
5号	11.83	5.64	66.72	25.7	38%
7号	12.85	7.27	93.41	38.67	41%
9号	16.48	8.24	135.8	55.58	40.9%
11号	10.9	6.36	69.32	46.17	66.6%
13号	16.98	8.64	146.7	99.9	68.1%

土間を除く間取り形式を見ると、1号建物は食違い四間取りや大規模型式、7号建物は二間取りあるいは三間取り型式、5号建物及び9号建物は不整形田の字(四間取り)型式、11号建物・13(15)号建物は二間取り型式に分類することができた。全般的には、江戸時代中～後期にみられる、広間型や整形四間取り型式、六間取り形式など安定した間取り形式に移行していく過渡期的な型式がみられた。また二間型式の古い時期の間取り形式も存在していた。

次に建物の構造に見られる特徴を検討すると、大方の遺構から上部構造を推定する遺物の出土がなかった。そのため、多くの遺構から検出された礎石を中心とする範囲での検討を行った。礎石を持つ建物は、1号及び7号・9号・11号・13号建物である。唯一、5号建物は掘立柱建物であったことが遺構及び検出物から判明した。他に、1号建物との間から検出された6号建物も掘立柱建物で、規模から推定すると、5号建物と同一敷地に立つ堆肥小屋と推定される。

礎石を持つ建物では、1号建物が土間周りを中心に、土台が出土し、木材の加工痕も明確に残っていることから、当時の建築技術の一端を把握することができた。他は、腐朽により一部から土台痕や大引、根太痕の検出にとどまるが、礎石上面に土台痕が確認された遺構が大半である。このことから、少なくとも床を持つ範囲では礎石の上に土台が回されていたことが想定でき、この時期土台を持つ建物が主流であったことが窺えた。

18世紀後期、1号建物を筆頭に5棟の建物が礎石を持ち、土台が使われていたことは事実である。一方、5号建物に見られる掘立柱建物が存在し、遺物として柱など

の構造材が出土したことは、天明三年（1783）には、掘立柱建物と土台を持つ建物が併存していたことになる。この成果は、当時の建築技術や構造、間取り等の変遷を知る上で貴重な遺構である。

建物の外観を構成する屋根については、調査報告からも屋根材がほとんど出土していない。一般的には、泥流により押し倒されたものであれば、屋根葺き材として最も多く見られる茅や、瓦、板などが検出される可能性がある。川原湯地区や長野原地区では、かつて茅葺きの建物が多く見られた。養蚕が盛んになる江戸時代後期からは建物の改造が進み、地域性のある形状に変わっていく。また明治期になると、現在多く見られる切妻造り総2階建ての建物も建てられるようになる。しかし、近隣の他地域においても、古くからの茅葺き屋根が多く残存していたことは、文献²⁾などにも取り上げられ紹介されている。本遺構中の建物を検討するに際しては、屋根葺き材の出土が無かったため推定は困難であったが、残存する事例などから、茅葺き屋根の建物も多く建てていたと推定できる。

以上のように、検出された建物遺構群は、1号建物に見られるように突出した平面規模や出土遺物、生活遺構など、当時の生活や生業の様子を想像するにも十分な遺跡であった。また集落としてみた場合、当時の山村集落構造の一端を垣間見ることもでき、建築史学のみならず生活史的観点からも貴重な遺構である。

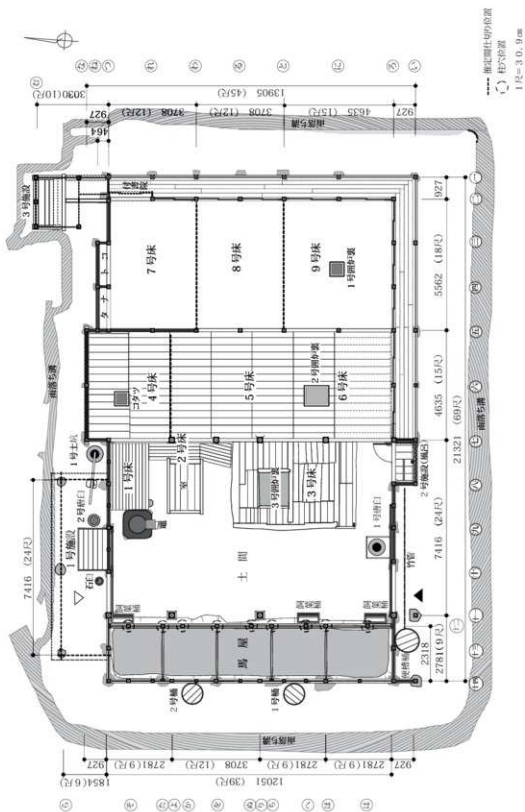
最後になったが、本遺跡を考察するうえで建築史を学ぶ者として、認識を新たにすることを記しておきたい。遺構からの建物に関わる出土遺物の量と内容は、本来、歴史的建造物の解体修理に臨むほどの調査姿勢で取り組むべき必要があった。これを見逃せなかった判断不足は、本稿執筆にあたって担当者の方々にも多大なるご迷惑をお掛けしてしまった。本報告の反省として、締めくくるにあたり書き添えさせていただきたい。

また、本報告の検討にあたり、網野政治氏には多大な尽力をいただいた。未筆ながら御礼を申し上げる。

参考文献・引用文献

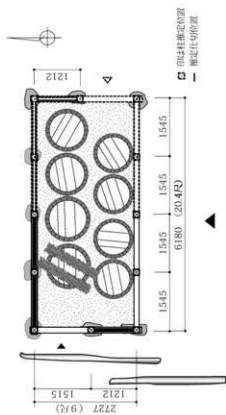
- 1) 「東宮遺跡（1）―遺構・建築部材編―」
2011 国土交通省 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 2) 一同 上「馬屋については、想定した5房全域から家畜糞や草、葉等が検出されている。飼育されていた家畜の種類を特定する資料はないが、馬の可能性は否定できない。」
3) 「重要文化財 富沢家住宅修理工事報告書」
重要文化財 富沢家住宅修理委員会 昭和52年6月
- 4) 「高山村の民家と宗教建築」
群馬県高山村教育委員会 昭和53年2月26日
- 5) 「中之条町誌」
中之条町役場 昭和53年9月30日
- 6) 前掲の「高山村の民家と宗教建築」では、26棟の調査建物中、18棟のテの開口が12尺程度あることが記載されている。
- 7) 「多摩のあゆみ」第70号 平成5年2月15日刊
「武蔵野の火車遺産について」の文中で、前田清志氏が報告されている。
- 8) 「滅びゆく民家 ―間取り・構造・内部―」
川島 宙次著 1973年11月30日 主婦と生活社刊
- 9) 旧富澤家の生業に関しては、中之条町教育委員会の説明には、米作、養蚕、麦雑穀や繭の取引、駄馬による運送業、金貸しなどを行って財をなし、享保から宝暦頃にその地位を不動なものとした（筆者要約）とある。
- 10) 「六合村誌」六合村役場 昭和48年12月20日
- 11) 土間をどの範囲までとするかについては、様々な意見がある。むしろ土間内にある空間を、部屋として位置付けるかという問題もある。例えば川崎市立日本民家園内にある旧広瀬家の土座は、数少ない古型式の遺構である。この土座を部屋空間としてみるか、土間の延長としての空間とみるかである。筆者は、古形式である土座や、土間に張り出したアガリハナ、カッテと呼ばれる板敷きを、むしろ置き縁などの延長と同一の空間構造と考える。よって、本考察では、明らかに土間に床を張り出した状態の板の間は、土間に含むものとして、その範囲として扱った。
- 12) 「関東地方の民家」山本勝巳・川島宙次・小林昌人著 昭和41年11月30日 名古屋書局

※ 文中の用語等は、「建築大辞典」彰国社刊に倣った。

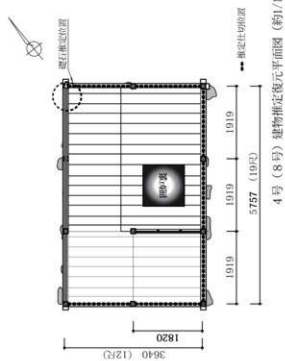


1号建物推定復元図(約1/160)

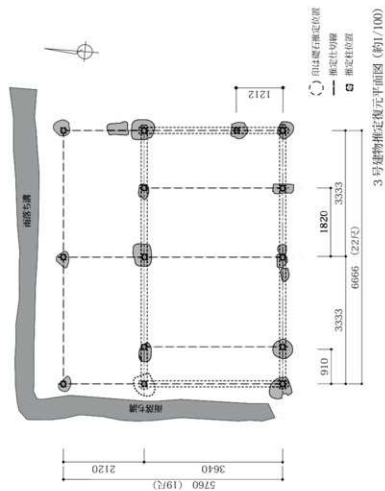
第1節 東宮遺跡出土の遺構について



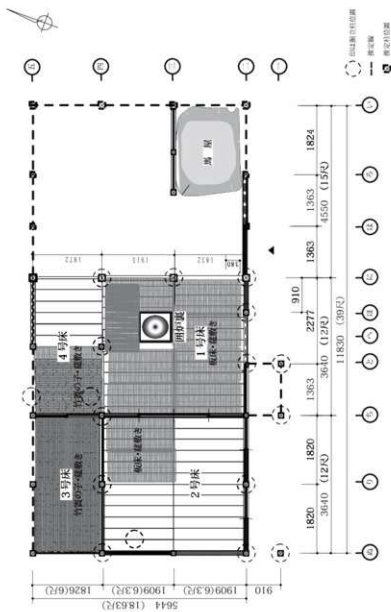
2号建物推定復元平面図 (約1/100)



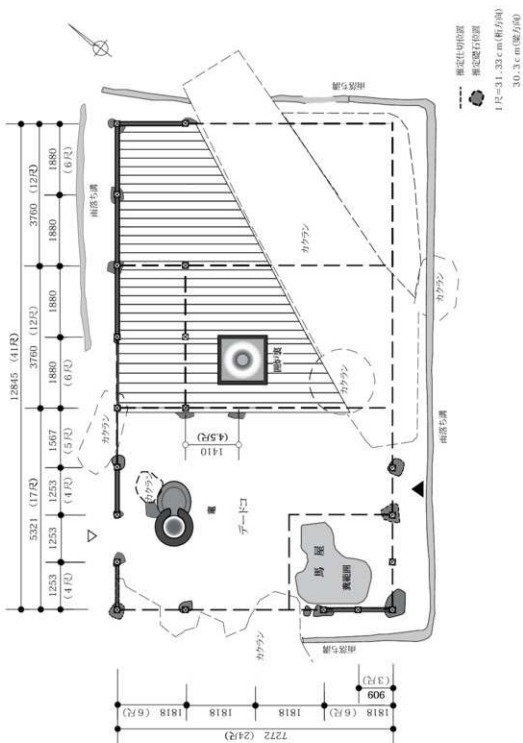
4号 (8号) 建物推定復元平面図 (約1/100)

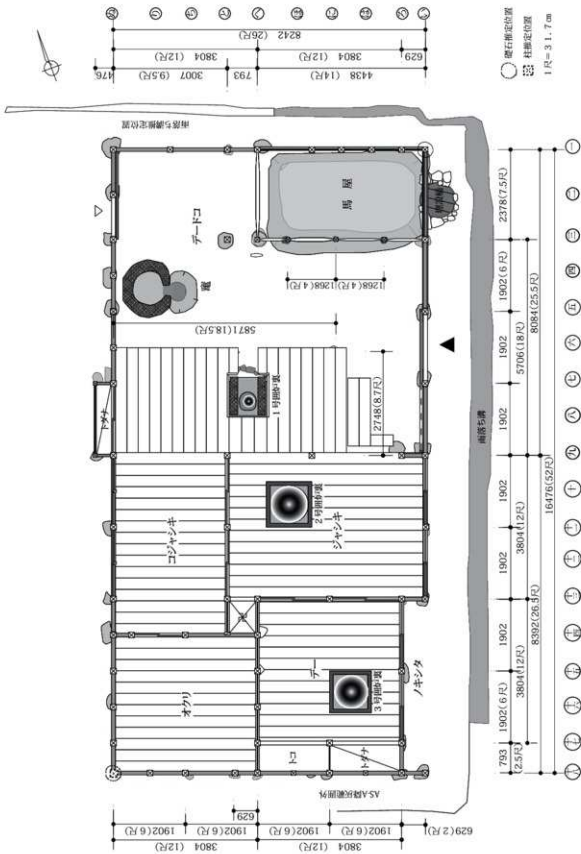


3号建物推定復元平面図 (約1/100)



5号建物推定復元平面図 (約1/100)





第2節 東宮遺跡出土の遺物について

東宮遺跡からは、多様な遺物が極めて良好な遺存状況で、多量に出土している。これらの遺物は、廃棄されたものではなく、天明三年新暦8月5日（以下日付は新暦で記す）の天明泥流で埋没しており、使用された時期や地域まで限定できる極めて貴重な遺物群といえる。また、大半が使用途中で埋没したことから、製作時の痕跡だけでなく、使用時の痕跡や欠損部を補修した補修痕跡までもが良好に残るなど、出土遺物から得られる情報は極めて多い。

東宮遺跡の出土遺物を考察する上で、本遺跡を被覆する天明泥流の様相を知ることは極めて重要と考えている。詳細は第4章第1節1に詳述したが、天明泥流によって各屋敷跡の遺物が混在することなく、少なくとも遺物の大半が各屋敷跡に帰属するものと思われる。本節で詳述された内容は、このような良好な出土状況を前提としたものである。

東宮遺跡出土陶磁器の悉皆的な調査を実施し、出土陶磁器の生産地を確認した。また、本遺跡で確認された出土陶磁器生産地に見られる特徴についても報告する。本遺跡出土瀬戸・美濃系陶磁器では、美濃が多く見られた。この原因についても言及する。

出土遺物には、欠損部を補修した補修痕跡が多く確認された。遺物に見られた、多様な補修痕跡についても整理し報告する。

下駄は良好な遺存状況で多量に出土した。形態も複数あり、また対になるものも多く確認された。下駄の形態分類や出土状況等についても報告する。

東宮遺跡では、壺・鉢や団扇、線香など、類例のない遺物も多く出土した。これらの遺物については、分析を依頼し、専門的な見地からご教授を頂いた。また、これらの遺物についての分析及び執筆して頂いた原稿についても掲載している。

鉈については、同様の遺跡出土の鉈も含めて報告している。その他、類例のない遺物についても報告する。

木製品については、製作者としての見地から木工芸家でもある須田賢司氏に観覧して頂いた。その成果について報告している。

1 東宮遺跡出土の陶磁器生産地

はじめに

東宮遺跡からは多くの陶磁器が出土した。多くは、天明泥流で被災する寸前まで使用されていたと思われる、各建物や屋敷跡の様相を知る上で貴重な遺物といえる。また、出土陶磁器の生産地を見ると、瀬戸・美濃系及び肥前系陶磁器が大半を占めていることも確認できた。

ここでは、未掲載遺物を含む出土陶磁器の悉皆調査から、陶磁器生産地を報告する。数値は総破片数である。判然としにくい生産地も見られたが、可能な範囲で整理し報告しており、美濃の可能性が高いと判断されたものは、美濃として報告する。

出土陶磁器については、瀬戸・美濃系陶磁器を愛知学院大学教授藤澤良祐氏に、肥前系陶磁器を元九州陶磁資料館館長大橋康二氏に鑑定して頂いた。グラフ1及び表1がその成果である。

東宮遺跡は良好に近世の屋敷跡が遺存していたが、僅かに攪乱範囲も確認された。後世の混入と思われる近代以降の出土陶磁器や、各屋敷跡下より出土した陶磁器もあるが、明らかな近代以降の陶磁器のみ割愛し、グラフを作成した。出土陶磁器の生産地等の詳細は、観察表の通りである。

1. 東宮遺跡出土の陶磁器生産地（グラフ1）

東宮遺跡出土陶磁器は2,348点（数値は破片数）を数える。良好に遺存していた本遺跡ではあるが、攪乱による混入や、既に廃絶していた遺構の遺物も含まれている。

出土陶磁器の生産地を見ると、瀬戸・美濃系及び肥前系陶磁器が多く2,251点、96.2%を占めている。そのうち瀬戸・美濃系陶磁器は1,451点、61.8%であった。肥前系陶磁器は800点、34.1%であった。瀬戸・美濃系及び肥前系陶磁器が多くを占める出土傾向は、群馬県内の近世遺跡における出土傾向とおよそ同様である。

しかし、出土陶磁器の生産地を詳細に検証すると、異なる点も確認できる。特徴的なのが瀬戸・美濃系陶磁器である。瀬戸と美濃の割合を確認すると、美濃が多くを占めていることが分かった。瀬戸・美濃系陶磁器の詳細については後述する。

第4章 調査の成果とまとめ

また、在地土器が確認できない点も異なる。群馬県内の天明三年下を含む近世遺跡からは、焙烙を中心に多くの在地土器が出土している。少なくとも県内平野部においては、近世遺構から焙烙が出土する例は多い。一方、東宮遺跡を含むハッ場地域の遺跡において、遺跡から近世の在地土器である焙烙が出土した例は管見の範囲ではない。東宮遺跡出土の小型の土師器皿（51区2集No. 1）が近世所産とも思われるが、数は僅かだ。

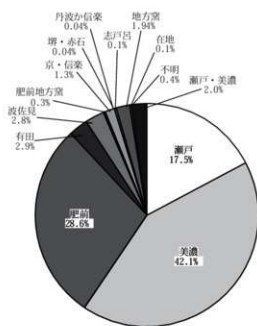
中世に比定される内耳土器の出土例は、ハッ場地域の遺跡においても多い。出土する内耳土器は、県内平野部のいわゆる「上野・武蔵型」とは異なり「信濃型」ではあるが、出土様相に県内平野部との明らかな差異はないだろう。県内平野部は、近世以降も在地土器が流通し、消費していた。ハッ場地域で、近世以降在り土器の流通がなかった、或いは極めて少なくなった理由については明らかでない。山間部にあることや、近世在り土器の生産及び流通範囲などが要因と思われるが結論を見ない。今後の資料増加に期待したい。

肥前系陶磁器の中には多くの陶胎染付が含まれていた。そのためグラフ1の肥前系陶磁器の中には、波佐見系も内包されているものと考えている。群馬県内において陶胎染付の出土例は多く、これは県内平野部と同様の出土傾向であった。

瀬戸・美濃系及び肥前系陶磁器以外には、埴・明石1点、志戸呂3点、京・信楽26点などの陶磁器が確認された。群馬県内において、これらの生産地の陶磁器がどの程度の割合で出土したか、それを比較できる資料はなく明らかでない。現状では、およそ同様の出土傾向と考えている。

2. まとめと課題

今回の悉皆調査の中で、生産地を同定できない陶磁器が58点、2.42%と僅かだが確認された。これらは、関西系、日本海側、長野県、瀬戸・美濃系など、特徴は多様であり、また近世に比定できないものも含まれている。しかし、生産地が明らかでない、近世と思われる施釉陶器が含まれている点は重要と考えている。これまでに確認されていない、施釉陶器を生産する、近世陶磁器生産地の存在を考慮する必要があるのかもしれない。これらについても、今後の資料増加に期待したい。



グラフ1 東宮遺跡出土陶磁器生産地

表1 東宮遺跡出土陶磁器生産地一覧表

生産地	破片数
瀬戸・美濃	47
瀬戸	414
美濃	990
肥前	667
有田	68
波佐見	65
志戸呂	3
肥前 地方窯	6
京・信楽	26
埴・明石	1
丹波か信楽	1
在り	2
地方窯	47
不明	11
総数	2348

2 東宮遺跡出土の瀬戸・美濃系陶磁器

はじめに

東宮遺跡からは多くの陶磁器が出土した。その大半は瀬戸・美濃系陶磁器及び肥前系陶磁器が占めており、その数は9割を超える。この出土傾向は、群馬県内平野部とおよそ同様であった。しかし、陶磁器生産地を詳細に検証すると県内平野部とは異なることも確認できた。前述の通り、近世在地土器の出土状況は大きく異なることが確認され、また、瀬戸と美濃の陶磁器出土量にも違いがあるのではないかとと思われる。

ここでは、群馬県平野部に位置する館林市と八ッ場地域にある東宮遺跡の出土陶磁器生産地、瀬戸と美濃の出土量に違いがあるのかを比較、検証し、その要因についても言及したい。ここで報告する館林市の調査成果は、館林市誌刊行に伴い市内出土の陶磁器を悉皆的に調査した成果であり、東宮遺跡と同じく愛知学院大学の藤澤良祐氏に鑑定して頂いた成果でもある。この調査成果については、館林市誌編集センターの許可を受け報告している。

1. 地理的環境 (第1図)

東宮遺跡のある長野原町は、群馬県北西部に位置する。本遺跡は高間山の南東麓にあり、吾妻川左岸中位段丘上に位置する。標高は約530～540m。群馬県内においては長野県よりの山間部に位置する。

館林市は群馬県南東部、関東地方のおよそ中央にある。標高は約14～33m。群馬県内においては低地に位置する。埼玉県、茨城県、栃木県との県境付近に位置し、利根川と渡良瀬川とに接するようである。

東宮遺跡下を流れる吾妻川は、吾妻渓谷などの狭険で急峻な箇所もあり、水運には不便で、嘉永四年(1851年)まで定期的な通船はなかったと思われる¹⁾。そのため、東宮遺跡で出土した遺物の多くも、陸路で運ばれてきたものと推測される。

館林市は平野部に位置し、近世においても、利根川や渡良瀬川を利用した水運が盛んに行われていたと思われる。陸路及び水路による物流が盛んであった館林市と、陸路を主とする物流であった東宮遺跡とは、流通の様



第1図 位置図

表1

東宮遺跡出土 瀬戸・美濃系陶器

瀬戸 142点(23%)	美濃 488点(77%)
-----------------	-----------------

館林市出土 瀬戸・美濃系陶器

瀬戸 44点(44%)	美濃 55点(56%)
----------------	----------------

※瀬戸1～8小期までの出土瀬戸・美濃系陶器。点数。



11建-4(1/4)



13建-32(1/4)

※生産地で文字が書かれた陶磁器。11建-4は「市左衛門」、13建-32は「孫兵衛」。

0 1:4 8cm

第2図 IV区11・13号建物出土陶器

相が大きく異なるものと考えられる。

2. 出土陶磁器生産地による出土量の比較(表1)

ここでは、山間部にある東宮遺跡と、平野部にある館林市との出土傾向を比較する。館林市は、平野部に位置することから、本遺跡との比較対象地とした。しかし、館林市において、天明泥流で被覆された良好な出土状況の遺跡は確認されていない。そのため、館林市内出土陶磁器のうち、瀬戸或いは美濃と鑑定された連房1～8小期(連房式登窯第1～8小期の略。以下同様)に略す。17世紀初～18世紀後半期)のみを比較対象とした。この条件を満たす館林市内出土陶磁器は、99点を数える²⁾。

同様に東宮遺跡においても、瀬戸或いは美濃と鑑定された連房1～8小期の陶磁器で比較した。この条件を満たす東宮遺跡出土の陶磁器は630点を数える。

東宮遺跡出土の、瀬戸或いは美濃と鑑定された陶器は630点あり、そのうち瀬戸は142点、美濃は488点であった。美濃が77%と、8割近くを占めていることが確認できた。

一方の館林市内では、比較対象とした99点の陶器のうち、瀬戸が44点、美濃が55点であった。美濃が56%と、およそ瀬戸と同じ割合で出土していることが確認できた。

3. 文献における美濃陶器の流通について

山形万里子氏は「幕末期の美濃焼物の販売市場と輸送」³⁾の中で、上州・野州への抜け荷の例を紹介している。文久三年(1863年)1月に「信州路にて売残り分扱兼、中山道岩村田宿問屋え預け置、手本品を以上州野州え罷越、別紙取調帳名前先え引合詰、右問屋え引取荷物え紙札を付差送り、端物ハ路々荷ない行商ひ仕候」とあり、「尾張藩陶器仕組江戸商人の独占販売地域である上州・野州への売り込みが発覚し、抜け荷として摘発」されたこと、群馬県や栃木県へ見本販売をした件が、抜け荷として摘発されたことを指摘している。また、「取引形態は見本をみせて、商談成立後、後から輸送業者に委託して荷を送り届ける」場合があったことも紹介している。

4. 東宮遺跡出土の陶磁器(第1図)

信州(長野県)に近い山間部の東宮遺跡では美濃が多く、江戸に近い平野部の館林市では瀬戸と美濃がおおよそ

同じ割合で出土した。これは物流の違いによる結果ではないかと推測している。

瀬戸も美濃も陸路、水路を利用して陶磁器を運び、江戸を経由して群馬県内に流通したことが推測される。少なくとも天明期頃の館林市では、江戸を経由して多くの物資が流通していたことが推測される。

一方、山形万里子氏は美濃の陶器が陸路で群馬県内に販売されていたことを指摘している³⁾。どの街道を通りどの程度販売していたのか、その詳細は明らかでなく、また、文久三年(1863年)と天明三年(1783年)では時代も異なる。しかし、抜け荷として摘発されるまでは一定量の物流があったものと思われ、それが天明期まで遡る可能性も考えられる。

群馬県内では長野県側に位置し、陸路を中心に物流のあった東宮遺跡において美濃の陶器が多く出土したことは、陸路による美濃の流通が天明期頃にはあり、その量も一定量あったためではないかと推測している。

5. まとめと課題(第2図)

東宮遺跡出土の特筆すべき陶器に、11号建物出土の鎧湯呑(11建No.4)と13号建物出土の柳茶碗(13建No.32)がある。ともに焼成前、11建No.4は高台内に「市左衛門」と刻書され、13建No.32は「孫兵衛」と書かれていた。生産地である美濃で、名前が書かれたのは明らかである。ともに連房8小期の美濃であった。

文献では、見本を見せ、輸送業者に委託して後から荷を送り届けることが紹介されていた³⁾。その際に、名前を書く注文を受け、生産地で焼成し運ばれたのかもしれない。これらについて詳細は明らかでないが、今後の資料増加に期待したい。

註

- 1) 大西雅広・黒澤照弘 2009「美濃県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」「江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通」で、嘉永四年(1851年)「吾妻川通船見込帳」の中に「瀬戸物」の記載はあるが、開始後4年で休船となったと報告されている。
- 2) 館林市での調査では、陶磁器破片数の資料がないため点数で報告する。同様に東宮遺跡でも点数で報告する。また、瀬戸か美濃の可能性が高いと判断されたものは瀬戸或いは美濃として報告している。
- 3) 山形万里子 2008「瀬戸陶器専売制と中央市場」日本経済評論社

3 東宮遺跡出土遺物の補修痕跡

はじめに

東宮遺跡では、多くの出土遺物から欠損部を補修した補修痕跡が確認された。補修された遺物の種類は多様で、補修の方法も一様ではない。ここでは、東宮遺跡における補修について整理し報告する。

1. 漆継 (4建No.55・56、7建No.21)

陶磁器を中心に欠損部を繋ぐ補修が見られた。漆を接着剤とした「漆継」である。

漆継は、出土した陶磁器の31点で確認された。報告した陶磁器では24点を数える。報告する陶磁器の大半は、使用時のまま泥流で被覆されており、補修痕跡も良好に遺存したものと考えている。

2. 鉄銅類の補修 (1建No.408)

東宮遺跡からは、多くの鉄銅や茶釜類が出土した。報告したもののだけでも、鉄銅類24点、鉄銅類取手3点、茶釜3点、薬缶3点と蓋12点を数える。

報告以外にも鉄銅類はあるが、破片であり、報告した鉄銅の欠損部分とも考えられる。出土した鉄銅類と、報告する鉄銅類の点数は、およそ同数であろう。

出土した鉄銅の中には、欠損部を溶接により補修した補修痕跡が確認された。出土した鉄銅に溶接による補修痕跡が確認された出土例は、管見の範囲ではない。東宮遺跡からは、出土した24点の鉄銅類のうち、8点に欠損部を溶接により補修した補修痕跡が確認できた。

東宮遺跡からは、木製の蓋がされた鉄銅 (1建No.408) が出土している。極めて良好に遺存したこの鉄銅にも、溶接による補修痕跡が確認できた。鉄銅の補修した溶接上には良好にスズが遺存していた。大きく割れた鉄銅も、溶接により補修され、使用され続けていたことが確認された。

溶接に使用された金属は、銅を主体とするスズとの合金であった。溶接部分の分析は数カ所で行った。補修する鉄銅の大きさ等で、合金の割合などを変えることも考慮し、分析は数カ所で行った。溶接部分の分析結果は第4章第4節9に後述している。

溶接部分を観察すると、表面が綺麗に仕上げられていない、やや粗いものが見られた。また、鉄銅類には多くの溶接痕跡が確認できたが、茶釜には見られなかった。茶釜に補修痕跡が確認できない理由は明らかでない。今後の資料増加に期待したい。

3. 桶・樽類の補修 (5建No.176、7建No.44)

東宮遺跡からは、多くの桶や樽が出土している。埋設された桶のように大型のものから、赤色漆で仕上げられた樽 (5建No.177) まで様々だが、出土した桶や樽の中にも補修痕跡が確認された。

樽 (7建No.44) の側板には小さな孔が複数あり、ここに木の枝のようなものを差し込み補修した補修痕跡が確認された。同様に、木製の蓋 (5建No.176) にも補修痕跡が確認できた。ともに、比較的長い期間使用していたと思われ、蓋は、樽の蓋に取手を取りつけた転用品と考えている。

4. その他の補修

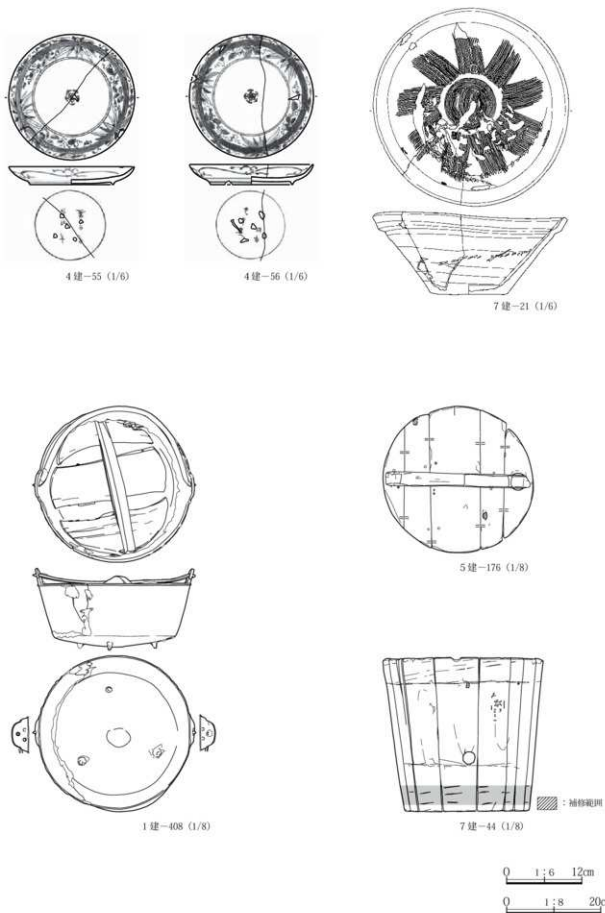
これまでに述べた遺物以外にも、補修されたと思われる遺物が何点か確認された。

赤色漆で仕上げられた曲物 (4建No.72) は、欠損した部分を繋ぐため木皮で補修した曲物と思われる。

特異な補修痕跡に、7建No.21のすり鉢がある。内外面には、焼成前に割れた生地を繋ぎ合わせた、櫛歯状の工具痕跡が確認できる。また、V字状に欠損した部分は、焼成後欠損した部分を漆継で補修した痕跡である。生産地である瀬戸と、消費地である東宮遺跡での補修が、ひとつの陶器で確認された珍しい出土例である。良好に遺物が遺存していた東宮遺跡だからこそ出土した遺物と考えている。

まとめ

東宮遺跡からは、多くの遺物の中に、多様な補修痕跡が確認された。欠損した物や道具を捨てるのではなく、補修し使い続けていたことが分かる。また、1号建物のような大規模な建物であっても、補修痕跡は同様に見られた。補修し再利用することは、一般的であったと考えている。



第1図 補修痕跡が確認された出土遺物

4 東宮遺跡出土の下駄

東宮遺跡からは、同一個体の破片や細片の一括を1点とした資料も含め、総計82点の下駄が出土した(観察表)。その内の2点(1建ア・ウ)はいずれも差歯の破片で同一個体と想定されるため、最大個体数は81点となる。

下駄は履物であり、通常人の左右の足に2点が対で使用されるものである。本遺跡出土下駄においては、形態・調整痕・塗られた漆の特徴・使用痕等から対の組合せが21組存在する。残りの多くのもの間でも対になる可能性は想定されるものの、使用のための摩耗による諸特徴の欠如や乾燥時の変形等によりそれ以上の確認は困難である。一方、対の組み合わせを確認した資料の2点間の特徴を比較すると、左右間での形態上の顕著な違いは認められない。そのため、一般的な特性の把握を目的とした形態分類においては、左右の対の問題は措き、出土資料全体における形態上の傾向性の把握に努めることとする。

出土した下駄を概観すると形態的にいくつかは大別されるとともに、細部の属性では変異が存在する。出土下駄のもつ意味を検討する前提として、以下にまず形態分類を行う。

その後、本遺跡出土の差歯下駄における特徴的な装着方法についてやや詳しく述べ、また、比較的多く確認した左右の対の内容を記し、形態と樹種の関係等を述べる。

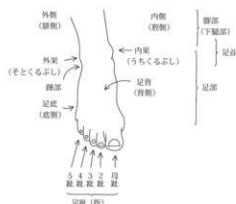


図1 足の部位の名称(山崎編 1999による。)

なお、出土した下駄は基本的に浅間A泥流で覆われており、時間的には天明3年(1783)直前の限定された時期に製作・使用された一括資料である。本形態分類を踏まえての出土状況の分析結果については、別途記載する。

1. 下駄の形態分類

下駄は、人が屋外で歩行する際に足(図1)を地面から高く保って土や泥土、雨水・雪等からの汚れや濡れを防止するための木製の履物であり、「鼻緒履物類」(宮本 1933)の一種である。その基本的な形は、足を乗せる「台」と「歯」(図2・3・4)と、足を台に固定する緒(図5)から成る。台の歯は足を地面から高位に保つため、通例その前後の下部に並行して2つ付く。そして、台の前面1箇所(前歯)、後面2箇所(横緒孔)に小さな穴(眼)を上下に貫通させ、後者間を前歯の位置を経由して結ぶ横緒とその中央部に母趾と2趾の間に挟む鼻緒を掛け、

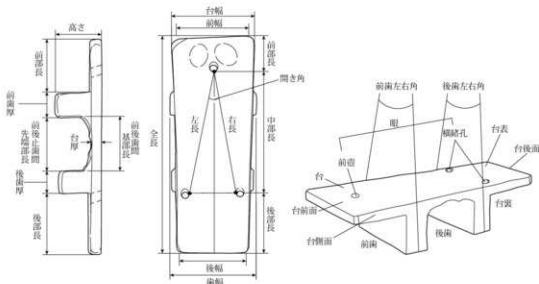


図2 下駄の部位の名称と計測位置(1)

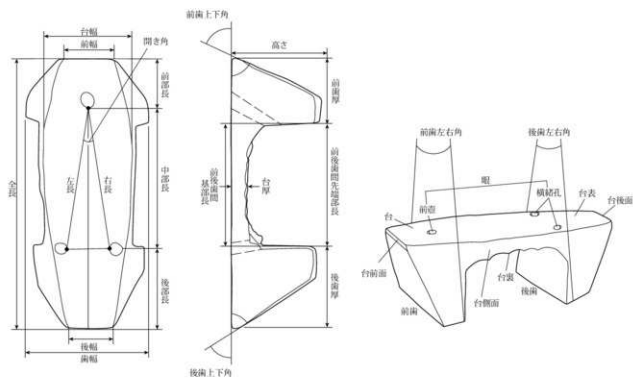


図3 下駄の部位の名称と計測位置(2)

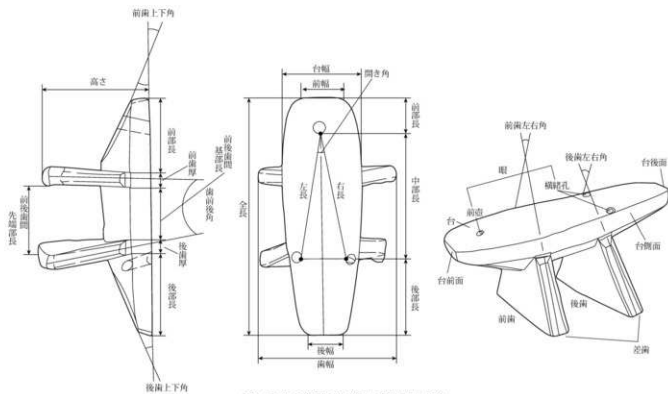


図4 下駄の部位の名称と計測位置(3)

それぞれの端部を横緒孔及び前壺に挿入して台裏で固定し、台に乗せた足の甲（足背）を内外に分けて跨がせる緒を付けることになる。

本遺跡出土下駄における形態は後述のように多様であり、それらに1つのもしくは単純な系統関係を想定するのは困難と考えられ、多様な形態の意味の理解も容易ではないことが想定される。下駄の出現当初は1つのもしくは単純な系統関係であったかも知れない。しかし、その後の経過の中で下駄を構成する諸要素が複雑に組み合わせられ、機能上の改良も加えられた結果、多様な形態が生じることとなったものと思われる。ただし、本遺跡出土下駄を総体的に見ると諸属性の組み合わせにおいて、いくつかの斉性の高い類型化が認められるのである。

本項においては、下駄における「歯」の形成のあり方と、足裏に密着させる台の平面形状、さらに「歯」と鼻緒を固定する「眼」の位置関係等に注目して形態分類を行い、各分類の持つ意味を検討できる基礎作業とする。

なお、素材が木であるため、地中での遺存中や発掘後の保存処理中に変形している場合がある。また、出土点数が少ない例の場合には、その一般性の理解に十分な状況がないことを付記しておきたい。

ところで、下駄の部位の名称は『地下からあらわれた江戸』（古泉 2002）を参考にした。

（1）分類の結果

出土した下駄（観察表）を上記の属性に基づき類型化した結果は次のとおりである。

1. 一木下駄

台と歯が一体で成形された一木下駄であり、いわゆる「連歯下駄」である。台の形状が長方形状か紡錘形状が大別し、台の細部の形状、前後歯間の調整方法、歯と横緒孔との位置関係等により次のとおり細分した（図6・7）。

① I A 1 (●)

19点が検出されて主要な形態の一つであり、そのうち4組の対の組合せを確認した。

台と歯は素材が同一であり、一体として連続して成形され、台の前・後面は垂直に切断されている。台表の平面形はほぼ長方形で隅丸を呈するが、その最大幅は台前面端部にあり、台前面から台後面にかけて台の幅はわず

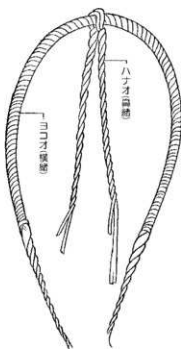


図5 下駄の緒の名称（宮本 1933による。）

かに減少する。歯は台の前・後面から独立しており、前後の歯はほぼ並行で、台から垂直に下部へ伸びる。その歯の側面は台側面から段差を持つことなく連続し、その先端に向けわずかに開く。その結果、歯の左右の先端部は台の側面の下部延長部よりはみ出す。前・後歯の間は、丸ノミによる左右の横方向からの整形により中央部が最も削られた輪花状あるいは三連弧状を呈する。前壺は前面に向け傾斜する例と垂直の例、そして後面に向け傾斜する例がある。横緒孔は後歯の後ろに、ほぼ垂直に穿たれる例もあるが、後歯を避けるように後面に向け傾斜して穿たれるのが基本である。歯には確認する限りにおいて全面に薄い黒漆が塗られ、台表と前・後面、側面に赤漆が塗布される。

全長は最短216mm、最長226mmで、222～225mm前後に集中し、台厚は10mm前後である。前幅は最短71mm、最長87mmである。

前壺と横緒孔との関係では、左右の横緒孔の内側中央部を結んだ線に対して前壺から降ろした線の交点の長さ（中部長）は、125mmを中心として集中し、ほぼ115mmから135mmの間に差異がある。前壺から左右の横緒孔の開き角は1例（1建40）の25°を除いて19～22°に収まる。

② I A 2 (○)

3点が検出されたが、対の組合せは確認できなかった。前記のI A 1とは、前・後歯の間が平坦状である点で

第4章 調査の成果とまとめ

異なる。全長は218cmから223cmの間に収まり、前幅は70～74mmである。中部長は122～126mm、前壺から左右の横緒孔の開き角は18～19.5°に収まる。

③ I A 3 (○)

2点が検出され、対の組合せを確認した。

前記の I A 2 とは、横緒孔が後歯の前である点で異なる。I A 2 と各部位の値を比較してみると、I A 2 に比べて全長は233mmと長く、台裏では前部長、前後歯間長も長い、台裏の後部長は短い。また、前壺～横緒孔の開き角が大きく、両者間が長い。

なお、対の組合せと確認した2点間でも、中部長に5mmの差がある。

④ I A 4 (●)

2点が検出されたが、対の組合せは確認できなかった。

前記の I A 1 とは、台表の最大幅が中央部にある点が異なり、全長が206・211mmと I A 1 の変異の幅からはずれて小さく、中部長も115mm前後と小さい。また、2点の内、1点は歯の左右の開きはほとんどなく、他の1例もそれが弱く、前記の I A 1～3 とは歯の左右の開きの状況に差異を認めるべきかも知れない。

⑤ I B 1 (△)

大型と小型の各1対の組合せを確認した4点が検出された。

台表の平面形は両端を切断した紡錘形状で、前部が後部にくらべてやや広く、最大幅は前部中央付近にある。歯は台前後面部と連続しており、前歯の前部と後歯の後部はともに内側に傾斜し、歯の両側面は先端に向け少し

開く。歯の内側はほぼ垂直に成形されている。前歯の上下角（前のめり）と後歯の上下角（後のめり）では前歯のそれが急である。歯の間の側面は基本的に5弁の輪花状もしくは連弧状を呈し、前後の歯との接合部の側面は三角形にすり付けられる。前後の歯の間はその三角形形状の接合部の裏面を含め、ノミにより抉られ、ほぼ平坦となる。前壺は台表の前部中央から前歯の中央基部後部に内傾して穿たれ、前歯の後部は前壺の孔を中央にして3弁の輪花状に整形され、その中央で鼻緒が結ばれる。横緒孔は台表の後部から後歯の前へ内傾して穿たれる。基本的に全面に薄い黒漆が塗られ、台表と前・後面、側面に赤漆が塗布される。子供用と考えられる小型がある。

大型の2点の前壺と横緒孔の開き角が17°と狭く、中部長が115・116mmと短い。

⑥ I B 2 (▲)

35点が検出され、前記の I A 1 と並んで主要な形態の一つであり、8組の対の組合せを確認した。I B 1 とは、台裏の前・後歯の間が平坦であり、輪花状を呈さない点で異なる。子供用と考えられる小型がある。全体的に使用による摩耗が激しく、製作時の状況が分かりにくい、漆の塗布の痕跡は認められない。大型は全長の最短209mm、最長227mmで、215mm前後に集中する。大型の2点の前壺と横緒孔の開き角は広く、中部長は短い傾向がある。

⑦ I B 3 (△)

対の組合せを確認した2点が検出された。

台表の平面形は I B 1・2 に近いが、前後部とも直線上ではなく弧状である。最大幅は前部端部にあるが、他

表1 東宮遺跡出土の各類型の属性関係表

類型	台と歯の成形	台の平面形	台の最大幅の位置	台と歯の関係	横緒孔の組の位置	歯間の特徴	台から歯への面の関係	漆の塗布の状況	点数(個体数)	備考
I A	1	一体	ほぼ矩形	前前部	歯は台の前後面から独立	後歯の後	連続	台上面及び側面に黒漆	19	
								その他の面に薄い黒漆		
								平凹状	2	
								後歯の前		
	B	後部がすばまる紡錘状	ほぼ中央	歯は台の前後面と連続	後歯の前	輪花状	連続	台上面及び側面に赤漆	4	1
								その他の面に薄い黒漆		
								平凹状	2	
II A	差歯	ほぼ矩形	ほぼ同一	歯は台の前後面から独立	後歯の後	歯状	面は連続	台上面及び側面に赤漆	1	歯の接合は「懸懸納」ではない。前の接合は「懸懸納」である(未確認を含む)。
								その他の面に薄い黒漆		
								面は非連続	2	
								後部がすばまる紡錘状	6	
B	1	ほぼ同一	前部中央部					6	2	
								2		
合計									81	

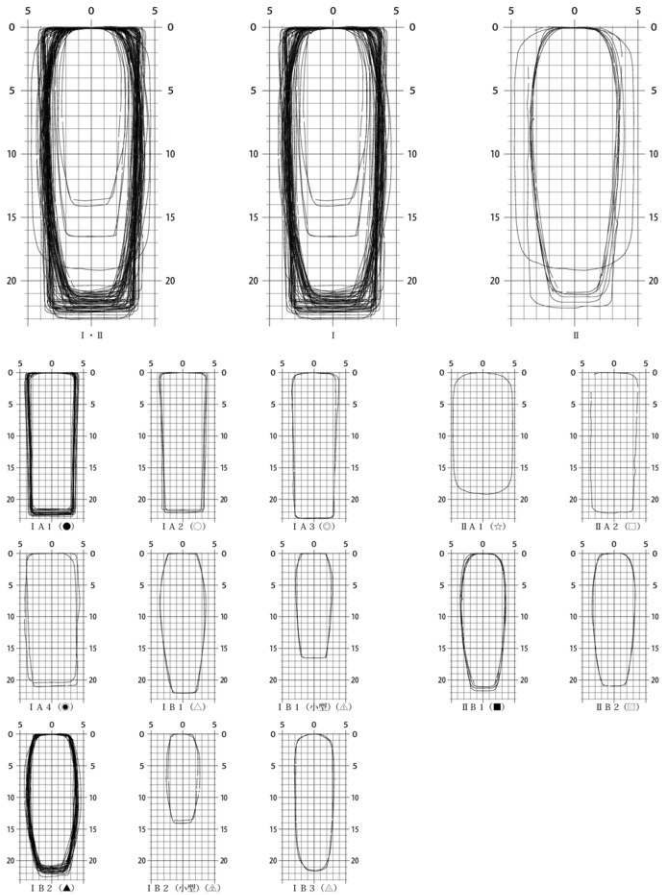


図6 台の平面形の集成図

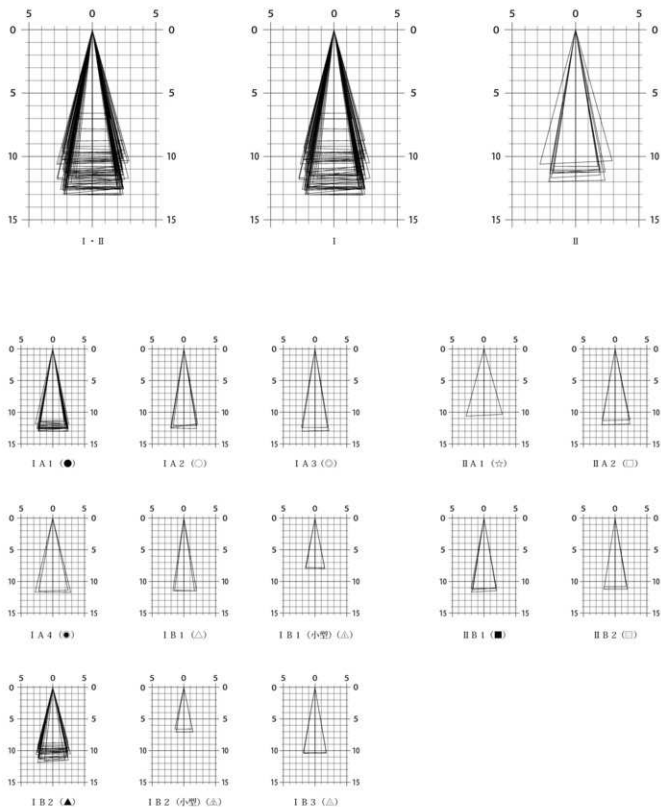


図7 台の眼の位置関係集成図

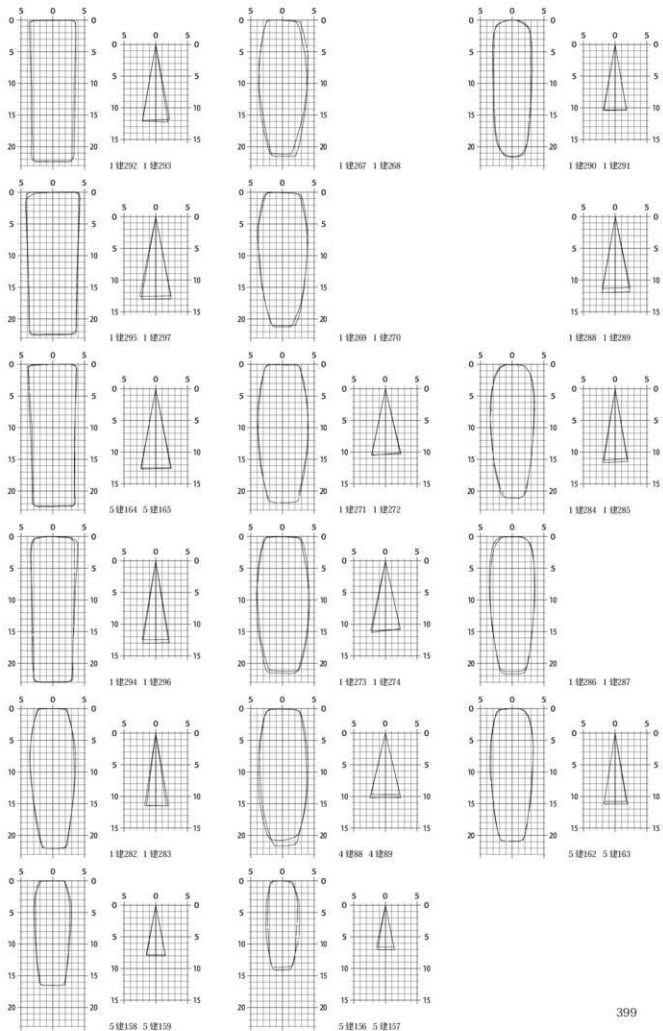


図8 対間における台の平面形の重ね図と眼の位置関係図

第4章 調査の成果とまとめ

部と比べてそれほど差異はない。歯は台部と面的に連続しておらず、独立している。前歯前面は台部と弧状にすり付き、後歯後面は少し後部に傾斜して直線状に削出されている。前後の歯の間は先端に向かってやや開く。前歯は前歯の前にほぼ垂直に穿たれ、横絡孔は後歯の前面に台表からやや前方へ傾斜して穿たれている。

I B 1・2とは、歯が台前後面と面として連続しない独立し、前歯は前歯の前に穿たれている点で異なる。また、前後の歯の開きに違いがある。しかし、大きさの点ではそれらの変異の幅の中に取まる。

II. 差歯下駄

台と歯が別素材で、差歯の出納が台表で確認されないいわゆる「陰卯下駄」である。差歯の装着方法で2種に大別され、台の形状で4類型に細別される。なお、台表に差歯の出納の先が確認されるいわゆる「露卯下駄」の出しは確認されなかった。

① II A 1 (☆)

1点のみ検出された。

歯は台裏に刻まれた溝に挿入される。台は平板状でその平面形は隅丸方形である。台の側面は表から裏に向かい内側へ少し傾斜する。前歯は前歯の前面、横絡孔は後歯の前にほぼ垂直に穿たれる。台表と側面の一部に赤漆が塗布されている痕跡が有る。台裏の溝に残る歯の端面の断面を見ると、歯の挿入部の表面部が緻密化されているように見られ、歯の台裏の溝への装着にあたっては、歯の挿入部を木槌等で叩いて圧縮させ、後に水分を含ませて膨張させ、台との密着を企図した「木殺し」(成田1988)の痕跡と考えられる。つまり、後述する「歯」の木口部分における「地獄納」を使用しての歯の膨張による圧着は認められないのである。

形態上のみならず、台の全長・厚さ等で他と大きく異なる。

② II A 2 (□)

対の組合せを確認した2点が検出された。

台の平面形が隅丸長方形で、断面が船底状の台裏に刻まれた溝に歯が挿入される。歯は台部から先端部に向け左右に大きく開き、前後の歯の間も先端部に向かいやや開く。差歯の台部挿入部の側面端面は台部側面の傾斜に沿って面が形成される。台表と側面は赤漆が、その他の面は黒漆の塗布が認められる。黒漆の上に赤漆が重ねて

塗布されているものと考えられる。歯の台部への装着にあたっては、後述する「地獄納」による。

2点のうち、ほぼ全形が遺存する1点の全長は222mmであり、比較的長い。

③ II B 1 (■)

3組の対の組合せを確認した6点が検出された。

II A 2とは、台の平面形が前後を切断された紡錘形状であることが異なる。保存のため、差歯を全て抜くことは控えたため、その装着方法をすべて視認できなかったが、部分的にX線撮影も行い、差歯の装着は全て「地獄納」によるものであると推定した。

計測できる範囲で、全長の最長は215mm、最短は207mmと比較的短い。

④ II B 2 (□)

対の組合せを確認した2点が検出された。

II B 1とは、台裏後部が平坦状に整形されている点が異なる。2点の全長は209mmと比較的短い。

(2) 小結

上記に基づいて分類した結果をまとめると表2のとおりであり、その特徴を下記に列記する。

①全資料81点の内、一木下駄が68点、差歯下駄が13点であり、前者が約84%を占め、主体的である。

②細別類型で見ると、I A 1が19点、I B 2が35点とこの2類型で一木下駄の約80%、全体の約67%を占める。I A 1に形態上近いと考えられるI A 2の3点とI A 3の2点を前者に加えると24点、I B 2に形態上近いと考えられるI B 1の4点と、I B 1かI B 2のいずれかに属する1点を後者に加えると40点となり、この2グループで一木下駄の約94%を占め、これらが本遺跡出土下駄の主要な類型であると言えよう。

③点数の多い細別類型の中で、左右の対になる組み合わせを抽出するのは容易ではないが、点数の少ない細別類型の中で検討すると、左右の対になるものと考えられる組み合わせが比較的容易に確認される。このことは、点数の多い細別類型の中に左右の対になる例が多く含まれていることを示唆しているものと思われる。出土下駄全体における対の確認の比率について、他遺跡の状況との比較で本遺跡の状況の多少を論じられないが、比較的高率であるように考えられ、遺構との関連及び遺存理由の理解に関係する可能性がある。

④大きさの点では、子供用の小型は1B1・2に各2点の各1対しか認めらず、1Aの各類型群に小型が本来的に存在しないのか、問題である。

⑤差歯下駄の11点の内、差歯の装着方法として「地獄柄」を使う例は10点と圧倒的である。

⑥他遺跡の状況も加味して慎重に検討しなければならないが、台の大きさと緒の長さから、台の平面形が長方形の類型群は男性用、前後が切り落とされた紡錘形状のそれは女性用であることが推定される。

2. 差歯下駄における台と歯の装着方法について

上述のように、本遺跡からは台と歯が別素材で構成される差歯下駄が、差歯のみの例を含めて13点出土している。それらは、台の裏に刻まれた溝に歯を装着したものであり、その方法は木工における「大入れ接ぎ」(図9)に相当する。それは、「2枚の板をT形に接ぐとき一方の材の木口をそのまま柄として、他方の材に溝をつくってはめ合わせ、釘打ちかあるいは接着剤をつけて接ぐ方法。『大入れ接ぎ』とも書き、おいれつぎともいう」(成田編 1988)とされる。本遺跡出土差歯下駄の内、1点の台は平板状で、台と歯の接合方法は釘打ちではなく、歯における溝との接触部を木槌で圧縮した後に歯を溝にはめ合わせ、その後水分を含ませて膨張させて歯を溝に密着させたものと推定される。その他の差歯下駄においては、船底状の台の裏にその長軸に対して直交して刻んだ溝に歯をはめ合わせただけではなく、台の裏の溝と歯に特別な仕掛けがなされて装着されている。

ここでは、その特別な仕組みについてやや詳しく述べ、類似にあたり、今後の検討の参考にすることとした。

(1) 木工における「地獄柄接ぎ」

東宮遺跡出土の差歯下駄における特別な仕掛けを見る前に、木工における参考例を見ておきたい。

木工における接手のひとつとして、「地獄柄接ぎ」あるいは「地獄蟻柄接ぎ」と呼ばれる方法がある。「地獄柄接ぎ」(図10)は、「柄の先に楔をはさんでおき、あらかじめ穴底の妻の方を広げた止め柄穴に打ち込んで、柄先を広げて固定する柄接ぎ。絶対に抜けないところからこの名がある。『隠し楔柄接ぎ』が正式名称で、『跨ぎ(またぎ)柄接ぎ』ともいう」(成田編 1988)とされる。また、「地獄蟻柄接ぎ」(図11)は「柄穴の底を幅に楔の



図9 木工における「大入れ接ぎ」(成田編 1988による。)



図10 木工における「地獄柄接ぎ」(成田編 1988による。)

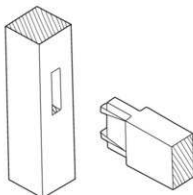


図11 木工における「地獄蟻柄接ぎ」(鳥海 1987による。)

代より弱めにひろげ、柄先の挽込みに埋め、楔を立てて打ち込む接合で、いったん打ち込むと抜けない」(鳥海 1987)ともされる。

つまり、この「地獄柄接ぎ」では、柄穴は止め柄であり、貫通しない柄穴に柄をはめ合わせる際、柄の先端部にその妻と並行する方向で施した2条の挽込みに2つの楔を立て、柄穴の両側の妻の部分はその楔の代より弱めに広げておく。柄穴に柄を打ち込むと、柄穴の底にまず楔の頭が当たり、さらに打ち込み続けると打ち込んだ力が柄穴から楔の頭へ反作用として働き、楔が柄に食い込むこととなる。その結果、柄の先端は両方の妻側へ開くこととなり、柄穴の底を楔の代より弱めに広げた空間にきつく充填されることとなり、柄と柄穴は密着し抜けなくなるのである。

この外部からはその存在が見えない「隠し楔」と、それが柄に食い込む過程での柄先の広がり、そしてその広がりを受け止めるために柄穴に広げられた空間が、この「地獄柄接ぎ」の基本的な仕掛けである。

(2) 東宮遺跡出土の差歯下駄における「隠し楔」を利用した接合方法

本遺跡出土の差歯下駄において一般的に確認される台

第4章 調査の成果とまとめ

と歯の接合において、前項で見た「地獄柄接ぎ」の基本的な仕掛けが活用されていることが大きな特徴である。その実際は次のとおりである。

船底状を呈する台裏においては、差歯を挿入するためその長軸に対して直交して2条の溝が刻まれる。そして歯が挿入される溝のいずれも前面の中央部内面に、溝の側面の中央部から溝下端部に向かって断面が直角三角形の楔形の空間が形成される。それには刃先が直線状のノミが使用される。

一方、歯においては、台の溝に挿入される木口の部分の、台と歯を接合した場合上述の溝の側面に形成された断面が直角三角形の楔状の空間に対応する位置に、同空間の幅に合わせてノコギリにより2状の切り込みが入れられ、その切り込みに直交する位置で溝の楔形状の空間に寄った位置に小さな楔が据えられる。この楔の据えられた歯の木口が台の溝に打ち込まれ続けると、楔の頭は溝の底面から反作用の力を受け、打ち込まれるに従って楔は歯の木口に食い込む。その結果、先にノコギリにより入れられた2条の溝に添って楔の据えられた部分から外側の歯の側面が開き、台の溝の側面に形成されていた楔形状の空間に収まることとなる。その開く側面の基線として先の2条の溝に直交する細くて浅い溝を設ける場合がある。楔により開く形状を当初から徹底して管理しようとする意図の結果と考えられる。

(3) 類例の検討

東京都新宿区市谷の尾張藩上屋敷跡遺跡では、差歯下駄で隠し楔を使用した例として、台と歯の遺存した例5点と、歯の上端面中央に「超小型楔(地獄柄)」が刺さった例が出土している(東京都埋蔵文化財センター 2002)。

それらによれば、超小型楔は歯の側面に並行して、一方の面に偏った位置(1:3~4)に切目を入れられた上で据えられており、楔の据えられた歯が台の溝に打ち込まれ溝の底面に楔の頭が当たり、更なる歯の打ち込みの反作用で、「楔の貫入により、一方の面が容易かつ確実に膨らんで片蟻形状を呈するようになることを意図したものと推察される。その目的は、一方の欠溝壁を挟り込んで局所的に造作した擬似的な蟻穴状構造の挟り(以下、蟻穴状挟りと呼称する)に向かって膨らんだ蟻形状の膨らみ部分がしっかりと充満することで、蟻柄とほぼ

同様な強固な接合関係を期待したものであると判断される」(江里口 2002)とした。なお、上記の超小型楔が刺さった歯は、18世紀代に廃絶されたと考えられる遺構から出土している。

この尾張藩上屋敷跡遺跡における隠し楔を使用した陰卵下駄を東宮遺跡の例と比較すると、次の特徴が挙げられる。

①東宮遺跡例では台の平面形は隅丸長方形はあるものの紡錘形が主体であり、尾張藩上屋敷跡遺跡例は隅丸長方形が主体である。

②東宮遺跡例では台裏の溝に隠し楔による膨張を受ける「挟り」は前後歯とも前面に設けられるが、尾張藩上屋敷跡遺跡例では台中央部に面した溝の側面に、つまり前歯の溝にあっては後面、後歯のそれにあっては前面に設定される。

③東宮遺跡例では、台裏の溝に挿入する歯の木口部分に楔を歯の長軸に並行して据える際、長軸に直交して切り込みを入れ、歯が溝に打ち込まれることにより楔が歯の木口に食い込むのに伴い、その切り込みによる2条の溝の間が次第に開き、溝の側面の空間に収まることとなる。しかし、尾張藩上屋敷跡遺跡例では、そうした歯における長軸に直交する2条の溝の切り込みは認められないようである。その結果、東宮遺跡例では、歯の木口部分に隠し楔が打ち込まれると、歯の側面は楔形に開くことになる。しかし、尾張藩上屋敷跡遺跡例ではこの切り込みが施されないため、隠し楔が打ち込まれると、歯の側面は外に向かい膨張することとなる。

④東宮遺跡例は、天明3年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流下から出土しており、製作の上限は確定しないものの、天明3年(1783)に機能が停止した一括資料であり、天明3年(1783)の数年ないし数十年前から天明3年(1783)の間に製作されたものと考えられる。一方、尾張藩上屋敷跡遺跡の隠し柄が刺さった歯の例は18世紀代に廃絶された遺構から出土しており、両例の間には時期的に大きな齟齬はないものと考えられる。

なお、東京都文京区の後楽二丁目南遺跡の17世紀後半とされる遺構から「隠し楔」を利用したと推定される差歯下駄の台が1点出土しており(東京都埋蔵文化財センター 2010)。その状況は尾張藩上屋敷跡遺跡出土例に似ている。

表2 対の組合せを確認した下駄の属性表

出土遺物ID	前後分類	台表				台裏				前歯～後歯		歯下角度		歯左右角度		歯前傾角	台木取	台上面	樹種			
		前幅	後幅	前部長	中部長	後部長	前歯厚	前歯間・基部厚	後歯厚	後歯間	間き度	左長	右長	前	後					前	後	
1E267	I B 2	48	35	41	92	76	-	43	99	74	-	27	100	99	74	38	-	14	西方	心材		
1E268	I B 2	47	39	-	74	-	47	108	110	65	-	40	39	14	13	-	-	14	西方	散孔材		
1E269	I B 2	50	37	41	97	76	-	40	97	100	68	-	27	98	101	64	43	13	西方	木表		
1E270	I B 2	54	30	41	100	74	-	41	100	100	72	-	99	-	67	39	15	14	西方	散孔材		
4E288	I B 2	50	40	38	102	69	-	43	101	107	65	-	27	105	105	65	40	14	西方	心材		
4E289	I B 2	44	32	40	97	80	-	49	96	98	72	-	27	99	100	63	39	14	西方	心材		
1E283	I B 1	43	38	40	115	67	-	53	101	110	67	-	17	115	117	65	40	36	33	西方	木表	
1E282	I B 1	41	39	41	115	65	-	51	102	107	68	-	17	116	116	67	55	30	40	西方	木表	
3E	I B 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	木表	心材	
4E290	I B 2	56	43	42	102	71	-	47	101	104	67	-	27	106	104	63	44	14	14	木表	散孔材	
4E294	I B 1	27	41	33	112	80	72	12	45	47	12	66	19	115	112	28	35	42	48	西方	心材	
1E285	I B 1	34	25	26	116	66	12	40	68	11	77	19	110	116	31	29	49	48	21	西方	心材	
1E291	I B 1	30	40	37	103	73	54	42	46	61	33	40	20	103	104	-	-	41	40	西方	心材	
1E290	I B 3	42	38	37	104	73	51	45	46	62	33	39	19	106	106	-	-	35	39	西方	心材	
1E293	I A 1	72	38	40	122	62	69	25	51	53	25	64	19	123	124	-	-	40	47	西方	木表	
1E292	I A 1	75	65	40	119	65	58	24	52	53	23	67	20	122	120	-	-	35	34	西方	木表	
1E296	I B 1	40	34	-	71	68	13	46	57	13	75	-	-	-	-	29	25	53	52	14	西方	散孔材・心材
1E287	I B 1	42	35	32	111	69	65	15	48	58	13	73	20	113	113	28	25	53	50	13	西方	散孔材・心材
1E294	I A 3	68	58	33	129	63	62	34	61	61	34	42	18	131	131	-	-	34	36	西方	木表	
1E295	I A 3	70	56	33	124	76	61	35	60	63	33	44	18	129	129	-	-	34	33	西方	木表	
1E289	I B 2	57	45	36	113	74	71	13	46	54	13	76	22	115	114	25	27	51	54	6	西方	心材
1E288	I B 2	77	-	33	120	-	71	12	46	61	13	-	22	122	121	24	-	54	52	8	西方	木表
1E272	I B 2	52	46	41	103	76	-	42	110	112	68	-	24	107	104	65	43	14	13	西方	木表	
1E271	I B 2	51	42	40	104	74	-	47	108	112	62	-	25	109	106	63	43	15	14	西方	散孔材	
1E297	I A 1	87	74	36	126	65	57	25	57	57	24	63	22	128	127	-	-	14	14	西方	木表	
1E296	I A 1	160	72	38	130	58	60	27	56	58	25	38	20	132	132	-	-	17	18	西方	木表	
1E273	I B 2	54	48	41	111	68	-	48	111	115	59	-	25	115	109	61	51	14	13	西方	散孔材	
1E274	I B 2	54	43	39	110	65	-	46	111	112	56	-	25	113	111	66	49	14	14	西方	散孔材	
4E298	I B 2	55	40	-	-	-	-	49	-	-	-	-	-	-	-	40	41	14	-	西方	散孔材	
4E299	I B 2	49	-	-	-	-	-	47	-	-	-	-	-	-	-	42	39	-	-	西方	木表	
5E295	I B 2	55	25	20	70	44	-	32	84	66	44	22	71	72	57	38	25	24	24	西方	心材	
5E296	I B 2	55	25	20	70	44	-	32	84	66	44	22	71	72	57	38	25	24	24	西方	心材	
5E137	I B 2	35	32	30	66	45	-	14	66	68	37	-	25	68	67	40	40	21	28	西方	心材	
5E168	I A 1	77	65	40	115	62	56	27	51	60	25	63	18	117	117	-	-	14	14	西方	木表	
コ	I A 1	81	61	40	-	60	56	10	-	108	66	-	-	-	-	-	-	-	-	西方	木表	
5E160	I B 1	29	-	66	-	13	43	58	14	68	-	-	-	-	-	25	53	53	16	西方	心材	
5E161	I B 1	19	-	63	-	14	44	50	13	69	-	-	-	-	-	22	51	54	17	西方	心材	
5E159	I B 1	40	37	33	86	33	-	33	79	79	55	-	22	86	80	66	52	38	41	西方	木表	
5E158	I B 1	40	38	33	80	32	-	36	77	77	52	-	21	81	82	65	54	38	38	西方	木表	
5E162	I B 2	38	34	31	108	67	62	11	43	53	12	81	19	109	114	31	29	55	-	13	西方	心材
5E163	I B 2	36	34	33	112	64	68	12	42	55	12	73	19	114	114	34	31	53	55	13	西方	心材
5E164	I A 1	77	66	34	129	65	55	25	50	53	25	69	22	127	127	-	-	34	33	西方	木表	
5E165	I A 1	75	65	37	126	61	54	25	53	54	26	66	21	129	128	-	-	32	34	西方	木表	

(4) 小括

上記のように、差歯下駄において台と歯を接合する際、台の溝と歯に仕掛けを施し、「隠し楔」によりその両者を接合するという大枠の点では東宮遺跡例と尾張藩土屋敷跡遺跡例では共通するが、上記のようにその細部では共通しない要素もある。

管見によれば、上記以外に差歯下駄における「隠し楔」の痕跡の報告例は認められない。

こうした状況から、東宮遺跡例と尾張藩土屋敷跡遺跡例の時期的な前後関係や系統関係をにわか論じることができない。これまでの陰卯下駄の報告の中にも同種の例が含まれている可能性があり、再検討が必要である。また、これからの差歯下駄の観察にあつては慎重を期さねばならない。

3. 類型と樹種の関係

本遺跡出土下駄の樹種同定は、当事業団の保存処理室

で行った(表2・3)。

保存上と作業量の観点から、全ての資料について切片のプレパレートを作成し鏡検による組織の検討を行うことはできなかった。そのため、同定の水準は統一されていない。

樹種の同定ができた範囲で、比較例数の保証された類型について類型と樹種の間接関係を見ると、次のような特徴がある。

まず、I A 1類ではクリが、I B 2ではハンノキ属が卓越する。また、差歯下駄においては、台はハンノキ属が、歯はコナラ属が多い。

表3 対の組合せを確認できなかった下駄の属性表

出立番号	組	前部	台表			台裏			前部～横筋		台上下角度		差右角度		前部後角	台本取	台上面	樹種						
			前幅	後幅	前部長	中部部長	後部長	前脚厚	前脚間	前脚間・基部厚	後脚厚	後脚間	開き角度	左長脚					右長脚	前	後			
1建288	I A 1	77	68	37	121	65	63	34	40	51	33	53	22	124	122	-	28	30	-	二方板	木表	♀		
1建300	I A 1	86	72	37	118	63	52	38	49	50	27	62	25	121	121	-	17	17	-	本組口	木表	♀		
1建303	I A 1	70	66	34	127	58	57	29	44	47	28	61	21	131	128	-	33	30	-	四方板	木表	♀		
1建303	I A 1	71	63	40	115	55	58	22	60	60	20	56	20	117	117	-	27	23	-	二方板	木表	♀		
1建306	I A 1	78	66	34	125	62	54	31	48	-	30	58	20	127	127	-	26	30	-	二方板	木表	♀		
1建299	I A 1	80	62	34	124	65	52	26	54	54	25	66	20	126	126	-	21	21	-	四方板	散孔材	♀		
4建96	I A 1	71	62	30	125	60	50	25	54	55	27	64	19	126	127	-	38	39	-	一方板	木表	♀		
4建97	I A 1	80	65	42	114	61	55	27	42	42	26	67	20	116	115	-	27	27	-	一方板	木表	♀		
5建170	I A 1	78	68	36	117	65	50	24	53	55	24	71	20	117	121	-	23	23	-	四方板	木表	♀		
5建169	I A 1	73	67	32	120	66	55	30	47	52	30	66	20	132	132	-	25	25	-	二方板	木表	♀		
5建171	I A 1	76	67	36	124	61	57	26	49	52	26	65	21	126	126	-	35	40	-	二方板	木表	♀		
1建304	I A 2	74	65	34	125	59	48	28	54	54	30	58	19	126	128	-	20	20	-	四方板	木表	♀		
1建304	I A 2	70	52	34	121	64	48	30	43	51	29	69	18	122	123	-	27	30	-	一方板	木表	♀		
1建302	I A 2	73	62	35	121	67	49	32	39	42	31	72	20	126	120	-	38	38	-	一方板	木表	♀		
1建307	I A 4 (77)	70	63	35	117	54	53	22	48	48	25	58	27	120	121	-	16	15	-	一方板	木表	♂/♀		
9建22	I A 4 (71)	83	37	115	59	55	22	49	49	49	22	63	23	118	117	-	16	16	-	一方板	木表	♀		
イ	I B 2	53	-	-	-	-	-	-	43	-	-	-	-	-	-	-	66	21	-	一方板	木表	♀		
1建278	I B 2	46	35	44	104	72	-	42	115	120	63	-	24	107	104	62	41	14	17	-	四方板	心付板	♀	
1建277	I B 2	-	39	-	-	-	-	-	20	-	-	-	-	-	-	-	48	-	-	-	一方板	木表	心付板	
オ	I B 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	55	45	-	-	-	散孔材	♀	
カ	I B 2	50	45	30	-	-	-	-	36	-	-	-	-	-	-	-	75	46	13	-	一方板	木表	♀	
4建91	I B 2	55	43	43	94	79	-	41	105	105	70	-	29	96	98	68	44	-	-	-	四方板	木表	♀	
1建280	I B 2	52	39	40	97	82	-	51	95	105	73	-	27	101	99	67	40	-	15	-	一方板	木表	♀	
1建281	I B 2	40	33	39	114	70	-	44	109	111	70	-	19	116	116	67	51	47	43	-	一方板	木表	♀	
4建95	I B 2	57	45	44	92	79	-	41	102	104	72	-	24	94	94	70	45	42	23	-	一方板	木表	心付板	
1建275	I B 2	53	39	30	111	66	-	37	125	130	51	-	23	114	113	69	50	14	14	-	一方板	散孔材	♀	
1建276	I B 2 (55)	(37)	-	-	-	76	-	42	105	106	76	-	-	-	-	73	37	13	14	-	四方板	散孔材	♀	
1建279	I B 2	51	42	36	101	70	-	42	104	110	63	-	25	106	103	68	40	14	14	-	四方板	心付板	♀	
4建92	I B 2	49	31	36	114	64	-	39	116	122	61	-	19	117	113	60	36	-	-	-	四方板	心付板	♀	
4建93	I B 2	148	55	36	106	66	-	38	109	113	63	-	29	100	100	67	32	-	-	-	一方板	木表	心付板	
キ	I B 2	45	-	45	-	-	-	-	51	-	-	-	-	-	-	-	51	-	14	-	-	一方板	心付板	♀
4建94	I B 2	51	46	30	88	73	-	44	99	106	67	-	28	90	90	67	47	30	26	-	一方板	木表	♂/♀	
サ	I B 2	53	-	44	-	-	-	-	42	-	-	-	-	-	-	-	52	-	-	-	一方板	木表	♀	
5建166	I B 2	50	43	36	117	72	-	45	118	120	64	-	23	122	117	63	41	14	14	-	四方板	心付板	♀	
5建167	I B 2	55	48	49	99	73	-	40	117	127	63	-	26	101	101	66	46	15	14	-	四方板	心付板	♀	
シ	I B	-	48	-	-	-	-	-	67	-	-	-	-	-	-	-	45	-	14	-	-	心付板	♀	
8建97	II A 1	93	91	28	105	61	63	9	66	-	9	40	30	109	107	-	-	-	-	-	-	一方板	木表	♀
ツ	I B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	♀
ウ	I B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	♀
ク	I B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	♀

ところで、差歯下駄の差歯に本遺跡の所在する地域には自生が認められないとするアカガシ亜属の例（1建№284・285）があり、その素材の入手地あるいは製作地が注目される。

なお、左右の対の組合せを確認した2点間の樹種をみると、別の樹種が使用されている状況は確認されなかった。

4. 対の組合せの確認状況と関連する事項

上述のように、本遺跡出土下駄81点の中で、左右の対の組合せを21組確認した（表2・3 図12・13）。

その内訳は、一本下駄で16組、差歯下駄で5組である。細別類型で見ると、一本下駄の内、I A 3の2点1組、小型の2点を含むI B 1の4点内の4点2組、I B 3

の2点内の2点1組、そしてI B 2の小型の2点の内、の2点1組が、また、差歯下駄13点の内、1点のみのII A 1類を除いた12点で全て対が確認された。つまり、例数の限られた形態の場合には、極めて高率で対の組合せが確認されているのである。

しかし、I A 4の2点やI A 2の3点の間では、それぞれ形態上の近似性は強いものの、台の大きさや歯間距離、あるいは台の形状等で違いがあり、対を確認しなかった。これは、そもそも当初から形態上変異の幅の大きいもの同士、対の組合せが存在した可能性を示唆しているのかも知れない。

また、19点のI A 1では4組8点を除いた11点、I B 2の小型を除いた33点の内では対の7組14点を除いた19点で、対を確認しなかった。これらの類型は例数が比較

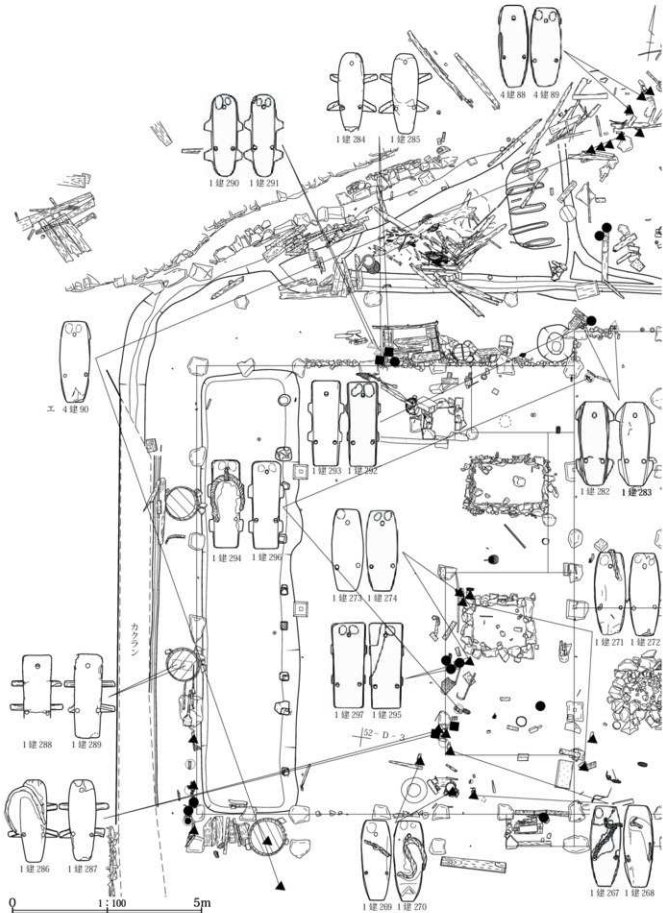


図12 1区1号建物 対の組合せの出土状況①

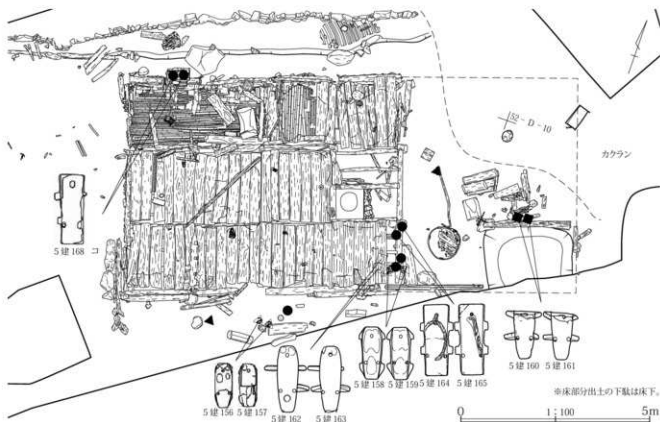


図13 1区5号建物 対の組合せの出土状況②

的多い上に、個性的な要素を把握しにくい対の確認に困難性が伴った。さらに、歯の摩耗が進んでいるものもあり、対としての使用中に左右の内的一方が破損したり欠損した後、残ったもの同士での使用の場合があったのかも知れない。

いずれにしても、本遺跡出土下駄においては対として確認した例が高率であることが大きな特徴である。このことについては、天明泥流下の一括資料であることに大きく依拠している。そのことへの理解については、別途検討する。

5. 今後の方向性

本遺跡出土の下駄についての検討結果を、概括的な点に絞って報告してきた。

各類型の系譜や地域的な広がり、そして差歯下駄における「隠し楔」の由来やその変異の在り方、樹種と形態との詳細な関係、さらに大きさの違いの意味等、検討すべき課題は多岐にわたる。

類例を集成しながら本遺跡出土下駄の位置づけを継続して検討する必要がある。今後の追求を期したい。

引用・参考文献（年代順）

- 宮本勢助 1933 『民間服飾図説物語』
- 島海 義之助 1987 『図解 木工の機手と仕口 増補版』
- 成田寿一郎編 1988 『木材工芸用語辞典 増補版』
- 山崎信右編 1999 『足の事典』
- 古泉 弘 2002 『地下からあられた江戸』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第113集
- 江里口 省三 2002 隠印下駄の歯の固定方法について『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅰ』。木製品 pp.64-65
- 東京都埋蔵文化財センター 2010 『文京区 後楽二丁目南遺跡 - 後楽二丁目西地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第241集

5 東宮遺跡出土の繭と蛹について

はじめに

群馬県吾妻郡長野原町に所在する東宮遺跡は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査され、天明三年(1783年)浅間山噴火の際に発生した泥流によって埋もれた建物跡や遺物が数多く出土している。この東宮遺跡より出土した遺物が、蚕の繭・蛹であるかについて鑑定依頼があり、群馬県蚕糸技術センターにおいて鑑定を実施した。結果、遺跡より出土したものが蚕の蛹であること、出土した繭に天明期の繭の特徴があったことを確認した。以下に、その詳細についての考察を述べる。

1. 繭と蛹の出土状況

繭と蛹は、1号建物北側より出土した。1号建物は大型の建物跡であるが、この建物の土間部北側にある竈脇、1号床の床下付近より集中して出土した。1号床の床板を剥がし取ると、繭の痕跡が密集しており、その空洞の中に蚕の蛹が多数ある出土状況であった。

出土状況から、繭は泥流により流され、床下に入り込んだものと考えられる。1号建物北側にはこの建物の土壁があったと思われる、泥流により流された繭は、この土壁に堰き止められたため1号床の下に集中してあったものと考えている。そのためか、繭は土間直上にはみられず、多くは床板の下面に押し付けられるように出土している。

220年以上土中にあったためか、繭の遺存状況は蚕蛹と比較すると悪く、土中に繭の形だけを残すものが大半であった。蛹はこの繭の形をした空洞の中に収まっていた。そのため、被災した当時の蚕は蛹であり、水分を含む泥流で被覆されたため死滅したものと考えている。

2. 出土した繭と蛹

群馬県蚕糸技術センターに持ち込まれた繭や蛹は泥流の中にある状態であり、長さ2cm、幅1cmほどの多数の空洞に、蚕の繭層と蛹の標本体が確認できた。泥流で埋もれた蚕の繭は、蛹の外皮だけの状態であることも確認できた。

対照蛹として江戸時代中期に飼育されていた在来種「又昔(またむかし)」と比較したところ、図1～図3に示したように、蛹の外部構造が対照蛹と同一であった。蚕蛹の性別を見分ける第8腹節正中線に細い縦線があり、撮影した蛹が雌であることも確認できた。

出土した繭も鑑定し、中央に輪目(くびれめ)を持つ俵型であることが確認できた。繭が楕円型をした大振りなものになるのは、明治以降に新たな品種が輸入されてからである。俵型の繭は、天明期に飼育されていたとされている「又昔(またむかし)」或いは「金白(こうはく)」と特徴が同様であった。出土した繭は潰れており、外形の詳細な特徴までは明らかでないが、長楕円の繭形の又昔ではないため金白の可能性が高いと考えている。

3. 出土した寄生虫

東宮遺跡からは、カイコノウジバエ(蠶蛆・きょうそ)とカイコノヒメウジバエの蛹が出土した。ウジバエは、蚕の主食である桑の葉に卵を産み付け、蚕がその卵を葉と一緒に食した後も体内で生き、孵化をする。蚕の栄養分を取り成長し、蛹を脱出し、さらに繭を破って出てくる。

ウジバエに寄生された蚕は斃死してしまい、蚕を羽化させ卵を取ることができない。また、穴の開いた繭も、そこで糸が切れてしまい製品にはならないのである。

養蚕は、寄生虫との戦いでもあった。東宮遺跡から寄生虫の蛹が出土したことは、1号建物或いはこの近隣で、養蚕が行われていた可能性が高いことを示唆している。また、山間の地域では養蚕における寄生虫の被害が多く、苦労して養蚕が行われていたと言われている。それは、県内の養蚕初期段階である天明期においても同様であったことが、発掘成果によって確かめられたものと考えている。

4. 出土した蚕蛹の存在と天明期の養蚕との関連

天明三年の浅間山噴火活動は新暦の五月九日(以下、新暦で記す)より始まり、同年八月五日に大噴火をした。八月五日の大噴火によって、浅間山北側斜面を火砕流が流下し、近隣の土砂も巻き込み吾妻川に流れ込んだと考えられる。この泥流により、吾妻川、利根川の流域にあった村々は被災し、甚大な被害を受けた。東宮遺跡を被覆

第4章 調査の成果とまとめ

していた泥流も、天明三年八月五日に発生した泥流と考えられる。

天明期の養蚕状況と出土した蚕蛹の存在について若干の考察をしたい。

長野原町誌によれば、明治期の長野原町の養蚕は春蚕が主であった。温度を調整し、蚕の孵化を管理するためには風穴が必要だが、群馬県において風穴が建造されるのは明治三十年代頃からである。より先んじて養蚕を行っていた長野県においても、風穴は幕末期の建造と考えられる。年間二回以上の飼育が始まったのも、長野県において明治八年からであった。これらのことから、より初期段階の養蚕である天明期、東宮遺跡付近で行われていた養蚕は、自然に孵化するのを待つ春蚕が一年に一度行われていたものと考えられる。

長野原地域における春蚕の挿立（はきたて。孵化した蚕を桑に移すこと）時期は六月上旬以降と思われる。現在この地域では蚕を飼育していないが、最近までの挿立は六月六日～十日に行っていた。当時の飼育（養蚕秘録1803）では挿立してから繭を作るまで三十七日～四十日要している（現在は二十六～二十八日で繭をつくる）。六月上旬に挿立すると、繭になるのは七月十三日～二十日頃になる。その後、繭の中で幼虫から蛹になり十七～十八日に羽化するので、八月上旬には早ければ羽化していることが考えられる。

天明三年浅間山噴火の活動期間は、蚕が孵化し繭になるまでの間と推測される。噴火による降灰や天候不順などもあったと思われ、当時の養蚕へも影響を及ぼしたことは十分考えられる。例えば、火山灰が付着した桑を食べた蚕が、産卵するだけの大きさになるためには一度多い6齢となり、繭になるのが遅れることも考えられる。前述の通り、当時の養蚕の様相を考慮すれば、八月五日には早ければ繭から蛾に羽化していることが想定できる。出土した繭の中はほとんど蛹の状態であり、噴火活動による影響が蚕の发育遅れにわずかながら影響を及ぼしているように思われる。

参考文献

町田順一 2009「長野原・東宮遺跡から出土したカイコ蛹の確認依頼」平成20年度群馬県蚕糸技術センター年報
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011「東宮遺跡（1）一遺構・建築部材編」514集



写真1 1号建物蚕蛹出土状況



写真2 1号建物出土蚕蛹 近接



写真3 1号建物出土繭 近接



写真4 東宮遺跡出土カイコノウジバエ 近接



写真5 東宮遺跡出土カイコノヒメウジバエ 近接

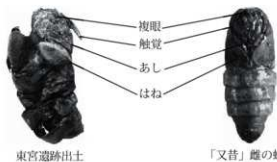


東宮遺跡出土



「又昔」雛の蛹

図1 出土した蛹と生蛹との比較（正面）



東宮遺跡出土

「又昔」雛の蛹

図2 出土した蛹と生蛹との比較（器官）



東宮遺跡出土

「又昔」雛の蛹

図3 出土した蛹と生蛹との比較（側面）

6 東宮遺跡出土の団扇について

はじめに

東宮遺跡は、吾妻郡長野町川原畑に位置する。発掘調査では、天明三年（1783年）新暦8月5日、浅間山噴火に伴う泥流により被覆された建物跡が検出され、多数の遺物が出土した。湧水の影響もあり、木製品や漆製品の出土量も多く、特徴的な出土様相を呈している。

団扇は、1号屋敷跡の主屋である1号建物から2点出土した。ともに竹を骨組みにしており、良好に遺存する1号建物No.250では、団扇に貼られた紙までもが確認できた。ここでは、使用されていた時期や地域までもが限定できる類例のない出土団扇について、その形態や技法などを考察し、当時の団扇を知る上での基礎的な資料の提示を行いたい。

1. 出土状況

1号建物No.250は、1号建物3号床近くの土間より出土した。団扇は土間に接するようにあり、その上を天明泥流が被覆していた。極めて良好な遺存状況で、竹の骨組みだけでなく団扇の紙も確認することができた。

団扇には、藁が4点付着していた。調査時には、この藁が偶然に付着したものか、装飾として団扇に付けられたものか、判断できなかった。しかし、藁の中には蛹が確認されており、立体的な藁を団扇に装飾することは難しいと考えられる。団扇に付着した4点の藁は、偶然団扇と土間の間に挟まれるように残ったものと推測している。東宮遺跡からは、他にも藁や蚕蛹が出土しているが、藁の遺存状況は総じて悪い。団扇に付着した4点の藁は良好に遺存していたが、これは、団扇の紙によって藁が保護されていたためだと考えている。

1号建物No.251は、1号建物3号床上から出土した。No.250と比較すると、やや遺存状況は悪いが、竹の骨組みなどの特徴から、同様の形態をした団扇であったと考えている。

1号建物を被覆していた天明泥流は、遺物の出土状況や遺構の検出状況から、一度に1m以上の泥流が建物を被覆したのではないと推測される。建物に数度によって到達した泥流は、当初は水を多く含む比較的緩やかな泥

流であったと推測される。従って、出土した2点の団扇は、出土地点或いはその近辺で使用されていたものと思われる。東宮遺跡が天明泥流で被災したのは、新暦8月5日のことである。出土した団扇は、当時の季節感をも伝える稀有な出土遺物と考えている。

2. 出土団扇の特徴

出土した団扇2点は、遺存状況に違いはあるものの、その形態は同様と考えられる。また、出土団扇の柄の部分には、肩竹とも呼ばれる一文字状の竹が取り付けられていた。この肩竹を柄に取り付ける方法であるが、柄の節の部分に鋸で溝入れし、そこに斜めに打ち込んでいるように思われる。これは、「肩入れ」とも呼ばれる、現行越生団扇（おごせうちわ）でのみ確認されている製法に近似していた。

越生団扇は、現在の埼玉県人間郡越生町で作られている。越生町は、明治初期には年間42万本の生産を誇った団扇の大本産地であった。また、越生団扇は、越生町の近隣にある坂戸観音の土産物にもなっていたともいわれている。出土した1号建物No.250と越生団扇の形態を比較すると、現行越生団扇の上丸形に近似していることが確認できた。

一方で、越生団扇との相違点も確認できた。No.250の団扇の骨は途中から二つに割れているが、これは一般に「二つ割り」と呼ばれる製法である。団扇は、左右各4本の骨はそのままに、中央部分のみを二つ割りしているように観察できる。このような作りを現行の越生団扇では行っていない。実際に使用した場合、おそらく中央部がよくしなり、狭い範囲で風を送ることができると推測できる。柄の持ち手部分は、左右の角を落とし、先を少し絞って握りやすくした丁寧な作りをしている。現行の越生団扇も角を落としとしており、製作上での共通点及び相違点が確認できた。

1号建物No.250の団扇には、紙の一部も遺存していた。地紙は赤色と思われ、柿渋を塗った渋団扇の可能性も考えられる。渋団扇は、現在の越生町でも作られている。調査時には、編糸が緑がかった発色のように観察できた。現在の団扇は木綿糸で編むが、かつては藁草（いぐさ）を使用していたといわれており、その可能性も指摘しておきたい。

3. おわりに

出土した団扇の「肩入れ」という特徴から、現行の越生団扇と比較し、その共通点及び相違点を考察した。

出土団扇と現行越生団扇との共通点としては、肩竹とも呼ばれる一文字状の竹を取り付ける、「肩入れ」の製法が近似していることが挙げられる。「肩入れ」は現行越生団扇でのみ確認されており、出土した団扇が越生町で製作された可能性もあるだろう。一方で、団扇の骨が途中まで二つ割りにしている点など、現行越生団扇では確認されていない「二つ割り」と呼ばれる製法も観察でき、相違点も確認できた。

天明期、「二つ割り」の製法は越生町にも存在したのかもしれない。或いは「肩入れ」などの製法が、異なる地域でも行われていた可能性も否定できない。出土した団扇2点が、どこで作られ、どの様に東宮遺跡まで運ばれてきたのかは、現状で判断することは難しい。今後の課題と考えている。

註

1) 第4章第1節1を参照。

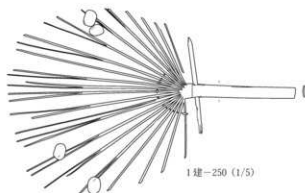


写真3 越生団扇



写真1 1号建物No.250出土状況



写真4 越生団扇「肩入れ」部分 近接



写真2 1号建物No.251出土状況



写真5 1号建物No.251出土状況「肩入れ」部分 近接

7 東宮遺跡出土の線香について

はじめに

東宮遺跡は吾妻郡長野原町川原畑にあり、吾妻川左岸に位置する。発掘調査では、天明三年(1783年)の浅間山噴火に伴う泥流により被覆された建物跡が検出され、数多くの遺物が出土している。

遺跡からは多くの香炉が出土したが、その中でも特異な出土例として注目されるのは、香炉の中に灰を残すものである。その数は6点と、他の遺跡とは異なる出土様相を呈している。口縁端部に欠損が顕著に見られるものは灰落として使用されたものと思われ、その用途は様ではないようだが、1号建物No.200の有田色絵香炉は、灰と共に燃え残った線香様のものが極めて良好な遺存状態で出土した。ここでは、線香様のものが線香であるのか、またその材料が何であるのかを分析調査し、基礎的な資料の提示を行いたい。

1. 出土状況

1号建物No.200は、18世紀後半の有田色絵香炉である。口縁部の一部が欠損するものの、良好な遺存状況であった。香炉は、1号建物内の馬屋と土間の境目付近、土間直上で、口縁部を下にした状態で出土している。

香炉には、燃え残った線香様のものが灰に刺さったまま遺存していた¹⁾。確認できるだけで199本を数える。燃え残った線香様のものの、およそ半分ほどの深さが灰に埋没していたが、出土状況から、本来の灰の位置は、線香様のものが燃えた箇所辺りまでであったものと想定でき、1~2cmほどの灰が失われているものと考えている。

管見できる範囲では、遺跡より線香が出土した例はない。東宮遺跡より出土した線香様のものが線香であり、その原材料が何であるのかを明らかにできれば、使用されていた地域、年代までもが明確な極めて稀少な遺物の基礎的な資料の提示ができるものと考えられる。そのため、灰より外れていた線香様のもの2本の分析を、群馬県警察本部刑事部科学捜査研究所に依頼した。

2. 試料と方法

1号建物No.200の色絵香炉内にあった線香様のものに

ついて、2本分を採取し、分析を実施した。以下は、群馬県警察本部刑事部科学捜査研究所による分析結果内容である。

1号建物No.200色絵香炉内にあった線香様のものについて、赤外吸収スペクトル測定による構成物質の成分検査を実施した。分析は、VARIAN製FTS-7000eフーリエ変換赤外分光光度計を使用し、ATR法で赤外吸収スペクトルを測定した。また、試料の生物顕微鏡及び電子顕微鏡による観察をし、写真撮影を実施した。電子顕微鏡は、株式会社日立ハイテクノロジーズ製S-3700N形走査電子顕微鏡を使用した。

試料1は2点に分かれており、長さ約8mmと約5mm、いずれも直径約2mm、重さは合わせて約0.015g。試料2は、長さ約7mm、直径約2mm、重さ約0.008gであった。何れの試料も、片方の端部が黒色に炭化していた。(写真3・4参照)

赤外吸収スペクトル測定の結果、グラフが示すとおりセルロースを主成分とする物質と認められた。そのため、構成物質の主体は植物であると思われた。

生物顕微鏡を使用しての形態検査では、断面を検査したところ極めて小さな木片様のものが多数認められた(写真5・6参照)。これを生物顕微鏡及び電子顕微鏡を使用して確認したところ、木片と認められた(写真7~10参照)。電子顕微鏡では、微細な木片の繊維方向の横断面、縦断面を検査し、形態の観察を実施したところ、横断面には仮道管と思われる形態が認められ、縦断面には壁孔と思われる形態が認められた。木片は微小であり、仮道管及び壁孔は確認できたが樹種について判断することはできなかった。

試料の一部を分取し、燃焼試験を行った。炎を出さず赤熱しながら徐々に燃焼し、残渣として茶味白色の灰が生じた。燃焼時の臭気は木材が燃える匂いと類似していた。

以上の検査結果から、試料は、微小な木片を含む微小な植物片を主とする、直径約2mmの円柱状の物質で、片端の約1mmが炭化したものと認められた。また、試料は、炎を出さずに赤熱しながら徐々に燃焼し、茶味白色の灰を残渣として生じた。これらの検査結果は、一般的な線香の特徴と比較しても矛盾が無いと考えられる。し

たがって、試料は線香と考えられる。

3. まとめと課題

分析の結果、出土した線香様のものは線香であることが確認できた。ここでは、出土した線香の分析結果やその出土状況等を踏まえ、まとめと若干の課題を述べたい。

当事業団保存処理担当の関邦一は、線香に含まれていた木片の生物顕微鏡及び電子顕微鏡を確認した結果、木片には針葉樹の特徴が見られるとの見解を示した。確認できた木片は微細であるため樹種の同定には至らなかったが、杉の可能性が高いとの見解も示している。

株式会社日本香堂からは、線香に関わる貴重なご教授をいただいた²⁾。以下にその概要を記す。

現在の線香は、広葉樹である楠(タブ)の樹皮粉を必要としている。杉を使用した線香は少なく、日本香堂においても杉の線香は製造していない。

日本では、古くから杉の枝打ちしたものを陰干し乾燥し、その枝と葉を水車などで粉砕して、線香の原料にしていた。また、杉の葉は粘性を持つために、結着剤として使用された。出土した線香に、微細な木片が多数混合し残っていたのは、枝は葉ほど粉砕できなかったためだと思われる。

線香の燃焼実験の際、木材が燃える匂いと類似していたことについては、高級品は異なるが、杉の枝葉だけで作られた線香であったために、木材を燃やしたような匂いがしたのではないかと推察される。

以上のことから、東宮遺跡から出土した線香は、杉を原材料にしていた可能性が高いと思われる。また、江戸時代の線香作りは家業であり、その調査処方や作り方の工夫方法は、門外不出、父子相伝的な事が多かった。そのため文書も少なく、江戸時代の線香の様相は明らかではないことが多いとの指摘もあった。

東宮遺跡からは多くの木製品、漆製品が出土したが、これは、湧水点に近かったことが大きく影響した結果だと思われる。水が豊かに湧く土中で220年以上も埋もれていたことが、出土した線香にどのような影響を与えたのかは明らかでない。今回の分析結果は、220年以上遺存していた線香を分析した結果であり、当時の線香の全てが確認できた訳ではないことを追記しておきたい。

東宮遺跡で確認された天明泥流は、遺物や遺構の出土

状況から、一度に1m以上の泥流が建物を被覆したのではなく、数度にわたり泥流が遺跡まで到達したものと考えられる。東宮遺跡に到達した当初の泥流は水分を多く含んでおり、その高さも数十cmほどと低く、比較的緩やかであったと推測される³⁾。この泥流は、1号建物の出入り口付近から土間に流れ込んだものと思われる。

遺跡に到達した天明泥流の様相を考慮すると、土間直上から線香までもが残る香炉が出土したことは、この香炉が建物の床部や高い位置にあったとは考えにくい。出土した付近の土間、或いはその高さほどにあったものと思われる。何故線香立てが土間付近にあったのかは結論をみないが、香炉が出土した位置は1号建物内の西南西側、およそ浅間山方向であったことを記しておく。

註

- 1) 写真2参照。
- 2) 株式会社日本香堂研究室、鳥毛逸平氏、鈴木武史氏よりご教授いただいた。
- 3) 第4章第1節1参照。

※写真5が1日盛り20 μ m

写真6が1日盛り20 μ m

写真7が1日盛り2.5 μ m

写真8が1日盛り5 μ m



写真1 1号建物香炉(No.200)出土状況



写真2 1号建物香炉(No.200)近接

第4章 調査の成果とまとめ



写真3 試料1

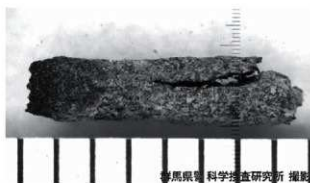


写真4 試料2



写真5 試料1断面 生物顕微鏡写真

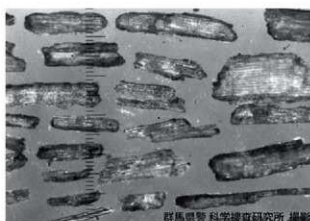


写真6 試料1中から検出された木片



写真7 試料1中木片繊維方向の横断面生物顕微鏡写真



写真8 試料1中木片繊維方向の縦断面生物顕微鏡写真

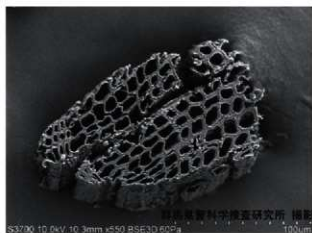


写真9 試料1中木片繊維方向の横断面反射電子像

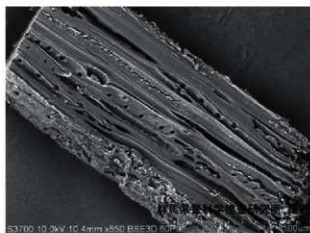
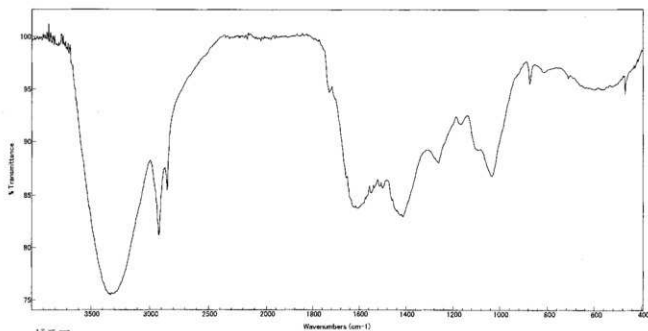


写真10 試料1中木片繊維方向の縦断面反射電子像



グラフ

試料1の赤外吸収スペクトル

日時=Tuesday, July 12, 2011 14:29:38

積算回数=32

分解能=4

ATR法

8 鉈について

東宮遺跡13号建物跡から鉈が出土している。これまで鉈についての研究はほとんど行われてこなかった。その理由は、出土例が少ないことによるものと思われる。事業団で発掘調査を始めて30年以上が経過し、発掘を通して古代～中世の多くの遺跡から鎌・鋤先・刀子・鉄拵等は多く出土しているが、鉈の出土は無い。今後資料の増加により、古代～中世に使われた鉈の出土が確認されることもあるかもしれないが、私の知る限り県内において鉈は近世の遺跡で初めて出土する。現在県内で確認されている鉈が出土した遺跡は、全て江戸時代天明3年没間泥流の下あるいは泥流によって埋没したであろう遺跡である。佐波郡玉村町福島中町遺跡で3個¹⁾、前橋市田口下田尻遺跡から1個²⁾、吾妻郡嬭恋村鎌原の延命寺跡から1個³⁾、吾妻郡長野原町の旧新井村から1個⁴⁾、長野原町小林家屋敷跡から1個⁴⁾、本報告の東宮遺跡から1個の計8個である。

遺跡出土の鉈を集成し、その中で東宮遺跡13号建物跡から出土した鉈について考えてみる。すべて天明3年泥流下からの出土のため、出土鉈の出土年代が限定されることや、全部で8個と数が少ないこと、また出土鉈は錆により残りが悪いために、詳しい観察が出来ないものが多い。そこで現在使われている鉈や文献で記録された資料をもとに仮に分類し、東宮出土鉈について検討する。

1. 鉈の歴史

大工道具としての基本的セットである斧・鋸・鑿・鉈については、資料が多く研究されている。しかし鉈は絵画を含めて文献資料も少ない。研究は多くされていないようである。文献で鉈の記述があるのは、皇太神宮儀式帳(804年)、新撰字鏡(892年)で「奈太」「忌奈太」「打奈太」、類聚名義抄(1241年)で「鉈」「短矛」等の工具名で記載されている⁵⁾。しかし、物としての鉈は、充分明らかでないようである。鉈の出現について渡邊昌氏は、(1)小型縦斧の刃部を長くする。(2)ナキカマの刃部を厚くする。(3)刀子の刃部を厚くする。等の可能性を指摘している⁶⁾。江戸時代の袖人の道具として図が描かれているものがある。絵図のなかに2本の鉈が描写

されている。鉈の説明として「山刀(なた)」「楕打(ほいち)」と記載されている。他に袖人の持つ道具として斧(キリ斧とフシウチ斧)、刃広斧(はひろよき・サメ斧ともいう)、サシ、墨壺、デッチ等が描かれている⁷⁾。

2. 鉈の用途

鉈は、林業や狩猟などの山林で働く人々の用途に適した刃物類である。地域に根ざした特色のある鉈を地域の要望に応じて、鍛冶屋が生産と修理を行ってきたが、現在山林用刃物は、高知県の土佐打ち刃物が地域ごとの仕様に対応できる体制が出来、大量に生産している。群馬県では現在沼田市古見刃物店で沼田鉈または上州鉈と呼ばれる鉈を制作している。

現在の鉈の用途は①切る。②叩き切る。③削る。④割る・裂く等の機能を持っている。また護身用として武器の用途も持つ。

3. 鉈の種類

○突起鉈

刃部先端に細長い突起が付く。刃部と峰との間の内側面が凹状に薄くなっているものが多い。現在この突起の付くこの鉈は「石付鉈」「鷹鉈」「トビ付き鉈」「鼻付き鉈」「箸付き鉈」「嘴付き鉈」等の名前で呼称されているがここでは突起鉈と呼称する。

嬭恋村や長野原町から出土した鉈は全てこの突起鉈である。長野原町東宮遺跡13号建物跡、長野原町旧新井村、長野原町小林家屋敷跡、嬭恋村鎌原の延命寺跡から各1個出土している。現在県内で出土している8個中4個がこの突起鉈である。

「袖人具之図」の中で「山刀(なた)」が山刀手籠(なたてんこ)と呼ばれる鞘とともに紹介されている鉈がこの突起鉈と思われる。「株焼之図」のなかでは、株焼場面で腰掛けている男の腰に鞘に入った鉈が描かれている⁸⁾。おそらく「山刀(なた)」が山刀手籠(なたてんこ)と呼ばれる鞘に入れられ、腰に巻き付けられている状態を表現しているものと思われる。

○広身鉈

刃身は短いが、広身で、重い鉈である。基本的に両刃である重量を利用して叩き切ることを得意とする鉈のようである。小さな斧に近い機能を持っている鉈と思われ

る。

樹木の枝打ちには片刃鉋で枝打ちをすると、刃こぼれがすることがあり、また木の幹を傷つけるのでこの鉋が多く使われる。また燃料として枝の切断や小さな丸太を割るときには便利である。薪が割れないときは、背部分を金槌等で叩いたためその部分がめくれて厚くなっている物が多い。玉村町福島中町遺跡Ⅵ区2号建物123の鉋がそれである。

○細身鉋

刀身全体が細長い鉋である。突起は付いていないが、突起鉋と同じように細長く、刃部と峰との間の内側面が凹状に薄くなっている。玉村町上福島遺跡と前橋市田口上田尻遺跡から出土している。

現在一般的で金物店やホームセンター等で売られている最も普及している鉋もこの部類に入ると考えている。現在の鉋は、峰部分がほぼ直線でも多くは先端が直角になっており、裏側には1条の溝が掘られている。このような特色を持った鉋は、出土品の中にはないが、この鉋も含めて細身鉋と呼称する。

「柚人具之図」のなかで「楯打(ほいち)」と描かれている鉋は、大きく重そうであるが、細身で突起が付いていないので、細身鉋の一種と考える。この鉋は、刀身と柄が共に鉄で出来ている現在では共柄鉋と呼ばれているものと思われる。柄の先端は使用時に滑り落ちないように環状となっている。同じく「株焼之図」の中では、共柄であるか不明であるが、この細身鉋を使って細い枝を切断して、株焼の燃料を確保している場面が描かれている。「柚人具之図」の中でこの鉋には、山刀手籠(なたてんこ)と呼ばれる鞘が描かれていないので、鞘は無かったのかも知れない。

○竹割鉋

両刃で、細長い鉋である。竹を割り、竹を薄く裂き加工してかご等を作るときに用いる。

遺跡からの出土はない。

4. 鉋の所有について

東宮遺跡では、天明3年泥流下7軒の屋敷を発掘調査しているが、鉋が出土したのは7号屋敷跡13号建物から1個出土しているだけである。大量の建築部材と共に生活用具等の遺物が出土した1号屋敷跡や他の6軒の屋敷

からの出土はない。東吾妻町三島の上郷阿原遺跡では、2軒の屋敷が調査されており、建築部材や生活用具が多く出土しているが、鉋の出土はない。長野原町川原湯の石川原遺跡や長野原町長野原の尾坂遺跡でも各1軒の屋敷が調査されているが鉋の出土はない。山間地である長野原町や東吾妻町では、竈や囲炉裏での煮炊きに使う木材の確保に鉋は必需品であったと思われる。泥流が迫る中、鉋を持って逃げたとは考えられないので、多くの屋敷で鉋は所持していなかったようである。山間地であっても、山の仕事を主とした家以外、鉋は必要とされなかったのであろうか。あるいは鉋の普及前段階であったのだろうか。

5. 東宮遺跡出土の鉋について

これまで調べてきたように、東宮遺跡から出土した鉋は、長野原町や嬭恋村から出土している鉋と同じ突起鉋である。鉋が進み鉋の特色を理解するのは難しいが、他の出土例を観察することにより、今後さらに詳しい内容がわかってくるであろう。

鉋に関する資料は少なく、研究はほとんどされていない。今後資料の増加に期待したい。

註

- 1) 「上福島中町遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003年
- 2) 現在 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で整理実施中、整理担当坂岡氏から情報提供してもらった。
- 3) 「緑よみがえった鎌原」上州路文庫⑥ あさぞ社 1982年
- 4) 「小林家屋敷跡」群馬県吾妻郡長野原町教育委員会 2005年
- 5) 「木の託」成田寿一朗 鹿島出版会 1984年
- 6) 渡邊 昌「なた 鉋」『歴史考古学大事典』吉川弘文館 2007年
- 7) 「江戸時代館」小学館 2002の中で「柚人具之図」として図に描かれた道具を解説している。また渡邊昌「大工道具の日本史」歴史文化ライブラリー 吉川弘文館 2004年の中で【近世の「柚人具」(木曾式伐木運材図会)〈1856～57年〉を模写】として紹介している。
- 8) 「柚人具之図」「株焼之図」北海道大学北方関係資料総合目録を参照した。

参考文献

宇江敏勝『山びとの記』中央新書 1980年

第4章 調査の成果とまとめ



昭和年代で使用されていた鉈と東宮遺跡から出土した鉈(表面)



昭和年代で使用されていた鉈と東宮遺跡から出土した鉈(裏面)

鉈の分類

名称 用途と特徴	刀身の長さ			重さ(大部分柄以外)		
	17cm未満	17-19cm未満	19cm以上	400g未満	400-500g未満	500g以上
突起鉈 切る・工作用。校や落ち葉等をたぐり寄せ。刃先を守る。山の山人々に便利。		長野市町新井村 註2	長野市町東宮遺跡13号建物 註1 長野市町小林家屋敷跡註3		長野市町東宮遺跡13号建物 長野市町小林家屋敷跡	
		16・17	19・20・20.5・20.5	350・350	420・450・480	510
	玉村町上福島中町Ⅵ区2号建物123 註5					玉村町上福島中町Ⅵ区2号建物123
幅広鉈 木割や校打。刀身の重さを利用して叩き切る。小笠原に似た職能を持つ。	15.5	17			400	500
細身鉈 切る。工作用。農作業に便利。	前橋市田口上田尻Ⅳ区1号建物83(両刃) 註6 玉村町上福島中町Ⅵ区3号建物47 註5			前橋市田口上田尻Ⅳ区1号建物83 玉村町上福島中町Ⅵ区3号建物47		
	16.5	17・17	19	250・300・350	450	
竹割鉈 竹割り・竹細工			遺跡からの出土なし。			

註1 本報告書で報告する遺跡

註2 長野市町教育委員会富田孝彦氏より情報提供してもらう。

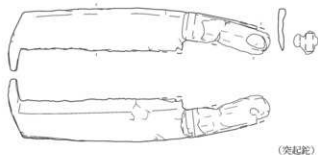
註3 小林家屋敷跡。群馬県吾妻郡長野市町教育委員会 2005年

註4 「鎌土みがつた鎌鉈」上州宮文庫編 ぶさ社 1982年 数値情報は福念郷土資料館滝澤伸二氏より情報提供してもらう。

註5 「上福島中町遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003年

註6 現在「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で整理実施中。整理担当桜岡氏から情報提供してもらう。

※数字のみ記入されているのは、筆者が所有している鉈を計測した数値である。昭和の鉈が大部分である。



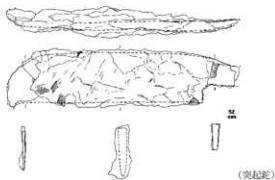
東宮遺跡13号建物跡（当道跡）

（突起鉞）



長野原町旧新井村出土 註3より転載

（突起鉞）



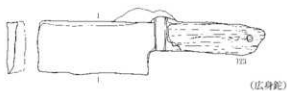
『小林家屋敷跡』1号礎石建物跡

（突起鉞）



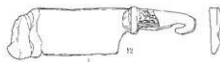
嬭恋村延命寺跡出土 註3より転載

（突起鉞）



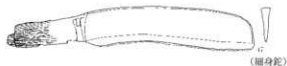
『上福島中町道跡』Ⅳ区2号建物跡

（広身鉞）



『上福島中町道跡』Ⅱ区3号建物跡

（広身鉞）



『上福島中町道跡』Ⅳ区3号建物跡

（細身鉞）

9 東宮遺跡出土の特筆すべき遺物

はじめに

東宮遺跡からは多様な遺物が数多く出土している。既に第3章の中で遺構ごとに報告されているが、ここでは特筆すべき遺物を整理し報告する。

1. 灯火具関連

特筆すべき遺物に、木製の圧搾機(4建No.86)がある。杭を打ち込むことで左右から圧力を掛け、中央に据えられた種実から油を搾る仕組みである。重力を利用し、上から圧力を掛けることが一般的と思われる圧搾で、左右から圧力を掛ける方法を採用した道具である点は興味深い。また、遺存する付着物の分析から、灯火皿に使用された油を搾った「搾油機」の可能性が高いことが確認された。使用した種実については結論を見ないが、複数の種実が使用された可能性も考えられる。

1建No.225は木製の行灯である。台部分中央に柱が付き、十字に組んだ箇所が灯火皿を支えていたと思われる。

4建No.86と1建No.225は、ともに1号屋敷跡から出土した。種実を搾り灯火皿の油として使用することが、天明期の東宮遺跡において一般的であったのかは、判断材料もなく明らかでない。出土した1号屋敷跡は、東宮遺跡において最も大規模な主屋を持つ屋敷跡であったことを追記しておく。

10建No.64は灯火具と思われる、粗く皿状に彫られた位置に灯火皿を置き使用していたものと思われる。東宮遺跡において同様の出土例はない。10号建物は酒造りを行っていた酒蔵と考えられるが、酒造りとの関連については明らかでない。

13建No.131は金属製の灯火具と思われる。形状は小型の葉缶のようなのだが、注ぎ口様の部分から芯を出し、火をつけた秉燭と思われる。

2. 陶磁器

出土した陶磁器の中で、特筆すべき2点について述べる。4建No.61は盃と思われる。「十分盃」とも呼ばれる京・信楽系の陶器である。中央部には梅の飾りのつく突起がある。この突起は空洞であり、中央に障壁を持つ。高台

内には円孔があり、一定量を超える液体を注ぐと、突起の空洞を通り、高台内の円孔から液体が全てこぼれ出す仕組みと思われる。サイフォンの原理を利用した盃と考えている。

5建No.124は亀型の陶器である。甲羅部分に施軸され焼成されているが、焼成時の破裂を防ぐ小さな孔も確認できない。器壁は薄く、13.3gほどと極めて軽い。水の中に入れると、甲羅部分が見えるように浮かぶ。

これらの陶器は実用品ではないだろう。どのような用途、目的で使用されたものかは明らかでない。

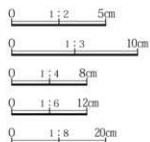
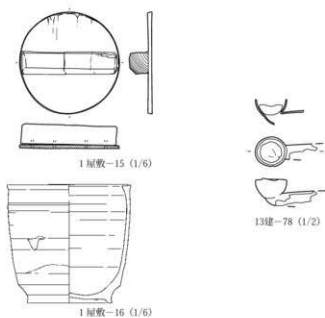
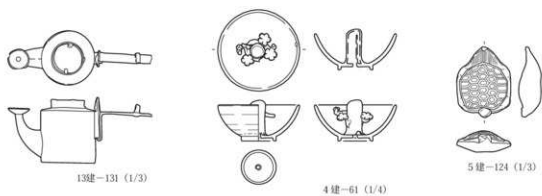
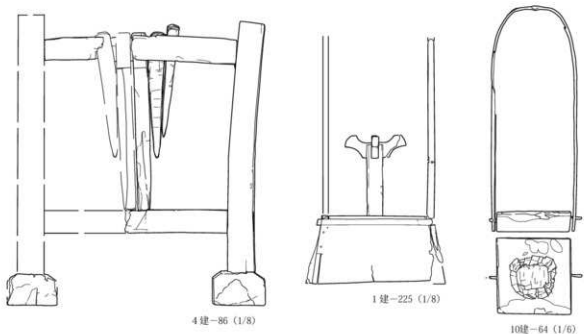
3. その他の遺物

ここでは、特筆すべき遺物として半胴と煙管について述べる。半胴(1屋敷No.16)には木製の蓋(1屋敷No.15)がされ、中からウメの種が多数出土した。一部果肉も遺存しており、蓋がされていたことから、梅干しを入れていたものと考えられる。出土した陶磁器が何に使用されていたか、具体的に知ることで出た例は僅かである。半胴の使用例を、時期と地域を限定して確認できた点でも貴重な出土遺物といえる。

半胴が出土した位置には1号倒木がある。倒木の樹種はウメであり、1号倒木に堰き止められるように梯子(1屋敷No.52)も出土している。梯子を使用して1号倒木からウメを取り、梅干しとしたのだろうか。

13号建物より出土した煙管(13建No.78)には、火皿部分に刻み煙草が遺存していた。火皿部分に刻み煙草を詰めた状態で出土した例は、管見の範囲ではない。

煙管は13号建物床部、囲炉裏近辺で出土した。13号建物を被覆する天明泥流の様相から考えると、およそ原位置近くより出土したのと思われる。当時、囲炉裏端で煙草を吸うために刻み煙草を詰めた際、火をつけることを忘れるような重大なことがおきたのだろうか。天明泥流下から出土したことから考えれば、天明三年8月5日の浅間山噴火が最も妥当な出来事ではないかと思われる。推測の域は出ないが、残された刻み煙草は、浅間山が大噴火した後の混乱した状況を示す出土遺物のひとつと考えている。



第1図 特筆すべき出土遺物

10 木工芸家から見た東宮遺跡出土の木工品

道具の使用とそれによって何かを作ることから人間らしい生活が始まったと思われるが、初めての道具が石ころだったか棒さされたかわかるはずもない。ただ作ったものの材料は木材だったと思ってもそれほど間違っていないだろう。常に人の近くにあり加工が容易なものの代表だからだ。特に南北に長い花綵列島から成り、温暖で湿潤な気候にも恵まれ多様な植物相を誇る日本ではそれは一層明らかかなはずだ。そのことは青苔上寺地遺跡の大量の木材遺物からも、更には福岡県居屋遺跡から出土した高度な指物技術を用いた机などの遺物によっても知られる。

しかし容易といっても複雑な形態と機能を持った何かを作ることはそうたやすくはなく、ここに至るまで長い時間を要したことは想像に難くない。これらを基礎としてその後木工技術は高度に発達し現在に至る。しかし木工品は腐敗などに弱く残りづらいこと、さらに決定的要素として、例えば漆工品などに比べ多くが実用品であり、大切なものとされず伝世品がとでも少ない。結果として時系列的に木工品を概観出来ず、これほど木材が豊富で木工も盛んでありながら、建築は別として木工史が十分確立しなかった憾みがある。わずかに正倉院のころと茶道が興った桃山期が歴史に顔を出すくらいである。私は代々指物を中心とした木工芸家の家に生まれ、日本の木工に携わった多くの無名の工人に連なるものとして、そのことを日頃から残念に思っていた。そこにこの東宮遺跡である。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団から出土した木工品についての感想と特に下駄の復元を求められた時には驚いたが、実際に見てみれば本来消費され、無くなってしまいう運命にあった多くの木工品が土と水に保護されれば完全な姿で残っていたことに更に驚いた。時代はだいぶ下るし規模も違うが日本のポンペイでも言うほどの興味深いものだった。

言うまでもなく一つの木塊を彫りこんでものを作る「削物」技法が一番原始的木工技法だろう。また輪軸による「挽物」もその起源は古そうだ。しかし木材を「ほぞ」などによって組み立てていく「指物」は金属工具の出現が必要だと思われ、前述の居屋遺跡などがその嚆矢



写真1 留形隠蟻組接ぎで箱を作る

だろう。その指物技術にかけて日本は特に優れていると自負しているが、洋の東西を問わず木工家が誇りを持って取り組む指物技法がある。「蟻組」である。一つひとつのホゾを三角形（あるいは台形＝蟻型と言う）に作り抜けていく更に木材の異方性に対抗できる優れたホゾ組である。私たちは箱を作る時3ミリ程度の薄い板でもこの組み方をする。さらには通常はそのホゾが外部から見えないように加工する。(写真1)

「蟻組」という名称はこの三角形・台形を蟻の頭部に見立てたともいうが、英語ではDovetailと言いつの尾の形から連想する。これは組むホゾの大きさからくる違いのように私は解釈しているが面白い。東宮遺跡からはこの蟻組そのものではないが蟻型を用いた組手の木工品が何点か出土しており私は大いに興味をそそられた。

蟻組の構造には大きく3種類ある。

- 1、差し込む向きに直角の方向に対して抜けず、尚且つ接着面積が大きくなる。→箱の側板の組み方に使用。
 - 2、ホゾの長さ方向には可動的でその直角方向は堅固に固定。→机の反り止めなどに使用。
 - 3、ホゾ先端に楔を打ちホゾを蟻型に開き抜けなくする。→椅子の脚組などに使用。
- このうち東宮遺跡からは2と3の特徴をよく知って使ったものがあって驚かされた。

初めて見た出土の下駄はその小さいことにも興味を持ったが、それ以上に歯が今言う「地獄ホゾ」で組まれていることに驚いた。これは3の構造を更に進化させたもので、上面に抜けない歯の「止めホゾ」の先端に楔用の挽き込みを入れておき楔を少し差し込んだ状態でホゾを叩き込む。すると楔でホゾの先端が開きながら嵌っていく。その結果一度入れたら二度と抜けない、言いかえ

れば失敗の許されない高度な技である。(写真3, 4) 面倒なため現在でもあまり使わないが、下駄のように力が懸りさらに水に濡れるので膠等の強度が期待できない場面では最適の選択と言える。しかし復元模造をしたが多くの道具が必要の上その楔の大きさなど、加減はなかなか微妙で難しいものである。

また2の応用としては何と言っても箸箱だろう。針葉樹系統の材で作られた箸箱を見せられた時は本当にびっくりした。(写真5) 水湿のため片面取れていたが、箸を入れる部分を削り抜き、そこに蓋をするように板を木釘で止める。長手方向の一方の木口に蟻溝を作り小さな蓋を差し込む。これは全く無駄のないとても合理的な構造だ。今でもよく似た構造のものを見かける。中に箸が入っていたことにも驚いたが、箸箱のしっかりした作りから見れば竹製の箸そのものは粗末な作りに見受けられ、まるで割り箸とまではいかなくても消耗品のように感じられ当時の生活風景が目につかぶようで面白かった。またもう一つ、鍋のふたの反り止めにも3の構造が使われていた。これは今でも同じものが作られている。さすがに1の「板を蟻型に組んだもの」はまだ見なかったが、ここに指摘した一連のものは、木材に対して的確な知識と、用途・目的に対して必要にして十分な技法の選択、それを実現する確固とした技術、さらにその技術を支える道具の存在を十分感じさせ当時の木工の水準の高さを知らしめている。

遺跡からは鑿などの木工工具も出土しているようでこれらと木工品の製作との対応を視野に研究が進むことを期



写真2 下駄の復元模造に使用した道具類

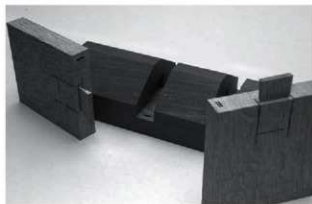
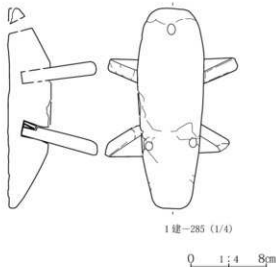


写真3 下駄の歯を差し込む前の「地獄ボツ」



第1図 東宮遺跡出土 下駄

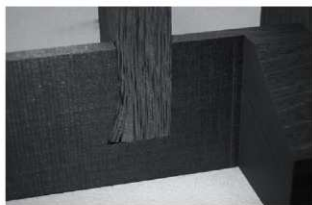


写真4 下駄の歯の仕口の断面

第4章 調査の成果とまとめ

待したい。それはこの木工品がどこで作られたかのヒントにもなる。この他にも重箱様のもの、升、箱杖等々木工品は数多くあるようで、これらは今までは余りに日常的なもの過ぎて顧みられることもなく、博物館に展示されることもなく文字通り歴史の風雪の中に埋もれて人目に触れることなく消滅していたものだろう。これが実際に使われる場面の中で見つかったことの意義はとても重要だ。先に述べたように木工史や木工技術史、関連の生活道具史などはまだまだ未開拓で、長い歴史の中ではほんのわずかとも思える200年ほど前の状況もよくわからず、これから歴史の空白を埋める努力が必要と思われる。また漆塗りのものも多くあり漆工史との連携も大切だ。

小さな箱杖に鉋の刃こぼれと思われる筋を見つけた時は、当たり前だが下り（おり）のいい合成砥などない200余年前に鉋の刃の研ぎに難儀する工人の姿を思い微笑んだ。道具の発達した今でも私は毎日それで苦労している。

東宮遺跡の出土木工品はこれからまだまだ多くのことを語りかけてくれるだろう。同じ木工家の末裔としてその声に耳を澄ませたい。

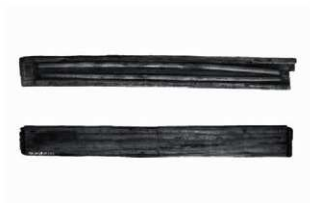
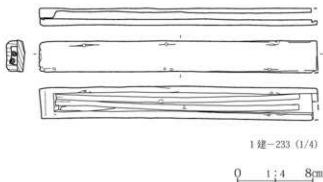


写真5 東宮遺跡出土 箸箱



第2図 東宮遺跡出土 箸箱

第3節 文献・伝承・その他の成果

本節では、東宮遺跡に関わる文献や口伝、伝承等について報告する。

東宮遺跡は川原畑村の一部であるが、天明三年頃の川原畑村がどのような村落であったのか、それを知る手掛かりは少ない。天明泥流の様相と東宮遺跡の出土状況を理解する上でも、同時期の川原畑村がどのような村落であったのかを知ることは重要と考える。天明期の文献ではないが、二つの資料から、天明三年の川原畑村及び東宮遺跡の様相に言及する。

具体的には、明治初頭に編纂された『上野国郡村誌』及び第2章第2節第4図「川原畑村絵図」（天保八年）に付属する文書である。ともに天明期よりも50年から100年ほど後の資料となるが、同時期の川原畑村について詳細に記されており、貴重な資料である。また、東宮遺跡を理解する上でも重要と考え、本節にて紹介する。

『長野原町の古文書』には、ハツ場ダム建設に伴う文化財総合調査の一環として、各地域の文書がまとめられている。東宮遺跡のある川原畑村では、区有文書を中心に文献が報告されていた。川原畑村区有文書は、江戸時代から明治時代初期の、川原畑村の貢租関係文書と明治時代以降大正時代までの土地開墾関係文書を中心をなし、この中に、正徳四年（1714年）～明治四年（1871年）までの年貢皆済目録が99点報告されている。皆済目録は、年貢納入が完了した際、村方へ交付される受領証である。皆済目録を見ることで、納められた年貢内容等が分かり、村の様相を知ることができる。

川原畑村の年貢皆済目録は、天明三年（1783年）浅間山噴火活動と天明泥流による同村の被災状況、及びその後の復興の様相を推測する重要な手掛かりになるのではないかと考えている。また皆済目録には、年貢として納められた作物についても記載されている。東宮遺跡では種実や大型植物遺体も多数出土したが、皆済目録に記された作物の種実がある一方で、記されていない作物の種実も出土していることが確認できた。

東宮遺跡から出土した遺物には、多くの文字が記されていた。文字が記された遺物の種類は多様で、また墨書や刻書など、書き方も様々であった。書かれていた文字

には、人物名や年号、屋号のような印から判読困難なものまで見られた。

生産地で文字が記されたと考えられる遺物もある。硯（13建No.155）には「鳳名石」と刻書されており、その石材名から「鳳来寺硯」の可能性が高いと思われる。また出土した陶磁器2点には、美濃で「市左衛門」、「孫兵衛」と記されていた。文献資料以外で確認されたこれらの文字資料についても、本節にて報告する。

天明三年浅間山噴火活動に関わる口伝や伝承も残る。これらについては「川原畑地区野口家に伝わる口承と野口喜左衛門の人物像について」の中で報告する。

1 文献から考察する川原畑村の様相

東宮遺跡は川原畑村の一部である。明治初頭に編纂された『上野国郡村誌11』（以下『郡村誌』と略す）には、吾妻郡川原畑村について以下のような記載がある。一部を抜粋する。

地味（略）桑風呂粟等二造ス、水利便ナラズ
 貢租 地租 米三石老斗六升三合、金四拾九円六拾四銭四厘
 戸数（略）總計三拾六戸
 人数 男八拾三口平民、女七拾八口平民、總計百六拾一口
 牛馬 牡馬老頭、牝馬三拾頭、總計三拾壹頭
 物産 蝸九石、麻三百貫目、近村へ輸送ス
 民業 男農桑ヲ業トスル者三十五戸、女養蠶麻布ヲ業トスル者三十人

第2章第2節第4図「川原畑村絵図」には、天保八年（1837年）の川原畑村について記載した文書が残されていた。以下に翻刻する。

御代官山本大膳様当分御預り所
 上州吾妻郡 川原畑村

村高百五拾九石九斗老升三合
 此反別三拾三町老反四畝廿三步
 内九町六反四畝廿六歩去々御記入

第4章 調査の成果とまとめ

此高八拾貳石六斗九合
残而拾三町四反九畝廿七步不難
此高七拾七石三斗四合

上畑永貳百九拾文
中畑永貳百三拾文
下畑永百七拾文
下々畑永五拾壹文
屋敷永貳百五拾文

- 一 御林無御座候
- 一 当村鎮守六ヶ所御座候
- 一 川除御普請所無御座候
- 一 大橋五ヶ所御座候
- 一 東西江貳拾四丁
- 一 南北江壹里
- 一 当村家数三拾壹軒
- 一 人数百三拾七人内 男七拾壹人 馬貳拾貳
女六拾六人
- 一 農業之間業無御座候

報告する文献は、ともに天明三年（1783年）よりも時代が下るものである。しかし、天明期頃の川原畑村について、およその様相を知る手掛かりとはなるだろう。戸数は、明治初頭で36軒、天保八年で31軒であった。ともに主屋と思われる。人口は、明治初頭で161人（男83人、女78人）、天保八年で137人（男71人、女66人）であった。

『浅間山津波実記』には、川原畑村の天明泥流被害を「一河原畑 廿壹軒流 四人死」と記している。甚大な被害の災態が窺われる一方で、主屋と思われる家屋の被害が「廿壹軒流」とあるのに対し「四人死」と、家屋の被害状況から考えると亡くなられた人は少ない。多くの人々は、天明泥流から避難することができたと考えている。

第4章第1節1では、東宮遺跡に到達した天明泥流を、当初は浅く緩やかな泥流であったと報告している。文献に記された被害状況を考えると、当初の比較的緩やかな泥流が到達した段階には、多くの人々が避難し始めたのではないかと推測している。

東宮遺跡では、7カ所の屋敷跡から酒蔵1、主屋6が検出されている。天明三年の川原畑村にも、天保八年や

明治初頭頃と同程度に主屋があったとすると、同村には30軒ほどの主屋が存在したことになる。東宮遺跡で検出された主屋は6軒（酒蔵を含めれば7軒）であり、本遺跡には、川原畑村の二割ほどの主屋があったことになる。

東宮遺跡では、検出された建物（主屋）に馬屋が存在していた。その全ての範囲に馬が飼育されていたとすると、天明三年頃、同遺跡には11頭ほどの馬がいたことになる。馬の頭数は、明治初頭で31頭、天保八年で20頭と記されており、天明三年頃の川原畑村にも、これと同程度の馬が飼育されていたと思われる。これを前提にすると、川原畑村の二割ほどの主屋に、同村の半数近くの馬が飼育されていたことになり、考えにくい。

建物（主屋）にある馬屋で飼育された家畜は、馬の可能性も高いが、その全ての範囲に家畜を飼育していなかったと思われる。1号建物では馬5頭分ほどの広さを持つ馬屋が検出されたが、出土した飼葉桶は3点であった。以上を考慮すれば、1号建物における飼葉桶の出土状況は、同建物における家畜飼育状況を反映したものであるのではないかと考えている。

川原畑村の産業として、明治期では養蚕と麻とあり、『郡村誌』には、「桑麻泡栗神等二適ヌ」と記されていた。1号建物からは蚕繭や蚕蛹が多数出土したが、養蚕道具はわずかであり、少なくとも同村で大規模な養蚕が行われたのは、天明三年よりも後のことだと思われる。

引用・参考文献

群馬県史編さん委員会編 1980『群馬県史』資料編11近世3
萩原 進監修 1985『上野国郡村誌11』吾妻郡

2 川原畑村の皆目録

年貢納入が完了した際、村方へ内容の明細が記された受領証が交付される。これを「皆目録」と呼ぶが、川原畑村にも多くの皆目録が残されていた。ここでは「長野原町の古文書」で報告された皆目録について述べる。また、「寅御年貢皆目録」、「去卯御年貢皆目録」は、その内容についても報告する。

天明泥流で被災する前年と、被災した当年の皆目録、「寅御年貢皆目録」（天明二年分）と「去卯御年貢皆目録」（天明三年分）を以下に翻刻する。

寅御年貢拵目録

	上州吾妻郡	
高百五拾九石九斗老升三合	河原畑村	
一 米三石三斗貳升八合	本途	
一 永三拾貫百四文八分	同断	
一 永七百拾九文	小物成	
掛高百五拾九石九斗老升三合		
一 永四百八拾文	夫錢	
一 永九百三拾九文老分	口永	
一 永三百九拾九文八分	御藏前入用	
一 米九升六合	御伝馬宿入用	
此斗立老斗老合		
此代永百拾五文四分		
一 米九升五合	口米石代	
此斗立老斗		
此代永百拾四文三分		
掛高百五拾九石九斗老升三合		
一 大豆三斗貳升	石代	
此斗立三斗三升三合		
此代永六百七拾六文		
一 荳老斗六升	同断	
此斗立老斗六升九合		
此代永百九拾八文八分		
一 細餅米貳升四合	同断	
此代永五拾七文八分		
一 古餅米三升四合	同断	
此代永六拾八文		
一 古餅粳貳升四合	同断	
此代永三拾老文六分		
米三石三斗貳升八合		
合 此斗立三石五斗老升八合		
永三拾三貫九百四文六分		
石払		
米貳斗五升三合五勺	荳大豆代米渡	
米九升三合	餅米粳代米渡	
米三石老斗七升三合五勺	定石代	
此代永三貫六百貳拾六文九分		
納合永三拾七貫五百三拾老文五分		

外永三拾三文三分 包歩銀

右者去寅御年貢金高掛物并
小物成并書面之通金拵濟二付
小手形引替之一紙目録相渡候
此外小手形有之候共可為反古
者也

天明三卯年三月 原清右衛門 印

右村
(名主)
(組頭)
(百姓代)

去卯御年貢拵目録

	上州国吾妻郡	
高百五拾九石九斗老升三合	河原畑村	
一 本途米なし	本途	
一 永貳貫五百拾四文貳分	小物成	
一 永五百四拾四文		
掛高百五拾九石九斗老升三合		
一 永四百八拾文	夫錢	
一 永百六文老分	口永	
掛高百五拾九石九斗老升三合		
一 永三百九拾九文八分	御(藏前入用)	
掛高同断		
一 米九升六合	御伝馬宿入用	
此斗立老斗老合		
此代永百四拾老文四分		
一 口米なし		
掛高百五拾九石九斗老升三合		
一 大豆三斗貳升	石代	
此斗立三斗三升八合		
此代永八百四拾五文		
掛(高同断)		
一 荳老斗六升	同断	
此斗立老斗六升九合		

第4章 調査の成果とまとめ

此代永貳百七拾四文九分

一 細(太) 餅米粉なし
合永五貫貳百九拾五文四分
右払
米貳斗五升三合五勺 荏大豆代米渡
代永三百三拾三文貳分
納合永四貫九百六拾貳文貳分
外永四文壹分 包分銀

右者去卯御年貢本途小物成高掛物并
書面之通金皆濟二候小手形引上一紙
目録相渡候此外小手形有之候共可為
反古者也

天明四辰年三月 原清右衛門 印

右村
名主
組頭
百姓代

「寅御年貢皆濟目録」(天明二年分)と「去卯御年貢皆濟目録」(天明三年分)に記された年貢額を比較すると、天明二年分の年貢は「納合永三拾七貫五百三拾壹文五分 外永三拾三文三分 包歩銀」とあり、天明三年分の年貢は「納合永四貫九百六拾貳文貳分 外永四文壹分 包分銀」とあった。川原畑村で天明三年分として納められた年貢は、天明二年分と比較すると1/7以下に激減していることが分かる。

皆濟目録の中身を比較すると、天明二年分の皆濟目録には「米三石三斗貳升八合」と記されたものが、天明三年分の皆濟目録には「本途米なし」とあった。同様に「米九升五合」が「口米なし」に、「細餅米貳升四合」「古餅米三升四合」「古餅米貳升四合」が「細(太)餅米粉なし」と記されていた。前年分の「寅御年貢皆濟目録」には見られなかった「なし」の記述が多く見られたことは、天明泥流による甚大な被害状況を窺わせる。

表1は、『長野原町の古文書』で報告された、宝曆十二年(1762年)から文化九年(1812年)までの、川原畑村皆濟目録の年貢(貫目)を折れ線グラフにしたもの

である。表1・2を見ると、浅間山の噴火により天明三年分の年貢が大きく落ち込んでいることが分かる。また、天明三年以降と以前を比較すると、被災後しばらく年貢は回復していないことも確認できる。

1783年は、アイスランドのラキ火山においても有史以来世界最大級の大火火があった。これ以外の火山においても噴火活動があり、世界的に気候は冷涼になったものと考えられる。これに、天明三年浅間山噴火活動も重なった。これらの噴火活動が、天明の大飢饉の原因とも考えられている。

表1・2で川原畑村の年貢の推移を見ると、天明三年以降の年貢額が被災前と同様に回復することはなく、川原畑村においても、天明三年浅間山噴火による甚大な被害と、冷涼な気候などの影響が長く続いていたと推測される。また、天明泥流により被災したのは家屋だけではなく、田畑にも甚大な被害をもたらしたと思われ、天明泥流で被覆された田畑復興に長い年月を要したことなどが、被災以前のような年貢にまで回復するのに年月を要した原因とも考えられる。

皆濟目録には、年貢となった作物も記されていた。年貢対象の作物として、米、大豆、荏(エゴマ)、餅米が記されていた。天明三年頃、川原畑村で、同作物が栽培されていたものと考えられる。

発掘された種実には、皆濟目録に記載のない種実も多く出土している。その全てが年貢の対象となるような栽培作物ではないが、文献には記されなかった作物の栽培状況や多様な植物を利用していった実態などが、東宮遺跡調査成果から確認された。

参考文献

ハツタダム地域文化財調査会古文書調査編集 2001『長野原町の古文書』

表1 川原畑村皆済目録(納めた年頁額、年号は皆済時)

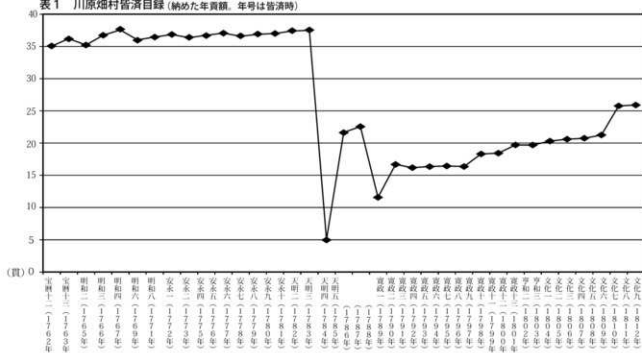


表2 川原畑村皆済目録一覧表

年号	表題	数値
宝暦十二・三(1762年)	巳御年貢米金皆済目録	納合糶3石2斗4升、永35貫57文2步
宝暦十三・三(1763年)	午御年貢米金皆済目録	納合糶3石2斗4升、水36貫148文6分
明和二・十二(1765年)	申御年貢皆済目録	納合糶3石2斗4升、永35貫207文9分
明和三・一(1766年)	酉御年貢皆済目録	納合永36貫724文4分
明和四・三(1767年)	戌御年貢皆済目録	納合永37貫656文
明和六・六(1769年)	子御年貢皆済目録	納合糶3石2斗4升、永35貫956文3分
明和八・十二(1771年)	卯御年貢皆済目録	納合永36貫443文7分
安永一・十二(1772年)	辰御年貢皆済目録	納合永36貫838文6分
安永二・十二(1773年)	巳御年貢皆済目録	納合永36貫291文2分
安永四・十二(1775年)	富未御年貢皆済目録	納合永36貫670文8分
安永七・三(1778年)	酉御年貢皆済目録	納合永37貫43文2分
安永八・三(1779年)	戌御年貢皆済目録	納合永36貫620文8分
安永九・二(1780年)	去亥御年貢皆済目録	納合永36貫917文
安永十・三(1781年)	去子御年貢皆済目録	納合永36貫902文3分
天明二・三(1782年)	去丑御年貢皆済目録	納合永37貫423文5分
天明三・三(1783年)	寅御年貢皆済目録	納合永37貫531文5分
天明四・三(1784年)	去卯御年貢皆済目録	納合永4貫962文2分
天明五・三(1785年)	去辰御年貢皆済目録	納合永21貫623文6厘
寛政一・七	巳皆済目録(1786年办)	納合永22貫545文5分
	午皆済目録(1787年办)	納合永11貫574文1分
	未皆済目録(1788年办)	納合永16貫679文8厘
寛政一・十二(1790年)	酉御年貢皆済目録	納合永16貫182文
寛政四・六(1792年)	亥御年貢皆済目録	納合永16貫348文6分
寛政五・三(1793年)	子御年貢皆済目録	納合永16貫442文3分
寛政六・三(1794年)	丑御年貢皆済目録	納合糶1斗6升9合此代永269文1分糶5斗6合此代水194文6分、水16貫367文2分
寛政七・三(1795年)	寅御年貢皆済目録	納合永18貫312文7分
寛政十・三(1798年)	巳御年貢皆済目録	納合永18貫430文2分
商(寛政十三)三(1801年)	申年御年貢皆済目録	納合永19貫713文3分
享和二・三(1802年)	酉御年貢皆済目録	納合永19貫692文2分
泰(享和三)三(1803年)	戌御年貢皆済目録	納合永20貫304文5分
〔注〕文化二〕三(1805年)	子御年貢皆済目録	納合永20貫595文6分
文化三・三(1806年)	丑御年貢皆済目録	納合永20貫756文4分
文化四・三(1807年)	寅年御年貢皆済目録	納合永21貫246文8分
文化八・十二(1811年)	未御年貢皆済目録	納合永25貫263文8分
文化九・十二(1812年)	申御年貢皆済目録	納合永25貫893文8分

3 東宮遺跡出土遺物で確認された文字資料

ここでは、東宮遺跡出土の陶磁器、木製品、石製品等に残された文字について報告する。東宮遺跡では、脆弱な遺物も良好に遺存していたためか、漆器や木製品も含め多様な遺物で、墨書や刻書された文字や印が確認された。詳細は表1を参照して頂きたい。

11建No. 4の鍔湯呑と13建No.32の柳茶碗に書かれた文字は、焼成前、生産地である美濃で記されていた。いわゆる雑器に「市左衛門」「孫兵衛」などの名前を記す例は極めて珍しい。ともに連房8小期であった。

酒蔵である10号建物から、屋号と思われる印の残る遺物が出土した。10建No.144の木製の蓋と10建No.145の樽か桶には、同じように「○(マル)」に「川野口」の焼き印が見られた。また、10号建物出土の片口(10建No.56)にも、「河ノ口」とも読める墨書が確認された。酒蔵との関連を指摘しておきたい。

1号建物からは多数の下駄が出土した。そのうちの4点には、屋号や目印のような印が刻まれていた。これらの印は、下駄の所有者を判断するためのものだと考えられる。しかし、1号建物出土の砥石に刻まれていた、屋号と思われる「口(カネ)」に「口(カネクチ)」は確認できなかった。

1建No.286の下駄には、差し歯に「○(マル)」に「中」と焼き印がされていた。「中」の文字が判読できた遺物は、これと3号屋敷跡下(7号建物下)から出土した51区2号集石出土の土師器皿(51区2集No.1)のみである。小型の土師器皿には、底部外面に「中」と墨書されていた。推測の域は出ないが、「中」が屋号のような印だとすれば、1建No.286の下駄は7号建物に帰属すべき遺物となる。天明泥流で被災する寸前、この下駄を履い

た人が1号建物に居たのだろうか。少なくとも、1号建物から多様な印を刻む下駄が出土したことで、天明三年新暦8月5日の浅間山大噴火から天明泥流が同地域に到達するまでの間、1号建物に人々が集まっていた可能性を指摘できるだろう。

墨書された板(1建No.248)には、「薬師」「成就」と板一面に繰り返し書かれていた。「室田」は旧橋名町の地名と思われる。1建No.249の木札両面には、「甚左衛門」「助之丞」などと墨書されていた。1号建物に関連した人名であろうか。ともに、使用用途については明らかでない。

13建No.155は硯である。裏面に「鳳名石」と刻書されていた。新城市教育委員会の岩山欣司氏より、この石材名から「鳳来寺硯」の可能性が高いことを指摘して頂いた。鳳来寺硯は、新城市にある鳳来寺参詣の際、実用的な土産として流通していたといわれている。鳳来寺硯に石材名を刻むことが通例であるのかは明らかでないが、13号建物に住んでいた人が参詣をし、土産として持ち帰った可能性も考えられる。

東宮遺跡出土遺物で確認された文字は、何処で書かれたものかにより、生産地と消費地(東宮遺跡か)とに大別することができる。生産地で文字が書かれた遺物に、陶磁器(11建No.4、13建No.32)や硯(13建No.155)がある。これらの遺物は、当時の物流や交流を知る手掛かりになるものと考えている。消費地(東宮遺跡)で文字が書かれた遺物には、墨書や刻書で人名や日付(年号か)などが確認された。

これらの遺物に書かれた文字については、欠損もありその全てを判読することはできなかった。また、類例も少なく判然としない遺物もある。今後の資料増加に期待したい。

表1 東宮遺跡出土 文字・記号等が確認された遺物一覧表

No.	区	遺物No.	出土位置	種類・素材	文字
1	1	1建210	1建北	木製品 漆桶蓋	高台内に黒漆で文字を書くも判読困難。
2	1	1建213	1建西	木製品 漆桶	高台内に黒漆で文字を書くも判読困難。
3	1	1建215	1建唐口東	木製品 漆桶	高台内に黒漆で「源右井」か。判読困難。
4	1	1建216	1建唐口東	木製品 漆桶	高台内中央に黒漆で「小倉」、左側に「上」。
5	1	1建218	1建	木製品 漆桶	高台内に黒漆で文字。判読困難。
6	1	1建219	1建空	木製品 漆桶蓋	高台内に黒漆で「井」。
7	1	1建220	1建	木製品 お椀	底部外面には「八(ヤマ)」に「上」、「口」の印。
8	1	1建248	1建	墨書板	1面には「山藏面白」「度」。もう1面には「薬師」「成就」を繰り返し書かれる。他に「室田」「肥」「松」「佐」。
9	1	1建249	1建6床下	墨書木札	1面には「五月四日 甚左衛門」か。もう1面には「三子」十月朔日「助之丞」か。
10	1	1建270	1建唐口北	下駄	台榭付面に横線の下に「八(ヤマ)」を二重に刻書。
11	1	1建286	1建	下駄	後面後面の中央下部に焼き印。「○(マル)」に「中」か。
12	1	1建306	1建3床下	下駄	台前裏面の左右に刻線。「八(ヤマ)」か。判読困難。

No.	区	遺物No.	出土位置	種別・器種	文字
13	I	1建307	1建西	下駄	台表面付近に「マ」を二重に刻畫。
14	I	1建438	1建土間	碇石	「[「カネ」]に「[1]」(カネケチ)、「木部」の刻畫。
15	I	1建439	1建黒石南端	碇石	「[「カネ」]に「[1]」(カネケチ)、「市助」の刻畫。
16	I	1建440	1建3床西	碇石	使用面の裏に縦刻。扉号か。
17	I	1建441	1建黒石南端	碇石	「山」と刻畫。
18	I	1建442	1建	碇石	「ハ(ヤマ)」に「本」?の縦刻。
19	I	1建444	1建3床下	碇石	刻畫か。
20	I	2建62	2建4袖内	碇石	「[「カネ」]に「[1]」(カネケチ)と刻畫。
21	I	4建52	4建床下	陶器 皿	高台内に「首」と墨書。京焼風。18第1四半期。
22	I	4建62	4建床下	陶器 鉢鉢	見込及び前面部分に墨書。瀬戸。遡行8小周。
23	I	4建63	52<	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
24	I	4建66	1建	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
25	I	4建72	4建床下	木製品 お椀	底部外面には焼き印か。
26	I	4建94	4建北土台下	木製品 下駄	台表面付近に縦刻。「ハ(ヤマ)」か。
27	I	1原敷17	1建北	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
28	I	1原敷18	1建北	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
29	I	1原敷19	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
30	I	1原敷20	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
31	I	1原敷21	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
32	I	1原敷22	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
33	I	1原敷23	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
34	I	1原敷24	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
35	I	1原敷25	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
36	I	1原敷26	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
37	I	1原敷27	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
38	I	1原敷28	1建北	木製品 漆碗	高台内左側に墨書で「下」。
39	I	1原敷29	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
40	I	1原敷30	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
41	I	1原敷31	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
42	I	1原敷33	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「源右井」。
43	I	1原敷34	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「源右井」か。
44	I	1原敷35	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「源右井」。
45	I	1原敷36	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「源右井」。
46	I	1原敷37	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「源右井」。
47	I	1原敷38	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「源右井」。
48	I	1原敷39	竹鹿(1原敷42内)	木製品 漆碗	高台内に墨書で「源右井」。
49	I	1原敷61	1原敷鉢	磁	裏面には「川原焼」「三年」(年号か)「川」などの刻畫。左側面には「飯」と刻畫。
50	I	4石404	4石石束	木製品 漆碗	高台内に墨書で「井」。
51	I	5建108	5建土間	陶器 碗	高台内に「十一」と墨書。瀬戸。遡行8小周。
52	I	5建129	5建	木製品 お椀	「ハ(ヤマ)」に「田」「田原屋 平」の印。
53	I	5建132	5建	木製品 曲物か	「〇(マル)」に「寿」の印か。
54	I	5建162	5建1床下	木製品 下駄	脚印によると思われる径約2cmの円形の扉号。
55	I	5建167	5建土間	木製品 下駄	台表面後部中央に縦刻。
56	I	5建176	5建	木製品 樽	「清水屋」の焼き印。
57	I	1面1	1面池	木製品 漆碗	高台内に墨書で「山」か。
58	I	2原敷3	5原東くぼ地	陶器 皿	京焼風。高台内に「首」と墨書。1690～1710年頃。
59	I	1区13	-	染付 摺口	底部に墨書。判読困難。肥前系。19世紀初～中頃。
60	I	1区29	-	陶器 鉢鉢	日輪の一部に墨書が残る。判読困難。瀬戸。遡行8小周。
61	II	7建24	7建	木製品 漆碗	高台内に赤色漆で「三」。
62	II	7建27	7建	木製品 漆碗	高台内に赤色漆で「ハ(ヤマ)」に「三」。
63	II	7建30	7建	木製品 漆碗	高台内に墨書で「月」。
64	II	7建32	7建	木製品 漆碗	高台内中央に赤色漆で「本手」。
65	II	7建36	7建	木製品 お椀	底部外面には「ハ(ヤマ)」に「源後屋 [左衛門]」?の印。
66	II	7建44	7建西	木製品 樽	「水」の焼き印か。
67	II	51区2集1	51区2集石	在地土器 皿	底部外面に墨書。「中」か。
68	II	15ト1-5	15区15トレンチ	磁	裏面に「山崎次郎」と刻畫。
69	IV	9建24	9建	銅 銅毛	裏面に墨書。「川原焼村 酒藏用 野口」。天明二年 酒藏用 四月吉(日)。
70	IV	4原敷下10	-	漆(緑石)	「ネリウケ」の種子を墨書か。
71	IV	4原敷下11	-	漆(緑石)	「ネリウケ」の種子を墨書。
72	IV	4原敷下12	-	漆(緑石)	「ネリウケ」の種子を墨書。
73	IV	4原敷下13	-	漆(緑石)	「ネリウケ」の種子を墨書。
74	IV	4原敷下14	-	漆(緑石)	「ネリウケ」の種子を墨書。
75	IV	10建54	10建庭	陶器 片口	高台内に墨書。「林 松野村」か。美濃。遡行8小周。
76	IV	10建56	10建	陶器 片口	「摩ア」または「河ノ」か。美濃。遡行8小周。
77	IV	10建57	10建	陶器 片口	高台内に墨書。「西四」。美濃。遡行8小周。
78	IV	10建144	10建	木製品 蓋	「〇(マル)」に「川野口」の焼き印。
79	IV	10建145	10建	木製品 柄か桶	「〇(マル)」に「川野口」の焼き印。
80	IV	5原敷1	10建	木製品 漆碗	高台内中央に墨書で「本手」。
81	IV	5原敷5	5号原敷鉢	碇石	「七」と刻畫。
82	IV	11建4	11建	陶器 碗	高台内には、墨輪前に「市丸薬門」と刻畫。美濃。遡行8小周。
83	IV	13建32	13建	陶器 碗	墨輪前に鉄で「孫兵衛」と書かれる。美濃。遡行8小周。
84	IV	13建68	13建	陶器 香炉	見込及び底部外面に墨書。判読困難。美濃。遡行8小周。
85	IV	13建70	13建	陶器 鉢鉢	判読困難。瀬戸。遡行8小周。
86	IV	13建155	13建	磁	裏面左上面部青りに「龍名石」、同左下に「二」と刻畫。
87	-	遺物外8	-	陶器 不明	底部に墨書。判読困難。「野」か。

4 川原畑地区野口家に伝わる口承と 野口喜左衛門の人物像について

はじめに

天明三年（1783年）7月8日、新暦8月5日、浅間山の大噴火に伴い発生した泥流（「天明泥流」）は、吾妻川を流下し、沿岸の村々を呑み込みながら甚大な被害をもたらした。当時の川原畑村（現・吾妻郡長野原町大字川原畑）は、地形上、上村と下村の別があったが、天明泥流の流下により下村のほとんどが壊滅した。当時の原町名主富沢久兵衛『浅間記』の記述によれば、村の被害は、「二十一軒流、四人死」とある。

本稿では、まず、1号屋敷跡の主であったとされる野口家に伝わる天明泥流被災に関わるいくつかの口承を紹介し、このたび実施された発掘調査の成果とクロスチェックしながら、その口承の信憑性に迫る。そして、天明三年当時、1号屋敷跡の主であったとされる野口喜左衛門という人物に焦点を当て、その人物像にも迫りたい。

川原畑地区において、野口姓は、上ノ平地区や東宮地区に多い姓の一つで、長野原町の江戸期の偉人「野口円心」や明治期の偉人にして富豪「野口茂四郎」も同一姓をもつ。川原畑地区において野口家は旧家の一つである。1号屋敷跡の主であったとされる野口家には、1号屋敷跡（大型屋敷跡）及び5号屋敷跡（酒蔵）に関わるいくつかの口承が現在に至るまで残されている。

■「この屋敷では酒造を行っていた。（天明泥流被災時に）大切な酒は馬五頭に付けて逃げた。」

■「この屋敷のお婆さんは、一度逃げたが、位牌を取りに家に戻った。そうこうする間に最後は流されて死んでしまった。『ゴスケよさらば』と言い残し・・・」

■「この屋敷は、（天明泥流被災後）同じ場所に規模は小さいながらも屋敷を復興した。その後、屋敷は別の場所へと移転したが、¹ヤシキアト、や²ヤシキタンボ。」の呼び名は残った。」

■「この屋敷の主は野口喜左衛門という。屋号は司³（カネクチ）。川を頭に付し⁴カワカネクチ。ともいう。」では、これらの口承と発掘調査の成果とをクロスチェックしてみよう。

まず、「酒造」について。平成19年度に検出された1

号屋敷跡の2号建物と呼ばれる礎石建物内の地面には、径約1mの大きな桶が4基ずつ2列に計8基埋設されていた（写真1）。桶は多数の板で蓋がされており、当初、この建物や桶が酒造に関わるものではないかと考えられた。しかし、地面に埋設された桶は衛生上、食品製造には不向きと考えられ、地域での聞き取り調査の結果から、蚕糞（ココソとも呼ぶ）と人糞尿とを混合して追肥料を製造する民俗例「ナラシダメ」と考えられるようになった。

ところが、平成20年度に検出された5号屋敷跡の10号建物は、長方形の切石を礎石として廻らせた蔵の構造を有し、建物内からは多数の木栓（樽の栓）が出土したり、槽場と思われる施設も確認された（写真2・3）。これは、口承に伝わる野口家の酒蔵ではないかと考えられるようになった。

次に、「馬五頭」について。1号建物は南側の入口正面から向かって左側（西側）には広い馬屋がある（写真4）。馬は8〜9尺四方のスペースに1頭飼育するのが



写真1 2号建物 8基の桶が建物内の地面に埋められていた



写真2 10号建物 酒蔵跡と考えられ、搾酒するための槽場施設を有する

一般的だという。この建物の馬屋は間口は一般的な規模だが、建物奥に細長く、奥行は約12mもある。これは馬4～5頭分のスペースであるが、既報告により、馬房の仕切りは4ヶ所と考えられているから、飼育された家畜が馬だったと仮定すれば、その頭数は5頭であった可能性が高い。また、馬屋内に馬の死骸はなかった。馬糞や植物の葉などが腐食せずに遺存しているのだから、馬屋に仮に馬が飼育されていれば、骨は残存して出土するはずだ。従って、馬は泥流被災以前に逃がしたものと考えられる。馬屋と土間の境界の飼馬桶が全て裏返しの状態で出土したことも、泥流被災直前まで馬が干草を食んでいた様子を連想させない。

次に、「お婆さんと位牌」について。口承によれば、位牌を取りに家に戻る時間的な余裕があったこととなる。調査の結果から、発掘されたほとんどの建物は泥流によって建物ごと流されたものではなく、土台や大引、根太や床などの建築部材は現位置に据わったままであることが判明した。従って、この地域を襲った天明泥流は、泥流の流心ではなく縁辺部であったためか、瞬間的に建物全体を流し去る威力を備えたものではなかったことがいえよう。伝承の位牌は長野原町雲林寺に安置されているという。

最後に、「野口喜左衛門と屋号」について。1号屋敷跡が出土した「ヤシキアト」と呼ばれる敷地を所有していた野口家の祖先に野口喜左衛門という人物がいる。その野口家に現在まで伝わる屋号は司³(カネクチ)。この屋号が刻まれた砥石等が1号建物から複数出土しているから、野口家と1号屋敷跡は結びつけられることとなる。

旧三ツ堂脇には川原畑区共同墓地があり、その一角に10基余り、野口家先祖代々の墓が並んでいる(現在はハツ場ダム建設工事に伴い移転済み)。うち、最も古いものは確認できる範囲で享保十九年(1734年)である。そのほぼ中央にひと際荘厳な造形の墓石があり(写真5)、銘には、「寛政六年七月二日卒 俗名 野口喜左衛門」と刻まれている。従って、この墓に眠る野口喜左衛門という人物は、天明三年の被災を生き延び、11年後の寛政六年(1794年)まで生存したことになる。この喜左衛門は、富沢久兵衛の浅間記にも登場する。吾妻郡上村大戸の分限者、加部安こと、加部安左衛門(代々襲名)は天明の災害に際し、三嶋・川戸・厚田・矢倉・岩下・松

尾・横谷各村へ計47両の援助を行っているが、その後述に、「外二川原畑喜左右工門え三両」とある。村々への援助の内容を列挙する記述の中での一個人への対応の様子は、加部安と喜左衛門との密接な関係をも連想させる。



写真3 10号建物から多量に出土した木柱



写真4 1号建物の広い馬屋



写真5 野口家代々の墓中央墓石に野口喜左衛門の銘あり

第4章 調査の成果とまとめ

当時の加部安は第七代重実から第八代光重にかけての加部家全盛時代にあたり、重実は酒造をはじめ有名な岩下・三島村の麻の仲買いに手をつけて巨利を博し、それを資本に、当時「麻手」「籐手」と呼ばれた現物担保の産業資金金融へと手を広げている。喜左衛門がこの加部安と交流があるほどの人物であったとすれば、1号屋敷跡のその主屋の特異な規模にも頷ける。また、酒造に関する口承も加部安と共通する要素の一つである。

「野口喜左衛門」は数代に渡り襲名がなされ、川原畑村の分限者であったことを裏付ける別史料を挙げておこう。川原畑地区には、野口喜左衛門の銘の刻まれた石造物が3基存在する。一つは、旧上ノ平地区中嶋藤次郎氏宅前に造立されていた弁財天像（写真6）。像は頭上に鳥居をもち、日天・月天もある。台石の銘には、「上州我妻郡川原畑村 明和二酉天 奉造立辨財天供娘塔 九月吉日良辰 野口喜左衛門 野口権右衛門 野口長左衛門 野口五良左衛門 野口傳八郎 篠原平兵衛 篠原平七郎 中嶋治良右衛門」と刻まれ、明和二年（天明三年の18年前の1765年）、喜左衛門以下8名の諸氏により造立されたことが分かる。

二つ目は、旧三ツ堂裏の岩峰の頂部に2基造立された石祠のうちの1基（写真7）。台石の銘には、「野口五郎左衛門 同権右衛門 同長左衛門 同喜左衛門 同傳八郎 篠原平七郎 同利八郎 同辰右衛門 文化九季 壬申 七月吉日」とある。造立年は文化九年（1812年）であるから、天明三年より29年後、前述の弁財天造立より47年を下る。加部安との交流があり天明の被災を受けた喜左衛門は寛政六年（1794年）には没しているため、石祠の銘にある喜左衛門はその次代を襲名した喜左衛門であると考えられる。この石祠は三ツ堂岩峰頂部より天明泥流に被災した川原畑村東宮地区を見下ろすように建立されている。また、弁財天と石祠の造立者は野口喜左衛門をはじめ6名の名が同一であることも注目に値する。

三つ目は、旧三ツ堂から新三ツ堂へと移転された菩薩像（写真8）。造立年は不詳であるが、銘に「野口左左エ門」と刻まれている。石像は、旧三ツ堂裏の岩峰中段から川原畑村東宮地区を見下ろしている（現在はダム建設に伴い新三ツ堂へ移転済み）。

では、天明三年当時、川原畑村野口家の生業はいったい何だったのであろう。酒蔵と考えられる建物が1号屋



写真6 中嶋藤次郎氏邸宅前の弁財天像



写真7 旧三ツ堂裏岩峰頂部の石祠

敷跡に隣接して検出されたことは別に、この疑問解明の手がかりとして、ここでは発掘調査の結果、1号建物（主屋）内から多量の籐が出土したこと、畑跡の土壌中から多量の麻実が出土したことを挙げておき、加部安の生業との関連も予察しながら詳細は別稿に譲ることとする。

おわりに

本稿執筆にあたり、野口茂男・野口英雄両氏より御指示を頂き、また野口家墓地取材等の許可も頂いた。さらに、中嶋藤次郎氏にも弁財天像の取材許可を頂いた。最後に記して感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 藤原正洋「天明記流に呑まれた屋敷の謎」『理文群馬』47号（財）群馬文2008
関 俊明「天明記流はどう流下したか」『ぐんま史料研究』第24号群馬県立文書館2006
萩原 進「富豪加部安盛資記」『あがつま史帖』西毛新聞社1963
萩原 進「浅間山天明噴火史料集成」II群馬県文化事業振興会1986
『長野原町の民俗』1987
『長野原町の石造文化財』1989



写真8 ニッ堂の菩薩像

第4節 自然科学分析成果

東宮遺跡では、被覆する表土及び天明泥流堆積物の保水性・保湿性が高く、極めて脆弱な遺物であっても良好に遺存していた。

それは、種実も含めた大型植物遺体でも同様であり、様々な種実が多量に出土している。炭化することなく、当時の色調も残すこれらの種実からは、当時の食生活や農耕作物の種類だけではなく、周辺の生活環境までも知ることができる。また、天明三年新暦8月5日、出土地点付近にあったことが明らかであり、時期と地域が限定できる点でも極めて貴重な遺物といえるだろう。出土した種実については、悉皆的な調査は行えなかったが、可能な範囲でその成果を掲載した。

1号建物馬屋からは、家畜糞と思われるものと互層になり葉が出土した。出土した葉の詳細は、本節2を参照して頂きたい。出土量については葉の枚数で示しており、羽状複葉のフジはその数量が多くなった。出土状況等から考えると、数値以上に成長したワラビが多く出土している。牛や馬などの家畜がワラビを食すと、ワラビ中毒になる恐れがある。ワラビが馬屋内にあった理由や、どの範囲までの広がりであったのか、餌として家畜が食べていたのかなど、検討すべき課題は多く、その詳細は明らかでない。

24号畑からは、畑の畝に植えられた作物が一部遺存していた。畑は天明泥流で被覆されており、これらの遺存する作物は、時期と地域が限定できる貴重な遺物といえる。出土した作物であるが、解剖学的検討の結果、双子葉植物であることが確認できた。現生のゴマとアサの茎と主根でも比較したが、同定はできなかった。

24号畑からは多くの種実も出土している。栽培植物だけでなく、アサ、ソバ、シソ属、ナス属、イネ、オオムギなど種類も多い。その全ては栽培されていないと思われるが、連作障害を避けるためか、異なる作物を栽培することがあったとも考えられる。

24号畑では花粉分析も行われた。同様に、24号畑においてはその周辺で、アサやソバ、イネやムギの栽培が行われていたと判断された。

東宮遺跡からは、下駄の他に草履などの極めて脆弱

な遺物も出土した。筵と思われるものとともに素材を分析し、草履は稲藁で作られ、茎だけでなく葉が含まれていることが確認された。

5号建物には、布の一部が遺存していた。布の繊維を素材同定した結果、アサの鞣皮繊維であることが確認された。東宮遺跡からは多くのアサの種実が出土し、また近隣には、「岩島麻」で知られる吾妻郡東吾妻町があり、その関連も指摘される。

東宮遺跡では獣骨の出土例もある。埋設された2号建物2号桶の中からは、角が切断されたニホンジカの頭蓋骨が出土した。また同9号桶からは、イヌの頭蓋骨及び左右下顎骨、ネコの四肢骨、ニホンアナグマの四肢骨が出土した。天明泥流により流入したものではないと思うが、桶内より出土した理由は明らかでない。

ニホンジカの角を加工した製品も見られた。ひとつは未製品とも思われ、その用途については明らかでない。特筆すべき魚骨にブリがある。内陸に位置する群馬県の山間部で、切断痕のあるブリの右方骨が出土したことは、当時の物流と食生活を知る上で重要な成果と考えている。

東宮遺跡では多くの木製品が出土したが、欠損部もあり、その用途を全て明らかにすることはできなかった。しかし、4建No.86の木製品については、その形状等から圧搾機であり、灯火皿に残る油煙と圧搾機に残る付着物とが同様の成分であったことから、灯火皿に使用する搾油機であることまで確認できた。

出土した鉄鍋類には、欠損部を溶接し補修した補修痕跡が確認された。屋敷跡より出土した鍋類21点のうち、8点に補修痕跡が見られた。遺存状況の悪い鉄鍋類もあることから、より多くの補修が行われていた可能性があるだろう。分析から、溶接には鋼を主体にスズを合金した青銅が使用されていたことが確認できた。

10建No.143は蓋をされた桶である。酒蔵である10号建物から出土しており、内面に残る付着物が酒造りに必要な酒母や麹、酵母の一部である可能性が考えられ分析を実施した。結果、いずれの痕跡も確認できなかったが、分析対象範囲は僅かであり、今後検討が必要な遺物と考えている。

1 東宮遺跡から出土した大型植物遺体

はじめに

東宮遺跡は群馬県長野野町大字川原畑字東宮地内に位置する。天明3年(1783年)の浅間山噴火に伴う泥流に埋没した屋敷跡などが発見され、江戸時代の民家の構造などが明らかになった。ここでは建物や溝などから発掘調査中に取り上げられた大型植物遺体を同定し、食用などに利用された植物あるいは遺構周辺での栽培状況や植生について検討する。

また、火山灰によって埋没した畑には耕作物が生の状態で遺存しており、耕作土中にも生の種実が良好な状態で残存していると想定された。そこで、耕作土を水洗して土中に含まれる大型植物遺体を同定し、栽培された植物あるいは畑周辺の植生について検討する。同定にあたっては、千葉大学園芸研究所百原新氏のご教示を得た。なお、畑試料と同試料を用いて花粉分析も行われている(花粉分析の項参照)。

1. 試料と方法

建物や溝などから出土した試料は、発掘調査中に現場で取り上げられた選別済みの183試料である(以下現場取り上げ試料とする)。I試料中に1点の種実を含む試料から多種の種実が多数混合した試料もあった。試料の内訳は、I区では1号建物60試料と1号橋1試料、1号土坑1試料、2号建物15試料、3号建物1試料、4号建物12試料、5号建物7試料、8号建物2試料、5号畑3試料、4号溝11試料、8号溝2試料、4号石垣3試料、51区1試料、52区40試料、泥流1試料、遺構外13試料の計173試料、II区では7号建物1試料とIV区9号建物3試料、10号建物6試料の計10試料の合計183試料である。

畑の耕作土から採取した試料は、24号畑から採取した土壌7試料である(以下水洗試料とする)。土壌は検出面から約15cm四方、深さ10cm程度で畝をまたぐように等間隔に6試料(試料No.1~6)とNo.6から北西方向にやや離れた位置で、耕作物の残りが最も良かった地点から1試料(試料No.7)を採取した。採取位置は第184図を参照されたい。

大型植物遺体の同定は、肉眼および顕微鏡下で行った。計数が困難な試料や多数含まれている試料は記

号(+)で示した。大型の種実は形状分類を行い、完形と半割、打撃痕、動物食痕、不明に分類した。水洗試料のうち試料No.1~6は、各試料から300ccを計量後、0.25mm目と1.0mm目の篩を用いて水洗し、大型植物遺体の抽出・同定・計数を顕微鏡下で行った。No.7のみ大型の種実の抽出を目的として、0.5mm目で水洗した(未計量のため、一括とする)。シダ植物など計数が難しい分類群はおおよその産出数を記号(+)で示した。試料および残渣は群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

2. 結果

以下、現場取り上げ試料と水洗試料に分けて結果を記載する。

[現場取り上げ試料]

同定の結果、木本植物では針葉樹のカヤ種子とスギ球果・葉、クロマツ球果、マツ属複維管束亜球果の4分類群、広葉樹のオニグルミ核とヒメグルミ核、クリ果実、ブナ果実、クワ属核、アケビ種子、マタタビ属種子、モモ核・炭化核、アンズ核、ウメ核、スモモ核、サクラ属サクラ節核、キイチゴ属核、サンショウ種子、イタヤカエデ種子、イロハモミジ近似種果実、トチノキ種子、ブドウ属種子、タラノキ核、カキノキ属A・B種子、カキノキ属B種子、ニワトコ核の22分類群、草本植物のアサ核・炭化核とミズ属果実、ソバ果実、イヌタデ果実、タニゾバ果実、サナエタデ・オオイヌタデ果実、ボントクタデ果実、ヤマゴボウ属種子、スベリヒユ属種子、ノマノフスマ種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、タケニグサ種子、キケマン属種子、アブラナ科A・B果実、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属核、キジムシロ属果実、ダイズ属果実、ハギ属炭化種子、アズキ炭化種子、ササゲ属アズキ亜属アズキ型炭化種子、ササゲ属炭化種子、マメ科炭化種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、キュウリ種子、ウリ属メロン仲間種子、カボチャ種子、ウリ属ヒョウタン仲間種子、ウド核、アカネ属炭化種子、エゴマ果実、ナス種子、ナス属種子、オミナエシ属果実、タカサバロウ果実、ゴボウ果実、メナモミ属果実、ホッスモ種子、メヒシバ属果実、オヒシバ種子、ヒエ果実・炭化果実、イヌビエ属有果、イネ初・炭化初・炭化種子、キビ有果・炭化果実・炭化種子、アワ有果・炭化有

第4章 調査の成果とまとめ

ふ果・炭化種子、エノコログサ属有ふ果、オオムギ炭化果実・炭化種子、コムギ炭化種子、カヤツリグサ属果実、ホタルイ属果実、スゲ属果実の52分類群、シダ植物のスピナ近似種地下茎の1分類群の計79分類群が見いだされた。この他に科以下の同定ができなかった不明種実と、識別点を欠く同定不能種実、不明の芽、昆虫が得られた。

現場取り上げ試料で数計した点数は、破片も含めると9464点であった。主に遺構名と出土位置でまとめた同定結果を表1・2に示す。表1には産出分類群数が少ない試料をまとめ、頻りにみられるオニグルミ核とモモ核、ウメ核、アンズ核、クリ果実については個別に標を設けた。表2には産出分類群数が多い試料をまとめた。

以下、ある程度の量の大型植物遺体が出土した出土位置別に特徴的な大型植物遺体の産出傾向を記載する。

1区1号建物：オニグルミやモモ、ウメ、アンズ、クリが複数の取り上げ地点から見いだされ、オニグルミは打撃痕をもつ個体が床や床下、馬屋内、2号唐臼や裏庭に目立った。2号唐臼内にはオニグルミの半割の個体が多く、クリ果実の破片も目立った。遺物に伴う種実としては、唐臼東から出土した椀内にはアブラナ科の種子が2種類密に詰まっており、建物北の半割（1号敷No.16）内からは果皮が残存したままのウメと、サクラ属サクラ節の核が産出した。栽培植物がまとまっていた産出した例としては、北外西山と2号唐臼でソバが少量産出したほか、室内や室床面・底面などからオオムギ果実と種子が多量に産出し、破片をあわせて約6100点が得られた。

1区2号建物：検討を行った5基の桶内からはカキノキ属Bが目立ち、5点以上産出した分類群はクワ属やアケビ、カキノキ属A、アサ、アカザ属、ウリ属メロン仲間、エゴマ、ナス、イネ、キビであった。これらはアカザ属を除いて食用可能な分類群で、栽培植物が多かった。ただし、イネは籾（ほとんど籾殻）、キビは有ふ果と、食用できない部位も含まれていた。桶以外では、特徴的な種実として下桶周辺でダイズ属の果序が1点得られた。

1区4号建物：3号床および床下からソバが多数得られ、ゴボウやイネ籾、モモ、アンズ、クリを伴っていた。

1区5号建物：5建No.155の中からアワの有ふ果が多量（5000点以上）得られた。分析した試料は出土量の全体の一部であるため個数は出していないが、アワがほとんど（99.5%程度）を占め、キビとエノコログサ属の有

ふ果をあわせて0.5%程度伴う。5建No.155の下ではアワが約230点と多いが、アサとソバが少量、キビとヒエがわずかに伴う。そのほか、囲炉裏下桶内からモモが少量得られた。

1区4号溝：複数地点からオニグルミやモモがやや多く得られている。オニグルミの形状は打撃痕を主体として完形や動物食痕などが含まれていた。モモの形状は完形を主体とし、打撃痕と動物食痕などがわずかに含まれていた。B-8からカボチャがわずかに得られた。

1区8号溝：オニグルミとモモがやや多く得られている。オニグルミはすべて割れており、打撃痕が多かった。

1区52区グリッド出土：複数地点からオニグルミやモモ、ウメ、アンズなどが得られた。C-6からはカボチャがまとまって得られた。

1区51区グリッド出土：Q-23からアワの有ふ果が多量に出土し、イヌビエ属の有ふ果が少量伴っていた。

IV区9号建物：桶内からアサが破片も含めて約1400点産出し、アワが少量伴っていた。

[水洗試料]

同定した結果、木本植物では、針葉樹のスピナ炭化葉とマツ属葉・炭化葉の2分類群、広葉樹のコナラ殻とクワ属核、フサザクラ種子、ニワトコ核の4分類群、草本植物では、アサ核とミズ属果実、ソバ果実、イヌタデ果実、タムソバ果実、スベリヒユ属種子、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、ケクマン属種子、タケニグサ種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、スミレ属種子、ウド核、オカトラノオ属種子、トウバナ属果実、シソ属果実、ナス属種子、オミナエシ属果実、キク科果実、イヌビエ属有ふ果・炭化種子、イネ籾殻、エノコログサ有ふ果、オオムギ炭化果実・炭化種子、オオムギコムギ炭化種子、イネ科果実、スゲ属マスカサ節果実、カヤツリグサ属果実の29分類群、シダ植物のワラビ羽片または裂片1分類群の計36分類群が得られた。これ以外に識別点を欠く一群を同定不能炭化種実、科以下に分類できない芽をまとめて不明芽とした。植物遺体以外には炭化した子嚢菌が得られた。

試料No.1~7から産出した分類群では、全体的に木本植物は少なく、草本植物が主体の組成で、採取地点による偏りは特にみられなかった。栽培植物であるアサが4

試料、ソバが6試料、イネが1試料、オオムギが5試料、オオムギーコムギが2試料に含まれていた。同定結果を表3に示す。

以下に、主要な大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 核 クルミ科

黄褐色で、側面観は広卵形。緻密で硬い。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。一部焦げているものがある。計測を行った191点の大きさは長さ22.8～44.1(平均32.1)mm、幅19.7～35.4(平均25.6)mm、厚さ20.3～25.5(平均23.5)mm。1点のみヒメグルミがあった。

(2) コナラ *Quercus serrata* Murray. 殻斗 ブナ科

灰褐色で、完形ならば他のコナラ属と比べて小さな浅い椀状で、やや内側を向き基部がやや尖る。表面は卵形の鱗片に覆われ、鱗片は同じコナラ節のミズナラやナラガシワよりも細かく小さい。殻斗の壁は薄い。残存長さ3.8mm、残存幅5.6mm。

(3) クワ属 *Morus* spp. 核 クワ科

赤茶褐色で、側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形、断面形は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嚙状の突起を持つ。長さ2.1mm、幅1.6mm。

(4) フサザクラ *Euptelea polyandra* Siebold et Zucc. 種子 フサザクラ科

果皮は黒色、内果皮は白橙色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。基部側方に臍がある。縦に長く粗い網状隆線がある。長さ2.3mm、幅1.2mm。

(5) ウメ *Armeniaca nume* (Siebold et Zucc.) de Vriese 核 バラ科

黄褐色～褐色、卵形で上面観は両凸レンズ形。表面には、全体的に不規則で深く小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。計測可能な24点の大きさは長さ17.5～21.9(平均20.0)mm、幅13.5～19.0(平均16.2)mm、厚さ11.4～15.9(平均13.4)mm。

(6) スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核 バラ科

黄褐色で、上面観はやや扁平な両凸レンズ形、側面観は紡錘形。両側に縫合線があり、浅い溝が入る。表面は平滑。計測可能な2点の大きさは、長さ13.0mm、15.1mm、

幅10.3mm、10.6mm、厚さ6.5mm、7.1mm。

(7) モモ *Amygdalus persica* L. 核・炭化核 バラ科

淡褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。計測を行った128点の大きさは長さ15.7～38.4(平均28.6)mm、幅13.9～29.5(平均21.1)mm、厚さ11.3～25.9(平均15.8)mm。

(8) ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) H.Hara 核 スイカズラ科

黄褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形で基部が尖る。基部に小さな着点があり、縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走る。長さ2.4mm、幅1.6mm程度。

(9) アサ *Cannabis sativa* L. 核・炭化核 アサ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。現場取り上げ試料は長さ4.2mm、幅3.5mm、水洗試料は長さ4.5mm、幅4.0mm。

(10) ソバ *Fagopyrum esculentum* Moench 果実 タデ科

茶褐色で、三稜形。先端部は突出し、稜の端部は翼状に突出する。光沢がある。現場取り上げ試料は長さ8.2mm、幅4.5mm、水洗試料は長さ6.0mm、幅3.7mm。

(11) イヌタデ *Persicaria longisetata* (De Bruyn) Kitagawa 果実 タデ科

黒色で、上面観は三角形、側面観は広卵形。先端部が突出する。果皮は厚く硬い。表面は平滑で他のタデ属より光沢がある。また稜となる部分が幅広である。大きさは他のタデ属より小さい。長さ1.9mm、幅1.2mm程度。

(12) スベリヒユ属 *Portulaca* spp. 種子 スベリヒユ科

黒色で、上面観は扁平、側面観は円形。全体的にいぼ状の突起がある。「0」の字状になり先端に着点がある。長さ0.9mm、幅0.9mm程度。

(13) アカザ属 *Chenopodium* spp. 種子 アカザ科

黒色で、上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突起し、中心部方向にむかって浅い溝がある。長さ1.3mm、幅1.2mm程度。

(14) カタバミ属 *Oxalis* spp. 種子 カタバミ科

黒褐色で、上面観は扁平、側面観は卵形。横方向に敵

第4章 調査の成果とまとめ

状の隆起がある。種皮はやや薄く、柔らかい。長さ1.5mm、幅1.1mm程度。

(15) エノキグサ属 *Acalypha* spp. 種子 トウダイグサ科

黒色で、上面観は円形、側面観は倒卵形。表面には細かい網目模様があり、光沢がなく、ざらつく。種皮の断面は櫛状で、薄く硬い。長さ1.6mm、幅1.2mm程度。

(16) オカトラノオ属 *Lysimachia* spp. 種子 サクラソウ科

黒色で、上面観は楕円形、側面観はいびつな長方形。表面には隆線が顕著な網目模様がある。腹面中央部に縦方向の着点がある。長さ1.4mm、幅1.2mm。

(17) シソ属 *Perilla* sp. 果実 シソ科

赤茶色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には浅い多角形の網目模様がある。長さ1.6mm、幅1.4mm。
(18) イヌビエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果・炭化種子 イネ科

有ふ果は暗褐色で、紡錘形。横方向に細かい顆粒状の模様がある。壁は薄く弾力がある。長さ3.0mm、幅2.0mm。種子は側面観が卵形ないし楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の2/3程度と長い。栽培種のヒエよりやや細長い形状ではあるが、野生種のイヌビエよりはやや丸い形状のため、イヌビエ属の同定にとどめた。長さ1.7mm、幅1.2mm。

(19) イネ *Oryza sativa* L. 籾・炭化籾・炭化種子 イネ科

籾は黄褐色～淡褐色で、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。7.2mm、幅3.6mm。種子の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝があり、中央がやや盛り上がる。破片の場合は基部を1点として計数した。

(20) キビ *Panicum miliaceum* L. 有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子 イネ科

有ふ果は黄褐色、球形で先端は丸く、内顎側が膨らむ。表面は平滑。長さ3.0mm、幅2.6mm程度。種子の側面観は円形～卵形で先端がやや窄まる。断面は片凸レンズ形で厚みがある。胚の長さは全長の1/2程度と短く、幅が広いうちわ型。長さ2.0mm、幅1.8mm程度。

(21) アワ *Setaria italica* P. Beauv. 有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子 イネ科

有ふ果は茶褐色で紡錘形。内顎と外顎に独立した微細な乳頭突起がある。長さ2.3mm、幅2.0mm程度。種子の上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の2/3程度。長さ1.6mm、幅1.4mm程度。

(22) エノコログサ *Setaria viridis* (L.) P. Beauv. 有ふ果 イネ科

赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が顕状を呈する。長さ2.5mm、幅1.3mm。

(23) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化果実・炭化種子 イネ科

果実の上面観は円形、側面観は紡錘形で、下端が突出する。縦方向に筋がある。現場取り上げ試料は長さ8.4mm、幅3.5mm、厚さ4.2mm程度。水洗試料は長さ6.5mm、幅2.2mm、厚さ2.7mm程度。種子の側面観は長楕円形、断面は円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は楕円形～円形となる(Jacomet, 2006)。現場取り上げ試料は長さ5.7mm、幅2.5mm、厚さ3.0mm程度。水洗試料は長さ5.2mm、幅2.8mm、厚さ2.5mm程度。破片や変形などによりオオムギかコムギかを明確に識別できなかった一群をオオムギ・コムギとした。

(24) コムギ (パンコムギ) *Triticum aestivum* L. 炭化種子 イネ科

上面観・側面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい傾向がある。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる(Jacomet, 2006)。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部分(幅の広い部分)が基部付近に来る。長さ3.8mm、幅2.8mm、厚さ3.0mm程度。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。

(25) イネ科 Gramineae sp. 果実

茶褐色で、上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。先端が

突出する。縦方向に筋がある。属以下の同定はできなかった。長さ1.6mm、幅0.7mm。

(26) カヤツリグサ属 *Cyperus* sp. 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、側面は狭倒卵形、断面観は三稜形。先端および基部が突出する。表面に微細な模様がある。長さ1.3mm、幅0.6mm。

(27) ワラビ *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn subsp. *japonicum* (Nakai) A. et D. Löve 羽片・裂片 コバノイシカグマ科

暗褐色で、裂片は長楕円形、鈍頭で全縁。葉脈は2～3叉状分岐し、平行に並ぶ。羽片の軸の表面には溝があり、流れ込み型。長さ5.0mm、幅3.0mm。

3. 考察

現場取り上げ試料と水洗試料に分けて考察を行う。

[現場取り上げ試料]

利用された植物として、栽培植物であるモモとアンズ、ウメ、スモモ、カキノキ属A・B、アサ、ソバ、アズキ、キュウリ、ウリ属メロン仲間、カボチャ、ウリ属ヒョウタン仲間、エゴマ、ナス、ゴボウ、ヒエ、イネ、キビ、アワ、オオムギ、コムギがあげられる。出土した種実ほとんど栽培植物であったため、これらの栽培植物が遺跡周辺で栽培されていたと推定される。イネとアサソバなどの出土から、稲作と畑作の双方が行われていたと考えられる。なかでも畑作物の産出数は非常に多く、かつ種類数も多いため、周辺では多種の畑作物栽培をしていたと推定される。

オオムギは1号建物の室内や窓床面・底面などから大量に出土し、果実が多いため室内に殻つきのまま保管していたと考えられる。

ソバは2号唐臼では果皮が多く、唐臼を利用して蕎麦粉を作っていた可能性がある。唐臼の付近にはオニグルミやクワの破片も多く、食用植物の加工作業が行われていた場であったのかもしれない。

カボチャは形状の変異が大きく、品種差を示している可能性がある。同様に2号建物の複数の桶内で目立って産出したカキノキ属A・Bも、種が異なる可能性もあるが、両方栽培のカキノキに近い。個体差や品種差の可能性もある。なお、カキノキ属が多く産出した2号建物の

桶は民俗例から人糞尿と蚕糞などを混合して肥料として備蓄されていた用途が考えられており、桶内に複数の栽培植物がみられるのと整合的である。排泄物ならば、カキノキ属は種ごと食用されたと考えられる。

モモやウメ、アンズの核は完形個体が多いが、破片にはネズミ類による動物食痕が付いている個体が含まれていた。ネズミ類によって食されたか、人間によって利用後にネズミ類によって食されたかは不明であった。複数地点から産出しており、モモやアンズなどの果樹が建物周辺に生育していた可能性がある。モモの核には打撃痕が残るものがわずかにあり、核の中の仁を食用にしたと考えられる。特徴的な産出状態として、1号建物の建物北で産出した半胴内のウメは果皮が核に密に付着しており、梅干しであった可能性がある。伴っていたサクラ属サクラ節も同様な方法で保管されていた可能性がある。

アサは多く含まれ、蒔種用の種が産出した可能性もあるが、果実を食用していたか、油に利用していた可能性もある。9号建物の桶内からは1000点を越えるアサが出土し、保管状況を示していると考えられる。同様に保管状況を示す産出状況としては、5000点以上産出した5号建物の5建No.155中の殻付き(有ふ果)のアワや、100点以上産出した4号建物の3号床下のソバ、10号建物の南西隅のイネ鞘がそれに該当する。

アブラナ科には栽培種と野生種があるが、現段階では属以下の同定ができなかった。1号建物の漆桶内に一杯入っていた出土状況から、栽培種の種子を蒔種用に保管していたか、何らかの用途に使用していた可能性がある。

ほかに利用されたか、または利用の可能性がある植物として、野生種のカヤとオニグルミ、ヒメグルミ、クワ、ブナ属、アケビ、マタビ属、キイチゴ属、サンショウ、トチノキ、ブドウ属、ダイズ属、ササゲ属アズキ亜属アズキ型、ササゲ属、マメ科種子、ウドがある。これらのうち、ダイズ属は果序(いわゆるサヤ)の部分が出土しており、種の同定には至らなかったが、大きさからみて栽培種に近い。また、これらの種実のうち、明確な利用痕跡をもつ分類群はオニグルミで、完形や半割、ネズミ類による動物食痕も含まれていたが、ほとんどは道具によって割られた打撃痕を持つものであった。道具を用いてオニグルミを割った場合、オニグルミ核の上下端が欠け、打撃痕が残ることが多い。ただし、道具を用いずに

手で半分に割った場合には打撃痕は残らないため、半割の状態の核が自然に割れたか人為による割れかは判断できなかった。オニグルミは川沿いに生育する落葉高木であるが、民家周辺に植栽されることもあり、完形や動物食痕をもつ個体の出土状況から判断して本遺跡のごく近くに生育していたと推定される。

周辺の植生を示す分類群として、スギやクロマツ、イタヤカエデなどの高木、タラノキなどの中高木、ニワトコなどの低木が産出したが、周辺植生からもたらされたと考えられる本本植物は量的に少なく、かつこれらは偶発的に入り込んだと推察される。草本植物は種類数が多いが、栽培植物を除くと木本植物と同様に産出量は少ない。10号建物には抽水植物であるホタルイ属がやや多く産出している状況から、近くに池のような水のたまる場所があったと想定される。

[水洗試料]

24号畑の耕作土からは草本植物を主体とする多種類の未炭化および炭化種実が得られた。このうち、明らかな栽培植物はアサとソバ、イネ、オオムギである。量的にはアサとソバがやや多かった。同試料を用いて行った花粉分析でも、アサ科とソバ属、イネ属の花粉が産出しており（花粉分析の項参照）、種実の同定結果と矛盾しない。分析した土壌が何年分の栽培植物の種実を含んでいるかは不明であるが、複数の栽培植物がみられる状況から、24号畑では特定の作物を生育していたのではなく、複数の作物を輪作していた可能性がある。ただし、イネは陸稲の可能性はあるが、畑の肥料として籾殻を畑内に入れた可能性も考えられる。イヌビエ属やクワ属には栽培種も含まれるが、量的に少なく、形状からは明瞭に区別できなかった。イヌビエ属の一部とオオムギおよびオオムギコムギは炭化しており、畑で生育していたものが焼かれたか、近くで利用されて火を受けたものが耕作土に流れ込んだと推定される。スギとマツ属の葉は炭化しているものが含まれているため、燃やされて肥料として耕作土に入れられた可能性があるが、意図的に入れたか、自然に流れ込んだかは不明である。

周辺環境の林縁要素としては、コナラやフサザクラといった高木やニワトコなどの低木が生育していたと思われるが、産出量が少ないため、畑のごく近くには生育し

ていなかったと推察される。草本植物では畑内および周辺に畑作雑草であるアカザ属やスベリヒユ属、ウシハコベ、カタバミ属、エノキグサ属などが生育していたと考えられる。またその周辺の陽の当たる場所にはタケニグサやオミナエシ属、ワラビが生育していたであろう。

通常の遺跡では畑内の生の種実が酸性土壌のため、分解されて残らない。東宮遺跡の24号畑は、火山灰に瞬時に埋没した特殊な環境下でかつ地下水位が高い場所であったため、通常の場合の種実の解析では不明である耕作物や周辺の植生についての検討が可能であった。近世における畑の利用を知る上で貴重な試料であるといえる。

引用文献

- Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.

表1 現地取り上げ試料の大型植物遺体同定結果 (括弧は破片を示す)

区域	出土遺物	出土位置	グリッド	セニグルミ科	セモ科	ウメ科	アズミ科	クリ果実	その他	
I区	1号建物	遺跡内		(2)				(1)		
		2号土坑内						(1)		
		跡1棟							(1)	
		跡1棟、遺跡								?? 不明, 不明果実***
		2号施設床下		1					(5)	??の種子1
		カマド、カマド裏下								
		2号床下		1						
		3号床、3号床下、		1 (3)	3	2	1	1 (3)		同定不能種実 (1)
		3号埋め蓋								
		4号床、4号床下、			(3)	1	1 (2)			材料 炭化果実5, 同定不能
		4号床脇								
		5号床下、6号床下			(4)	2 (2)				
	7号 (No.272) 付近					1				
	2号建物	馬房内		(2)						
		馬房西1号棟		(1)	(1)					類り方
		馬房西2号棟			(1)					
		馬房南棟			(1)					
		馬房南西隅		(1)	1					F/C 炭架片 (1)
		5号棟下、周辺				(1)				
	タガ、桶底									
		周辺			(1)					物??球実
	4号建物	跡1棟			(1)					
		3号床、3号床下	S7区 C-6		(2)	3 (6)		1 (3)		?? 果実****, ?? 不明果実3, 不明果実 (3), 不明種実 (1)
	8号建物				(2)	(1)				?? 不明果実, 不明果実
							12			?? 不明果実, 不明果実
	1号屋敷	平削 (1号屋敷) 内								
		裏庭 (跡1号付近、1号敷)		2 (4)	1			1		見出**
		北、北外								
北外、西山					(1)				?? 不明果実, 不明果実, 不明果実 (1), 不明果実 (1)	
5号建物	跡庭 (トレンチ内)			(1)	(2)					
	1号土坑				1 (1)					
4号溝	1号床下				7			2 (1)	?? の種子 (2)	
	跡1号西下木間内	S2区 B-8							炭化種	
		S2区 C-6	(1)	1 (1)					?? の種子1	
		S2区 D-6		2					カヤ種子1	
8号溝	4号建物裏		1 (3)	2						
	付近、南壁		(3)	5 (2)			(2)			
1号土坑			(4)	5 (3)			(1)			
1号溝				1						
5号溝、敷地			1	(2)						
4号石垣	東		(1)	1 (1)						
	馬房中央	S2区	(1)	1						
		S2区	9-25						?? 不明果実242, イヌビエ属不明果実37	
			A-6,7,8	(2)	3 (1)		2			
			B-2,6,7,8	2 (13)	4 (2)		2 (1)	(5)		
			C-5,7	(1)	2 (8)					
			C-6	2 (28)	14 (18)	1 (1)	31 (8)		?? 不明果実1, 不明果実?? の不明種子4, 不明種子38 (2)	
			D-2,3,6	(18)	10 (3)	2	2			
			E-2,3,5,7	(3)					?? 不明果実	
	II区	7号建物	土間		1			1		
III区	9号建物	桶 (No.30) 内							?? 不明果実 (5/3), ?? 不明果実?	
		裏庭				1				
	カマド脇埋込内						1			
合計				11 (143)	73 (59)	20 (3)	43 (16)	5 (22)		

*1-9, **10-49, ***50-99, ****100以上

表2 現地取り上げ試料の大型植物遺体同定結果（括弧は破片を示す）

分類群	地区		I区										合計				
	出土遺構		1号建物					2号建物						3号建物		10号建物	
	部位/位置	遺構内/空内 灰層下/3階 墓、灰底層	1号棟、1号 床下	2号棟、1号 土台柱下	1号棟	2号棟	3号棟	4号棟	8号棟	9号棟	3号棟、南 内下	北、南、西内溝、 溝底					
カヤ	種子											(1)	(1)				
スギ	茎												(1)	(1)			
オニグルミ	核	(1)	(7)	(20)								(1)	(2)	1 (3)			
ナリ	果実	(6)		(34)										(40)			
ブナ属	果実	1												1			
タワウソ	核	16 (1)			3					6		9 (3)		34 (4)			
アケビ	種子				5	11								16			
マタタビ属	種子											1 (1)		1 (1)			
モモ	核		1	2										3			
ウメ	核											(1)		(1)			
アズキ	核			3										3			
ササガ属サタケ類	核				2									2			
キイチゴ属	核											7		7			
サンショウ	種子	(1)												(1)			
イタヤカエデ	種子								1					1			
イロハモミジ近縁種	果実				1									1			
トチノキ	種子													(2)			
ブドウ属	種子									1				1			
タラノキ	核												2	2			
カキノキ属A	種子	(1)		1	4 (2)					1				5 (3)			
カキノキ属B	種子				33 (18)	40 (27)	9 (7)			35 (13)	10 (6)			83 (53)			
ニワトコ	核													1			
アザ	核	1 (7)		(1)	41 (3)	1						(37)	1	44 (88)			
	炭化核	(1)												(1)			
ミズ属	果実												1	1			
ソバ	果実	1 (3)		10 (42)								11 (21)	(1)	22 (67)			
イヌタデ	果実				1	1							3	5			
タニソバ	果実		1		1							1 (2)	3 (2)	5			
ササノタデ、オオイヌタデ	果実													1			
ホシトケタデ	果実												2	2			
ヤマゴボウ属	種子			3										3			
スベリヒユ属	種子												1	1			
ノミノフスマ	種子												1	1			
ウシハコベ	種子												2	2			
アカサ属	種子					17	1					11		29			
タケノグサ	種子												2	2			
キケマン属	種子												9	9			
オランダイナゴ属ヘビイチゴ	核											10 (2)	10 (2)	20 (2)			
キジシロ属	果実		1										9 (2)	10 (2)			
アズキ	炭化種子	1												1			
ササガ属アズキ近縁アズキ型	炭化種子	6												6			
ササガ属	炭化種子	(1)												(1)			
ハク属	炭化種子	1												1			
マメ科	炭化種子	1												1			
カタバミ属	種子											1		1			
エノキグサ属	種子				1									1			
ネウオリ	種子				1									1			
ウリmelon仲間	種子	2 (1)		4	7 (1)	1								14 (2)			
ウド	核											1		1			
アカネ属	炭化種子	2												2			
エゴマ	果実				8									8			
ナス	種子	5		2	27 (3)	75 (3)								309 (6)			
ナス属	種子				1									1			
オミナシ属	果実											1		1			
タカサバウ	果実											1		1			
メナモミ属	果実											2		2			
ゴボウ	果実											(1)		(1)			
ホツモ	種子											3		3			
ヒユ	果実				1					2		7 (1)		10 (1)			
	炭化果実	1												1			
イヌビエ属	有ふ果					1								1			
イヌビエ属-キビ属	有ふ果	7	****	3 (1)	(1)									**** (4)			
イネ	炭化精	1 (1)												1 (1)			
	炭化種子	1 (2)												1 (2)			
アワ	有ふ果					2						20 (12)	6	238 (12)			
	炭化有ふ果	85 (4)												85 (4)			
	炭化種子	7 (1)												7 (1)			
アワ-キビ	有ふ果									****				****			
エノコログサ属	有ふ果	1										21		22			
オオムギ	炭化果実	3426 (115)												3426 (115)			
	炭化種子	2322 (264)										(1)		2322 (265)			
コムギ	炭化種子	2												2			
キビ	有ふ果			1	5 (2)							2 (2)	15 (2)	23 (6)			
	炭化有ふ果	2												2			
	炭化種子	2												2			
メヒシバ属	果実												1	1			
オヒシバ	種子											2		2			
カヤツリグサ属	果実											13		13			
ホタルイ属	果実				1							33 (1)		34 (1)			
スゲ属	果実												10	10			
スギノ近縁種	地下茎				1									1			
不明	茎												1	1			
計														****			
合計		3085 (443)	3**** (7)	29 (111)	362 (30)	333 (32)	9 (7)	39 (13)	26 (42)	245**** (72)	183**** (26)			6880 (326)			

* : 1-9, ** : 10-49, *** : 50-99, **** : 100以上

表3 水洗試料の大型植物遺体同定結果 (括弧は破片を示す)

分類群	遺体	24時							
		1	2	3	4	5	6	7	7
分組群	部位/水洗物	300cc	300cc	300cc	300cc	300cc	300cc	300cc	一括
マツ属	炭化葉	(1)	(1)						
マツ属	葉			(1)	(2)	(1)	(1)		
コナラ	殻斗		(1)						
クワ属	核		1		2	2			2
フササクラ	種子	1							
ニワトコ	核			1					
アザ	核		(3)	(6)		(16)	(11)		
ミズ属	果実						1		
ソバ	果実	(2)	(1)	(1)	(1)	(6)	1 (5)		
イヌタデ	果実	3		4	2		3	1	
タニソバ	果実	3	1	5	1 (3)		4	4	1
スベリヒユ属	種子	12	3 (1)	3	3	7		11 (1)	2
ノミノフスマ	種子	1	1		1				
ウシハコベ	種子	17	7 (1)	21 (1)	12	15	12 (1)	3 (2)	5
アカザ属	種子	8 (2)	7 (6)	7 (2)	7 (3)	9 (5)	9 (2)	7 (1)	5
キクマン属	種子	1				2	1	1	
タケニグサ	種子	1 (2)			(2)			(1)	
カタハミ属	種子	1			1 (1)				
エノキグサ属	種子	(3)		(2)	1 (3)	(2)	1	(2)	
スミレ属	種子				1	(1)			
ウド	核								1
オカトラノオ属	種子	1							
トウバナ属	果実	1	1				1		
シソ属	果実	1							
ナス属	種子							1	
オミナシ属	果実				2		1		
キク科	果実			1					
イヌビエ属	有ふ果		3				1		
イネ	炭化種子		1				1		
エノコログサ	有ふ果	(1)							
オオムギ	炭化果実	1 (2)	1	1		1 (1)	2 (1)		2
	炭化種子		1	(1)	1				1
オオムギ・コムギ	炭化種子				1		1		
イネ科	果実	7	4	5	9	6	5		
スゲ属マスカサ郎	果実		1						
カヤウリグサ属	果実	9	8	1	8	4	3	2	
ウラボ	玉貯・破片	+	++	+	++	++	++	++	
同定不能	炭化種実					(1)			
芽	不明芽	1	1				1		
子嚢菌	炭化子嚢	+	+	+	+	+	+		

+ : 1-9, ++ : 10-49

第4章 調査の成果とまとめ

付表1 現地取り上げ試料の大型植物遺体同定結果 (括弧は破片を示す)

試料 No.	区	同定No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	オニグルミ 核	モモ 核	ウメ 核	アズキ 核	タリ 実実	その他
1	1区								1		
2	1区		1号建物	表外、西口							※ 実実+、(4種) (1)
3	1区				520K	C-5		1			
4	1区				520K	C-6	1 (12)	5 (2)			
5	1区				520K	C-6		1	27 (1)		
6	1区				520K	C-7	(1)	1			
7	1区				520K	C-6	(2)		(1)		
8	1区				520K	C-6		1 (1)		(2)	
9	1区				520K	C-7		(8)			
10	1区				520K	E-7		2			
11	1区				520K	E-2	(1)				
12	1区				520K	E-3		(1)			
13	1区				520K	D-6		3 (1)			
14	1区	同敷1-20			520K	E-2					炭核類
15	1区				520K	B-2	(2)				
16	1区				520K	E-2					炭核類
17	1区				520K	E-3	(1)				
18	1区				520K	B-2				(1)	
19	1区				520K	B-3		1			
20	1区				520K	B-2		1			
21	1区				520K	E-5		1			
22	1区				520K	B-6			1		
23	1区				520K	A-6		1			
24	1区				520K	B-8	(1)				
25	1区				520K	C-6		2			
26	1区		4号溝		520K	C-6		2 (1)	1 (2)		
27	1区		4号溝		520K	C-6	(1)	1 (1)			
28	1区		4号溝		520K	C-6					別表
29	1区	同敷1-47			520K	B-8					※ 木種子1
30	1区		1号溝							(1)	
31	1区		4号溝		520K	D-6		1			
32	1区				520K	A-8		1			
33	1区		1号建物	北							??炭核類(青木炭核類)
34	1区		1号建物	1号床			(2)				
35	1区		1号建物	奥屋西2号床				(1)			
36	1区				520K	D-5	(7)		1		
37	1区		1号建物	2号床下			1				
38	1区		1号建物	1号床下			(1)				
39	1区		4号溝		520K	D-6		1			
40	1区		1号建物	4号床	520K		(1)	1			
41	1区		1号建物	カマド裏下						(5)	
42	1区		1号建物	1号床下				1			
43	1区		1号建物	奥屋1号床脇			1 (1)	1			
44	1区		1号建物	4号床下			(1)				
45	1区		1号建物	5号床下				1			
46	1区		4号溝	3号床						1	
47	1区		1号建物	2号施設床下			1				
48	1区		4号溝	3号床下							石類 (4)
49	1区		1号建物	奥庭			(1)				
50	1区		1号建物	室内							別表
51	1区		4号建物	3号床下				(1)			
52	1区		4号建物	3号床下					1		
53	1区		4号建物	3号床下						1	
54	1区	同敷1-5			520K	C-6	(1)				※ 実実
55	1区	同敷2-26	3号建物	1号床下					1		※ 木種子 (1)
56	1区		3号建物	1号床下							※ 木種子 (1)
57	1区		1号建物	3号床 (1建70)			(1)				
58	1区	同敷1-19	1号建物	1建27下				1			
59	1区		4号建物				(2)	(1)			
60	1区		1号建物	3号床下						(2)	
61	1区		1号建物	3号床下					1		
62	1区		1号建物	3号床下			(1)	2	1	1 (5)	
63	1区		1号建物	4号床下			(2)				
64	1区				520K	C-6	(2)	1		(1)	
65	1区		1号建物	4号床下					1 (1)		
66	1区		1号建物	3号床下						(2)	
67	1区		1号建物	6号床下			(3)				
68	1区		1号建物	3号埋込溝			1				
69	1区		1号建物	4号床下							※A 炭化果実
70	1区		1号建物	3号床下				1			
71	1区		1号建物	奥庭			1 (2)		1		
72	1区		1号建物	奥、北庭							別表
73	1区		1号建物	3号床下							同定不能種実 (1)
74	1区				520K	B-6	(8)	2 (2)	1 (1)		
75	1区				520K	C-6	1 (12)	5 (14)	4 (4)		※同敷1-19の仲間種子4、※木種子8 (2)
76	1区				520K	A-6			1		
77	1区	同敷2-25	1号建物	カマド							※の種子1

第4節 自然科学分析成果

試料 No.	区	図面No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	タリッド	オニグルミ				クワ 果実	その他
						種	枚 数	ウメ 核	アズビ 核		
78	I区		1号建物	1号床		(4)					
79	I区		1号建物	天明下	325K B-2	(2)	1	1			
80	I区		1号建物	3号床下		(1)					
81	I区		1号建物	2号床1号内							別表
82	I区		1号建物	6号床下			1				
83	I区		1号建物	2号床1号点下		(2)					
84	I区		8号建物	トレンチ		(1)					
85	I区		1号建物	2号床1号内		(8)	1	1			
86	I区		8号建物	トレンチ		(1)	(1)				
87	I区		1号建物	2号床1号内		(6)	1				
88	I区		1号建物	トレンチ		(1)	(2)				
89	I区		4号溝			(1)	1 (1)				
90	I区		1号建物	6号床下地山中		(1)					
91	I区		1号建物	馬房前面溝		(1)	1				
92	I区		4号溝	付近		(2)					
93	I区		1号建物	3号床下地山中		(3)		1			
94	I区		4号溝			(4)	3				
95	I区		1号建物	馬房前		(2)					
96	I区		3号建物	1号施設地山中			1 (1)				
97	I区		4号溝	4号建物前		1 (6)	2				
98	I区		4号溝				(1)				
99	I区		4号溝	南壁		(3)	1	(2)			
100	I区		2号建物	3号桶							餅月団種子4 (5)
101	I区		2号建物	1号桶							餅月団種子5 (4)
102	I区		2号建物	8号桶							石網(13号)、餅月団種子2
103	I区		1号建物	6号床地山中			(2)				
104	I区	図面1-14+16	3号建物	押入下桶内			7				石炭化種
105	I区		1号建物	前庭(トレンチ内)			(1)				
106	I区				325K B-4	(2)					
107	I区				325K B-5	(1)					
108	I区				325K B-6	1					
109	I区		1号建物	馬房西1号桶側方		(1)	(1)				
110	I区		1号建物	馬房前桶			(1)				
111	I区		8号溝			(1)	2 (2)				
112	I区		8号溝			(13)	3 (1)	(1)			
113	I区		2号建物	桶近							
114	I区		5号建物	1号床下			1				1 (1)
115	I区		4号建物	3号床下							※ 果実***、残虫あり
116	I区		1号建物	竈底直							別表
117	I区		1号建物	2号床1号内							別表
118	I区		1号建物	室内天明記床下							別表
119	I区		2号建物	2号桶							別表
120	I区		2号建物	4号桶							別表
121	I区		2号建物	1号桶							別表
122	I区		5号建物	3号床、箱 (No.155) 内							??・紅 有ふ果***、1?2?? 有ふ果*
123	I区		2号建物	4号桶							餅月団種子8 (8)
124	I区		2号建物	1号桶							別表
125	I区		1号建物	竈、西							別表
126	I区		4号建物	3号床下							不明種実 (1)
127	I区		1号建物	竈底直							別表
128	I区		2号建物	8号桶の中							竹炭桶
129	I区		4号建物	3号床下							石網(5)、? #9果実
130	I区		2号建物	2号桶							餅月団種子12 (5)
131	I区		2号建物	3号桶							餅月団種子5 (2)
132	I区		5号建物	3号床、箱 (No.155) 下	325K	(1)	1				別表
134	I区		1号建物		315K Q-23						??有ふ果242、イヌビロ有ふ果37
135	I区		1号土坑				1				
136	I区				325K B-5	(1)	1 (1)	1			
137	I区		1号建物	4号床下		(4)		(1)			
138	I区		4号建物		325K C-6		1 (4)		(1)		
139	I区	図面1-3	2号建物		425K B-23	(1)					???種実1
140	I区		1号建物	竈庭、街1隣付近							昆虫**
不明	I区		1号建物	竈、床直							別表
141	I区		7号建物	土器			1				
142	I区	図面1-18	9号建物	9号床1号付近				1			
143	I区		9号建物	竈直				1			
144	I区		9号建物	桶 (No.30) 内							???箱00 (363)、??有ふ果?
145	I区		10号建物	床直上		1					
146	I区		10号建物	南東		(1)		(1)			
147	I区		10号建物	南							別表
148	I区		10号建物	中							別表
149	I区		10号建物	南西隅							白網***
150	I区		10号建物	北							別表
151	I区	455	1号建物		325K A-6			1			
152	I区	122	4号建物		325K B-7		1				

第4章 調査の成果とまとめ

試料 No.	区	国営(公) 遺物(名)	出土遺構	出土位置	タリッド	モノグルミ				クワ 調査	その他
						横	横	ウメ 横	アズ 横		
153	1区	123	4号建物		S25C	C-6		(1)			
154	1区	456	1号建物		S25C	B-5					試料なし
155	1区	124	4号建物		S25C	A-6		1			
156	1区	125	4号建物		S25C	A-7	(1)				
157	1区	126	4号建物		S25C	A-7		(1)			
158	1区	127	4号建物		S25C	A-7	(1)				
159	1区	63	1号層敷		S25C	D-5	(1)				
160	1区	457	1号建物		S25C	D-5	(1)				
161	1区	458	1号建物		S25C	D-5	(1)				
162	1区	459	1号建物		S25C	D-5	(1)				
163	1区	460	1号建物		S25C	D-5			1		
164	1区	461	1号建物		S25C	E-5	(1)				
165	1区	462	1号建物		S25C	B-2	1				
166	1区	463	1号建物		S25C	B-2				(4)	
167	1区	67	2号建物	2階上				(1)			
168	1区	66	2号建物	9号袖内				1			
169	1区	210	1号建物	漆桶 (No.210) 内			(2)				
170	1区	464	1号建物	1号床							剪表
171	1区	465	1号建物	4号風廊							測定不能 2号土坑 (1)
172	1区	128	4号建物	北外							
173	1区		5号堀					(1)			
174	1区		4号石垣	東			(1)				
175	1区	8	4号石垣	東				1			
176	1区	7	2号層敷					(1)			
177	1区	454	1号建物	溝1車			(1)				
178	1区	8	2号層敷				1				
179	1区	9	4号石垣	東				(1)			
180	1区	453	1号建物	溝1車						(1)	
181	1区	466	1号建物	漆桶 (No.209) 内							77-99H1, 3埋入***
182	1区	16	1号層敷	平敷 (1号層敷16) 内					12		9号堀付遺構
183	1区	国営2-41	2号建物	9号袖下, 側辺	425C	B-23					9号堀東岸 (1)

第4章 調査の成果とまとめ

表3 クルミ振核の計測・形状分類結果（長さは復元値含む、折爪は破片を示す、微小破片は除く）

no.	区	回廊No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
4-1	1区				S2K-C-6	1	動物食痕	32.4	-	23.3	アカネズミ、産卵として計数
4-2	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	37.6	25.3	-	底部欠損
4-3	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	33.8	27.1	-	底部欠損
4-4	1区				S2K-C-6	(1)	平削	32.6	25.4	-	
4-5	1区				S2K-C-6	(1)	平削	31.9	23.5	-	
4-6	1区				S2K-C-6	(1)	平削	31.7	26.5	-	
4-7	1区				S2K-C-6	(1)	平削	33.2	25.4	-	
4-8	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、約1/2、底部欠損
4-9	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、約1/2、左側欠損
4-10	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、約1/2、底部左以上両欠損
4-11	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、約1/3
4-12	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、約1/3
4-13	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、約1/4
6	1区				S2K-C-7	(1)	打撃痕	39.5	31.4	-	約1/2、舌欠損
7-1	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	33.0	24.6	-	底部欠損
7-2	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	30.9	24.5	-	底部欠損
11	1区				S2K-B-2	(1)	打撃痕	31.8	24.0	-	右側半分
15	1区				S2K-B-2	(1)	不明	-	-	-	計測不可、約1/2
17	1区				S2K-B-3	(1)	動物食痕?	-	-	-	計測不可、約1/4
24	1区				S2K-B-8	(1)	打撃痕	31.4	27.8	-	底部欠損
27	1区		4号溝		S2K-C-6	(1)	平削	33.7	24.1	-	
34-1	1区		1号建物	1号床	(1)	打撃痕	32.5	24.4	-	底部欠損	
34-2	1区		1号建物	1号床	(1)	打撃痕	28.0	23.9	-	底部欠損、表面熱痕	
36-1	1区				S2K-B-5	(1)	打撃痕	31.7	27.0	-	底部欠損
36-2	1区				S2K-B-5	(1)	打撃痕	33.9	24.1	-	底部欠損
36-3	1区				S2K-B-5	(1)	平削	35.0	28.4	-	
36-4	1区				S2K-B-5	(1)	平削	31.2	23.0	-	
36-5	1区				S2K-B-5	(1)	打撃痕	33.5	23.8	-	底部欠損
36-6	1区				S2K-B-5	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、全周欠損
36-7	1区				S2K-B-5	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、全周欠損
37	1区		1号建物	2号床下	1	産卵	31.3	24.7	-	現状では割れ	
38	1区		1号建物	1号床下	(1)	打撃痕	31.4	26.3	-	約1/2	
40-1	1区		4号床		S2K	(1)	打撃痕	33.3	25.4	-	底部欠損
40-2	1区		4号床		S2K	(1)	平削	32.6	22.8	-	
40-3	1区		4号床		S2K	(1)	平削	32.7	23.1	-	
40-4	1区		4号床		S2K	(1)	平削	32.1	25.2	-	
40-5	1区		4号床		S2K	(1)	平削	31.9	25.2	-	
40-6	1区		4号床		S2K	(1)	平削	33.4	25.5	-	
40-7	1区		4号床		S2K	(1)	平削	32.0	25.1	-	
40-8	1区		4号床		S2K	(1)	平削	34.1	24.2	-	
40-9	1区		4号床		S2K	(1)	平削	32.9	24.7	-	
40-10	1区		4号床		S2K	(1)	平削	33.5	23.2	-	
40-11	1区		4号床		S2K	(1)	平削	31.2	24.1	-	
43-1	1区		1号建物	裏庭1号床脇	1	産卵	31.9	24.7	-	現状では割れ	
43-2	1区		1号建物	裏庭1号床脇	(1)	平削	31.0	24.0	-		
44	1区		1号建物	4号床下	(1)	打撃痕	31.0	23.0	-	底部欠損	
47	1区		1号建物	2号施設床下	1	産卵	32.2	26.6	23.4		
49	1区		1号建物	裏庭	(1)	平削	33.9	24.3	-		
54	1区				S2K-C-6	(1)	平削	33.4	25.6	-	
57	1区		1号建物	1号70上	(1)	平削	29.9	23.1	-		
59-1	1区		4号建物		(1)	平削	33.4	22.0	-		
59-2	1区		4号建物		(1)	平削	29.3	24.2	-		
62	1区		1号建物	3号床下	(1)	平削	33.9	28.4	-	舌欠損	
63-1	1区		1号建物	4号床下	(1)	平削	30.6	24.2	-		
63-2	1区		1号建物	4号床下	(1)	平削	33.4	22.4	-		
64-1	1区				S2K-C-6	(1)	平削	35.1	26.6	-	
64-2	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、表面熱痕
67-1	1区		1号建物	6号床下	(1)	打撃痕	30.2	31.1	-	右側欠損	
67-2	1区		1号建物	6号床下	(1)	打撃痕	30.8	26.1	-	底部欠損	
67-3	1区		1号建物	6号床下	(1)	打撃痕	35.0	-	-	底部欠損	
68	1区		1号建物	3号廊下裏	1	産卵	28.8	24.6	24.1		
71-1	1区	回廊1-8-9	1号建物	裏庭	1	動物食痕	31.2	-	22.8	アカネズミ	
71-2	1区	回廊1-8-9	1号建物	裏庭	(1)	打撃痕	34.9	26.5	-	底部欠損	
71-3	1区		1号建物	裏庭	(1)	動物食痕?	-	-	-	計測不可、アカネズミ	
71-1	1区				S2K-B-6	(1)	平削	31.1	25.6	-	
71-2	1区				S2K-B-6	(1)	平削	35.3	25.2	-	
71-3	1区				S2K-B-6	(1)	打撃痕	31.5	23.8	-	底部欠損
71-4	1区				S2K-B-6	(1)	平削	32.1	26.8	-	
71-5	1区				S2K-B-6	(1)	打撃痕	29.8	25.3	-	左上欠損
71-6	1区				S2K-B-6	(1)	平削	32.8	24.1	-	
71-7	1区				S2K-B-6	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可、アカネズミ、全周欠損
71-8	1区				S2K-B-6	(1)	動物食痕	-	-	-	計測不可、約1/2
71-11	1区				S2K-C-6	1	動物食痕	29.1	27.2	25.5	約1/4、不明、リスア、約1/2
71-2	1区				S2K-C-6	(1)	動物食痕	33.4	23.8	-	約1/4
71-3	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	32.4	27.5	-	底部欠損
71-4	1区				S2K-C-6	(1)	平削	31.4	27.0	-	
71-5	1区				S2K-C-6	(1)	平削	30.9	27.3	-	
71-6	1区				S2K-C-6	(1)	打撃痕	29.2	23.9	-	底部欠損

第4節 自然科学分析成果

No.	区	種別No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	歳出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
73-7	1区				52区 C-6	(1)	打撃痕	28.9	24.1	-	底部欠損
73-8	1区				52区 C-6	(1)	打撃痕	28.0	23.9	-	底部欠損
73-9	1区				52区 C-6	(1)	打撃痕	29.1	28.7	-	底部欠損
73-10	1区				52区 C-6	(1)	打撃痕	31.9	28.3	-	底部欠損
73-11	1区				52区 C-6	(1)	打撃痕	29.8	24.2	-	底部欠損
73-12	1区				52区 C-6	(1)	打撃痕	27.1	19.7	-	底部欠損
73-13	1区				52区 C-6	(1)	動物食痕	29.7	-	-	約1/2,アカズミ
78-1	1区	1号建物	1号床			(1)	打撃痕	33.1	24.6	-	底部欠損
78-2	1区	1号建物	1号床			(1)	平削	33.5	24.0	-	
78-3	1区	1号建物	1号床			(1)	打撃痕	31.8	24.1	-	底部欠損
78-4	1区	1号建物	1号床			(1)	平削?	35.9	23.1	-	一部欠
79-1	1区				52区 B-2	(1)	動物食痕	-	-	-	計測不可,アカズミ
79-2	1区				52区 B-2	(1)	動物食痕	-	-	-	計測不可,アカズミ
80-1	1区	1号建物	3号床下			(1)	平削	30.5	23.5	-	
81-1	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	31.6	26.2	-	
81-2	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	33.2	24.9	-	
81-3	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	32.2	26.5	-	
81-4	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	打撃痕	25.3	23.9	-	底部欠損
81-5	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	32.3	26.0	-	
81-6	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	33.0	27.1	-	
81-7	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	30.9	25.1	-	
81-8	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	29.8	24.7	-	
81-9	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	31.8	24.7	-	
81-10	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	30.4	35.4	-	
81-11	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	33.9	24.6	-	
81-12	1区	0803-7	1号建物	2号南内内		(1)	平削	33.3	26.7	-	
83-1	1区	1号建物	唐子支柱下			(1)	打撃痕	30.8	22.9	-	底部欠損
83-2	1区	1号建物	唐子支柱下			(1)	打撃痕	31.5	22.1	-	底部欠損
84	1区	8号建物	8号柱付近			(1)	不明	-	-	-	計測不可,約1/4
85-1	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	32.8	27.2	-	
85-2	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	33.9	27.0	-	
85-3	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	33.2	24.8	-	
85-4	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	30.6	26.3	-	
85-5	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	31.3	25.2	-	
85-6	1区	1号建物	2号南内内			(1)	打撃痕	32.4	26.9	-	底部欠損
85-7	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	29.8	24.7	-	
85-8	1区	1号建物	2号南内内			(1)	動物食痕	-	-	-	計測不可,底部に穴,アカズミ?
86	1区	8号建物	8号柱付近			(1)	打撃痕	29.1	24.5	-	底部欠損
87-1	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	31.6	25.6	-	
87-2	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	28.3	22.7	-	
87-3	1区	1号建物	2号南内内			(1)	打撃痕	32.5	25.7	-	底部欠損
87-4	1区	1号建物	2号南内内			(1)	打撃痕	30.3	25.4	-	底部欠損
87-5	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	33.6	25.1	-	
87-6	1区	1号建物	2号南内内			(1)	平削	31.6	24.4	-	
88	1区	1号建物	Eトレンチ			(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可,左側欠損
90	1区	1号建物	6号床下掘り中			(1)	平削	31.7	26.4	-	
91	1区	1号建物	馬廐南側			(1)	打撃痕	31.2	24.9	-	不明程度割れ
92-1	1区	4号溝	付着			(1)	打撃痕	34.4	24.8	-	底部欠損
92-2	1区	4号溝	付着			(1)	打撃痕	30.2	-	-	表面割れ,約1/2,左側欠損
93-1	1区	1号建物	31号床下掘り中			(1)	打撃痕	34.1	30.3	-	底部欠損
93-2	1区	1号建物	31号床下掘り中			(1)	打撃痕	29.9	27.1	-	底部欠損
93-3	1区	1号建物	31号床下掘り中			(1)	打撃痕	35.3	25.1	-	底部欠損
94-1	1区	4号溝				(1)	打撃痕	28.3	21.1	-	底部欠損?
94-2	1区	4号溝				(1)	不明	32.0	25.3	-	動物食痕?
94-3	1区	4号溝				(1)	平削	33.0	25.5	-	
94-4	1区	4号溝				(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可,全周欠損
95-1	1区	1号建物	馬廐内			(1)	打撃痕	32.3	24.7	-	底部欠損
95-2	1区	1号建物	馬廐内			(1)	打撃痕	30.0	25.6	-	右側欠損
97-1	1区	0803-4 ~ 6	4号溝	4号建物裏		1	不明	32.2	27.8	25.3	
97-2	1区	0803-4 ~ 6	4号溝	4号建物裏		(1)	打撃痕	44.1	32.2	-	底部欠損
97-3	1区	0803-4 ~ 6	4号溝	4号建物裏		(1)	打撃痕	40.0	33.3	-	底部欠損
97-4	1区	0803-4 ~ 6	4号溝	4号建物裏		(1)	打撃痕	37.5	32.8	-	底部欠損
97-5	1区	0803-4 ~ 6	4号溝	4号建物裏		(1)	不明	31.9	28.4	-	右下欠
97-6	1区	0803-4 ~ 6	4号溝	4号建物裏		(1)	平削	31.9	25.7	-	
97-7	1区	0803-4 ~ 6	4号溝	4号建物裏		(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可,全周欠損
99-1	1区	4号溝	南壁			(1)	打撃痕	37.3	34.1	-	底部欠損
99-2	1区	4号溝	南壁			(1)	打撃痕	34.0	24.1	-	底部欠損
99-3	1区	4号溝	南壁			(1)	動物食痕	-	-	-	計測不可,アカズミ
106-1	1区				52区 B-4	(1)	打撃痕	31.4	24.8	-	底部欠損
106-2	1区				52区 B-4	(1)	平削	30.1	26.0	-	
107	1区				52区 B-5	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可,底部欠損
108	1区				52区 B-6	1	不明	30.7	22.4	20.3	
109	1区	1号建物	1号柱付近			(1)	打撃痕	37.9	30.8	-	底部欠損
111	1区	8号溝				(1)	不明	-	-	-	計測不可,約1/2
112-1	1区	8号溝				(1)	打撃痕	40.8	32.5	-	底部欠損
112-2	1区	8号溝				(1)	平削	32.1	25.5	-	
112-3	1区	8号溝				(1)	打撃痕	29.3	25.5	-	打撃部分に右側
112-4	1区	8号溝				(1)	打撃痕	28.2	23.2	-	打撃部分に右側

第4章 調査の成果とまとめ

No.	区	回取No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
112-5	1区		8号溝			(1)	打撃痕	33.0	26.3	-	打撃部分は巻路
112-6	1区		8号溝			(1)	動物食痕	33.1	23.7	-	約1/2, アカネズミ
112-7	1区		8号溝			(1)	平削	32.9	24.8	-	
112-8	1区		8号溝			(1)	平削	31.1	24.8	-	
112-9	1区		8号溝			(1)	打撃痕	30.1	25.0	-	打撃部分は巻路
112-10	1区		8号溝			(1)	平削	30.4	25.7	-	
112-11	1区		8号溝			(1)	打撃痕	36.8	29.9	-	打撃部分は巻路
112-12	1区		8号溝			(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可, 上下右底面欠損
112-13	1区		8号溝			(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可, 右側欠損
110	1区		1号建物	壁底面		(1)	動物食痕?	-	-	-	計測不可, 約1/4
117-1	1区		1号建物	2号溝口		(1)	平削	31.5	25.2	-	
117-2	1区		1号建物	2号溝口		(1)	平削	33.5	25.7	-	
117-3	1区		1号建物	2号溝口		(1)	打撃痕	30.7	26.2	-	前底面欠損
132	1区		馬廄中央		S2区	(1)	平削	32.0	26.5	-	
136	1区				S2区 D-5	(1)	打撃痕	32.1	-	-	前底面欠損
137-1	1区		1号建物	4号床下		(1)	平削	32.5	23.9	-	
137-2	1区		1号建物	4号床下		(1)	平削	32.1	27.7	-	
137-3	1区		1号建物	4号床下		(1)	打撃痕	35.8	26.5	-	前底面欠損
137-4	1区		1号建物	4号床下		(1)	打撃痕	31.2	25.7	-	前底面欠損
139	1区		2号建物		42区 B-23	(1)	打撃痕	31.2	25.2	-	前底面欠損
143	1区		10号建物	床直上		1	完形	29.7	22.8	23.3	
146	1区		10号建物	南東		(1)	打撃痕	28.0	-	-	前底面欠損, ヒメグルミ
148	1区		10号建物			(1)	不明	-	-	-	計測不可
156	1区	125	4号建物		S2区 A-7	(1)	平削	30.6	25.7	-	
158	1区	127	4号建物		S2区 A-7	(1)	打撃痕	32.1	26.1	-	前底面部分欠損
159	1区	63	1号塚敷		S2区 D-5	(1)	平削	29.1	24.2	-	
160	1区	487	1号建物		S2区 D-5	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可, 1/4以下
161	1区	488	1号建物		S2区 D-5	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可, 約1/8
162	1区	489	1号建物		S2区 D-5	(1)	打撃痕	31.1	26.0	-	前底面欠損
164	1区	461	1号建物		S2区 E-5	(1)	平削	32.1	23.5	-	
165	1区	462	1号建物		S2区 B-2	1	完形	31.0	25.4	21.5	
169-1	1区	210	1号建物	漆桶 (No.210)	内	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可, 前底面欠損
169-2	1区	210	1号建物	漆桶 (No.210)	内	(1)	打撃痕	-	-	-	計測不可, 前底面欠損
174	1区		4号石垣	東		(1)	打撃痕	33.3	25.6	-	前底面欠損
177	1区	454	1号建物	南1面		(1)	打撃痕	31.8	26.6	-	前底面欠損
178	1区	8	2号塚敷			1	完形	22.8	22.4	23.3	
							最大	44.1	35.4	25.5	
							最小	22.8	18.7	20.3	
							平均	32.1	25.6	23.5	

表4 ウメ核の計測・形状分類結果 (括弧は破片を示す)

No.	区	回取No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考	
5	1区				S2区 C-6	1	完形	18.2	14.8	12.6		
7	1区				S2区 C-6	(1)	不明	16.5	-	12.9	約1/2	
58	1区		1号建物	1号272下		1	完形	17.6	13.7	11.4		
62	1区		1号建物	3号床下		1	完形	20.3	16.6	13.7		
65-1	1区		1号建物	4号床下		1	完形	20.5	16.0	12.3		
65-2	1区		1号建物	4号床下		(1)	平削	20.0	15.9	-		
79	1区				S2区 D-2	1	完形	20.4	16.0	13.4		
93	1区		1号建物	3号床下地山中		1	完形	20.6	17.9	14.7		
136	1区		1号建物	4号床下		S2区 D-5	(1)	完形	19.8	17.0	13.0	
137	1区		1号建物	4号床下		(1)	動物食痕	-	-	-	計測不可, 約1/2	
143	1区		9号建物	書架		1	動物食痕?	21.8	19.0	-	破片では割れ	
146	1区		10号建物	南東		(1)	不明	17.5	13.5	-	約1/2	
182-1	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	20.4	15.9	12.9		
182-2	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	20.3	16.9	14.0		
182-3	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	19.5	15.6	12.8		
182-4	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	19.1	16.1	14.0		
182-5	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	21.4	16.5	12.9		
182-6	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	20.6	16.6	14.1		
182-7	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	21.9	16.6	13.2	梨皮付き	
182-8	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	19.6	15.7	13.0	梨皮付き	
182-9	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	19.5	16.5	13.2	梨皮付き	
182-10	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	19.6	15.9	12.5	梨皮付き	
182-11	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	21.2	16.9	14.5	梨皮付き	
182-12	1区		1号塚敷	平削 (1号塚敷) 内		1	完形	21.2	16.7	14.3	梨皮付き	
							最大	21.9	19.0	13.9		
							最小	17.5	13.5	11.4		
							平均	20.0	16.2	13.4		

表5 スモモ核の計測・形状分類結果 (括弧は破片を示す)

No.	区	回取No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
14	1区				S2区 E-2	1	完形	15.1	10.6	7.1	
16	1区				S2区 E-2	1	完形	13.0	10.3	6.5	
							平均	14.1	10.5	6.8	

表6 モモ桃の計測・形状分類結果（括弧は破片を示す）

No.	区	採取No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	発出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
3	1区				S2R-C-5	1	定形	32.5	24.7	16.6	
4-1	1区				S2R-C-6	1	定形	33.2	25.0	17.2	
4-2	1区				S2R-C-6	1	定形	30.5	21.8	13.5	
4-3	1区				S2R-C-6	1	定形	25.4	18.5	15.5	
4-4	1区				S2R-C-6	1	定形	25.9	17.8	15.0	
4-5	1区				S2R-C-6	1	動物食痕	33.2	22.4	-	
4-6	1区				S2R-C-6	(1)	不明	-	-	-	計測不可,1/2未満
4-7	1区				S2R-C-6	(1)	不明	-	-	-	計測不可,1/2未満
6	1区				S2R-C-7	1	定形	25.8	19.8	15.6	
8-1	1区				S2R-C-6	1	定形	28.2	18.8	14.1	
9-2	1区				S2R-C-6	(1)	不明	34.8	23.6	-	1/2未満
9	1区				S2R-C-7	(8)	不明	-	-	-	計測不可,破片
10-1	1区				S2R-E-7	1	定形	24.4	17.5	15.0	
10-2	1区				S2R-E-7	1	定形	-	-	-	計測不可
12	1区				S2R-E-3	(1)	不明	-	-	-	計測不可,約1/4未満
13-1	1区				S2R-D-6	1	定形	25.4	20.2	15.7	
13-2	1区				S2R-D-6	1	定形	25.0	18.8	14.7	
13-3	1区				S2R-D-6	1	定形	15.7	19.1	15.2	
13-4	1区				S2R-D-6	(1)	不明	26.5	20.5	-	約1/2
19	1区				S2R-E-3	1	定形	31.6	20.5	15.8	
20	1区				S2R-E-2	1	定形	35.8	22.5	15.5	
21	1区				S2R-E-5	1	定形	32.9	21.5	16.9	
23	1区				S2R-A-6	1	定形	23.5	19.5	15.5	
25-1	1区				S2R-C-6	1	定形	37.3	26.4	16.4	
25-2	1区				S2R-C-6	1	定形	25.3	19.6	15.3	
26-1	1区		4号建物		S2R-C-6	1	定形	24.5	19.0	15.7	
26-2	1区		4号建物		S2R-C-6	1	定形	23.2	18.2	14.7	
26-3	1区		4号建物		S2R-C-6	(1)	半割	26.9	19.5	-	
27-1	1区		4号溝		S2R-C-6	1	定形	35.9	26.1	15.4	
27-2	1区		4号溝		S2R-C-6	(1)	半割	24.4	20.0	-	
31	1区		4号溝		S2R-D-6	1	定形	28.7	21.3	15.2	
32	1区				S2R-A-8	1	定形	24.5	17.0	13.9	
35	1区		1号建物	馬廄西 2号溝	(1)	不明	29.9	19.5	-	約1/2,打撃痕?	
39	1区		4号溝		S2R-D-6	1	定形	28.7	20.1	15.4	
40	1区		1号建物	4号床	1	定形	38.2	28.2	20.1		
42	1区		1号建物	1号床下	1	定形	31.9	24.2	17.2		
43	1区		1号建物	馬廄1号床脇	1	定形	26.0	19.5	17.5		
45	1区		1号建物	5号床下	1	定形	30.1	22.4	17.0		
51	1区		4号建物	3号床下	(1)	不明	27.6	18.9	-	約1/2	
59	1区		4号建物	3号床下	(1)	不明	35.3	24.6	-	約1/2	
62-1	1区		1号建物	3号床下	1	定形	35.2	26.0	16.7		
62-2	1区		1号建物	3号床下	1	定形	38.1	26.7	17.1		
64	1区				S2R-C-6	1	定形	29.1	18.0	-	
70	1区		1号建物	3号床下	1	定形	34.7	27.0	16.3		
74-1	1区				S2R-B-6	1	定形	38.4	27.6	16.4	
74-2	1区				S2R-B-6	1	定形	31.9	25.6	14.0	
75-3	1区				S2R-B-6	(1)	不明	21.1	16.5	-	約1/2
75-4	1区				S2R-B-6	(1)	不明	-	-	-	計測不可,約1/2
75-1	1区				S2R-C-6	1	定形	22.7	17.0	16.0	
75-2	1区				S2R-C-6	1	定形	24.5	17.9	15.0	
75-3	1区				S2R-C-6	1	定形	23.5	19.0	15.7	
75-4	1区				S2R-C-6	1	定形	23.5	18.5	15.4	
75-5	1区				S2R-C-6	1	定形	24.2	17.4	14.8	
75-6	1区				S2R-C-6	(1)	不明	35.4	27.5	-	
75-7	1区				S2R-C-6	(1)	不明	36.6	29.5	-	
75-8	1区				S2R-C-6	(1)	不明	35.3	26.9	-	
75-9	1区				S2R-C-6	(1)	不明	33.7	25.6	-	
75-10	1区				S2R-C-6	(1)	不明	32.0	23.3	-	
75-11	1区				S2R-C-6	(1)	不明	31.9	22.8	-	
75-12	1区				S2R-C-6	(1)	不明	26.5	17.5	-	
75-13	1区				S2R-C-6	(1)	動物食痕?	33.6	21.7	-	
75-14	1区				S2R-C-6	(1)	不明	24.2	19.1	-	
75-15	1区				S2R-C-6	(1)	不明	25.8	17.9	-	
75-16	1区				S2R-C-6	(1)	不明	24.6	18.2	-	
75-17	1区				S2R-C-6	(1)	不明	23.6	17.0	-	
75-18	1区				S2R-C-6	(1)	不明	25.5	16.7	-	
75-19	1区				S2R-C-6	(1)	不明	23.4	18.2	-	
79	1区				S2R-B-2	1	定形	31.4	24.7	15.9	
82	1区		1号建物	6号床下	1	定形	33.6	26.7	18.9		
85	1区		1号建物	2号廊内	1	定形	35.0	25.5	25.9		
86	1区		8号建物	8号廊付近	(1)	打撃痕	35.5	23.3	-	凹痕欠損	
87	1区		1号建物	2号廊内	1	定形	32.9	23.9	-	現状では割れ	
88-1	1区		1号建物	Eトレンチ	(1)		27.4	20.7	-		
88-2	1区		1号建物	Eトレンチ	(1)		-	-	-	計測不可	
89-1	1区		4号溝		1	定形	33.4	24.2	16.1		
89-2	1区		4号溝		1	不明	35.4	25.1	-	約1/2	
91	1区		1号建物	馬廄南面	1	定形	30.3	22.6	-	現状では割れ	

第4章 調査の成果とまとめ

No.	区	図例No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
94-1	1区		4号溝			1	完整	35.1	26.3	17.8	
94-2	1区		4号溝			1	完整	32.5	22.5	14.2	
94-3	1区		4号溝			2	完整	21.8	13.9	11.3	
96-1	1区		5号建物	1号施設地山中		1	完整	25.0	18.3	14.8	
96-2	1区		5号建物	1号施設地山中	(1)	平削	26.3	18.4	-		
97-1	1区		4号溝	4号建物裏		1	完整	20.8	17.3	13.8	
97-2	1区	D9区-15	4号溝	4号建物裏		1	動物食痕	26.4	-	16.7	
98	1区		4号溝			(1)	打撃痕	26.3	20.0	-	
99	1区		4号溝	南壁		1	完整	23.7	17.6	-	破片では割れ
100-1	1区		1号建物	6号柱跡地山中		(1)	不明	34.9	26.6	-	約1/2
100-2	1区		1号建物	6号柱跡地山中		(1)	不明	33.7	23.6	-	約1/2
104-1	1区	D9区-14	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	30.3	19.7	15.1	
104-2	1区	D9区-14	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	26.4	20.7	15.0	
104-3	1区	D9区-14	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	26.9	21.8	15.7	
104-4	1区	D9区-14	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	24.9	20.7	16.5	
104-5	1区	D9区-14	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	23.7	19.0	16.5	
104-6	1区	D9区-14	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	24.3	-	14.3	欠損
104-7	1区	D9区-14	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	21.3	17.5	14.7	
104-8	1区	D9区-16	5号建物	四号裏下木ภายใน		1	完整	25.3	19.6	13.3	固定柱
105	1区		1号建物	前庭トレンチ内		(1)	打撃痕	21.4	16.5	-	約1/2
106	1区		1号建物	1号柱礎石		(1)	平削	22.8	17.6	-	
110	1区		1号建物	馬屎桶南		(1)	不明	24.9	20.0	-	約1/2, 打撃痕?
111-1	1区		8号溝			1	完整	29.9	21.9	15.8	
111-2	1区		8号溝			1	完整	31.3	23.6	15.3	
111-3	1区		8号溝			(1)	不明	-	-	-	計測不可, 約1/2未満
111-4	1区		8号溝			(1)	不明	-	-	-	計測不可, 約1/2未満
112-1	1区		8号溝			1	完整	26.2	19.7	14.7	
112-2	1区		8号溝			1	完整	26.7	19.6	13.9	
112-3	1区		8号溝			1	動物食痕	21.4	16.7	-	
112-4	1区		8号溝			(1)	平削	25.0	22.0	-	自然
113	1区		2号建物	横切		1	完整	23.8	30.2	16.1	
132	1区			馬屎中央	S2区	1	完整	36.5	26.8	17.9	
135	1区		1号土坑			1	完整	30.6	23.9	17.1	
136-1	1区				S2区 B-5	1	動物食痕	26.0	17.4	12.6	
136-2	1区				S2区 B-5	(1)	不明	-	-	-	計測不可
138-1	1区		4号建物		S2区 C-6	1	完整	30.6	22.4	16.3	
138-2	1区		4号建物		S2区 C-6	(1)	不明	27.2	19.3	-	約1/2
138-3	1区		4号建物		S2区 C-6	(1)	不明	26.0	20.2	-	約1/2
138-4	1区		4号建物		S2区 C-6	(1)	不明	21.4	-	-	1/2未満
138-5	1区		4号建物		S2区 C-6	(1)	不明	25.6	19.5	-	約1/2
141	1区	126	7号建物	土間		1	完整	34.4	25.0	14.3	
152	1区	125	4号建物		S2区 B-7	1	完整	27.4	20.7	13.5	一部破損
152	1区	125	4号建物		S2区 C-6	(1)	動物食痕	-	-	-	計測不可, 約1/4
153	1区	124	4号建物		S2区 A-6	1	完整	36.1	25.5	17.6	
157	1区	126	4号建物		S2区 A-7	(1)	不明	30.0	21.8	-	約1/2
167	1区	167	2号建物	2号礎石上		(1)	不明	26.9	16.7	-	約1/2
168	1区	166	2号建物	3号柱内		1	完整	36.5	26.0	17.3	
173	1区		5号建物			(1)	平削	26.7	17.4	-	
175	1区	18	4号石取	東		1	完整	27.0	18.7	13.9	
176	1区	7	2号扉敷			(1)	不明	22.5	18.0	-	約1/2
179	1区	9	4号石取			(1)	不明	32.5	22.4	-	約1/2
							最大	38.4	29.5	25.9	
							最小	15.7	13.9	11.3	
							平均	28.6	21.1	15.8	

表7 トチノキ種子の計測・形状分類結果（計測可能個体のみ、括弧は破片を示す）

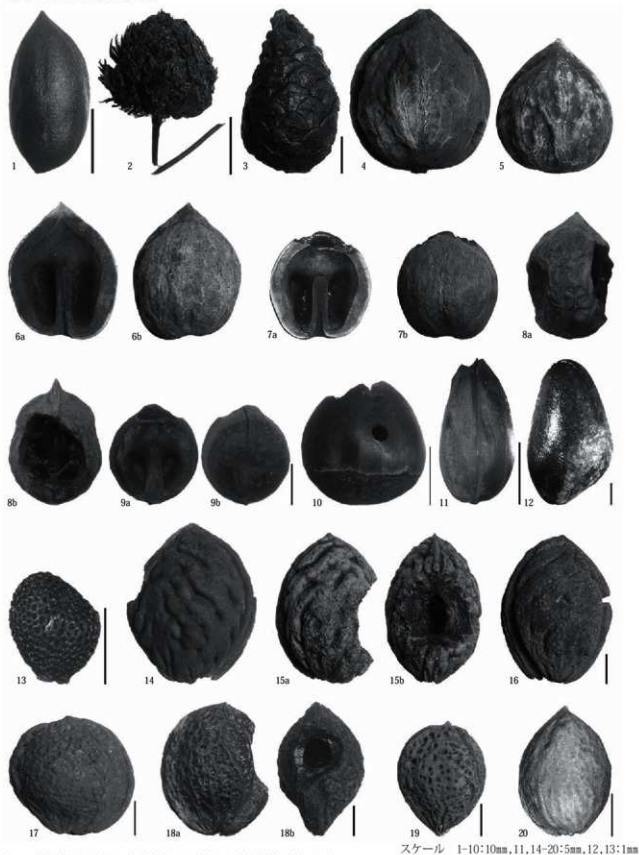
No.	区	図例No. 遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
55	1区	図例2-26	5号建物	1号床下		(1)	不明	16.2	20.4	-	自然の破損か

表8 クリ果実の計測分類結果(計測可能個体のみ、括弧は破片を示す)

No.	区	埋蔵物、遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	長さ	幅	厚さ	備考
41-1	1区		1号建物	カマド裏下		(1)	20.0	21.8	-	
46	1区		4号建物	3号床		1	16.8	20.9	7.6	
53	1区		4号建物	3号床下		1	22.0	21.3	11.2	
62-1	1区		1号建物	3号床下		1	18.6	17.0	8.0	
62-2	1区		1号建物	3号床下		(1)	24.7	27.5	-	
66-1	1区		1号建物	3号床下		(1)	15.6	27.5	-	
114-1	1区		1号建物	1号床下		1	20.7	17.0	10.0	
117-1	1区		1号建物	2号廊下		(1)	20.2	28.4	-	
						平均	19.8	22.7	9.2	

表9 アンズ核の計測・形状分類結果(括弧は破片を示す)

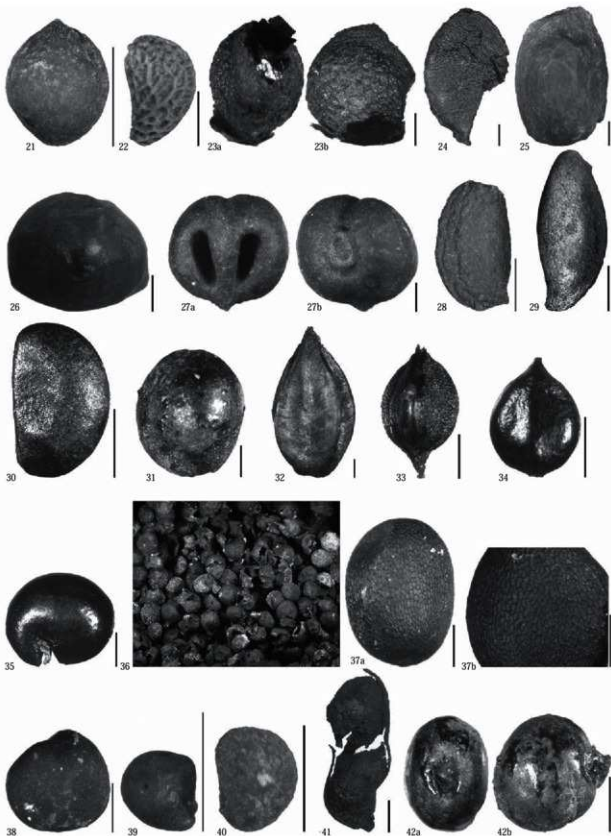
No.	区	埋蔵物、遺物No.	出土遺構	出土位置	グリッド	産出数	形状	長さ	幅	厚さ	備考
1	1区					1	完形	13.9	14.5	10.2	
5-1	1区				S2K C-6	1	完形	18.3	18.3	13.4	
5-2	1区				S2K C-6	1	完形	16.9	17.4	12.6	
5-3	1区				S2K C-6	1	完形	18.5	19.5	13.2	
5-4	1区				S2K C-6	1	完形	17.4	17.0	12.7	
5-5	1区				S2K C-6	1	完形	17.5	18.5	12.6	
5-6	1区				S2K C-6	1	完形	17.2	19.6	12.8	
5-7	1区				S2K C-6	1	完形	17.6	18.9	13.4	
5-8	1区				S2K C-6	1	完形	16.9	17.6	13.4	
5-9	1区				S2K C-6	1	動物食痕	16.2	16.4	10.6	
5-10	1区				S2K C-6	1	完形	17.9	18.1	13.0	
5-11	1区				S2K C-6	1	完形	17.1	16.9	12.7	
5-12	1区				S2K C-6	1	完形	20.1	18.8	13.3	
5-13	1区				S2K C-6	1	完形	18.4	18.8	12.6	
5-14	1区				S2K C-6	1	完形	15.8	17.1	12.7	
5-15	1区				S2K C-6	1	完形	18.5	20.3	13.9	
5-16	1区				S2K C-6	1	完形	17.8	16.8	12.2	
5-17	1区				S2K C-6	1	完形	16.9	16.9	12.6	
5-18	1区				S2K C-6	1	完形	15.9	17.2	12.1	
5-19	1区				S2K C-6	1	完形	15.2	15.9	12.8	
5-20	1区				S2K C-6	1	完形	16.7	18.0	12.9	
5-21	1区				S2K C-6	1	完形	18.9	15.6	12.0	
5-22	1区				S2K C-6	1	不明	17.5	17.9	12.2	
5-23	1区				S2K C-6	1	完形	16.7	17.9	12.3	
5-24	1区				S2K C-6	2	完形	16.1	17.9	11.3	
5-25	1区				S2K C-6	1	完形	15.7	16.1	10.7	
5-26	1区				S2K C-6	1	動物食痕	16.3	15.0	11.0	
5-27	1区				S2K C-6	1	完形	16.9	16.9	12.9	
5-28	1区				S2K C-6	(1)	不明	-	-	-	計測不可
8-1	1区				S2K C-6	(1)	割片	-	-	-	計測不可
8-2	1区				S2K C-6	(1)	割片	-	-	-	計測不可
22	1区	図版1-17			S2K B-6	1	完形	17.0	18.3	12.7	
26-1	1区		4号建物		S2K C-6	1	完形	15.9	14.5	10.8	
26-2	1区		4号建物		S2K C-6	(1)	割片	-	-	-	計測不可
26-3	1区		4号建物		S2K C-6	(1)	割片	-	-	-	計測不可
30	1区		1号建物		(1)	割片	18.2	18.5	-	平均に多い	
30	1区		1号建物		B-5	1	完形	19.8	17.8	13.4	
32	1区		4号建物	3号床下		1	動物食痕	17.8	15.4	-	
61	1区		1号建物	3号床下		1	完形	17.8	19.7	13.2	
64	1区						-	-	-	計測不可, 約1/2	
71	1区		1号建物	裏庭	S2K C-6	(1)	不明	-	-	-	計測不可, 約1/2
74-1	1区				S2K B-6	1	完形	20.1	17.8	13.0	
74-2	1区				S2K B-6	(1)	不明	18.1	18.0	12.4	
74-3	1区				S2K B-6	(1)	不明	18.8	16.7	-	約1/2
75-1	1区				S2K C-6	1	完形	20.1	18.5	13.9	
75-2	1区				S2K C-6	1	完形	17.4	15.6	12.8	
75-3	1区				S2K C-6	1	動物食痕	19.0	17.1	11.8	
75-4	1区				S2K C-6	1	動物食痕	20.0	17.5	13.0	
75-5	1区				S2K C-6	(1)	動物食痕	19.1	-	12.4	
75-6	1区				S2K C-6	(1)	動物食痕	19.6	18.2	-	
75-7	1区				S2K C-6	(1)	不明	18.7	18.9	-	
75-8	1区				S2K C-6	(1)	不明	18.1	17.5	-	
76	1区				S2K A-6	1	動物食痕	17.8	17.4	12.5	
85	1区		1号建物	2号廊下内		1	完形	19.2	17.7	13.7	
99-1	1区		4号遺構	南壁	(1)	不明	17.6	17.3	-	計測不可	
99-2	1区		4号遺構	南壁	(1)	不明	-	-	-	計測不可	
112	1区		8号遺構		(1)	不明	-	-	-	計測不可, 約1/4	
117-1	1区		1号建物	2号廊下		1	完形	18.5	20.2	13.2	
117-2	1区		1号建物	2号廊下		1	完形	18.5	18.2	13.7	
130	1区		4号建物		S2K C-6	(1)	不明	-	-	-	計測不可, 1/4未満
162	1区	図版1-18	9号建物	1号廊下4号付近	S2K C-6	1	動物食痕	22.5	18.2	14.6	
151	1区	455	1号建物		S2K C-6	1	割片	12.4	12.3	9.1	
163	1区	460	1号建物			1	動物食痕	16.7	15.5	-	
							最大	22.5	20.3	14.6	
							最小	12.4	12.3	9.1	
							平均	17.6	17.4	12.5	



図版1 東京遺跡現地取り上げ試料から出土した大型植物遺体(1)

1. カヤ種子(4号溝, 52区C-6)、2. スギ球果(52区C-6)、3. クロマツ球果(2号建物, 42区B-23)、4-6. オニグルミ核(4号溝, 4号建物北)、7. オニグルミ核打撃痕(1号建物2号唐臼内)、8. オニグルミ核(1号建物北)、9. ヒメグルミ核(1号建物北)、10. クリ果実(1号建物3号床下)、11. ブナ果実(1号建物室底面)、12. アケビ種子(2号建物1号桶)、13. マタタビ属種子(10号建物)、14. モモ核(5号建物園が裏下木筒内)、15. モモ核動物食痕(4号溝, 4号建物北)、16. モモ炭化核(5号建物園が裏下木筒内)、17. アンズ核(52区B-6)、18. アンズ核動物食痕(9号建物電線埋乱内)、19. ウメ核(1号建物, 1号建物22の下)、20. スモモ核(52区E-2)

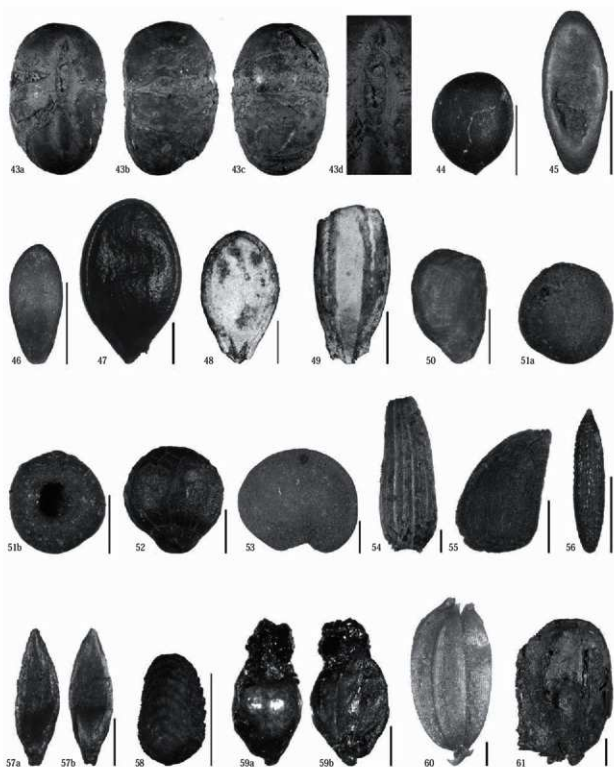
スケール 1-10:10mm, 11, 14-20:5mm, 12, 13:1mm



スケール 21,26,29,30,41:5mm,22-25,27,28,31-35,37-40,42:1mm,36は任意

図版2 東宮遺跡現地取り上げ試料から出土した大型植物遺体(2)

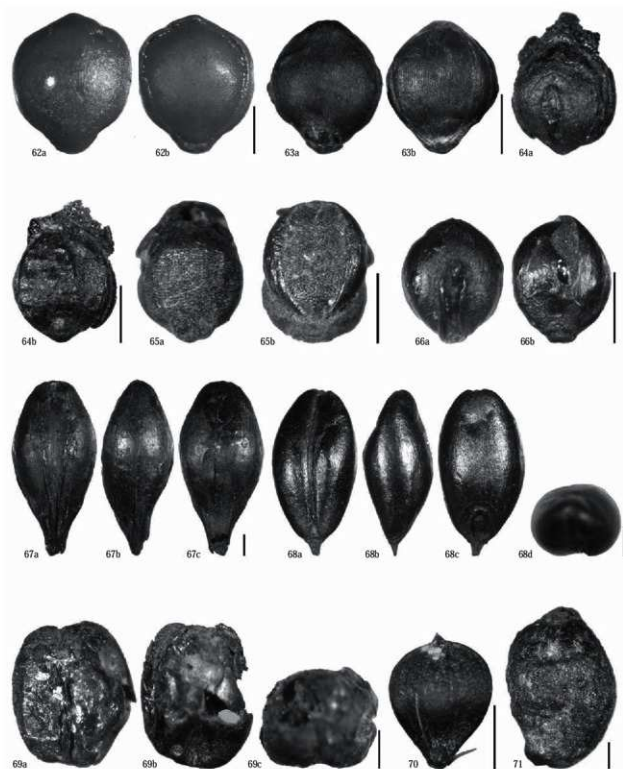
21. サクラ属サクラ節核 (2号建物1号桶)、22. キイチゴ属核 (10号建物)、23. サンショウ種子 (1号建物竈)、24. イタヤカエデ種子 (2号建物4号桶)、25. イロハモミジ近似種果実 (2号建物1号桶)、26. トチノキ種子 (5号建物1号床下)、27. ブドウ属種子 (2号建物4号桶)、28. タラノキ核 (10号建物南)、29. カキノキ属A種子 (2号建物1号桶)、30. カキノキ属B種子 (2号建物4号桶)、31. アサマコ属核 (1号建物室底面)、32. ソノバ果実 (1号建物2号歯白)、33. サナエタデ・オオイヌタデ果実 (2号建物1号桶)、34. ポントクタデ果実 (10号建物)、35. ヤマゴボウ属種子 (1号建物2号歯白)、36. アブラナ科A-B種子 (1建466、1号建物歯白東漆検)、37. アブラナ科A種子 (1建466、1号建物歯白東漆検)、38. アブラナ科B種子 (1建466、1号建物歯白東漆検)、39. オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属核 (10号建物)、40. キジムシロ属果実 (10号建物)、41. ダイズ属果序 (2号建物9号桶下)、42. ハビ属炭化種子 (1号建物室底面)



スケール 43,44,50-61:1mm,45-49:5mm, 43dは任意

図版3 東宮遺跡現地取り上げ試料から出土した大型植物遺体(3)

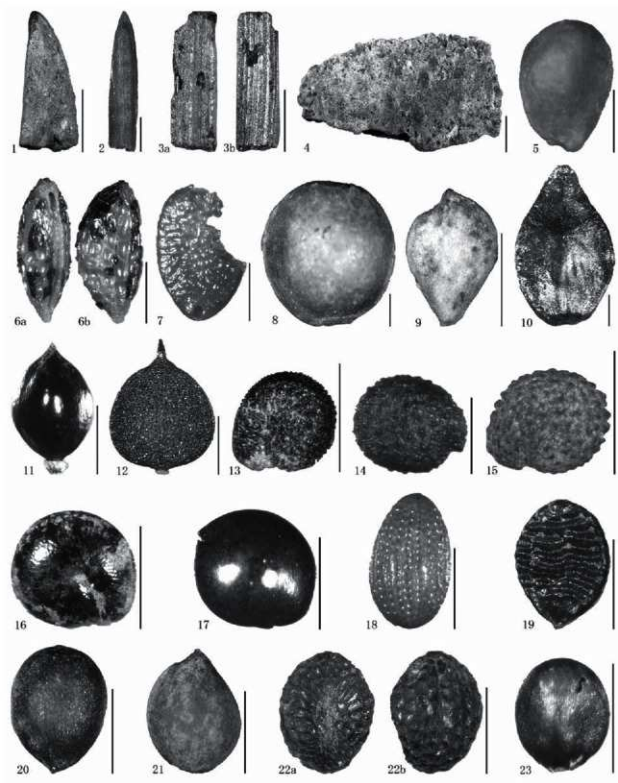
43.アズキ炭化種子(1号建物室底面)、44.エノキグサ属種子(2号建物1号桶)、45.キュウリ種子(2号建物1号桶)、46.ウリ属メロン仲間種子(2号建物1号桶)、47.カボチャ種子(4号溝、52区B-8)、48.カボチャB種子(52区C-6)、49.ウリ属ヒョウタン仲間種子(52区C-6)、50.ウド核(10号建物南)、51.アカネ属炭化種子(1号建物室底面)、52.エゴマ果実(2号建物1号桶)、53.ナス種子(2号建物2号桶)、54.ゴボウ果実(4号建物床下)、55.メナモミ属果実(10号建物)、56.ホッソモ種子(10号建物)、57.メヒシバ属果実(10号建物)、58.オヒシバ種子(10号建物北)、59.ヒエ炭化有ふ果(1号建物室底面)、60.イネ籾(4号建物床下)、61.イネ炭化籾(1号建物室底面)



スケール 62-71:1mm

図版4 東宮遺跡現地取り上げ試料から出土した大型植物遺体(4)

62.キビ有ふ果(2号建物1号桶)、63.キビ炭化有ふ果(1号建物室内)、64.キビ炭化種子(1号建物室内)、65.アワ炭化有ふ果(1号建物室底面)、66.アワ炭化種子(1号建物室内)、67.オオムギ炭化果実(1号建物室内)、68.オオムギ炭化種子(1号建物室内)、69.コムギ炭化種子(1号建物室床面)、70.ホタルイ属果実(10号建物南)、71.スギナ近似種地下茎(2号建物1号桶)



スケール 1-13, 15-23: 1mm, 14: 0.5mm

図版5 東宮遺跡水洗試料(24号畑)から出土した大型植物遺体(1)

1. スギ炭化葉 (No.2)、2. マツ属炭化葉 (No.5)、3. マツ属炭化葉 (No.3)、4. コナラ殻斗 (No.2)、5. クワ属核 (No.4)、6. フサザケラ種子 (No.1)、7. ニワトコ核 (No.3)、8. アサ核 (No.3)、9. ミズ属果実 (No.6)、10. ソノバ果実 (No.4)、11. イヌタデ果実 (No.3)、12. タニソバ果実 (No.3)、13. スベリヒユ属種子 (No.1)、14. ノミノフスマ種子 (No.1)、15. ウシハコベ種子 (No.3)、16. アカザ属種子 (No.2)、17. キケマン属種子 (No.5)、18. タケニグサ種子 (No.1)、19. カタバミ属種子 (No.4)、20. エノキグサ属種子 (No.4)、21. スミレ属種子 (No.4)、22. オカトラノオ属種子 (No.1)、23. トウバナ属果実 (No.2)



スケール 24-35:1mm, 36:5mm, 36cは任意

図版6 東宮遺跡水洗試料(24号畑)から出土した大型植物遺体(2)

24. シソ属果実 (No.1)、25. オミナエシ属果実 (No.6)、26. キク科果実 (No.3)、27. イヌビエ属有ふ果 (No.2)、28. イヌビエ属炭化種子 (No.2)、29. イネ籾殻 (No.1)、30. エノコログサ有ふ果 (No.3)、31. オオムギ炭化果実 (No.2)、32. オオムギ炭化種子 (No.4)、33. イネ科果実 (No.4)、34. スゲ属マスカサ節果実 (No.2)、35. カヤツリグサ属果実 (No.1)、36. ワラビ羽片・裂片 (No.2)

2 東宮遺跡1号建物馬屋家畜糞中の大型植物遺体

はじめに

東宮遺跡は群馬県吾妻郡長野原町に所在し、吾妻川左岸の中段段丘面上に立地する、天明3年(1783年)の浅間山噴火に伴う泥流によって埋没した集落である。大型の屋敷跡である1号建物の馬屋からは、家畜糞と考えられている堆積物中から未炭化の葉や種実が大量に重なって出土した。ここではそれらの大型植物遺体の同定を行い、組成を検討した。

1. 試料と方法

試料は、1号建物の馬屋から出土した未炭化の大型植物遺体で、抽出済試料と堆積物試料があった。抽出済試料は家畜糞と考えられている堆積物中に葉などが層状に密集していたため、その中から状態が良いものについて、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で抽出・水洗され、乾燥保存されていた。これら約200枚について、針葉樹は枝単位、木本植物は1枚単位、シダ植物は1個体単位で透明フィルム中にシーリングを行い、便宜的に試料番号を付した。そのほか、多産した分類群は計数後、一括してシーリングした。堆積物試料はブロック状に切り出されており、2試料あった。抽出済試料の堆積状況の確認のため、ブロック別に便宜的に試料No.を振り(試料No.1、2)、層状に堆積している大型植物遺体を面的に掘り下げていき、全体の組成を観察した。なお、試料No.2中には大量の種実が含まれていたため、掘り下げた面ごとに25cc採取して0.25mm目の篩で水洗し、参考のためおおよその組成をみた。

同定は肉眼および実体顕微鏡下で行った。なお、試料は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

2. 結果

[抽出済試料]

葉や葉柄の残存状況が良い試料番号を付した219点と、一括してシーリングした217点の計446点について同定した結果、木本植物では針葉樹のスギ枝の1分類群、広葉樹のクマシデ属葉とコナラ葉、フジ属葉の3分類群、シダ植物のワラビ葉柄(羽片と裂片を含む)1分類群の5分類

表1 1号建物馬屋から出土した葉の同定結果

	分類群	部位	産出数	%
針葉樹	スギ	枝	2	0.4%
広葉樹	クマシデ属	葉	2	0.4%
	コナラ	葉	50	11.2%
	フジ属	葉	359	80.7%
	広葉樹A	葉	19	4.3%
シダ植物	ワラビ	葉柄	13	2.9%
合計			445	100.0%

群が同定された(表1)。この他に広葉樹の葉であるが、科以下の同定ができなかったものを広葉樹Aとした。また微細な破片で、かつ識別点が欠けていた一群を同定不能とした(同定不能は表には入れていない)。付表に試料番号を付した試料の同定結果の一覧を示す。一括してシーリングした試料にはフジ属葉が180点とコナラ葉が37点、ワラビの羽片または裂片が多産した。

[堆積物試料]

試料No.1:長軸14.5cm、短軸14.0cmで、ほぼ正方形に切り出されて採取された堆積物である。面をなしている単位(任意にNo.1-1から1-5を設定)で上部から大型植物遺体を取り除きながら掘り進めると、ほとんどワラビ葉柄と羽片が集積していた。

試料No.2:長軸19.2cm、短軸11.0cmの長方形に切り出されて採取された堆積物である。面をなしている単位(任意にNo.2-1から2-6を設定)で上部から大型植物遺体を取り除きながら掘り進めると、葉や小枝、種実が集積する層とこれらがほとんど含まれない層の互層がみられた。葉はフジ属が多く、ワラビの葉柄は少なかった。種実が特徴的に含まれていたNo.2-2からNo.2-5の4面について堆積物を水洗した結果、ヒエ有ふ果とイネ稈・初殻が多く、アワ有ふ果とワラビの葉柄・羽片がそれに次いだ。そのほか、フジ属葉とキイチゴ属核がわずかに含まれていた。

以下に特徴的な大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don 枝
ヒノキ科

針葉は鎌状の針形。断面は三角形に近い。基部は細くなる。長さ34.0mm、幅8.6mm。

(2) クマシデ属 *Carpinus* spp. 葉 カバノキ科

長楕円形。先端は尖り、縁には重鋸歯がある。側脈は20対程度あり、裏面に突出する。長さ70.4mm、幅27.3mm。

(3) コナラ *Quercus serrata* Murray 葉 フナ科

倒卵形で、洋紙質。先端は鋭く尖り、基部はくさび形。縁には大型の尖った鋸歯がある。長さ83.6mm、幅37.2mmと長さ62.5mm、幅34.3mm。

(4) フジ属 *Wisteria* spp. 葉 フジ科

長楕円形または狭卵形で全縁、互生。本来は羽状複葉となる。長さ45.4mm、幅21.8mmと長さ7.0mm、幅30.4mm、長さ54.7mm、幅17.6mm。

(5) 広葉樹A Broad-leaved tree A

狭卵形で全縁、互生。マメ科の可能性があるが、科以下の同定はできなかった。

(6) ワラビ *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn subsp. *japonicum* (Nakai) Á. et D.Löve 裂片・羽片・葉柄 コバノイシカグマ科

羽片は広卵状三角形で、軸の表面に溝があり、流れ込み型。裂片は長楕円形で、鈍頭で全縁。わずかに裏に巻く。葉脈は2～3叉状分岐し平行に並ぶ。葉柄は硬い紙質でやや光沢がある。葉柄の解剖学的検討は行っていないが、ワラビの羽片が付いていることから、ワラビと判断した。葉柄が残存している個体は最大で長さ186.0mm、幅61.3mm。裂片は長さ8.6mm、幅3.5mm。

3. 考察

1号建物馬屋の家畜糞と考えられている堆積物中から抽出した大型植物遺体を同定した結果、抽出済試料のほとんどがフジ属の葉で構成されていた。ほとんどがフジ属の葉で約80%を占め、コナラの葉が約11%と次いだ。それ以外の分類群（広葉樹A、ワラビ、スギ、クマシデ属）は5%以下であった。ただし、広葉樹Aは一枚単位、スギは枝、ワラビは羽片が付いた葉柄の状態（1個体）で計数したため、単純に数の比較は難しい。ただし、ワラビは葉柄で計数すると少ないが、羽片や裂片の数で計数するとフジ属より多い。量的にはワラビとフジ属は同等量含まれていた。産出量が多いワラビとフジ属、コナラ、マメ科に類似する広葉樹Aについては選択して馬屋内に持ち込まれたと推定される。

堆積物試料ではフジ属の葉が多い部分と、ワラビの葉柄と羽片が多い個体があり、フジ属が多い部分には大量のヒエとアワ、イネが集積していた。これらの出土部位は食用にならない有ふ果や穀・穀殻であった。破片が多

く、完形も含まれるがつぶれた状態を呈したものが多かった。種子の部分は残存していなかったが、本来なかったのか、種子の部分のみ堆積環境の影響で失われたのかは不明であった。

また、出土した葉の組成から、周辺には一部針葉樹が生育していたものの、落葉広葉樹が主体の植生と考えられる。フジ属は羽状複葉のため、葉を効率良く集めることができたと推定される。ワラビは日当たりの良い立地に生育するシダ植物のため、集落のごく近くにあったと想定される。ワラビは根茎が産出していない状況から、成長した個体の葉柄以上の部分を刈り取っていたか、あるいは根茎はワラビ粉などに利用し、不要な葉柄以上の部位を馬屋に持ち込んだ可能性がある。ワラビはすべて成葉で、若芽はなかった。一般的にワラビは成長すると1m近くになるが、出土した長さは最大で約20cmであった。ワラビには毒性があり、現代では刈って牧草とすれば家畜は食べるが、膀胱癌が多発することが知られている（下中, 1989）。また葉柄で計数した個体は羽片が付いた状態であり、馬の体内で外れずに排泄されたとは考えにくい。ほかの種類葉についても完形個体が多く、家畜糞に含まれていたとは考えられにくかった。堆積物試料のNo.2には、種実や葉が集積する層とそれらがほとんど含まない層の互層がみられたため、堆積物中に家畜糞が含まれていたとしても、種実や葉はその上下に挟まれており、家畜糞を含め肥料用などにしたか、堆積物自体が家畜糞ではなく、家畜の餌のために持ちこまれた植物と考えられる。

引用文献

下中 弘 (1989) 世界有用植物辞典, 1499p. 平凡社.

表2 1号建物馬屋糞中の大型植物遺体

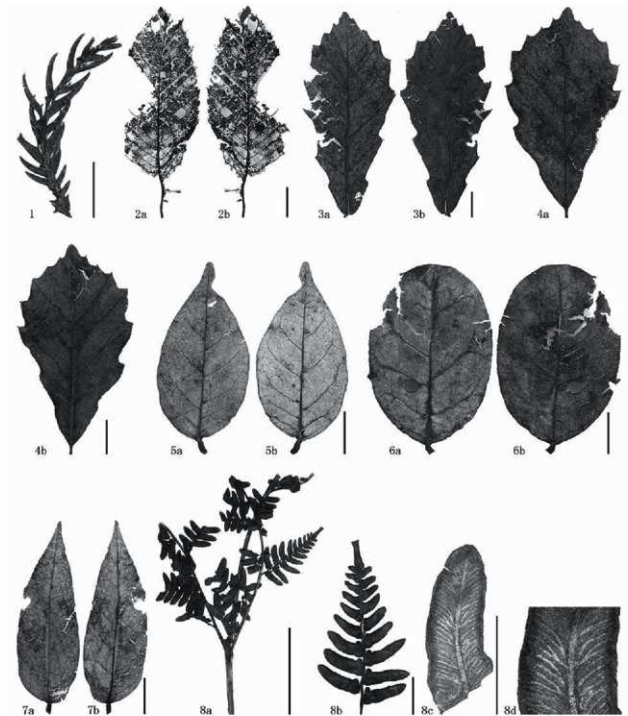
分類群	試料No.	2-2	2-3	2-4	2-5
	部位/水流量	25cc	25cc	25cc	25cc
主イネ科属 核		1			
フジ属			3		
ヒエ	有ふ果	++++ >200	+++	+++	+++
イネ	穀・穀殻	++	++++	++++ >500	++++
アワ	有ふ果	++	++	++	++
ワラビ	葉柄・羽片	++	++	+	+

*: 1-9, ++: 10-49, +++: 50-99, ++++: 100点以上, 200点以上は産出数を横に併記した

第4章 調査の成果とまとめ

付表 東宮遺跡1号建物馬屋出土葉同定結果一覧

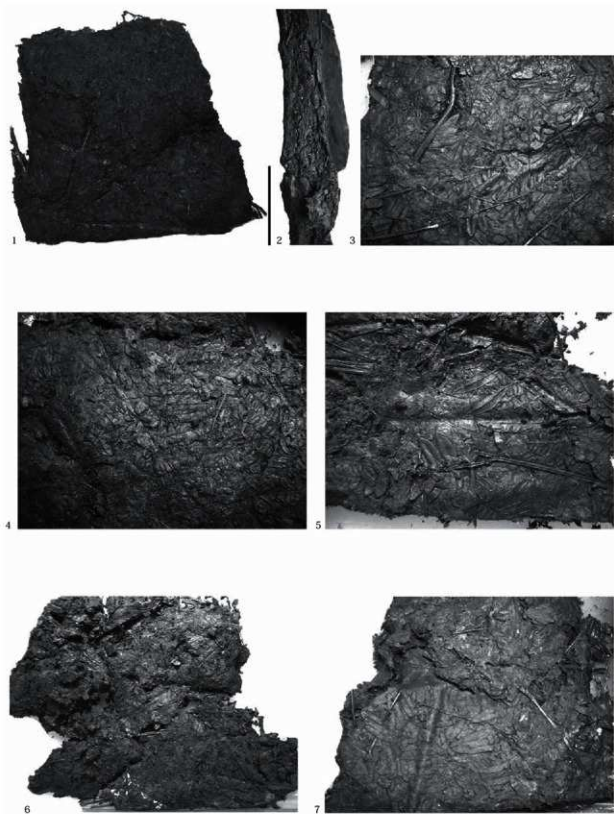
試料No.	分類群	部位	試料No.	分類群	部位	試料No.	分類群	部位	試料No.	分類群	部位
No.1	フジ属	葉	No.55	フジ属	葉	No.109	フジ属	葉	No.163	広葉樹A	葉
No.2			No.56			No.110			No.164		
No.3			No.57			No.111			No.165	フジ属	葉
No.4			No.58			No.112			No.166		
No.5			No.59			No.113			No.167		
No.6			No.60			No.114			No.168	広葉樹A	葉
No.7			No.61			No.115			No.169		
No.8			No.62			No.116			No.170		
No.9			No.63			No.117			No.171		
No.10			No.64			No.118			No.172		
No.11			No.65			No.119			No.173		
No.12			No.66			No.120			No.174		
No.13			No.67			No.121			No.175		
No.14			No.68			No.122			No.176	フジ属	葉
No.15			No.69			No.123			No.177		
No.16			No.70			No.124			No.178		
No.17			No.71			No.125			No.179		
No.18			No.72			No.126			No.180		
No.19			No.73			No.127			No.181		
No.20			No.74			No.128			No.182		
No.21			No.75			No.129			No.183		
No.22			No.76			No.130			No.184		
No.23			No.77			No.131			No.185	クマシデ属	葉
No.24			No.78			No.132			No.186	コナラ	葉
No.25			No.79			No.133			No.187		
No.26			No.80			No.134			No.188		
No.27			No.81			No.135			No.189	フジ属	葉
No.28			No.82			No.136			No.190		
No.29			No.83			No.137			No.191	クマシデ属	葉
No.30			No.84			No.138			No.192	スズ	枝
No.31			No.85			No.139			No.193	コナラ	葉
No.32			No.86			No.140			No.194	フジ属	葉
No.33			No.87			No.141			No.195		
No.34			No.88			No.142			No.196	コナラ	葉
No.35			No.89			No.143			No.197		
No.36			No.90			No.144			No.198		
No.37			No.91			No.145			No.199		
No.38			No.92			No.146			No.200		
No.39			No.93			No.147			No.201		
No.40			No.94			No.148			No.202		
No.41			No.95			No.149			No.203		
No.42			No.96			No.150			No.204		
No.43			No.97			No.151			No.205	フジ属	葉
No.44			No.98			No.152			No.206	スズ	枝
No.45			No.99			No.153			No.207	同定不能	葉
No.46			No.100			No.154			No.208	ワラビ	葉柄
No.47			No.101			No.155			No.209		
No.48			No.102			No.156			No.210		
No.49			No.103			No.157			No.211		
No.50			No.104			No.158			No.212		
No.51			No.105			No.159			No.213		
No.52			No.106			No.160			No.214		
No.53			No.107			No.161			No.215		
No.54			No.108			No.162			No.216		
									No.217		
									No.218		
									No.219	広葉樹A	葉



スケール 1-7, 8b:10mm, 8a:50mm, 8c:5mm, 8dは任意

図版1 東宮遺跡1号建物馬屋から出土した葉

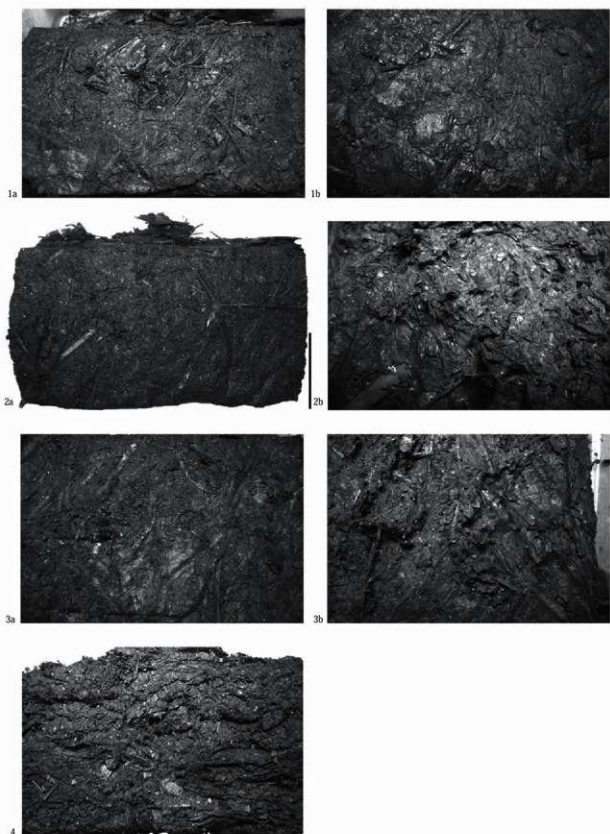
1. スギ枝 (No.192)、2. クマシデ属葉(No.191)、3. コナラ葉 (No.196)、4. コナラ葉 (No.193)、5. フジ属葉 (No.194)、5. フジ属葉 (No.195)、6. フジ属葉 (No.190)、7. フジ属葉 (No.194)、8a. ワラビ葉柄 (No.208)、8b. ワラビ羽片 (No.208)、8c, d. ワラビ裂片 (No.208)



スケール 1:5cm, 2-7は任意

図版2 東宮遺跡1号建物馬屋から出土した堆積物試料(1)

1. No.1全体, 2.No.1側面, 3.No.1-1, 4.No.1-2, 5.No.1-3, 6.No.1-4, 7.No.1-5



スケール 2a:5cm, 1, 2b, 3, 4は任意

図版3 東宮遺跡1号建物馬屋から出土した堆積物試料(2)

1.No.2-1 (1a.全体、1b.拡大)、2.No.2-5 (2a.全体、2b.拡大)、3.No.2-6 (3a.全体、3b.拡大)、4.側面の一部

3 東宮遺跡24号畑出土耕作物の素材同定

はじめに

東宮遺跡は群馬県吾妻郡長野原町に所在し、吾妻川左岸の中位段丘面上に立地する、天明3年(1783年)の浅間山噴火に伴う泥流によって埋没した集落である。東宮遺跡では集落に付随する畑跡から植えられた耕作物が出土し、それら植物遺体の素材同定を行なった。なお同定にあたり、森林総合研究所の能城修一氏のご教示を得た。

1. 試料と方法

試料は、天明3年(1783年)の浅間山の噴火によって埋没した、24号畑より出土した耕作物5点である。畑の畝には作物が等間隔で植えられており、地上部は残存していなかったが、畑内には根と思われる部位が残存していた。このうち、目視で状態が良いもの数点について出土位置を記録後、断ち割りを行い、断面観察の結果、残りが良い個体を同定試料として採取した。試料は切片採取前に試料全形の写真撮影を行なった。

素材同定は、試料の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)についてカミソリで切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡で鏡筒および写真撮影を行なった。なお、作製したプレパラートおよび試料の残りは(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

2. 結果

5点の同定の結果、いずれの試料も同種の双子葉植物であった。同定結果を表1に示す。また現生アサの茎・主根、現生ゴマの茎・主根と比較をしたが、同定はできなかった。耕作物の形状を計測した結果、直径0.8~1.2(平均1.0)cm、残存長4.0~14.8cmであった。

表1 耕作物の素材同定結果

試料No.	出土遺構	樹種	直径(cm)	残存長(cm)
1	24畑跡	双子葉植物	0.8	8.3
2	24畑跡	双子葉植物	0.7	4.3
3	24畑跡	双子葉植物	1.2	4.0
4	24畑跡	双子葉植物	1.1	12.0
5	24畑跡	双子葉植物	1.1	14.8

次に素材の解剖学的特徴を記載し、光学顕微鏡写真と全形写真を示す。また、現生のアサの茎と主根、ゴマの茎と主根の光学顕微鏡写真と主根を中心とした写真も併せて示す。

(1) 双子葉植物 Dicotyledon 図版1 1a-1c (No.3)・2a-2c (No.5)・3a (No.4)・4 (No.1-No.5)

中型の道管が単独ないし2~3個複合し、疎らに散在する散孔材である。細胞壁は全体的に薄壁で、成長輪界と髄はみられない。道管は単穿孔を有する。放射組織は平伏、方形、立方が混在する異性で幅1~4列となる。試料には成長輪界と髄がみられず、1年生の双子葉植物の主根である。

(2) アサ(現生) *Cannabis sativa* L. アサ科 図版1 5a-5c・6a-6c・9

茎: 中型の道管がほぼ単独で疎らに散在する散孔材である。成長輪界はみられない。道管は単穿孔を有し、道管相互壁孔は交互状となる。放射組織は平伏、方形、長方形が混在する異性で、ほぼ単列、まれに幅2~3列となる。

主根: 中型の道管がほぼ単独で疎らに散在する散孔材である。成長輪界および髄はみられない。木部繊維の壁は茎部に比べて薄くなる。道管は単穿孔を有し、道管相互壁孔は交互状となる。放射組織は平伏、方形、長方形が混在する異性で幅2~3列となるが、高さは3~5列程度と低い。

アサは中央アフリカ原産の1年草である。皮は乾燥させて繊維をとり、種子は菜味などとして食用とする。

(3) ゴマ(現生) *Sesamum orientale* L. ゴマ科 図版1 7a-7c・8a-8c・10

茎: 中型の道管が単独ないし2~3個複合し、やや密に散在する散孔材である。成長輪界はみられない。道管は単穿孔を有し、道管相互壁孔は交互状となる。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、1~6列となる。

主根: 中型の道管が単独ないし2~3個複合し、疎らに散在する散孔材である。成長輪界および髄はみられない。木部繊維の壁は茎部に比べて薄くなる。道管は単穿孔を有し、道管相互壁孔は交互状となる。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、1~4列となる。

ゴマはアフリカ原産といわれ、日本各地で栽培されて

いる1年生の草本類である。種子を食用として利用するが、材の利用は行われていない。

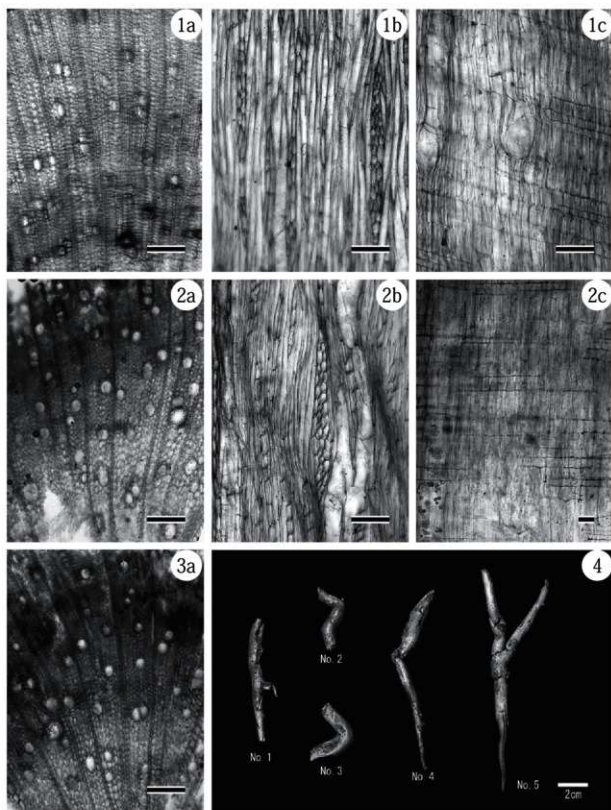
3. 考察

耕作物は、いずれも双子葉植物であった。現生のゴマとアサの茎と主根と比較したが、現段階では同定はできなかった。ゴマは種子を食用とし、絞れば油を採取できるため、現在でも日本各地で栽培が行われている。またアサも、茎の皮より繊維を取り、種子も食用として用いられ、かつては日本各地で栽培が行われていた（木村康・木村孟、1996）。

双子葉植物は約35cm間隔で畑遺構から出土し、出土状況から栽培されていたと考えられる。また試料とした耕作物はそれぞれ距離を置いた箇所から出土しており、同一個体の双子葉植物である可能性はない。そのため東宮遺跡の24号畑では、少なくとも5個体以上の同一種の双子葉植物を栽培していた可能性がある。形状および解剖学的には主根と推定できるが、種は不明であった。

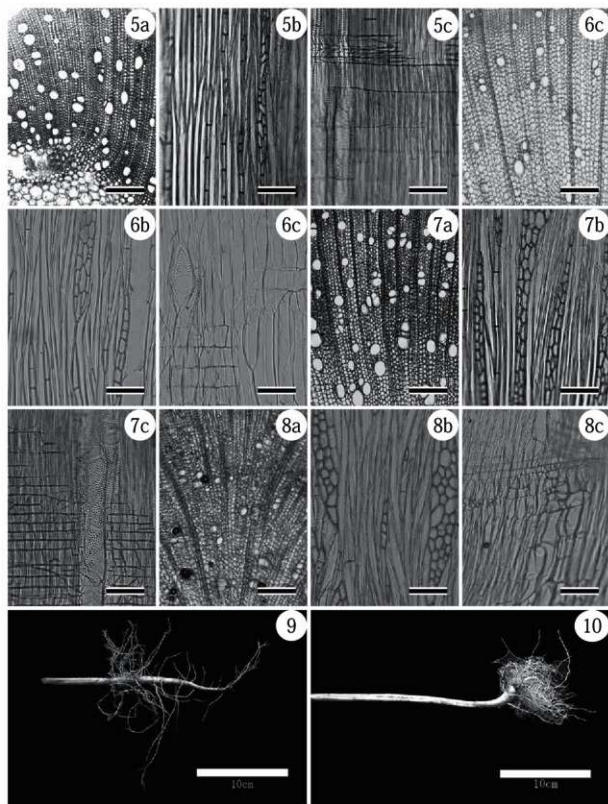
引用文献

木村康一・木村孟淳（1996）原色日本薬用植物図鑑、345p、保育社。



図版1 東宮遺跡24細跡出土耕作物の光学顕微鏡・全形写真

1a-1c. 双子葉植物(No.3) 2a-2c. 双子葉植物(No.5) 3a. 双子葉植物(No.4) 4. 出土耕作物全形写真(No.4)
a: 横断面(スケール=250 μ m) b: 接線断面(スケール=100 μ m) c: 放射断面(スケール=100 μ m)



図版2 現生アサ茎・主根と現生ゴマ茎・主根の光学顕微鏡・主根を中心とした写真

5a-5c. 現生アサ茎 6a-6c. 現生アサ主根 7a-7c. 現生ゴマ茎 8a-8c. 現生ゴマ主根 9. 現生アサ主根写真
10. 現生ゴマ主根写真

a: 横断面(スケール=250 μm) b: 接線断面(スケール=100 μm) c: 放射断面(スケール=100 μm)

4 東宮遺跡24号畑遺構における花粉分析

はじめに

東宮遺跡は、浅間山の天明三（1783）年噴火に伴う泥流によって埋まったため、当時の生活の様子がそのまま保存された貴重な遺跡である。東宮遺跡では、大規模な屋敷跡が検出されており、屋敷の前には畑遺構が検出された。そこで本項では、当時の周辺植生と環境、および畑遺構で栽培された作物について検討することを目的として花粉分析をおこなった。なお、同試料を用いた大型植物遺体分析もおこなわれている（第4章第4節；佐々木・バンドリ，2012）。

1. 試料と方法

試料は畑遺構の畝上面約15cm四方、深さ10cm程度の土壌を6地点から採取した。今回はそのうちの3試料（試料No.1, 3, 5）を対象とした。畑遺構の詳細および試料採取地点は、それぞれ第3章第3節第184図を参照されたい。

試料の岩相はシルト～粘土で、1.5cm大の砂礫や植物の葉が混じる。試料は湿重量約30～40g用い、10%水酸化カリウム水溶液処理、植物片の篩別除去、傾瀉法による砕屑物の除去、塩化亜鉛飽和水溶液による比重分離、アセトリシス処理をした後、グリセリンゼリーで封入し、カバーガラスの周囲をネイルエナメルで密封してプレパラートを作製した。花粉の同定は、400倍および1000倍の生物顕微鏡および位相差顕微鏡下でおこなった。本項では、耕地の草本植生を含む遺跡周辺の植生を復原するために、花粉とシダ植物胞子の総数を基数にすべての分類群の産出割合を算出した。

2. 分析結果

花粉とシダ植物胞子は、1試料につき約300～400粒含まれていた。表1には、産出した分類群とその割合を示した。産出した分類群は、木本花粉ではマツ属（複雑管束亜属）、モミ属、ツガ属、スギ、ヒノキ科、クルミ属 - サワグルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属、ハシバミ属、コナラ亜属、シノキ属 - マテバシイ属、ニレ属 - ケヤキ属、エノキ属 - ムクノキ属、モチノキ属、

カエデ属、トチノキ属、サンショウ属やクワ科 - イラクサ科、草本花粉ではアサ科、ソバ属、タデ属（サナエタデ節 - ウナギツカミ節）、アカザ科、ナデシコ科、キンボウゲ科、アブラナ科、セリ科、オオバコ属、オミナエシ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ガマ属、オモダカ科、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、ツユクサ属、シダ植物の単条口・三条口胞子が含まれていた。その他に保存状態が悪いため同定が不能の花粉・胞子が含まれていた。

1試料に含まれる木本花粉・草本花粉・シダ植物胞子の割合は、木本花粉が36～40%、草本花粉が24～41%、シダ植物胞子が18～36%で、木本花粉の割合がやや高い結果が得られた。木本花粉では、マツ属（複雑管束亜属）が30%を超え最も産出率が高かった。その他の木本花粉の分類群は、0.2～2%と低率を示した。草本花粉では、イネ科が10～26%と高率を示した。次いで産出率の高い分類群はヨモギ属で3～8%、イネ属1～2%、ソバ属1%前後、アサ科0.2～1%を示した。これらの分類群は、3試料全てから共通して産出した。

3. 考察

・遺跡周辺の植生と環境

木本花粉・草本花粉・シダ植物胞子の割合は、それぞれ同程度かやや木本花粉の割合が高い。しかし、木本花粉は5割を超えず、むしろ草本花粉とシダ植物胞子を併せた割合の方が高くなる。このことは、畑遺構の周辺に木本植物の分布が多いというより、ある程度森林が切り開かれた環境であったことを示しているものと考えられる。

木本花粉では、マツ属（複雑管束亜属）の産出率が突出しており、他に際立って多く産出する分類群は見られない。このことは、潜在的な自然植生が遺構周辺の後背地に分布していたのではなく、人為作用に伴って遷移したアカマツの二次林が分布していたことを示唆しており、コナラ亜属など他にも二次林植生要素の分類群が産出することからも裏付けられる。

草本花粉では、イネ科やヨモギ属の産出率が高く、カヤツリグサ科、ナデシコ科なども3試料全てから産出している。これらの分類群が生育する環境から、畑遺構周辺は比較的乾燥している場所だったと推定される。また、

一般に花粉より紫外線や土壌生成などの風化作用に対する耐性が高いシダ植物胞子の産出率が高く、さらに保存状態が悪く同定不能の花粉が含まれることからこのことが支持される。

・栽培された植物の検討

栽培植物と考えられる分類群には、アサ科、ソバ属、イネ科、イネ属、クワ科 - イラクサ科が挙げられる。アサ科と同定した花粉の中には、発芽口の突出や外膜模様、大きさなどからアサ属が含まれていた。また、ソバ属花粉は、草本花粉・胞子総数を基数に算出した割合で1%以上産出すると、その近辺でソバが栽培されていた可能性が高い(中村, 1980)とされているが、本調査では1~1.8%とこの基準を超える値が得られた。さらに大型植物遺体の検討でも、アサ核やソバ果実が検出されており、アサとソバが畑遺構で栽培されていた植物の候補としての可能性が極めて高い。

イネ属花粉の産出は、上述の乾燥環境から陸稲の可能性も指摘できるが、現生稲作耕地でのイネ属の産出率(上中ら, 2009)に比べ低い。また、イネ科と同定した花粉の中には、花粉全体や発芽口の大きさ、外膜模様から、オオムギ属やコムギ属と見られるものも含まれており、ムギ類の栽培がおこなわれた可能性も考えられる。しかし、第4節で佐々木・バンドリ(2012)が指摘しているように、オオムギ - コムギの種子は炭化しており、イネやムギ類が畑遺構で栽培がされていたことを積極的に指摘することは難しい。

これらのことから、堆積物がどのくらいの期間を表すものかという問題が残るものの、畑遺構やその周辺では、二毛作のような複数の植物が栽培されていた可能性が指摘できる。さらにクワ科 - イラクサ科と同定した分類群には、大型植物遺体で出土している分類群のクワ属が含まれ、養蚕に欠かせないクワが近隣で栽培されていた可能性もある。

おわりに

以上のことから、遺跡が泥流に埋積する直前の畑で生育した作物を断定できないが、畑遺構とその周辺はある程度森林が切り開かれた場所であったこと、畑遺構やその周辺ではアサ、ソバ、イネやムギ類といった複数の作物が栽培されていたと考えられる。このように本調査お

よび大型植物遺体分析によって、近世における畑作の実態を示す重要な結果を得ることができたといえよう。

引用文献

- 中村純(1980) 古代農耕とくに稲作の花粉学的研究, 日本学術振興会編「考古学・歴史史の自然科学的研究」:581 - 602, 同朋社。
 佐々木由香, バンドリ スタルシャン(2012) 東宮遺跡から出土した大型植物遺体, 東宮遺跡報告書, 群馬県埋蔵文化財調査事業団, 437 - 461。
 上中央子・那須浩郎・佐々木由香・スダルシャン バンドリ・菊地有希子(2009年11月) 水田表層堆積物の花粉組成; 神奈川県葉山町谷戸田での事例, 日本植生学会要旨集。

表1 24号畑から産出した花粉化石(単位:%)

分類群	試料No.		
	1	2	5
木本花粉			
マツ属(複維管束亜属)	33.3	35.9	32.7
モミ属			0.2
ツガ属	0.4		
スギ	1.4		0.4
ヒノキ科			0.2
クルミ属-サワグルミ属			0.9
ハンノキ属	0.4	0.3	0.2
カバノキ属	0.4	0.3	
クマシデ属		0.3	0.2
ハシバミ属		0.7	
コナラ亜属	1.4	1.0	0.2
シイノキ属-マテバシイ属	0.4		
ニレ属-ケヤキ属	1.8	1.0	0.9
エノキ属-ムクノキ属	0.4		
モチノキ属	0.7		
カエデ属		0.3	
トチノキ属	0.7		
サンショウ属	0.4		
クワ科-イラクサ科		3.0	1.3
草本花粉			
アサ科	0.4	1.3	0.2
ソバ属	1.1	0.7	0.9
サナエタデ節-ウナギツカミ節	0.4		
アカザ科			0.4
ナデシコ科	0.4	0.7	0.4
キンボウゲ科	0.4		
アブラナ科			0.2
セリ科	0.4		0.4
オオバコ属	0.4		
オミナエシ属		1.0	0.9
タンポポ亜科	0.4	0.3	
キク亜科		1.3	0.9
ヨモギ属	8.1	3.3	3.7
ガマ属	0.4		
オモダカ科	0.4		
イネ科	26.3	9.6	20.6
イネ属	1.8	1.3	1.7
カヤツリグサ科	0.4	1.3	1.3
ツユクサ属	0.4		0.2
シダ植物胞子			
単条口	8.4	8.3	11.0
三条口	9.1	27.9	20.0
不能	4.2	7.0	4.3
不明	1.4	0.3	0.6
全体			
木本花粉	41.4	39.9	35.9
草本花粉	41.1	23.9	33.1
シダ植物胞子	17.5	36.2	31.0

5 東宮遺跡出土草履および筵の素材

はじめに

東宮遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原如に所在しており、天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う大規模な泥流(天明泥流)により埋没した、江戸時代の遺跡である。これまでに居敷跡や建物跡、当時の村の生活の様子がうかがえる貴重な遺物も多数出土している。ここでは、建物跡より検出された草履や筵などの編組製品の素材について、観察される機動細胞珪酸体の形態から母植物を検討するため、植物珪酸体分析を行なった。以下にこの結果と考察を示す。

1. 試料と方法

試料は、I区1号建物3床下より検出された草履(No.467)、同建物より検出された筵(No.468)である。草履(No.467)は全長約19.0cm×幅約7.0cmのほぼ完形で、径0.7cm程の3本のタテ縄が残存している。ヨコ材の幅は0.3cm程度である。また、直径約0.7cm、残存長7.0cmの鼻緒と思われる部分(以下鼻緒とする)が草履の脇5.0cmの位置に離れて残存していたため、草履と鼻緒それぞれから試料を採取した。筵(No.468)の全体形は、縦20.0cm×横21.0cmである。約2.5cmおきに素材幅0.5cmのタテ材が確認された。ヨコ材は密で素材幅は0.4cm程度である。編組技法については一般的な筵編みと判断された。なお、筵のタテ材は採取困難であるため、試料はヨコ材より採取した。以上3試料の一部を採取し、以下の手順に従って植物珪酸体を検出した。

乾燥させた試料を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化する。灰化する工程は藤原(1976)にほぼしたがって行なった。処理工程は、はじめ毎分5℃の割合で温度を上げ、100℃において15分ほどその温度を保ち、その後毎分2℃の割合で550℃まで温度を上げ、5時間温度を保持し、試料の灰化を行なった。灰化した試料について、その一部を取り出し、グリセリンを用いてプレパレートを作製し、検鏡した。

2. 観察の結果

1) 草履(1建No.467)

検鏡の結果、最も多く観察されたのはイネ型短細胞珪酸体列であった。このイネ型短細胞珪酸体列は、8の字のような短細胞珪酸体が細胞の形成方向と直角方向に連なる特徴を持ち、こうした配列はイネ、マコモ、ヨシなどで観察されるものである。また、イネの機動細胞珪酸体も得られた。葉の部分でのみ形成される機動細胞珪酸体は、数個連結しているものも観察された。また、イネ型以外の短細胞珪酸体列や機動細胞珪酸体は得られていない。

2) 鼻緒(1建No.467)

検鏡の結果、上記の草履と同様のイネの機動細胞珪酸体とイネ型短細胞珪酸体が観察された。またイネ型以外の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体は得られていない。

3) 筵(1建No.468)

検鏡の結果、イネの機動細胞珪酸体が多く得られた。特に連結しているものが多く観察されている。イネ型短細胞珪酸体列は検出されたものの、その数は少ない。草履や鼻緒と同様にイネ以外の機動細胞珪酸体や短細胞珪酸体列は検出されていない。

3. 考察

植物珪酸体分析により編組製品の素材を分析したところ、I区1号建物3床下から出土した草履(No.467)と、同建物より出土した筵(No.468)からイネの葉に形成されるイネの機動細胞珪酸体とイネの葉と茎に形成されるイネ型短細胞珪酸体が検出された。検出された機動細胞珪酸体のうち、単体で検出されたものについては、植物遺体に付着した土壌からもたらされた可能性も含まれる。しかし、連結した状態で土壌から検出されることは考えにくく、これら機動細胞珪酸体は素材そのものから得られたものと考えられることから、母植物はいずれも葉を含む稲藁である可能性が高いと判断された。これまで遺跡出土の藁製品は分析から素材が明らかになった例は管見ではなく、藁製品を遺物から議論する上で、本分析の結果は重要である。

通常、稲藁とは稲の茎を乾燥させたものを示すが、刈り取った直後の稲藁の束には、茎と葉が混ざり合っている。一般に、藁製品の製作の際には葉の部分除去(藁すぐり)して茎の部分を使用する(樋口1978)。しかし本分析の結果、葉が含まれることを示す機動細胞珪酸体

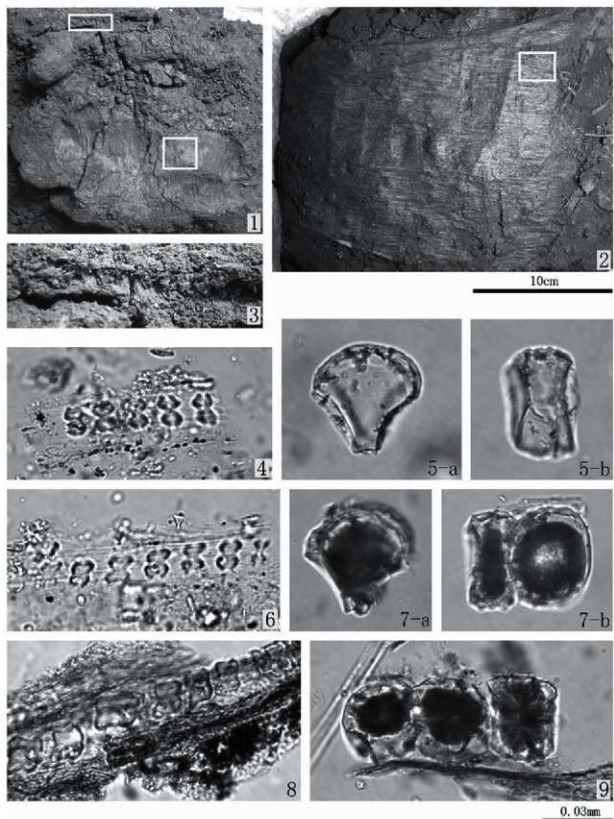
第4章 調査の成果とまとめ

が検出された。意図的か偶然かは不明であるが、試料の草履と筵にはイネの葉の部分も含まれていたと考えられる。

草履や筵などの素材の柔らかい藁製品については、使用期間の長さや頻度など、使われ方の違いにより、特定の部分が摩耗し、失われる可能性も考えられる。よって、遺跡から出土する藁製品に含まれる植物珪酸体の検出個数のみから、葉と茎の割合について解釈を加える場合には注意を要する。今後、葉を含めて編む事例や藁すぐりを経て製作する事例の特徴や出現時期、地域など民俗例と比較することにより、藁製品の製作技術史に関わる情報になり得るものと思われ、さらなる検討が必要であるとする。

引用文献

- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 樋口清之 (1978) 作る —手作り生活の知恵—. 生活歳時記. 三宝出版, 924-928.



図版1 東宮遺跡出土草履および籾の素材の植物珪酸体

1: 草履 (1 建No.467) 全体、2: 籾 (1 建No.468) 全体、3: 鼻緒拡大 (スケール任意) 4、6、8: イネ型短細胞珪酸体列 4: 草履、6: 鼻緒、8: 籾
 5、7、9: イネ機動細胞珪酸体 (a: 断面、b: 側面) 5: 草履、7: 鼻緒、9: 籾
 全体写真内白枠は試料採取位置を示す

6 東宮遺跡出土織物の繊維素材

群馬県長野原町の東宮遺跡から出土した布（5建No.223）の素材同定を行った。

【方法】出土布の小片（約0.5cm四方）をはさみで切り取り、アルコール-アセトン系列で脱水した後、エポキシ樹脂（Agar Low Viscosity Resin）に包埋し、回転式マイクローム（Microm HM350）で切片（厚さ10 μ m）を製作し、光学顕微鏡で観察した。

なお、この素材を同定するにあたり、絹（繭の真綿）、綿（実から直接取ったもの）、アサの茎、市販の麻縄、市販のジュート縄、カラムシの茎、アカソの茎などについても同様に切片を作成して比較した。

【結果】

試料織物は光学顕微鏡で観察できる範囲では縦糸、緯糸とも同じ素材であると判断された。縦糸、緯糸とも繊維を束ねたものが緩く撚られてある。個々の繊維は縦に細長く、断面は角の数が3～6の様々な形をした多角形で、直径はだいたい10～30 μ mである。細胞内腔はあるが極めて狭く、厚い細胞壁で出来ている。遺物切片では繊維が単独であるものから2～8本程度がくっつきあったものが見えるが、その形状からして本来は多数が不規則にくっつきあっていったものが、糸を作り、織物を織り、それを使用する過程や遺物化の過程で劣化を受けてばら

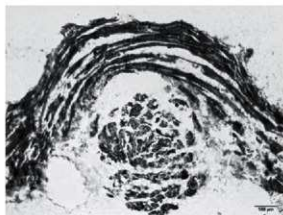
けたものと推定された。

試料繊維素材は、壁が厚く、細胞内腔が殆ど無い細長い繊維細胞で構成されていることから、植物の繊維であることが分かる。細胞断面が多角形で繊維同士が集合してあることから、それが丸～楕円で完全に繊維が単独であるワタや、断面が丸～楕円で多くが単独であるカラムシやアカソの類のものではないと言える。また断面が多角形で細胞同士のくっつき方が不規則であることから、断面がほぼ四角形で整然と配列するシナノキなどの靱皮繊維でないとも言える。一方、アサでは靱皮繊維は皮層中に不規則に集合して分布し、個々の繊維細胞の断面は多角形で集合の仕方が不規則、繊維細胞の太さは10～30 μ m程度であり、これらの点でも出土品はアサに良く一致することから、本出土織物の素材はアサの靱皮繊維であると同定された。

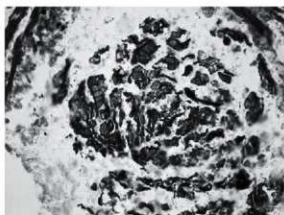
アサ（*Cannabis sativa* L.）はアサ科アサ属の大型の1年生草本で、雌雄異株、中央アジア方面が原産と言われており、古くに日本に渡ってきたとされるがその時期は明らかでない。



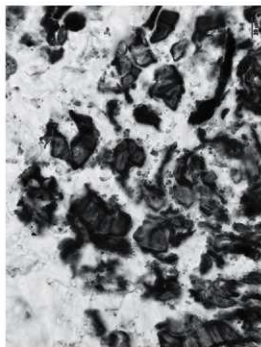
東宮遺跡織物断面（18倍）



東宮遺跡織物断面（35倍）



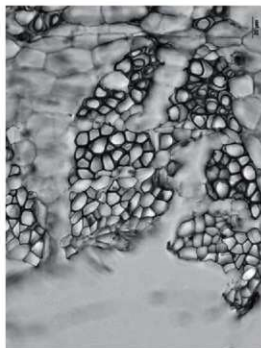
東宮遺跡織物断面 (70倍)



東宮遺跡織物断面 (270倍)



カラムシ茎外皮繊維断面 (270倍)



アサ若い茎外皮繊維断面 (270倍)

7 東宮遺跡出土獣骨

はじめに

東宮遺跡は、群馬県長野原町に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成19(2007)年10月～同年12月及び平成20(2008)年4月～同年12月まで実施された。

本遺跡の遺構は、天明3(1783)年の浅間山泥流により埋没した家屋が主である。本遺跡のⅠ区・Ⅱ区・Ⅳ区から、獣骨が出土したので以下に報告する。獣骨の計測方法は、基本的にフォン・デン・ドリーシュの方法にしたがった(von den DRIESCH 1976)。

1. Ⅰ区出土獣骨

Ⅰ区では、1号建物・2号建物・5号建物・4号石垣・4号溝・8号溝・Y-12グリッドから、獣骨が出土している。

(1) 1号建物出土獣骨

1号建物では、馬屋西2号桶・竈裏下・2号唐臼・馬屋南桶・9号地山・4号床地山から獣骨が出土している。

①馬屋西2号桶

魚類のブリ[*Seriola quinqueradiata*]の右方骨である。大きさは、約30mm×約36mmである。一部、切断痕があるため、調理されたものであると推定される。



写真1. 馬屋西2号桶出土ブリ右方骨

②竈裏下

種名不明の魚類の脊椎骨である。

③2号唐臼

アズマモグラ[*Mogera minor*]の下顎骨・肋骨・脊椎骨・

大腿骨・脛骨である。

④馬屋南桶

魚類のブリ[*Seriola quinqueradiata*]の主鰓蓋骨と擬鎖骨である。一部、切断痕があるため、調理されたものであると推定される。

⑤2号唐臼

アズマモグラ[*Mogera minor*]の下顎骨・肩甲骨・脊椎骨・肋骨・肋骨・上腕骨・大腿骨・脛骨等である。

⑥2号唐臼

アズマモグラ[*Mogera minor*]の肩甲骨・脊椎骨・肋骨等である。

⑦9号床地山遺物No.37

ニホンジカ[*Cervus nippon*]の枝角の先端部である。長さ約85mmで、基部は約27mm×約16mmの大きさである。直径約5mm～6mmの穿孔及び切断痕・切断途中の痕跡が認められる。雄の成獣であると推定される。



写真2. 9号床地山出土シカ角加工品

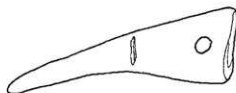


図1. 9号床地山出土シカ角加工品実測図

(2) 2号建物出土獣骨

2号建物では、2号桶・2号建物近辺・9号桶から、獣骨が出土している。

① 2号桶[遺物No.64]

ニホンジカ[*Cervus nippon*]の頭蓋骨である。吻部は破損しており、下顎骨は欠損している。また、角は、角座から上が切断されており、切断痕が認められるが、角を加工する目的で切断したものと推定される。成獣のオスであると推定される。



写真3. 2号桶出土獣骨出土状況



写真4. 2号桶出土獣骨[ニホンジカ頭蓋骨右側面観]



写真5. 2号桶出土獣骨[ニホンジカ頭蓋骨上面観]



写真6. 2号桶出土獣骨[ニホンジカ頭蓋骨下面観]

表1. ニホンジカ頭蓋骨計測値

No.	計測項目	計測値
20	白歯長(右)	87 mm
21	大白歯長(右)	49 mm
22	小白歯長(右)	38 mm
23	眼窩幅(右)	38 mm
24	眼窩高(右)	41 mm
26	後頭頸間幅	59 mm
28	大後頭孔幅	27 mm
31	最小前頭幅	96 mm
32	最大前頭幅	121 mm
38	脳頭蓋高	66 mm

② 2号建物近辺[遺物No.63]

2号建物の桶状板近辺から、ニホンジカ[*Cervus nippon*]の角が出土している。この角は、左側の鹿角である。一部破損しているが、現状で全長約30cmである。枝角に切断痕が認められる。ニホンジカのオスで、成獣であると推定される。

2号桶から出土したニホンジカの頭蓋骨と切断面は完全には一致せず、同一個体かどうかは、判定できなかった。但し、大きさは、同一個体としても矛盾しない。



写真7. 2号建物近辺ニホンジカ角出土状況



写真8. 2号建物近辺出土獣骨|ニホンジカ左鹿角外面観



写真9. 2号建物近辺出土獣骨|ニホンジカ左鹿角内面観

③ 2号建物9号桶遺物No.65]

イヌ[*Canis familiaris*]の頭蓋骨及び左右下顎骨・ネコ[*Felis catta*]の四肢骨・ニホンアナグマ[*Meles meles*]の四肢骨が出土している。半切桶の中から出土しているが、堆積物は、明らかに泥流とは異なるという。どのような目的であるかは、不明である。



写真10. 2号建物9号桶獣骨出土状況

・イヌ[*Canis familiaris*] イヌは、頭蓋骨・左右下顎骨が出土している。頭蓋骨は、上顎部が破損している。性別不明で成獣であると推定される。また、この頭蓋骨と下顎骨は、恐らく同一個体であると推定される。



写真11. 2号建物9号桶出土獣骨|イヌ頭蓋骨左側面観



写真12. 2号建物9号桶出土獣骨|イヌ頭蓋骨上面観



写真13. 2号建物9号桶出土獣骨|イヌ左右下顎骨

なお、本左下顎骨のM3（第3大白歯）は、生前脱落しており、P3（第3小白歯）とP4（第4小白歯）との間に、約5mmの歯隙が認められる。

表2. イヌ頭蓋骨計測値

No.	計測項目	計測値
25	後頭洞間幅	31 mm
27	大後歯孔最大幅	16 mm
28	大後歯孔最大高	14 mm
29	脳頭蓋前大幅	51 mm
31	脳頭蓋前小幅	37 mm
38	頭蓋高	50 mm

表3. イヌ下顎骨計測値

No.	計測項目	右計測値	左計測値
1	下顎全長	112 mm	111 mm
3	下顎長	105 mm	103 mm
10	大白歯列長	33 mm	32.5 mm
18	下顎枝高	45 mm	46 mm

・ネコ：ネコ[*Felis catus*]の左上腕骨と左大腿骨が出土している。



写真14. 2号建物9号桶出土獣骨[ネコ四肢骨]

・アナグマ：アナグマ[*Meles meles*]の右上腕骨・左大腿骨・左脛骨が出土している。



写真15. 2号建物9号桶出土獣骨[アナグマ四肢骨]

(3) 5号建物出土獣骨

5号建物では、1号床下・囲炉裏下から、獣骨が出土している。

①1号床下[遺物No.221]

ニホンジカ[*Cervus nippon*]の枝角の先端部である。大きさは、長さ約50mm・幅約11.4mm～14mmである。雄の成獣であると推定される。基部に、切断痕が認められるため、鹿角製品への加工過程であると推定される。表面は、良く磨かれているように見えるが、シカが生前擦ったためであろう。



写真16. 5号建物出土獣骨[シカ角]

②囲炉裏下

囲炉裏下の円筒形の木筒から出土している。魚の尾椎が数点出土しているが、尾椎のみで同定するのは困難であるので、種名は不明である。

(4) 4号石垣出土獣骨

①4号石垣東[遺物No.7]

ニホンジカ[*Cervus nippon*]の、右脛骨遠位部である。骨端部は癒合しているため、性別不明の成獣であると推



写真17. 4号石垣出土獣骨[ニホンジカ右脛骨前面観]

第4章 調査の成果とまとめ

定される。遠位部の最大幅は約35mm・最大前後径は約26.5mmである。

②4号石垣南トレンチ

ウマ[*Equus caballus*]の左中手骨である。骨端部は癒合しているため、性別不明の成獣であると推定される。最大長約213mm・近位端最大幅約51.5mm・遠位端最大幅約45mm・最小骨幹幅約30mmである。



写真18. 4号石垣出土獣骨[ウマ左中手骨前面観]

(5) 8号溝出土獣骨

種名不明の四肢骨片である。

(6) Y-1 2 グリッド出土獣骨

ウサギの四肢骨が出土している。カットマークは、認められなかった。骨端部は癒合しているため、性別不明で成獣であると推定される。



写真19. Y-12グリッド出土獣骨[ウサギ四肢骨: 左から、右脛骨・右大腿骨・左上脛骨・左大腿骨・左脛骨]

2. II区出土獣骨

II区では、7号建物から、獣骨が出土している。

(1) 7号建物出土獣骨

①床下

ウマ[*Equus caballus*]の乳切歯である。

②地山中

ウマ[*Equus caballus*]の、上顎左P2(第2小白歯)が1点出土している。計測値は、MD(歯冠近遠心径)が38mm・BL(歯冠頬舌径)が22mmである。歯冠高から、死亡年齢は約19歳~20歳の老馬であると推定される。



写真20. 7号建物出土獣骨[ウマ上顎左P2咬合面観]

3. IV区出土獣骨

IV区では、10号建物・13号建物から、獣骨が出土している。

(1) 10号建物出土獣骨

出土状況は、不明である。ネコ[*Felis catus*]の右下顎骨である。但し、I1(第1切歯)及びI2(第2切歯)は欠損している。大きさは、通常のネコと同様である。下顎歯には、咬耗はあまり認められない。性別不明で、成体であると推定される。



写真21. 10号建物出土獣骨[ネコ右下顎骨右側面観]

なお、下顎右白歯の顎骨には歯周病が認められ、M1(第1大白歯)の頬側には、齧蝕(虫歯)が認められる。このことは、所謂野良猫ではなく、飼い猫で、人間と同

様に軟らかい食物を与えられたために生じた可能性が高い。

表4. ネコ下顎骨計測値

No.	計測項目	計測値
1	下顎全長	64.5 mm
2	下顎長1	61.0 mm
3	下顎長2	56.0 mm
4	下顎長3	52.5 mm
5	下顎臼歯長	23.0 mm
6	第1大臼歯近遠心径	9.0 mm
7	第1大臼歯頬舌径	4.0 mm
8	下顎枝高	31.5 mm
9	下顎高(前)	11.5 mm
10	下顎高(後)	11.0 mm

(2) 13号建物出土獣骨[遺物No.157]

出土状況は、不明である。イノシシ[*Sus scrofa*]かブタ[*Sus scrofa domesticus*]の下顎左犬歯であると推定される。犬歯は破損しているが、大きいため、イノシシ

である可能性が高い。

謝辞

本遺跡では、海が無い群馬県内であり出土事例が無い海産魚類が出土している。I区1号建物馬屋西2号桶で出土した魚骨は、原稿当初ブリの方骨と鑑定したが、念のため、今回、縄文時代貝塚出土魚骨を多数鑑定しておられる動物考古学者の芝田英行氏に協力を依頼した。その結果、当初と同じ、ブリの方骨というお墨付きを得た。記して、感謝したい。

引用文献

von den DRIESCH, Angela 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites", Peabody Museum, Harvard University

表5. 東宮遺跡出土獣骨まとめ

区名	遺物名	遺物番号	種名	出土部位	備考	
I区	1号建物	馬屋西2号桶	—	ブリ	方骨	切断痕
		籠裏下	—	不明魚類	各種骨	—
		2号唐臼	—	アズマモグラ	下顎骨・四肢骨	—
		馬屋南桶	—	ブリ	上腕骨・腕骨	切断痕
		2号唐臼	—	アズマモグラ	下顎骨・四肢骨	—
		2号唐臼	—	アズマモグラ	四肢骨	—
	2号建物	9号床地山	1号敷下No.37	ニホンジカ	角加工品	穿孔
		2号桶	2建No.64	ニホンジカ	頭蓋骨	角切断痕
		2号建物近辺	2建No.63	ニホンジカ	角	角切断痕
			2建No.65	イヌ	頭蓋骨・四肢骨	歯隙
			9号桶 (No.48)	—	ネコ	四肢骨
		5号建物	1号床下	5建No.221	ニホンジカ	角
	囲炉裏下		—	不明魚類	尾椎	—
	4号石垣	石垣東	4号石垣No.7	ニホンジカ	脛骨	—
		石垣南トレンチ	—	ウマ	中手骨	—
	8号溝	—	—	不明	四肢骨	—
Y-12グリッド	—	—	ウサギ	四肢骨	—	
II区	7号建物	床下	—	ウマ	乳切歯	—
		地山	—	ウマ	小臼歯	—
IV区	10号建物	—	—	ネコ	下顎骨	歯周病・齧蝕
	13号建物	—	13建No.157	イノシシ	下顎犬歯	—

8 東宮遺跡出土圧搾機および燈明皿付着物の赤外分光分析

はじめに

東宮遺跡は、吾妻郡長野町原畑字東宮地内の段丘面に所在する遺跡である。調査では、天明3年(1783)の浅間火山が噴火した際の泥流により埋没した家屋跡や生活品が遺存状態の良い状態で検出された。ここでは、建物跡から出土した圧搾機および燈明皿付着物について赤外分光分析を行い、圧搾機で絞った対象物について検討した。

1. 試料と方法

分析対象資料は、I区4号建物から出土した木製の圧搾機はぞ穴内付着物(試料No.1)および表面付着物(試料No.2)とII区10号建物およびI区1号建物から出土した陶器製の燈明皿(試料No.3,4)の付着物である(表1、図版1)。なお、比較試料として、現在のナタネ油とアサ油などの赤外分光分析を行った。

各試料の付着物についてメスを用いて少量採取した後、赤外分光分析を行った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

2. 結果および考察

図1-1に10号建物および1号建物から出土した燈明皿の各付着物の赤外吸収スペクトル図を示す。

縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹);カイザー)である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、10号建物から出土した燈明皿(No.51)付着物の試料No.3の赤外

吸収位置を示す(表2)。10号建物から出土した燈明皿(No.51)付着物の試料No.3と1号建物から出土した燈明皿(No.198)付着物の試料No.4は、吸収位置が一致した。このことから、いずれも同一種の油の成分を反映した結果と考えられる。

4号建物から出土した圧搾機(No.86)のほぞ穴内付着物の試料No.1および表面付着物の試料No.2は、吸収度は異なるものの、10号建物から出土した燈明皿(No.51)付着物の試料No.3の吸収位置と概ね一致した(図1-2,3)。なお、圧搾機の付着成分は、燈明皿付着物の赤外吸収と完全には一致しない。これは、油以外の挟雑物を反映しているためと考えられる。

圧搾機のはぞ穴内付着物と表面付着物は、2点の燈明皿付着物(燈明油)の赤外吸収位置と概ね一致し、燈明油の油はこの種の圧搾機で絞られた油を使用した可能性が高い。なお、油の成分として、当時は菜種油や胡麻油、魚油、動物油などが使用されたと考えられるが、これらの油の成分と比較することにより、油の種類が絞り込めると期待される。なお、現在のナタネ油やアサ油あるいはゴマ油と比較したが、赤外吸収パターンは異なっていた(図2、表3)。一般的にはナタネ油である可能性が高いと考えられるが、少なくとも東宮遺跡で使用された燈明油は、埋没後における油成分の劣化に伴って成分が変化した可能性や挟雑物の影響で成分が変化した可能性が考えられる。

おわりに

4号建物から出土した圧搾機と10号建物および1号建物から出土した2点の燈明皿の付着物について、圧搾機で絞った対象物の成分を調べるために赤外分光分析を行った。その結果、圧搾機のはぞ穴内付着物と表面付着物は、燈明皿付着物(燈明油)の赤外吸収位置と概ね一致し、燈明皿の油はこの種の圧搾機で絞られた油である可能性が高いことが明らかになった。ただし、現在の植物

表1 圧搾機および燈明皿と分析試料採取位置

試料No.	遺物名	位置	付着物の特徴	調査区	遺構名	遺物No.	時期
1	圧搾機横木部材	ほぞ穴内	茶褐色	I区	4号建物	86	天明3年(1783年)泥流埋没
2		表面	茶褐色				
3	燈明皿	内面底部	黒色、黄色	II区	10号建物	51	
4	燈明皿	外面口縁部	黒色、黄褐色	I区	1号建物	198	

性油の成分とは一致しなかった。

表2 燈明皿(No. 51)付着物No. 3の
赤外吸収位置とその強度

吸収No.	燈明皿付着物	
	位置	強度
1	2927.41	23.049
2	2854.13	35.588
3	1707.66	37.566
4	1628.59	43.011
5	1557.24	36.259
6	1459.85	41.188
7	1414.53	41.236
8	1376.93	49.458
9	1236.15	47.810
10	1168.65	44.959
11	1045.23	35.009
12	912.16	61.089
13	879.38	67.679
14	785.85	67.238

表3 ナタネ油の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	ナタネ油	
	位置	強度
1	3008.41	93.458
2	2925.48	78.337
3	2854.13	84.591
4	1747.19	82.832
5	1457.92	93.556
6	1376.93	95.580
7	1236.15	94.708
8	1162.87	91.311
9	1094.40	94.269
10	723.18	95.899

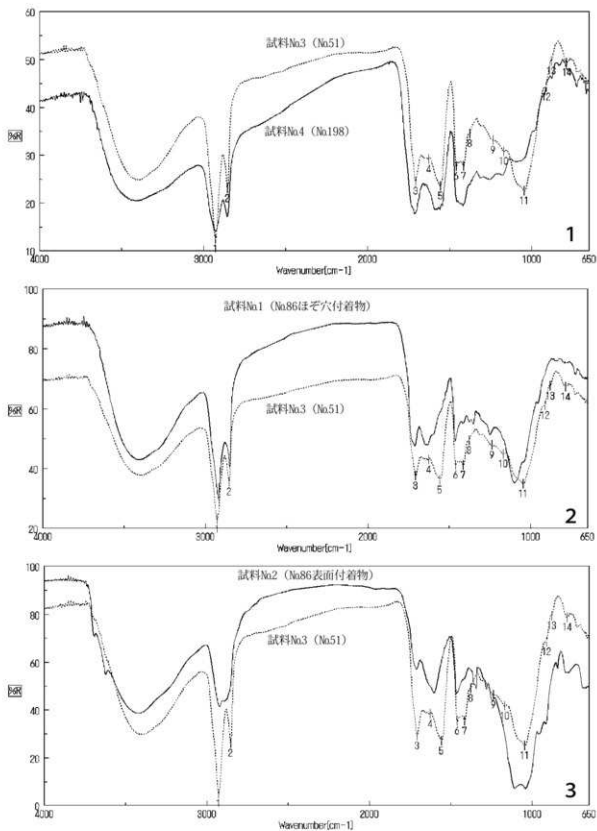


図1 圧搾機および燈明皿付着物の赤外吸収スペクトル図（縦軸は透過率、横軸は波数を示す）

1. 燈明皿10建No.51付着物（試料No.3）および燈明皿1建No.198付着物（試料No.4）の赤外吸収スペクトル図

2. 圧搾機4建No.86ほぞ穴（試料No.1）および燈明皿10建No.51付着物（試料No.3）の赤外吸収スペクトル図

3. 圧搾機4建No.86表面（試料No.2）および燈明皿10建No.51付着物（試料No.3）の赤外吸収スペクトル図

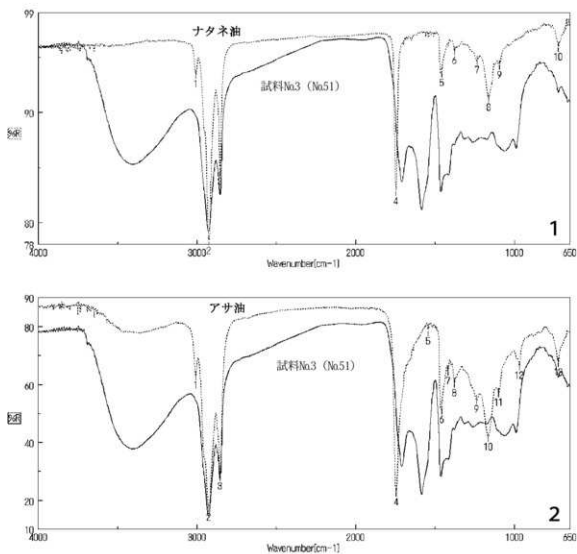
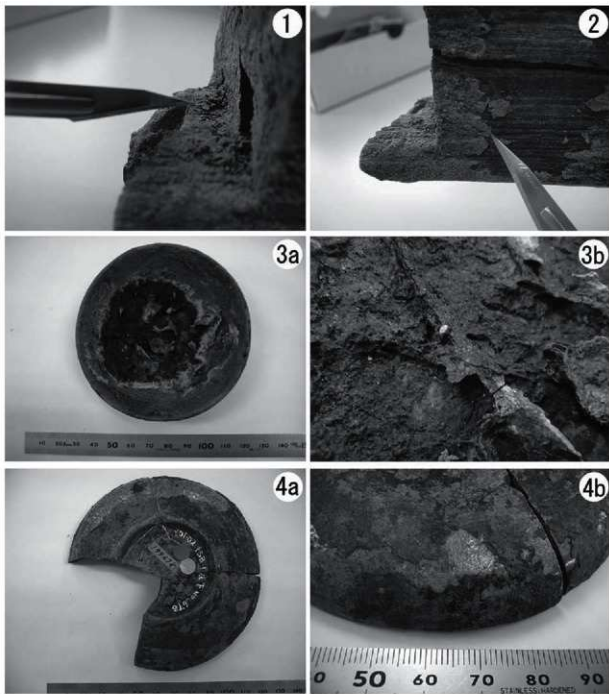


図2 標準試料とNo.3 (10建No.51:燈明油)の赤外スペクトル図(縦軸は透過率、横軸は波数を示す)

1. ナタネ油と試料No.3 (10建No.51:燈明油)の赤外吸収スペクトル図(数字:ナタネ油の主な吸収)
2. アサ油と試料No.3 (10建No.51:燈明油)の赤外吸収スペクトル図(数字:アサ油の主な吸収)



図版1 压榨機縦木部材と燈明皿の各付着物

1. 压榨機縦木部材ほぞ穴付着物（試料No.1）、2. 同表面付着物（試料No.2）3a. 燈明皿10建No.51、3b. 燈明皿10建No.51内面底部付着物（試料No.3）4a. 燈明皿1建No.198、4b. 燈明皿1建No.198外面口縁部付着物（試料No.4）

9 東宮遺跡出土鉄鍋類補修痕跡について

はじめに

東宮遺跡は、吾妻郡長野町川原畑に位置する。発掘調査では、天明三年（1783年）の浅間山噴火に伴う泥流により被覆された建物跡が検出され、多数の遺物も出土している。

本遺跡からは、建物跡を中心に鉄鍋類も多く出土しているが、その中には、損傷部分を金属で溶接し補修した補修痕跡が見られることが確認された。鉄鍋類の欠損箇所に、溶接による補修痕跡が確認できる出土例は、管見の範囲ではない。

ここでは、鉄鍋類欠損箇所の溶接に使用された金属について、電子線プローブマイクロアナライザー分析によりその成分を確認し、18世紀後半頃の鉄鍋類補修に関わる基礎的な資料としたい。

1. 試料と方法

出土した鉄鍋類は24点を数える。その内、建物に帰属できるものが21点あり、溶接による補修痕跡は8点確認された（表1）。鉄鍋類の中には、木製の蓋がされたまま出土するなど、極めて良好な遺存状況のものも見られたが、被覆する泥流に鉄分が多かったためか、鍋の多くは錆による劣化が著しく、また泥流によってか、激しく破損しているものも見られた。そのため、破片で出土した鉄鍋類も多くあり、24点以上の鉄鍋類があったことも推測できる。出土点数や補修痕跡のある鉄鍋類の点数については、およそと考慮していただきたい。

分析は、9号建物No.49、13号建物No.124・No.120②の3点、計4箇所で行った。同一の遺物で2箇所の分析を行ったのは、溶接部の金属が均質ではないことを考慮し、溶接部端部と中央部で実施したためである。

東宮遺跡から出土した鉄鍋類は、大きさも多様で、形態も異なる。また、注口を伴う鉄瓶の様なものまで見られた。鉄鍋類の大きさが損傷部分の補修方法に影響することも考慮し、今回の分析においては、異なる大きさの鉄鍋類を対象とした。

以下は、群馬県立群馬産業技術センターで行った分析結果である。

表1 東宮遺跡建物跡出土鉄鍋類一覧表

区	遺構名称	鉄鍋類	補修痕	茶釜	補修痕
I	1号建物	2	1	1	0
I	4号建物	2	1	-	-
I	5号建物	3	0	-	-
II	7号建物	3	2	-	-
IV	9号建物	4	1	-	-
IV	10号建物	-	-	-	-
IV	11号建物	2	1	-	-
IV	13号建物	5	2	2	0
	合計	21	8	3	0

鉄鍋類溶接部分について、電子線プローブマイクロアナライザー分析を行った。分析対象資料は、東宮遺跡IV区9号建物出土No.49と同13号建物出土No.124・No.120②の鉄鍋に見られた溶接部分である。分析は、低真空走査電子顕微鏡/エネルギー分散型X線分析装置（日本電子株式会社社製JSM-5600LV/JED-2200）を用いて行った。

試料は、13号建物No.124の鉄鍋溶接部のみ少量採取して行い、他のものは破片であったため、そのまま分析を実施した。各試料から得られたX線スペクトルは、図1～4に示す通りである。

解析の結果得られたX線スペクトルには、以下の元素の特性X線が認められた。尚、主成分とは概ね10重量%より多くを示し、副成分は概ね1～10重量%、微量成分とは概ね1重量%未満を示している。また、初めに記載されたものほど、より多くの成分を占めている。

①9号建物No.49 a（中央部、図1）

主成分：銅（Cu）、酸素（O）、鉄（Fe）

副成分：イオウ（S）、ケイ素（Si）、炭素（C）、アルミニウム（Al）

微量成分：スズ（Sn）

②9号建物No.49 b（端部、図2）

主成分：銅（Cu）

副成分：イオウ（S）、酸素（O）、鉄（Fe）、スズ（Sn）
微量成分：炭素（C）、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）

③13号建物No.124（図3）

主成分：銅（Cu）、酸素（O）、スズ（Sn）

副成分：ケイ素（Si）、鉄（Fe）、アルミニウム（Al）
微量成分：塩素（Cl）、イオウ（S）、炭素（C）

④13号建物No.120②（図4）

主成分：銅（Cu）、酸素（O）、ケイ素（Si）、鉄（Fe）

副成分：アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）
微量成分：炭素（C）

2. まとめと課題

ここでは、鉄鍋類の分析結果、及び遺物の出土状況を踏まえ、まとめと若干の課題を述べたい。

電子線プローブマイクロアナライザーによる鉄鍋類溶接部の分析では、4点とも主成分として銅が確認できた。また、スズも確認できたことは、鉄鍋類の補修時に、主に銅とスズの合金が使用されていたことが指摘できる。銅を主成分とするスズとの合金は青銅とも呼ばれる。青銅は、展延性と、鑄造に適した融点の低さや流動性があり、加工がしやすく、耐食性にも優れていると言われている。このため、鉄鍋類の補修には銅とスズの合金が使用されたものと推測される。

しかし、スズの割合は試料によって異なることも確認された。対象試料に対し、分析地点は僅かな範囲であり、また、9号建物No.49 a・bの結果からも均質に合金されていないことも考えられる。意図的にスズの割合を変えていたことも想定できるが、今回の分析及び観察では結論付けることはできなかった。

分析では、ともに酸素が確認された。これは、溶接部が錆びていたことに起因するものと思われる。またイオウについては、浅間山噴火で発生した泥流で被覆されていたことに起因するものと思われる。鉄が確認されたものもあるが、溶接部分に使用された金属に、僅かに鉄が含まれていたためだろう。13号建物No.120②ではカルシウムが確認されたが、その要因については判然としない。

今回の分析結果によって、溶接に使用された金属についてのおよその様相は確認できた。しかし、出土した全ての補修痕跡の分析は行っていない。また、詳細な合金の割合や融点などについても確認する必要があるだろう。

玉村町上福島中町遺跡では、同様に天明泥流下から建物跡が検出され、鉄鍋類も出土している。しかし、溶接による補修痕跡は確認できず¹⁾、少なくとも群馬県内の天明下の遺跡に、溶接による補修痕跡が同様の頻度で見られるものではないと思われる。東宮遺跡やその周辺地域で溶接による補修が多い傾向があるのか、或いは東宮遺跡が他の遺跡よりも良好な遺存状況なため確認された可能性も考えられる。

東宮遺跡で出土した鉄鍋類の補修痕跡については、今後も検証が必要だろう。これらについては、今後の課題

と考えている。

註

1) 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『上福島中町遺跡』第318頁及び調査担当者に確認をした。

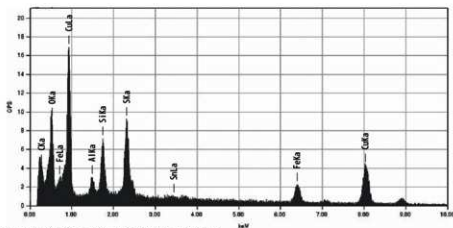


図1 9号建物No49a溶接部より得られたX線スペクトル

測定パラメータ

加速電圧：15.0kV 照射電流：0.20000nA 経過時間：124.12秒 デッドタイム：21% 有効時間：100.00秒

計数率：1089カウント/秒 プリセット：ライブタイム100秒 エネルギー範囲：0-20keV PHAモード：T3

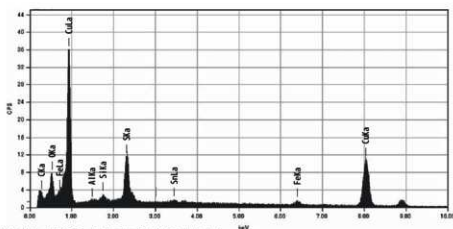


図2 9号建物No49b溶接部より得られたX線スペクトル

測定パラメータ

加速電圧：15.0kV 照射電流：0.20000nA 経過時間：135.40秒 デッドタイム：24% 有効時間：100.00秒

計数率：1587カウント/秒 プリセット：ライブタイム100秒 エネルギー範囲：0-20keV PHAモード：T3

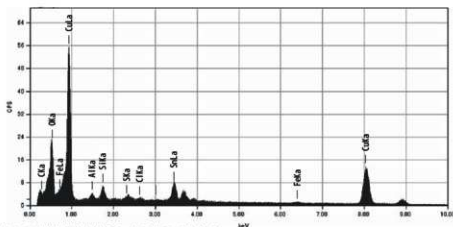


図3 13号建物No124溶接部より得られたX線スペクトル

測定パラメータ

加速電圧：15.0kV 照射電流：0.20000nA 経過時間：154.33秒 デッドタイム：41% 有効時間：100.00秒

計数率：2510カウント/秒 プリセット：ライブタイム100秒 エネルギー範囲：0-20keV PHAモード：T3

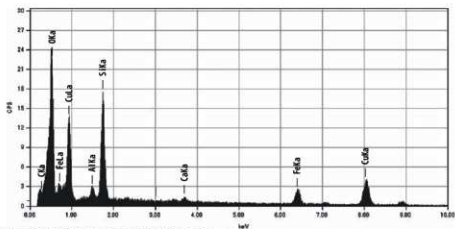


図4 13号建物No120②溶接部より得られたX線スペクトル

測定パラメータ

加速電圧：15.0kV 照射電流：0.20000nA 経過時間：123.61秒 デッドタイム：17% 有効時間：100.00秒
 計数率：981カウント/秒 プリセット：ライブタイム100秒 エネルギー範囲：0-20keV PHAモード：T3



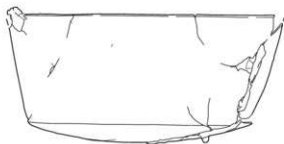
写真1 9建No49鉄鋼。矢印は分析地点



写真2 13建No124鉄鋼。矢印は分析地点



写真3 13建No120②溶接部。矢印は分析地点



9建-49 (1/5)



13建-124 (1/5)

10 東宮遺跡出土桶内付着物の分析について

はじめに

東宮遺跡は、吾妻郡長野町川原畑に位置する。発掘調査では、天明三年（1783年）浅間山噴火に伴う泥流により被覆された建物跡が検出され、多数の遺物が出土している。

木製品も数多く出土し、桶も多く見られた。しかし、蓋が底部に密着するようにあった桶は、10号建物No.143のみである。『東宮遺跡（1）—遺構・建築部材編—』では、10号建物を、酒造りを行っていた酒蔵と報告している。No.143の桶は、酒蔵という特殊な遺構から出土した遺物でもあった。

10号建物No.143の桶は、口径28cmほどの、いわゆる「半切桶」である。この桶には、密着した蓋と底板の間に付着物が見られた。付着物は均一ではなく、一部には、微小な粒状に見える部分も確認できた（写真3～5）。桶の側板の一部は欠損しており、桶内に泥流の一部が流入したことも考えられるが、酒蔵より出土した桶の中で蓋がされたまま出土した例は他にない。No.143の桶に酒造りが必要な酒母や麹などが入れられ、その一部が遺存している可能性も否定できない。出土状況の特殊性から、桶内面にある付着物を分析する必要があると考えた。

ここでは、光学顕微鏡写真による10号建物No.143桶内の付着物と清酒用酵母との比較、及び赤外線分光分析を実施し、酒造りに必要な酒母や麹、乳酸菌等の有無を確認した。

1. 試料と方法

酒蔵である10号建物より出土したNo.143の桶には、底板と密着するように蓋がされ、底板と蓋の間には一様ではない付着物が見られた。分析は、付着物の一部を僅かに採取して実施した（写真3・4）。

以下は、群馬県立群馬産業技術センターで行った分析結果である。

東宮遺跡Ⅳ区10号建物No.143の桶内付着物について、赤外線分光分析を行った。分析は、ThermoFisher Scientific社製フーリエ変換赤外線分光分析装置

Magna-750および赤外線顕微鏡Nic-Planを用い、顕微ATR法により行った。ATR媒質にはゲルマニウムを用い、波数分解能8 cm⁻¹で測定を行った。得られたATRスペクトルに対して赤外光滑り込み深さを考慮したATR補正を実施した。

また、試料の光学顕微鏡写真撮影を実施した。光学顕微鏡写真は、ライツ社製光学顕微鏡DIALUX20型を用いて対物25倍、接眼12.5倍レンズを通し、デジタルカメラで記録した画像である。

赤外線分光分析の結果、供試物品から得られた赤外線スペクトルは図1の通りである。解析の結果、供試物品には主として、N-H基または水酸基、炭化水素基、タンパク質などのペプチド結合を有する化合物に特徴的な赤外線スペクトルが認められた。

また、供試物品及び対象品（清酒用酵母）の光学顕微鏡写真は写真6・7の通りである。

2. まとめと課題

ここでは、桶付着物の分析結果及び遺物の出土状況を踏まえ、まとめと若干の課題を述べたい。

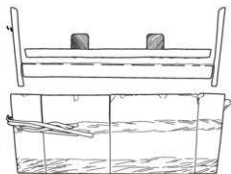
赤外線分光分析による10号建物No.143の桶内付着物の分析結果から、ペプチド結合を有する化合物が確認された。しかし、その量は微量であった。今回の分析結果から、分析対象資料に生物の存在は指摘できるが、それを酒造りに必要な酒母や麹、乳酸菌と同定することはできなかった。また、供試物品からはS10も確認され、桶内が泥流の影響を受けている可能性も指摘された。

光学顕微鏡による写真撮影を実施し、No.143の桶付着物と清酒用酵母を比較した結果、No.143桶内付着物（写真6）と清酒用酵母（写真7）では、明らかに大きさが異なることが確認された。少なくとも分析対象資料に、清酒用酵母は遺存していなかったと考えられる。

東宮遺跡は、天明三年（1783年）新暦8月5日、浅間山噴火に伴う泥流によって被災した遺跡である。10号建物においても、被災当日までは日常の生活が続けられていたと思われる、その日付から、次の酒造りに備えた作業が行われていたとも推測される。10号建物が新暦8月5日に何を行っていたのかは明らかでないが、この様な特殊な出土状況から考えると、少なくとも天明泥流で被覆された時には、No.143の桶に蓋がされていた可能性は高

いだろう。

今回の分析は、桶内に残る付着物の一部に酒母や麹が遺存しているのではないかと考え、僅かに採取し実施した。群馬県立群馬産業技術センターで行われた分析結果から判断すれば、酒母や麹、乳酸菌などの存在は肯定できない。しかし、220年以上土中であつたことがどの様に影響したかは判断できず、また分析したものがごく一部であつたことから、その全てを確認したものではない。また、天明期における同規模の酒造りにおいて、蓋を伴う半切桶が、どの様な作業の中で使用されていたかなど、異なる視点での検証も必要になるだろう。No.143の桶と酒造りとの関係については、今後の課題としたい。



10建-143 (1/5)

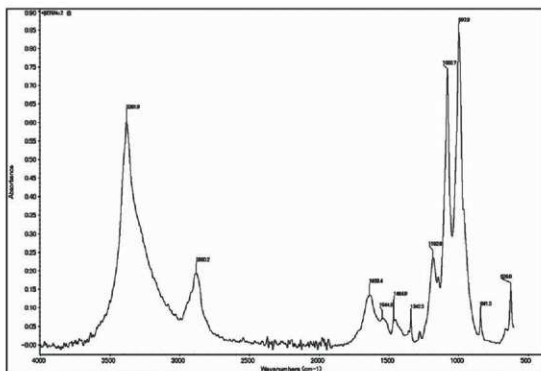


図1 10建No143桶内付着物より得られた赤外線スペクトル



写真1 10建No143桶（矢印）出土状況①



写真2 10建No143桶出土状況②



写真3 10建No143桶蓋内側。矢印は試料採取地点



写真4 10建No143桶底板内側。矢印は試料採取地点



写真5 10建No143桶蓋内側 近接

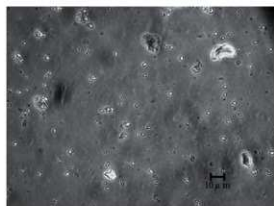


写真6 10建No143桶内付着物 光学顕微鏡写真



写真7 清酒用酵母 光学顕微鏡写真

遺物観察表

遺物観察表(土器・陶磁器)

I区1号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)

*() 内の数値は、欠損による残存部最大値が推定値である。

図番 番号	掲載番号	出土位置	種類 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	胎土 焼成			
21R	1建168	1建1床	染付 碗	口縁～高台部 60%	①7.0 ②3.9 ③5.3	良好、灰白色	端反碗。見込み五弁花。高台内二重方形枠に渦巻。肥前。	18世紀前	
21R	1建169	1建3床下	色絵 碗	口縁～胴部片	①(7.4) ③(3.0)	良好、灰白色	小碗か小鉢。上絵付。京・信楽系。	近世以降	
21R	1建170	1建3床下	陶器 碗	胴～高台部 40%	②3.2 ③(2.0)	良好、灰白色	灰釉。小碗。美濃。	遡明8小期	
21R	1建171	1建1床下	陶器 碗	口縁～高台部 90%	①6.4 ②3.0 ③4.2	良好、灰白色	灰釉。小碗。美濃。	遡明7小期	
21R	1建172	1建南	陶器 碗	口縁～高台部 80%	①7.0 ②3.2 ③4.9	良好、灰白色	灰釉。小碗。美濃。	遡明7小期	
21R	1建173	1建馬屋南	染付 碗	高台部片	②(4.2) ③(2.2)	良好、灰白色	見込み蛇目輪割苎。波佐見系。	18世紀後	
21R	1建174	1建上階	染付 碗	口縁～胴部片	①(4.8) ③(4.1)	良好、灰白色	外面に草文花。波佐見系。	18世紀後	
21R	1建175	1建1床下	染付 碗	口縁～高台部 80%	①10.0 ②4.0 ③5.0	良好、灰白色	高台内に崩れた跡あり。波佐見系。	18世紀後	
21R	1建176	1建上階	染付 碗	口縁～高台部 60%	①(9.3) ②3.4 ③5.1	良好、灰白色	小正東碗。外面に梵字文。見込みに寿か。漆黒。肥前。	1770～80年代	
21R	1建177	1建1床上	染付 碗	口縁～高台部 80%	①9.2 ②3.4 ③5.5	良好、灰白色	小丸碗。外面及び見込みに馬文。肥前。1建178と同種か。	1760～80年代中	
21R	1建178	1建3床下	染付 碗	口縁～胴部 30%	①(4.8) ③(4.8)	良好、灰白色	肥前系。1建177と同種か。	1760～80年代中	
21R	1建179	1建上階	青磁染付 碗	口縁部片	①(4.8) ③(4.7)	良好、灰白色	筒形碗か楕口。肥前。	1750～80年代	
21R	1建180	1建5床	染付 碗	完形	①8.0 ②4.2 ③6.0	良好、灰白色	筒形碗。外面に半菊文花。見込みにやや崩れた五弁花。肥前。	1760～80年代	
21R	1建181	1建北	色絵 碗	胴～高台部 40%	②3.5 ③(4.7)	良好、灰白色	染付後、唐草文、菊花文を上絵付。一部に金彩を残す。見込み染付による松竹梅。有田。	1750～80年代	
21R	1建182	1建3床下	陶器染付 碗	口縁部片	①(10.0) ③(4.0)	良好、灰白色	肥前。	18世紀前	
21R	1建183	1建	陶器染付 碗	口縁部片	①(12.0) ③(4.4)	良好、灰白色	肥前。	18世紀前	
21R	1建184	1建5床	陶器染付 碗	完形	①10.3 ②4.2 ③6.6	良好、灰白色	外面に東屋山水文。肥前。	18世紀前	
21R	1建185	1建東内	陶器染付 碗	口縁～高台部 50%	①(11.0) ②(4.0) ③7.3	良好、灰白色	肥前。	18世紀前	
21R	1建186	1建5床	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①(10.4) ②4.6 ③7.2	良好、灰白色	丸碗。美濃。	遡明8小期	
21R	1建187	1建東	陶器 碗	口縁～胴部 40%	①9.0 ③5.0	良好、灰白色	甜茶碗。美濃。	遡明8小期	
21R	1建188	52区A-6	染付 皿	胴～高台部 40%	②7.2 ③(1.1)	良好、灰白色	小皿。肥前。	18世紀後半	
21R	1建189	1建4床下	染付 皿	完形	①10.6 ②7.0 ③2.0	良好、灰白色	小皿。輪花皿。見込み五弁花。肥前。	1740～80年代	
21R	1建190	1建4床下	染付 皿	口縁～高台部 80%	①10.4 ②6.6 ③2.1	良好、灰白色	小皿。見込み五弁花。漆黒。肥前。	18第2・3四半期	
21R	1建191	1建5床	染付 皿	一部欠損	①10.6 ②6.5 ③2.0	良好、灰白色	小皿。見込み五弁花。肥前。	18第2・3四半期	
21R	1建192	1建6床	陶器 皿	口縁部片	①12.9 ③(3.1)	良好、灰白色	京焼風。肥前か。	18世紀か	
21R	1建193	1建馬屋北	青磁 皿	口縁部片	③(3.5)	良好、灰白色	輪花皿。漆黒。有田。	18世紀	
22R	1建194	1建室東	陶器 仏蘭具	口縁～底部 80%	①7.4 ②4.5 ③4.7	良好、灰白色	灰釉。美濃。	遡明8小期	
22R	1建195	1建7床	染付 瓶	胴～高台部 40%	②(5.6) ③(3.2)	良好、灰白色	油壺か。肥前。	18世紀	
22R	1建196	1建3四角裏	陶器 徳利	口縁～胴部 30%	③3.6 ③(5.6)	良好、灰白色	灰釉。美濃	遡明7小期	
22R	1建197	1建5床	陶器 灯火皿	口縁～底部 80%	①11.3 ②6.6 ③3.7	良好、灰白色	底部に焼成時の重む焼き痕跡を残す。美濃。	遡明8小期	
22R	1建198	1建1床下	陶器 灯火皿	口縁～底部 70%	①10.6 ②5.0 ③2.3	良好、淡黄色	外面及び内面口縁部に油煙を顯著に残す。見込み目皿3カ所。美濃。	遡明7小期	
22R	1建199	1建3床下	染付 火入	完形	①9.4 ②6.8 ③6.9	良好、灰白色	外面に丸文。内面に灰を残す。蛇ノ目四形高台。有田。	18世紀後	
22R	1建200	1建馬屋内	色絵 香炉	一部欠損	①7.6 ②2.6 ③4.6	良好、灰白色	外面に横方向赤色三条の上絵。胴にも赤色の上絵を施す。内面に灰を残し、燃え残った線香が遺存する。線香は確認できる範囲で199本を数える。有田。	18世紀後	
22R	1建201	1建東内	陶器 香炉	底部片	③(1.5)	良好、灰白色	筒形香炉か。	遡明7か8小期	
22R	1建202	52区B-4	陶器 灯火皿	底部片	②6.0 ③(1.6)	良好。 に赤い釉色。	内面を中心に油煙を残す。志戸呂か。	近世か	
22R	1建203	1建3床下	陶器 香炉	完形	①10.0 ②7.6 ③6.1	良好、灰白色	筒形香炉。内面に焼成時の重む焼き痕跡を残す。美濃。	遡明7小期	
22R	1建204	1建北	陶器 すり鉢	底部片	③(2.9)	良好、灰白色	見込み及び底部外面に使用痕跡顯著。肥前。	遡明5～7小期	
22R	1建205	1建北	在土上器 鉢か	口縁部片	①(18.0) ③(6.8)	胎砂較少。 良好。灰色。	口縁部平坦で、口縁部に張り出しを持つ。内外面顔色は黒色。口口成り。器種、時期ともに不詳。		

遺物観察表

国版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
22回	1建206	1建上間	陶器 碗	底部片	②4.8 ③(1.6)	良好、灰白色		尾呂茶碗高台部の周囲を打ち欠き、円盤状に成形。美濃。	建房7小期
22回	1建207	1建上間	陶器 碗	底部片	②5.7 ③(1.5)	良好、灰白色		尾呂茶碗高台部の周囲を打ち欠き、円盤状に成形。美濃。	建房6小期

1区2号建物 遺物観察表 (土器・陶磁器)

国版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
69回	2建32	2建9桶	染付 小坏	胴～高台部片	②1.6 ③(0.9)	良好、灰白色		肥前。	
69回	2建33	2建	染付 碗	口縁～高台部 50%	①(10.0) ②3.6 ③4.9	良好、灰白色		外面に雪輪草花文。肥前。	18世紀後
69回	2建34	2建	染付 碗	口縁～胴部片	①9.0 ③(4.3)	良好、灰白色		外面に二重欄目文。肥前。	18世紀後
69回	2建35	2建	染付 碗	口縁～高台部 40%	①(9.1) ②3.2 ③4.6	良好、灰白色		肥前系。	1780～19世紀前
69回	2建36	2建	陶器 碗	口縁～高台部 50%	①(9.7) ②4.9 ③5.5	良好、灰白色		丸碗。被熱。美濃。	建房8小期か
69回	2建37	2建	陶器 碗	口縁部片	①(9.4) ②(4.4)	良好、灰白色		腰箱茶碗。瀬戸。	建房8か9小期
69回	2建38	2建	陶器 碗	口縁～高台部 50%	①(8.6) ②3.0 ③4.8	良好、灰色		見込み割れた五弁花。瀬戸。	18世紀末～19世紀前
69回	2建39	4区A-23	青磁 香炉	口縁～胴部片	①11.0 ③(3.1)	良好、灰白色		肥前か。	18世紀後～19世紀中
69回	2建40	2建周辺	陶器 香炉	胴部片	③(4.2)	良好、灰白色		四形香炉。美濃。	建房6か7小期
69回	2建41	41KY-24	陶器 鉢	口縁部片	①(23.5) ③(4.1)	良好、灰色		鉢鉢か。京・信楽系の技術で焼成。生産地不明。	19世紀
69回	2建42	41KY-24	不詳	破片	③(2.7)	良好。 にぶい、黄褐色		型押し成形。	

1区3号建物 遺物観察表 (土器・陶磁器)

国版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
74回	3建1	3建	陶器 碗	口縁～高台部 90%	①10.6 ②4.6 ③6.8	良好、灰白色		丸碗。美濃。	建房8小期

1区4号建物 遺物観察表 (土器・陶磁器)

国版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
77回	4建32	4建床上	染付 碗	ほぼ完形	①8.0 ②3.0 ③3.6	良好、灰白色		外面に雨降り文。肥前。	18世紀前
77回	4建33	4建1床下	染付 碗	口縁部片	①7.2 ③(3.1)	良好、灰白色		端反碗。肥前。	18世紀前
77回	4建34	4建床上	染付 碗	口縁～高台部 50%	①7.0 ②3.5 ③5.1	良好、灰白色		端反碗。見込み五弁花。高台内二重方 形枠に透短か。肥前。	18世紀前
77回	4建35	4建東 上台下	染付 碗	口縁～高台部 60%	①(7.3) ②3.8 ③5.1	良好、灰白色		端反碗。見込み五弁花。高台内二重方 形枠に透短。漆継。肥前。	18世紀前
77回	4建36	4建1床下	陶器 碗	口縁部片	①(7.0) ②(2.6)	良好、灰白色		小碗。口縁部に呉須による給付。美濃。	建房8小期
77回	4建37	4建床上	陶器 碗	一部欠損	①6.8 ②2.7 ③3.9	良好、灰白色		小碗。口縁部に呉須による給付。美濃。	建房8小期
77回	4建38	4建	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①6.8 ②3.0 ③4.0	良好、灰白色		灰釉。小碗。美濃。	建房8小期
77回	4建39	4建1床下	染付 碗	口縁～高台部 70%	①(9.3) ②3.7 ③5.1	良好、灰白色		外面コンニク印刷による施文。5カ 所か。肥前。	18世紀前
77回	4建40	4建床上	染付 碗	完形	②9.0 ②3.4 ③4.7	良好、灰白色		小広東碗。外面に二十四尊。見込みに 東旭山水文。高台内に昆虫。有田。	1770～80年代
77回	4建41	4建1床下	青磁染付 碗	口縁～胴部 40%	①(8.4) ③(5.0)	良好、灰白色		四形碗。肥前。	1760～80年代
77回	4建42	4建2床下	染付 碗	口縁～高台部 70%	①8.8 ②3.5 ③5.9	良好、灰白色		見込み五弁花。小広東碗と共通する文 様。漆継か。肥前。	1770～80年代
77回	4建43	4建3床下	陶胎染付 碗	口縁部片	①(10.0) ③(5.2)	良好、灰色		肥前。	18世紀前
77回	4建44	4建1床下	陶胎染付 碗	口縁～胴部 30%	①(11.0) ③(5.5)	良好、灰白色		肥前。	18世紀前
77回	4建45	4建北	陶胎染付 碗	ほぼ完形	①11.2 ②4.3 ③7.3	良好、灰色		外面に東旭山水文。肥前。	18世紀前
77回	4建46	4建1床	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①9.0 ②4.0 ③4.6	良好、灰白色		腰折碗。上給付。見込みに上給付か。 肥前。	18世紀前
77回	4建47	4建北	陶器 碗	胴～高台部 40%	②4.2 ③(2.1)	良好、灰白色		灰釉。京焼写し。瀬戸。	建房8小期
77回	4建48	4建2床下	陶器 碗	口縁部片	①10.2 ③(3.8)	良好、灰黄色		丸碗。美濃。	建房7か8小期
77回	4建49	4建床上	陶器 碗	口縁～胴部 40%	①(10.6) ③(6.3)	良好、灰白色		丸碗。美濃。	建房7か8小期
77回	4建50	4建1床下	陶器 碗	胴～高台部 50%	②5.4 ③(3.6)	良好、灰白色		大型の碗。被熱。美濃。	建房5か6小期
77回	4建51	4建1床下	陶器 皿	胴～高台部片	②(4.0) ③(2.4)	良好、灰白色		京焼皿。内面に鉄絵。肥前。	18世紀前

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径 ②底径 ③器高	④口径 ⑤底径 ⑥器高				
77図	4建52	4建1床下	陶器 皿	一部欠損	①13.0 ④3.4	②5.0 ⑤3.4	良好	灰白色	京焼風。見込みに鉄粒。高台内に「音」と墨書。墨書も含め、2屋敷3と同様。	18第1四半期
77図	4建53	4建床上	染付 皿	一部欠損	①13.4 ④3.8	②8.3 ⑤3.8	良好	灰白色	輪花皿。蛇ノ目四角高台。見込み五弁花。漆黒。肥前。	1780年代
78図	4建54	4建西	染付 皿	口縁～高台部 50%	①19.8 ④2.9	②13.0 ⑤2.9	良好	灰白色	中皿。内面に竹文。高台内に「大明成化年製」か。高台内に目録。有田。	1690～1730年代
78図	4建55	4建床上	染付 皿	ほぼ完形	①19.5 ④3.2	②13.0 ⑤2.9	良好	灰白色	中皿。内面に竹文。見込み五弁花中央はコンニャク印判。まわりを手書き。高台内「大明成化年製」。高台内に目録5カ所。漆黒。有田。	1690～1730年代
78図	4建56	4建床上	染付 皿	ほぼ完形	①19.5 ④3.2	②13.0 ⑤2.9	良好	灰白色	中皿。内面に竹文。見込み五弁花中央はコンニャク印判。まわりを手書き。高台内「大明成化年製」。高台内に目録5カ所。漆黒。有田。	1690～1730年代
78図	4建57	4建床上	染付 蓋	一部欠損	①4.2 ④3.4	②10.0 ⑤3.4	良好	灰白色	望形形。内面に松竹梅。漆黒。肥前。	1760～80年代か
78図	4建58	4建床上	染付 蓋付鉢か	一部欠損	②12.4	③(3.3)	良好	灰白色	段重または蓋付鉢の蓋か。外面に松竹梅文。有田。	18第2四半期～1760年
79図	4建59	4建床上	陶器 徳利	胴～底部80%	②5.8	③(6.0)	良好	灰白色	灰釉。美濃。	連房7か8小期
79図	4建60	4建床上	陶器 灯火受皿	完形	①10.5 ④2.1	②4.5 ⑤2.1	良好	灰色	外面に焼成時の重ね焼き痕跡あり。美濃。	連房8小期
79図	4建61	4建床上	陶器 蓋	ほぼ完形	①8.6 ④3.9	②3.7 ⑤3.9	良好	浅黄色	中央に梅の飾りを持つ突起。突起部分中空と思われる。高台内6mmほどの円孔あり。サイフォンの原理を利用し、一定量を超える液体を注ぐと、高台内の円孔より注いだ液体が流れ出る仕組みと思われる。いわゆる「十分盛」か。灰釉。京信楽系か。	18世紀後
79図	4建62	4建1床下	陶器 椀鉢	口縁～高台部 80%	①22.3 ④12.1	②12.0 ⑤12.1	良好	灰白色	見込み目録4カ所。見込み目録部分に墨書。判読困難。瀬戸。	連房8小期
1区8号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)										
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径 ②底径 ③器高	④口径 ⑤底径 ⑥器高				
96図	8建1	8建	陶器 碗	高台部片	②4.5	③(2.2)	良好	灰白色	尾呂茶碗。美濃。	連房6小期
96図	8建2	8建	陶器 碗	口縁部片	①(12.6)	③(6.5)	良好	灰白色	丸碗。焼熟。美濃。	連房5～7小期
1区1号石垣 遺物観察表(土器・陶磁器)										
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径 ②底径 ③器高	④口径 ⑤底径 ⑥器高				
100図	1石垣1	1石垣	染付 蓋	50%	②9.7	③(2.2)	良好	灰白色	広東碗の蓋。肥前系。	1780～1810年代
100図	1石垣2	1石垣	青磁 火入	胴～底部片	②5.5	③(3.1)	良好	灰白色	肥前。	18世紀中～末
100図	1石垣3	1石垣	陶器 香炉	口縁～胴部 30%	③(9.9)	④(3.6)	良好	灰白色	筒形香炉。美濃。	連房8小期
1区4号溝 遺物観察表(土器・陶磁器)										
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径 ②底径 ③器高	④口径 ⑤底径 ⑥器高				
100図	4溝1	4溝周辺	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①6.5 ④3.8	②3.0 ⑤3.8	良好	灰白色	灰釉。小碗。美濃。	連房7小期
100図	4溝2	4溝	染付 碗	口縁～高台部 70%	①9.2 ④3.8	②3.8 ⑤3.8	良好	灰白色	外面に草花文。見込みや削れた五弁花。肥前。	1760～80年代
100図	4溝3	52区B-8	陶器 碗	胴～高台部片	②(5.2)	③(4.1)	良好	灰白色	丸碗。美濃。	連房7小期
100図	4溝4	4溝	陶器 仏花瓶	胴～底部60%	②(6.6) ④(7.9)	③(6.6) ⑤(7.9)	良好	灰白色	鉄軸と灰釉の掛け分け。美濃。	連房7小期
100図	4溝5	4溝西	陶器 すり鉢	胴部片	③(1.4)		良好	灰白色	すり鉢部片を成形し転用。瀬戸。	連房8小期
1区1号屋敷跡 遺物観察表(土器・陶磁器)										
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径 ②底径 ③器高	④口径 ⑤底径 ⑥器高				
102図	1屋敷1	1建 Vトレンチ	染付 小杯	口縁部片	③(3.5)		良好	灰白色	小振りの碗か。肥前。	18世紀後
102図	1屋敷2	1建 Oトレンチ	磁器 碗	胴～高台部 40%	②3.0	③(1.9)	良好	灰白色	小碗。肥前。	18世紀後
102図	1屋敷3	1例木付近	陶器 碗	口縁～高台部 90%	①7.0 ④3.4	②3.3 ⑤3.4	良好	灰白色	灰釉。小碗。美濃。	連房7小期
102図	1屋敷4	1屋敷跡	染付 碗	口縁～胴部 30%	①(9.6) ④(5.6)	②(9.6) ⑤(5.6)	良好	灰白色	肥前。	17世紀末～18世紀前
102図	1屋敷5	1建 Tトレンチ	染付 碗	口縁～高台部 40%	①(9.2) ④(6.1)	②(3.6) ⑤(6.1)	良好	灰白色	小丸碗。見込み五弁花。肥前。	1770～80年代
102図	1屋敷6	1屋敷跡	陶胎染付 碗	口縁部片	①(11.0) ④(4.0)	②(11.0) ⑤(4.0)	良好	灰色	肥前。	18世紀前

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土・焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
102図	1屋敷7	1屋敷跡	陶器 碗	胴～高台部片	②(5.0) ③(2.4)		良好。灰白色。	尾呂茶碗。美濃。	連房7小期	
102図	1屋敷8	1屋敷跡	陶器 碗	胴部片	③(3.4)		良好。灰白色。	尾呂茶碗。美濃。	連房6か7小期	
102図	1屋敷9	1屋敷跡	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①11.0 ②4.8 ③7.7		良好。灰白色。	丸碗。美濃。	連房8小期	
102図	1屋敷10	1屋敷跡	染付 碗	口縁～高台部 60%	①(10.5) ②3.8 ③5.4		良好。灰白色。	口縁。足込み吹き垂子、うさぎ。瀬戸・美濃。	藤末	
102図	1屋敷11	1屋敷跡	色絵 碗	口縁～高台部 60%	①(9.4) ②2.9 ③4.2		良好。灰白色。	口縁。地方窯か。		
102図	1屋敷12	2建北	染付 皿	胴～高台部 30%	②(6.6) ③(1.9)		良好。灰白色。	小皿。美熟。肥前。	18第2・3四半期	
102図	1屋敷13	1屋敷跡	陶器 袋物	底部片	②6.0 ③(1.7)		良好。 暗赤灰色。	鉄輪。底部回転糸切り。地方窯か。	18・19世紀	
102図	1屋敷14	1屋敷跡	陶器 香炉	口縁部片	①(10.7)③(4.0)		良好。灰白色。	筒形香炉。美濃。	連房7小期	
102図	1屋敷16	1屋敷跡	陶器 平胴	ほぼ正圆形	①19.4 ②13.2 ③18.6		良好。灰白色。	平胴の中には果内を一部残す多数のウズの種があり、木製の蓋(1屋敷15)がされていた。楠干しを入れ、蓋がされていたものと思われる。口縁端部に重ね書き時の痕跡を残す。瀬戸。	連房8小期	

1区8号溝 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土・焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
114図	8溝1	8溝	染付 碗か	口縁～胴部片	①6.4 ③(3.2)		良好。灰白色。	小碗または仏飯器か。肥前。	18世紀前	
114図	8溝2	8溝	陶胎染付 碗	胴～高台部 40%	②5.0 ③(3.9)		良好。灰白色。	肥前。	18世紀前	
114図	8溝3	8溝	陶胎染付 碗	口縁～高台部 70%	①9.5 ②4.0 ③6.0		良好。灰色。	外面に東屋山水文。肥前。	18世紀前	
114図	8溝4	1例木付近	陶器 碗	胴～高台部 40%	②(5.2) ③(4.8)		良好。灰色。	内外面に白化粧土を刷毛塗り。肥前。	18世紀前	
114図	8溝5	1例木付近	陶器 碗	口縁～胴部 30%	①11.5 ③(5.8)		良好。灰白色。	丸碗。美濃。	連房7か8小期	
114図	8溝6	8溝	陶器 皿	口縁～高台部 30%	①(19.3) ③(4.6)		良好。 にぶい黄褐色。	内面白化粧土を刷毛塗り。見込み輪割ぎ。肥前。	18世紀前	
114図	8溝7	1例木付近	色絵 香炉	口縁～胴部 30%	①(7.0) ③(5.4)		良好。灰白色。	高級品。外面に丸文。寛文年間焼。有田。	17世紀後	

1区4号床下土坑 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土・焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
114図	4床下 坑1	4床下土坑	陶器 碗	胴～高台部 30%	②4.8 ③(2.9)		良好。灰黄色。	尾呂茶碗。美濃。	連房6小期	
114図	4床下 坑2	4床下土坑	青磁 皿	胴～高台部 50%	②4.5 ③(1.7)		良好。灰白色。	見込み蛇ノ目輪割ぎ。波佐見系。	17世紀後	
114図	4床下 坑3	4床下土坑	陶器 徳利	底部片	②12.4 ③(4.5)		良好。灰白色。	箱徳利。瀬戸。	連房5～7小期	

1区1号屋敷跡下 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土・焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
115図	1屋敷下 1	1建馬屋2 橋	青磁 碗	口縁部片	③(1.6)		良好。灰白色。		A類	
115図	1屋敷下 2	8溝	青磁 碗	口縁部片	③(2.7)		良好。灰白色。	鍋蓋弁文碗。	B1類	
115図	1屋敷下 3	2建西	青磁 碗	胴部片	③(2.3)		良好。灰色。	鍋蓋弁文碗。	B1類	
115図	1屋敷下 4	4溝	在地上器 内耳土器か	口縁部片	③(4.3)		砂粒やや多。 良好。 にぶい黄褐色。	在地上土器。内耳土器。鍋型か。口縁端部わずかに肥厚し。端部に溝状の凹みあり。内外面磨擦で。	中世	
115図	1屋敷下 5	8建	磁器 碗	高台部片	②(3.0) ③(1.6)		良好。灰白色。	小碗。	18世紀後	
115図	1屋敷下 6		染付 小杯	口縁部片	①(7.5) ③(2.7)		良好。灰白色。	肥前。	18世紀後	
115図	1屋敷下 7	3建	染付 碗	口縁部片	①(10.0) ③(3.7)		良好。灰白色。	外面に草花文。波佐見系。	18世紀後	
115図	1屋敷下 8	2建飯方	染付 碗	口縁～胴部 30%	①(8.0) ③(4.6)		良好。灰白色。	筒形碗。外面米製地に菊花文。肥前。	1760～80年代	
115図	1屋敷下 9	3建	陶胎染付 碗	口縁部片	③(3.5)		良好。灰色。	肥前。	18世紀前	
115図	1屋敷下 10	1建8床下 地山中	陶胎染付 碗	口縁～胴部 40%	①11.0 ③(5.0)		良好。灰色。	肥前。	18世紀前	
115図	1屋敷下 11	1建8床下 地山中	陶胎染 碗	口縁～胴部 50%	①11.0 ③(4.5)		良好。灰色。	外面に東屋山水文か。肥前。	18世紀前	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高				
1159E	1 屋敷下 12	1 建 8 床下 地山中	陶胎染付 碗	胴部片	③(3.7)			良好、灰白色。	外面に東屋山水文か。肥前。	18世紀前	
1159E	1 屋敷下 13	1 建西 2 桶 掘方	陶胎染付 碗	口縁～高台部 60%	②5.0 ③(4.7)			良好、灰色。	外面に東屋山水文か。漆継、肥前。	18世紀前	
1159E	1 屋敷下 14	1 建南	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①(12.5) ②5.0			良好、灰白色。	鉄軸、丸碗。費付に回転糸切り痕を残す。 瀬戸。	透房 4 小期	
1159E	1 屋敷下 15	1 建 3 床下 地山中	陶器 碗	口縁～胴部片	①(10.6) ③(5.3)			良好、灰白色。	丸碗。美濃。	透房 7 小期	
1159E	1 屋敷下 16	1 建 3 床下 地山中	陶器 碗	口縁部片	①(11.3) ③(5.2)			良好、灰白色。	丸碗。美濃。	透房 6 か 7 小期	
1159E	1 屋敷下 17	3 建	陶器 碗か	胴部片	③(5.5)			良好、灰白色。	鉄軸。美濃。	近世	
1159E	1 屋敷下 18	1 建 4 床下 地山中	陶器 碗	口縁部片	①(10.0) ③(4.4)			良好、灰色。	筒形の碗か。美濃か関西系。	近世以降	
1159E	1 屋敷下 19	1 建 3 床下 地山中	陶器 碗	口縁～胴部片	①(10.0) ③(4.4)			良好、灰白色。	腰折碗。京・信楽系。	近世以降	
1159E	1 屋敷下 20	1 建 3 床下 地山中	染付 皿	口縁～高台部 30%	①(14.0) ②(8.4) ③3.4			良好、灰白色。	口紅。黒はじき。有田。	1690～1730年代	
1159E	1 屋敷下 21	1 建 3 床下 地山中	陶器 皿	口縁～高台部 30%	②4.6 ③(1.9)			良好、灰白色。	見込み蛇ノ目刺割ぎ。内野山語窟。	18世紀前	
1159E	1 屋敷下 22	8 建地山中	磁器 皿	胴～高台部片	②4.0 ③(2.4)			良好、灰白色。	見込み蛇ノ目刺割ぎ。波佐見系。	18世紀	
1159E	1 屋敷下 23	1 建 8 床下 地山中	陶器 皿	口縁部片	①(18.0) ③(2.5)			良好、灰色。		近世以降	
1159E	1 屋敷下 24	1 建 3 床下 地山中	陶器 徳利	胴部40%	③(8.5)			良好、灰白色。	鉄軸。美濃。	透房 5～7 小期	
1159E	1 屋敷下 25	8 建地山中	陶器 香炉	底部片	②(7.6) ③(2.4)			良好、灰白色。	筒形香炉。美濃。	透房 7 か 8 小期	
1159E	1 屋敷下 26	1 建 3 床下 地山中	陶器 香炉	底部片	②(10.0) ③(2.3)			良好、淡黄色。	筒形香炉。美濃。	透房 7 か 8 小期	
1159E	1 屋敷下 27	3 建地山中	陶器 片口	口縁部片	①(18.0) ③(7.0)			良好、淡黄色。	美濃。	透房 8 小期	
1159E	1 屋敷下 28	2 建付近 地山中	陶器 すり鉢	胴部片	③(3.8)			良好、灰黄色。	丹波か信楽。		
1159E	1 屋敷下 29	1 建 1 床下 地山中	陶器 すり鉢	底部片	②12.0 ③(3.8)			良好、 浅黄褐色。	見込み及び底部外面に使用痕跡あり。 瀬戸。	透房 5～7 小期	
1160E	1 屋敷下 30	1 建 6 床下 地山中	陶器 すり鉢	口縁部片	①(33.0) ③(8.9)			良好、黄褐色。	瀬戸。	透房 6 小期	
1160E	1 屋敷下 31	1 建 9 床下 地山中	陶器 小壺か	底部片	③(0.7)			良好、褐色。	小壺または小瓶の底部片周辺を打ち欠き、円形に成形。瀬戸・美濃。	不明	

1区4号石垣 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高				
1180E	4 石垣 1	4 石垣	染付 碗	口縁～高台部 50%	①7.3 ②3.0 ③3.8			良好、灰白色。	小碗。肥前。	18世紀後以降	
1180E	4 石垣 2	4 石垣東	染付 碗	口縁～高台部 70%	①10.0 ②4.2 ③4.9			良好、灰白色。	外面に雪輪草花文。高台内に崩れた銘あり。波佐見系。	18世紀後	
1180E	4 石垣 3	4 石垣東	染付 碗	口縁～胴部片	①7.2 ③(4.3)			良好、灰白色。	筒形碗。肥前系。	18第 4 四半期～ 1810年代	

1区5号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高				
1230E	5 建 88	5 建南	磁器 碗	口縁～高台部 50%	①(8.4) ②3.4 ③4.0			良好、灰白色。	小碗。肥前。	18世紀前	
1230E	5 建 89	5 建西	染付 碗	口縁～高台部 50%	①(7.3) ②(2.8) ③3.9			良好、灰白色。	小碗。漆継。波佐見系。	18世紀後	
1230E	5 建 90	52区 D-9	陶器 碗	胴～高台部 30%	②3.4 ③(1.8)			良好、灰白色。	灰軸。小碗。美濃。	透房 7 小期	
1230E	5 建 91	土台(5建 48)下	陶器 碗	口縁部片	①(6.5) ③(2.7)			良好、灰白色。	灰軸。小碗。美濃。	透房 7 小期	
1230E	5 建 92	5 建 2 施設	陶器 碗	口縁～胴部 30%	①7.0 ③(3.2)			良好、灰白色。	灰軸。小碗。美濃。	透房 8 小期	
1230E	5 建 93	箱(5建15) 内	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①6.8 ②3.6 ③4.2			良好、灰白色。	灰軸。小碗。美濃。	透房 1 小期	
1230E	5 建 94	5 建 2 床	染付 碗	口縁部片	①(10.0)③(3.2)			良好、灰白色。	波佐見系。	18世紀後	
1230E	5 建 95	5 建 4 床下	染付 碗	口縁部片	①(10.0)③(3.1)			良好、灰白色。	波佐見系。	18世紀後	
1230E	5 建 96	5 建 1 床下	染付 碗	胴～高台部 30%	②4.4 ③(2.7)			良好、灰白色。	見込み蛇ノ目刺割ぎ。漆継。肥前。	18世紀後	

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	胎土 色調				
123図	5建97	5建1施設	染付 碗	口縁～高台部 70%	①(10.2) ②3.6 ③5.5	良好、灰白色		外面に青輪草花文。高台内に崩れた跡あり。漆漉。肥前。	18世紀前	
123図	5建98	5建1床	染付 碗	完形	①10.8 ②4.4 ③4.7	良好、灰白色		外面に梅樹文。見込み趾ノ目輪割ぎ。既見品。	18世紀後	
123図	5建99	5建北	染付 碗	完形	①11.0 ②4.2 ③4.6	良好、灰白色		外面に梅樹文。見込み趾ノ目輪割ぎ。既見品。	18世紀後	
123図	5建100	5建南	染付 碗か楕口	口縁部片	①(7.8) ②(2.7)	良好、灰白色		筒形碗または楕口か。肥前。	1760～80年代	
123図	5建101	5建1床	陶器 碗	高台部片	②4.8 ③(1.5)	良好、灰白色		丸碗。高台部周辺を打ち欠き、成形か。美濃。	連房7小期	
123図	5建102	5建土間	陶器 碗	高台部片	②5.2 ③(1.9)	良好、灰白色		尾呂茶碗高台部の周辺を打ち欠き、成形か。美濃。	連房7小期	
123図	5建103	上台(5建 80下)	陶器 碗	口縁部片	①(10.4) ②(5.0)	良好、灰白色		尾呂茶碗。美濃。	連房6か7小期	
123図	5建104	5建	陶器 碗	口縁～胴部片	①(10.4) ②(5.6)	良好、灰白色		尾呂茶碗。美濃。	連房6か7小期	
123図	5建105	5建北	陶器 碗	完形	①10.8 ②4.6 ③6.5	良好、灰白色		尾呂茶碗。内面の使用痕跡顯著。美濃。	連房7小期	
123図	5建106	5建3床下	陶器 碗	口縁～高台部 50%	①10.7 ②4.6 ③7.3	良好、灰黄色		尾呂茶碗。美濃。	連房7小期	
123図	5建107	5建北	陶器 碗	一部欠損	①12.3 ②5.0 ③8.0	良好、灰黄色		灰釉。大型の碗。漆漉。見込み使用痕跡顯著。美濃。	連房7小期	
123図	5建108	5建土間	陶器 碗	口縁～高台部 40%	②3.6 ③(4.1)	良好、灰白色		鉄軸。丸碗。高台内に「十一」と墨書。瀬戸。	連房8小期	
123図	5建109	5建	陶器 碗	口縁～胴部片	①(9.2) ②(4.5)	良好、灰白色		丸碗。鉄軸。瀬戸。	連房7か8小期	
123図	5建110	5建西	陶器 碗	口縁～高台部 60%	①10.3 ②4.0 ③5.5	良好、灰白色		丸碗。鉄軸流し。漆漉か。瀬戸。	連房8小期	
123図	5建111	5建1床下	陶器 碗	口縁～高台部 60%	①8.6 ②4.7 ③6.3	良好。 にぶい黄褐色		筒形碗。内外面白化粧土を刷毛塗り。美濃か。	連房8小期	
123図	5建112	5建土間	陶器 碗	口縁～高台部 40%	②3.6 ③(1.7)	良好、灰白色		小碗か。生産地不詳。	連房8小期	
123図	5建113	5建土間	染付 皿	高台部片	②(12.0) ③(2.2)	良好、灰白色		中皿。内面に竹文。有田。	1690～1730年代	
123図	5建114	5建1床	色絵 油壺	口縁～胴部 40%	①1.8	良好、灰白色		有田。	18世紀中～後	
123図	5建115	5建3床下	陶器 徳利か	胴部片	③(9.7)	良好、灰色		関西系地方窯。	18世紀後か	
124図	5建116	5建1床下	陶器 香炉	口縁～高台部 70%	①10.4 ②7.4 ③5.8	良好、灰白色		筒形香炉。内面に灰を残す。口縁端部欠損。灰落として使用か。美濃。	連房7小期	
124図	5建117	5建1床下	陶器 片口	胴～高台部 30%	②9.0 ③(5.0)	良好、灰白色		見込み目縁あり。美濃。	連房7小期	
124図	5建118	5建5床	陶器 片口	口縁～高台部 90%	①12.7 ②6.8 ③7.0	良好、灰白色		小型の片口。見込み目縁3カ所。美濃。	連房8小期	
124図	5建119	5建1施設	陶器 片口か	胴～高台部 30%	②10.0 ③(7.0)	良好。 浅黄褐色		鉄軸。見込み目縁あり。美濃。	連房6か7小期	
124図	5建120	5建北	陶器 平胴	胴～高台部 50%	②13.2 ③(8.1)	良好、灰白色		見込み目縁3カ所。瀬戸。	連房7か8小期	
124図	5建121	5建北	陶器 すり鉢	口縁部片	①(31.0) ②(5.9)	良好、灰白色		瀬戸。	連房7小期	
124図	5建122	5建1床下	陶器 すり鉢	口縁～底部 40%	①(30.0) ②(11.0) ③(11.6)	良好、灰白色		14cm単位のスリ目。使用痕跡は軽微。瀬戸。	連房8小期	
124図	5建123	5建	在地土器 火鉢か	胴部片	③(5.2)	良好。 にぶい黄褐色		胴部にやや膨らみを持つ。横位沈箱内に八角形の押印。内外面器表は黒色。		
124図	5建124	箱(5建150 内)	埴形陶器	完形	長さ5.6 幅4.3 高さ1.7	良好、浅黄色		亀形の陶器。型押し成形。中空だが水滴様の円孔は確認できない。器壁薄く、13.3gと非常に軽い。水に浮く。甲冑部分を中心に緑色釉を施す。瀬戸・美濃ではない。		
124図	5建125	5建1床下	土人形	頭部欠損	③(4.5)	良好、灰黄色		表裏の型作り。底部に破裂を防ぐ小円孔あり。		

1区6号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	胎土 色調				
145図	6建3	6建床下	陶器 碗	胴部片	③(3.9)	良好、灰白色		尾呂茶碗。美濃。	連房7か8小期	
145図	6建4	6建床下	陶器 碗	胴～高台部片	②(4.0) ③(2.7)	良好、灰白色		柳茶碗。美濃。	連房8小期	

1区5号箱 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	胎土 色調				
149図	5建1	5建内	陶器 香炉	胴部片	③(2.6)	良好、灰白色		背腹形香炉。美濃。	連房5か6小期	

遺物観察表

1区6号石函 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	④				
150E	6石函1	6石函	染付 碗	口縁部片	①7.4 ②(2.9)		良好、灰白色	小碗。外面に竹文。肥前系。	18第4四半期	

1区2号屋敷跡 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	④				
151E	2屋敷1	52E-E-6	色絵 碗	口縁部片	①10.2 ②(3.2)		良好、灰白色	金彩を残す。有田。	18世紀後	
151E	2屋敷2	5畑北東	陶器 碗	口縁～胴部 40%	①(12.5) ②(9.9)		良好、灰白色	灰軸。大型の腰張り碗。美濃。	連房6か7小期	
151E	2屋敷3	5畑東	陶器 皿	高台部片	②5.0 ③(1.5)		良好、淡黄色	京焼風。見込みに鉄軌。高台内に「首」と墨書。墨書も含め、4建52と同様と思われる。	1600～1710年頃	
151E	2屋敷4	6建西	青磁 火入	口縁部片	①(7.0) ②(2.0)		良好、灰白色	肥前か。	18世紀か	

1区9号溝 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	④				
153E	9溝1	9溝	陶器 碗	胴～高台部 40%	②5.2 ③(2.7)		良好、灰白色	尾呂茶碗。美濃。	連房6小期	

1区2号屋敷跡下 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	④				
153E	2屋敷下1	5建北 地山中	染付 碗	胴～高台部 40%	②4.4 ③(2.4)		良好、灰白色	高台内に渦風。波佐見系。	18世紀後	
153E	2屋敷下2	5建馬屋 地山中	陶器 碗	胴～高台部 40%	②4.6 ③(2.6)		良好、灰白色	粗製。割縁軸など。内野山諸窯の最後の方か。	18世紀前	
153E	2屋敷下3	5建4床下 地山中	青磁染付 碗	胴～高台部 30%	②4.1 ③(3.7)		良好、灰白色	筒形碗。見込みにコンヤク印判による五弁花。漆継。肥前。	1750～80年代	
153E	2屋敷下4	1部池東 地山中	陶器 碗	胴～高台部 50%	②5.3 ③(3.5)		良好、灰白色	尾呂茶碗。美濃。	連房7小期	
153E	2屋敷下5		陶器 香炉	胴～底部片	②(10.5)(8.0) ③(4.2)		良好、灰白色	筒形香炉。美濃。	連房7か8小期	

1区2～4号埋 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	④				
155E	2～4埋1	2～4埋	在地土器 内耳土器か	口縁部片	③(4.9)		細砂粒やや多。 良好、灰黄色。	口縁部丸みを持つ。口縁部ははやや肥厚し内面。外面器表は暗褐色。	中世	
155E	2～4埋2	2～4埋	在地土器 内耳土器か	胴部片	③(6.0)		細砂粒やや多。 良好、黄褐色。	内面横線で、外面やや粗い。外面器表は黒褐色。	中世	
155E	2～4埋3	51E-W-14	在地土器 内耳土器か	底部片	③(0.8)		細砂粒やや多。 良好。 にぶい褐色。	平底。	中世	
155E	2～4埋4	2～4埋	在地土器 内耳土器か	胴～底部片	③(1.2)		細砂粒やや多。 良好。 にぶい褐色。	平底。内面器表は黒褐色。	中世	
155E	2～4埋5	52E-A-13	在地土器 内耳土器か	底部片	③(2.2)		砂粒やや多。 良好。 にぶい褐色。	器面劣化。平底。外面器表は黒褐色。	中世	
155E	2～4埋6	2～4埋	陶器 碗	胴～高台部 50%	②3.4 ③(1.5)		良好、灰白色	灰軸。小碗。美濃。	連房7小期	
155E	2～4埋7	2～4埋	染付 碗	口縁～胴部 30%	③(8.8) ④(5.5)		良好、灰白色	肥前系。	1780～1810年代	
155E	2～4埋8	2～4埋	染付 碗	一部欠損	③9.4 ④3.8 ⑤5.0		良好、灰白色	外面に雲輪梅樹文。高台内削れた跡あり。波佐見系。	18世紀後	
155E	2～4埋9	51E-Y-13	染付 碗	口縁部片	③(8.4) ④(3.1)		良好、灰白色	小丸碗。肥前系。	1780～1810年代	
155E	2～4埋10	2～4埋	染付 碗	胴～高台部 30%	③(3.7) ④(3.6)		良好、灰白色	肥前系。	19世紀初～幕末	
155E	2～4埋11	51E-V-16	染付 筒形碗	口縁～胴部 40%	③(6.5) ④(4.5)		良好、灰白色	外面に竹文。肥前系。	1780～19世紀前	
155E	2～4埋12	2～4埋	青磁染付 筒形碗	胴～高台部 30%	③(3.6) ④(1.8)		良好、灰白色	見込みにコンヤク印判による五弁花。肥前。	1760～80年代	
155E	2～4埋13	2～4埋	陶器染付 碗	口縁～胴部 30%	①10.3 ③(4.8)		良好、灰白色	肥前。	18世紀前	
155E	2～4埋14	4埋	陶器染付 碗	口縁～高台部 60%	③9.6 ④4.2 ⑤6.0		良好、灰色	粗製。外面に連続唐草文。肥前系。	18世紀前～中頃	
155E	2～4埋15	2～4埋	陶器 碗	胴～高台部 50%	②4.8 ③(3.0)		良好、灰白色	尾呂茶碗。美濃。	連房7小期	
155E	2～4埋16	52E-B-13	陶器 碗	口縁～高台部 60%	①(8.4) ②4.4 ③6.0		良好、灰白色	箱形湯呑。掛け分け。美濃。	連房8小期	
155E	2～4埋17	51E-V-15	陶器 碗か	胴～底部片	②3.8 ③(1.5)		良好。 にぶい褐色。	地方窯。相馬近辺で焼成か。	18世紀頃	

遺物観察表

図版番号	陶載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高				
1550R	2-4 細 18	2-4 細	染付 皿	口縁～高台部 30%	①13.2 ②7.0 ③3.1		良好、灰白色		見込み能ノ目輪割ぎ。見込みコンコ 夕印判による五弁花。波佐見系。	18第2・3四半期	
1550R	2-4 細 19	2-4 細	染付 蓋付鉢	口縁～胴部片	①10.8 ③(4.5)		良好、灰白色		蓋付鉢の身。口縁端部輪割ぎ。肥前。	18世紀前	
1550R	2-4 細 20	2-4 細	染付 油壺	胴部片	③(3.5)		良好、灰白色		肥前。	18世紀後	
1550R	2-4 細 21	2-4 細	染付 花瓶	胴部片	③(6.6)		良好、灰白色		波佐見系。	18世紀後	
1550R	2-4 細 22	51区V-15	陶器 徳利	胴～底部片	②7.2 ③(6.4)		良好、灰白色	美濃。		遡り7か8小期	
1550R	2-4 細 23	2-4 細	陶器 灯明皿	口縁～底部 40%	①(9.6) ②4.0 ③1.9		良好、褐色		内面僅かに油煙残す。内外面に焼成時 の重ね焼き痕跡を残す。美濃。	遡り8か9小期	
1550R	2-4 細 24	2-4 細	陶器 皿	胴～高台部片	③(3.2)		良好、褐色		大皿。見込みに砂胎土目。肥前。	17世紀後～18世紀 初	
1550R	2-4 細 25	2-4 細	陶器 鉢か	胴～高台部片	②12.5 ③(5.2)		良好、灰色		見込みに目紋あり。瀬戸・美濃系。地 方系。		
1550R	2-4 細 26	2-4 細	陶器 袋物	胴～高台部片	②15.0 ③(4.6)		良好、灰白色		地方系。	18世紀後～江戸後 期	
1550R	2-4 細 27	2-4 細	染付 碗	高台部片	②4.0 ③(1.9)		良好、灰白色		高台部周辺を打ち欠き、内形に成形。 肥前。	18世紀後	
1550R	2-4 細 28	2-4 細	陶器 碗	高台部片	②4.4 ③(1.7)		良好。 に深い黄褐色。		高台部周辺を打ち欠き、内形に成形。 美濃。	遡り7か8小期	
1550R	2-4 細 29	2-4 細	陶器 土瓶	口縁～底部片	⑤5.0 ②3.4 ③3.0		良好、淡黄色		汽車土瓶の蓋。	近代	
1550R	2-4 細 30	2-4 細	陶器 不詳	口縁～底部 50%	③(3.4)		良好、灰白色		大皿。小さな円孔あり。肥前か。	19世紀後	

1区1号集石 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	陶載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高				
1590R	51 区 1集石1	2-4 細	在地球上器	胴～底部片	②24.0 ③(8.0)		細砂粒ややぶ。 良好。 に深い褐色。		胴型。平底。外面黒撫で、内面粗い撫で。 外面器装束褐色。	中世	

1区1号井戸 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	陶載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高				
1600R	1 井戸1	1 井戸	陶器 灯火受皿	口縁～底部 40%	①11.2 ②(1.5)		良好、灰色		底部に重ね焼き時の痕跡を残す。美濃。	遡り8小期	
1600R	1 井戸2	1 井戸	陶器 灯火皿	口縁～底部 40%	①11.0 ②4.2 ③2.3		良好、灰白色		口縁部に油煙を残す。京・信濃系。	近世以降	
1600R	1 井戸3	1 井戸	陶器 片口	口縁～高台部 40%	①16.8 ②8.0 ③9.2		良好、灰白色		見込みに目紋あり。美濃。	遡り8小期	
1600R	1 井戸4	1 井戸	在地球上器 蓋	30%	②7.2 ③(2.3)		細砂粒少。 良好、灰白色。		土瓶の蓋か。	近世以降	

1区遺構外 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	陶載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高				
1610R	1区1		染付 小環	胴～高台部片	②1.6 ③(1.1)		良好、灰白色		生産地不詳。	19世紀前～中	
1610R	1区2		染付 小碗	口縁部片	①(6.6) ③(2.6)		良好、灰白色		小碗。外面に丸文。肥前。	1820～60年代	
1610R	1区3		染付 小碗 か仏飯器	口縁～胴部片	①6.4 ③(3.7)		良好、灰白色		外面に花唐草文。肥前。	18世紀前	
1610R	1区4		染付 碗	一部欠損	③8.0 ②3.2 ③4.0		良好、灰白色		小型の碗。外面に梅樹文か。肥前。	18第2・3四半期	
1610R	1区5		染付 碗	口縁～胴部片	③9.0 ③(4.8)		良好、灰白色		小丸碗。肥前系。	1780～180年代	
1610R	1区6		染付 碗	口縁～高台部 80%	③8.8 ②3.7 ③5.2		良好、灰白色		外面に若松文。肥前。	18世紀後	
1610R	1区7		染付 碗	口縁～高台部 40%	③8.3 ②3.2 ③3.6		良好、灰白色		小広東碗。外面に算木文。見込みに「寿」 か。肥前。	1770～80年代	
1610R	1区8		染付 筒形碗	口縁～高台部 60%	③7.2 ②3.5 ③5.4		良好、灰白色		外面に雨れた水裂地に菊花文。見込みに 雨れた五弁花。肥前系。	1780～19世紀第1 四半期	
1610R	1区9		染付 碗	口縁～胴部 30%	③7.0 ③(3.6)		良好、灰白色		外面に二重格子文。肥前系。	1820～60年代	
1610R	1区10		染付 碗	口縁～胴部 40%	③7.0 ③(5.3)		良好、灰白色		地方系。	1820～60年代	
1610R	1区11	51区Y-16	陶器 碗	胴～高台部片	②(5.3) ③(3.0)		良好、淡黄色		呉器手輪。肥前。	17第4四半期～18 第1四半期	
1610R	1区12	51区Y-16	陶器 碗	高台部片	②6.0 ③(2.1)		良好、灰白色		大皿。大型の碗。美濃。	遡り6か7小期	
1610R	1区13		染付 猪口	口縁～底部 40%	③7.0 ②5.4 ③5.4		良好、灰白色		外面に矢羽文。底部に墨書。判読困難。 肥前系。	19世紀初～中	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	④			
161図	1 K14		磁器 紅皿	口縁～高台部 40%	①7.0 ②3.4 ③2.0	良好	灰白色	型押し成形。蛸唐草文。肥前系。	19世紀前～中
161図	1 K15		染付 皿	底部片	③(0.9)	良好	灰白色	高台内に大明年製か。有田。	18第2・3回半期
161図	1 K16		染付 皿	胴～高台部片	①9.3 ②(1.9)	良好	灰白色	内面に波瀾文。有田。	1730～60年代
161図	1 K17		染付 皿	高台部30%	②8.3 ③(1.1)	良好	灰白色	見込み五弁花。蛇ノ目円形高台。肥前。	18世紀後
161図	1 K18	51KX-15	陶器 灯火皿	口縁～底部 40%	①7.0 ②3.7 ③1.7	良好	灰白色	内面に目取あり。美濃。	遡房8か9小期
161図	1 K19		染付 皿	口縁～高台部 50%	①(13.4) ②(7.7) ③4.0	良好	灰白色	見込み五弁花か。高台内に筋か。波文見舞。	18世紀中～後
161図	1 K20		染付 蓋	口縁～胴部 40%	①4.3 ②(2.6)	良好	灰白色	笠形。内面に松竹梅。1区21の蓋か。肥前。	1760～80年代か
161図	1 K21		染付 蓋付碗	口縁部片	①11.0 ②(4.2)	良好	灰白色	笠形。蓋物の身。1区20の身か。肥前。	1760～1780年代か
161図	1 K22		染付 蓋	50%	①5.6 ②9.6 ③2.4	良好	灰白色	肥前。	1780～1810年代
161図	1 K23	51KY-16	染付 蓋付鉢	胴～高台部片	②7.8 ③(3.9)	良好	灰白色	肥前。	18世紀前
161図	1 K24	51KX-16	陶器 徳利	胴～底部片	①9.0 ②(4.2)	良好	褐色	美濃。	遡房7か8小期
161図	1 K25		陶器 徳利	口縁～底部片	②(7.0) ③(7.0)	良好	灰黄色	美濃。	遡房10か11小期
161図	1 K26	51KX-15	染付 袋物	口縁～胴部 30%	①(4.3) ②(11.3)	良好	灰白色	地方窯。	近房～近代
161図	1 K27		染付 仏指器	胴～高台部 40%	②3.8 ③(3.4)	良好	灰白色	肥前。	18世紀後
161図	1 K28		陶器 すり鉢	胴～底部片	②13.2 ③(7.5)	良好	浅黄褐色	見込み及び底部外面の使用痕跡顯著。瀬戸。	遡房8か9小期
162図	1 K29		陶器 鉢鉢	口縁～高台部 60%	①25.5 ②14.6 ③14.5	良好	灰白色	見込みに目取4カ所。目取の一部に墨書が残る。判読困難。瀬戸。	遡房8小期
162図	1 K30	51KX-15	陶器 碗	高台部片	②3.8 ③(1.2)	良好	浅黄褐色	小碗。美濃。	遡房5か6小期
162図	1 K31		陶器 碗	高台部片	②5.6 ③(1.9)	良好	灰白色	丸碗高台部の周囲を打ち欠き、内盤状に成形。美濃。	遡房5か6小期
162図	1 K32		染付 碗	口縁～高台部 40%	①6.0 ②3.4 ③3.7	良好	灰白色	小碗。口縁端部輪削ぎのため、蓋がすくものと思われる。瀬戸・美濃系。東北か。	19世紀後

Ⅱ区7号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)									
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高	④			
165図	7建1	7建	陶器 碗	一部欠損	①6.7 ②3.4 ③3.7	良好	灰白色	灰釉。小碗。美濃。	遡房6小期
165図	7建2	7建	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①(7.0) ②(3.0) ③4.2	良好	灰白色	灰釉。小碗。美濃。	遡房7小期
165図	7建3	7建上階	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①(7.2) ②(3.1) ③3.9	良好	灰白色	灰釉。小碗。美濃。	遡房8小期
165図	7建4	7建周辺	染付 碗	口縁～胴部 30%	①(10.0) ②(4.3)	良好	灰白色	外面にコンヤク印判による施文。肥前。	18世紀前
165図	7建5	7建北	染付 碗	完形	①8.0 ②3.2 ③3.6	良好	灰白色	外面に二重黒目文。肥前。	18世紀後
165図	7建6	7建周辺	染付 碗	胴～高台部 40%	②(3.2) ③(3.4)	良好	灰白色	外面に虫籠文。見込み崩れた五弁花。肥前系。	1780～19世紀前
165図	7建7	7建周辺	染付 碗	胴～高台部 30%	②(3.8) ③2.2	良好	灰白色	筒形碗。見込み五弁花。高台内二重方形杓。漆黒。肥前。	1760～80年代
165図	7建8	7建周辺	染付 碗	口縁～胴部 40%	①(6.8) ②(4.2)	良好	灰白色	筒形碗。外面崩れた水裂地に菊花文。肥前系。	1780～19世紀前
165図	7建9	7建	陶器 碗	口縁部片	①11.1 ②(4.2)	良好	ふい黄褐色	天目茶碗。美濃。	遡房5小期
165図	7建10	7建	陶器 碗	完形	①9.9 ②4.6 ③6.6	良好	浅黄色	丸碗。美濃。	遡房7小期
165図	7建11	7建離	陶器 碗	口縁～高台部 80%	①10.8 ②4.3 ③7.1	良好	灰白色	丸碗。美濃。	遡房8小期か
165図	7建12	7建	陶器 碗	口縁～胴部 60%	①(9.4) ②(4.8)	良好	灰白色	鉄輪。丸碗。瀬戸。	遡房8小期
165図	7建13	7建2集石	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①(11.6) ②3.9 ③4.9	良好	灰白色	腰折碗。鉄輪と灰釉の掛け分け碗。美濃。	遡房8小期
165図	7建14	7建北	陶器 皿	口縁～高台部 70%	②5.6 ③(3.0)	良好	灰白色	御深井皿。型押し成形。付け高台。美濃。	遡房5小期
165図	7建15	7建周辺	陶器 皿	口縁～高台部 80%	②5.4 ③3.3	良好	灰白色	御深井皿。型押し成形。付け高台。美濃。	遡房5小期
165図	7建16	7建周辺	陶器 徳利	胴～底部30%	②7.0 ③(12.8)	良好	灰白色	京・信楽系の技術で焼成。底部手持ちヘラ削り。地方窯。	18世紀終～19世紀
165図	7建17	7建1上土	陶器 灯火受皿	胴～底部50%	②(5.3) ③(2.6)	良好	灰色	志戸呂弁。	18世紀中頃

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
165R	7建18	7建北	陶器 片口か	胴～高台部 40%	②6.3 ③(4.3)		良好、灰白色。	鉄軸、漆塗、瀬戸。	建房7か8小期
165R	7建19	7建周辺	陶器 すり鉢	底部片	②10.9 ③(5.2)		良好、 浅黄褐色。	見込み及び底部外面に使用痕跡あり、瀬戸。	建房5～7小期
165R	7建20	7建北	陶器 すり鉢	口縁部片	①(30.0) ③(5.9)		良好、 浅黄褐色。	瀬戸。	建房8小期
166R	7建21	7建北	陶器 すり鉢	完形	①30.5 ②12.0 ③13.0		良好、灰白色。	内面には焼成前に割れた傷を補修した痕跡が現る。欠損部を補修した漆塗も顕著。18本を単位とするすり目、内面及び底部に使用痕跡あり、瀬戸。	建房8小期
165R	7建22	7建周辺	色絵 水滸か	破片	③(2.1)		良好、灰白色。	型押し成形。大形の色絵水滸か、口の部分に3mmほどの円孔を穿つ。肥前か。	18世紀後～19世紀
165R	7建23	7建曜	陶器 碗	高台部片	②5.2 ③(5.2)		良好、灰白色。	丸碗高台部の周囲を打ち欠き、円盤状に成形。美濃。	建房8小期か

Ⅱ区9号石垣 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
176R	9石垣1	9石垣	染付 碗	ほぼ完形	①10.0 ②3.9 ③5.2		良好、灰白色。	内外面二重刷目文。見込みコンニャク印判による施文。肥前。	18世紀第2四半期
176R	9石垣2	9石垣	染付 碗	口縁～胴部 30%	③9.0 ④(4.0)		良好、灰白色。	外面に矢羽文。肥前。	1760～80年代
176R	9石垣3	9石垣	染付 碗	口縁～高台部 50%	①8.2 ②3.3 ④4.8		良好、灰白色。	地方窯か。	1780～19世紀前
176R	9石垣4	9石垣	染付 碗	口縁～胴部 40%	①7.9 ③(5.5)		良好、灰白色。	筒形碗。外面刷れた水滸地に菊花文。	1760～80年代
176R	9石垣5	9石垣	陶器 碗	口縁～高台部 40%	①9.3 ②3.8 ③(4.8)		良好、灰白色。	腰折碗。鉄軸後、上給付。瀬戸・美濃。	建房8小期
176R	9石垣6	9石垣	陶器 徳利	口縁～底部 70%	①2.6 ②6.5 ③(3.6・11.7)		良好、灰白色。	胴部に凹みを持つ。美濃。	建房8か9小期
176R	9石垣7	9石垣	陶器 灯火受皿	口縁～底部 30%	①10.9 ③(2.1)		良好、灰色。	美濃。	建房8小期
176R	9石垣8	9石垣	陶器 香炉	胴～底部片	②6.3 ③(4.3) ④(4.0)		良好、灰白色。	筒形香炉。美濃。	建房7か8小期
176R	9石垣9	9石垣	陶器 片口	口縁～胴部 30%	①17.8 ③(10.0)		良好、灰白色。	美濃。	建房5小期
176R	9石垣10	9石垣	陶器 すり鉢	口縁部片	③(3.7)		良好、赤褐色。	堺・明石か。	近世

Ⅲ区3号屋敷跡 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
177R	3屋敷1	3屋敷跡	染付 碗	口縁～高台部 60%	①(7.2) ②(3.3) ③5.3		良好、灰白色。	筒丸碗。肥前系。地方窯か。	1820～60年代
177R	3屋敷2	3屋敷跡	染付 碗	口縁～高台部 90%	①9.2 ②4.0 ③5.1		良好、灰白色。	外面に二重刷目文。肥前。	18世紀後
177R	3屋敷3	3屋敷跡	陶器 碗	ほぼ完形	①9.2 ②4.1 ③4.8		良好、 浅黄褐色。	腰折碗。鉄軸。肥前。	18世紀前
177R	3屋敷4	3屋敷跡	陶器 碗	口縁～高台部 80%	①10.3 ②4.4 ③6.9		良好、浅黄色。	丸碗。美濃。	建房8小期か
177R	3屋敷5	51区N-22	陶器 碗	胴～高台部片	②4.1 ③(2.0)		良好、灰白色。	腰鉢茶碗。瀬戸。	建房8小期
177R	3屋敷6	51区N-22	陶器 碗	口縁部片	①8.9 ③(3.9)		良好、灰白色。	腰鉢茶碗。瀬戸。	建房8か9小期
177R	3屋敷7	3屋敷跡	陶器 皿	口縁～高台部 80%	①13.7 ②8.2 ③2.5		良好、灰白色。	反り皿。内面及び高台内に目貫5カ所。美濃。	建房4小期
177R	3屋敷8	51区P-21	陶器 瓶	口縁部片	③3.5 ④(2.0)		良好、灰白色。	油壺か。肥前。	17世紀末～18世紀前
177R	3屋敷9	3屋敷跡	陶器 片口	口縁～高台部 80%	①11.9 ②5.1 ③7.0		良好、灰白色。	小型の片口。見込みに目貫3カ所。美濃。	建房8小期
177R	3屋敷10	51区O-22	陶器 すり鉢	胴～底部30%	②(12.5) ③(8.4)		良好、灰白色。	見込み及び底部外面に使用痕跡あり。瀬戸。	建房5～7小期
177R	3屋敷11	3屋敷跡	土人形	完形	高さ3.4		良好。 にぶい黄褐色。	表裏の型作り。底部に破裂を防ぐ小円孔あり。	

Ⅲ区51区2号集石 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
179R	2集石1	51区2集石	在土土器 土師器皿	口縁～底部 70%	③7.2 ②4.4 ④1.3		細砂粒少。良好。 にぶい灰色。	小型の土師器皿。底部より直接的に外反。器壁すい。底部右回転糸切り無調整。焼成良好。底部外面に墨書「中」か。	近世か
179R	2集石2	51区2集石	陶器 碗	口縁～胴部 30%	①12.2 ③(6.4)		良好、灰白色。	尾呂茶碗。美濃。	建房6か7小期
179R	2集石3	51区2集石	陶器 皿	口縁～胴部 30%	①19.0 ③(4.6)		良好、灰白色。	割縁鉢。中皿。内野山諸窯。	17世紀末～18世紀前

遺物観察表

Ⅱ区51区1号土坑 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高					
1808	1坑1	51区1土坑	陶器 すり鉢	底部片	②13.0 ③(5.4)		良好、灰白色、	見込み及び底部に使用痕あり。瀬戸。	連房8小期	

Ⅱ区3号屋敷跡下 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高					
1818	3屋敷下1		在土土器 内耳土器	胴~底部片	③(6.4)		細砂粒やや多。 良好。 にぶい褐色。	甕型。平底。外面やや粗い。内面 横溝で。	中世	

Ⅱ区8号畑 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高					
1838	8畑1	8畑	染付 碗	胴~高台部 50%	②4.2 ③(2.7)		良好、灰白色、	外面に青輪草文花か。肥前。		
1838	8畑2	8畑	陶胎染付 碗	口縁~胴部 30%	①11.1 ③(6.0)		良好、灰色、	肥前。	18世紀前	
1838	8畑3	8畑	染付 仏飯器	胴部30%	③(1.6)		良好、灰白色、	肥前。		

Ⅱ区トレンチ 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高					
1838	Ⅱ区 1トレ1	Ⅱ区 1トレンチ	陶器 皿	口縁~高台部 30%	①11.0 ②5.6 ③2.8		良好。 にぶい褐色。	地方窯。	19世紀頃	
1838	Ⅱ区 15トレ1	Ⅱ区 5トレンチ	染付 碗	口縁~胴部 40%	①11.2 ③(4.9)		良好、灰白色、	広東陶。美濃。	連房10小期	
1838	Ⅱ区 15トレ2	Ⅱ区 15トレンチ	陶器 皿	胴~高台部片	②5.2 ③(1.7)		良好、灰白色、	摺絵皿。美濃。	連房7小期	
1838	Ⅱ区 15トレ3	Ⅱ区 15トレンチ	土人形	一部欠損	幅2.2 厚2.2 ③(3.4)		良好、褐色。	型作り。		

Ⅱ区遺構外 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高					
1838	Ⅱ区1		染付 碗	胴~高台部 40%	②4.0 ③(2.3)		良好、灰白色、	高台内に雨れた跡あり。波佐見系。	18世紀後	
1838	Ⅱ区2		染付 碗	口縁~高台部 60%	①10.0 ②3.8 ③4.7		良好、灰白色、	外面に青輪草文花。高台内に雨れた跡 あり。波佐見系。	18世紀後	
1838	Ⅱ区3		染付 碗	一部欠損	①10.8 ②4.2 ③5.0		良好、灰白色、	外面に梅樹文。見込み縦目割割者。 波佐見系。	18世紀後	
1838	Ⅱ区4		染付 碗	口縁~胴部 30%	③8.1 ⑤(5.2)		良好、灰白色、	筒形碗。外面に矢羽文。肥前。	1760~80年代	
1838	Ⅱ区5	51区M-23	陶器 皿	口縁部片	①12.0 ③(1.7)		良好、灰白色、	輪壳皿。美濃。	連房5か6小期	
1838	Ⅱ区6		陶器 皿	胴~高台部 40%	②5.2 ⑤(1.4)		良好、灰白色、	摺絵皿。美濃。	連房7小期	
1838	Ⅱ区7		陶器 皿	高台部片	②5.2 ③(1.2)		良好、灰白色、	摺絵皿。美濃。	連房7小期	
1838	Ⅱ区8	51区O-21	陶器 片口	胴~高台部 30%	②9.8 ③(4.7)		良好、灰白色、	鉄輪。美濃。	連房6か7小期	

Ⅱ区22~24号畑 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高					
1858	22畑1	22畑	陶器 碗	胴~高台部 30%	②5.5 ③(2.8)		良好、灰白色、	尾呂茶碗。美濃。	連房5小期	
1858	23畑1	23畑	青磁 碗	胴部片	③(1.9)		良好、灰色、	箱蓋弁文陶。	B1類	
1858	23畑2	23畑	陶器 皿	高台部片	③(1.2)		良好、灰白色、	灰軸。瀬戸・美濃。	大塚2か3	
1858	24畑1	24畑	在土土器 内耳土器	口縁部片	③(4.2)		細砂粒やや多。 良好。褐色。	甕形。口縁部平坦でシャープ。内外 面横溝で。	中世	

Ⅱ区トレンチ 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 色調	焼成	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高					
1908	Ⅱ区 22トレ1	Ⅱ区 22トレンチ	陶器 皿	口縁部片	①12.0 ③(1.7)		良好、灰白色、	志野。美濃。	連房1小期	
1908	Ⅱ区 24トレ1	Ⅱ区 24トレンチ	在土土器 内耳土器か	底部片	③(1.2)		細砂粒やや多。 良好。 にぶい褐色。	平底。	中世	
1908	Ⅱ区 25トレ1	Ⅱ区 25トレンチ	陶器 碗	口縁部片	①11.3 ③(3.4)		良好、灰白色、	天目茶碗。瀬戸・美濃。	連房1小期	
1908	Ⅱ区 25トレ2	Ⅱ区 25トレンチ	陶器 碗	胴部片	③(3.2)		良好、灰白色、	腰折碗。鉄絵。関西系。地方窯。	18世紀	

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
1908	Ⅱ区 25トレ3	Ⅱ区 25トレンチ	陶器 皿	高台部片	②7.2	③(1.2)		良好。灰色。	鉄絵皿。美濃。	連房2小期
1909	Ⅱ区 26トレ1	Ⅱ区 26トレンチ	青磁 碗	胴部片	③(2.9)			良好。灰白色。	鍋蓋弁文碗。	B1類
1909	Ⅱ区 27トレ1	Ⅱ区 27トレンチ	青磁 碗	口縁部片	③(2.7)			良好。灰白色。	線刻による蓮弁。	B4類
1908	Ⅱ区 28トレ1	Ⅱ区 28トレンチ	陶器 碗	口縁～高台部 40%	①11.0	②4.4	③7.2	良好。灰白色。	尾呂茶碗。美濃。	連房7小期

Ⅱ区9号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
1936	9建1	9建	染付 小杯	口縁～胴部 50%	①8.0	②3.3	③4.0	良好。灰色。	外面に世文。肥前。	18世紀後
1936	9建2	9建	色絵 碗	口縁～高台部 40%	①7.5	②2.2	③3.4	良好。灰白色。	小碗。肥前。	18世紀後
1936	9建3	9建1床下	染付 碗	口縁～高台部 60%	①9.7	②4.1	③5.1	良好。灰白色。	外面コンニャク印判による施文。肥前。	18第2四半期
1936	9建4	9建 1回炉裏西	染付 碗	完形	①9.5	②3.6	③5.1	良好。灰白色。	外面に雪輪草文。肥前。	18世紀前
1936	9建5	9建上間	染付 碗	口縁～胴部 30%	①8.0	③(4.4)		良好。灰白色。	生産地不明。福岡県などで早くから焼成するタイプ。被熱。	1780～19世紀前
1936	9建6	9建	染付 碗	完形	①7.4	②3.4	③6.0	良好。灰白色。	筒形碗。見込みコンニャク印判による五弁花。肥前。	1770～80年代
1936	9建7	9建	染付 碗	完形	①7.8	②3.6	③6.1	良好。灰白色。	筒形碗。見込みコンニャク印判による五弁花。肥前。	1770～80年代
1936	9建8	9建	染付 碗	完形	①7.9	②3.8	③5.9	良好。灰白色。	外面崩れた水裂地に菊花文。見込み五弁花。肥前。	1770～80年代
1936	9建9	9建西	陶器染付 碗	口縁部片	①9.7	③(5.0)		良好。灰色。	外面に蓮枝唐草文。肥前。	18世紀前
1936	9建10	9建	陶器染付 碗	口縁～高台部 70%	①12.0	②4.9	③8.2	良好。灰色。	肥前。	18世紀前
1936	9建11	9建東	陶器 碗	胴～高台部 30%	②4.7	③(3.8)		良好。灰白色。	丸碗。美濃。	連房7小期
1936	9建12	9建上間	陶器 碗	口縁～高台部 80%	①10.9	②4.9	③7.1	良好。灰白色。	丸碗。美濃。	連房7小期
1936	9建13	9建東	陶器 碗	口縁～高台部 90%	①10.9	②5.0	③6.9	良好。灰白色。	尾呂茶碗。美濃。	連房6か7小期
1936	9建14	9建北	染付 仏飯器	胴～底部60%	②4.0	③(4.7)		良好。灰白色。	肥前。	18世紀後
1936	9建15	9建 1回炉裏西	陶器 香炉	完形	①9.7	②6.6	③5.7	良好。にぶい 黄色。	筒形香炉。内面に灰が遺存する。美濃。	連房6小期
1936	9建16	9建 2回炉裏北	陶器 片口	口縁～胴部 40%	①17.1	③(8.6)		良好。灰白色。	美濃。	連房8小期
1936	9建17	9建	土人形	頭部片	③(2.5)			良好。 にぶい黄褐色。	表裏の型作り。	
1936	9建18	9建地山中	陶器 皿	高台部片	②3.5	③(1.0)		良好。灰白色。	楕圓皿高台部の周囲を打ち欠き、円盤状に成形。美濃。	連房7小期

Ⅱ区4号屋敷跡下 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
2048	4屋敷下 1		染付 小杯	口縁～胴部 50%	①8.1	③(3.6)		良好。灰白色。	外面に世文。肥前。	18世紀後
2048	4屋敷下 2	9建地山中	染付 碗	胴～高台部 30%	②5.0	③(3.5)		良好。灰白色。	肥前。	17世紀中～末
2048	4屋敷下 3	9建1床下 地山中	陶器 碗	胴～高台部 30%	②4.3	③(2.4)		良好。灰白色。	丸碗。鉄軸。瀬戸。	連房7か8小期
2048	4屋敷下 4	9建地山中	陶器 皿	口縁部片	①12.0	③(1.8)		良好。灰白色。	志野。被熱。美濃。	連房1か2小期
2048	4屋敷下 5	9建地山中	陶器 皿	口縁部片	①11.9	③(1.6)		良好。淡黄色。	鉄絵皿。美濃。	連房3小期
2048	4屋敷下 6	9建上間 地山中	染付 碗	高台部片	②2.9	③(1.5)		良好。灰白色。	小杯または小碗の高台部周囲を打ち欠き、円盤状に成形。肥前。	18世紀
2048	4屋敷下 7	9建地山中	陶器 すり鉢	胴部片	③(1.1)			良好。灰白色。	すり鉢胴部周囲を打ち欠き、円盤状に成形。瀬戸。	連房5～8小期

遺物観察表

Ⅱ区10号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
209R	10建44	10建	染付 碗	一部欠損	①7.5 ②3.0 ③3.8		良好、灰白色。	小坪または小碗。外面に唐文。肥前。	18世紀中～後
209R	10建45	10建上西	染付 碗	口縁～高台部 50%	①3.0 ②2.5 ③3.5		良好、灰白色。	小碗。外面に草文。器壁薄い。肥前。	1780～1810年代
209R	10建46	10建1集設	染付 碗	完形	①3.5 ②3.4 ③4.1		良好、灰白色。	小碗。外面に雲。内面に雲龍文。中国磁器写し。有田。	18世紀後
209R	10建47	10建	染付 碗	口縁～高台部 50%	①3.2 ②3.2 ③4.3		良好、灰白色。	小広東碗。内外表面丸文。漆織。肥前。	1770～80年代
209R	10建48	10建	染付 碗	口縁～高台部 60%	①0.6 ②3.8 ③4.7		良好、灰白色。	外面に雪輪草花文。高台内崩れた跡あり。波佐見系。	18世紀後
209R	10建49	10建	陶器 碗	口縁～高台部 50%	①3.0 ②4.5 ③6.4		良好、灰白色。	箱形碗。美濃。	連房8小期
209R	10建50	10建西	染付 蓋付鉢	口縁～高台部 40%	①10.5 ②9.5 ③4.1		良好、灰白色。	蓋付鉢の身。肥前。	1780～1820年代
209R	10建51	10建	陶器 灯火皿	完形	①3.6 ②3.0 ③2.1		良好、褐色。	外面に重ね焼き時の痕跡を残す。内面に油煙が顕著に遺存。美濃。	連房8・9小期
209R	10建52	10建槽場外	陶器 灯火受皿	完形	①3.2 ②4.2 ③1.7		良好。 にふい赤褐色。	外面に重ね焼き時の痕跡を残す。内面に油煙遺存。美濃。	連房8小期
209R	10建53	10建	陶器 脚皿	完形	長さ15.6 幅10.1 高さ2.1		良好。 にふい黄褐色。	型押し成形。地方産。	18世紀
209R	10建54	10建	陶器 片口	口縁～高台部 30%	①17.1 ②8.0 ③8.7		良好、淡黄色。	高台内に墨書。「竹林 原町村□」か。美濃。	連房8小期
209R	10建55	10建西	陶器 片口	完形	①16.5 ②8.9 ③9.0		良好、灰黄色。	一部破損か。美濃。	連房8小期
209R	10建56	10建槽場外	陶器 片口	口縁～高台部 70%	①19.9 ②9.7 ③10.4		良好、淡黄色。	大型の片口。見込みに目痕3カ所。高台内に墨書。「澤ノ○」または「河ノ口」か。美濃。	連房8小期
209R	10建57	10建	陶器 片口	ほぼ完形	①19.3 ②9.6 ③11.2		良好、淡黄色。	大型の片口。見込みに目痕3カ所。高台内に墨書。「四四」。漆織。美濃。	連房8小期
209R	10建58	10建	陶器 碗	高台部片	②4.9 ③(1.5)		良好、浅黄色。	尾白茶碗高台部の周囲を打ち欠き、円盤状に成形。美濃。	連房6・7小期

Ⅱ区5号屋敷跡下 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
229R	5屋敷下 1	10建	在地土器 内耳土器	頸部片	③(2.5)		細砂粒や多。 良好。 にふい黄褐色。	外面やや粗い撫で。内面横撫で。	中世
229R	5屋敷下 2	10建1軒下	陶器 碗	口縁～胴部 30%	①(5.6) ②(2.3)		良好、灰白色。	灰釉。小碗。瀬戸。	連房7小期
229R	5屋敷下 3	10建床下 土坑	染付 碗	口縁～高台部 60%	①(0.1) ②3.6 ③5.8		良好、灰白色。	小丸形碗。外面に連続する花文。見込み弁花。肥前。	1780～1810年代
229R	5屋敷下 4		色絵 瓶	胴部片	③(2.4)		良好、灰白色。	香が油塗か。有田。	18世紀後

Ⅱ区11号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
232R	11建1	11建北	染付 碗	口縁～高台部 40%	①(7.5) ②(3.2) ③4.1		良好、灰白色。	小碗。肥前。	
232R	11建2	11建	染付 碗	胴～高台部 40%	②4.3 ③(2.4)		良好、灰白色。	外面に雪輪草花文か。高台内に崩れた跡あり。肥前。	
232R	11建3	11建南	陶器 香炉	胴～高台部 40%	②3.6 ③(2.7)		良好、灰白色。	小型の筒形香炉。灰釉。美濃。	連房8か9小期
232R	11建4	11建	陶器 碗	完形	①7.9 ②4.3 ③6.2		良好、浅黄色。	箱形湯呑。箱形湯呑。高台内には、施輪前に「市左衛門」と刻字。美濃。	連房8小期
232R	11建5	11建東	陶器 碗	口縁～高台部 70%	①(10.0) ②(4.0) ③4.7		良好、灰白色。	腰折碗。灰釉と鉄釉の掛け分け碗。美濃。	連房7小期
232R	11建6	11建	陶器 碗	口縁～高台部 90%	①9.1 ②3.4 ③4.6		良好、浅黄色。	腰折碗。鉄釉後、上絵付。漆織。瀬戸。	連房8小期
232R	11建7	11建	磁器 皿	高台部片	②(5.6) ③(1.8)		良好、灰白色。	蛇ノ目輪割ぎ。	
232R	11建8	11建北	陶器 灯火受皿	口縁～胴部 50%	①10.0 ②3.9 ③1.9		良好、浅黄色。	美濃。	連房9小期
232R	11建9	11建	陶器 片口	口縁～高台部 80%	①16.8 ②9.0 ③9.0		良好、淡黄色。	見込みに目痕3カ所。美濃。	連房8小期
232R	11建10	11建西	陶器 費か	口縁部片	③(3.1)		良好。 にふい赤褐色。	銅緑釉。白化胎土による無文。肥前。	17世紀後～18世紀初

N区13号建物 遺物観察表(土器・陶器類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②底径 ③器高				
Z38R	13建1	13建	白磁 小坏	完形	①6.9 ②2.8 ③3.7		良好。灰白色。肥前。	18世紀前	
Z38R	13建2	13建	陶器 碗	胴～高台部 50%	②3.3 ③(2.4)		良好。淡黄色。灰輪。小碗。美濃。	連房7小期	
Z38R	13建3	13建西	陶器 碗	口縁～高台部 80%	①7.2 ②3.6 ③4.4		良好。灰白色。灰輪。小碗。美濃。	連房7小期	
Z38R	13建4	13建	染付 碗	口縁～胴部 40%	①10.4 ③(3.7)		良好。灰白色。外面に雪輪草花文。波佐見系。	18世紀後	
Z38R	13建5	13建	染付 碗	口縁～胴部 30%	①9.9 ③(4.0)		良好。灰白色。外面に雪輪草花文。波佐見系。	18世紀後	
Z38R	13建6	13建東	染付 碗	口縁部片	①8.9 ③(3.3)		良好。灰白色。外面に雪輪草花文。漆黒。肥前。		
Z38R	13建7	13建西	染付 碗	口縁～高台部 70%	②4.2 ③(3.4)		良好。灰白色。外面に雪輪草花文。高台内崩れた跡あり。波佐見系。	18世紀後	
Z38R	13建8	13建西	染付 碗	口縁～高台部 90%	①9.7 ②3.9 ③5.2		良好。灰白色。外面に雪輪草花文。高台内崩れた跡あり。肥前。	18世紀後	
Z38R	13建9	13建西	染付 碗	完形	①9.6 ②4.0 ③5.1		良好。灰白色。外面に雪輪草花文。高台内崩れた跡あり。肥前。	18世紀後	
Z38R	13建10	13建西	染付 碗	完形	①9.3 ②3.9 ③5.0		良好。灰白色。外面に雪輪草花文。高台内崩れた跡あり。肥前。	18世紀後	
Z38R	13建11	13建西	染付 碗	一部欠損	①9.5 ②4.0 ③4.9		良好。灰白色。外面コンニャク印判による施文3カ所。肥前。	18第24半期	
Z38R	13建12	13建	染付 碗	口縁～高台部 40%	①8.6 ②3.4 ③5.8		良好。灰白色。小丸彫。外面に玉取獅子。見込み五弁花。肥前。	1760～80年代	
Z38R	13建13	13建西	染付 碗	完形	①8.0 ②3.7 ③5.9		良好。灰白色。筒形碗。見込み五弁花。肥前。	1760～80年代	
Z38R	13建14	13建周辺	染付 碗	口縁～胴部 40%	①6.8 ③(4.3)		良好。灰白色。筒形碗。肥前系	1780～19世紀初	
Z38R	13建15	13建周辺	染付 碗	口縁～胴部片	①6.5 ③(4.5)		良好。灰白色。筒形碗。肥前系	1780～19世紀初	
Z38R	13建16	13建	染付 碗	口縁～高台部 50%	②3.6 ③(2.0)		良好。灰白色。筒形碗。見込み崩れた五弁花。肥前系。	1780～19世紀初	
Z38R	13建17	13建西	色絵 碗	完形	①7.9 ②2.7 ③3.4		良好。灰白色。内外面に赤色の上絵付。同心円状の文様。有田。	18第4～3半期か	
Z38R	13建18	13建西	陶器染付 碗	胴部片	③(4.1)		良好。灰白色。外面に破損山水文か。被熱。肥前。	18世紀前	
Z38R	13建19	13建	陶器 碗	胴～高台部 50%	②4.2 ③(3.2)		良好。灰白色。鑲茶碗。瀬戸。	連房8小期	
Z38R	13建20	13建	陶器 碗	胴～高台部片	②4.6 ③(2.9)		良好。灰白色。鑲茶碗。瀬戸。	連房8小期	
Z38R	13建21	13建124 周辺	陶器 碗	口縁部片	①7.7 ③(3.3)		良好。灰白色。鑲茶碗。美濃。	連房8小期	
Z38R	13建22	13建西	陶器 碗	完形	①8.0 ②4.3 ③6.0		良好。灰白色。鑲茶碗。美濃。	連房8小期	
Z38R	13建23	13建東	陶器 碗	口縁部片	①7.6 ③(4.0)		良好。灰白色。筒形碗。内外面掛け分け。瀬戸。	連房8・9小期	
Z38R	13建24	13建東	陶器 碗	完形	①8.7 ②3.4 ③4.6		良好。淡黄色。腰折後。鉄粒後。上絵付。美濃か。	連房8小期	
Z38R	13建25	13建	陶器 碗	ほぼ完形	①8.9 ②3.3 ③4.8		良好。灰白色。腰折後。鉄粒後。上絵付。美濃。	連房8小期	
Z38R	13建26	13建西	陶器 碗	一部欠損	①9.5 ②3.5 ③4.7		良好。灰白色。腰折後。鉄粒後。上絵付。美濃。	連房8小期	
Z38R	13建27	13建周辺	陶器 碗	口縁部片	①(9.5) ③(3.6)		良好。灰白色。腰折後。上絵付。美濃。	連房8小期	
Z38R	13建28	13建西	陶器 碗	一部欠損	①9.0 ②3.2 ③4.7		良好。灰白色。腰折後。鉄粒後。上絵付。美濃か。	連房8小期	
Z38R	13建29	13建西	陶器 碗	口縁～胴部 30%	①12.4 ③(5.4)		良好。灰白色。柳茶碗。美濃。	連房8小期	
Z38R	13建30	13建	陶器 碗	口縁～高台部 80%	①12.1 ②4.5 ③5.8		良好。灰白色。柳茶碗。美濃。	連房8小期	
Z39R	13建31	13建	陶器 碗	口縁～高台部 30%	①12.4 ②4.1 ③5.5		良好。灰白色。柳茶碗。美濃。	連房8小期	
Z39R	13建32	13建西	陶器 碗	一部欠損	①12.1 ②4.3 ③6.0		良好。灰白色。柳茶碗。施繪前に鉄で「孫兵衛」と書かれる。美濃。	連房8小期	
Z39R	13建33	13建	磁器 紅皿	口縁～高台部 50%	①5.8 ②2.0 ③1.4		良好。灰白色。型押し成形による頼草文。肥前。		
Z39R	13建34	13建	染付 皿	高台部片	②5.2 ③(1.4)		良好。灰白色。小皿。肥前。		
Z39R	13建35	13建西	染付 皿	ほぼ完形	①9.5 ②5.2 ③2.6		良好。灰白色。小皿。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代	
Z39R	13建36	13建西	染付 皿	一部欠損	①9.5 ②5.1 ③2.6		良好。灰白色。小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代	
Z39R	13建37	13建西	染付 皿	完形	①9.5 ②5.2 ③2.6		良好。灰白色。小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②口径 ③器高			
239R	13建38	13建南西	染付 皿	完形	①9.5 ②4.9 ③2.7		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建39	13建南西	染付 皿	完形	①9.5 ②4.6 ③2.5		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建40	13建南西	染付 皿	一部欠損	①9.4 ②4.9 ③2.4		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建41	13建南西	染付 皿	ほぼ完形	①9.6 ②5.1 ③2.5		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建42	13建南西	染付 皿	一部欠損	①9.1 ②4.7 ③2.3		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建43	13建南西	染付 皿	一部欠損	①9.5 ②4.9 ③2.7		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建44	13建南西	染付 皿	一部欠損	①9.7 ②5.1 ③2.6		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建45	13建南西	染付 皿	一部欠損	①9.7 ②5.0 ③2.6		良好。灰白色。	小皿。扇文。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内崩れた跡あり。粗製。肥前。	1740～80年代
239R	13建46	13建南西	染付 皿	口縁～高台部 90%	①13.2 ②8.5 ③4.3		良好。灰白色。	輪花皿。見込みコンニャク印判による五弁花。高台内一重方形枠に満福。肥前。	18世紀後
240R	13建47	13建南西	染付 皿	一部欠損	①20.2 ②11.7 ③4.6		良好。灰白色。	中皿。高台内二重方形枠に満福。波文見系か。	1750～80年代
240R	13建48	13建	染付 蓋付鉢	完形	②14.6 ③4.3		良好。灰白色。	蓋付鉢の蓋。有田。13建49の蓋か。	18世紀後
240R	13建49	13建南西	染付 蓋付鉢	口縁～高台部 30%	①14.4 ②9.6 ③6.3		良好。灰白色。	蓋付鉢の身。有田か。13建48の身か。	18世紀後
240R	13建50	13建	染付 蓋	口縁部欠損	①5.0 ②9.3 ③2.6		良好。灰白色。	広東碗の蓋。肥前。	1780～1810年代
240R	13建51	13建南西	陶器 仏蘭具	一部欠損	①7.0 ②4.3 ③4.7		良好。灰白色。	灰釉。美濃。	連房8小期
240R	13建52	13建南西	陶器 仏蘭具	完形	①7.1 ②4.2 ③4.5		良好。灰白色。	灰釉。美濃。	連房8小期
240R	13建53	13建南西	染付 瓶	一部欠損	①4.6 ②7.2 ③23.8		良好。灰白色。	外面に藍文。肥前。	18世紀後～19世紀初
240R	13建54	13建東辺	染付 油壺	胴部30%	③(3.9)		良好。灰白色。	外面に梅樹文。肥前。	18第2・3四半期
240R	13建55	13建	染付 瓶	胴部片	⑤(5.0)		良好。灰白色。	菊草文。肥前。	18第4四半期～19世紀初
240R	13建56	13建	染付 瓶	口縁～高台部 80%	①1.5 ②4.4 ③(11.0・3.8)		良好。灰白色。	菊草文。漆黒。肥前。	1770～80年代
240R	13建57	13建南西	染付 瓶	口縁～高台部 90%	①1.5 ②4.4 ③13.1		良好。灰白色。	菊草文。肥前。	1770～80年代
240R	13建58	13建南西	陶器 灯火皿	口縁～底部 90%	①9.6 ②5.4 ③1.7		良好。褐色。	全面に油煙が顕著に遺存。美濃か。	連房7か8小期
240R	13建59	13建南西	陶器 灯火皿	一部欠損	①8.4 ②4.0 ③1.8		良好。灰白色。	外面に重ね焼き時の痕跡を残す。美濃。	連房8小期
240R	13建60	13建南西	陶器 灯火受皿	完形	①11.2 ②5.0 ③1.8		良好。褐色。	外面に重ね焼き時の痕跡を残す。口縁部に油煙遺存。美濃。	連房8小期
240R	13建61	13建南西	陶器 灯火受皿	一部欠損	①8.7 ②3.9 ③2.1		良好。 明黄褐色。	美濃。	連房8小期
240R	13建62	13建	陶器 灯火受皿	口縁～底部 50%	①9.4 ②4.4 ③2.1		良好。灰白色。	外面に重ね焼き時の痕跡を残す。美濃。	連房9小期
240R	13建63	13建南西	陶器 灯火具	完形	①12.1 ②4.8 ③4.7		良好。 浅黄褐色。	外面に重ね焼き時の痕跡を残す。美濃。	連房7小期
241R	13建64	13建南西	陶器 香炉	完形	①6.1 ②3.4 ③4.3		良好。灰白色。	灰釉。小型の筒形香炉。内面に灰を残す。美濃。	連房8小期
241R	13建65	13建	陶器 火入	口縁部片	①(9.1) ②(2.3)		良好。灰白色。	瀬戸。	連房8小期
241R	13建66	13建南西	陶器 香炉	口縁～底部 80%	①10.2 ②7.5 ③5.4		良好。灰白色。	筒形香炉。美濃。	連房8小期
241R	13建67	13建南西	陶器 香炉	胴～底部90%	①10.5 ②7.7 ③5.4		良好。淡黄色。	筒形香炉。美濃。	連房8小期
241R	13建68	13建南西	陶器 香炉	ほぼ完形	①10.9 ②7.8 ③5.5		良好。淡黄色。	筒形香炉。見込み及び底部外面に墨塗。判読困難。美濃。	連房7小期
241R	13建69	13建西	陶器 すり鉢	口縁～底部 60%	①30.1 ②11.6		良好。灰白色。	13本を単位とするすり目。底部及び見込み部分に使用痕跡あり。瀬戸。	連房8小期
241R	13建70	13建南西	陶器 鉢鉢	口縁～高台部 70%	①34.5 ②15.7		良好。灰白色。	大型の鉢鉢。瀬戸。	連房8小期

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
241図	13建71	13建西	陶器 半胴	一部欠損	①15.0 ②9.6 ③14.5	良好。浅黄色。	瀬戸。	連房7小期
241図	13建72	13建南西	陶器 水甕	一部欠損	①21.9 ②14.0 ③17.2	良好。灰白色。	瀬戸。	連房8小期
241図	13建73	13建東	陶器 船徳利か	底部片	③(1.3)	良好。灰色。	船徳利と思われる底部片周囲を打ち欠き、円盤状に成形。瀬戸。	連房期
241図	13建74	13建南西	染付 根付	完形	長さ3.9 幅1.9 厚2.5	良好。灰白色。	習得し成形による東と鼠、宝珠、鼠、宝珠に染付。上半分のみ輪縁。裏面に凹孔2ヵ所。肥前。	1750～80年代

Ⅳ区14号建物 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
252図	14建1	14建周辺	陶器 小杯	口縁～胴部 20%	①8.2 ②(2.8)	良好。灰白色。	美濃。	連房5～7小期
252図	14建2	14建	染付 碗	高台部片	②3.2 ③(2.3)	良好。灰白色。	肥前。	
252図	14建3	14建周辺	染付 碗	口縁～高台部 60%	①(7.6) ②3.6 ③5.5	良好。灰白色。	肥前系。	18世紀
252図	14建4	14建	陶磁器 染付 碗	口縁部片	①10.5 ③5.0	良好。灰白色。	肥前。	18世紀前
252図	14建5	14建周辺	陶器 碗	口縁～高台部 60%	①(8.0) ②3.2 ③4.7	良好。灰白色。	小杉茶碗か。京・信楽系。	近世
252図	14建6	14建周辺	陶器 皿か	胴部片	③(2.7)	良好。灰白色。	肥前。	18世紀前
252図	14建7	14建周辺	陶器 すり鉢	胴部片	③(10.9)	良好。灰白色。	瀬戸。	連房7小期
252図	14建8	14建	陶器 碗	高台部片	②5.1 ③(1.6)	良好。灰白色。	尾呂茶碗高台部片の周囲を打ち欠き、円盤状に成形。美濃。	連房7小期

Ⅳ区8号石垣 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
256図	8石垣1	52区P-4	染付 火入	口縁部片	①10.2 ③(3.5)	良好。灰白色。	肥前。	18第2・3四半期
256図	8石垣2	8石垣南下	陶器 片口	口縁～高台部 70%	①17.1 ②8.3 ③9.3	良好。淡黄色。	美濃。	連房8小期

Ⅳ区5号道 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
256図	5道1	5道北	陶器 香炉	胴～底部40%	②7.8 ③(3.7)	良好。灰白色。	筒形香炉。美濃。	連房7小期

Ⅳ区7号屋敷跡 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
256図	7屋敷1	13建 圓か裏内	在土土器 内耳土器	胴部片	③(2.8)	細砂粒や多。 良好。 灰黄褐色。	外面磨いた態で。内面器面劣化。外面器表は黒色。	中世

Ⅳ区16号畑 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
258図	16畑1	16畑	染付 仏飯器	胴～底部50%	②3.5 ③(4.1)	良好。灰白色。	肥前。	18世紀後
258図	16畑2	16畑	染付 瓶	胴部片	③(2.0)	良好。灰白色。	徳利。肥前。	18世紀
258図	16畑3	16畑	染付 瓶	完形	①1.8 ②2.9 ③7.9	良好。灰白色。	小瓶。肥前。	18世紀後

Ⅳ区道橋外 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
259図	Ⅳ区1		陶器 灯台台	一部欠損	②5.0 ③(5.3)	良好。灰白色。	美濃。	連房8か9小期

東京道跡道橋外 遺物観察表(土器・陶磁器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)	胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径②口径 ③器高			
259図	1		染付 碗	口縁～胴部 30%	①8.0 ③(3.3)	良好。灰白色。	小丸碗。肥前系。	1780～1810年代
259図	2		染付 碗	口縁～高台部 50%	①10.0 ②4.2 ③5.0	良好。灰白色。	外面に雪輪草花文。肥前。	18世紀後
259図	3		染付 碗	胴～高台部 30%	②3.4 ③(5.4)	良好。灰白色。	深い小丸碗。肥前系。	1820～60年代

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			胎土 焼成 色調	成形、調整の特徴など	備考
					①口径	②底径	③器高			
259図	4		陶器 皿	高台部片30%	②6.0 ③(1.7)		良好、灰白色	須須輪、瀬戸・美濃系。	18世紀後	
259図	5		漆付 仏飯器	胴~底部60%	②3.6 ③(3.6)		良好、灰白色	肥前。	18世紀	
259図	6		色絵 花壇	口縁部片	①8.0 ③(1.9)		良好、灰白色	肥前か。	18世紀末~19世紀	
259図	7		陶器 直	完形	①7.1 ②7.4 ③9.0		良好、淡黄色	有耳直、美濃。	透明7小期	
259図	8		陶器 不明	底部片	③(1.1)		良好、灰白色	円孔あり。底部に墨書。判読困難。		

遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

1区1号建物 遺物観察表(漆器・木製品・布・道具類)

* () 内の数値は、欠損による残存部最大値が推定値である。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ幅 ②厚・高	③		
22図	1建208	1建床下	木製品 漆桶 蓋	50%	①185.0 底径10.0 ②2.4		-	内外面赤色漆で仕上げ、口縁・高台端部のみに黒漆を塗る。漆桶の蓋と思われる。
22図	1建209	1建1唐白東	木製品 漆桶 蓋	完形	①185.1 底径10.0 ②2.6		-	内外面赤色漆で仕上げ、口縁・高台端部のみに黒漆を塗る。壺本地か。漆桶の蓋と思われる。
22図	1建210	1建北	木製品 漆桶 蓋	一部欠損	①185.6 底径10.8 ③3.4		-	内外面赤色漆。口縁・高台端部のみに黒漆を塗る。高台内に黒漆で文字を書くも判読困難。漆桶の蓋と思われる。
22図	1建211	1建北上台下	木製品 漆桶 蓋	80%	③(2.9)		-	内面赤色漆で仕上げ、外面は黒漆の上に、蒔絵で菊花文を施す。漆桶の蓋と思われる。
22図	1建212	1建1唐白内	木製品 漆桶	ほぼ完形	①口径10.7 底径10.0 ③3.7		マツ属	内外面赤色漆で仕上げ、口縁・高台端部のみに黒漆を塗る。壺本地。1号唐白内から、榎(1建230)、漆(1建241)とともに出土。
22図	1建213	1建西	木製品 漆桶	60%	①口径11.7 ③4.1		-	内外面赤色漆で仕上げ、高台部端部のみに黒漆を塗る。高台内に黒漆で文字を書くも判読困難。
22図	1建214	1建3床下	木製品 漆桶	70%	①口径11.6 ③5.9		-	内外面赤色漆で仕上げ。
22図	1建215	1建1唐白東	木製品 漆桶	80%	③(7.4)		-	内外面赤色漆で仕上げ。高台内に黒漆で「源右井」か。判読困難。
22図	1建216	1建1唐白東	木製品 漆桶	90%	③(6.9)		-	内外面赤色漆で仕上げ。高台内中央に黒漆で「小倉」、左側に「上」。
22図	1建217	1建北上台下	木製品 漆桶	70%	③(4.6)		-	内外面赤色漆で仕上げ。高台内に孔を2カ所穿つ。転用か、榎本地。
22図	1建218	1建馬屋北	木製品 漆桶	80%	③(6.3)		-	内外面赤色漆で仕上げ。高台内に黒漆で文字。判読困難。榎本地。
22図	1建219	1建室	木製品 漆桶 蓋	60%	③(2.5)		マツ属	内外面赤色漆で仕上げ。高台内に黒漆で「井」。側面に2mmほどの孔を2カ所穿つ。漆桶の蓋を転用か。榎本地。
23図	1建220	1建1床下	木製品 お椀	ほぼ完形	径23.5 ③11.6		-	蓋を伴うお椀。蓋、身とも内外面漆で仕上げ。接合部は木皮で止める。側板は口縁部ほど厚いがやや厚くなる。底部外面には「ハ(ヤマ)」に「上」「口」の印。
23図	1建221	1建6床	木製品 曲物	底板欠損	径20.5 ③7.0		-	接合部は木皮で止める。側面底部には木釘で底板を止めた痕跡があるも、底板は欠損している。
24図	1建222	1建1唐白東	木製品 お椀 蓋	一部欠損	径27.2 ③(1.5)		-	内外面漆で仕上げ。お椀だが、受けが欠損していると思われる。転用された可能性も考えられる。
24図	1建223	1建	木製品 お椀 蓋	50%	径(14.5) ③(1.2)		-	中央に孔が穿たれており、転用と思われる。漆一部遺存。
24図	1建224	1建1床上	木製品 曲物	ほぼ完形	径17.0 ③7.8		-	接合部は木皮で止める。側面下部には、木釘で底板を止めた痕跡あり。側面の口縁部ほど厚いがやや厚くなる。
25・26図	1建225	1建5床上	木製品 行灯	一部欠損	②29.5 ③14.0		マツ属複葉樹 束葉属	底板のない台形の箱を台とし、上台天板には断面方形の欄い柱が四隅に打ち込まれるように立つ。柱には欠け込みがあり、木釘が確認できる。柱をつなぐ枝があり、横を越ける紙が貼られていたとも考えられる。天板四辺には、油がこぼれるのを防ぐためか、渠のように断面方形の欄い柱が打ちつけられる。天板中央には2×1cmほどの孔を穿ち、打火面を受ける部分を接合する。打火面を受ける部分には横があり、固定のためか孔が確認できる。十字に組んだ部分には打火面を載せていたと思われる。各所には木釘が打ち込まれ、固定されている。
26図	1建226	1建4床下	木製品 お椀	側板、脚欠損	①26.2 ②26.2 ③(2.9)		マツ属複葉樹 束葉属	脚欠損している。側面及び脚が欠損している部分以外は、透き漆で仕上げ。1建226は、このお椀の側板の一部と思われる。
26図	1建227	1建3床下	木製品 箱	完形	①14.0 ②9.5 ③6.9		-	木釘により接合された後、透き漆で仕上げ。内側面の板は面取、木釘の痕跡はないが固定されている。いわゆる「箱枕」か。
26図	1建228	1建3床下	木製品 箱	完形	①14.2 ②9.3 ③7.0		-	木釘により接合された後、透き漆で仕上げ。内側面の板は面取、木釘の痕跡はないが固定されている。いわゆる「箱枕」か。
27図	1建229	1建1床下	木製品 重箱	一部欠損	①17.4 ②18.2 ③(6.0)		ホオノキ(底板)、散孔材(側板)	二枚組み接ぎ後、木釘を打ち固定。内面赤色漆。外面黒漆で仕上げた後、赤色漆で波瀾文を塗く。底部外面には接合痕跡あり。柱状の材が木釘で接合されていたと思われる。
27図	1建230	1建1唐白内	木製品 榎	完形	①15.9 ②16.1 ③8.0		-	二枚組み接ぎ後、木釘を打ち固定。1号唐白内から、漆桶(1建212)、漆(1建241)とともに出土。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	評価値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ・幅 ③厚・高	②		
27図	1建231	1建2施設	木製品 不詳	不詳	①23.8 ③1.1	②17.9	-	台形部分縁辺には木釘の痕跡6カ所あり。上部突起部分には1cmほどの孔を穿つ。箱状のものと思われるが、詳細は不明。板目材。
28図	1建232	1建1床下	木製品 箱	一部欠損	①11.0 ③5.4	②9.0	-	小型の箱。正面は、6本(1本は欠損)の釘により格子状になる。天部には1cmほどの円孔を穿つ。円孔部分内面は、そがるように欠損する。全て木釘で固定されており、正面の格子部分も含め開閉はできない。詳細は不明。
28図	1建233	1建3床下	木製品 箸箱	一部欠損	①29.4 ③1.9	②3.5	-	内面に漆が遺存する箸箱。箸は麻竹などを切断した歯素なもの。箱の身は短細状に削り抜き、蓋は木釘で接合される。端部には楕形の欠込があり、欠損するも、スライド式の蓋がついていたものと思われる。箱外面の一部が炭化。
28図	1建234	1建室	刀子	対部欠損	①16.2 ③1.4	②2.0	-	木製の柄を持つ。刃は柄に差し込まれる。小型であり、刀子と思われる。
28図	1建235	1建2唐白内	包丁	対部欠損	①22.4 ③2.1	②13.3	-	木製の柄を持つ。刃は柄に差し込まれる。
28図	1建236	1建馬屋	木製品 不詳	完形	②2.5	③0.6	-	周辺を成形し断面台形状に加工する。中央部に貫通する孔1カ所。裏面に貫通しない孔1カ所あり。初輪串状の木製品。
28図	1建237	1建1床下	木製品 不詳	不詳	②6.3	③3.4	-	竹筒状に削いた挽き物か。詳細は不明。
28図	1建238	1建5床下	竹製品 不詳	一部欠損	①13.2	③3.1	竹笹類	茶碗状の竹製品。ササカ。
28図	1建239	1建6床	竹製品 不詳	一部欠損	①7.4	③3.1	竹笹類	茶碗状の竹製品。ササカ。
28図	1建240	1建周辺	竹製品 不詳	一部欠損	①11.8	③3.2	竹笹類	茶碗状の竹製品。ササカ。
28図	1建241	1建1唐白内	笥	ほぼ完形	-	-	-	小型の手箱。1号唐白内から、柀(1建230)、漆桶(1建212)とともに出土。
29図	1建242	1建3床下	木製品 箱	完形	①27.7 ③9.2	②15.0	クリ	楕形箱みの箱。木釘で接合される。両側板には35mmほどの円孔を穿つ。内面に炭化痕あり。外面は透き漆で仕上げられているか。いわゆる「櫻草蓋」と思われる。
29図	1建243	1建	木製品 杓文字	一部欠損	①(23.2) ③0.4	②7.6	マツ属複維管束亜属	-
30図	1建244	1建1床西	木製品 木杓子	完形	①36.0 ③0.6	②9.2	-	持ち手部分が炭化。
30図	1建245	1建1施設	木製品 不詳	完形	①39.8 ③1.0	11.4	-	木杓子状の木製品。未製品か。板目材。
30図	1建246	1建馬屋	木製品 櫛	一部欠損	①(9.5) ③0.5	②2.9	-	黒漆で仕上げ、蒔絵による文様を施す。赤色漆の上には金粉が残る。
30図	1建247	1建5床下	木製品 櫛	70%	①10.3 ③0.6	②3.5	-	文様はなく、透き漆で仕上げる。
30図	1建248	1建1施設	木製品 板材	不詳	①26.0 ③1.4	②(19.0)	-	両面に墨書のある板。図版左側には「山藏面白」「度」。図版右側には、「松」「麓」「佐」「室田」のほかには「薬師」「成藏」が5カ所以上繰り返し書き加えられる。「室田」は別掲名前の地名か。両面とも欠損部があり判読困難な文字が多い。用途も含め、詳細は不明。
30図	1建249	1建6床下	木製品 木札	完形	①13.8 ③0.8	②3.3	-	両面に墨書された木札。上に1カ所孔を穿つ。図版左側には「五月四日 左左門」か。図版右側には、「□□□□朔月日□助之丞」か。用途も含め、詳細は不明。板目材。
31図	1建250	1建3床下	蒔扇	ほぼ完形	①37.7 ③0.2	②24.2	-	柄には、肩竹とも呼ばれる一文字状の竹がつく。洗刷裏と思われる。付着する輪4点は、土層と団扇の間に偶然挟まり遺存したものと思われる。詳細は第4章第2節6を参照。
31図	1建251	1建3床上	蒔扇	柄部分	①(17.4) ③0.2	②(14.4)	-	柄には、肩竹とも呼ばれる一文字状の竹が取り付けられる。詳細は第4章第2節6を参照。
31図	1建252	1建3床下	竹製品 不詳	一部欠損	②10.0	③9.7	竹笹類	竹筒状に成形される。詳細は不明。
31図	1建253	1建1床上	木製品 木鉢	完形	口径3.2 底径15.5 ③8.0	-	トチノキ	内面に透き漆で塗られた木鉢。内面底部は丸くならぬか。近くからは大量の炭や歯粉が出土しており、蓋面に使用された木鉢とも思われる。
31図	1建254	1建2施設	漆	一部欠損	①25.3	②1.6	-	柄の端部はそがれる。対部は欠損。
31図	1建255	1建	竹製品 不詳	完形	①26.5 ③2.5	②3.5	竹笹類	竹を斜めに切り、スコップ状に成形。天部はそがれ、小さな円孔を穿つ。用途も含め、詳細は不明。
32図	1建256	1建1施設	木製品 貼	完形	径8.6	③36.3	-	成形時の加工痕跡を残す。一部樹皮が遺存。心持材。
32図	1建257	1建3床下	木製品 貼	ほぼ完形	径11.6	③37.2	ホノノキ	成形時の加工痕跡を残す。心持材。
32図	1建258	1建1施設	木製品 道具	一部欠損	①(31.2) ③3.4	②14.0	-	プラシ状の道具。方形の一面には、竹串と思われるものを差し込みプラシ状にしている。裏面には鋭利な刃物の痕跡あり。13建76と近似。
32図	1建259	1建	木製品 不詳	端部欠損	①(55.7)	-	-	木製の道具の一部か。詳細は不明。
33図	1建260	1建2施設	竹製品 竹べら	完形	①26.5 ③0.6	②2.4	竹笹類	地部はそがれ、尖る。裏面に成形時の痕跡を残す。
33図	1建261	1建2施設	木製品 柄	一部欠損	①(35.8) ③3.0	②4.0 ③2.0・1.2	散孔材	道具の柄と思われる。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別	種別	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
						①長さ	②幅・高さ		
33図	1建262	1建3床下	木製品	柄	端部欠損	①(79.5) ②(2.5)	④4.3	ホオノキ	鎌などの柄と思われる。
33図	1建263	1建3床下	撥開か手斧		完形	①43.2 ③0.5	⑤15.3	-	柄は樹皮を残す。刃はやや薄く、鉄製。刃部幅45mm、柄持ち手端は面取りがされている。柄右側は両端からそれぞれ、刃部に差し込まれた後、楔を打ち込み固定される。
33図	1建264	1建北西	木製品	道具	不詳	①(96.8) ②(20.3)		-	大型なシャベルのような木製の道具。5建147に近似。
34図	1建265	1建上開北	箕か		不詳	①64.1	⑥24.2	-	籐竹のような細い竹を、縷織で編んでいる。両端部は二本の棒を挟み込み、固定されているように思われる。欠損しており詳細は不詳。箕と思われるが編まれた竹は細く、異なる道具とも考えられる。
34図	1建266	1建3床下	木製品	天秤棒	完形	①157.5 ③(2.9)	④4.9	散孔材	緩やかな弧状。中央部は幅広く平坦。両端部はそがれて細くなる。両端部に荷を固定した痕跡は確認できない。
46図	1建313	1建3床下	縄	端部欠損		①48.6		-	1段のし。
47図	1建314	1建2施設	木製品	栓		①(5.8)	②1.9	-	細長い形態。心木材。
47図	1建315	1建馬屋南	木製品	桶	板部分	径一	①14.5	-	器高の低い桶。タガの痕跡が2段確認できる。
47図	1建316	1建電	木製品	桶	70%	径(44.0)	①16.5	-	器高の低い桶。タガの痕跡が2段確認できる。
47図	1建317	1建1床下	木製品	底板50% 桶か樽		径(32.2)	③(3.1)	マツ属植物 東亜属	桶か樽の底板。板目材。
47図	1建318	1建3床下	タガ	ほぼ完形		①29.0	③(2.9)	-	桶か樽のタガと思われる。
48図	1建319	1建2唐白	木製品	桶か	完形	径38.0	①11.8	-	2号唐白上より、底板のない桶を逆位に据えたような状態で出土。唐白使用時に、唐白内の穀物などがこぼれ落ちないように高さを増すために使用したと思われる。桶を転用したものが。
48図	1建320	1建馬屋内	木製品	桶	底板	径75.6	③(2.4)	マツ属植物 東亜属	大型の桶。
48図	1建321	1建	木製品	不詳	一部欠損	①11.7 ③(0.8)	④(3.9)	針葉樹	両面に楕円の欠込のある木製品。詳細は不明。
48図	1建322	1建	木製品	不詳	不詳	①(16.8)	④(2.7)	-	断面五角形の木製品。柄状の作出しを持つ。心木材。
49図	1建323	1建馬屋	木製品	不詳	完形	①(9.0) ③(1.5)	②(1.5)	-	両面に断面円形の柄を持つ。柄部分には、1建2のためか、小型の楔が打ち込まれている。出土位置も近く、1建324と一連の遺物か。
49図	1建324	1建馬屋西	木製品	不詳	一部欠損	①(21.4) ③(1.4)	②(2.9)	-	両面に腰掛け状の柄が作出される。表面には9mmほどの円孔を2カ所穿つ。上面中央付近は弧状に欠込。出土位置も近く、1建323と一連の遺物か。
49図	1建325	1建馬屋	木製品	不詳	不詳	①(30.8) ③(1.3)	④(2.5)	-	板状の木製品。左側面に腰掛け状の柄が作出される。中央付近には11mmほどの円孔2カ所。右側面は欠損するものの、20mmほどの円孔を1カ所穿つ。詳細は不明。
49図	1建326	1建1床下	木製品	不詳	一部欠損	①(42.3) ③(7.2)	②(10.3)	スギ	右側には柄状の作出しを持つ。柄は2枚の板状であり、一部に鼠の痕跡を残す。内面には袋状の凹みが見られ、左右の側面には四角の孔(25mmほど)と円孔(16mmほど)を穿つ。凹みには車輪が入り、孔に車の軸を入れる、いわゆる「滑車」か。溝が彫られていることから、建築部材の転用と思われる。大きさは異なるが4建107に近似。
49図	1建327	1建1施設	木製品	不詳	不詳	①(32.5) ③(2.0)	④(7.8)	-	板状の木製品。下半分は器高が薄く、2カ所内側の凹みを持つ。詳細は不明。
50図	1建328	1建竈北	木製品	不詳	完形	①(30.0) ③(11.5)	②(10.1)	スギ	柱状の木製品。65mmほどの円孔が2カ所に穿たれ、両円孔は断面1字状につながる。円孔付近には鼠の痕跡が残る。詳細は不明。心木材。
50図	1建329	1建室	木製品	不詳	不詳	①(21.0) ③(1.1)	②(1.6)	-	端部に柄を持つ。欠込あり。隙子の残か。欠損部が多く、詳細は不明。
50図	1建330	1建1床下	木製品	不詳	不詳	①(22.1) ③(1.1)	②(1.6)	-	端部に柄を持つ。欠込あり。隙子の残か。欠損部が多く、詳細は不明。
50図	1建331	1建北	木製品	不詳	不詳	①(20.8) ③(1.1)	②(1.5)	-	端部に欠込あり。隙子の残か。欠損部が多く、詳細は不明。
50図	1建332	1建2施設	木製品	不詳	不詳	①(31.5) ③(2.4)	②(3.7)	-	端部に柄を持つ。欠込あり。木釘の痕跡もみられる。隙子の残か。欠損部が多く、詳細は不明。心木材。
50図	1建333	1建1床下	木製品	不詳	不詳	①(19.0) ③(1.4)	②(19.4)	ケリ	板状の木製品。端部寄りに、径50mmほどの円孔が10mmほどの深さで彫られる。詳細は不明。4溝8に近似。板目材。
51図	1建334	1建3床付近	木製品	不詳	不詳	①(39.0) ③(3.5)	②(3.7)	マツ属植物 東亜属	柱状の木製品。断面楕形の溝が1条彫られる。詳細は不明。心木材。
51図	1建335	1建馬屋南西	木製品	不詳	ほぼ完形	①(77.0) ③(4.0)	②(6.0)	スギ	柱状の木製品。38×25mmほどの柄1カ所。詳細は不明。
51図	1建336	1建馬屋	木製品	不詳	60%か	①(49.2)	②(69.0)	-	板戸状の木製品。左側部には腰掛け状の柄。骨組みは平納接ぎ後、楔を打ち固定。組まれた骨組みに板を打ちつける。詳細は不明。10建150に近似。
51図	1建337	1建1施設	木製品	不詳	完形	①(9.0) ③(2.1)	②(9.1)	ケヤキ	おとそ正方形の木製品。方形の欠込1カ所あり。詳細は不明。
51図	1建338	1建3床下	木製品	構築部材	完形	①(26.0) ③(3.8)	②(7.6)	マツ属植物 東亜属	表と右側面はヨキかチヨウナにより面取り。下部には腰掛け状の柄が作出される。心持材。
51図	1建339	1建1床下	木製品	構築部材	完形	①(22.4) ③(3.3)	②(8.0)	ケリ	断面五角形状の角材の表面にヨキかチヨウナによりV字状の欠込が施される。表には斜向き物の彫跡あり。作業台として使用されたものか。心持材。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ(幅) ③厚・高	②		
51図	1建340	1建1施設	木製品 構築部材	ほぼ完形	①64.4 ③3.2	②12.5	マツ属複維管束垂頭、ヒノキ属(板)	器壁の薄い柱状の木製品。表面には、幅3cmほどの薄い板を2枚、木釘で固定する。裏面右端部には釘の痕跡。詳細は不明。
52図	1建341	1建1施設	木製品 板?か	板等欠損	①175.6 ③(3.5)	②(97.9)	マツ属	格に組んだ骨組みに板を打ち付けた木製品。右側の骨組み・地部には、腰掛け状の駒が作出される。縦と横の骨組みは平納接ぎ。横の骨組み左側面には、腰掛け状の駒が作出される。中央縦方向には、2列の板状の骨組みがつく。この上に板が打ちつけられていたと思われる。
52図	1建342	1建1唐白東	木製品 唐白蓋か	一部欠損	①(63.0) ③1.2	②21.0	スギ	板状の木製品。釘の痕跡3カ所。出土状況から、1号唐白の蓋と思われる。板目材。
52図	1建343	1建3床下	木製品 構築部材	完形	①55.5 ③5.5	②13.5	マツ属複維管束垂頭	表に溝2条。右側面には駒が作出される。敷居部分を転用か、心持材。
52図	1建344	1建馬屋	木製品 構築部材	完形	①49.4 ③5.8	②12.8	サクラ属	表に幅25mmほどの溝3条。地部寄りに欠欠あり。裏に幅15mmほどの溝1条。敷居を転用か。心持材。
53図	1建345	1建1施設	木製品 構築部材	端部欠損	①177.0 ③2.0	②14.0	スギ	表に幅42mmほどの溝1条。地部には駒が作出される。転用か。
53図	1建346	1建竈	木製品 構築部材	不詳	①181.0 ③0.8	②(13.0)	-	板目材。10カ所、6段に釘の痕跡あり。底板の一部か。
53図	1建347	1建1床	木製品 構築部材	一部欠損	①102.0 ③1.0	②26.0	スギ	中央に釘が打つたような痕跡あり。詳細は不明。
53図	1建348	1建1床	木製品 不詳	完形	①91.0 ③3.5	②23.0	スギ	厚手の板目材。成形時のヨキかチョウナの痕跡あり。
53図	1建349	1建6床	木製品 不詳	完形	①45.6 ③2.5	②14.3	クリ	台形状に成形される。板目材。
53図	1建350	1建2床下	木製品 構築部材	完形	①30.8 ③10.1	②12.8	マツ属複維管束垂頭	表にはノミにより、深さ10mmの長方形(140×25mm)の凹みがある。また、成形時の釘の痕跡も認められる。裏面には親利な対物の痕跡多数あり。右側面には成形時のヨキかチョウナの痕跡あり。天部は左・右・裏面から斜めに加工され先が尖る。心持材。
54図	1建351	1建南	木製品 杭	完形	①37.4 ③3.0	②2.7	-	斜めに加工され地部が尖る。心持材。
54図	1建352	1建馬屋東	木製品 杭	完形	①37.6 ③4.8	②3.6	-	斜めに加工され地部が尖る。心持材。
54図	1建353	1建2施設	木製品 不詳	不詳	①58.4 ③23.0	②11.9	スギ	1建19上台と地面との隙間を埋めるように削えられた板材。板目材。
54図	1建354	1建2施設	木製品 不詳	不詳	①51.3 ③3.1	②11.8	スギ	1建19上台と地面との隙間を埋めるように削えられた板材。板目材。
54図	1建355	1建4床下	木製品 不詳	完形	①37.4 ③15.2	②19.6	クリ	部分的に丸太をもつ角材だが、地部の先端を尖らせるように面取りされる。心持材。
54図	1建356	1建馬屋南西	木製品 不詳	ほぼ完形	①41.0 ③4.0	②19.1	マツ属複維管束垂頭	馬屋南極西端より出土。表は楕円が残存する。心持材。
54図	1建357	1建3床下	木製品 不詳	完形	①25.2 ③6.2	②9.8	スギ	表・裏とも方向の異なるし字状の凹み各2カ所あり。凹み範囲を上に横方向の無数の筋あり。天・地・左右側面には成形時のヨキかチョウナの痕跡あり。心持材。
54図	1建358	1建	木製品 不詳	完形	①37.3 ③16.0	②20.1	クリ	角材だが、左・右とも先端を尖らせるように面取りされる。心持材。
55図	1建359	1建6床	木製品 不詳	ほぼ完形	①56.4 ③12.5	②12.4	スギ	表の一部には丸太面が残存する角材。成形時のヨキかチョウナによる加工痕が表・裏・左右側面とも明確に残る。表・左右側面に親利な対物の痕跡多数あり。断面による切り込み3カ所あり。心持材。
55図	1建360	1建3床下	木製品 不詳	完形	①49.6 ③6.8	②9.8	ミズキ	表は丸太面が残存するが、左右両側面は打割りが残存する。地部は焼けて炭化。心持材。
55図	1建361	1建3四角黄	木製品 不詳	一部欠損	①37.6 ③3.7	②17.1	スギ	表の右側面寄りに丸太面が残存する。表には成形時のヨキかチョウナの痕跡あり。表及び左側面の一部は焼けて炭化。板目材。
55図	1建362	1建馬屋西	木製品 不詳	ほぼ完形	①111.0 ③18.0	②29.4	モミ属	僅かに扁平な柱状の木製品。天部に向け細く、地部に向け尖る。地部には釘の痕跡2カ所あり。
56図	1建363	1建	圓立柱	端部欠損	①315.0 ③0.3	②22.0	クリか	断面方形の部材。天部寄り表裏が削い、右側面中央付近に、方形の駒各2カ所あり。地部寄りに、表面から裏面に貫通する長方形の駒あり。馬屋の馬柱棒や仕切りを受けた部材か。心持材。1建33に近似。
58図	1建403	1建3床付近	木製品 蓋	蓋板欠損	径(28.5)	③4.0	スギ	鉄鋼の蓋。取手と蓋板は手掛け付き。表面は黒色。
58図	1建404	1建5床下	木製品 蓋	取手部分	①24.2 ③6.1	②2.3	マツ属複維管束垂頭	鉄鋼蓋の取手部分。蓋板と釘?で固定した痕跡あり。
59図	1建405	1建1床下	木製品 蓋	完形	径42.3	③5.9	スギ(蓋)、散孔材(取手)	鉄鋼の蓋。蓋板は板2枚を接合。取手と蓋板は手掛け付き。
59図	1建406	1建1床下	木製品 蓋	ほぼ完形	径41.5	③7.7	スギ(蓋)、マツ属複維管束垂頭(取手)	鉄鋼の蓋。蓋板は板2枚を木釘で接合。取手と蓋板は手掛け付き。表面は黒色。
63図	1建449	1建1唐白東	木製品 引き手か	一部欠損	①16.5	③8.6	-	石臼の引き手か。石臼への差し込み部分は、断面方形に加工。心持材。
-	1建468	1建3床下	瓦か	不詳	-	-	イネ	係属を編んだものか。詳細は第4章第4節5参照。

遺物観察表

1区2号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅 ③厚・高			
69図	2建43	2建北	木製品 柄	一部欠損	①82.7 ③2.9	②5.2	-	鎌などの柄と想われる。心去材。
69図	2建44	2建1施設	木製品 道具	端部欠損	①33.9 ③3.1	②6.2	コナラ	左側面は駒の手状、右側面は欠損、一部変色。平面形状は、駒の手部分から中央に向かい、なだらかな山形を呈する。柄側面の形、いわゆる「目置」か。心去材。
70図	2建45	2建1施設	家形木製品	一部欠損	①32.3 ③14.2	②30.7	-	8枚の板材を木釘で接合した家形の木製品。屋根部分は、棟部分をぞぎ平らに仕上げる。正面上部には、五角形のややんぐい板がつき、五角形断面には両端に5mmほどの円孔を穿つ。正面下部には木釘の痕跡があり、下部にも同様の板がつくものと思われる。正面にはこの円孔に軸を入れる部がつく可能性がある。
70図	2建46	2建5桶	木製品 栓	端部欠損	①3.6	②3.1	-	成形時の痕跡顯著。心付材。
70図	2建47	2建	木製品 桶	側板部分	①19.0	-	-	器の低い桶。タガの痕跡が2段確認できる。
71図	2建48	2建9桶	木製品 桶	底板	①80.0	③3.0	マツ属椎葉 東亜属	大型の桶。底板は5枚の板材を接合。
71図	2建49	2建8桶	木製品 横梁部材	端部欠損	①92.0 ③2.5	②3.5	スギ	断面および長方形の材。2面に釘の痕跡。心去材。
71図	2建50	2建	木製品 構架部材	不詳	①(58.3) ③(3.5)	②(5.2)	-	角が面取りされた角材。表にノミにより1ヵ所物穴が穿孔され、裏面には縦長の駒がにぎ形状の角材が埋め込まれている。天部は表から斜めに加工されているが、芯部には杓状の凸部が作出された痕跡あり。地部は欠損。心付材。
71図	2建51	2建8桶四辺	木製品 作業台か	一部欠損	①59.8 ③6.5	②12.6	カツラ	表に縦向きに物物の痕跡多数あり。作業台として使用されたものであろう。心去材。
71図	2建52	2建8桶四辺	木製品 作業台か	ほぼ完形	①50.5 ③16.9	②18.2	マツ属椎葉 東亜属	角材の表・裏面に縦向きに物物の痕跡多数あり。作業台として使用されたものであろう。心付材。
72図	2建53	2建8桶四辺	木製品 作業台か	完形	①40.8 ③10.2	②13.2	クリ	丸太材の表に縦向きに物物の痕跡多数あり。作業台として使用されたものであろう。心付材。
72図	2建54	2建西	木製品 丸竹材	端部のみ	②11.8	-	竹笠類	2号建物西側より出土。出土状況では長さ4.5mに及ぶ。地部以外の節は抜かれていた。

1区4号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅 ③厚・高			
79図	4建63	4建床上	木製品 漆桶 蓋	ほぼ完形	①114.9 ③2.4	②119.6	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」横木。漆桶の蓋と想われる。
79図	4建64	4建床下	木製品 漆桶	50%	③(2.6)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。
79図	4建65	4建四辺	木製品 漆桶	60%	③(4.1)	-	-	内外面黒漆で仕上げる。下服れの形態。
79図	4建66	4建四辺	木製品 漆桶	70%	③(4.3)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「井」。
79図	4建67	4建床下	木製品 重箱 蓋	70%	①22.0 ③0.7	②(14.0)	-	外面は、黒漆で仕上げた後に髹を掻く。一部には金彩が残る。内面は欠損部及び接合痕跡部分以外赤色漆で仕上げる。接合痕跡部分には柱状の材がつくとと思われる。木釘痕跡が残る。
79図	4建68	4建床上	木製品 箸	一部欠損	①21.3	②0.5	カヤ	断面円形。端部を中心に使用痕跡あり。
79図	4建69	4建床	竹製品 不詳	端部欠損	①12.7	②4.1	竹笠類	茶葉状の道具。ササカ。
80図	4建70	4建床下	木製品 お椀 蓋	40%	①22.5	③2.7	ヒノキ属	内外面透き漆で仕上げる。側面には木釘痕跡2ヵ所。
80図	4建71	4建床下	木製品 お椀 蓋	完形	①25.0	③2.5	-	内外面透き漆で仕上げる。接合部は木皮で止める。
80図	4建72	4建床下	木製品 お椀	一部欠損	①21.0	③3.3	-	蓋を穿つお椀と思われる。内外面赤色漆で仕上げる。接合部は木皮で止める。上部が欠損したためか、木皮で接合した痕跡あり。底部外面には焼き印か。再刷痕。
81図	4建73	4建床下	木製品 曲物	側板部分	①17.5	③(2.0)	-	側板下部に木釘の痕跡あり。
81図	4建74	4建床下	木製品 曲物	側板部分	①-	③6.7	-	接合部は木皮で止める。側面下部に木釘の痕跡あり。
81図	4建75	4建床下	木製品 曲物	側板部分	①-	③8.2	-	接合部は木皮で止める。
81図	4建76	4建床下	木製品 曲物	底板欠損	①34.2	③4.0	-	大型の曲物。接合部は木皮で止める。側板下部に木釘の痕跡あり。4建77に近似。
82図	4建77	4建床下	木製品 曲物	側板部分	①-	③3.6	マツ科	大型の曲物。接合部は木皮で止める。側板下部に木釘の痕跡あり。4建76に近似。
82図	4建78	4建	木製品 柄杓か	底板	①9.9	③0.5	-	曲物の底板。底板に木皮が残ることから、柄杓の底板と思われる。
82図	4建79	4建床下	木製品 お膳	側板部分	①(22.0) ③0.8	②(1.8)	マツ属	接合部に木釘の痕跡あり。二枚組み接ぎと思われる。お膳の側板。透き漆で仕上げる。
82図	4建80	4建床下	木製品 お膳か	脚部分	①24.8 ③1.0	②(5.6)	マツ属	透き漆で仕上げる。接合部に木釘の痕跡。漆も遺存する。お膳の脚か。
82図	4建81	4建床上	木製品 お膳か	脚部分	①25.4 ③0.7	②(7.8)	マツ属椎葉 東亜属	接合部に木釘を残す。中央に飾りとしての欠込あり。透き漆で仕上げる。お膳の脚か。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅 ③厚・高さ		
82図	4建82	4建床上	木製品 不詳	不詳	①8.7 ②7.5 ③1.0	-	ケヤキ	正面左側にそぎ、薄くなる。釘の痕跡あり。家形木製品(2建45)の短冊部分に近似。
82図	4建83	4建床上	木製品 不詳	不詳	①7.7 ②4.3 ③2.1	-	-	天部に、長方形の納穴1カ所が穿孔される。右側面に納状の出しみか。表面には文様を彫り込んでいる。側面部分
83図	4建84	4建床下	木製品 お膳	側板・脚欠損	①28.7 ②28.2 ③(3.2)	-	マツ属	三脚の脚板と、脚を欠損する。側板は二枚組み接ぎと思われる。側板と木釘で補強。接合部以外は、内外面透き漆で仕上げられる。
83図	4建85	4建床下	木製品 不詳	不詳	-	-	マツ属、スギ	中央部弧状の横目材(②)側面には方形の欠込が施され、ここに柱状の材(①)を挿す。柱状の材は一枚組み接ぎと思われる。木釘の痕跡あり。行灯の取手部分。③は異なる木製品の一部と思われる。
84・85 図	4建86	4建床上	木製品 圧搾機	70%	①60.0 ②(34.8) ③28.0	-	-	上付、柱は納接ぎ。一部破損を呈する。横状の材には、中央に納穴状に欠込を施す。上部は18×3cmほど、下部は欠損するも上部より欠込の長さは短い。ここに③～④を埋め込む。③・④は椀。⑤は天部部に納を出す。中央は板状。内面には藁膳状の溝を彫り込む。椀、⑤は各1点ずつあり、図示したように埋め込むものと思われる。⑥の間に⑧は、袋に入れたと思われる種実を挿え、椀を打ち込むことで左右より圧力を掛ける。種実から出た油は、藁膳状の溝を伝って下に溜められた容器に入る仕組みであろう。下段横状の材には付着物があり、これが灯火用の付着物とおよそ成分が一致した。分析の詳細は、第4章第4節8参照。
86図	4建87	4建床下	木製品 箱	50%	①40.0 ②30.0 ③2.1	-	マツ属、スギ	長方形の底板には断面方形の材が接合し、材天部には小さな円孔がおよそ定期的に一列穿たれる。四隅には柱が立ち、各辺には竹状の格子がつくと思われる。鳥籠か。
89図	4建100	4建床上	木製品 板	ほぼ完形	①19.0 ②18.0 ③3.0	-	スギ	桶状の板材。扁平な円形を呈するため、転用とも考えられる。柱口材。
89図	4建101	4建床	木製品 櫛か	蓋の一部か	径(28.0) ③1.6	-	-	円形の板材。55mmほどの円孔を穿つ。櫛の蓋か。
89図	4建102	4建床下	木製品 櫛の蓋か	ほぼ完形	径40.0 ③4.5	-	マツ属	蓋板は厚く中央に溝を彫る。ここに上面に丸みを持つ断面方形の取手がつき、釘で固定。鉄網の蓋とは形態が異なる。櫛の蓋か。
90図	4建103	4建床下	木製品 道具	ほぼ完形	①90.6 ②(28.2)	-	間孔材	杖の一部を利用し、輪と柄を出す。柄の上部には納穴が穿孔され、輪の端部を埋め込む。⑤の部分には、短い木釘が貫通して打ち込まれる。いわゆる「たも網」か。
90図	4建104	4建床下	木製品 器持	端部欠損	①66.0 ②8.0	-	散孔材	小型の器持。心持材。
91図	4建105	4建周辺	木製品 掛火	80%	①(75.1) ②28.8	-	マツ属椀椀管束坐臥、ハンノキ属(柄)	柄は細く、持ち手部分断面はやや丸みを持つ。心持材。
91図	4建106	4建床下	木製品 構築部材	ほぼ完形	①56.5 ②8.1 ③3.8	-	マツ属椀椀管束坐臥	天・地部に片面が蟻状に加工された納穴作られる。納に釘あり。左側面にV字状の欠込施される。裏面地寄りに縦釘1条あり。心持材。
91図	4建107	4建床下	木製品 不詳	端部欠損	①29.3 ②9.3 ③6.8	-	モミ属	表・左右側面上部はヨキかチョウナによりそがれ、やや丸みのある形状となる。裏面には鋭利な刃物の痕跡。左側面には釘痕6カ所あり。右側面と地部には欠込状の凹部が施される。天部に納の作出し痕跡か。左右側面に円形(16mmほど)及び方形(24mmほど)の穿孔あり。ここに輪を挿入する。いわゆる「油車」か。木材。大きさは異なるが1建32に近似。
92図	4建108	4建周辺	木製品 構築部材	不詳	①(36.8) ②(10.6) ③(4.7)	-	スギ	表に2条溝が施されているように見えるが、腐蝕及び欠損が著しい。取扱を転用か。心持材。
92図	4建109	4建床下	木製品 構築部材	一部欠損	①49.5 ②6.6 ③2.0	-	-	表の中央部から天部寄りにかけて欠込状に薄く削られる。縦釘による切込み2カ所あり。表の天部寄りに成形時の鋸の痕跡あり。心持材。
92図	4建110	4建床下	木製品 不詳	完形	①47.9 ②6.4 ③4.9	-	マツ属椀椀管束坐臥	表・左側面に成形時のヨキかチョウナの明確な痕跡あり。構築材か。心持材。
92図	4建111	4建床下	木製品 構築部材	端部欠損	①(46.0) ②11.6 ③10.8	-	マツ属椀椀管束坐臥	角の角が面取りされ、断面は六角形を呈する。天部に側面より納が作出されるが、一部欠損する。地部は丸めに面取りされる。心持材。
92図	4建112	4建周辺	木製品 構築部材	一部欠損	①181.0 ②21.0 ③8.0	-	マツ属椀椀管束坐臥	天部には、釣の手状の納が作出される。左右側面には腰掛状の欠込3カ所。心持材。
92図	4建113	4建床下	木製品 構築部材	一部欠損	①(99.3) ②6.1 ③4.9	-	マツ属椀椀管束坐臥	表には溝1条が施される。溝に沿うように納穴1カ所を穿孔する。心持材。4溝1に近似。
93図	4建114	4建周辺	木製品 構築部材	一部欠損	①49.0 ②12.0 ③11.5	-	クリ	三面に各2カ所、長方形(115×30mm)の納穴を穿孔する。地部は袋状に彫り出められる。
93図	4建119	4建床下	木製品 蓋	取手部分	①40.0 ②1.6 ③7.5	-	スギ	鉄網蓋の取手部分か。蓋板と木釘で固定した痕跡あり。取手と蓋板は手掛け受けか。表面は黒色。

1区4号溝 遺物観察表(漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅 ③厚・高さ		
100図	4溝6	4溝	木製品 お膳	側板部分	①27.7 ②2.7 ③0.8	-	-	接合部に木釘の痕跡あり。二枚組み接ぎと思われる。お膳の側板。漆は確認できない。
100図	4溝7	4溝	木製品 お膳	板部分	①26.2 ②(8.6) ③0.7	-	-	接合部に木釘の痕跡あり。透き漆が一部遺存。両面に鋭利な刃物の痕跡。転用か。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅	②厚	③高		
1009	4溝8	4溝	木製品 構築部材	一部欠損	①28.8 ②3.8	③13.8	ケリ	表に径76mm、深さ12mmの平面円形の凹みが施される。右側面は丸太面が遺存する。板目材。1建33に近似。	
1010	4溝9	1倒木付近	木製品 構築部材	一部欠損	①58.6 ③6.5	②12.5	-	断面台形状の板目材。台形状に彫り内められた箇所あり。	
1010	4溝10	4溝	木製品 構築部材	ほぼ完形	①71.0 ③11.0	②26.0	-	柄を作出す。	
1010	4溝11	4溝	木製品 構築部材	一部欠損	①191.0 ③6.0	②7.0	-	天部に柄を作出す。表・左側面には溝1条が施される。溝に沿うように柄2カ所を穿孔する。地部寄りに欠込。心志材。4建113に近似。	

1区1号棟 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅	②厚	③高		
1010	1横1	1横	木製品 お椀 蓋	40%	径(14.2)	③(1.3)	-	お椀の蓋。接合部に木釘の痕跡あり。一部透き漆が遺存。	
1010	1横2	1横	木製品 桶か	底板部分か	径37.6	③2.4	-	木釘の痕跡2カ所あり。桶の底板か。板目材。	

1区1号屋敷跡 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅	②厚	③高		
1020	1屋敷15	1建北	木製品 蓋	完形	径16.1	③3.9	-	取手は断面方形で面取りをする。取手と蓋板は木釘4カ所固定。半割(1屋敷16)の蓋。半割には多くの梅の種(梅干し)が収められ、この蓋がされていた。	
1020	1屋敷17	1建北	木製品 漆桶 蓋	90%	口径4.7 底径9.6	③2.6	-	内外面赤色漆。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。横木地。漆桶の蓋と思われる。	
1020	1屋敷18	1建北	木製品 漆桶 蓋	60%	口径5.0 底径10.0	③2.9	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。漆桶の蓋と思われる。	
1020	1屋敷19	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶 蓋	ほぼ完形	口径4.9 底径10.3	③3.4	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。漆桶の蓋と思われる。	
1020	1屋敷20	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶 蓋	ほぼ完形	口径4.9 底径9.7	③2.8	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。漆桶の蓋と思われる。	
1020	1屋敷21	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶 蓋	ほぼ完形	底径10.3	③(3.3)	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。漆桶の蓋と思われる。	
1020	1屋敷22	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶 蓋	ほぼ完形	底径10.5	③(3.7)	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。漆桶の蓋と思われる。	
1030	1屋敷23	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶 蓋	ほぼ完形	口径5.1 底径10.4	③3.5	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。漆桶の蓋と思われる。	
1030	1屋敷24	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶 蓋	ほぼ完形	口径5.0 底径10.4	③3.3	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。横木地。漆桶の蓋と思われる。	
1030	1屋敷25	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	90%	口径11.3	③4.1	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「井」。	
1030	1屋敷26	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	90%	口径11.0	③4.5	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「井」。横木地。	
1030	1屋敷27	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	90%	口径10.4	③(4.8)	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。	
1030	1屋敷28	1倒木付近	木製品 漆桶	80%	口径10.5	③(4.0)	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁部のみ黒漆を塗る。高台内左側に黒漆で「上」。横木地。	
1030	1屋敷29	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	90%	③(4.6)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「井」。	
1030	1屋敷30	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	90%	③(4.5)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「井」。横木地。	
1030	1屋敷31	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	一部欠損	③(4.6)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「井」。横木地。	
1030	1屋敷32	1倒木付近	木製品 漆桶	60%	③(5.5)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。横木地。	
1030	1屋敷33	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	ほぼ完形	口径12.2 底径5.6	③7.4	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「源右井」。	
1030	1屋敷34	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	90%	③7.3	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「源右井」か。壺木地か。	
1030	1屋敷35	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	ほぼ完形	③(7.2)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「源右井」。	
1030	1屋敷36	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	一部欠損	③(7.0)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「源右井」。横木地。	
1030	1屋敷37	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	ほぼ完形	口径12.2 底径5.8	③7.8	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「源右井」。横木地。	
1030	1屋敷38	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	90%	③(7.4)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「源右井」。横木地。	
1030	1屋敷39	竹籠 (1屋敷42)内	木製品 漆桶	一部欠損	口径12.0	③(7.6)	-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁部のみ黒漆を塗る。高台内に黒漆で「源右井」。	
1030	1屋敷40	1倒木付近	木製品 漆桶	70%	③(5.5)	-	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内中央に、18mmほどの円孔を穿ち、竹を差し込む。竹は欠損し、長さは不詳。壺用か。	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅 ③厚・高				
103図	1 屋敷41	竹籠 (1 屋敷42)内	木製品 漆物	80%	③(3.3)		-	内外面赤色漆で仕上げる。側面に 2mm ほどの孔を 2 ヶ所穿つ、乾用か。横木地。	
104図	1 屋敷42	1 例木付近	竹製品 竹籠	70%	①(40.8) ③(17.5)	②(23.5)	-	5mm ほどの竹ひごで編まれた竹籠。上下の縁の間に、横ひごが 2 列。この間を格子状に編み込む。1 敷尺 19 ~ 22 ~ 29 ~ 31 ~ 33 ~ 39・4 が取られている。周辺は漆器も同様に取られていたものと推測される。底部は欠損。	
104図	1 屋敷43	1 例木付近	木製品 木杓子	ほぼ完形	①31.0 ③0.7	②94.0	-	持ち手部分が欠損。	
104図	1 屋敷44	52区C-6	木製品 曲物か	底板	径9.8	③0.5	-	小型の曲物の底板。横杓の底板か。	
105図	1 屋敷45	4 溝周辺	木製品 不詳	ほぼ完形	①24.7	②1.3	-	断面円形の材。端部に孔あり。道具の柄か。	
105図	1 屋敷46	1 例木付近	木製品 お膳	30%	①27.5 ③(2.3)	②(3.2)	-	脚は平横掛け取り付け後、木片を積み込み固定したと思われる。側板は二枚組み接ぎと思われる。内外面透き漆で仕上げる。	
105図	1 屋敷47	1 例木付近	木製品 お膳	一部欠損	①28.0 ③6.9	②28.0	マツ属複維管束系属	脚は平横掛け取り付け後、木片を積み込み固定。側板同士は二枚組み接ぎ後、木釘で固定。内外面透き漆で仕上げる。	
106図	1 屋敷48	1 例木付近	木製品 お膳	ほぼ完形	①28.0 ③7.0	②28.0	マツ属複維管束系属	脚は平横掛け取り付け後、木片を積み込み固定。側板同士は二枚組み接ぎ後、木釘で固定。内外面透き漆で仕上げる。	
107図	1 屋敷49	1 例木付近	木製品 お膳	ほぼ完形	①28.0 ③6.4	②27.5	マツ属複維管束系属	脚は平横掛け取り付け後、木片を積み込み固定。側板同士は二枚組み接ぎ後、木釘で固定。内外面透き漆で仕上げる。	
108図	1 屋敷50	1 例木付近	木製品 桶	一部欠損	口径36.0 底径36.7 ③30.5		-	底板は 2 枚の板材を木釘で接合。側板にはタガの痕跡 2 段、3 ヶ所か。左右の両側板が長く、ともに 18mm ほどの凹孔を穿つ。	
109図	1 屋敷51	1 屋敷跡	木製品 桶	50%	径40.5	③18.5	-	器高の低い桶。底板は 3 枚の板材を木釘で接合か。タガの痕跡が 2 段確認できる。	
109図	1 屋敷52	1 例木付近	木製品 椀子	60%	①161.0	②41.5	-	椀子には 3 ヶ所の柄穴が穿孔され、ともに横木が積み込まれるのと思われる。柄穴上下段が貫通し、中央は貫通しない。横木は 2 本のみ穿孔し、下段は両側面をきぎ、柄穴に積み込む。竹は横接ぎ。両側面中央付近に柄穴が穿孔される。ここに材が積み込まれ、唐白支柱(1 建15)に据えられていたと思われる。	
110図	1 屋敷53	1 例木付近	木製品 唐白 杵	一部欠損	①(102.0) ②5.6・30.0		マツ属複維管束系属		
110図	1 屋敷54	1 例木付近	木製品 横梁部材	一部欠損	①26.1 ③1.5	②6.4	スギ	天・地部に柄が縦使用により作出される。右側面に 2 ヶ所、裏にも不確定だが 3 ヶ所釘痕あり。心木材。	
110図	1 屋敷55	2 建北	木製品 作業台か	一部欠損	①60.3 ③2.1	②(16.3)	-	両面に鋭利な刃物の痕跡あり。作業台か。柱目材。	
111図	1 屋敷56	2 建北	木製品 不詳	完形	①21.9 ③2.5	②12.0	-	両面に、幅 12mm ほどの浅い欠込みあり。横梁部材か。柱目材。	
111図	1 屋敷57	1 例木付近	木製品 不詳	一部欠損	①31.0 ③24.0	②34.0	マツ属複維管束系属	側面を面取りし、100×50mm ほどの柄穴の孔を 1 ヶ所穿つ。	

1 区 8 号溝 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅 ③厚・高				
114図	8 溝 8	8 溝	木製品 曲物か	底板	径15.4	③1.0	-	曲物の底板か。	
114図	8 溝 9	8 溝	木製品 柄杓	60%	径11.0	③7.3	-	接合部は木皮で止め、側板上部には方形(20×13mm ほど)の柄を差し込む孔を穿つ。反対側下部には 5mm ほどの孔あり。側面下部には木釘で底板を止めた痕跡あり。	

1 区 1 号屋敷跡下 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅 ③厚・高				
116図	1 屋敷下 32	2 建西地山中	木製品 道具	完形	①7.0 ③0.5	②3.2	-	透き漆が塗られており、お膳などの一部を転用したものと思われる。天・地部に弧状の凹みを備し、小さな孔を穿つ。糸巻きか。	

1 区 4 号石垣 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅 ③厚・高				
118図	4 石垣 4	4 石垣	木製品 漆物	70%	口径11.0 底径5.0 ③4.5		-	内外面赤色漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。高台に黒漆で「井」型木地か。	
118図	4 石垣 5	4 石垣	木製品 道具	脚部分か	①108.0 ③36.5	②83.0	クリ	V 字状の材を加工し、両面を面取りし、天部に柄を作出す。脚部になるのと思われる。	

1 区 5 号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅 ③厚・高				
124図	5 建126	5 建1床下	木製品 漆桶 蓋	40%	③(2.9)		-	内外面赤色漆で仕上げる。漆桶の蓋と思われる。	
124図	5 建127	5 建1床下	木製品 漆桶	60%	③(4.4)		-	内外面赤色漆で仕上げる。横木地。	

遺物観察表

国庫番号	掲載番号	出土位置	種別 種類	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅 ③厚×高			
124E	5建128	5建北	木製品 漆板	50%	③(3.4)		-	内外面黒漆か透き漆で仕上げる。側面に円孔を2カ所、高台内に1カ所穿つ。口縁端及び高台部は削られている。転用か、板木地。
125E	5建129	櫛(5建176)内	木製品 お櫃	完形	径19.6 ③9.6		-	蓋・身とも内外面透き漆で仕上げる。接合部は木皮で止める。身の側面には1縁部ほど器蓋が弱くなる。身の底部外面には「八(ヤマ)」に「田」「田原屋 平□」の印。
125E	5建130	5建3床土	木製品 お櫃 蓋	20%	径一 ③(1.2)		ヒノキ属	内外面透き漆で仕上げる。
125E	5建131	5建3床土	木製品 お櫃 蓋	50%	径(20.0) ③(1.0)		ヒノキ属	内外面漆で仕上げる。蓋板を接合した木の痕跡あり。外面の辺に沿って本釘の痕跡があり、転用と思われる。
125E	5建132	5建南	木製品 曲物か	底板部分 か	径一 ③(0.9)		ヒノキ属	曲物の底板か。漆が一部遺存。「□(マル)」に「寿」の焼き印か。炭化し欠損部も多く、詳細は不明。
126E	5建133	5建1床下	木製品 曲物	底板欠損	径15.0 ③7.8		-	接合部は木皮で止める。反対側には側板中央部付近に2カ所の小さな孔、側面下部には本釘の痕跡を残す。外面に付着物あり。
126E	5建134	櫛(5建176)内	木製品 櫛か	底板欠損	径23.0 ③8.7		-	側板接合部は木皮で止める。側板は口縁部ほど器蓋がやや厚くなる。側板下部内面には、幅1cmほどの板が二重につき木皮で止められる。櫛か。
126E	5建135	5建3床下	木製品 柄杓か	底板	径9.6 ③0.7		-	曲物の底板。底板に3mmほどの孔があり、柄杓の底板と思われる。
126E	5建136	5建3床土	木製品 曲物	底板	径9.6 ③0.4		-	小型の曲物の底板。柄杓の底板か。
126E	5建137	5建南	木製品 曲物	底板	径11.6 ③0.7		-	小型の曲物の底板。
126E	5建138	5建1床下	木製品 曲物か	底板部分 か	径15.0 ③0.7		-	曲物の底板と思われる。一部欠込があり、転用されたものか。
126E	5建139	5建南	木製品 曲物	底板	径13.9 ③1.0		針葉樹	曲物の底板。表面に漆が遺存か。
127E	5建140	5建2施設	木製品 桶か樽か	底板部分 か	径一 ③1.0		-	桶か樽の底板か。一部炭化。椀目材。
127E	5建141	5建4床下	木製品 杓文字	完形	①10.6 ②2.6 ③0.2		-	小型の杓文字。
127E	5建142	5建1床下	木製品 櫛	50%	①5.0 ②3.0 ③0.7		-	黒漆で仕上げた後、赤色漆で海老の文様を描く。海老の背には四角い金箔が貼られる。赤色漆上には金彩が残る。
127E	5建143	5建1床下	木製品 不詳	一部欠損	①11.4 ②2.0 ③0.7		-	中央に小さな孔を穿つ。小型の板状の材。
127E	5建144	櫛(5建154)内	木製品 蓋か	70%	①15.3 ②8.2 ③1.5		-	中央には3mmほどの孔あり。内面内辺部には、断面方形の材を本釘3カ所で接合。箱の蓋か。
127E	5建145	5建3床土	木製品 お櫃か	一部欠損	①32.2 ②24.6 ③(2.1)		-	側板の欠損部と思われる箇所に、僅かに本釘7本の痕跡あり。内内面辺に1具眼。内外面に靱い対物の痕跡あり。漆が一部遺存しており、お櫃を転用か。
128E	5建146	5建3床土	竹製品 竹籠	ほぼ完形	①(32.2) ②(32.2) ③16.0		-	5mmほどの竹ひごで編まれた竹籠。上下縁の間に、横ひごが3列。この間を格子状に編み込む。底部も同様に、格子状に編み込む。
128E	5建147	5建1施設	木製品 道具	一部欠損	①54.3 ②18.4 ③2.8		コナラ類	木製のシャベルに似た形状の道具。柄には溝状に凹みがある。木屑付近で出土しており、ここで使用する道具か。1建264に近似。
128E	5建148	5建1施設	木製品 貼	完形	①28.8 ②11.0		散孔材	成形時の加工で痕跡を残す。木材材。
129E	5建149	5建1施設	木製品 道具	完形	①42.1 ②42.1 ③2.0		スギ	粗欠き接ぎで十字に組まれた木製品。端部に向け、そがれ突る。用途等は不詳。
129E	5建150	5建1床下	木製品 道具	完形	①57.8 ②3.4 ③1.9		クリ	断面扁平な棒状の道具。両端部に向け、そがれ突る。心去材。
129E	5建151	5建1床下	木製品 道具	完形	①58.8 ②3.5 ③1.5		クリ	断面扁平な棒状の道具。両端部に向け、そがれ突る。心去材。
129E	5建152	5建1施設	木製品 道具	完形	①32.5 ②2.4 ③1.5		-	断面扁平な棒状の道具。両端部に向け、そがれ突る。心去材。
130E	5建153	櫛(5建176)内	木製品 火打箱	ほぼ完形	①25.0 ②9.5 ③4.1		-	長方形の材を方形に削り狭く。内面には炭化した範囲が顕著にあり、火打箱と思われる。心去材。
130E	5建154	5建3床北	木製品 箱	70%	①60.5 ②26.2 ③(13.9)		-	蓋を伴う長方形の箱。側板は三枚組み接ぎ後、木釘で固定。底内面には、格子状の溝がV字状に彫られ、10に区分される。左右側板内面には溝が上下方向に1条彫られ、この溝に填め込みに仕切り板あり。底板、側板には多くの孔が穿たれるも、用途は不明。中には、5建93・124・144・168・186・188・191・193～196の陶磁器や下駄、工具、煙管などが収められていた。
131・132E	5建155	5建3床土	木製品 箱	一部欠損	①67.8 ②40.7 ③34.0		マツ属、マツ科 覆輪管束垂 麗、ケヤキ (南無板)	長方形の大型の箱。側板は三枚組み接ぎ後、木釘で固定。側板部には細長い板状の材がつく。中には、大量のアワなどが収められていた。殺物を入れる箱かと思われる。その用途は蓋を伴うものだろう。側板に円孔あり。用途は不明。
137E	5建172	5建3床北	木製品 桶か樽	底板	径25.2 ③1.0		-	桶か樽の底板。2枚の板材を本釘で接合。
137E	5建173	5建	木製品 不詳	不詳	①23.7 ②8.0 ③1.4		クリ	平面内形状の板材か。複雑に入り込んだ欠込状の造作が施される。板目材。
137E	5建174	5建4床土	木製品 桶か樽	底板か	①31.5 ②26.1 ③0.9		-	桶目形を呈する板材。2枚の板材を本釘で接合。靱ない対物の痕跡顕著。形態から桶か樽の底板を転用か。
137E	5建175	5建土間	木製品 桶	底板	径75.0 ③2.4		-	大型の桶。底板は5枚の板材を接合。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g.)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅 ③厚・高	②		
138図	5建176	5建3床北	木製品 樽	80%	口径32.0 底径 (28.7) ③34.4 蓋 径31.5 ③4.8	-	底板は4枚の板材を木釘で接合。側板にはタガの痕跡2段が、側面には2cmほどの円孔を穿つ。側板外面を削り、僅かに段がある。側板には「清水屋」の焼き目。蓋板は5枚を木釘で接合。37mmほどの円孔を穿くように取手をつけ、釘で固定。蓋には欠損部を木で埋める補修痕跡2か所あり。樽内にお椀(No.129)や曲物(No.134)が収められた状態で出土。	
139図	5建177	5建3床土	木製品 樽	60%	口径16.8 底径12.0 ③44.8	-	側板にはタガの痕跡3段、4か所。左右の内側板が長く、55×13mmほどの長方形の孔を穿つ。ここに地部弧状に欠込を施した取手を継ぐ。外面及び口縁部より上の内側板内面、取手を糸巻で仕上げている。いわゆる「祝樽」か。	
139図	5建178	5建1施設	木製品 構築部材	ほぼ完形	①35.8 ②7.4 ③4.2	マツ属	表面には腰掛状の欠込を施す。裏面には副の痕跡3条。左側面はそがれ突る。心持材。	
139図	5建179	5建3床	木製品 構築部材	不詳	①47.7 ②16.0	マツ属複雑管 束垂属	表と左側面は、ヨキかゾウナにより面取りされるが、右側面は丸太面が残存する。裏面は打割面である。天部にはやや細長い柄が突出され、右側面天部寄りに欠込が施される。心持材。	
139図	5建180	5建2床下	木製品 不詳	ほぼ完形	①66.0 ②17.0 ③13.0	マツ属複雑管 束垂属	天部はそがれ、やや突る。心持材。	
139図	5建181	5建3床	木製品 不詳	一部欠損	①48.4 ②14.8 ③4.1	スギ	表は丸太面が残る板材。左右内側面には成形時のヨキかゾウナの跡あり。心持材。	
139図	5建182	5建3床土	木製品 構築部材	完形	①38.3 ②12.1 ③10.6	マツ属複雑管 束垂属	敷居を切断して角材化したものと考えられる。ただし、敷居溝の作出に際しては、鏝による切り込み及びノミによる切削等、作業の粗雑さが窺える。左側面には成形時の鋸痕多数あり。心持材。	
140図	5建183	5建4床土	木製品 不詳	不詳	①55.2 ②13.0 ③2.0	クリ	柱目材。	
140図	5建184	5建1上間	木製品 杭	ほぼ完形	①146.4 ②5.7	ホオノキ	大型の杭。地部はそがれ突る。心持材。	
-	5建222	5建4床下	布	一部	-	-	アサを使用した布。欠損が顕著で、詳細は不明。	
-	5建223	5建	布	一部	-	-	アサを使用した布。欠損が顕著で、詳細は不明。繊維同定成果は第4章第4節6参照。	

1区6号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g.)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅 ③厚・高	②		
145図	6建5	6建南	木製品 漆桶	60%	③(2.9)	-	内面赤色漆、外面黒漆で仕上げる。横木地。	
145図	6建6	6建	鏝	完形	①90.7 幅呂①45.8 ③13.3	-	一本で作られた鏝。「風呂」には刃がつかず、刃は袋状。鉄製。跡により詳細は不明。いわゆる「風呂鏝」。	
146図	6建7	6建北	鏝	刃部欠損	①80.6 幅呂① (32.1) ②(8.7)	クリ	一本で作られた鏝。いわゆる「風呂鏝」。	
146図	6建8	6建	踏踏	柄・刃部 欠損	①88.5 ②21.1 ③3.2	散孔材	中央には斜めに柄穴が穿たれ、天部には大きき異なる孔を4か所穿つ。中央の柄穴に柄を差し込み、天部の孔から縄などを出して柄を固定するものと思われる。柄と刃部は欠損。	
147図	6建9	6建	木製品 桶	底板	①80.0 ③3.0	-	大型の桶。底板は4枚の板材を接合。	
147図	6建10	6建	木製品 構築部材	ほぼ完形	①30.3 ②10.2 ③9.0	マツ属複雑管 束垂属	裏面のみ面取りされる。表にV字状の欠込1か所。底部がやや平田な半月状の欠込1か所。裏面まで貫通した柄穴1か所施される。心持材。	

1区1号油池 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g.)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅 ③厚・高	②		
147図	1部1	1油池	木製品 漆桶	60%	③(6.2)	-	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「山口」か。	
147図	1部2	1油池	木製品 漆桶	ほぼ完形	①14.1 ②55.6 ③1.4	マツ属複雑管 束垂属	五角形に成形され、表天部寄りに2か所穿孔される。板目材。	

1区11号地 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g.)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅 ③厚・高	②		
149図	11部1	11畑	鏝	60%	①(38.1)幅呂① (26.5) ②8.1	クリ	一本で作られた鏝。いわゆる「風呂鏝」。	

1区12号地 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g.)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅 ③厚・高	②		
149図	12部1	12畑	木製品 柄	断面欠損	①(63.4) ②4.1 ③3.1	コナラ節	左側面に副の痕跡2条。鏝のような道具の柄を転用か。心持材。	
149図	12部2	12畑	木製品 構築部材	ほぼ完形	①32.0 ②3.0 ③1.9	クリ	12畑南側に敷き出した板を、裏から打ち付け固定していた押さえ木。釘痕あり。心持材。	
149図	12部3	12畑	木製品 構築部材	ほぼ完形	①32.0 ②3.0 ③1.9	クリ	12畑南側に敷き出した板を、裏から打ち付け固定していた押さえ木。釘痕あり。心持材。	
149図	12部4	12畑	木製品 構築部材	ほぼ完形	①31.3 ②3.1 ③2.0	クリ	12畑南側に敷き出した板を、裏から打ち付け固定していた押さえ木。釘痕あり。心持材。	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高		
149E	12層5	12層	木製品 横板部材	ほぼ完形	①31.4 ②33.0 ③2.8		クリ	12層南側で敷板出土した板を、裏から打ち付け固定していた押さ木。釘痕あり。心去材。	
149E	12層6	12層	木製品 横板部材	ほぼ完形	①32.3 ②3.4 ③3.1		クリ	12層南側で敷板出土した板を、裏から打ち付け固定していた押さ木。釘痕あり。心去材。	
150E	12層7	12層	木製品 横板部材	不詳	①126.0 ②29.0 ③1.0		クリ	柱目材。	
150E	12層8	12層	木製品 横板部材	不詳	①138.0 ②20.0 ③1.0		クリ	柱目材。	
1区2号屋敷跡 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)									
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高		
151E	2層敷5	2層敷跡	木製品 蓋	50%	径18.2 ②10.7		-	中央に溝1条を彫る。表面黒色、裏面灰化か。鉄網か桶の蓋と思われる。	
1区2号屋敷跡下 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)									
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高		
153E	2層敷下6	5建土間 地山中	木製品 お膳	完形	①27.2 ②27.1 ③3.5		マツ属樺曽 東非属、スギ (櫛材)	断面長方形の櫛板を、二枚組み接ぎ後釘で固定。板には木釘で固定されたと思われる。裏面には鋭利な対物の痕跡あり。	
153E	2層敷下7	5建3床下 地山中	木製品 柱	50%	①4.2 ②2.9		-	心去材。	
1区遺構外 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)									
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高		
162E	1区E33		木製品 木鉢	30%	①40.0 ②13.3 ③9.7		トチノキ	大型の木鉢。内面には成形痕跡を明確に残す。	
B区7号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)									
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高		
166E	7建24	7建北	木製品 漆桶 蓋	90%	①185.3 底径9.0 ③2.6		-	内面赤色漆、外面透き漆で仕上げる。高台内に赤色漆で「庚」、漆桶の蓋と思われる。	
166E	7建25	7建北	木製品 漆桶 蓋	80%	①185.5 底径9.6 ③2.7		-	内面赤色漆、外面透き漆で仕上げる。横木地。漆桶の蓋と思われる。	
166E	7建26	7建北	木製品 漆桶 蓋	90%	①185.1 底径10.0 ③4.0		-	内面赤色漆、外面黒漆で仕上げる。横木地。漆桶の蓋と思われる。	
166E	7建27	7建北	木製品 漆桶 蓋	50%	①185.7 底径11.0 ③3.6		-	内面赤色漆、外面透き漆で仕上げる。口縁・高台端部のみ黒か。高台内に赤色漆で「八(ヤマ)」に「三」。横木地。漆桶の蓋と思われる。	
166E	7建28	7建北	木製品 漆桶	一部欠損	①径11.3 底径5.6 ③4.6		-	内面赤色漆、外面黒漆で透き漆で仕上げる。横木地。	
166E	7建29	7建北	木製品 漆桶	90%	①径11.0 底径5.4 ③5.0		-	内面赤色漆、外面黒漆で仕上げる。横木地。	
166E	7建30	7建北	木製品 漆桶	80%	③(3.0)		ブナ	内外面赤色漆で仕上げる。高台内に黒漆で「月」。	
166E	7建31	7建北	木製品 漆桶	90%	①径11.5 ③(7.0)		-	内面赤色漆、外面黒漆で透き漆で仕上げる。横木地。	
166E	7建32	7建北	木製品 漆桶	90%	①径12.3 底径5.9 ③8.3		-	内面赤色漆、外面透き漆で仕上げる。高台内中央に赤色漆で「本手」、左下に赤色漆の点、3カ所。横木地。	
167E	7建33	7建北	木製品 重箱	一部欠損	①14.5 ②12.9 ③4.3		散孔材	二枚組み接ぎ後、木釘を打ち固定。内外面、透き漆で仕上げる。側面には、漆を塗った後、乾く前に櫛歯状の道具で波状の文様がつけられる。大きさは異なるが7建34に近似。	
167E	7建34	7建北	木製品 重箱	60%	①21.2 ②22.7 ③(6.7)		-	二枚組み接ぎ後、木釘を打ち固定。内外面、透き漆で仕上げる。側面には、漆を塗った後、乾く前に櫛歯状の道具で波状の文様がつけられる。大きさは異なるが7建33に近似。	
168E	7建35	7建北	木製品 お膳 蓋	ほぼ完形	径20.1 ③2.4		ヒノキ属	蓋板は3枚を接合か。内外面透き漆で仕上げる。接合部は本皮で止める。7建36の蓋か。	
168E	7建36	7建北	木製品 お膳	80%	径20.8 ③3.6		-	蓋を伴うお膳。内外面透き漆で仕上げる。接合部は本皮で止める。側板は口縁部ほど部厚が厚くなる。底部外面には「八(ヤマ)」に「屋後屋 □左衛門」の印が、7建35の身か。	
168E	7建37	7建北	木製品 木物	底板欠損	①径20.8 ③3.8		マツ属樺曽 東非属	接合部は本皮で止める。底板は欠損。側板下部に1カ所木釘の痕跡あり。	
169E	7建38	7建北	木製品 お膳	30%	①(26.7) ②(10.8) ③(3.2)		マツ属樺曽 東非属	櫛歯状の道具で、詳細は不明。	
169E	7建39	7建北	木製品 道具	不詳	①5.6 ②(16.1) ③0.9		スギ	滑した地面部りに鋭利な対物で目録が刻まれる。目録は5、10の箇所まで長く刻まれる。群の一部分か。柱目材。	
169E	7建40	7建北	木製品 木鉢	30%	径一 ③7.6		-	大型の木鉢。見込み周辺部には成形痕跡を残す。	
169E	7建41	7建北	木製品 木鉢	70%	①径46.7 底径27.5 ③9.1		ブナ	大型の木鉢。見込み周辺部には成形痕跡を残す。外面にも成形形の痕跡顕著。	

国版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅	③厚・高		
170R	7建42	7建	木製品 楕円椀	底板か	径25.6 ③0.9		スギ	楕円形の底板か。歪んだ円形であり、また中央及び上下左右に凹みがある。凹み位置に穿たれており、取用と思われる。
170R	7建43	7建北	木製品 桶	80%	口径34.2 底径31.0 ③49.3		-	底板は4枚の板材を本釘で接合。側板にはタガの痕跡2段、左右の両側板が長く、内孔(19mmほど)及び隅丸形状(24×16mmほどの孔を穿つ。
171R	7建44	7建西	木製品 椀	70%	口径33.8 底径26.3 ③32.4		-	底板は3枚の板材を本釘で接合。側板にはタガの痕跡2段、側板下部には26mmほどの凹孔を穿つ。内面上部に着きあがった痕跡もあり樽と思われるが、側板外面を削り薄くするなどの造作がみられる。焼き印も側板を削ったため判読困難。「水」か。側板には欠損部を木で埋めた補修痕跡3か所あり。
171R	7建45	7建北	木製品 構築部材	端部欠損	①89.0 ②4.0 ③3.0		モミ属	天・地部に懸掛け状の柄が作出される。表面には釘の痕跡が1列。
171R	7建46	7建	木製品 椀か	完形	①14.4 ②2.7 ③2.0		クリ	角材の表が加工され地部が尖る。心去材。
171R	7建47	7建北	木製品 不詳	完形	①11.4 ②7.8 ③0.8		-	およそ長方形の椀目材。左側面に向かって薄くなる。

N区9号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)								
国版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅	③厚・高		
193R	9建19	9建甕付近	木製品 木杵子	ほぼ完形	①24.4 ②7.2 ③0.9		-	持ち手端部が僅かに炭化。
193R	9建20	9建	木製品 木杵子	一部欠損	①28.4 ②(7.4) ③1.0		-	
193R	9建21	9建	木製品 お願 蓋	30%	径一 ③(1.0)		ヒノキ属	透き漆で仕上げ。欠損箇所が詳細は不明。
194R	9建23	9建	木製品 お願か	不詳	①3.1 ②4.9 ③1.7		針葉樹	天・地部以外、透き漆で仕上げ。天部彫痕であり、お願の蓋の一部と思われる。
194R	9建24	9建甕付近	刷毛	完形	①14.2 ②9.1 ③1.0		-	天部には7mmほどの凹孔を穿つ。地部は二つに裂かれ刷毛がつくと思われる。刷毛部分は欠損。両面に漆着。両側左側は「川原村酒蔵用 野上右衛門は「天目二年酒蔵用 四月廿五(上)」
194R	9建25	9建甕付近	木製品 曲物	底板欠損	径一 ③4.2		針葉樹	大型の曲物。接合部は本皮で止める。側板下部に本釘の痕跡あり。9建24の思書された刷毛ともにも出た。
195R	9建26	9建甕付近	木製品 曲物	底板欠損	径一 ③6.2		スギ	大型の曲物。接合部は本皮で止める。側板下部にも本皮があり、底に板状のものが接合すると思われる。9建24の思書された刷毛ともにも出上したこと、いわゆる「諸蓋」の可能性も考えられる。
195R	9建27	9建甕付近	木製品 柄か	ほぼ完形	①54.0 ③2.3		散孔材	断面円形で、L字状に屈曲する。細く、道具の柄としてはやや脆弱。対部を差し込まれた痕跡は確認できない。手押の柄か、心持材。
196R	9建28	9建	木製品 椀	完形	①3.7 ②2.3		-	心持材。
196R	9建29	9建甕付近	木製品 桶	80%	口径(36.4) 底径 (28.9) ③34.5		-	底板は2枚の板材を本釘で接合する。側板はやや薄い。タガの痕跡2段か。
197R	9建30	9建甕付近	木製品 桶	一部欠損	口径(35.1) 底径31.0 ③43.2		-	底板は3枚の板材を接合。側板にはタガの痕跡3段。左右の両側板が長い。桶の中からは大量のアサの種実が出上した。
198R	9建31	9建甕付近	木製品 桶	70%	口径一 底径(28.5) ③(38.5)		-	底板は2枚の板材を本釘で接合。タガの痕跡3段か。欠損が著しく詳細は不明。
198R	9建32	9建	木製品 構築部材	不詳	①(18.3) ②(11.5) ③(2.6)		クリ	方形の柄が凹状の作出しを2か所持つ。欠損が著しく詳細は不明。
198R	9建33	9建	木製品 構築部材	一部欠損	①26.6 ②7.4 ③2.6		クリ	表面中央付近に、15×3.5cmほどの長方形の凹みか深さ1.3cmほど掘られる。表が加工され、左側面に向かって薄くなる。心去材。
200R	9建46	9建甕付近	木製品 蓋	一部欠損	径37.2 ③5.6		ス平(蓋)、散孔材(取手)	鉄製の蓋。蓋板は2枚の板を本釘2か所で接合。取手と蓋板は、手掛け吸付後本釘で固定。表面は黒色。

N区10号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)								
国版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ×幅	③厚・高		
210R	10建59	10建構場付近	木製品 漆椀	50%	口径10.6 ③(3.6)		-	内外面赤色漆で仕上げ。口縁・高台端部のみ黒漆を塗る。
210R	10建60	10建	木製品 懸付か	ほぼ完形	①5.8 ②3.4 ③1.8		-	角を持つ人面状。裏面には、縦に箱を通すためのような、3mmほどの凹孔を穿つ。椀付か。
210R	10建61	10建西	木製品 箸	50%	①(11.1) ②0.5		-	赤色漆による仕上りか。
210R	10建62	10建	木製品か ササラ	ほぼ完形	①27.8 ②2.6		-	断面方形に細く裂いた材をねじるように束ねる。いわゆる「ササラ」か。
210R	10建63	10建構場付近	竹製品 ササラ	ほぼ完形	①27.7 ②4.0		竹類類	細く裂いた竹をねじるように束ねる。いわゆる「ササラ」か。
210R	10建64	10建	木製品 灯火具	ほぼ完形	②14.5 ③35.7 奥行12.0		-	取手は竹で作られ、中央付近に3mmほどの孔あり。方形の凹みには径6cmほどの凹みを施す。凹みには成形時の痕跡顕著。取手と台は、木釘状のものでも止まる。台には炭化範囲顕著。凹み部分に灯火具を置いた灯火具と思われる。
210R	10建65①	10建西	木製品 箱か	不詳	①13.4 ②17.4 ③1.1		-	台形の板材。ともに左右側面に本釘の痕跡があり、箱状の木製品の一部だと思われる。
210R	10建65②				①13.5 ②17.6 ③1.3			

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	器種 種類	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅 ③厚・高さ		
211図	10建66	10建構場付近	木製品 箱か	不詳	①12.4	②32.0	-	台形の板材3枚が木釘で接合。天部にも木釘の痕跡があり、板がつくものと思われる。行存(1建225)の土台部分に近似するも、器壁薄くやが器蓋面な作りか。
211図	10建69	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.0	②2.3	-	細長い形跡。心去材。
211図	10建70	10建構場付近	木製品 栓	完形	①4.6	②2.5	-	細長い形跡。心去材。
211図	10建71	10建	木製品 栓	完形	①5.5	②2.1	-	細長い形跡。心去材。
211図	10建72	10建	木製品 栓	完形	①4.7	②2.4	-	細長い形跡。心去材。
211図	10建73	10建	木製品 栓	完形	①5.0	②2.6	-	細長い形跡。心去材。
211図	10建74	10建	木製品 栓	完形	①5.4	②2.6	-	細長い形跡。心去材。
211図	10建75	10建	木製品 栓	完形	①5.9	②2.8	-	細長い形跡。成形時の痕跡顕著。心持材。
211図	10建76	10建	木製品 栓	完形	①7.7	②2.9	-	細長い形跡。成形時の痕跡顕著。心去材。
211図	10建77	10建	木製品 栓	完形	①5.7	②3.9	-	心去材。
211図	10建78	10建	木製品 栓	完形	①4.7	②3.7	-	心去材。
211図	10建79	10建西	木製品 栓	完形	①4.3	②3.5	-	心持材。
211図	10建80	10建	木製品 栓	ほぼ完形	①4.2	②3.8	-	心去材。
211図	10建81	10建	木製品 栓	完形	①4.5	②2.6	-	心去材。
211図	10建82	10建	木製品 栓	完形	①4.6	②2.9	-	心持材。
211図	10建83	10建	木製品 栓	完形	①4.8	②3.8	-	心去材。
211図	10建84	10建	木製品 栓	完形	①4.8	②3.8	-	心去材。
211図	10建85	10建構場付近	木製品 栓	完形	①4.2	②3.3	-	心去材。
211図	10建86	10建	木製品 栓	完形	①4.1	②3.7	-	心去材。
211図	10建87	10建	木製品 栓	完形	①4.4	②4.0	-	心持材。
211図	10建88	10建	木製品 栓	完形	①4.1	②3.7	-	心去材。
212図	10建89	10建構場付近	木製品 栓	完形	①4.6	②4.0	-	心去材。
212図	10建90	10建西	木製品 栓	完形	①4.6	②4.2	-	心持材。
212図	10建91	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.2	②4.3	-	心去材。
212図	10建92	10建	木製品 栓	完形	①4.5	②3.6	-	心去材。
212図	10建93	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.1	②3.6	-	心去材。
212図	10建94	10建	木製品 栓	完形	①4.8	②3.8	-	心去材。
212図	10建95	10建	木製品 栓	完形	①5.3	②4.8	-	心去材。
212図	10建96	10建構場付近	木製品 栓	完形	①4.7	②3.3	-	心去材。
212図	10建97	10建構場付近	木製品 栓	完形	①4.9	②3.3	-	心去材。
212図	10建98	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.2	②3.6	-	心去材。
212図	10建99	10建西	木製品 栓	完形	①5.1	②3.7	-	心去材。
212図	10建100	10建	木製品 栓	完形	①5.1	②3.8	-	心去材。
212図	10建101	10建	木製品 栓	完形	①5.0	②3.6	-	心去材。
212図	10建102	10建	木製品 栓	ほぼ完形	①5.0	②3.9	-	心去材。
212図	10建103	10建	木製品 栓	完形	①5.1	②3.8	-	心去材。
212図	10建104	10建	木製品 栓	完形	①5.9	②4.3	-	心去材。
212図	10建105	10建	木製品 栓	完形	①5.0	②4.1	-	心去材。
212図	10建106	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.2	②4.2	-	心去材。
212図	10建107	10建	木製品 栓	完形	①5.1	②3.7	-	心去材。
212図	10建108	10建	木製品 栓	完形	①5.4	②3.7	-	心去材。
212図	10建109	10建	木製品 栓	完形	①5.8	②4.1	-	心去材。
212図	10建110	10建	木製品 栓	完形	①5.4	②3.6	-	心去材。
212図	10建111	10建	木製品 栓	完形	①4.9	②3.8	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建112	10建西	木製品 栓	完形	①4.6	②3.9	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建113	10建	木製品 栓	完形	①5.0	②3.8	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建114	10建西	木製品 栓	完形	①5.2	②4.0	-	成形時の痕跡顕著。心持材。
212図	10建115	10建	木製品 栓	完形	①5.0	②3.1	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建116	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.1	②3.5	-	心去材。
212図	10建117	10建	木製品 栓	完形	①5.2	②3.3	-	心去材。
212図	10建118	10建	木製品 栓	完形	①5.2	②3.0	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建119	10建	木製品 栓	完形	①5.2	②3.2	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建120	10建	木製品 栓	完形	①5.7	②3.0	-	心持材。
212図	10建121	10建	木製品 栓	完形	①5.4	②4.1	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建122	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.9	②4.2	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建123	10建構場付近	木製品 栓	完形	①5.2	②3.6	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建124	10建	木製品 栓	完形	①5.8	②3.6	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建125	10建構場付近	木製品 栓	一部欠損	①5.5	②3.9	-	成形時の痕跡顕著。心持材。
212図	10建126	10建	木製品 栓	完形	①5.9	②3.6	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建127	10建	木製品 栓	完形	①5.6	②3.7	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建128	10建構場付近	木製品 栓	完形	①6.0	②3.7	-	心去材。
212図	10建129	10建	木製品 栓	完形	①6.9	②3.6	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建130	10建	木製品 栓	完形	①6.9	②4.0	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建131	10建構場付近	木製品 栓	完形	①6.5	②4.6	-	成形時の痕跡顕著。心去材。
212図	10建132	10建構場付近	木製品 栓	完形	①6.8	②3.7	-	心去材。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅・高さ		
212R	10建133	10建	木製品 栓	完形	①7.0 ②3.8	-	成形時の痕跡顕著。栓下部に黒色範囲。心去材。	
212R	10建134	10建	木製品 栓	完形	①12.2 ②2.8	-	楕円形断面。断面大部は方形、地部は円形。成形時の痕跡顕著。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。	
212R	10建135	10建	木製品 栓	完形	①20.3 ②3.1	-	断面円形の楕円形断面。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。大型の栓。地部が尖る。天部には面取りの痕跡。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。	
212R	10建136	10建	木製品 栓	完形	①18.4 ②4.2	-	大型の栓。地部が尖る。天部には面取りの痕跡。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。	
212R	10建137	10建	木製品 栓	完形	①18.5 ②4.1	-	大型の栓。地部が尖る。天部には面取りの痕跡。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。	
212R	10建138	10建樽場付近	木製品 栓	完形	①19.7 ②4.5	-	大型の栓。地部が尖る。天部には面取りの痕跡顕著。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。	
212R	10建139	10建	木製品 栓	完形	①14.8 ②4.0	-	中央にくびれを持ち、地部は尖る。天部には四隅に作出しを持つ。断面は丁取痕。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。	
212R	10建140	10建西	木製品 栓	一部欠損	①17.7 ②4.0	-	中身の栓。いわゆる「樽栓」の「香」か。心去材。	
213R	10建141	10建	木製品 栓	完形	③21.9 ②4.0	-	中身の栓と地部が尖る栓。いわゆる「樽栓」の「香」と「香口」か。心去材。	
213R	10建142	10建樽場付近	木製品 栓	一部欠損	①18.9 ②4.0	-	中身の栓と地部が尖る栓。いわゆる「樽栓」の「香」と「香口」か。心去材。	
213R	10建143	10建	木製品 桶	桶板一部欠損	口径28.1 底径26.1 ③10.4 蓋径24.2③3.1	-	蓋を作る桶。蓋は2枚の板材を接合。取手が2カ所につく。桶には竹を螺旋状に束ねた方が3カ所につく。いわゆる「羊切桶」。出土時は蓋が底板に密着するようであり、内面には様ではない付着物がみられた。付着物の分析結果は第4章第4節10参照。	
213R	10建144	10建	木製品 蓋	ほぼ完形	径49.4 ③2.7	-	桶の蓋か。柱状の材を骨組とし、柱材は腰掛け継ぎ後釘で固定し、取手となる。骨組には2枚の板を釘で接合。接合部には一部漆が遺存。径49cmほどと規模が大きい蓋。取手及び蓋板には、「○(マル)」に「川野口」の焼き印。10建145の桶にも同様の焼き印があり、同一のものか。	
213R	10建145	10建西	木製品 桶か桶	破片	-	-	桶板と底板。ともに「○(マル)」に「川野口」の焼き印を残す。10建144はこの蓋か。	
214R	10建146	10建西	蹴	風呂部分	①38.0 ②12.2 ③2.9	-	いわゆる「風呂蹴」の「風呂」。	
214R	10建147	10建樽場付近	蹴	対部欠損	①32.0 風呂 ③(36.5) ②10.7	-	柄と風呂は神隠し後、楔で固定。柄の持ち手部分は僅かに欠損。いわゆる「風呂蹴」。	
214R	10建148	10建	蹴	対部分	①(33.0) ②(10.4) ③(0.3)	-	いわゆる「風呂蹴」の対。柄は袋状。鉄製。跡と欠損により詳細は不明。10建146或は147と同一。	
215R	10建149	10建	木製品 作業台か	完形	①19.3 ②20.8 ③4.4	-	マツ属複雑管束葉属 方面の厚い板目材。両面に鋭利な刃物による痕跡顕著。作業台か。	
215R	10建150	10建樽場付近	木製品 不詳	ほぼ完形	①92.5 ②25.7 ③3.5	-	板片状の木製品。左右地部には腰掛け状の柄。骨組には平納接合後、楔を打ち固定。組まれた骨組みに板を打ち付け。詳細は不明。1建336に近似。	
215R	10建151	10建樽場付近	木製品 構築部材	ほぼ完形	①61.5 ②5.6 ③4.1	-	表にノミと考えられる工具により2カ所横穴が施される。左側面と右側面には同位置に釘痕1カ所あり。左側面にはヨキカチョウナの痕跡程にあり。心去材。	
216R	10建152	10建樽場付近	木製品 構築部材	一部欠損	①27.5 ②14.3 ③9.6	-	天部寄りには表から裏面にかけて深い欠込が施される。表地部寄りには中央部が曲線状に凹んだ突出部がある。心去材。	
216R	10建153	10建樽場付近	木製品 構築部材	ほぼ完形	①28.5 ②7.9 ③11.5	-	表・裏面・左右側面に複雑な欠込や決り状の造作が施される。欠込は両側に縦により切込みが施されている。また、裏面地部寄りにはノミにより除去された痕跡あり。心去材。	
216R	10建154	10建	木製品 構築部材	完形	①29.6 ②14.5 ③4.4	-	表は台形状に成形され、右側面から幅60mmほどの欠込が施される。欠込は縦により両側に切込みが施された後、ノミにより除去されたと考えられ、欠込の底部はやや斜めに幅く。心去材。	
216R	10建155	10建樽場付近	木製品 不詳	ほぼ完形	①17.8 ②12.0 ③4.0	-	小型の材。表に鋭利な刃物の痕跡多数あり。心去材。	
216R	10建156	10建樽場付近	木製品 不詳	ほぼ完形	①24.0 ②12.7 ③4.3	-	表・右側面には成形時のヨキカチョウナの痕跡。裏面には顔の痕跡あり。左側面は丸太面が残る。板目材。	
216R	10建157	10建西	木製品 構築部材	ほぼ完形	①29.8 ②12.1 ③4.5	-	地部には裏面から斜めにそれれ先端が尖る取手が作出される。また、取手が作出された表の根元部分両側は面取りが施される。裏面はやや前後欠損あり。心去材。	
216R	10建158	10建樽場付近	木製品 構築部材	ほぼ完形	①15.9 ②27.8 ③2.4	-	地部には柄が作出され、右側面には長方形の柄穴作り出される。	
216R	10建159	10建北側上台付近	木製品 不詳	完形	①16.2 ②27.8 ③2.2	-	表は成形時の顔の痕跡と横方向に2〜3条筋の切込みあり。左右側面は成形時のヨキカチョウナの痕跡あり。板目材。	
217R	10建160	10建樽場付近	木製品 不詳	完形	①27.0 ②17.4 ③6.8	-	表・左右側面に成形時のヨキカチョウナの痕跡。裏面には顔の痕跡あり。心去材。	
217R	10建161	10建西	木製品 不詳	完形	①22.1 ②19.0 ③6.1	-	表・裏面は成形時の顔の痕跡。左右側面にはヨキカチョウナの痕跡あり。心去材。	
217R	10建162	10建樽場付近	木製品 不詳	完形	①38.1 ②26.7 ③4.4	-	表・裏面は成形時の顔の痕跡。左右側面にはヨキカチョウナの痕跡あり。板目材。	
217R	10建163	10建樽場付近	木製品 不詳	完形	①34.7 ②18.0 ③3.8	-	表に鋭利な刃物の痕跡多数あり。裏面に成形時の顔の痕跡あり。作業台か。板目材。	
217R	10建164	10建樽場付近	木製品 不詳	完形	①36.2 ②21.4 ③7.8	-	台形状に成形される。表・裏面は成形時の顔の痕跡。左側面にはヨキカチョウナの痕跡あり。心去材。	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ・幅 ③厚・高	②重		
217R	10建165	10建西側土台付近	木製品 不詳	完形	①26.4 ③2.6	②22.6	スギ	表・裏面は成形時の鋸の痕跡、左右側面にはヨキかチョウナの痕跡あり。心持材。
217R	10建166	10建西側土台付近	木製品 不詳	完形	①25.9 ③2.4	②23.0	スギ	表・裏面は成形時の鋸の痕跡、左右側面にはヨキかチョウナの痕跡あり。心持材。
217R	10建167	10建西側土台付近	木製品 不詳	一部欠損	①32.2 ③3.7	②10.9	スギ	表・裏面は成形時の鋸の痕跡、左側面はヨキかチョウナの痕跡あり、右側面は打削り面が残る。心持材。
217R	10建168	10建西側土台付近	木製品 不詳	一部欠損	①33.6 ③3.9	②12.5	スギ	表・裏面は成形時の鋸の痕跡、左側面にはヨキかチョウナの痕跡あり、地部は鋸により斜めに成形される。心持材。
218R	10建169	10建西側土台付近	木製品 不詳	ほぼ完形	①46.8 ③6.5	②18.0	クリ	左側面は丸太面、裏面は打削り面が残る。表は成形時のヨキかチョウナの痕跡あり。心持材。
218R	10建170	10建	木製品 不詳	不詳	①43.9 ③13.4	②13.3	クリ	表に成形時のヨキかチョウナの痕跡明顯に残るが、裏面・左右側面とも同様の成形と考えられる。心持材。
218R	10建171	10建構場付近	木製品 不詳	ほぼ完形	①52.2 ③12.3	②14.0	マツ属椎茸管 東亜属	表・裏面・左右側面とも成形時のヨキかチョウナの痕跡あり、天部は中央部に平坦面を有するが、表面からは斜めにそがれている。また納状の凸部が作出され、裏面から斜めにそがれて加工される。転用か。心持材。
218R	10建172	10建構場付近	木製品 不詳	ほぼ完形	①43.0 ③17.2	②14.8	マツ属椎茸管 東亜属	柱状の材、表から鋸により斜めに切断され成形される。心持材。
218R	10建173	10建西	木製品 不詳	ほぼ完形	①28.4 ③11.0	②15.2	マツ属椎茸管 東亜属	柱状の材、左右側面には成形時のヨキかチョウナの痕跡あり、表から鋸により斜めに切断され成形される。心持材。
219R	10建174	10建	木製品 不詳	不詳	①55.0 ③13.2	②26.3	ケヤキ	木材を平置した材、左側面には、工具で歪な半球形を作出す。椀などの木取りとも思われるが、詳細は不明。心持材。

IV区5号屋敷跡1・2号施設 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ・幅 ③厚・高	②重		
225R	5屋敷1施設1	5屋敷跡1施設	木製品 蓋	60%	径一 ③4.6	②41.8	-	大型の樽の蓋か。4本の柱状の材を骨組みとし、柄杓ぎ後は横で固定する横筋め柄杓ぎ。2〜3枚の板を釘で骨組みに嵌合する。部径約80mmほどと規模は大きい。
226R	5屋敷1施設2	5屋敷跡1施設	木製品 作業台か	ほぼ完形	①24.7 ③4.3	②14.3	クリ	厚手の板状の材、天部に欠込、両面にははいり物の痕跡と5mmほどの円形の痕跡が多数見られる。心持材。
226R	5屋敷1施設3	5屋敷跡1施設	木製品 構架部材	内端部欠損	①58.4 ③2.1	②3.2	マツ属椎茸管 東亜属	表に2ヵ所所見欠込が認められ、裏に7ヵ所、裏面に3ヵ所所見釘痕跡確認できる。天部には納が欠損した痕跡あり。地部の納は残存している。板目材。
226R	5屋敷1施設4	5屋敷跡1施設	木製品 不詳	完形	①26.7 ③3.6	②15.0	スギ	板状の材。心持材。
226R	5屋敷2施設1	5屋敷跡2施設	木製品 不詳	完形	①37.0 ③11.7	②14.9	マツ属椎茸管 東亜属	表に太鼓状に面取りされ、鋭利な刃物の痕跡多数あり。また、天部寄りに鋸の切込みあり。左右側面には成形時のヨキかチョウナの痕跡明顯。天部は使われて炭化。心持材。
226R	5屋敷2施設2	5屋敷跡2施設	木製品 不詳	完形	①29.7 ③12.6	②15.6	マツ属椎茸管 東亜属	表は丸太面が残存し、鋸による切込み1条と鋭利な刃物の痕跡多数あり。左右側面は成形時のヨキかチョウナの痕跡明顯。地部は左右側面・裏面から斜めに加工され、先が鋭る。心持材。

IV区5号屋敷跡 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ・幅 ③厚・高	②重		
227R	5屋敷1	10建北	木製品 漆椀	70%	③(5.9)	-	-	内外面赤色漆で仕上げ。高台内中央に黒漆で「本手」、左下に黒漆で、点3ヵ所。
227R	5屋敷2	10建北	木製品 椀	完形	③4.6	②3.3	-	心持材。
227R	5屋敷3	12建西	木製品 椀	完形	③5.1	②2.6	-	心持材。
227R	5屋敷4	12建北	木製品 椀	完形	③8.1	②4.3	-	心持材。

IV区11号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ・幅 ③厚・高	②重		
232R	11建11	11建	木製品 面物	底板50%	①5.0	③0.6	-	小型の面物の底板と思われる。

IV区13号建物 遺物観察表 (漆器・木製品・布・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ・幅 ③厚・高	②重		
242R	13建75	13建南西	柿杓	一部欠損	柄①(22.2) 重③3.9	③4.2 重④210.1	-	杓は木製で3種類の目盛りがあり、鉤や鎌を下げるための金具が3ヵ所につく。目盛り部分には小さな釘が打ち込まれ、4、5、10などの区切りでは数個の釘で飾りをつける。金具の間には、鋸で文字を掘る。「斤」か。鉤と杓の金具部分には紐も一部遺存。杓には漆が塗られていたと思われる。鎌は六角形に削り面取りされ、両面には刻印、刻痕がある。刻印は薄く判読困難だが、①は「守衛」と読める。②は杓にある文字と同じ。鎌は草袋に入れられていた。草袋には針穴が多数あり、袋状に縫われていたものと思われる。杓も端部が金属製の入れ物に入れられていたと思われる。杓中央部欠損。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別	残存状態	計測値 (cm, g)			樹種	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高さ		
242図	13建76	13建西	木製品 道具	70%	①25.8 ②9.0 ③2.7	-	-	ブラシ状の道具。方形の一面には、竹串と思われるものを差し込みブラシ状にしている。持ち手部分には内孔2カ所。1建28と近似。	
243図	13建77	13建南西	木製品 箱か	破片	-	-	-	扉を伴う箱か。小型の榫番（①～③・⑥）がつく。赤色漆と黒漆で仕上げ。一部金彩が残る。欠損が顕著で詳細は不明。	

遺物観察表（下駄・草履）

- ・下駄計測部位は第4章第2節4を参照して下さい。
- ・計測値欄の「」は該当箇所の欠損または不明を示す。なお、一部遺存していても大きく欠損している場合にも「」と表示した。
- ・（ ）内の数値は、欠損による残存部最大値である。
- ・「大きさ」欄の「台幅」は台表面の、「前後」は前後いずれかの、いずれも最大値である。
- ・「台厚」は前後面の間の台の厚さである。
- ・「台上面」欄には台上面の「木表」「木裏」の別を記している。

1区1号建物 遺物観察表(下駄・草履)

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値 (mm)				台木取	台上面	樹種	成形、調整の特徴など	
				全長	台幅	前後幅	高さ					台厚
34図	1建267	1 B 2	1建 唐白東	213	79	72	36	13	四角板	-	ハンノキ属	台上面に横緒左部と鼻緒、横緒孔裏面に横緒の結び目 が遺存。緒は1段の左廻り。前歯を欠く。漆の遺存は 認められない。「1建268」と対。
34図	1建268	1 B 2	1建 3床下	215	78	72	38	11	二方板	-	散孔材	台上面に横緒右部と鼻緒、前歯裏面に鼻緒の結び目、 横緒孔裏面に横緒の結び目が遺存。緒は1段の左廻り。 漆の遺存は認められない。「1建267」と対。
35図	1建269	1 B 2	1建 白東	214	78	75	37	13	二方板	木表	ハンノキ属	台上面中央に緒の一部、前歯裏面に鼻緒の結び目、横 緒孔裏面に横緒の結び目が遺存。漆の遺存は認められ ない。「1建270」と対。
35図	1建270	1 B 2	1建唐白 北	213	79	77	32	11	四角板	-	散孔材	台表面下部に鼻緒による厚りあり。台上面にはほぼ完全 な左廻り1段の緒が遺存。漆の遺存は認められない。「1 建269」と対。
35図	1建271	1 B 2	1建 3床下	217	81	75	29	11	二方板	木裏	散孔材	台前面から台前面右部にかけて緒の一部、前歯・横緒孔 内に緒が遺存。緒は植物質の右廻り1段。前後後面基部 に幅広のノコメ。漆の遺存は認められない。「1建 272」と対。
35図	1建272	1 B 2	1建	220	83	75	30	12	二方板	木裏	散孔材	前歯裏に鼻緒の結び目、横緒孔裏に横緒の結び目が遺 存。緒は植物質の右廻り1段。前後後面基部に幅広の ノコメ。漆の遺存は認められない。「1建271」と対。
36図	1建273	1 B 2	1建 3床下	218	84	76	31	11	四角板	-	散孔材 (ハン ノキ属か?)	前歯裏に鼻緒の結び目、横緒孔裏に横緒の結び目が遺 存。緒は植物質で右廻り1段。「1建274」と対。
36図	1建274	1 B 2	1建 3床下	213	83	77	29	10.5	四角板	-	散孔材	前歯裏に鼻緒の結び目、横緒孔裏に横緒の一部が遺 存。緒は植物質で右廻り1段。「1建273」と対。
36図	1建275	1 B 2	1建 3床下	213	79.5	73	31	11.5	二方板	-	散孔材	前歯裏に鼻緒の結び目、横緒孔裏に横緒の結び目が遺 存。緒は植物質で左廻り1段。漆の遺存は認められ ない。
36図	1建276	1 B 2	1建 3床下	217	79	74	34	11	四角板	-	散孔材	台上面に横緒の右部と左後部が遺存。前歯裏に鼻緒の 結び目、横緒孔裏に横緒の結び目が遺存。緒は植物 質で左廻り1段。漆の遺存は認められない。
37図	1建277	1 B 2	1建 馬屋西	(207)	76	72	24	10	二方板	木表	ハンノキ属	前歯部を欠く。後面はかまなり斜めに作出されているが、 使用後は長軸に対しほぼ直角である。横緒孔の眼内に 緒が遺存。乾燥時に変形。
37図	1建278	1 B 2	1建 馬屋西		76	68	22	11	四角板	-	ハンノキ属	前後歯の削出は右側が前方に傾き、傾斜。前後後面基 部と後面基部に幅広のノコメ。横緒孔の少し前の 台表面の両側に縦の刻みあり。内面が膨れているが、 墨が塗られているか。厚りに相当する印か。前歯の斜 め前方、台の中央部前方左縁部辺り、後部中央部に直 径約3mmの穿孔あり。規則性がなく、目的不明。歯の 摩擦が著しい。
37図	1建279	1 B 2	1建	209	78	72	29	10.5	四角板	-	ハンノキ属	前歯裏面の輪花状調整部に丸ノミの穴の先のアタリあり。 前後の歯の摩擦著しい。
37図	1建280	1 B 2	1建馬屋 南桶内	219	69	78.5	38	13	二方板	木裏	-	台と前後歯間の側面との間の角部が面取りされている。 他に傾斜はない。前歯の後面、後面の前部の下部に幅 広のノコメ。
38図	1建281	1 B 2	1建	223	69	93	48	14	二方板	木裏	タリ	前歯裏面に鼻緒の結び目、内横緒孔内に横緒の一部が 遺存。前歯の後面、後面の前部の基部に埋いノコメ。 前歯の前面や後面の後面に黒漆の塗跡有り。対になる ものも認められない。
38図	1建282	1 B 1	1建	221	70	103	75	13	二方板	木表	コナラ節	前後歯間の輪花状整形は6弁か。台表面・側面、前歯 前面・後面後面に黒漆遺存。「1建283」と対。
38図	1建283	1 B 1	1建	221	73	103	72	11	二方板	木表	コナラ属	前後歯間の輪花状整形は7弁か。台表面・側面、前歯 前面・後面後面に黒漆遺存。前歯裏、横緒孔裏に植物 質の右廻り1段の緒が遺存。「1建282」と対。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)				台木取	台上面	樹種	成形、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ				
39図	1建284	II B 1	1建 1施設	207	70	130	101	46	四方形	-	台はハンノキ属、歯はアカガシ亜属。 前後歯とも同じ樹種で製作された想定される榿を使用し「地獄柄」による歯の装着である。台に約12mmの2本の溝が彫削され、前歯では、歯が装着される溝の前部側面中央部に溝底まで幅20mm、高さ17mm、溝底面部の幅4mmの直角三角形状の空間が平ノミにより削出される。前歯は、装着される歯の木口面に幅20mm、厚さ4mm、長さ15mm、断面直角三角形の榿が打ち込まれ、榿は台へ装着する歯の木口面前部に厚さ12mmのところ前部から約3.5mmの場所に当てられている。榿が打ち込まれる歯の前部中央部の左右に幅25mmで木口面の深さが7mmの切り込みが斜めに入れられ、この切り込みの深さの木口から16mmのところには木口面と平行に深さ1mmの溝が削削されている。榿が当たる溝中央部はほとんど窪んでいない。溝の中と前歯の木口の部分に膠着材は認められない。後歯は、装着される歯の木口面に幅15mm、基部の厚さ3.5mm、長さ13mm、断面直角三角形の榿が打ち込まれ、榿は台へ装着する歯の木口面前部に厚さ12mmのところ前部から3.5mmの場所に切り込みを入れ、榿が当てられている。榿が打ち込まれる歯の前部中央部の左右に幅23mmで木口面の深さが5mmの切り込みが斜めに入れられ、この切り込みの深さの木口から15mmのところには木口面と平行に深さ1mmの溝が削削されている。榿が当たる溝中央部はほとんど窪んでいない。歯の木口の榿の打ち込まれる中央部を除く両端部と、溝の両端部に赤色漆と想定される膠着材が認められる。台の裏面と歯の一部に黒漆、側面に光沢のある黒漆が遺存している。溝の中の赤色漆の側面に光沢のある黒漆が塗られているのが確認され、膠着材は差面差し替え時に使われ、光沢のある黒漆は差面差し替え後に塗られたか。前歯も「地獄柄」と想定される。後歯は7対7亜属。「1建285」と対。
39図	1建285	II B 1	1建 1施設	208	71	135	93	46	四方形	-	台はハンノキ属、歯はアカガシ亜属。 歯と同じ樹種で製作された想定される榿(幅20mm、厚さ4mm、長さ15mm、断面直角三角形)による「地獄柄」による歯の装着である。台に約12mmの2本の溝が彫削され、その溝の後部側面中央部に溝底まで幅20mm、高さ15mm、溝底面部の幅4mmの直角三角形状の空間が平ノミにより削出される。榿は台へ装着する歯の木口面前部に厚さ12mmのところ前部から約3mmの場所に切り込みを入れ、榿が当てられている。榿が打ち込まれる歯の前部中央部の左右に幅22mmで木口面の深さが8mmの切り込みが斜めに入れられ、この切り込みの木口から14mmのところには木口面と平行に深さ1mmの溝が削削されている。榿が当たる溝中央部はほとんど窪んでいない。歯の木口の榿の打ち込まれる中央部を除く両端部と、溝の両端部に赤色漆と想定される膠着材が認められる。台の裏面と歯の一部に黒漆、側面に光沢のある黒漆が遺存している。溝の中の赤色漆の側面に光沢のある黒漆が塗られているのが確認され、膠着材は差面差し替え時に使われ、光沢のある黒漆は差面差し替え後に塗られたか。前歯も「地獄柄」と想定される。後歯は7対7亜属。「1建284」と対。
40図	1建286	II B 1	1建	215	72	133	101	48	-	-	台は散孔材属、歯はコナラ属。 歯の装着は「地獄柄」によるものと推定される。前歯は前方へ傾きに開き、後面は後方へ開く。台表面・側面は赤色漆、台裏面・接地面を除く歯全面は黒漆。台裏面から左側にかけ、ほとんど磨りのかかっていない横溝が遺存。後歯前部の中央下部に焼き印による屋号あり。「1建287」と対。
40図	1建287	II B 1	1建 3床下	212	74	130	105	45	四方形	-	歯の装着は「地獄柄」によるものと推定される。前歯は前方へ傾きに開き、後面はほぼ垂直。台表面・側面は赤色漆、台裏面・接地面を除く歯全面は黒漆。右横溝内に植物質の横溝遺存。他に磨りのかかっていない植物柄の緒と推定されるものあり。「1建286」と対。
41図	1建288	II A 2	1建馬屋西1橋	(151)	(77)	139	106	45	二方形	木質	台はハンノキ属、歯はコナラ属。 台後面が欠く。歯と同じ樹種で製作された想定される榿(幅12mm、厚さ6mm)による「地獄柄」による歯の装着である。台に約13mmの2本の溝が彫削され、その溝のいずれも前部側面中央部に溝まで幅21mm、高さ18mm、溝底面部の幅3mmの直角三角形状の空間が平ノミにより削出される。榿は台へ装着する歯の木口面前部に厚さ12mmのところ前部から約3mmの場所に切り込みを入れ、榿が当てられている。榿が打ち込まれる歯の前部に榿が打ち込まれることによる膨らみを誘導するための切り込みは認められない。しかし、平面的に榿とほぼ同様な大きさの凸物が見られる。側面を見るとき、榿は差面の木口に埋まりきらず、台の溝中央部が圧迫されて窪んでいる。台の一部に赤色漆が遺存し、台装着部の木口面を含め差面に黒漆の塗布が認められる。歯はハンノキ属。「1建289」と対。
41図	1建289	II A 2	1建馬屋西1橋	222	(75)	134	106	45	四方形	-	前歯・両横溝内に横溝が遺存。エクスレ線図により「地獄柄」による歯の装着であることを確認。台の一部に僅かに漆の痕跡あり、差面に黒漆が塗布されているか。「1建288」と対。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)				台木取	台上面	樹種	成形、調整の特徴など	
				全長	台幅	台幅	高さ					台厚
42図	1建290	I B 3	1建 1施設	214	63	105	71	13	四方板	-	タリ	前歯の後部基部、後歯の前後基部にやや狭いノコメ、前後歯間を除いて黒漆の塗布。「1建291」対。
42図	1建291	I B 3	1建 1施設	215	64	106	77	13	四方板	-	タリ	前歯の後部基部、後歯の前後基部にやや狭いノコメ、前後歯間を除いて黒漆の塗布。前歯内に鼻緒の一部遺存。「1建290」と対。
42図	1建292	I A 1	1建 4床下	224	75	92	53	9	二方板	木表	タリ	台表面の先端部内側部・中央部・両横緒孔周囲、台側面・前後面に赤色漆、台裏前部・後部、前歯前部・後歯後面・両歯側面に黒漆遺存。台表面前歯部に足指の使用による窪みあり、右足用として使われたか、前後歯とも左側の摩耗が進んでいる。「1建293」と対。
42図	1建293	I A 1	1建	224	72	95	44	10	二方板	木表	タリ	台表面の先端部内側部・前歯後部・中央部・両横緒孔周囲、台側面・前後面に赤色漆、台裏前部・後部、前歯前部・後歯後面・両歯側面に黒漆遺存。台表面前歯部に足指の使用による窪みあり、右足用として使われたか、前後歯とも右側の摩耗が進んでいる。「1建292」と対。
43図	1建294	I A 3	1建 4床下	233	62	97	51	11	二方板	木表	タリ	台表面・内側面・後側面、前後歯側面に赤色漆、前歯前部・台裏前部、後歯後面・台裏後部に黒漆遺存。台表面前歯部に足指により漆の剥げた痕跡あり。台上に鼻緒・横緒がほぼ完全に遺存。鼻緒を結んだ状態から左側の横緒が長いように見え、右足の甲の高さに対応するように思われる。前後歯の前面基部に細いノコメ、「1建295」と対。
43図	1建295	I A 3	1建 3床下	233	61	96	49	12	二方板	木表	タリ	台表面・内側面・後側面、前後歯側面に赤色漆、前歯前部・台裏前部前歯辺り、後歯後面・台裏後部に黒漆に黒漆が遺存。台表面前歯部に足指により漆の剥げた痕跡あり。前後歯の前面基部に細いノコメ。「1建294」と対。
43図	1建296	I A 1	1建 3床下	226	(82)	91	46	10	二方板	木裏	カツラ	台表面・側面・前後面に赤色漆、台裏前部・後部、前歯前部・後歯後面に黒漆遺存。前後歯の前歯基部に細いノコメ。前後歯の右側が摩耗か。前歯右台上に足指による摩耗痕(左部は欠損)。台表面の前歯後部及び横緒孔後部中央から左部の漆が剥けている。前歯・横緒孔の裏面においていずれも穴の後に木質部を削がした痕跡あり。丸ノミによる穿孔後における作業か。「1建297」と対。
43図	1建297	I A 1	1建 3床下	226	87	94	51	9.5	二方板	木表	カツラ	台表面・側面・前後面に赤色漆、台裏前部・後部、前歯前部・後歯後面に黒漆遺存。前歯の前歯基部に細いノコメ。前後上部に足指による摩耗痕、台表面の前歯後部及び横緒孔後部中央の漆が剥けている。前歯・横緒孔の裏面においていずれも穴の後に木質部を削がした痕跡あり。丸ノミによる穿孔後における作業か。「1建296」と対。
44図	1建298	I A 1	1建 馬屋西	223	77	97	53	11	二方板	木表	タリ	前歯裏・前歯内に鼻緒(7?)、台表面の横緒孔部・横緒孔裏面に横緒が遺存。いずれも複数。台側面後部に漆遺存。
44図	1建299	I A 1	1建 3床下	223	72	87	50	12	四方板	-	散孔材	側面に漆の遺存良好。後歯基部、前歯と横緒孔内に植物質の緒遺存。
44図	1建300	I A 1	1建 馬屋西	218	81	92	49	10	本榎目	木裏	タリ	前後歯の間の台裏裏面の輪花状調整は2弁。後歯後面基部にやや細めのノコメ。後歯基部、前歯と横緒孔内に植物質の緒遺存。
44図	1建301	I A 1	1建 1施設	219	77	82	32	11	四方板	-	タリ	台側面と後面に漆良好遺存。台前部に足指の使用による窪みがあり、右足の使用を示すか。前歯の前部基部にやや幅広いノコメ。歯の摩耗顕著。
45図	1建302	I A 2	1建 3床下	223	73	95	46	14	二方板	-	-	台側面の漆の遺存良好。前歯・横緒孔内・台裏の前歯近後部・台裏の左横緒孔部に緒が遺存。緒は植物質と布から成るか。歯の右側が部分的に摩耗から、右足での使用か。
45図	1建303	I A 1	1建 2施設	216	(66)	81	42	10	二方板	木裏	タリ	台内側面と後面、台表面の一部に漆遺存。前歯前歯基部にやや幅広い顕著なノコメ。
45図	1建304	I A 2	1建 馬屋西	218	74	86	48	14	四方板	-	タリ	台側面の漆の遺存良好。台表面に使用に伴う摩耗による足の痕跡あり、足の指の痕跡と歯の右側が進んだ摩耗から、右足での使用か。
45図	1建305	I A 2	1建馬屋西	219	70	87	46	11	二方板	木裏	タリ	歯の前歯間の距離が先端に向かい僅かに開く。台の前歯前部・歯の上部に漆の遺存良好。前歯・両横緒孔内面に緒遺存。台表面と台裏後面の角部、台側面と台側面後面の角部が面取り調整。
46図	1建306	I A 1	1建3床下	221	68	79	15	11	二方板	木表	-	台上面に横緒の一部。前歯内、横緒孔内及び横緒孔裏面に横緒の結び目が遺存。緒は左磨り1段。台前部裏面の左右に刻線による短角あり。歯の摩耗が著しい。
46図	1建307	I A 4	1建 馬屋西	206	87	(87)	36	11	二方板	木裏	ホオノキ	前後歯の間の台裏裏面の輪花状調整は2弁か。歯の左側面は先に向かっているが、歯の右側面には垂直に切り落とされているか。「9建2」とは台の幅・長さが見合わずに合わない。
-	A	II A 2 かII B	1建南	-	-	(67)	-	-	-	-	-	左右のいずれかを欠く差歯の破片。台満足部側面上端、台と一体成形。側面と前後歯との間に面取り、面取りを含め側面に黒漆後に赤色漆。歯の広がり角度は60度。「1建ウ」と同一個体。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)					台木取	台上面	樹種	成り、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ	台厚				
-	イ	1 B 2	1建唐白東	-	(67)	(75)	31	13	二方板	木表	-	台前部1片と台中央部2片から成り、3片は同一個体と思われる。前歯の内面が欠けている。前歯の下面は菊花状。
-	ウ	II A 2 かB	1建唐白東	-	-	(53)	-	-	-	-	-	左右のいずれか欠く差歯の破片。差込部側面上端、台と一体成形。側面と前後面との間に面取り。面取りを含め側面に黒塗後に赤色漆。歯の広がりが角度は71度。「1建ア」と同一個体。
-	エ	1 B 2	-	-	(73)	-	24	10.5	本榎目	木裏	ハンノキ属	台後部の2片と小片から成る。「1建90」と対。
-	オ	1 B 2	1建西外	213	57	62	35	12	-	-	-	3片から成る。前歯削出時のノコメ顯著。乾燥時に著しく変形。
46図	1建308	草履	1建	209	74	-	-	-	-	-	-	両端が、鼻緒が欠損。一部芝罫が確認できる。
46図	1建309	草履	1建	184	63	-	-	-	-	-	-	両端が、鼻緒が欠損。一部芝罫が確認できる。
46図	1建310	草履	1建	139	65	-	-	-	-	-	-	つま先部分、鼻緒が欠損。一部芝罫が確認できる。
46図	1建311	草履	1建唐白東	154	73	-	-	-	-	-	-	両端部が欠損。鼻緒あり。一部芝罫が確認できる。
46図	1建312	草履	1建1床下	160	74	-	-	-	-	-	-	かかと部分が欠損。鼻緒あり。一部芝罫が確認できる。
-	1建467	草履	1建3床下	-	-	-	-	-	-	-	イネ	自然科学分析により、極端で作られていることを確認。分析結果は第4章第4節5参照。

1区4号建物 遺物観察表(下駄・草履)

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)					台木取	台上面	樹種	成り、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ	台厚				
87図	4建88	1 B 2	4建	209	82	75	35	11	二方板	-	ハンノキ属	前歯と左横槽孔内に緒道存。「4建89」と対。しかし、全長が少し短い。
87図	4建89	1 B 2	4建	217	(77)	75	33	13	二方板	-	ハンノキ属	前後歯基部にノコメ。「4建88」と対。しかし、全長は少し長い。
87図	4建90	1 B 2	4建	215	79	75	33	10	本榎目	-	散孔材	前後歯部と後歯前部の基部に幅広いノコメ。右の後端中央に山型の刻痕あり。屋号か。前歯裏面に径6mm、長さ50mmの小枝の鼻緒止めがあり、漆の痕跡なし。「1建エ」と対。
87図	4建91	1 B 2	4建	216	82	72	21	11	四方板	-	-	後部の削出は右側が前方に傾き、傾斜。歯の摩耗が著しい。
88図	4建92	1 B 2	4建3床北	216	76	67	21	11	四方板	-	ハンノキ属	前歯裏面の輪花状下部に丸ノミの刀先痕あり。後歯はほぼなくなるほど摩耗している。
88図	4建93	1 B 2	4建	212	90	77	29	10	二方板	木表	ハンノキ属	台の幅が広い。前歯の後面、後歯の前面のそれぞれ基部に幅広いノコメ。
88図	4建94	1 B 2	4建北上台下	210	77	81.5	37	8	二方板	木裏	ホノノキ?	台上面に著の一部分が遺存。台表面下部に刻痕による屋号あり。漆の遺存は認められない。
88図	4建95	1 B 2	4建	215	71	85	39	9.5	二方板	木表	ハンノキ属	前歯の穴の直径(15×13mm)は大きい。漆の痕跡なし。歯の高さは高い。
89図	4建96	1 A 1	4建	220	(65)	82	34	10	二方板	木表	タリ	前歯の前面基部にやや幅広いノコメ。前後歯とも右側の摩耗が著しい。
89図	4建97	1 A 1	4建	217	73	86	33	13	二方板	-	コナラ節	前後歯面では前歯内側に削り残されている。右横槽孔のみ前後の径が大きい。後歯の前面基部にやや幅広いノコメ。台表面の前歯前部に足指による窪み、歯の摩耗顯著。
-	4建98	1 B 2	4建1床下	(208)	(72)	-	40	10	四方板	-	散孔材	台中央部の左側を欠き、3片から成る。前歯の下面は菊花状。後歯のめり部分が摩耗。「4建99」と対。
-	4建99	1 B 2	4建1床下	-	(74)	(70)	(38)	11	二方板	木裏	散孔材	4片から成る。前歯の下面は菊花状。右鼻緒孔は前傾斜で穿孔。乾燥により変形。「4建98」と対。
-	カ	1 B 2	4建	-	(69)	-	32	11	二方板	木表	-	木目に沿って細片化しているが、台と前後歯のほとんどが存在。前のめり部が使用により著しく摩耗。
-	キ	1 B 2	4建	(127)	(77)	-	23.5	10.5	二方板	-	ハンノキ属	前半部のみ遺存。前歯削出時のノコギリのアサリ痕(幅2mm、前後歯面の菊花形形成時の丸ノミの痕跡(径約2cm)。使用による摩耗著しい)。

1区1号戸 遺物観察表(下駄・草履)

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)					台木取	台上面	樹種	成り、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ	台厚				
-	ク	II A 2 かB	1井戸	-	-	(102)	-	-	-	-	-	推定左側の一部を欠く差歯。「地獄納」。台溝差込部側面上端、台と一体成形。側面と前後面との間に面取り。厚さ1mmの左右中央部で前部から2mmの本口面所に切り込みを入れた「地獄納」を打ち込んでいる。前部に切り込みは施さず。前後歯・溝差込面に黒塗。面取りを含め側面に黒塗後に赤色漆。取は漆の痕跡の痕跡なし。前後歯に船底状の右下面の痕跡あり。歯の右側の広がりが角度は67度で、左右両方は43度と推定。

1区1号畑 遺物観察表(下駄・草履)

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)					台木取	台上面	樹種	成り、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ	台厚				
-	ケ	1 B	52区B-7	-	(74)	-	29.5	-	-	-	ハンノキ属	後歯部のみ遺存。

1区5号建物 遺物観察表(下駄・草履)

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)					台木取	台上面	樹種	成り、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ	台厚				
132図	5建156	1 B 2	5建	139.5	(50)	56	25	9	四方板	-	ケヤキ属	前歯裏の菊の花弁は1。台表面・側面に漆遺存。「5建157」と対。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値 (mm)					台木取	台上面	樹種	成形、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ	台厚				
132図	5建157	I B 2	5建 1床南	137	57	51	25	10	四方形	-	ケヤキ属	前歯裏の菊の花弁は1。台表面・歯面に漆遺存。台左前部の窪みは足履指の使用痕跡か。「5建156」と対。
132図	5建158	I B 1	5建 1床下	165	61	84	54	12	二方形	木表	クリ	台表面・歯面、歯側面・前後面に漆良好に遺存。前歯内、前歯裏、両横緒孔内に植物質の緒が遺存。「5建159」と対。
132図	5建159	I B 1	5建 1床下	165	60	86	52	11.5	二方形	木表	クリ	台表面・歯面、歯側面・前後面に漆遺存。前歯内植物質の緒が遺存。「5建158」と対。
133図	5建160	II B 1	5建 1施設	(146)	(67)	113	96	47	四方形	-	台はハンノキ属、歯はコナラ節	台前部欠損。横(幅)18mm、厚さ5mmによる「地獄納」による歯の装着である。台裏に約14mmの2本の溝が掘削され、前歯では、横は台へ装着する歯の木口面前部に厚さ14mmのところ前部から約4mmの場所に切り込みを入れ、横が当てられている。横が打ち込まれる歯の前面に横が打ち込まれることによる膨らみを誘導するための切り込みは認められない。しかし、平面的に横より少し広めの出納が形成されている。割れ面を見ると、横は差歯の木口内にはほぼ埋まっている。台の歯面の一部に赤色漆が遺存している。後歯も「地獄納」による装着と推定される。前の差歯は前方へ、後の差歯は後方へわずかに開く。歯はコナラ節。「5建161」と対。
133図	5建161	II B 1	5建 1施設	(149)	(69)	115	103	48	四方形	-	台はハンノキ属、歯はコナラ節	台前部欠損。横(幅)18mm、厚さ5mmによる「地獄納」による歯の装着である。台裏に約13mmの2本の溝が掘削され、前歯では、横は台へ装着する歯の木口面前部に厚さ14mmのところ前部から約3mmの場所に切り込みを入れ、横が当てられている。横が打ち込まれる歯の前面に横が打ち込まれることによる膨らみを誘導するための切り込みは認められない。しかし、平面的に横より少し広めの出納が形成されている。割れ面を見ると、横は差歯の木口内にはほぼ埋まり、溝中央部は圧迫されてわずかに窪んでいてる設置である。歯の設置面を除き、ほぼ前部に赤色漆が遺存している。後歯も「地獄納」による装着と推定される。前の差歯は前方へ、後の差歯は後方へわずかに開く。前歯の木口部に膠着材は認められない。前歯の右部の摩耗が著しい。「5建160」と対。前歯はコナラ節。
134図	5建162	II B 2	5建 1床下	209	68	129.5	118	53	四方形	-	台はハンノキ属、歯はコナラ節	前後の歯はそれぞれ大きく開き、前歯が少し前方に傾き、前後歯の間は先端に向かいわずかに開く。前歯・横緒孔内に緒が遺存。前歯裏面左側に前歯表側溝の間の隙の欠つきを止めるために木片が差し込まれている。台表面下部に横筋によると思われる径約2cmの円形の痕跡が有る。歯の装着は「地獄納」によると想われる。前歯の右部の摩耗が著しい。「5建163」と対。歯はコナラ節。歯は?。
134図	5建163	II B 2	5建 1床下	209	70	122	98	50	四方形	-	台はハンノキ属、歯はコナラ節	前後はほぼ垂直で、後歯は先端に向かいわずかに開き、前後歯間はわずかに開く。両横緒孔に緒の一部が遺存。「5建162」と対。歯はコナラ節。前歯はコナラ節。
135図	5建164	I A 1	5建 1床下	224	77	104	64	10	二方形	木表	環孔材	漆の遺存はほとんど認められない。台上部に横緒と鼻緒。横緒孔内に横緒。前歯裏に鼻緒の結び目が遺存。緒は右側り一段。歯の装着は「地獄納」によると思われる。右歯面中央部に漆遺存。「5建165」と対。
135図	5建165	I A 1	5建 1床下	224	75	105	62	11	二方形	木表	環孔材	漆の遺存はほとんど認められない。台上部右側に横緒、横緒孔内に横緒。鼻緒孔内に横緒の結び目が遺存。緒は右側り一段。「5建164」と対。
135図	5建166	I B 2	5建 2床南	227	83	75	27	11.5	四方形	-	ハンノキ属	前歯内、前歯裏面に鼻緒の一部が遺存。
135図	5建167	I B 2	5建上間	220	81	77.5	29.5	10	四方形	-	台はハンノキ属、歯はコナラ節	前歯・両横緒孔とも縦長の楕円形状で大きい(約20×12mm)。台表面後部中央に男性器状の縦刻。
136図	5建168	I A 1	箱(5建154)内	222	77	(115)	64	(6)	二方形	木表	クリ	前歯(前後27×左右10mm)と右鼻緒(前後24×左右10mm)の孔の大きさが大きい。台表裏面・歯内面等の風化が著しい。「5建170」と対。
-	コ	I A 1	箱(5建154)内	-	80.5	(94)	58	(8)	二方形	木表	クリ	いずれも歯の遺存する前歯・後部から成る。右横緒孔が大きい(前後18×左右9mm)。台表裏面・歯内面の風化が著しい。「5建168」と対。
136図	5建169	I A 1	5建 1床下	228	73	86	50	10	二方形	木表	-	台歯面に漆良好に遺存。
136図	5建170	I A 1	5建 1床南	222	78	84.5	40	10	四方形	-	クリ	台歯面の漆の遺存良好。両横緒孔内に緒遺存。緒に布使用か。
136図	5建171	I A 1	5建 1床下	223	76	102	54	11	二方形	木表	-	台歯面後部に漆遺存。植物質の鼻緒と横緒の前部が遺存。台表面の漆の使用痕は右足での使用を示すか。後半部を欠く。前歯の穴の径が大きい(前後22×15mm)、摩耗著しい。
-	サ	I B 2	5建	-	83	-	18	10	二方形	木表	クリ	

図(9)の建物 遺物観察表 (下駄・卓扇)

図版番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値 (mm)					台木取	台上面	樹種	成形、調整の特徴など
				全長	台幅	歯幅	高さ	台厚				
194図	9建22	I A 4	9建建付近	211	79	86.5	42	10	二方形	木表	クリ	前後歯の間の台表面の輪花状調整は2弁。「1建307」とは台の幅・長さが異なり対にならない。

遺物観察表

IV区10号建物 遺物観察表(下駄・草履)

図取番号	掲載番号	形態分類	出土位置	計測値(mm)				台木取	台上面	樹種	成形、調整の特徴など	
				全長	台幅	台幅	高さ					台厚
2110	10建67	II A	10建	193	95	92	24	20	二枚板	木炭	タリ	前窓・両横緒孔内に緒遺存。台表面の一部に赤色漆遺存。差面を装着する溝の内側にノコ半円の細いノコメ。差面の基部は溝に密着しており、溝内の差面基部の縁辺部には緻密化しているように見られる。
2110	10建68	草履	10建 橋場付近	157	74	-	-	-	-	-	-	縁緒が欠損。一部芯縄が確認される。

※下駄個体数の算定

- ・「1建A」と「1建D」は同一の差面片と思われる、他の差面下駄に属する可能性は想定できないので、この2点で1点とみなす。
- ・「1建I」の3片は1点として算定する。
- ・「4建カ」は細片化しているが、1点として算定する。
- ・「1建Fク」は建物に附属する点数には算定しない。
- ・以上をまとめると、下駄出土点数は81点である。
- ・左右で対になる下駄の組み合わせは20組である。

遺物観察表(金属器・道具類)

I区1号建物 遺物観察表(金属器・道具類)

※()内の数値は、欠損による残存部最大値か推定値である。

図取番号	掲載番号	出土位置	種類	残存状態	計測値(cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅・厚・高	
560	1建364	1建5床	鉄製品 釘	ほぼ円形	①3.0 ②0.2	小型の釘。頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。	
560	1建365	1建電	鉄製品 釘	完形	①2.5 ②0.2	小型の釘。頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。	
560	1建366	1建電	鉄製品 釘	頭部欠損	①2.6 ②0.2	小型の釘。頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成か。	
560	1建367	1建電	鉄製品 釘	完形	①2.2 ②0.3	小型の釘。頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。	
560	1建368	1建電	鉄製品 釘	完形	①0.4 ②0.2	小型の釘。頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。	
560	1建369	1建3床	鉄製品 釘	頭部欠損	①2.8 ②0.3	欠損のため、頭部成形は不明。端部大きく折り曲がる。	
560	1建370	1建4床下	銅製品 鋸	完形	①2.1 ②1.3	小型の鋸。平円錐の頭部がつく。	
560	1建371	1建3床下	鉄製品 釘	頭部欠損	①4.0 ②0.3	頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成か。	
560	1建372	1建上間	鉄製品 釘	頭部欠損	①5.4 ②0.4	欠損のため、頭部成形は不明。折り曲がる。	
560	1建373	1建室	鉄製品 釘	頭部欠損	①3.7 ②0.4	欠損のため、頭部成形は不明。折り曲がる。	
560	1建374	1建	鉄製品 釘	頭部欠損	①8.6 ②0.5	頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成か。	
560	1建375	1建上間	鉄製品 釘	完形	①10.5 ②0.6	頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。	
560	1建376	1建6床下	鉄製品 不詳	両端部欠損	①11.1 ②0.7	断面長方形。幅狭く、薄い。	
560	1建377	1建馬屋 南棟	鉄製品 釘か	端部欠損	①11.7 ②0.8	断面方形。頭部直向に屈曲。大型の釘のような形状。7建53・54に近似。	
560	1建378	1建馬屋	銅製品 円錐	完形	径1.2	溝口直やや不明瞭。	
560	1建379	1建1床下	鉄製品 金か	完形	①6.4 ②2.2	右側は環状。左側は尖る。扉輪である、いわゆる「肘金」を受ける部分か。	
560	1建380	1建3床	鉄製品 不詳	完形	径2.5 ③0.7	幅の狭い鉄の板を、端部を互い違いに突ませ円形に丸める。道具の口金部分か。5建192に近似。	
560	1建381	1建西上台	鉄製品 不詳	不詳	①8.2 ②0.6	断面長方形の鉤の手状を呈する。自在鉤の一部か。	
570	1建382	1建1床	銅製品 鋸	完形	①2.6 ②4.4	持ち手部分は環状。鋸前側の鋸か。1建383に近似。	
570	1建383	1建1床	銅製品 鋸	端部欠損	①2.0 ②3.5	持ち手部分は環状。鋸前側の鋸か。1建382に近似。	
570	1建384	1建5床下	銅製品 煙管	一部欠損	①(2.2)	煙首。頭部付近で欠損した火皿部分。	
570	1建385	1建上間	銅製品 煙管	火皿部分	①(1.8)	煙首。頭部で欠損した火皿部分。	
570	1建386	1建1床下	銅製品 煙管	煙首	①4.4 ②0.9	煙首。胴部と頸部の境に段差あり。	
570	1建387	1建3階口裏付近	銅製品 煙管	端部欠損	②(3.4) ②1.4	吸口。胴部中央付近に段差。外面には細かく平行な刻みが施される。	
570	1建388	1建2床下	銅製品 煙管	煙首	①(10.3) ②0.9	煙首。胴部、頭部付近が変形。側面中央付近に接合痕跡。	
570	1建389	1建3床下	銅製品 煙管	吸口	①6.9 ②0.9	吸口。胴部中央付近に段差。外面には線刻による車などの文様が施される。	
570	1建390	1建1唐白東	銅製品 煙管	吸口	①6.7 ②0.8	吸口。胴部中央付近に段差。側面中央付近に接合痕跡。	
570	1建391	52区A-3	銅製品 煙管	端部欠損	①5.5 ②1.0	吸口。胴部中央付近に段差。側面中央付近に接合痕跡。	
570	1建392	1建	銅製品 煙管	吸口	①6.9 ②0.9	吸口。側面中央付近に接合痕跡。	
570	1建393	1建1施設	銅製品 煙管	羅字欠損	煙首 ①5.6 ②1.0 吸口 ①7.5	煙首は、胴部と頸部の境に僅かな段差。外面には線刻による虎の文様を施す。一部羅字が遺存。	
570	1建394	1建2施設	銅製品 煙管	羅字欠損	①5.7 ②5.9 ②1.1	煙首は、胴部上面に接合痕跡。外面には線刻による○(マル)に柄の文様か。吸口も同様に接合痕跡あり。	
570	1建395	1建3床下	銅製品 煙管	羅字欠損	①6.4・7.1 ②0.9	煙首は胴部やや幅く、側面中央付近に接合痕跡。吸口も同様に細く接合痕跡あり。	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	③厚・高	
57図	1建306	1建3床	銅製品 控管	扉部欠損	①4.4・②6.9	③0.8	扉首は胴部と頸部の境に段差。吸口も同様に胴部中央付近に段差。	
57図	1建307	1建6床	金属製品 鏝	端部欠損	①21.7	②0.8	③0.3	金属製の鏝。耳かき部分は欠損。
57図	1建308	1建3階 3階裏	鉄製品 鉄	40%	①(11.8)			U字状に曲げた鉄。いわゆる「和鉄」。
57図	1建309	1建3床下	鉄製品 鎌	刃部	①13.3	②20.3	③0.3	中子端部は屈曲。刃部の角度から右利き用の鎌と思われる。
57図	1建400	1建馬屋 南側	鉄製品 鎌	刃端部 欠損	①13.8	②(24.1)	③0.3	中子端部は屈曲。刃部の角度から右利き用の鎌と思われる。
58図	1建401	1建馬屋西	鉄製品 不詳	不詳	①13.5	②5.2	③2.2	鉄の板を鋭角に折り曲げる。欠損も詳細は不明。
58図	1建402	1建2床下	銅製品 葉出	蓋欠損	②19.4	③20.2		断面方形の葉出。注口部と胴部は溶接し、新で止まる。注口部上面には溶合痕跡あり。胴部を折り返し、針金状の金属を巻くように固定。7建402に近似。
60図	1建407	1建1床下	鉄製品 鉄網	耳部片	③(17.8)			吊耳鉄網。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3カ所。外面に歯状の痕跡が付着。
60図	1建408	1建1床下	鉄製品 鉄網	完形	口径34.4	③17.3		吊耳鉄網。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3カ所。耳部には、両端部鉤の形状の取手がつく。底面には脚3カ所。濁口痕跡不明。鉄網の蓋板は、板2枚を木釘で接合。取手と蓋板は手掛け明け。鉄網には亀裂が入り欠損していたが、溶接により補修痕跡。外面にはスズが良好に残り、補修後も使用されていた。
60図	1建409	1建3床下	鉄製品 蓋	完形	径14.2	③3.4		胴の張った蓋。つまみ部分に円孔を穿つ。ここに、釘を転用したと思われる環状の取手がつく。茶釜の蓋か。
60図	1建410 ①	1建1施設	鉄製品 茶釜・蓋	完形	蓋径15.9	③3.4		蓋を伴う茶釜。胴部中央張り出し、胴部付近に耳部がつく。耳部は山形。耳孔は2段、2カ所。耳部には、両端部鉤の形状の取手がつく。底面には脚3カ所。濁口痕跡不明。蓋は胴の張った形態。つまみ部分に円孔を穿つ。ここに環状の取手がつく。
61図	1建410 ②	1建1施設	鉄製品 茶釜・蓋	80%	口径14.3	③21.1		

1区2号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	③厚・高	
72図	2建55	2建8棟	金属製品 鏝	端部欠損	①11.5	②0.5		
72図	2建56	2建9棟	銅製品 控管	吸口	①6.4	②1.1		吸口。外面には線刻による流水状の文様が施される。
72図	2建57	2建1棟	銅製品 円盤	不詳	①1.9	②2.2	③0.4	厚さ4mmほどに潰れる。
72図	2建58	2建1輪廊	銅製品 短鼓か	破片	径(17.0)	③(2.0)		欠損部が多く判然としなが、短鼓と思われる。
72図	2建59	2建北	鉄製品 鎌	刃端部 欠損	①13.7	②21.1	③0.3	中子端部は屈曲。刃部の角度から右利き用の鎌と思われる。
72図	2建60	42区B-24	鉄製品 道具	50%か	①(14.0)	②3.3	③1.0	頭部には釘の広がり。桶成いは樽のたがをはめる際に使用する道具か。欠損するも、9建42に近似。

1区4号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	③厚・高	
93図	4建115	4建周辺	銅製品 控管	吸口	①5.5	②1.0		吸口。一部扉部が遺存。
93図	4建116	4建2床下	鉄製品 釘	ほぼ正定形	①7.1	②0.4		頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。
93図	4建117	4建床上	鉄製品 鏝	ほぼ正定形	径7.3	③0.5		円形の鏝。透かしなどの装飾は見られない。
93図	4建118	4建床上	銅製品 葉出か	取手60%	①15.5			葉出の取手か。
94図	4建120	4建周辺	鉄製品 鉄網	70%	口径27.8	③13.7		小型の吊耳鉄網。口縁部は有段。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は隅丸長方形。耳孔は2段、3カ所。底面には脚3カ所。濁口痕跡不明。
94図	4建121	4建床上	鉄製品 鉄網	70%	口径45.0	③23.1		吊耳鉄網。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3カ所。底面には脚3カ所。濁口痕跡不明。欠損し亀裂の入った箇所に、溶接による補修痕跡。

1区8号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	③厚・高	
96図	8建3	8建	鉄製品 釘	完形	①5.2	②0.6		頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。
96図	8建4	8建	鉄製品 釘	完形	①6.8	②0.4		頭部薄く伸ばした後、折り曲げて形成。

1区1号石垣 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	③厚・高	
100図	1石垣4	1石垣	鉄製品 鎌	刃部70%	①40.5	②13.7	③0.6	中子端部は屈曲。峰が太く穂を持ち、刃に向けて薄くなる。刃部の角度から右利き用の鎌と思われる。

1区4号溝 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)			成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	③厚・高	
101図	4溝12	4溝	銅製品 控管	端部欠損	①3.7	②0.9		吸口。胴部中央付近に段差。表面には線刻による幾何学文様、裏面には草木の文様を描く。

遺物観察表

1区1号屋根跡 遺物観察表（金属製品・道具類）

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
111図	1 屋根58	〇トレンチ	銅製品 煙管	雁首	①5.9	②0.9	雁首。側面中央付近に接合痕跡。
111図	1 屋根59	1 倒木付近	鉄製品 釘	端部欠損	①5.6	②0.5	頭部薄く伸ばした様、折り曲がって形成。

1区1号屋根跡下 遺物観察表（金属製品・道具類）

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
116図	1 屋根下33	1 建9床下 地山中	鉄製品 不詳	不詳	①11.1	②15.9	鉄の板を、裏面に折り曲げたような形態。竈などの凹部か。欠損が顕著で詳細は不明。

1区5号建物 遺物観察表（金属製品・道具類）

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
140図	5 建185	箱(5建154)上	銅製品 煙管	吸口	①8.0	②1.2	断面六角形の吸口。外面には、点線状に幾何学的な文様を描く。
140図	5 建186	箱(5建154)内	銅製品 煙管	吸口	①8.4	②1.1	吸口。外面には点線状の文様を描く。一部欠損が遺存。
140図	5 建187	箱(5建154)内	銅製品 煙管	吸口	①7.0	②0.9	吸口。側面中央付近に接合痕跡。
140図	5 建188	箱(5建154)内	銅製品 煙管	吸口	①5.9	②1.1	吸口。側面中央付近に接合痕跡。
140図	5 建189	5 建3床下	銅製品 煙管	吸口	①4.7	②1.2	吸口。側面中央付近に段差。大きく折れ曲がる。
140図	5 建190	箱(5建154)上	銅製品 煙管	ほぼ完形	雁首①4.5 吸口①6.9 縦字②2.6	②0.8 ②0.9 ②0.5	雁首は側部と頸部の境に段差。吸口は段差なく、側面中央付近に接合痕跡。一部欠損が遺存。
140図	5 建191	箱(5建154)内	鉄製品 刀子	端部欠損	①7.5	②1.2 ③0.4	刃部は斜で直線的。持ち手と思われる部分は、端部が丸味を持つ。いわゆる「切出小刀」に近似。
140図	5 建192	5 建3床下	鉄製品 不詳	完形	径2.8	③0.7	幅の狭い鉄の板を、端部を互い違いに尖らせ円形に丸める。道具の口金部分か。1建380に近似。
140図	5 建193	箱(5建154)内	鉄製品 不詳	完形	①7.8	②8.0 ③0.6	断面円形で、およそ十字状に曲げられた現状。
140図	5 建194	箱(5建154)内	鉄製品 刀子	50%か	①(12.7)	②(2.7)	柄は木製。刃部は欠損し詳細は不明。中子を柄に入れ、口金で止める。
140図	5 建195	箱(5建154)内	手斧	柄欠損	①(13.3)	②8.5 ③(4.8)	柄は僅かに遺存するも、楔は確認できない。
140図	5 建196	箱(5建154)内	鋸	柄欠損	①(13.4) ③(1.3)	②(2.0)	柄は一部遺存し、中子が確認できる。穂先は長く、刃部の幅は狭い。首と穂先の間に穂はなく、刃部は薄い。
140図	5 建197	5 建1床下	鉄製品 蓋	完形	径14.0	③3.0	緩やかな山形の蓋。つまみ部分に円孔を穿つ。ここに釘を転用した現状の取手がつく。
140図	5 建198	5 建2床下	鉄製品 蓋	完形	径14.2	③2.9	同の型った蓋。つまみ部分に円孔を穿つ。ここに現状の取手がつく。茶釜の蓋か。
141図	5 建199	5 建3床北	鉄製品 鉄鍋	口縁部片	口径(62.0)	③(21.8)	大型の鉄鍋。胴部で屈曲し外反。口縁部外面には溝。口縁部は内側に張り出す。
141図	5 建200	5 建上間	鉄製品 鉄鍋	口縁部片	口径(23.0)	③(4.8)	小型の鉄鍋か。口縁部外面には溝。内面には段あり。
141図	5 建201	5 建4床下	鉄製品 鉄鍋	耳部片	①12.2		吊耳鉄鍋。口縁部は外に張り出し、耳部は口縁部に取りつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3ヵ所。

1区6号建物 遺物観察表（金属製品・道具類）

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
147図	6 建11	6 建	銅製品 煙管	吸口	①6.1	②0.9	吸口。側面中央付近に接合痕跡。
147図	6 建12	6 建	鉄製品 釘	頭部欠損	①6.3	②0.6	欠損のため、頭部成形は不明。頭部付近で折れ曲がる。

1区2号屋根跡 遺物観察表（金属製品・道具類）

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
151図	2 屋根6	5 建西	鉄滓	ほぼ完形	①7.1	重さ66.3g	小型の鉄滓。

1区2号屋根跡下 遺物観察表（金属製品・道具類）

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
153図	2 屋根下8	5 建1床下 地山中	銅製品 煙管	端部欠損	①3.9	②1.0	断面六角形の吸口。側面中央付近に段差。

1区2～4号建 遺物観察表（金属製品・道具類）

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
156図	2～4 棚31	2～4 棚	鉄製品 釘	端部欠損	①(9.7)	②0.6	両端部欠損。断面方形。
156図	2～4 棚32	51区V-14	鉄製品 鉄鍋	耳部片	①13.0		吊耳鉄鍋。耳部は口縁部に取りつく。耳部は隅丸長方形。劣化顕著で詳細は不明。

I区遺構外 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	図載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
162R	I区34	52区B-16	鉄製品 火打金	端部欠損	①2.3 ②9.7 ③0.7	平面形状は山形。対部は使用による凹みが認められる。	
162R	I区35		銅製品 鉋	ほぼ完形	径10.6 ③3.5	胴部中央付近には円孔1ヵ所の耳部がつく。胴部は丸味を持ち、断面中央付近は厚く盛り上がる。脚3ヵ所のうち、2ヵ所が欠損。	

II区7号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	図載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
171R	7建48	7建	銅製品 煙管	一部欠損	①6.4 ②1.6	雁首。胴部太く、胴部と頸部の境には僅かに段差。覆乱による凹みか、吸口、側面中央付近に接合痕跡。	
171R	7建49	7建	銅製品 煙管	端部欠損	①(4.3) ②1.1	吸口。側面中央付近に接合痕跡。	
171R	7建50	7建北	包丁か	対部欠損	①(15.7) ②3.0	対部欠損。柄には中子が入る。口金の痕跡は確認できない。	
171R	7建51	7建北	包丁か	対部片	①(6.7) ②(4.1) ③(0.8)	対部と中子の一部か。欠損が顯著で詳細は不明。	
171R	7建52	7建 2回伊勢北	鉄製品 鎌	欠損70%	①(5.5) ②(12.6) ③(0.5)	中子端部は屈曲。対部の角度が明瞭ではないが、左利き用の鎌か。	
171R	7建53	7建唯付近	鉄製品 釘か	ほぼ完形	①16.3 ②1.0	断面方形。頸部直角に屈曲。端部は尖る。大型の釘のような形状。1建377、7建54に近似。	
171R	7建54	7建	鉄製品 釘か	端部欠損	①16.3 ②0.8	断面方形。頸部直角に屈曲。端部は尖る。大型の釘のような形状。1建377、7建53に近似。	
172R	7建55	7建北	刀	柄欠損	①(47.5)、脚25.9	柄は欠損し、中子が残る。目釘穴2ヵ所。柄は直線で仕上げ。鞘には小柄または許を取りめる場所や、彫形が遺存する。刃は凹形・鋭利はない。	
172R	7建56	7建 2回伊勢北	銅製品 蓋缶	蓋欠損	②19.5 ③23.0	断面方形の蓋缶。胴部に穿たれた孔に注口部を差し込み、折り返して固定。1建402に近似。	
173R	7建57	7建西伊勢北	鉄製品 鉄鍋	取手欠損	口径40.4 ③20.7	吊耳鉄鍋。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は段山形。耳孔は2段、3ヵ所。取手は欠損するも、耳部につく。底部には脚3ヵ所。湯口痕跡や不明瞭。欠損し亀裂が入った箇所、湯境による補修痕跡。	
173R	7建58	7建北	鉄製品 鉄鍋	70%	口径24.6 ③13.0	吊耳鉄鍋。口縁部は有段。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は隅丸長方形。劣化により耳孔は不明瞭。1ヵ所か。底部には脚3ヵ所。湯口痕跡や不明瞭。欠損し亀裂が入った箇所、湯境による補修痕跡。	
173R	7建59	7建北	鉄製品 鉄鍋類	80%	口径16.0 ③10.5	注口を持つ小型の鉄鍋。注口は欠損し詳細は不明。口縁部内面に僅かな段あり。蓋を受けるところか。底部には脚3ヵ所。湯口痕跡不明瞭。	

II区9号石室 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	図載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
176R	9石垣11	9石垣	鉄製品 釘	端部欠損	①7.6 ②0.9	頭部薄く伸ばす。	
176R	9石垣12	9石垣	鉄製品 不詳	不詳	①3.0 ②7.3	平面形状はおおよそ長方形。断面中央付近はやや厚くなる。	

II区3号屋敷跡 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	図載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
177R	3屋敷12	61区N-1	銅製品 煙管	吸口	①6.2 ②0.9	吸口。側面中央付近に接合痕跡。	
177R	3屋敷13	51区N-24	鉄製品 鉄	ほぼ完形	①14.8 ②5.3	U字状に面けた鉄。いわゆる「煎鉄」。	
177R	3屋敷14	7建北	鉄製品 鉄鍋	耳部片	口径(37.7) ③(7.7)	器高の低い吊耳鉄鍋。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は段山形。耳孔は2段、3ヵ所。	

II区トレンチ 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	図載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
183R	II区1トレレ2	II区1トレンチ	鉄製品 不詳	不詳	①2.9 ②6.7 ③0.4	板状の鉄製品。器壁は薄い。欠損顯著で詳細は不明。	

IV区9号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	図載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
199R	9建34	9建上間	銅製品 煙管	火皿欠損	①(4.8) ②1.1	雁首。	
199R	9建35	9建	銅製品 煙管	一部欠損	①(5.4) ②1.0	雁首。胴部上面に接合痕跡。一部離字が遺存。	
199R	9建36	9建	銅製品 煙管	一部欠損	①(4.4) ②1.3	離字と煙管の一部が遺存したものか。	
199R	9建37	9建	銅製品 煙管	一部欠損	①(10.5) ②1.2	吸口。胴部中央付近に段差。一部離字が遺存。	
199R	9建38	9建	銅製品 煙管	端部欠損	①(5.5) ②0.9	吸口。一部離字が遺存。	
199R	9建39	9建	離字か	不詳	①(3.5) ②0.9	煙管の離字の一部と思われる。	
199R	9建40	9建 2回伊勢北	銅製品 水漏	ほぼ完形	①5.2 ②(2.6) ③(1.2)	平面形状長方形の水漏。上部左上には小さな円孔。中央には長方形の孔あり。	
199R	9建41	9建 2回伊勢東	鉄製品 鎌	端部一部欠損	①13.2 ②23.3	端部欠損し、詳細は不明。対部の角度は明らかでないが右利き用か。	
199R	9建42	9建	鉄製品 道具	完形	①32.0 ②4.9 ③1.0	下部は約文字状になり端部は片状に尖る。中央断面は長方形。上部は釘の様に広がり、打痕あり。幅違いは種々のタガをはめる高脚に使用する道具か。2建60に近似。	
199R	9建43	9建1床下	銅製品 蓋	破片	③(1.0)	縁辺に屈曲する形態の蓋か。	
199R	9建44	9建 2回伊勢西	銅製品 蓋	一部欠損	径13.5 ③4.9	やや大型の蓋。縁辺で屈曲し、中心部に向けやや上がる。ドーム状の飾りの上に円形のつまみがつく。	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅×厚×高	
1990E	9建45	9建	銅製品 蓋	完形	径16.3	③3.0	緩やかな山形の蓋。つまみ部分に凹孔を穿つ。ここに八の字状の取手がつく。
2000E	9建47	9建	鉄製品 鉄鍋	底部片	-	-	鉄鍋底部片。
2000E	9建48	9建	鉄製品 鉄鍋	40%	③(19.5)	-	口縁部付近で屈曲し外反。欠損により詳細は不明。
2010E	9建49	9建壺付近	鉄製品 鉄鍋	40%	口径(36.2)	③(18.0)	欠損により詳細は不明。口縁部は外に張り出す。底部には脚1カ所。欠損し亀裂の入った箇所、落後による補修痕跡。
2010E	9建50	9建壺付近	鉄製品 鉄鍋	60%	口径(34.1)	③(15.5)	底部には脚3カ所。湯口痕跡明確。
B区4号屋敷跡下 遺物観察表 (金属製品・道具類)							
図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅×厚×高	
2040E	4屋敷下8	9建 2階が裏	銅製品 不詳	不詳	①9.7	②1.4 ③0.5	平面形状は長方形で袋状。小柄の柄か。
2040E	4屋敷下9	4屋敷跡	鉄製品 不詳	ほぼ完形	①5.1	②16.2 ③1.1	断面および円形。大型のカスガイと思われる。覆乱による歪入か。
B区10号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)							
図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅×厚×高	
2190E	10建175	10建北	銅製品 毛抜き	一部欠損	①(5.8)	②(1.4) ③0.6	U字状に曲げた毛抜き。端部欠損。
2190E	10建176	10建 構場付近	鉄製品 灯火皿	完形	口径9.6	③2.0	底部は丸く、口縁部は断面逆三角形の部り出しを持つ。底部外面には、底に白うような凹形の高まりあり。13建129に近似。
2190E	10建177	10建	鉄製品 不詳	不詳	-	-	断面極めて薄い。変形が著しく器種は不明だが、碗状の形態であったと思われる。
2190E	10建178	10建	銅製品 蓋	完形	径10.4	③2.6	蓋は縁辺で屈曲し、微かな稜を持ち中心部に向け下がる。輪花状の飾りの上に凹形のつまみがつく。薬缶の蓋か。
2190E	10建179	10建 構場付近	鉄製品 鏝	対部片	-	-	大型の鏝。中子端部は屈曲。対部の角度から右利き用の鏝と思われる。10建180と同一か。
2190E	10建180	10建 構場付近	鉄製品 鏝	対部60%	①(12.7)	②(11.7) ③0.3	大型の鏝。10建179と同一か。
2190E	10建181	10建西	鉄製品 不詳	不詳	①11.9	②2.1 ③0.5	欠損顯著で詳細は不明。両面に鉄が打たれたような痕跡あり。
B区5号屋敷跡下 遺物観察表 (金属製品・道具類)							
図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅×厚×高	
2290E	5屋敷下6	5屋敷跡	銅製品 煙管	ほぼ完形	喉首①5.9 ②1.2 吸口①5.9 ②0.9 罐宇①(13.6) ②(0.7)	-	喉首は、胴部上面に接合痕跡。胴部と頸部の境付近には微かに段差。吸口も同様に胴部中央付近に微かな段差あり。罐宇は、差し込み部分がそれがる。
B区11号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)							
図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅×厚×高	
2320E	11建12	11建	銅製品 煙管	一部欠損	①(3.0)	②0.7	喉首。頸部付近で欠損した火皿部分。
2320E	11建13	11建壺付近	銅製品 煙管	喉首	①4.8	②0.8	喉首は、頸部付近に段差。胴部上面に接合痕跡。ここを境に、点描による文様と彫り・確刻による幾何学などの文様を描く。
2320E	11建14	11建	銅製品 蓋	ほぼ完形	径9.9	③(2.0)	蓋は縁辺で屈曲し、微かな稜を持ち中心部に向け下がる。輪花状の飾りの上に凹形のつまみがつく。薬缶の蓋か。
2320E	11建15	11建	銅製品 薬缶	一部欠損	②(15.0)	③10.2	胴部に丸味を持つ薬缶。胴部と注口部の境には、蓋蓋状の凹孔を数カ所穿つ。注口部は直線的。注口端部を上げ、胴部の外面につく。
2330E	11建16	11建	銅製品 毛抜き	ほぼ完形	①6.3	②(1.1) ③(0.5)	U字状に曲げた毛抜き。跡による劣化顯著で詳細は不明。
2330E	11建17	11建	銅製品 火箸か	40%か	①(20.6)	-	欠損顯著で詳細は不明。断面方形で端部が尖る。
2330E	11建18	11建	鏝	柄欠損	①16.4	②3.4 ③0.6	柄は一部遺存し、中子が確認できる。穂先は長く、対部の幅は広い。首と穂先の間に稜があり。対部が薄いつきから、突き裂か。
2330E	11建19	11建	鉄製品 鏝	対部50%	①15.1	③6.2	中子端部は屈曲。対部の角度から右利き用の鏝と思われる。
2330E	11建20	11建	鉄製品 蓋	80%	③2.0	-	緩やかな山形の蓋。つまみ部分に凹孔を穿つ。
2330E	11建21	11建	鉄製品 鉄鍋	70%	口径(40.0)	③22.3	吊耳鉄鍋。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3カ所。底部には脚3カ所。湯口痕跡や不明確。欠損し亀裂の入った箇所、落後による補修痕跡顯著。11建22はこの鉄鍋の取手か。
2340E	11建22	11建	鉄製品 鉄鍋	取手80%	①40.3	②(27.2) ③0.4	鉄鍋取手。断面長方形で、耳部付近はねじれ屈曲し尖る。11建21の取手か。
2340E	11建23	11建	銅製品 鉄鍋	耳部片	①(12.9)	-	吊耳鉄鍋。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取っつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3カ所。
B区6号屋敷跡下 遺物観察表 (金属製品・道具類)							
図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅×厚×高	
2380E	6屋敷1	6屋敷跡	鏝	対部70%	②(12.3)	③(0.6)	鏝の対部。いわゆる「風呂鏝」の対。刃は袋状。鉄製。跡と欠損により詳細は不明。

IV区13号建物 遺物観察表(金属製品・道具類)

図面番号	掲載番号	出土位置	類別	形状	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
						①長さ	②幅×厚・高	
243R	13建78	13建南西	銅製品 煙管	一部欠損	①(3.3) ②(0.5)		煙首、火皿部分には、銅片煙草が詰められたまま遺存。詰められた銅片煙草の大きさは12×5mmほど。銅片煙草の幅は、確認できる範囲で0.37～0.69mm。煙草に火をつけた痕跡はみられない。	
243R	13建79	13建南西	銅製品 煙管	一部欠損	①(3.9) ②(0.7)		煙首。側面中央付近に接合痕跡。	
243R	13建80	13建南西	銅製品 煙管	火皿一部欠損	①(4.6) ②1.2		煙首。側面中央付近に接合痕跡。一部羅字が遺存。	
243R	13建81	13建南西	銅製品 煙管	煙首	①4.2 ②1.1		煙首。胴部と頸部の境に段差。	
243R	13建82	13建南西	銅製品 煙管	煙首	①3.2 ②1.3		煙首。胴部と頸部の境に段差。胴部短く、器壁厚い。外面には螺旋状に溝が彫られる。	
243R	13建83	13建南西	銅製品 煙管	火皿欠損	①(4.1) ②(0.8)		煙首。胴部と頸部の境に段差。火皿欠損。	
243R	13建84	13建南西	銅製品 煙管	火皿欠損	①(4.2) ②(0.9)		煙首。胴部と頸部の境に段差。火皿欠損。一部羅字が遺存。	
243R	13建85	13建南西	銅製品 煙管	端部欠損	①(8.4) ②(1.3)		吸口。胴部中央付近に段差。一部羅字が遺存。	
243R	13建86	13建南西	銅製品 煙管	吸口	①5.9 ②1.4		吸口。胴部中央付近に段差。	
243R	13建87	13建南西	銅製品 煙管	端部欠損	①7.0 ②0.9		吸口。胴部中央付近に段差。一部羅字が遺存。	
243R	13建88	13建南西	銅製品 煙管	吸口	①6.5 ②1.3		吸口。	
243R	13建89	13建南西	銅製品 煙管	吸口	①6.4 ②1.2		吸口。胴部中央付近には僅かに段差。外面には線刻による草文を描く。	
243R	13建90	13建南西	銅製品 煙管	吸口50%	①(2.1) ②1.1		吸口か。	
243R	13建91	13建南西	羅字か	不詳	①(3.8) ②0.8		煙管の羅字の一部と思われる。	
243R	13建92	13建南西	銅製品 煙管	ほぼ完形	煙首①10.1 ②1.5 吸口①11.3 ②1.7		大型の煙管。煙首は胴部太く、外面には螺旋状に溝が彫られる。火皿部分には木質付着。吸口は胴部に胴部太く、螺旋状に溝が彫られる。	
244R	13建93	13建南西	鉄製品 鐙	ほぼ完形	③(8.4) ②(8.9) ③(0.8)		円形の鐙。透かしによる装飾。いわゆる「透かし鐙」。	
244R	13建94	13建南西	鉄製品 鐙	一部欠損	①8.6 ②7.8 ③0.5		輪花状の鐙。透かしによる装飾。いわゆる「透かし鐙」。	
244R	13建95	13建南西	鉄製品 鐙	一部欠損	①8.0 ②8.1 ③(0.7)		輪花状の鐙。透かしによる装飾。いわゆる「透かし鐙」。	
244R	13建96	13建南西	刀	刃部、柄欠損	①10.5、②5.9		刀身と柄の一部が遺存。柄には小柄または斧を取める場所や、葉形の痕跡が残る。鐙は円形、装飾はない。	
244R	13建97	13建南西	鉄製品 不詳	不詳	①8.8 ②2.0 ③0.6		平面形状が長方形の鉄製品。断面長方形で袋状。柄か。	
244R	13建98	13建	包丁	80%	①(29.3) ②7.0		柄は僅かに遺存し、目釘穴のような痕跡あり。柄に中子を差し込み、口金で固定。刃部はおおよそ長方形で、アゴ付で遺存する。端部欠損。	
244R	13建99	13建	包丁か	40%か	①(13.5) ②6.2		欠損顯著で詳細は不明。柄は僅かに遺存。中子は確認できない。口金が一部遺存。包丁と思われる。	
244R	13建100	13建	銅製品 おろし金	完形	①25.2 ②11.9 ③0.2		平面形状台形。おろし面の突起は細かく、内側の断面は丁字状になる。柄の端部は丸く、1/4孔1カ所。柄には布の一部と思われる繊維が付着。	
244R	13建101	13建	鉄製品 火箸	40%か	①16.1 ②1.6		両端部は環状。両端部を繋ぐように輪がつく。	
244R	13建102	13建南西	銅製品 毛抜き	完形	①5.5 ②(1.2) ③0.5		U字状に曲げた毛抜き。端部は屈曲する。	
244R	13建103	13建南西	銅製品 柄杓	柄欠損か	柄8.2 ③0.2		径8cmほどの円錐。欠損箇所柄がつくものと思われる。裏面に、松竹に鶴亀。左側に「藤原光水」。鏡面には布が付着。	
245R	13建104	13建南西	銅製品 杵子	一部欠損	①(40.8) ②9.1		匙部分および杵柄部。柄部は直線的。器壁極めて薄い。匙部分の孔に柄を差し込む。出土状況から、柄は細く長いものと思われる。匙部分裏面に、榊矢しし付着あり。	
245R	13建105	13建南西	鋸	刃部片	①(24.1) ②4.5 ③0.2		鋸身の幅が狭い。片刃鋸。両端部欠損し、詳細は不明。	
245R	13建106	13建	鋸	刃部片	①(10.6) ②3.5 ③0.1		鋸身の幅が狭い。片刃鋸。両端部欠損し、詳細は不明。	
245R	13建107	13建南西	鋸	両端部欠損	①(35.0) ②3.5		鋸身の幅が狭い。片刃鋸。柄が一部遺存。柄には中子が差し込まれる。柄に口金の痕跡か。	
245R	13建108	13建南西	鋸	柄欠損	①(16.8) ②4.3 ③0.7		柄は一部遺存。柄は細く加工され刃部に接合する。穂先はやや長く、刃部の幅は広い。首から穂先はなだらかに広がる。刃部が薄く、突き撃か。	
245R	13建109	13建南西	鋸	柄欠損	①(17.8) ②1.6 ③0.8		柄は一部遺存。柄は細く加工され刃部に接合する。首は短く穂先は長い。刃部の幅は狭く、首と穂先の間に接はない。	
245R	13建110	13建南西	工具	柄欠損	①(4.8) ②15.2		玄帽状の工具。端部は片状に細くなり、もう一方の端部は尖る。目立の道具とも思われる。柄は木製。一部遺存。	
245R	13建111	13建南西	鉄製品 矢床	完形	①(27.7) ②(6.4) ③(3.5)		板状部分は屈曲し、平面形状になる。鋸治遺物もなく鉄滓などの出土品も僅かなことから、鋸治に付く道具ではなく他の用途に使われた道具だとと思われる。鋸に収められていたためか、木質部が付着。	
246R	13建112	13建南西	鉄製品 鎌	刃部片	③0.3		欠損が顯著で詳細は不明。	
246R	13建113	13建	鉄製品 鎌	刃部50%	①(4.4) ②(10.7)		欠損が顯著で詳細は不明。	
246R	13建114	13建南西	鉄製品 鎌	刃部一部欠損	①(5.5) ②(26.3) ③(0.3)		大型の鎌。中子端部は屈曲。刃部の角度から右利き用の鎌と思われる。	
246R	13建115	13建南西	鉈	柄一部欠損	①(31.0) ②5.3		片刃の鉈。刃部先端に突起がつく。中子には目釘穴があると思われ、目釘が遺存。口金あり。	
246R	13建116	13建南西	道具	柄欠損	①(6.5) ②6.1		小型の熊手状の道具。先端部は尖る。	

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他	
					①長さ	②幅		③厚
246E	13建117	13建南西	産口か	柄欠損か	①10.0	②3.0	③(2.6)	銜金状だが大きく、端部は欠損も、くちばし状に尖るように思われる。磨りか。箱に収められていたためか、木質部が付き。
246E	13建118	13建南西	道具	不詳	①(8.1)	②(3.5)		口金状の輪の中央に、中子状の金属を差し込む。欠損箇所で詳細は不明。
246E	13建119	13建	鉄製品 鉄鍋	耳部片	①(9.4)			吊耳鉄鍋。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取りつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3か所。
246E	13建120	13建	鉄製品 鉄鍋	耳部片	①(14.7)			吊耳鉄鍋。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取りつく。耳部は有段山形。耳孔は2段、3か所。一部取手が遺存。
246E	13建121 ①	13建西	鉄製品 鉄鍋	底部片	-			鉄鍋脚部。
246E	13建121 ②	13建西	鉄鍋の補修 金属	破片	-			鉄鍋の欠損箇所に溶接した、補修金属片と思われる。
247E	13建122	13建	鉄製品 鉄鍋か	底部片	-			鉄鍋底部か。
247E	13建123	13建南西	鉄鍋	取手	取手80%	③(0.8)		断面長方形で、耳部付近はむじれ細くなる。
247E	13建124	13建西	鉄製品 鉄鍋	耳部欠損	口径24.0	③11.5		小型の吊耳鉄鍋。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取りつく。耳部は有段山形。異なる大きさの耳孔が2段、3か所。底部には脚3か所。湯口直縁明瞭。欠損し亀裂の入った箇所に、溶接による補修跡跡。
247E	13建125	13建南西	鉄製品 蓋	70%	径(17.5)	③2.9		緩やかな山形の蓋。つまみ部分に円孔を穿つ。
247E	13建126	13建南西	鉄製品 茶釜	40%	口径12.3	③(19.8)		胴部中央張り出し。肩部付近に耳部がつく。欠損により詳細は不明。
248E	13建127	13建南西	鉄製品 茶釜	80%	口径14.5	③20.0		胴部中央張り出し。肩部付近に耳部がつく。耳部は円形。放射状に溝あり。耳孔は1か所か。一部取手が遺存。底部には脚3か所。湯口直縁やや明瞭。
248E	13建128	13建南西	銅製品 蓋	破片	②4.5	③2.7		蓋のつまみ部分と思われる。
248E	13建129	13建南西	銅製品 灯火皿	ほぼ完形	径10.5	③1.9		底部は丸く、口縁部には断面逆三角形の張り出しを持つ。底部外面には、底に沿うような円形の高まりあり。10E176に近似。
248E	13建130	13建南西	銅製品 蓋	ほぼ完形	径3.0	③1.0		帽子状の小型の蓋。13E131の蓋か。
248E	13建131	13建南西	銅製品 灯火具	ほぼ完形	①11.3	③4.9		小型の葉巻注。注口部の端部は皿状になり、上面には接合痕が残る。右側にはし字状の金具が付き。ここに柄を差し込み取手となる。上部には蓋が付くと思われる。内面2か所の突起は蓋を受ける部分か。灯火具であると思われる。
248E	13建132	13建南西	銅製品 鉋鉋	完形	径12.5	③5.0		胴上部付近には円孔1か所の耳がつく。胴部は直線的に立ち上がり、器底はおよそ均一。脚3か所。
249E	13建133	13建南西	銅製品 花筒	一部欠損	底径7.2	③(15.5)		胴部に棒を持ち、口縁に向け開く。底は欠損。花瓶と思われる。
249E	13建134	13建 西か裏付近	銅製品 刀柄	完形	径1.3			胴部磨光。湯口痕不明。
249E	13建135	13建南西	鉄製品 鐙	一部欠損	①(12.3)			八の字状の金具2点には、両端部に円孔あり。2点は踏状につき、両端部の円孔には輪がつく。馬具である鐙の一部と思われる。
249E	13建136	13建南西	銅製品 取手か	不詳	①6.4	②0.6		断面円形。引き出しの取手状。
249E	13建137	13建南西	銅製品 不詳	不詳	①(19.1)	②1.5		細長い筒状。両端部は塞がれていない。左側に楕円形の孔あり。
249E	13建138	13建南西	銅製品 飾り金具	不詳	①(5.6)			板状の金属板を曲げ、平面形状方形の袋状となる。新が打たれる。
249E	13建139	13建南西	鉄製品 不詳	不詳	①(8.3)	②(5.5)		環状の金属製品。同地点からは、遺存状況の悪い同様の金属製品が出土。詳細は不明。
249E	13建140	13建南西	鉄製品 不詳	不詳	①14.7	②13.4	③1.0	断面長方形で、鉤の手状に屈曲。端部欠損。詳細は不明。
249E	13建141	13建南西	鉄製品 不詳	不詳	①12.3	②(8.1)		平らな鉄板状。端部で屈曲する。詳細は不明。
249E	13建142	13建南西	鉄製品 不詳	不詳	①(7.8) ②(3.1)	②(6.4)		細い柱状の鉄製品が、幅広い板状の鉄製品につく。詳細は不明。
249E	13建143	13建南西	鉄製品 不詳	不詳	①(7.2) ②(1.0)	②(2.3)		欠損箇所では詳細は不明。刀子か。
249E	13建144	13建	鉄製品 不詳	不詳	①(10.1) ②(1.8)	②(3.3)		欠損箇所では詳細は不明。刀子か。
249E	13建145	13建南	鉄製品 不詳	不詳	①(4.8) ②(0.6)	②(4.0)		板状の鉄製品。詳細は不明。

IV区14号建物 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
252E	14建9	14建	銅製品 香炉	ほぼ完形	②12.5	③8.1	コの字状の口縁。脚3か所。内面には灰が遺存する。出土状況から、磨光による靨入の可能性あり。
252E	14建10	14建	銅製品 線香差し	完形	口径3.3	③10.6	およそ柱状の線香差し。僅かに線香が入っていたが、出土状況から、磨光による靨入の可能性あり。
252E	14建11	14建	銅製品 煙管	火皿欠損	①(3.5)	②0.9	雁首。胴部と頸部の境に段差。胴部上面に接合痕跡。火皿欠損。
252E	14建12	14建	鉄製品 不詳	不詳	①(7.1)	②(2.0)	欠損箇所では詳細は不明。刀子か。

IV区7号屋敷跡 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	類別 器種	残存状態	計測値 (cm)		成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	
256E	7 掲載2	7 屋敷跡	銅製品 煙管	火皿部分	①(1.0)	②1.7	雁首。頸部で欠損した火皿部分。

Ⅳ区16号墳 遺物観察表 (金属製品・道具類)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 鉄種	残存状態	計測値 (cm)			成形、調整の特徴、その他
					①長さ	②幅	③厚さ	
258図	16番4	16号	鉄製品 鉄筒	耳部片	①(16.8)			片耳鉄筒。口縁端部は外に張り出し、耳部は口縁部に取りつく。耳部は有段円形。耳孔は2段、3カ所か。
258図	16番5	16号	鉄製品 不詳	不詳	①(15.4)	②(12.1)	③(4.5)	平面形状は楕円形。中央には楕状に取手がつく。裏面には2カ所、釘状の突起あり。木質部が遺存。扉の取手部分か。
258図	16番6	16号	鉄製品 不詳	不詳	①(15.3)	②(12.7)	③(6.0)	平面形状は楕円形。中央には楕状に取手がつく。裏面には2カ所、釘状の突起あり。木質部が遺存。扉の取手部分か。

遺物観察表 (銭貨)

Ⅰ区1号建物 遺物観察表 (銭貨)

* () 内の数値は、欠損による残存部最大値か推定値である。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 鉄種	残存状態	計測値 (mm. g)						時期、備考	
					①直径	②内径	③厚さ	④重さ	⑤重さ	⑥重さ		
61図	1建411	1建室内	銭貨	寛永通寶	完形	25.16	25.15	19.73	19.41	1.04 ~ 1.13	3.4	古貨永。1636年。
61図	1建412	1建3床下	銭貨	寛永通寶	完形	25.16	25.10	19.37	19.58	1.08 ~ 1.11	3.0	古貨永。1636年。
61図	1建413	1建室内	銭貨	寛永通寶	完形	25.00	25.00	19.88	19.48	1.15 ~ 1.19	3.7	古貨永。1636年。
61図	1建414	1建上間	銭貨 (寛)永通寶	60%	-	25.56	-	20.00	1.40 ~ 1.44	(2.0)		古貨永。1636年。
61図	1建415	1建上間	銭貨 (寛)永(通)寶	50%	-	-	-	-	(1.33 ~ 1.36)	(1.1)		古貨永か。
61図	1建416	1建室内	銭貨	寛永通寶	完形	25.07	25.27	19.94	19.87	1.16 ~ 1.18	3.5	新貨永。背面上部に「文」1668年。
61図	1建417	1建3床下	銭貨	寛永通寶	完形	25.44	25.48	20.32	20.25	1.01 ~ 1.15	3.2	新貨永。背面上部に「文」1668年。
61図	1建418	1建3床下	銭貨	寛永通寶	完形	25.12	25.11	-	19.74	1.16 ~ 1.20	3.2	新貨永。背面上部に「文」1668年。
61図	1建419	1建室内	銭貨	寛永通寶	完形	25.10	25.11	19.86	19.81	1.21 ~ 1.37	3.9	新貨永。背面上部に「文」1668年。
61図	1建420	1建室内	銭貨	寛永通寶	完形	25.43	25.43	19.94	20.04	1.07 ~ 1.09	3.2	新貨永。背面上部に「文」1668年。
61図	1建421	1建4床下	銭貨	寛永通寶	70%	-	25.38	-	19.72	(1.03 ~ 1.04)	(2.2)	新貨永。背面上部に「文」1668年。
61図	1建422	1建9床下	銭貨	寛永通寶	一部欠損	23.29	23.32	18.69	18.62	1.13 ~ 1.26	(1.8)	新貨永。3期。
61図	1建423	1建	銭貨	寛永通寶	完形	24.69	24.80	19.23	19.16	1.27 ~ 1.31	2.3	新貨永。3期。
62図	1建424	1建3床下	銭貨	寛永通寶	完形	23.16	23.18	18.19	18.44	1.03 ~ 1.14	2.8	新貨永。3期。
62図	1建425	1建3床下	銭貨	寛永通寶	完形	22.76	22.73	18.49	18.35	1.20 ~ 1.22	3.1	新貨永。3期。
62図	1建426	1建廊付近	銭貨	寛永通寶	完形	22.82	22.77	18.65	18.61	0.70 ~ 0.77	1.7	新貨永。3期。摩滅。
62図	1建427	1建	銭貨	寛永通寶	一部欠損	-	-	-	18.66	1.30 ~ 1.32	(1.5)	新貨永。3期。劣化。
62図	1建428	1建馬屋南桶	銭貨	寛永通寶	完形	22.78	22.67	17.37	16.94	1.03 ~ 1.17	1.8	新貨永。背面上部に「文」1668年。劣化。
62図	1建429	1建5床下	銭貨	寛永通寶	完形	23.06	23.20	18.85	18.68	0.95 ~ 1.03	1.7	新貨永。3期。劣化。
62図	1建430	1建8床	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	21.36	21.60	18.68	18.38	1.06 ~ 1.10	1.4	新貨永。3期か。劣化。
62図	1建431	1建馬屋南桶	銭貨	寛永通寶	完形	28.19	28.22	20.93	20.66	1.13 ~ 1.25	4.0	四文銭。11説。
62図	1建432	1建	銭貨	寛永通寶	完形	27.22	27.14	20.17	19.70	1.26 ~ 1.32	3.0	四文銭。21説か。劣化。
62図	1建433	1建	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	29.67	-	-	21.01	-	(3.7)	木質付着。四文銭か。
62図	1建434	1建	銭貨	寛永通寶	90%	-	-	-	-	-	(1.8)	新貨永。背面上部に「文」1668年。確認できるだけで13カ所の孔を穿つ。
62図	1建435	1建	銭貨	寛永通寶	80%	(22.12)	(22.31)	17.23	-	-	-	新貨永。劣化。
62図	1建436	1建	金属製品	煙管	-	-	-	-	-	-	-	煙管火皿部分を扁平にした、いわゆる「雁首銭」。
62図	1建437	1建2四角裏	金属製品	煙管	-	-	-	-	-	-	-	煙管火皿部分を扁平にした、いわゆる「雁首銭」。

Ⅰ区2号建物

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 鉄種	残存状態	計測値 (mm. g)						時期、備考	
					①直径	②内径	③厚さ	④重さ	⑤重さ	⑥重さ		
72図	2建61	2建	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	23.70	23.49	17.88	18.07	0.99 ~ 1.04	2.7	新貨永。3期。

Ⅰ区3号建物

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 鉄種	残存状態	計測値 (mm. g)						時期、備考	
					①直径	②内径	③厚さ	④重さ	⑤重さ	⑥重さ		
74図	3建2	3建	銭貨	寛永通寶	80%	27.64	-	20.90	20.82	1.22 ~ 1.40	(3.2)	四文銭。11説。劣化。

Ⅰ区4号溝

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 鉄種	残存状態	計測値 (mm. g)						時期、備考
					①直径	②内径	③厚さ	④重さ	⑤重さ	⑥重さ	
101図	4溝13	52区F-6	銭貨	ほぼ完形	18.89	18.97	-	-	1.42 ~ 1.48	2.4	五十銭。昭和二十三年。劣化。

遺物観察表

1区1号屋敷跡下 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	図載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考			
					①定直径	③④内輪径	⑤厚さ	⑥重さ				
116図	1層敷下 34	52区 E-5	銭貨	洪□口貨	40%	-	-	-	(1.55~1.69)	(1.3)	洪武通寶(明1368年)か。	
116図	1層敷下 35	1建9床 下地山中	銭貨	寛(永)通寶	40%	-	-	-	(1.01~1.03)	(0.7)	新寛永。3期か。	
1区5号建物 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	図載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考			
					①定直径	③④内輪径	⑤厚さ	⑥重さ				
141図	5建202	5建 3床北	銭貨	寛永通寶	完形	23.43	23.33	18.64	18.62	1.45~1.51	4.1	古寛永。1636年。
141図	5建203	5建 3床北	銭貨	寛永通寶	一部欠損	24.00	23.88	19.14	19.09	0.87~1.01	(2.3)	古寛永。1636年。摩滅顯著。
141図	5建204	5建 3床北	銭貨	寛永通寶	完形	22.97	23.03	18.66	18.63	0.97~1.02	2.8	新寛永。3期。
141図	5建205	5建 3床北	銭貨	寛永通寶	一部欠損	23.62	23.55	18.80	18.78	1.36~1.39	(3.6)	新寛永。3期。
141図	5建206	5建 4床上	銭貨	寛永通寶	完形	21.31	21.23	18.16	17.69	0.74~0.83	1.2	新寛永。3期。
141図	5建207	5建 3床北	銭貨	寛永通寶	完形	21.62	21.64	17.87	17.88	1.18~1.20	2.0	新寛永。3期。
141図	5建208	5建 3床北	銭貨	寛永通寶	完形	22.26	22.09	16.87	16.75	1.00~1.05	2.3	新寛永。3期。背面上部に「元」。
141図	5建209	5建 3床北	銭貨	寛永通寶	完形	28.23	28.25	20.98	20.95	1.08~1.16	4.4	四文銭。11銭。
141図	5建210	52KD-10	銭貨	寛永通寶	完形	28.23	28.22	20.93	20.59	1.18~1.29	4.2	四文銭。11銭。
141図	5建211	5建 4床上	銭貨	二朱銀	完形	25.77	15.40	-	-	2.95~2.99	10.0	明和南錠二朱銀。1772年。裏面に「定」と小さな刻印。上下左右の側面にも刻印あり。
141図	5建212	5建 4床上	銭貨	二朱銀	完形	26.28	15.63	-	-	2.94~3.05	10.2	明和南錠二朱銀。1772年。裏面に「定」の刻印。上下左右の側面にも刻印あり。
141図	5建213	5建 4床上	銭貨	二朱銀	完形	25.74	15.18	-	-	2.91~3.14	10.2	明和南錠二朱銀。1772年。裏面に「定」の刻印。上下左右の側面にも刻印あり。
141図	5建214	5建 4床上	銭貨	二朱銀	完形	27.70	16.74	-	-	2.64~2.74	10.1	明和南錠二朱銀。1772年。裏面に「定」の刻印。上下左右の側面にも刻印あり。
142図	5建215	5建 4床上	金属製品		90%	65.08	(35.26)	-	-	(0.47~0.65)	(6.2)	小判を模した金属製品。いわゆる「あて小判」。
142図	5建216	5建 4床上	金属製品		80%	(63.21)	(35.28)	-	-	(0.66~0.70)	(7.2)	小判を模した金属製品。いわゆる「あて小判」。
1区5号畑 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	図載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考			
					①定直径	③④内輪径	⑤厚さ	⑥重さ				
149図	5畑2	5畑	銭貨	寛永通寶	完形	22.62	22.62	17.21	17.11	1.03~1.08	2.1	新寛永。3期。
1区2号溝 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	図載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考			
					①定直径	③④内輪径	⑤厚さ	⑥重さ				
159図	2溝1	2溝東	銭貨	寛永□口	40%	-	-	-	(1.35~1.42)	(0.9)	寛永元寶(北宋1068年)か。	
159図	2溝2	2溝東	銭貨	(寛)永通寶	60%	-	23.87	-	18.26	(1.09~1.19)	(1.8)	新寛永。
159図	2溝3	2溝東	銭貨	文久元宝	完形	26.94	26.24	21.17	20.94	1.30~1.48	3.0	四文銭。11銭。略定。
159図	2溝4	2溝東	銭貨		完形	23.13	23.12	-	-	1.15~1.17	3.5	一銭。昭和十年。
1区遺構外 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	図載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考			
					①定直径	③④内輪径	⑤厚さ	⑥重さ				
162図	1区36		銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	22.48	22.38	17.55	17.62	0.97~1.02	2.0	新寛永。
162図	1区37		銭貨	寛永通寶	完形	23.08	23.15	18.28	18.11	1.06~1.10	2.2	新寛永。3期。
162図	1区38		銭貨	寛永通寶	80%	-	24.02	-	19.26	0.98~1.00	(1.9)	新寛永。3期。
目区7号建物 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	図載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考			
					①定直径	③④内輪径	⑤厚さ	⑥重さ				
173図	7建60	7建	銭貨	寛永通寶	90%	23.77	23.97	19.15	19.11	0.91~1.00	(1.6)	古寛永。1636年。劣化。
173図	7建61	7建	銭貨	寛永通寶	完形	24.43	24.42	20.35	19.92	1.08~1.11	2.4	古寛永。1636年。
173図	7建62	7建	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	24.62	24.48	18.86	18.59	1.27~1.38	2.4	古寛永。1636年。
174図	7建63	7建	銭貨	寛永通寶	完形	25.54	25.52	19.67	19.76	1.16~1.28	3.0	新寛永。3期。
174図	7建64	7建北	銭貨	寛永通寶	完形	25.40	25.38	19.94	19.82	1.15~1.18	3.6	新寛永。背面上部に「文」。 1668年。
174図	7建65	51KO-24	銭貨	寛永通寶	完形	23.40	23.63	-	17.66	(1.10~1.23)	(2.1)	新寛永。3期。背面上部に「足」か。
174図	7建66	7建	銭貨	寛永通寶	完形	23.41	23.49	18.63	18.75	1.10~1.14	2.5	新寛永。3期。
174図	7建67	7建東	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	25.36	25.24	19.32	19.49	1.48~1.54	3.0	新寛永。3期。
174図	7建68	7建東	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	23.35	23.37	18.04	17.68	0.85~0.87	2.0	新寛永。3期。
174図	7建69	7建	銭貨	寛永通寶	90%	-	-	18.82	18.58	1.06~1.21	(1.3)	新寛永。3期。劣化。
174図	7建70	7建東	銭貨	寛永通寶	60%	21.39	-	16.78	-	(1.25~1.29)	(1.3)	新寛永。3期。
174図	7建71	7建	銭貨	寛永通寶	90%	22.98	-	-	-	(1.12~1.19)	(1.8)	新寛永。3期か。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)						時期、備考	
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ	⑦	⑧		
174図	7建72	7建東	銭貨	寛永通寶	完形	28.26	28.21	20.93	20.89	1.33~1.38	5.1	四文銭。11説。
174図	7建73	7建東	銭貨	寛永通寶	完形	27.67	27.69	19.82	19.91	1.31~1.35	4.9	四文銭。21説。
174図	7建74	7建東	銭貨	文久永寶	完形	27.51	27.43	19.59	19.46	1.15~1.23	3.2	四文銭。11説。
174図	7建75	51KO-24	銭貨	-	-	-	-	-	-	-	-	64.9 寛永通寶等、およそ25枚を数える。銭類か。
174図	7建76	7建北	銭貨	ほぼ完形	23.12	23.09	-	-	-	1.14~1.16	3.4	一銭。劣化。
B区3号屋敷跡下 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)						時期、備考	
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ	⑦	⑧		
181図	3屋敷下2		銭貨	寛永通寶	完形	23.22	23.15	18.37	18.46	1.40~1.49	2.5	新寛永。3期。
B区トレンチ 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)						時期、備考	
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ	⑦	⑧		
183図	B区3トレンチ	B区3トレンチ	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	23.75	23.68	19.50	19.51	1.13~1.17	2.6	新寛永。3期か。
183図	B区15トレンチ	B区15トレンチ	銭貨	寛永通寶	完形	22.73	22.78	17.79	17.68	1.09~1.26	2.2	新寛永。3期。
B区道橋外 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)						時期、備考	
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ	⑦	⑧		
183図	B区9		銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	23.72	23.92	19.39	19.28	1.12~1.24	2.6	新寛永。背面上部に文字あり。
B区5号土坑 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)						時期、備考	
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ	⑦	⑧		
188図	59区1坑1	59区1土坑	銭貨	熙寧元寶	ほぼ完形	24.00	24.35	-	-	-	2.1	北宋108年。厚減顯著。
188図	59区1坑2	59区1土坑	銭貨	永樂通寶	ほぼ完形	24.52	24.95	20.93	20.77	1.42~1.44	(2.6)	明1408年。
188図	59区1坑3	59区1土坑	銭貨	永樂通寶	8割	-	25.69	-	20.35	1.12~1.23	(2.8)	明1408年。
189図	60区2坑1	60区2土坑	銭貨	天福通寶	ほぼ完形	24.18	24.32	19.62	19.56	1.11~1.16	2.6	北宋1017年。
189図	60区2坑2	60区2土坑	銭貨	元豊通寶か	ほぼ完形	24.41	24.56	19.66	19.84	1.37~1.51	1.9	北宋1078年。厚減顯著。
189図	60区2坑3	60区2土坑	銭貨	不詳	ほぼ完形	24.68	24.41	-	-	1.44~1.63	1.4	厚減顯著。
189図	60区2坑4	60区2土坑	銭貨	不詳	9割	-	24.29	-	19.89	(1.27~1.29)	(1.7)	劣化顯著。
189図	60区2坑5	60区2土坑	銭貨	永樂通寶	ほぼ完形	24.93	24.81	20.71	20.47	1.63~1.68	(4.1)	明1408年。
189図	60区2坑6	60区2土坑	銭貨	不詳	5割	-	-	-	-	-	(1.1)	劣化顯著。
189図	60区2坑7	60区2土坑	銭貨	-	-	-	-	-	-	-	8.1	永樂通寶(明1408年)ほか、計3枚が焼熟して堆着。
B区9号建物 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)						時期、備考	
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ	⑦	⑧		
202図	9建51	9建	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	24.30	24.49	19.46	18.87	1.23~1.79	(1.8)	新寛永。3期か。
202図	9建52	9建北外	銭貨 寛永(通)寶	6割	-	-	-	-	-	(1.21~1.28)	(0.9)	古寛永か。劣化顯著。
202図	9建53	9建	銭貨	寛永通寶	完形	25.30	25.35	19.89	19.41	1.28~1.36	2.6	新寛永。背面上部に「文」上1668年。
202図	9建54	9建東	銭貨	寛永通寶	完形	25.23	25.26	19.73	19.70	1.14~1.24	2.8	新寛永。背面上部に「文」上1668年。
202図	9建55	9建1回廊裏	銭貨	寛永通寶	完形	23.30	23.33	18.07	18.18	0.89~0.93	2.3	新寛永。3期。
202図	9建56	9建3回廊裏	銭貨	寛永通寶	ほぼ完形	24.87	25.14	20.00	19.82	1.11~1.12	2.3	厚減顯著。
202図	9建57	9建1回廊裏	銭貨	寛永通寶か	完形	23.92	23.94	19.12	18.69	1.35~1.44	2.2	厚減顯著。
202図	9建58	9建2回廊裏東	銭貨	不詳	ほぼ完形	24.98	25.15	-	-	(1.73~1.99)	(2.5)	判読困難。「寛永通寶」か、劣化顯著。
202図	9建59	9建2床	銭貨	不詳	ほぼ完形	25.90	25.51	21.01	19.78	1.37~1.56	2.8	判読困難。「寛永通寶」か。
202図	9建60	9建	銭貨	不詳	9割	(24.44)	(25.92)	-	-	-	(1.3)	劣化顯著。
B区10号建物 遺物観察表 (銭貨)												
図版番号	掲載番号	出土位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)						時期、備考	
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ	⑦	⑧		
220図	10建182	10建	銭貨	寛永通寶	完形	23.77	23.87	19.95	19.60	0.97~1.08	2.6	新寛永。3期。
220図	10建183	10建	銭貨	寛永通寶	完形	23.20	23.21	18.90	18.83	0.80~0.84	2.0	新寛永。3期。
220図	10建184	10建	銭貨	寛永通寶	完形	21.92	22.02	18.25	18.35	0.91~0.95	1.9	新寛永。3期。

遺物観察表

国取番号	周載番号	出上位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考		
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ			
220R	10建185	10建	銭貨 寛永通寶	完形	24.57	24.55	19.96	19.70	0.96 ~ 0.99	2.3	新貨永、3期。
220R	10建186	10建	銭貨 寛永通寶	完形	22.94	22.91	18.42	18.31	1.05 ~ 1.11	2.6	新貨永、3期。
220R	10建187	10建西	銭貨 寛永通寶	完形	28.15	27.98	20.86	20.79	0.99 ~ 1.02	3.2	西文銭、11號。
220R	10建188	10建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	(27.94)	28.34	20.70	20.70	1.10 ~ 1.14	(3.6)	西文銭、11號。
220R	10建189	10建	銭貨 寛永通寶	90%	28.18	28.21	20.64	20.54	1.13 ~ 1.16	(4.0)	西文銭、11號。1カ所孔を穿つ。
N区5号屋敷跡 1号 遺物観察表 (銭貨)											
国取番号	周載番号	出上位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考		
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ			
227R	5号敷 1号1	5号敷跡 1号	銭貨 寛永通寶 (寶)	60%	25.37	-	20.12	-	(1.51 ~ 1.79)	(2.0)	新貨永か。
227R	5号敷 1号2	5号敷跡 1号	銭貨 (寶) 永通寶	70%	(28.47)	-	21.14	-	(1.45 ~ 1.66)	(2.1)	西文銭。劣化顕著。
N区5号屋敷跡下 遺物観察表 (銭貨)											
国取番号	周載番号	出上位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考		
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ			
229R	5号敷下 5		銭貨 寛永通寶	完形	23.21	23.22	17.37	17.24	0.83 ~ 0.88	2.3	新貨永、3期。
N区11号建物 遺物観察表 (銭貨)											
国取番号	周載番号	出上位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考		
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ			
234R	11建24	11建	銭貨 不詳	80%	25.90	25.53	-	-	-	(2.2)	劣化顕著。
N区13号建物 遺物観察表 (銭貨)											
国取番号	周載番号	出上位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考		
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ			
249R	13建146	13建 四ツ栗東	銭貨 寛永通寶	90%	22.56	22.97	18.67	18.80	1.23 ~ 1.51	(1.8)	新貨永、3期か。
249R	13建147	13建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	23.61	23.46	18.60	18.43	1.21 ~ 1.35	2.3	新貨永、3期。
249R	13建148	13建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	25.71	25.75	20.12	20.33	1.50 ~ 1.56	3.1	新貨永。背面上部に「文」。 1668年。
250R	13建149	13建	銭貨	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶等、およそ4枚を数える。
250R	13建150	13建	銭貨	-	-	-	-	-	-	-	4枚。
250R	13建151	13建	銭貨	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶等、およそ36枚を数える。銭割か。
250R	13建152	13建	銭貨	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶等、およそ40枚を数える。銭割か。
250R	13建153	13建	金属製品 煙管	-	-	-	-	-	-	-	煙管火皿部分を扁平にした、 いわゆる「雁首銭」。
250R	13建154	13建東	銭貨	ほぼ完形	15.94	15.99	-	-	1.09 ~ 1.76	0.6	一銭。
N区14号建物 遺物観察表 (銭貨)											
国取番号	周載番号	出上位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考		
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ			
252R	14建13	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	24.74	24.64	19.51	19.61	1.03 ~ 1.17	2.1	古貨永、1636年。
252R	14建14	14建	銭貨 寛永通寶	完形	24.32	24.95	19.69	19.69	1.14 ~ 1.21	2.5	古貨永、1636年。
252R	14建15	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	24.47	24.33	18.89	18.88	1.22 ~ 1.25	2.6	古貨永、1636年。
252R	14建16	14建	銭貨 寛永通寶	完形	25.00	24.71	19.76	19.95	1.42 ~ 1.50	3.2	古貨永、1636年。
252R	14建17	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	25.50	25.07	19.96	19.71	1.62 ~ 1.80	1.2	古貨永、1636年。摩滅顕著。
252R	14建18	14建	銭貨 寛永通寶	完形	23.47	23.62	19.10	18.74	1.32 ~ 1.40	3.0	新貨永、3期。
252R	14建19	14建	銭貨 寛永通寶	完形	23.96	23.91	19.81	19.45	1.14 ~ 1.19	2.2	新貨永、3期。
253R	14建20	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	22.82	22.94	18.27	18.02	1.14 ~ 1.22	2.8	新貨永、3期。
253R	14建21	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	25.51	25.41	19.39	19.32	1.02 ~ 1.16	2.8	新貨永。背面上部に文字あり。
253R	14建22	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	23.40	23.30	18.93	19.61	0.94 ~ 1.00	2.1	新貨永、3期。
253R	14建23	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	23.73	23.81	18.56	18.46	1.19 ~ 1.28	2.6	新貨永、3期。摩滅顕著。
253R	14建24	14建	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	23.21	23.13	18.86	18.58	1.24 ~ 1.41	2.3	新貨永、3期。
253R	14建25	14建	銭貨 寛永通寶	完形	25.69	26.00	20.35	19.99	1.12 ~ 1.22	2.6	新貨永、3期。
253R	14建26	14建	銭貨 寛永通寶	完形	23.09	22.99	19.28	19.55	0.97 ~ 1.08	1.9	新貨永、3期。
253R	14建27	14建	銭貨 寛永通寶	90%	24.11	(24.13)	18.72	18.45	(0.97 ~ 1.13)	(1.9)	新貨永、3期。1カ所孔を穿つ。
253R	14建28	14建	銭貨 寛永通寶	80%	23.48	(22.89)	18.04	-	(1.03 ~ 1.13)	(1.8)	新貨永、3期。
253R	14建29	14建	銭貨 寛永通寶	90%	(22.76)	(22.38)	17.35	17.10	1.28 ~ 1.34	(2.1)	新貨永、3期。背面上部に「元」。
253R	14建30	14建	銭貨 寛永通寶	90%	28.18	28.88	-	-	(1.12 ~ 1.17)	(3.3)	西文銭、11號。
N区5号道 遺物観察表 (銭貨)											
国取番号	周載番号	出上位置	種別 銭種	残存状態	計測値 (mm, g)				時期、備考		
					①直径	③内輪径	⑤厚さ	⑥重さ			
256R	5道2	5道	銭貨 寛永通寶	ほぼ完形	(30.23)	(29.72)	-	-	(3.45 ~ 4.17)	(6.1)	銭銭。割が顕著で、文字の判 読困難。

遺物観察表(石製品・骨角器・硝子製品)

区1号建物 遺物観察表(石製品・骨角器・硝子製品)

※()内の数値は、欠損による残存部最大値が推定値である。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
62回	1建438	1建3床下	砥石	ほぼ完形	①16.0 ④226.0	②3.2	③2.7	砥石	1面を土に使用し、薄くなる。使用面、欠損部以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に「㄂」「ㄥ」(カネケチ)、「太部」の刻書。
62回	1建439	1建馬屋南橋	砥石	ほぼ完形	①16.5 ④133.0	②2.9	③2.0	砥石	1面を土に使用し、かなり薄くなる。使用面、欠損部以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に「㄂」「ㄥ」(カネケチ)、「市助」の刻書。
62回	1建440	1建3床西大引(1建75)	砥石	完形	①14.0 ④283.0	②2.7	③3.8	砥石	幅の狭い側の1面を使用。使用度は軽微である。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に「㄂」「ㄥ」(カネケチ)、「市」の刻書。
62回	1建441	1建馬屋南橋	砥石	50%	①(8.0) ④(142.0)	②3.3	③3.1	砥石	1面を土に使用。使用面、欠損部以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に「仙」と刻書。
63回	1建442	1建馬屋西	砥石	完形	①13.5 ④285.0	②2.8	③4.5	砥石	幅の狭い側の1面を使用。使用度は軽微である。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に「八(ヤマ)」の刻書。
63回	1建443	1建9床	砥石	80%	①(11.7) ④(30.9)	②3.4 ④(74.0)		砥石	1面を土に使用し、全体的にかなり薄くなる。使用面、欠損部以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。
63回	1建444	1建3床下	砥石	60%	①(8.7) ④(56.0)	②2.4	③1.6	砥石	1面を使用し、かなり薄くなる。使用面、欠損部以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に刻書。
63回	1建445	1建9床	砥石	60%	①(9.0) ④82.0	②3.2	③2.0	砥石	1面を土に使用し、かなり薄くなる。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。
63回	1建446	1建5床下	石製品	完形	①2.1 ④(4.4)	②2.0	③0.5	粘板岩	円形の石製品。黒色扁平であり、碇石か。
63回	1建447	1建2施設	石製品	一部欠損	①(6.6) ④(47.0)	②5.5	③3.7	軽石(安山岩質)	中央に貫通する円孔を穿つ。欠損部には、円孔の痕跡あり。1建2施設(風呂)より出土しており、ここで使用された軽石製品と思われる。
63回	1建448	1建7床上台下	石製品 ヒツ跡	40%	①(13.4) ④(9.0)	②24.7 ④(2500.0)		安山岩	ヒツ跡。内面は内壁を中心にススが付着。石面を大引下に据えた靴石。
64回	1建450 ①	1建土間	石臼 上臼	完形	③36.2 ④(31500.0)	②16.6		安山岩	粉むき形。上臼は6分画。供給口、ものくぼり、引手穴が良好に残る。供給口側面には横長方形の孔あり。下臼は6分画。軸穴には軸棒が遺存する。使用は比較的軽微で、目は良好に残り偏減りも確認できない。
63回	1建450 ②		石臼 下臼	完形	③36.2 ④(37900.0)	②17.3		安山岩	
65回	1建451	1建1施設	石臼 上臼	ほぼ完形	③33.2 ④(19600.0)	②12.1		安山岩	粉むき形。7分画。供給口、ものくぼり、引手穴が良好に遺存する。磨り面は僅かに欠損。溝はややく、偏減りは確認できない。
66回	1建452	1建	石臼 下臼	完形	③34.7 ④(23600.0)	②12.5		安山岩	粉むき形。6分画。軸穴には軸棒が遺存する。底部に2カ所、方形の欠欠あり。溝は深く、太い。磨り面、周縁部ほど平滑。偏減りは確認できない。

区2号建物 遺物観察表(石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
72回	2建62	2建4桶	砥石	60%	①(9.7) ④(110.0)	②3.3	③1.9	砥石	1面を使用し、かなり薄くなる。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に「㄂」「ㄥ」(カネケチ)と刻書。
-	2建63	2建	靱帯	-	-	-	-	-	二ホンヅカ角。切断痕跡あり。詳細は第4章第4節7参照。
-	2建64	2建2桶	靱帯	-	-	-	-	-	二ホンヅカ角蓋付。切断痕跡あり。詳細は第4章第4節7参照。
-	2建65	2建9桶	靱帯	-	-	-	-	-	イヌ歯蓋付・四股付。詳細は第4章第4節7参照。

区3号建物 遺物観察表(石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
74回	3建3	3建	石製品 ヒツ跡	60%	①(16.2) ④(3900.0)	②26	③8.7	粗粒輝石 安山岩	ヒツ跡。内面は全面にススが付着。空気の流れを確保するための溝がおよそ十字に切られる。

区8号建物 遺物観察表(石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
96回	8建5	8建	石製品 ヒツ跡	30%	①(16.3) ④(37.4)	②(16.3) ④(950.0)		安山岩	ヒツ跡か。ススの付着は確認できない。

区4号溝遺物観察表(石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
101回	4溝14	4溝	砥石	50%	①(6.3) ④(42.0)	②3.1	③1.1	砥石	1面を土に使用し、かなり薄くなる。使用面には約2mmの溝2条、使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。

区1号屋敷跡 遺物観察表(石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値(cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
111回	1屋敷60	1屋敷跡	砥石	40%	①(5.2) ④(29.0)	③3.7	③0.6	粘板岩	1面を土に使用し、全体的にかなり薄くなる。使用面の一部に散発の短い溝あり。

遺物観察表

図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
111図	1 屋敷61	1 屋敷跡	硯	50%	①10.0 ④92.0	②6.4	③1.3	粘板岩	陸部には使用のためのみあり。欠損が顕著で、使用状況の詳細は不明。裏面には「川原部」(三年(年号か)川)などの刻痕、左側面には「般」と刻字。海及び陸部にも木炭灰の線刻あり。
112図	1 屋敷62 ①	1 建北	石臼 上臼	完形	①34.8 ④27000.0	②15.0		粗粒輝石 安山岩	粉ひき形。上臼は6分画。供給口、ものくぼり、引手穴が良好に残る。供給口側面には逆三角形の欠込あり。下臼は6分画。粗粒輝石と適合する。使用は比較的軽微で、目目は良好に残り偏減りも確認できない。
111図	1 屋敷62 ②	1 建北	石臼 下臼	完形	①34.8 ④31000.0	②15.5		粗粒輝石 安山岩	
1区1号屋敷跡下 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)									
図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
116図	1 屋敷下 36	トレンチ内	砥石	40%	①(6.2) ④(53.0)	②3.9	③1.1	砥石	2面を主として使用し、全体的にかなり薄くなる。使用面以外には、調整時の礫面状の削り痕跡を残す。
116図	1 屋敷下 37	1 建9床下 地山中	骨角器	完形	①7.6 ④13.7	②2.7	③1.5	-	ニホンジカの角の先端部。端部に5mmほどの円孔を穿つ。中央部には鋭い痕跡が。詳細は第4章第4節7参照。
116図	1 屋敷下 38	1 建9床下 地山中	硝子玉	完形	①0.45 ④0.35	②0.3	③0.2	-	水色の硝子玉。形はやや歪な円形で気泡を多く含む。中央に貫通する円孔1カ所。
1区4号石垣 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)									
図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
118図	4 石垣6	4 石垣	石臼 上臼	30%	①- ④(1710.0)	②9.7		安山岩	粉ひき形。引手穴の一部が残存する。欠損顕著で、詳細は不明。上面にススが附着しており、ヒズ跡として転用された可能性も考えられる。
-	4 石垣7	4 石垣	押笥	-	-	-	-	-	ニホンジカの骨片。詳細は第4章第4節7参照。
1区5号建物 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)									
図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
142図	5 建217	5 建北側	砥石	50%	①(5.2) ④(32.0)	②2.6	③1.4	砥石	2面を使用し、かなり薄くなる。使用面以外には、調整時の礫面状の削り痕跡を残す。
142図	5 建218	5 建1床上	砥石	完形	①13.3 ④157.0	②2.8	③2.5	砥石	1面を主として使用。使用面以外には、調整時の礫面状の削り痕跡を残す。
142図	5 建219	5 建1床下	石製品	完形	①22.2 ④111.5	②26.7	③45600.0	安山岩	ヒズ跡。成形は粗雑。中央部に方形の台を作り出す。凹部全体にスガ付着。
143図	5 建220	5 建2床上	石臼 上臼	ほぼ完形	①33.0 ④15200.0	②11.9		安山岩	粉ひき形。6分画。供給口、ものくぼり、引手穴が良好に残る。溝はやや太く、偏減りは確認できない。磨り面、凹縁部はほぼ平滑。加工痕跡が残る。
142図	5 建221	5 建1床下	骨角器	完形	①4.9 ④15.4	②1.25	③1.0	-	ニホンジカの角の先端部。切断したのみで顕著な加工はみられない。詳細は第4章第4節7参照。
1区3号溝 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)									
図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
150図	3 溝1	3 溝	石臼 上臼	40%	①- ④(6300.0)	②15.1		安山岩	粉ひき形。6分画か。欠損顕著で、詳細は不明。供給口の一部が残存する。
1区2～4号畑 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)									
図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
156図	2～4畑 33	2～4畑	硯か	破片	①(5.1) ④(44.0)	②3.6	③2.5	砥石	凹み2カ所にあり、顕著。硯の転用とも思われるが、欠損が著しく判断としない。
156図	2～4畑 34	2～4畑	石製品	完形	①4.6 ④12.0	②3.2	③0.3	粘板岩	凹辺部を打ちきき、円形に成形。
156図	2～4畑 35	2～4畑	砥石	破片	①(4.1) ④(11.0)	②(3.0)	③(22.0)	砥石	欠損が著しく、使用状況は判断としない。使用面の一部に細かい溝を複数条残す。
1区1号被熱岩 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)									
図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
159図	被熱岩1	1 被熱岩	石臼 上臼	一部欠損	①28.0 ④(8500.0)	②13.2		粗粒輝石 安山岩	粉ひき形。6分画。引き手穴や磨り面の一部欠損。使用により偏減りし、薄くなった磨り面は、磨耗によるためか目が見え減している。分画不明。
Ⅱ区7号建物 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)									
図版番号	周載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
174図	7 建77	7 建	砥石	一部欠損	①(5.5) ④(16.0)	②2.4	③1.0	砥石	1面を主として使用し、かなり薄くなる。使用面以外には、調整時の礫面状の削り痕跡を残す。
174図	7 建78	7 建馬屋西	砥石	ほぼ完形	①14.2 ④(114.0)	②3.0	③1.8	砥石	1面を主として使用し、薄くなる。使用面以外には、調整時の礫面状の削り痕跡を残す。

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
174図	7建79	7建回廊 付近	砥石	完形	①14.9 ②36.0	②3.3	③4.0	粘板岩	幅の狭い側の2面を使用。使用頻度は少ない。使用面以外には調整時の痕跡を残す。11建25に近似。
175図	7建80	7建北	砥石	一部欠損	①13.6 ②114.0	②4.6	③1.2	粘板岩	砥石は1面を使用し、かなり薄くなる。使用面以外には、調整時の痕跡を残す。京都高瀬宮の意匠に似ても指摘された。木製の台は、断面ややが形状の跡が両端部にある形状である。砥石を納める部分には成形時の痕跡が顕著。側面には漆と思われる塗布あり。砥石を取めると一部は台よりも砥石が薄くなり、台に収めのまま使用できなかったと思われる。
			木製台		①15.9 ②207.0	②6.5	③4.3		
175図	7建81	7建	茶臼 下臼	40%	径(23.0) ④(3500.0)	③11.5		安山岩	6分皿か。受け皿は欠損する。摺り面、周縁部ほど平滑。輪穴の一部遺存。
175図	7建82	7建北	石臼 上臼	60%	径33.2 ④(6500.0)	③8.6		安山岩	粉むき形。6分皿。供給口、引穴、ものぼりの一部が遺存する。輪受穴は、使用のためか一部欠損する。供給口側面には不定形の凹みあり。摺り面は周縁に放射状に目立て直しか。一部重なるような目を残す。使用により偏減り。

Ⅱ区9号石臼 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
176図	9石皿13	9石皿	砥石	ほぼ完形	長さ7.3 1.1	幅2.0	厚さ ④23.0	粘板岩	1面を主に使用し、かなり薄くなる。両端部の使用も顕著。
176図	9石皿14	9石皿	硯	90%	①15.5 ②2.3	②6.2	④(332.0)	砥石	陸部には使用時の凹みもあるも、使用頻度は少ない。陸部の一部に欠損あり。

Ⅱ区3号屋敷跡 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
177図	3屋敷13	3屋敷跡	石鉢か	50%	径(24.0) ④980.0	③11.7		軽石	口縁端部平坦。底部外面平坦。胴部上面に線刻1条。

Ⅱ区15号石臼 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
183図	Ⅱ区 15トレンチ	Ⅱ区 15トレンチ	硯	50%	①18.2 ④(222.0)	②9.6	③1.9	粘板岩	海部は欠損する。器面劣化により、使用状況は不明。裏面に「山口秋之次」と刻す。陸部にも刻痕あり。

Ⅳ区9号建物 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
202図	9建61	9建	砥石	40%	①15.0 ④(32.0)	②2.8	③1.5	砥石	1面を使用し、薄くなる。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。
202図	9建62	9建 1例が東東	砥石	50%	①17.4 ④(125.0)	②3.2	③2.8	砥石	1面を使用。使用頻度は少ない。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。
202図	9建63	9建	砥石	完形	①13.8 ④358.0	②4.6	③3.0	砥石	幅の狭い側の1面を使用。使用頻度は極めて軽微である。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。
202図	9建64	9建	砥石	ほぼ完形	①13.4 ④132.0	②2.1	③2.0	砥石	1面を使用。使用面以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。
202図	9建65	9建竈	石臼 下臼	30%	径- ④(3320.0)	③11.5		粗粒輝石 安山岩	粉むき形。摺り面、周縁部ほど平滑。欠損顯著で、詳細は不明。磨に使用されたためかスガが付着する。

Ⅳ区4号屋敷跡下 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
204図	4屋敷下 10	9建竈西	罎(軽石)	完形	①14.6 ④508.0	②6.3	③3.4	粗粒輝石 安山岩	円盤中央付近1カ所に、「キリーク」の種子を遺す。
204図	4屋敷下 11	9建竈北	罎(軽石)	完形	①9.7 ④248.0	②5.7	③3.3	砂岩	円盤中央付近1カ所に、「キリーク」の種子を遺す。
204図	4屋敷下 12	9建上間	罎(軽石)	完形	①11.9 ④313.0	②6.0	③3.5	安山岩	円盤中央付近1カ所に、「キリーク」の種子を遺す。
204図	4屋敷下 13	9建上間	罎(軽石)	完形	①12.1 ④452.0	②7.55	③3.2	安山岩	円盤中央付近1カ所に、「キリーク」の種子を遺す。
204図	4屋敷下 14	9建馬屋北	罎(軽石)	完形	①13.8 ④568.0	②7.7	③3.6	安山岩	円盤中央付近1カ所に、「キリーク」の種子を遺す。

Ⅳ区5号屋敷跡 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
227図	5屋敷5	5屋敷跡	砥石	80%	①(10.3) ②(32.5)	②3.5	④(139.0)	砥石	1面を使用。使用面、欠損部以外には、調整時の磨面状の削り痕跡を残す。使用面の裏側に「上」と刻す。

Ⅳ区11号建物 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)			石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚・高 ④重さ		
234図	11建25	11建	砥石	完形	①12.7 ④282.0	②3.1	③4.0	砥石	幅の狭い側の1面を使用。使用面以外には調整時の痕跡を残す。7建9に近似。

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		石材	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅③厚・高 ④重さ	⑤		
234図	11建26	11 建	砥石	完形	①14.2 ②3.0 ③3.9 ④297.0		砥沢石	幅の狭い側の1面を使用。使用頻度は極めて少ない。使用面以外には、調整時の磨痕の削り痕を残す。

IV区13号建物 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		石材	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅③厚・高 ④重さ	⑤		
250図	13建155	13建	硯	ほぼ完形	①12.7 ②4.7 ③1.9 ④195.3		粘板岩	細長い短楕形の硯で、使用頻度は軽微である。裏面には成形時の磨跡が顕著。裏面左上部寄りに「風名石」、同左下に「二」と刻字。「風名石」という石材名から、「風来寺硯」と考えられる。
250図	13建156	13建	砥石	一部欠損	①(8.3) ②4.5 ③2.1 ④107.6		粘板岩	2面を主に使用。側面には約3mmの溝1条。
-	13建157	13建	骨管	-	-	-	-	イノシシの下顎犬歯。詳細は第4章第4節7を参照。

IV区14号建物 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		石材	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅③厚・高 ④重さ	⑤		
253図	14建31	14建	石臼 下臼	ほぼ完形	径36.5 ③18.5 ④3490.0		粗粒輝石 安山岩	粉むき形。摺り面に目はない。目立て以前の石臼とも思われたが、周辺部にやや軽微な使用痕跡あり。
254図	14建32	14建	石臼 上臼	50%	径17.3 ③14.4 ④(7400.0)		粗粒輝石 安山岩	粉むき形。供給1、引手穴の一部が遺存する。摺り面平滑も、目は確認できない。
254図	14建33	14建	石臼 下臼	50%	径35.2 ③12.4 ④(1190.0)		粗粒輝石 安山岩	粉むき形。6分溝か。摺り面、周縁部ほど平滑。欠損により、偏屈りは確認できない。

IV区7号屋敷跡 遺物観察表 (石製品・骨角器・硝子製品)

図版番号	掲載番号	出土位置	種別 器種	残存状態	計測値 (cm, g)		石材	成形、調整の特徴など
					①長さ②幅③厚・高 ④重さ	⑤		
256図	7屋敷3	7屋敷跡	石臼 下臼	完形	径34.0 ③11.6 ④2390.0		粗粒輝石 安山岩	粉むき形。7分溝。摺り面、周縁部ほど平滑。溝はやや太く、偏屈りが確認できる。

遺物観察表 (縄文土器・石器)

遺物観察表 (縄文土器)

図版番号	掲載番号	出土位置	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴、計測値【単位：cm】	備考
260図	I区縄1	51区	深鉢	胴部片	砂粒やや多。繊維を多く含む。良好。褐色。	半截竹管による刺突列。コンパス文。円形刺突を施す。胴部にループ縄文施文。	二ツ木
260図	I区縄2	51区	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。褐色。	内面軽い研磨。横位浮線文3条。単節1R施文。	諸議b
260図	I区縄3	51区	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にふい褐色。	隆帯に沿い幅広連続刺突文。	勝坂1～2
260図	I区縄4	2～4畑	深鉢	口縁部片	細砂粒多。良好。にふい黄褐色。	内外面研磨。横位隆帯。	勝坂3
260図	I区縄5	51区	深鉢	胴部片	片岩粒多。良好。明赤褐色。	隆帯に沿い幅広連続刺突文。	勝坂1～2
260図	I区縄6	51区	深鉢	胴部片	砂粒やや多。良好。褐色。	縦位隆帯。沈線による区画。縄文施文。刺突。	勝坂1
260図	I区縄7	51区	深鉢	胴部片	砂粒やや多。雲母含む。良好。褐色。	窟歯状の沈線文。	勝坂1～2
260図	I区縄8	51区	深鉢	胴部片	片岩粒多。良好。明赤褐色。	半截竹管による連続刺突文。	勝坂1～2
260図	I区縄9	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	隆帯に沿い幅広連続刺突文。	勝坂1～2
260図	I区縄10	51区	深鉢	胴部片	石英粒多。良好。褐色。	沈線文。	勝坂1～2
260図	I区縄11	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	隆帯に沿い幅広連続刺突文。	勝坂1～2
260図	I区縄12	2～4畑	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	隆帯と沈線による文様。	勝坂2
260図	I区縄13	2～4畑	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。明赤褐色。	隆帯と沈線による文様。	勝坂3
260図	I区縄14	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。雲母含む。良好。褐色。	内面ナデ。沈線。割み列。三叉文。	勝坂1
260図	I区縄15	52区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。明赤褐色。	内面ナデ。隆帯と沈線による施文。刺突列。	勝坂1 (北陸系)
260図	I区縄16	2～4畑	深鉢	胴部片	砂粒、片岩粒多。良好。褐色。	割みを伴う隆帯。	阿玉台I b～II
260図	I区縄17	51区	深鉢	口縁部片	砂粒多。石英・金雲母多含む。良好。にふい赤褐色。	内面ナデ。縦線状刺突。隆帯と沈線による施文。	焼町
260図	I区縄18	51区	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にふい褐色。	隆帯と沈線による施文。	焼町
260図	I区縄19	石組	深鉢	口縁部片	砂粒やや多。良好。にふい褐色。	2条単位の隆帯による溝文。波状口縁。	焼町 (越後系?)
260図	I区縄20	51区	浅鉢か	口縁部片	砂粒多。良好。淡褐色。	横位沈線。	焼町

図版番号	掲載番号	出土位置	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴、計測値【単位：cm】	備考
260図	1区縄21	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 にぶい赤褐色。	内面ナデ。隆帯と沈線による筋文。	焼町
260図	1区縄22	52区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	内面ナデ。横位隆帯。	焼町
260図	1区縄23	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 赤褐色。	内面ナデ。隆帯と沈線による筋文。	焼町
260図	1区縄24	51区	深鉢	胴部片	細砂粒、石英・片岩 粒多。良好。 にぶい褐色。	沈線文充填。	焼町
260図	1区縄25	51区	深鉢	胴部片	細砂粒、石英・金雲 母やや多。良好。 にぶい赤褐色。	沈線文充填。縦位隆帯。	焼町
260図	1区縄26	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 にぶい褐色。	羽状の刻みを伴う横位隆帯。燃糸L縦位、横位。	加曾利E1
260図	1区縄27	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 赤褐色。	沈線による区画。単節L縄文。	加曾利E1
260図	1区縄28	51区	深鉢	胴部片	砂粒やや多。良好。 にぶい赤褐色。	横位沈線。燃糸L縦位。	加曾利E1
260図	1区縄29	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 明赤褐色。	横位沈線。単節L縄文。	加曾利E1
260図	1区縄30	52区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 にぶい褐色。	縦位沈線。燃糸L縦位充填。	加曾利E1
260図	1区縄31	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 にぶい赤褐色。	燃糸R。	加曾利E1
260図	1区縄32	51区	深鉢	胴部片	砂粒やや多。良好。 褐色。	燃糸L縦位筋文。	加曾利E1
260図	1区縄33	51区	深鉢	胴部片	砂粒やや多。良好。 灰黄褐色。	縦位沈線。単節L縄文充填。	加曾利E4
260図	1区縄34	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	沈線文。単節L縄文充填。	加曾利E4
261図	1区縄35	1建	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 灰黄褐色。	内面研磨。隆帯と沈線による区画文。縄文筋文。	加曾利E2 (越後)
261図	1区縄36	1建	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 暗赤褐色。	単節L縄文を地文とし縦位沈線。蛇行懸垂文。	加曾利E2
261図	1区縄37	1建	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 黒褐色。	内面研磨。単節L縄文を地文とし沈線文。	加曾利E2
261図	1区縄38	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 にぶい褐色。	膝高状工具による条線充填。	加曾利E3
261図	1区縄39	51区	深鉢	口縁部片	細砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	横位沈線。	加曾利E4
261図	1区縄40	51区	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	沈線文。刺突文。	加曾利E4
261図	1区縄41	52区	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	縦位弧状隆帯。単節L縄文充填。	加曾利E4
261図	1区縄42	51区	深鉢	口縁部片	細砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	沈線文。器面劣化。	称名寺1
261図	1区縄43	51区	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐色。	横位隆帯1条。	称名寺
261図	1区縄44	51区	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	刺突列を伴う横位隆帯1条。無節縄文L縦位筋文。	加曾利E4～ 称名寺1
261図	1区縄45	52区	深鉢	胴部片	細砂粒多。石英・金 雲母含む。良好。 褐色。	内面研磨。刻みを伴う横位隆帯。沈線充填。	曾利I
261図	1区縄46	51区	深鉢	胴部片	砂粒多。石英・金雲 母含む。良好。褐色。	内面研磨。沈線充填。	曾利I
261図	1区縄47	1建	舟形注口 上器	胴部片	細砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	器面劣化。沈線文。内面ナデ。L縄文。	堀之内1
261図	1区縄48	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	内外面ナデ。沈線文。	堀之内1
261図	1区縄49	5建	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 黒褐色。	刻みを伴う縦位隆帯。沈線文。単節L縄文。内外面研磨。	堀之内1
261図	1区縄50	5建	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	横位沈線2条。胴部沈線文。	堀之内1
261図	1区縄51	51区	深鉢	口縁部片	細砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	内面ナデ。外面粗いナデ。	加曾利B
261図	1区縄52	51区	深鉢	口縁部片	細砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	内面軽い研磨。横位沈線。	加曾利B
261図	1区縄53	1建	深鉢	口縁部片	砂粒やや多。良好。 浅黄褐色。	器面劣化。沈線による斜格子文。内面横位沈線2条。	加曾利B
261図	1区縄54	51区	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。 黄褐色。	内面ナデ。外面粗いナデ。	加曾利B
261図	1区縄55	1建	注口上器	胴部片	細砂粒やや多。良好。 にぶい褐色。	内面ナデ。外面研磨。横位沈線。斜格子文。	加曾利B
261図	1区縄56	1建	深鉢	胴部片	細砂粒やや多。良好。 にぶい黄褐色。	沈線文。単節L縄文。内外面研磨。	加曾利B
261図	1区縄57	1建	深鉢	胴部片	砂粒、片岩粒多。 良好。にぶい褐色。	横位沈線。内外面を入念ナデ。	加曾利B

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴、計測値【単位：cm】	備考
261図	1区縄58	5建	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 灰黄褐色。	単節LR縄文。内外面研磨。	加曾利Iか
261図	1区縄59	51区	深鉢	胴部片	細砂粒やや多。良好。 灰黄褐色。	沈線文。内面研磨。光沢。	加曾利II
261図	1区縄60	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 黒褐色。	沈線文。LR縄文。内外面研磨。	加曾利Iか
261図	1区縄61	51区	鉢	口縁～ 胴部片	細砂粒多。良好。 黒褐色。	器面やや劣化。横位隆帯。内外面研磨。	飛期末
261図	1区縄62	51区	深鉢	胴部片	砂粒やや多。良好。 にぶい黄褐色。	内面ナデ。条痕文。	飛期末
261図	1区縄63	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	燃系R。	飛期末
261図	1区縄64	51区	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 灰黄褐色。	内面ナデ。条痕文。(燃系か)	飛期末
261図	1区縄65	51区	鉢	胴部片	細砂粒やや多。良好。 褐色。	器面劣化。	飛期末
261図	1区縄66	2～4畑	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 明褐色。	斜位。条痕文。器面劣化。	飛期末
261図	1区縄67	51区	土製円盤	一部欠損	細砂粒多。良好。 灰白色。	土製円盤。沈線文。打ち欠き後、やや粗い研磨。	堀之内1
262図	Ⅱ区縄1	Ⅱ区 7トレンチ	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。 にぶい黄褐色。	内面研磨。口唇部貼付による刻み。集合沈線。円形貼付文。	前期・諸議c
262図	Ⅱ区縄2	Ⅱ区 2トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	柳舟状工具による横位施文。	諸議b
262図	Ⅱ区縄3	51区	深鉢	胴部片	砂粒・石英・金雲母 多。良好。明赤褐色。	隆帯及び沈線による施文。三叉文。	焼町
262図	Ⅲ区縄1	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒・片岩粒。繊維 多。良好。 にぶい褐色。	表裏に条痕文。刺突・斜行沈線。	鶴ヶ島台
262図	Ⅲ区縄2	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒・片岩粒。繊維 多。良好。 にぶい褐色。	表裏に条痕文。刺突・斜行沈線。	鶴ヶ島台
262図	Ⅲ区縄3	Ⅲ区 24トレンチ	深鉢	胴部片	細砂粒。繊維多。良 好。にぶい赤褐色。	表裏に条痕文。	早期後半
262図	Ⅲ区縄4	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒・片岩粒。繊維 多。良好。明赤褐色。	表裏に条痕文。	早期後半
262図	Ⅲ区縄5	23畑	深鉢	胴部片	細砂粒やや多。繊維 多。良好。 にぶい黄褐色。	半截竹管による横位爪形文2条。LR縄文。	黒浜
262図	Ⅲ区縄6	Ⅲ区 24トレンチ	深鉢	胴部片	細砂粒。繊維多。良 好。にぶい黄褐色。	LR縄文。	黒浜
262図	Ⅲ区縄7	23畑	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 にぶい黄褐色。	柳舟状工具による施文。	諸議b
262図	Ⅲ区縄8	Ⅲ区 21トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。 にぶい赤褐色。	LR縄文。	諸議b
262図	Ⅲ区縄9	1土坑	深鉢	胴部片	砂粒やや多。良好。 にぶい黄褐色。	LR縄文。	諸議b
262図	Ⅲ区縄10	Ⅲ区 24トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 にぶい赤褐色。	内面粗い研磨。LR縄文。半截竹管による2～3条の集合沈 線を横位隆帯状に施文。	諸議b
262図	Ⅲ区縄11	24畑	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。 黒褐色。	内面ナデ。ベン先状。キャタビラー状の押引文。刺突列を 伴う隆帯。	勝坂2
262図	Ⅲ区縄12	24畑	鉢または 高杯形	口縁～ 胴部片	片岩粒を少量含む。 良好。褐色。	口径(24.0)。内外面粗い研磨。	勝坂
263図	Ⅲ区縄13	24畑	深鉢	口縁部片	砂粒多。石英・金雲 母多。良好。 にぶい赤褐色。	内面ナデ。眼線状の突起。隆帯と沈線による施文。	焼町
263図	Ⅲ区縄14	Ⅲ区 22トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	燃系I。縦位施文。	加曾利E1
263図	Ⅲ区縄15	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐色。	隆帯による区画文。	加曾利E3
263図	Ⅲ区縄16	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	口縁部片	細砂粒多。良好。 褐色。	内面軽い研磨。隆帯による区画文。単節LR縄文。波状口縁。	加曾利E3
263図	Ⅲ区縄17	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。 明赤褐色。	隆帯による区画文。複節LR縄文。	加曾利E3
263図	Ⅲ区縄18	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 黒褐色。	縦位沈線。単節LR縄文。	加曾利E3
263図	Ⅲ区縄19	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	縦位沈線。単節LR縄文。	加曾利E3
263図	Ⅲ区縄20	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	口縁～胴部 20%	細砂粒多。良好。 にぶい褐色。	内面軽い研磨。付加LR・R。	加曾利E3
263図	Ⅲ区縄21	Ⅲ区 21トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 にぶい赤褐色。	内面ナデ。沈線と隆線による斜格子文。	曾利I
263図	Ⅲ区縄22	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。 明褐色。	沈線文。	植草文系

遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土位置	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴、計測値【単位：cm】	備考
263図	Ⅲ区縄23	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	胴部片	細砂粒多。良好。 灰黄褐色。	内面研磨。LR 縄文。横位沈線。	胴之内2
263図	Ⅲ区縄24	23畑	深鉢	胴部片	砂粒やや多。良好。 褐色。	沈線文。	胴之内1
263図	Ⅲ区縄25	Ⅲ区 24トレンチ	壺形か	口縁～胴部 片	細砂粒やや多。良好。 褐色。	口径(10.0)、口唇部削み、円形貼付文が付く、口縁内側に沈線1条、刻みを伴う隆部。沈線文。外面及び口縁部内面丁寧に研磨、光沢。	加曾利田
263図	Ⅲ区縄26	Ⅲ区 25トレンチ	深鉢	口縁部片	細砂粒多。良好。 灰褐色。	沈線文。単筋 LR 横文。内面研磨。	晩期末～亦生初

遺物観察表(石器)

図版番号	掲載番号	出土位置	種類器種	残存状態	計測値(mm, g)				石材	成形、調整の特徴など
					①長さ	②幅	③厚	④重さ		
262図	I区縄68	1建	磨石	完形	①75.0	②61.0	③45.0	④166.0	燧岩(安山岩質)	磨面非常に平滑。縄文ではないか。
262図	I区縄69	1建	磨石	完形	①65.0	②59.0	③31.0	④114.0	燧岩(安山岩質)	磨面非常に平滑。縄文ではないか。
262図	I区縄70	3建	敲石	完形	①156.0 ④735.0	②83.0	③46.0		粗粒輝石安山岩	両端部に敲打痕あり。磨面あり。
262図	I区縄71	5建	敲石	完形	①182.0 ④1820.0	②86.0	③74.0		粗粒輝石安山岩	両端部に敲打痕あり。凹み穴1カ所。
262図	I区縄72	4溝	磨石	完形	①104.0 ④540.0	②70.0	③57.0		安山岩	表面平滑。
262図	I区縄73		磨石	完形	①74.0	②62.0	③38.0	④99.0	輝石	磨面は平滑。中央部に凹み穴1カ所あり。縄文ではないか。
-	I区縄74	52区C-6	石鐮	完形	①20.0	②14.0	③3.1	④6.0	黒曜石	基部は深い逆U字状。
-	I区縄75	51区X-14	打製石斧	一部欠損	①60.0	②53.0	③16.5	④158.9	細粒輝石普通輝石安山岩	短冊形。
-	I区縄76	51区Y-16	打製石斧	一部欠損	①43.0	②31.0	③9.0	④13.5	頁岩	小型。
-	Ⅱ区縄4	Ⅱ区 2トレンチ	石鐮	70%	①(13.0) ④(0.3)	②16.0	③1.8		黒曜石	基部は深い逆U字状。
-	Ⅱ区縄5	Ⅱ区 11トレンチ	石鐮	一部欠損	①(30.0) ④(1.3)	②18.0	③3.2		珉質頁岩	有茎。基部は平坦。
263図	Ⅲ区縄27	Ⅲ区 25トレンチ	磨石	完形	①129.0 ④462.0	②45.0	③40.0		粗粒輝石安山岩	敲打痕は確認できない。
-	Ⅲ区縄28	Ⅲ区 25トレンチ	削器	完形	①110.0 ④360.0	②88.0	③39.0		頁岩	
-	Ⅲ区縄29	Ⅲ区 22トレンチ	石鐮	完形	①21.0	②18.0	③2.1	④0.6	黒曜石	基部は逆U字状。
-	Ⅲ区縄30	Ⅲ区 25トレンチ	石鐮	一部欠損	①(19.0) ④(0.8)	②14.0	③3.5		チャート	基部は浅い逆U字状。
-	Ⅲ区縄31	Ⅲ区 25トレンチ	石鐮	一部欠損	①(21.0) ④(0.6)	②14.0	③2.8		頁岩	基部は逆U字状。
-	Ⅲ区縄32	Ⅲ区 25トレンチ	石鐮	一部欠損	①(16.0) ④(0.5)	②12.0	③2.6		黒曜石	基部は浅い逆U字状。
-	Ⅲ区縄33	Ⅲ区 27トレンチ	石鐮	ほぼ完形	①16.0	②16.0	③2.4	④0.5	黒曜石	基部は深い逆U字状。
-	Ⅲ区縄34		石鐮	一部欠損	①(27.0) ④(1.2)	②16.0	③3.5		珉質燧岩 (流紋岩質凝灰岩)	有茎。基部は挟れる。
-	Ⅲ区縄35		石鐮	ほぼ完形	①22.0	②16.0	③3.3	④0.7	黒曜石	基部は逆U字状。
263図	Ⅳ区縄1	9建	磨石	完形	①89.0	②67.0	③33.0	④115.0	多孔質粗粒輝石安山岩	磨面非常に平滑。
263図	Ⅳ区縄2	9建	磨石	完形	①82.0	②63.0	③25.0	④146.0	粗粒輝石安山岩	磨面非常に平滑。

抄録

書名ふりがな	ひがしみやいせきかっこにいぶつへん
書名	東宮遺跡(2) - 遺物編-
副書名	ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	536
編著者名	黒澤照弘
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120316
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ひがしみやいせき
遺跡名	東宮遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざかわらはた
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑
市町村コード	10424
遺跡番号	208
北緯(日本測地系)	363259
東経(日本測地系)	1384215
北緯(世界測地系)	363310
東経(世界測地系)	1384204
調査期間	20071101-20091226
調査面積	10850
調査原因	ダム建設
種別	集落/生産
主な時代	中世/近世
遺跡概要	中世-集石1+土坑2-近世-建物15+畑27+石垣19+道5+溝9+溜池1+集石1+井戸1+土坑6-縄文土器+陶磁器・在地土器+石器・石製品+金属器・銭貨+木器・漆器
特記事項	天明三年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流堆積物によって覆われた集落、生産跡。
要約	天明三年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流によって埋没した7カ所の屋敷跡を検出。検出された15種の建物の中には、礎石上に敷設された東・土台・大引・根太・床板までもが、原位置を保ち極めて良好な遺存状況で出土した。主屋は6棟確認できたが、1号建物は極めて大規模な建物であり、床板まで遺存していた。建物の中には酒蔵もあり、酒を搾る糟場跡も確認され注目される。また、出土した多様な漆器、木器、金属器、石製品、陶磁器についても掲載している。